嵐を呼ぶ園児、外史へ立つ

MRZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嵐を呼ぶ園児、外史へ立つ

【Ｎコード】
Ｎ０７０８Ｖ

【作者名】
ＭＲＺ

【あらすじ】
春日部に住む五歳児がある二人組の陰謀により外史へと送られる。
そこで彼を待つのはかつての戦国に勝るとも劣らない乱世の風。
一体彼はそこでどんな嵐を巻き起こすのか？
Ａｒｃａｄｉａでも投稿していたものです。

第一話

時は紀元三世紀。日本は卑弥呼の時代。現在の中国はまだ漢王朝が存在していた。その力は衰退し、徐々に乱世の様相を呈し出した頃。大陸にどこからともなく広まった予言があった。

――世乱れる時、天より御遣い現れり。その者、嵐を呼ぶが乱世を止める者なり。

この言葉を誰もが聞いたが、ほとんど信じる者はいなかった。しかし、中には信じる者もいた。そう、そんなものにも縋りたい程にこの国を憂いている者達だ。苦しむ者達を救おうと動く者や、己が力の無さに涙する者。優しき故に、彼らは願った。この大陸に平穏を、と。

その想いは力となり、予言を実現しようと動き出す。外史と呼ばれる世界。本筋ではない歴史。ＩＦ――つまりあったかもしれなかった可能性の世界。そこへ、今まさに救世主が降り立とうとしていた……

場所は変わって、現代は春日部市。そこにある住宅地のとある一軒家。そこに住む家族達が、実は何気に何度も世界を救った事を知る者は少ない。その家族の名は野原家。そして、主役はそこの長男。

「ふぁ～あ……ヒマだぞ」

今日は日曜日。彼は寝坊したため、買い物へ出た両親と妹に置いていかれたのだ。仕方ないので、作ってあったおにぎりを食べ、居

間で横になりながら普段の格好で寛いでいた。赤い上着に半ズボン。どこかにいそうでいない少年がそこにはいた。

彼の名は野原しんのすけ。チョコビと綺麗なお姉さんが好きで、納豆にはネギを入れるタイプの五歳児。憧れの人物はアクション仮面にカンタムロボ、そして救いのヒーローぶりぶりざえもんだ。

しんのすけはおにぎりを食べ終わると、する事がないとばかりにアクビをした。庭には彼の愛犬シロがいる。それを思い出し、散歩でもして暇を潰すかと考えた。

「そうだ。シロの散歩でもするぞ」

自分一人で留守番にも関らず、家を空けようと考える所が子供、いや彼らしい。更に、本来毎日のようにしなければならない散歩を、暇潰しでしか思い出さないところに彼の彼たる所以がある。ともあれ、彼は玄関へ向かい靴を履こうとした。だが、ある事を思いついて再び居間へと戻った。

そして、おもちゃ箱を漁ると何かを取り出した。それはアクション仮面のヘルメットとカンタムロボのフィギュアだ。散歩がてらパトロールをしようとでも思ったのだろうか。ともあれ、しんのすけはヘルメットを被り、フィギュアを片手に玄関へ。

「ほっほほ〜い。シロ〜、散歩に行くぞ〜」

「キャ……クゥ〜ン？」

しんのすけの言葉に嬉しそうな声を返そうとしたシロだったが、その姿に疑問を浮かべて首を傾げた。それにしんのすけは自慢げに胸を張る。

「世の中はぶっそ～だから、これで身の安全をほしょ～するぞ。わっはっはっはっ！」

「クゥ～ン……」

高笑いをするしんのすけを見て、シロは項垂れる。いつものような行動だが、やはり脱力するのは脱力するのだろう。しかし、散歩に連れて行ってもらえるのは嬉しいので、シロはすぐに立ち直る。

そして、シロの首に紐を結び、それをしっかりと手にしてしんのすけは頷いた。準備は整った。後は行くのみだ。そう言うように、しんのすけはポーズを取った。

「出発おしんこ～！」

「キャン！」

そうして動き出すしんのすけとシロだったが、何かに気付いたのかその足を止めた。地面に大きな影が出来ていたのだ。それを確認し、しんのすけとシロは視線を影を作っているものがある方向へ向けた。すると、そこには古そうな鏡を持った男性がいた。

その視線はしんのすけを品定めするかのようだ。それを受け、しんのすけは軽く息を呑んだ。そして……

「そんなに見つめちゃいや～ん」

身をよじるように変な声を出した。それに相手も虚を突かれたのかやや体勢を崩したものの、即座に建て直し先程とは違った視線をしんのすけに向ける。

「……干吉が言っていた通り、こいつなら確かにあの外史を終わら

せそうだ」

「ゆきち？　ゆきちなら母ちゃんが大好きだぞ。でも、すぐおサイフからいなくなっちゃうんだって」

「諭吉じゃない！　干吉だ！」

しんのすけの言い間違いに、男性は怒って返した。その怒声を聞いてもしんのすけは驚くどころか、むしろ納得したというように頷いていた。日ごろから母親に怒鳴られている彼にとって、怒鳴られるのは慣れているのだ。

「ほ～ほ～。で、お兄さんはオラに何かご用？　オラ、忙しいんだよね。すけじるが会議で遅刻しそうなんだ」

先程まで暇だからと言っていたにも関らず、しんのすけは、まるで急いでいるビジネスマンのように腕を指差してそう告げた。当然だが、その腕に時計などはない。それを聞いて怒りを感じる男性だったが、それを何とか押し止める。相手は子供だと、そう言い聞かせていた。

そして、一度深呼吸をすると手にした鏡を見せて尋ねた。それは、しんのすけの性格を事前に知っていたかのような誘い文句。こう言えば絶対にしんのすけが乗ってくるだろう聞き方。

「なぁ、綺麗なお姉さん達に会いたくないか？」

「会いたいっ！」

即答だった。思わず尋ねた男性が戸惑う程に。予想はしていたのだろうが、それでもやはり、五歳児が女目当てで行動するなどどこ

かで信じられなかったのだろう。僅かに沈黙し、男性は気を取り直して咳払い。

「なら、この鏡を割れ。そうすれば、お前の願いは叶う」

「お～、お兄さんはインチキ商売の人？」

「違う！　その鏡はただでくれてやる！」

「おぉ、ふとももも！」

「それを言うなら太っ腹だ」

嬉々として鏡を受け取るしんのすけ。そして、それを一通り眺めて叩き割ろうと上に持ち上げた。それを見て密かにほくそ笑む男性。シロはその笑みに何か邪悪なものを感じ取り、しんのすけを止めようと吠えた。

「キャンキャンッ！」

「ちっ！　犬め！」

シロの声がしんのすけへの注意だと察し、男性はやや焦ったような表情を浮かべた。しんのすけはそんなシロの声に……

「おわっ！　も～、いきなり吠えないでよ」

驚いて鏡から手を離した。その瞬間、シロと男性が揃ってずっこけたのは言うまでもない。鏡は地面に落ちて、見事に割れる。そして、そこから眩い光が溢れ出し、しんのすけとシロを包む。

その眩しさに目を瞑るシロ。しんのすけは、アクション仮面のヘルメットのおかげで特に強い眩しさを感じなかったが、それでも驚く程の光だった。

「おおっ！　これは何かが起きる予感！」

その言葉を最後にしんのすけとシロの姿は消えた。それを見届け、男性は不敵に笑う。しんのすけが送られた場所は、彼らが手を出せない場所。その基を作りし存在が彼らを排除したために、彼らは手を出す事が出来ない。

だから、彼らは考えた。その場所を終わらせるために、本来現れるだろう者を排除するように別の者を送ろうと。そして、その相手にはその場所に愛着も縁もなく、守ろうと思っても守れない者を選んだ。

しかも、ただそれでは面白くないとばかりに、彼らは可能性を抱かせる存在にしたのだ。自分達を排除した場所でのうのうと暮らす人形達を、とことん絶望させるために。故に、彼らはしんのすけを選んだのだ。この世界を何度も救った存在である彼を。

――精々足掻けよ小僧。お前の力は、絆は、そこにはない。

どこまでも広がる荒野。見渡す限り何もないそこに、しんのすけとシロはいた。気を失ったまま、仲良く倒れるしんのすけとシロ。そこへ三人組の男達が姿を見せた。長身の男を中心に、両脇には小柄の男と大柄の男がいた。

三人はしんのすけとシロを見つけ、特にそのしんのすけの格好に驚いた。

「あ、アニキ、あのガキ見た事もない兜つけてますぜ！」

「ほ、ほんとなんだな。あれ、珍しいんだな」

「……そうだな。よし、なら早いとこ奪っちまうぞ。さすがにガキを殺すのは気が引けるしな」

盗賊の彼らだが、その心にもまだ僅かな良心は残っていたのか、リーダー格の長身の男はそう言ってしんのすけ達に近付いていく。それと同時にまずシロが目を覚ました。複数の足音を聞いて目覚めたのだ。

そして、まず周囲を確認しそこが自分の知る場所でない事を理解すると、隣のしんのすけに気付いた。倒れている事に多少驚きはしたものの、ただ気を失っているだけと分かったのか、安堵するように息を吐いた。

「クゥ？」

だが、そこでシロは三人組に気付いた。そして、その嗅覚で彼らから血の匂いがする事を察して、やや不思議そうに首を傾げた。平和な現代日本で生活しているシロにとって、血の匂いがする者は怪我をしている者だった。

だが、目の前の三人には怪我らしい怪我は見当たらないのだから。しかも、その匂いが強いので余計にシロは疑問を感じていた。そのままシロはしんのすけの傍に立ち、三人を見つめていた。

やがて、三人がもう後少しと言う所まで来て、やっとシロはその異様な雰囲気に気付いた。更に手にした武器を見たのだから、さあ大変。しんのすけを起こすように、器用に二本足で立ち上がりその

体を揺すった。
その行動に三人組は慌てる前に驚いた。そして、小柄な男が長身の男へある事を思いついたのか、こう提案した。

「アニキ、あの生き物捕まえて見世物にしましょうや！」

「あ、あの芸やらせたらうけそうなんだな」

「それはいいな。じゃあ、あれも頂いていくか」

その会話を聞き、シロは余計慌ててしんのすけを起こす。その必死さが伝わったのか、しんのすけはやっと起き上がると、大きくアクビをして周囲を見回した。その目に映る光景が先程までとまったく違う事に気付き、彼は一人頷いた。
そんな暢気なしんのすけへシロは前足で三人を指した。危機が迫ってる。そんな風な表情まで浮かべて。それにしんのすけも気付き、視線を三人へ向けた。そこにいる者達が手に武器を持っている事にしんのすけは驚きを見せる。

「あ～っ！　映画の撮影だ～！」

「「「えいが？」」」

しんのすけの放った聞いた事もない言葉に、三人は揃って足を止める。シロはその発言に全身の力が抜けた。その間にもしんのすけは走り出して、三人の近くへ向かった。その速さには、三人も驚くぐらいに。
その手にした武器を見て、どこで買ったのやどんな映画などと尋ねるしんのすけ。三人はそれに困惑するも、普通ならば武器に怯えるはずの子供が、むしろ嬉々としている事に戸惑っていた。

「ど、どうするんだな？」

「アニキぃ、こいつおかしいですぜ」

「かもしれねぇな。おい、坊主」

「な～に？」

見た目と同じようにおかしな存在かもしれない。そんな風に感じた三人。長身の男は、リーダーらしくしんのすけへ声をかけた。

「これが何か分かってんのか？」

「？　剣だぞ」

「分かってんじゃね～か。なら、大人しくその兜を渡しな」

男の言葉にしんのすけはやや考え、何かを理解したのか手を叩いた。そして、どこか仕方ないといった表情になり、ヘルメットを外してこう告げた。

「もう、おじさんもアクション仮面ごっこしたいんだな。それならそうと言ってよね」

「あく……何だって？」

「仮面がどうのって言ってました」

「い、いまいちよく分からないんだな」

しんのすけの言った内容に疑問符しかない男達。それでも、しんのすけが大人しくヘルメットを渡してくれそうなので、黙って受け取ろうとした。だがその時だ。どこからともなく一陣の風が現れた。その風は、ヘルメットを受け取ろうとしていた男の手を跳ね除け、しんのすけを庇うように立ちはだかった。

「そこまでだ！　幼い者から物を奪おうなど、この趙子龍が許さんっ！」

白い服装の槍の女性は、そう力強く告げる。その威風堂々の声に、愚かにも男達は立ち向かおうとする。互いの力量を測れないその行動に、彼女はどこか哀れむような目を見せる。

だが、同時に自分の後ろにいるしんのすけの事を思い出したのか、男達へ向けた槍の刃を密かに返した。大柄の男は武器を斬られ、小柄の男は持ち手の部分で強打され、長身の男はそこで力量さを思い知り、慌てて逃げ出した。

それを見つめる女性。本当なら追い駆けたいが、それが出来ずにいた。それは、先程から自分の服の裾を掴んでいる手があるからだ。

（悪を捨て置く事は出来んが、この幼子を置いて行くのはもっと出来ん。このように寂しがられては……な）

小さく笑みを浮かべ、女性はしんのすけの方へ向き直った。その視線を合わせると、しんのすけはやや驚いたような顔を見せる。

「お姉さん、びっじん！　カッコイイ！　オラとお茶しな～い？」

「え、遠慮しておこう……」

「星、賊は追い払ったのですか？」

「おや～？　これはまた変わった物を持ってますね～」

予想だにしないしんのすけの反応。それに女性は普段の飄々さも無くし、微かに動揺した。まさか命を助けた幼子から、いきなり誘いを受けるなどと誰が思うか。そこへ、彼女の旅の連れが現れた。眼鏡の女性と頭に妙な物を載せた女性だ。それに女性としんのすけが同時に振り向く。そして、二人を見てしんのすけは、またもや感嘆の声を上げた。二人もまた綺麗なお姉さんだったのだ。

「ヘイヘイそこの眼鏡のおねいさん、ピーマン食べれるぅ？」

「は？　ぴーまん？」

「聞いた事のない名前ですね。食べ物のようですが、どこの物でしょ～？」

「私としては、その足元の兜のような物と、その生き物が気になるのだが」

その言葉に女性達の視線が一気にシロへ向けられた。それにシロは軽く首を傾げた。その仕草の可愛さに女性達に笑みが浮かぶ。中々賢そうだと誰かが言えば、愛嬌もありますと続く。そんな風にシロが三人に構われているのを見て、しんのすけは何かを思い出したかのように周囲を見渡し、三人へ尋ねた。

「ね、カメラはどこ？」

「「「かめら？」」」

しんのすけの言葉に揃って首を傾げ、眼鏡の女性が代表してしんのすけへ尋ねた。それは、カメラの事やピーマンの事だけではなく、しんのすけ自身の事にまで及んだ。そこでしんのすけは庭で会った男性と、鏡の事を話した。

その内容は俄かには信じられないものがあったが、しんのすけの存在とヘルメット、そしてフィギュアなどがそれを渋々ながら納得させた。そうして、しんのすけが話し終わった時、ふと気付いたのだ。まだ三人の名前を聞いていないと。

「ねぇ、お姉さん達の名前は？　オラは、野原しんのすけ五歳」

「……野が性で、名が原。字がしんのすけでしょうか？　この歳で字は珍しいですね」

「性？　名？　オラ、苗字が野原だぞ。名前がしんのすけ」

「……どうやら本当に別の場所から来たようだ。では、真名も知らないだろう」

そう告げて、白い服の女性はしんのすけへ軽く真名の説明をした後、笑顔で名乗る。

「私は性が趙、名は雲、字は子龍だ」

「私は性が程、名は立、字は仲徳ですよ」

「私は、性が郭、名は嘉、字は奉孝です」

そう眼鏡の女性が名乗った時、他の二人がやや驚いた表情を見せた。そう、彼女は偽名を使っていたはずだったのだ。それを使わなかった事に驚いたのだろうと、彼女も分かったのだろう。やや苦笑しながらこう言った。

子供相手に名を隠す必要はない。それに、どうも目の前の相手は物覚えがあまりよくなさそうだからと。それに二人も納得。しんのすけは自分が馬鹿にされたと思わず、どこか嬉しそうに手を頭に置いていた。

「あは～、それほどでも～」

「「「誉めてない（ですよ）」」」

「クゥ～ン」

見事に突っ込みが一致する三人。しかも、普段ならば突っ込みをされる程立まで突っ込むという有様。だが、しんのすけはそれに感心したように頷いた。何故か、郭嘉と程立が仲の良い友人達を思い出させたのだ。

（眼鏡のお姉さんは風間君に似てる気がする。こっちの……飴のお姉さんはボーちゃんだぞ）

唯一趙雲だけ当てはまる相手が友人ではいないが、ある人物がしんのすけの脳裏をよぎる。それは、彼が好きな正義の味方。颯爽と高笑いと共に現れるヒーロー。

（槍のお姉さんは、アクション仮面だ！）

先程の出来事を思い出し、しんのすけは一人頷いた。ここがどこ

かは知らないが、アクション仮面と一緒なら怖いものはないだろうと。だから、しんのすけはシロの体を抱き抱え、三人へ視線を向けた。

「ね、オラ、お姉さん達と一緒にいたい」

その声には寂しさはなかった。代わりに込められたのは、純粋な願い。それに三人は揃って悩む。確かに子供であるしんのすけを置いて行くのは忍びない。だが、子供を連れて行ける程楽な旅路でもない。

それに、いつまでこの三人で旅をするかも分からないのだ。正直、趙雲がいなくなれば、しんのすけは完全に邪魔者となる。だが、それでもしんのすけを置いていこうと決断出来る者はいなかった。

互いに視線で見つめ合い、誰ともなく苦笑混じりに頷いた。この大陸を憂いている三人にとって、子供は次代を築く希望。故に見捨てるなどは有り得ない。更に、自分達の知らない事を知っているしんのすけは、下手をすれば見世物にされる可能性もない訳ではない。

「辛い旅ですよ？」

「オラ、平気」

「怖い思いをするかもしれませんよ～？」

「オラ、男の子だぞ」

「ならば共に行くか、しんのすけ」

「ブッラジャ～」

「キャンキャン」

こうしてしんのすけは、趙雲達と共に大陸を歩く事になる。これが、後に始まる風雲の幕開けとは知らないまま。多くの出会いと別れ、そして戦いを経験し、少年はまた大人への階段を昇る。かつての様々な思い出を胸に……

――――――

第二話

「そうか。しんのすけは妹がいるのだな」

「そうだよ。ひまわりって言って、すっごく元気なんだぞ」

あれからしばらく経ち、日も暮れ始めた頃、しんのすけ達は森の中の川が流れる場所にいた。野宿するためだ。そこで焚き火を囲みながら、しんのすけの家族の話を聞いていた。最初はシロの事を話していた。そこから派生し、家族の事になっていったのだ。

父のひろしと母のみさえ。その二人の話を聞いた三人の反応は様々だった。だが、揃って根底には同じ気持ちがあった。それは、しんのすけが愛されているのだろうという思い。どこでも親の気持ちは変わらないのだと、そう感じて三人は微笑みを浮かべたのだから。

そして、最後は妹であるひまわり。その行動力を話すしんのすけは実にイキイキとしていて、尚且つどこか嬉しそうだった。兄だからなのかもしれないと、三人は思った。しんのすけには、幼くして守りたい者がいる。そんな事を思い、三人は笑みを見せると共に、複雑な表情を見せた。

そう、しんのすけが元居た場所に戻れるのかと、そう考えていたからだ。聞けば、しんのすけがここへ来たのは妙な鏡のせいらしい。となれば、その鏡を見つけるのが一番早いのだろうが、しんのすけ自身もあまり鏡の詳しい形状や装飾は覚えておらず、手掛かりはないに等しかったのだ。

だからだろう。そんな不吉な考えを振り払うかのように、郭嘉は笑みを見せて尋ねる事にした。

「それにしても、聞いた事のない名前ですね。何か意味はあるのですか？」

「ひまわりって言うお花があるんだ。お日様みたいな形で、こ～んなに大きいんだぞ」

「おお、太陽の花ですか。それは一度見てみたいですね～」

「成程な。しんのすけの両親は、娘に日輪のような大輪の花を咲かせて欲しいと願ったのだろう」

しんのすけの世界の名付けにもちゃんとした理由がある。そう感じ取った趙雲。それにしんのすけが驚いた。彼にとっては、ひまわりの名前はただ花の名前と同じでしかなかったのだ。そこにそんな意味が込める事が出来るなど、考えもしなかった。

そう、ひまわりの名前はしんのすけが名付けたのだから。星のように、ひろしやみさえが思っているのかもしれない。そう考えた。故に感動して、視線を趙雲へと向けた。そこには、驚きと感心、そして尊敬の念が込められている。

「お～、星お姉さんは父ちゃんや母ちゃんみたいな考えが出来るのかぁ」

「いや、そうではないかと思っただけだ」

しんのすけの言い方に星はどこか違和感を感じるも、笑みと共にそう返した。そう、しんのすけに真名を呼ばれても、星は何も怒りはしない。そう、既に三人はしんのすけへ真名を預けたのだ。それは、時は遡る事数時間前。あの後すぐの事……

荒野を歩くしんのすけ達。何故か趙雲がヘルメットを被っている。ただし、子供用のためややきつそうではあったが。その理由はただ一つ。そう、しんのすけだ。

最初、邪魔にならないようにしまうと郭嘉が言ったのだが、しんのすけがそれを嫌がった。その目的は、趙雲にそれを被ってもらうため。

――これはオラの大好きな正義の味方の仮面だぞ。お姉さんは正義の味方だから、これを被って欲しいんだ！

そんな風に言われて、趙雲が被らぬはずはない。ならばと、しんのすけからヘルメットを受け取り、それを装着。その光景に何か感動しているようなしんのすけ。そして趙雲へ、しんのすけがあのポーズをして見せる。それはアクション仮面の決めポーズ。勝利の高笑いをする際のもの。

そして、そのポーズのままこう言ったのだ。正義の味方は、悪を倒したのなら必ず勝利の高笑いをしなければならないと。その際の決まり事として、しんのすけはそのポーズを義務付けた。それを少しも嫌がる素振りもなく、むしろ望むところとばかりに趙雲も真似をした。

「こうか？」

「も少し上だぞ」

腕の角度を指摘するしんのすけと、それに頷いて腕の位置を変える趙雲。それを見て、頭を抱えたくなる郭嘉と楽しそうに笑う程立。そしてシロは、何となくではあるがしんのすけの影響力を感じて、

諦めたように項垂れていた。
やがて、ポーズが決まり、しんのすけが軽く打ち合わせをする。
それに頷き、しんのすけの声を合図にそれは始まった。

「わっはっはっは！」

「わっはっはっは！」

「「わ～っ、はっはっはっはっ！！」」

最後には共に声を合わせる二人。それに郭嘉は項垂れ、程立は心から笑顔を見せ、シロはノリノリの趙雲の姿に脱力感を感じて地面に伏した。その高笑いはたっぷり一分は続き、それを終えた趙雲は実にイイ笑顔だった。

「うむ、気に入った。しんのすけ、機会があれば是非またやろう」

「いいよ。槍のお姉さんとなら大歓迎だぞ」

そのやり取りを聞き、郭嘉がやや不思議そうに尋ねた。

「しんのすけ、星の名を呼ばないのはどうしてですか？」

「お姉さん達の名前、難しいぞ。オラ、まだ五歳だし、聞いたの一回だし、そんな期待されても困っちゃう」

最後にはやや困った表情で告げるしんのすけ。そんな答えに苦笑する趙雲と程立。郭嘉はそれに成程と頷いて、ふと思った事を告げた。それは、しんのすけの真名。確かに色々と違いはあるが、もしかすると真名に似たモノが存在しているかもしれない。

そう判断し、郭嘉は出来るだけ早くそれを片付けようと思った。自分達からすれば、真名が持つ意味は大きい。それと同じようなものをしんのすけが持っていて、知らずそれを呼ぶ事があったとしたのなら許される事ではないと。

「しんのすけ、一ついいですか？」

「何？　しかじかお姉さん」

しんのすけの言ったしかじかは、郭嘉の名の響きを覚えていたからの呼び方だ。かくかくときたらしかじか。そういう事だ。

「しか……ま、まぁいいでしょう。貴方の国には、真名はないのですよね？」

「まな？　まな板胸のみさえならいるよ」

その答えに今度こそ郭嘉は脱力。趙雲が軽く説明したはずにも関らず、真名の事を綺麗に忘れていたからではない。自分の母を呼び捨てにし、尚且つ手酷い事を言ったからだ。そんな郭嘉に代わり、程立が説明と質問を続け、しんのすけは確かに真名はないと否定した。だが……

「でも……」

「でも？」

しんのすけのないとの答えに、郭嘉は少し安堵した。しかし、続けてしんのすけが告げた言葉に少しの不安が生まれる。しんのすけはそれに気付かず、こう三人へ告げた。真名はないが、自分の名前

は両親が付けた自分だけのもの。ならそれは、三人の真名みたいなものだから、自分にもあると。

それに三人は、納得すると同時にしんのすけの考えに感じ入った。真名の持つ重さは、しんのすけもおぼろげではあるが理解していた。何せ、郭嘉や程立が趙雲を星と呼んだり、逆に彼女達を稟や風と呼ぶのを聞いても、しんのすけがしたのは、どうして別の名前で呼ぶのかと尋ねる事。しかし、それを直接呼ぶ事は無かったのだから。

「……そうだな。確かにお前の名前には、我らの真名に近いものがあるのかもしれん」

「そうですね。どこでも親がまず直面する難関は名付けです。であれば、しんのすけとの名にも、深い想いや考えがあるはず」

郭嘉は知らない。彼のしんのすけとの名前は、考えていた名前を書いた紙が雨で濡れて残った文字の組み合わせだと。しかし、だからこそ思い出深い名前とも言えるので、あながち間違ってもいないだろう。

真名とはその者を表す名。であれば、しんのすけの名は紛れも無く彼を表す名前だ。ともあれ、そんな二人の考えを聞いた程立がどこか意外そうに告げた。

「では～、風達は知らずこの子の真名を呼んでいたと……そう考えるのですか？」

最後の程立の言葉に二人が黙った。文化が違うと言えばそこまでだが、それでも自分達に置き換えて考えれば、しんのすけ達の態度は実に凄い。本人達にその気はないだろうが、自分の名を誇りに思うからこそ、それを誰にでも呼んで欲しいとしているように思えるのだから。

それは、真名を許した者以外は呼ぶ事を許さない趙雲達からすれば、賛同は出来ない。しかし、それでも理解は出来る。それに、いつまでも槍のお姉さんやしかじかお姉さんでは呼ばれにくいし、少々気まずい。

「しんのすけ、お前に預かって欲しいものがある」

「何？」

「私の真名だ。受け取ってくれるか？」

「いいの？　それ、大切なお名前で、大事な人にしか教えちゃいけないんでしょ？」

趙雲はそんなしんのすけの深刻そうな声に、小さく苦笑した。五歳でありながら、こうも見知らぬ環境に順応している事と、真名を預かる事の持つ意味を感覚で感じ取っている事に。だからこそ、こう思う。今でこれなら、成長すればどれ程の男になるのかと。

きっと、優しく他者を思いやる強い男になっていただろうにと。その時であれば、この真名を預けるのもまた違う意味を持っただろうに。そんな風に考え、趙雲は優しく笑みを浮かべてしんのすけへ告げた。

「ああ。お前にならいい。何、この仮面を貸してくれた礼だと思ってくれ。私の真名は星だ」

「お～、キレイなお姉さんにぴったりだぞ。ね、真名を預けた記念にオラとお茶でも……」

「誉めてくれたのは嬉しいが、誘いは受けんぞ？」

微笑ましくしんのすけを見つめる星。それを眺め、程立が小さく頷きしんのすけへと近付いた。

「では私も預けちゃいますね～。飴のお姉さんは少し恥ずかしいのですよ」

「う～ん……じゃ、眠そうなお姉さん？」

程立の言葉にしんのすけは少し考え、そう告げた。真名は呼び方に照れるからで預けていいものではない。そう思ったからこその提案だったのだが、それに怒りを見せる者がいた。

「おうおう。誰が居眠りしてるって？」

「おわっ！　飾りが喋った……」

「俺の名は宝？。以後お見知りおきをってな」

「これ、宝？。あまりしんちゃんを驚かせていけませんよ」

どこからどう聞いても程立の一人芝居。しかし、それをしんのすけは指摘する事もなく、感心したように頷いていた。そんなしんのすけの反応に、程立は笑みを見せて告げる。

何も自分が真名を預けるのは呼ばれ方だけが理由ではない。幼いながらもしっかりと自分の意見を持ち、それで他者を納得させる事が出来たしんのすけだからこそ、自分は真名を預けるのだ。そう言って程立は、その言葉に嬉しそうにしているしんのすけへ真名を名乗った。

「私の真名は風と言うのですよ、しんちゃん」

「風お姉さんかぁ。ん？　今オラの事、しんちゃんって……」

「駄目ですか？　その方が呼び易いのですが～」

風の問いかけに、しんのすけは首を横に振った。益々風が友人に重なったのだ。呼び方や雰囲気、それにどこか只者ではない印象。故にしんのすけは風へこう頼んだ。それは、自分も風の事をちゃん付けで呼んでいいかとのもの。

それに風はどこか意外そうな表情をするが、構わないと許可を出した。それにしんのすけは喜びを見せて、早速とばかりに風を見つめた。

「風ちゃ～ん」

「は～い」

「お～……何か不思議」

「風もですよ。まさか子供に真名を預けて、尚且つこんな風に呼ばれるとは～」

弟が出来たようだと、そう思い風は笑う。そして同時にまた一つしんのすけの凄さを再確認していた。それはしんのすけの物怖じの無さ。誰であろうと意見を言う事が出来る。子供だからと、そう言ってしまうのは容易い。しかし、それでも大人へはっきりと自分の言葉で考えを言えるのは、風からすれば凄い事だった。

そんな事を風が考えている中、郭嘉はしんのすけへ真名を預ける

事を躊躇っていた。確かに二人のようにしんのすけの事を買っている部分はある。幼いにも関らず、この状況に途方に暮れるのではなく、あろう事か笑っている。その心の強さと逞しさに、郭嘉は意外と大人物かもしれないと思うぐらいだ。

だが、それでも真名を預けるに足る相手とは言えない。そんな風に郭嘉が考えていると、しんのすけがそれに気付いて首を傾げた。

「あれ？　しかじかお姉さんどうしたの？」

「か・く・か・です！　どうしてこれが覚えられないのですか。余計な事は覚えているようなのに」

「いやぁ～、それ程でも～」

「誉めていません！」

完全に漫才の様相を呈する二人。郭嘉が何か言う度にしんのすけがそれをからかう、或いは本当に間違える。それに郭嘉が反応して……というのを繰り返し、そんな事をたっぷり五分はしていただろうか。

やがて郭嘉が疲れたのか、もうしんのすけの言葉に取り合わなくなった。無視する事にしたのだ。それに星も風も苦笑する。あの郭嘉が子供相手にある意味で屈したのだ。言葉では止められないと。

「ね～、どうしたの？　何でもうお話してくれないの？」

「……」

「オラ、何かしかじかお姉さんを怒らせる事した？」

先程までは必ず修正してきた言葉にも無反応を返す郭嘉。そこにきて、しんのすけもやっと郭嘉を怒らせたのだと理解した。なので、悲しそうな表情を浮かべて郭嘉へ視線を向けた。その目は、見ている者の良心に訴えてくるような眼差しだ。

ごめんなさい。もう怒らせるような事をしないからお話して。そんな声が聞こえてくるような眼差し攻撃。郭嘉はそれに心を痛める。大人である自分が幼い少年にそんな顔をさせてしまった。その良心の呵責が彼女を襲う。

しかし、これをしんのすけの母が見たのならこう言ったはずだ。相変わらず嘘が上手いわね、と。そう、これは彼の得意技の一つ。その名も、眼差しキラキラ。見る者の心に訴えかけ、自分の状況を改善するために使われる攻撃だ。

これに耐性があるのなら、このしんのすけの眼差しを平然と受け止め、逆に、そもそもはお前が悪いと眼差し返しが出来る。だが生憎とそれが可能なのは彼の母であるみさえのみ。

「……っ！　分かりました、分かりましたから！　許してあげますので、もうそんな顔をしないでください」

「ホント？」

「ええ。本当です」

しんのすけの窺うような言葉に、郭嘉は苦笑混じりに頷いた。どこかで、しんのすけの態度は偽りだと感じているのだろう。その証拠に、それを見た瞬間、しんのすけの表情は喜色満面になる。

「ほっほ～い！　お姉さんがお話してくれたぞ～」

そんな豹変振りに、郭嘉は先程のしんのすけがやはり演技していたと理解するも、そこに怒りや悔しさはない。むしろ微笑ましかったのだ。自分と話すためにそこまでする事に。

そして、郭嘉は自分からある意味で一本取ったしんのすけへ、褒美を与える事にした。そう、それは真名を預ける事。考えてみれば、自分もしんのすけの真名を呼んだようなもの。それに、しんのすけは真名の持つ重さを理解している。

（初めて真名を預ける異性は誰だろうと思っていましたが、まさか子供になるとは……ふふっ、不思議なものですね）

内心で微笑みながら、郭嘉は視線の先で喜びを爆発させているしんのすけを見つめた。そして、しんのすけを手招きし、真名を預けると告げた。それにしんのすけは驚くも、それに郭嘉が嫌ならいいと言って預けるのを取り消そうとしたので、慌ててそれを引き止める。

無論、それは郭嘉のちょっとした反撃だ。それにしんのすけは気付かず、郭嘉が預ける事を止めないでくれた事に、心から安堵したように息を吐いた。

「えっと……じゃ、稟お姉さんだね」

「ええ。お願いですから、もうしかじかと呼ばないでくださいね、しんのすけ」

姉の如き笑みを見せる稟。その美しさにしんのすけは軽く魅入る。だが、頼まれ事をされたと気付いてしっかりと頷き、小指を差し出した。それに首を傾げる稟。だが逆にしんのすけは、稟が小指を出してこない事に疑問を浮かべた。

「？　稟お姉さん、指きりしてくれないの？　お約束でしょ？」

「指きり？　ああ、こうすればいいのでしょうか」

しんのすけの小指に自分の小指を絡ませる稟。それにしんのすけが嬉しそうににやけた。

「あは～、稟おねいさんの指、スベスベ～」

だらしなく顔を緩めるしんのすけに、稟はやや呆れながらため息を吐いた。しんのすけがこの歳にして女好きなのは理解していたが、それでも未だに違和感が拭えない。誰が五歳で異性に興味を持ち、尚且つ積極的に交渉してくると考えるものか。

稟はしんのすけの異常性の一つに、この異性への関心を挙げていた。しかも、どこで知ったのか知らないが、どうやら口説き文句なども使っているのだから。

「……はぁ～、それでしんのすけ、これでいいのですか？」

「駄目だぞ。ちゃんとお約束しないと。指きりげんまん、嘘吐いたら針千本の～ます」

指きりの歌を口ずさむしんのすけ。対する三人はその内容にやや驚いたような表情。約束を破った時は針を千本も飲まねばならない。そんな厳しい掟を自らと相手に課す。そう捉えたのだろう。

そしてしんのすけが指を離そうとしたのを感じ取り、稟もそれに合わせて指を離した。直後に稟は少し戸惑うようにしんのすけへ尋ねた。今の言葉は本当なのかと。それにしんのすけが若干不思議そうに首を傾げた。

しんのすけにとって、これはある意味での恒例行事。約束をした際、守って欲しい時や守りたい時はするだけの事。そう告げると、三人が一様に息を吐いた。本当に針千本飲むのかと思ったと、そう星が楽しそうに告げると、風はそれぐらい真剣に考えてくれという事だろうと返す。

凰はしんのすけへ視線を向け、風の言った通りなのかと尋ねると、しんのすけは力強く頷いた。綺麗なお姉さんとの約束は絶対だ。そう断言してみせたのだから。

「綺麗、ですか……本当に貴方は単純ですね」

「え～？　キレイな人にキレイって言っちゃ駄目～？」

「いえいえ、違うのですよしんちゃん。凰ちゃんは照れているのです」

「ふ、風？！」

「成程。確かに、女に面と向かって綺麗と言える男は多いが、それを下心も無しに言える男は少ないだろうからな」

しんのすけの言葉にやや嬉しそうに笑う凰だったが、それに対して風が告げた内容にやや慌てる。そこへ追い打ちをかけるように星がそう言うと、凰は返す言葉を無くした。しんのすけの言葉には、確かに下心がない。

子供らしい純粋さ。どこかマセているのだろうが、その行動に下衆な感情はない。綺麗な女性にすぐデレデレするのは些か問題かもしれないが、それもしんのすけとしては正しい姿なのかもしれない。少なくても、邪なものを隠して近付く大人達よりも、人としては好ましい。

「もう勝手に言ってください。とにかく、これでもう真名の事も片付きましたね」

そう稟が周囲の空気を変えるように告げる。すると、それにシロが一声鳴いた。

「キャン」

「シロが、自分もお姉さん達を真名で呼んでもいいかって聞いてるぞ？」

「ふっ、そうか。そういえばシロの名も真名だったな」

「そうですね～。まさにシロちゃんの名は真名なのですよ」

「ふふっ、確かにこれ程まで自身を表した名もないでしょう」

しんのすけの言葉に三人は微笑むと、口々にそう告げていく。誰もしんのすけの言葉にそんな馬鹿なとは言わない。子供故の解釈の仕方だが、意外と本当にシロもそう言っている気がしたのだ。だから、三人はシロへも真名を預ける。犬相手にと思う事は無かった。

それは、しんのすけがシロを家族のように接しているから。単なる飼い犬ではないだろう関係。それを三人はそこはかとなく感じていた。こうして、しんのすけとシロは三人の真名を預かる事になったのだ。

日も完全に暮れ、辺りを闇が包む。その暗さにしんのすけは秋田

の祖父の家に遊びに行った事を思い出した。周囲に灯りが少ない田舎暮らしの祖父達。そこで泊まった時経験した夜。それに近いものを感じたために。

そして、そこから付随して思い出されるは愛する家族達の顔や友人達の顔。その笑顔と声を思い出し、しんのすけは何かこみ上げてくるものを感じた。しかし、それを何とか抑え付け呟く。

「父ちゃん達、元気かな？」

「くぅ？」

シロをカイロのように抱き抱え、しんのすけはそう呟いた。この世界がどこかをしんのすけは知らない。古代中国は漢王朝の時代。しかし、稟や風からそんな説明を聞いても、五歳のしんのすけがそれを理解出来るはずもなく、ただ自分の知る様々な物がない事から、どことなくここが昔だとは思っていた。

かつて行った事がある戦国時代。それに似た雰囲気を感じたのもある。なのでしんのすけとしては、ここから元の時代に戻る事が難しいだろうと察していた。あの時も不思議な力や未来人の手を借りて帰還したのだから。

そう考えた途端、しんのすけの心を強烈な恐怖が襲った。いつもより暗い夜の闇もそれを助長したのかもしれない。腕の中のシロを強く抱きしめ、しんのすけは震える声で問いかけた。

――――オラ、お家に帰れるかな……？

何か暖かいものがしんのすけの頬を流れていく。そして、しんのすけの不安感を感じ取ったように、それをシロが舐める。その瞬間、しんのすけに何かが聞こえた気がした。大丈夫、一人じゃないよ。

僕もここにいる。だから元気を出してしんちゃん。そんな風に、いつか聞いた声で言われた気がして、しんのすけはシロを優しく抱きしめる。それにシロも応じるようにしんのすけの頬へ顔を摺り寄せる。

そんなしんのすけとシロの横で、星達は何も言えなかった。辺りは静かで、しんのすけの涙ながらの呟きさえはっきり聞こえたからだ。いくら普通の子供とは違う性格とはいえ、まだ五歳の子供には変わらない。それが突然見知らぬ場所に現れ、こんな風に夜を過ごす。その不安感はいかほどだろう。

そんな風に思い、三人はそれぞれにしんのすけへと視線を向けた。そこには、泣いた事で疲れが一気に出たのか、背中を向けて眠るしんのすけの姿がある。

「……何とかして帰れるようにしてやりたいな」

「ええ。情報は少ないですが、諦める訳にはいきません。子供一人助ける事出来ずして、救国など出来ましょうか」

「風達はまだ未熟ですが、しんちゃんとシロちゃんぐらいは守れるはずです。星ちゃんは力で、風と凰ちゃんは知恵で」

互いに抱くは決意。大陸の情勢を憂う三人にとって、子供一人助けてやれないようでは、とてもではないがこの難局を乗り越えるなど無理だ。そう思うからこその言葉。しかしその根底には、出会ってから今までの時間、気丈にも笑って話をしていたしんのすけへの思いもある。

大人であろうと混乱し、取り乱してもおかしくない状況。それに僅か五歳の少年は適応しようとした。見知らぬ場所、聞き覚えのない文化。それを子供ならではの柔軟性で受け止めた。だからこそ、

三人はしんのすけを助けたかった。

（芯の強い子だ。最初会った時は些か面食らったが、やはり子供なのだな。平和な時代に生まれ、暖かな時間を家族と過ごしていたのだろう。出来るならば、早めに帰してやりたいものだ）

（頭の回転が鈍い訳ではなく、理解力がない訳でもない。それが本人の才能なのか両親の教育の賜物かは知りませんが、一つ言えるのは、彼のいた環境こそ私達が目指すもの。しんのすけは私に希望をくれた。いつか、人はそんな時代を築けるのだと。そのお礼に、必ず帰れるように手を尽くしますよ）

（お家が恋しいのですよね。確かひまわりちゃんはまだ立つ事も出来ないとか。それに、ご両親も心配されているでしょう。しんちゃんもシロちゃんも安心してください。風達がいる間は、絶対守ってあげます。それが先に生まれた者の務めなのですよ）

しんのすけとの会話で、三人もまた彼が天から来た者、つまり未来の人間だと察していた。あまりにも多くの聞いた事のない言葉や物の名前を知っているのだ。更に、彼が告げた平成との年号に日本にアメリカなど国の名もそう。しんのすけが挙げた国の名は、一つとして聞き覚えのないものだったのだから。

故に、彼らは揃って希望を得た。いつか人は争いのない平和な時代を築いていけるのだと。この乱世もいつか終わりがきて、誰もが笑えるそんな時代に出来る。しんのすけの語る話とその存在は、三人にとって大志を強くする要素となった。そして、それと同時に思い出す事があった。それは、あの予言。

「やはり……しんのすけが天の御遣いなのだろうか」

「有り得ない、と言いたいですが、やりようによっては彼の異常性は誰でも分かります」

「あの兜。へるめっとでしたか？　あれは確かにそれを示す一つの道具ですね～」

「そしてあのからくりを模した人形」

「更には、まったく聞いた事のない名前の物や考え。これだけ揃えば、人によっては民達にそう信じ込ませる事は可能でしょう」

　稟の締め括りに、誰も言葉を発しない。信じる者は少ない予言だったが、それでもどこかで期待している者は多い。その御遣いがまさか子供だとは誰も思うまい。だからこそ、それを話せば揃って誰もが希望を無くす。しかしそれは、しんのすけの話をただ聞かせるだけではだ。普通に聞いても理解出来ない者や信じない者達もいる。だが、その者達にも分かるように話せば、しんのすけの話は大きな希望だ。

　それを誰よりも理解している三人だからこそ、どうするか迷っていた。この広い大陸には聡明な者もいる。そういう相手ならばしんのすけの言葉から真実を見抜き、希望を強くするだろう。今の三人のように。

　それは必ずこの乱世を終わらせる力になる。だが、それはしんのすけを利用する事になる。更に、元の場所へ帰してやる事を遅らせる事にもなりかねない。それは、出来ない。確かにこの乱世を正す事は大切だが、そのために子供を利用するなど、三人には出来るはずがない。

「仮に天の御遣いがしんのすけとして、私には一つだけ言える事が

ある」

星の言葉に二人は視線を向けた。星は傍に置いてあった槍を手にし、立ち上がった。そしてそれを天へと突き上げ、静かに、だが力強く告げる。

――何者であろうと、しんのすけを利用しようとするのなら、この槍で貫こう。

星の言葉に稟と風は互いを見つめ合い、頷いた。そして、立ち上がって星の両脇へ近付き、その槍を掲げる手に自分達の手を重ねた。

――ならば、私はこの知恵を以って、しんのすけを助けましょう。

――風も同じなのです。必ずお家に帰してあげましょうね～。

三人は静かに誓う。安らかな寝息を立てる少年を起こさぬように。その寝顔を失わぬように。例え、いつか自分達が別れる事があっても、この誓いは消えないとばかりに。幼い命。それを利用などさせたくない。故に誓った。誰にも、そう、天であろうとそうはさせないと。

そして三人はそのまま視線を眠るしんのすけへと向けた。丁度寝返りを打ったため、その顔が焚き火に照らし出される。その微笑ましさに三人は笑みを浮かべた。しんのすけとシロは揃って幸せそうな寝顔だったのだ。

それを見つめ、三人もまた幸せそうに笑顔をみせる。願わくば、この安らぎが永久に続けと思いながら……

ーーー

第三話

「んっ……？」

その朝、稟は妙な手触りを感じて目を覚ました。寝惚ける頭で眼鏡を手に取り、それをかけて周囲を見渡す。風はまだ安らかに寝息を立て、星は姿が見えないので、おそらくいつものようにどこかで体を動かしているのだろう。

そして、昨日から増えた旅の連れである少年と犬が寝ていた位置には、何故か白い犬しかいなかった。それを確認し、稟は何となくだが自分の手が感じているものの正体を察した。

（……寝相が悪いのですね、しんのすけは）

見れば、しんのすけが自分の腕にくっついている。それにため息を吐きつつも、どこか嬉しそうに稟は笑みを見せる。

「まったく……これでは今後が思いやられます」

そう呟きながら、稟はしんのすけの頭を優しく撫でた。

「う～ん……母ちゃ～ん……」

その感触に、しんのすけがくすぐったそうに微笑みを浮かべて寝言を返す。稟はその言葉と反応に優しい笑みを見せる。そして、視線を上へ向けた。そこには気持ちのいい青空がある。それに頷き、稟は小さく思う。今日もいい日でありますようにと……

それから少しして全員が起床し、食事をする事になった。そのため、星が川から魚を取るため槍を構えている。その横で、しんのすけは期待に満ちた眼差しを星に送っていた。稟は魚を焼くための火を熾そうとしていて、風はシロと共に魚を刺すための枝を集めていた。

「はっ！」

魚影を見つめ、星は槍を突き出した。それが見事に魚を捕らえ、槍先に刺さっている。それにしんのすけが感動し、自分もやりたいと言い出した。星はそれに苦笑して、試しにと手にした槍を持たせてみた。

その重量にしんのすけは案の定ふらつく。それに星は楽しそうに笑うが、仕方ないとばかりにその手を支えてやる事にした。そして、星の助けを受けながらしんのすけは川へ視線を向ける。そこに見える動く影目掛けて、しんのすけは槍を突き出した。

そのタイミングに星は内心驚いた。実に見事な見極めだったのだ。自分でもそこで槍を突き出すと感じたのだから。槍に刺さる魚を見て、しんのすけは喜びを表情で表した。

「わ～い！　オラにも出来たぞ～！」

「キャン！」

「お～、しんちゃんもやりますね～」

シロと風は驚きと共に笑みを返す。それに稟も視線を向けて柔らかく笑みを浮かべる。だが、それと同時に思う事もあるので、その

まま視線を星へと移した。

「武術の才があるかもしれませんね。星、どうです？」

「ふむ、確かに可能性はあるな。少し試してみるか」

「ふぅ……お？」

槍から魚を外すしんのすけ。まだ少し跳ねる魚におっかなびっくりしながら、それを風へと手渡した。そこで星と稟の会話に気付いたのか、視線をそちらへ向けて小さく首を傾げた。その微笑ましさに三人が笑みを浮かべる。

そして、星がしんのすけを手招きして自分の前に立たせた。何をするのかと不思議そうなしんのすけへ、星は軽く攻撃するから避けてみて欲しいと告げた。当たってもいいように、槍の持ち手部分を突き出すと。

「ではいくぞ？」

「ほ～い」

どこか互いに適度な脱力感を見せつつ、それは始まった。星の繰り出す突きをしんのすけは軽々とかわした。その動きに星は若干目を細め、やや突きの速度を上げた。それは流石に軽々とはいかないが、それでもしんのすけは避けてみせた。

それに風や稟さえ驚きを見せた。シロはどこかそれを信じていたのか、しんのすけを応援するように声をかけていた。星は少しずつ突きの速度を上げていく。最初は余裕が見えたしんのすけも、その顔に焦りが混じり出す。そして、星がその限界を見極めたのか、それ程までとは違う鋭さの突きを繰り出した。

（これならば避けれまい）

しんのすけの動きを見切り、星はやや本気を見せた。それは、しんのすけに対する賞賛を込めたもの。予想以上の才を見せた事に喜びを感じた故の、返礼。趙子龍の真髄。その一端を見せる事こそ、武人としての彼女の最大の賛辞だった。無論、それは掠らせる程度に済ませるつもりだった。しんのすけが避ければ、だ。

しかし、その突きが繰り出された時、しんのすけは疲れから動きを止めて星から視線を逸らしていた。つまり、その突きを見ていなかったのだ。それに稟と風の表情が焦りに変わる。星もさすがにこのタイミングでとは思わなかったのか、その顔には驚きが浮かんでいる。

「「「しんのすけ（しんちゃん）っ！」」」

「もう駄目だぞ～」

気付いてくれと、切迫した声で叫ぶ三人。それにしんのすけは反応しようとするも、やはり疲れていたのかぐったりと体を地面に横たわらせた。そこに迫る星の突きだったが、しんのすけが地面に伏したため呆気なくかわされる。

「「「は……？」」」

想像の斜め上を行くしんのすけの動き。某宇宙一ラッキーな正義の味方ばりの避け方に、三人は揃って固まった。それを見て、しんのすけは状況が理解出来なかった。ただ自分は、疲れて倒れただけなのだから。

（お？　何を風ちゃん達は驚いてるんだろ……？）

自分がかなりの運の良さを見せた事に気付かないしんのすけだった……

あの後食事を済ませ、簡単な身支度を整えたしんのすけ達は歩き出した。星はしんのすけの動きには才があると告げ、少しずつだが鍛えていく事にした。しんのすけも強くなれる事は嬉しいのか、喜んでそれに応じた。

そこに込められた星と稟の狙いはしんのすけの安全性を向上させる事。いざとなった時、しんのすけが戦う事は出来ずとも逃げる事は出来るようにと。そう考えての鍛錬なのだ。

そして、その道中で話した内容の一部に、昨夜三人が水浴びをした事が出た。すると案の定、しんのすけがどうして起こしてくれなかったのかと文句を言って、三人が苦笑する場面があった。拗ねるしんのすけに三人が揃って微笑みながらも、その機嫌を直す事に意外と苦労したりという事があった以外は、概ね何事もなく時間は過ぎていった。

やがて日も高くなった頃、しんのすけ達の視界に村が見えてくる。そこで今日は泊まり、糧食などを確保しようと考えていたのだ。しんのすけはその村の外観に、やはりここが時代劇のような世界と確信する。だが、それよりも彼には気になる事があった。

「ね、どうしてあそこから煙が出てるの？」

その言葉に星達が足を止めた。しんのすけが指差す方向。それは村からそこまで離れていない場所。そこへ視線を向けると、確かに

土煙が見える。それは多くの者達が動いているだろう証拠。その数は百もないだろうが、それでも数十は下らないだろうと感じるものだ。

「……不味いっ！　盗賊だ！」

そう叫ぶや否や星はその場から走り出す。見えたのだ、何か光る物を。あれが軍であれば、こんな場所で抜刀しているはずがない。であれば残る可能性は一つだったのだから。まだ間に合うかと思いながら、星が向かうは土煙ではなく村。その入口目指して走り出したのだ。それに続けと風と稟も走り出す。星が何を考え村の入口へ向かったのかを理解したからだ。

しんのすけはそんな三人の動きに疑問を感じるも、置いていかれてはいけないと思い急いで追い駆ける。シロもその後を追う。星は入口に到着すると村の者達へ盗賊が近付いている事を告げ、念のために身を守る物を持って隠れるよう指示を出す。そして自身はそのままそこに残った。そう、村に来る賊を相手取るためだ。

風と稟が星に遅れて入口に到着する。しんのすけとシロは、その俊敏性で二人よりも微かに遅れただけで済んだ。全員来たのを確認すると、星は手にした槍を構える。そして視線で風と稟へしんのすけの事を託すと、一人迫る土煙を睨む。

その雰囲気から、しんのすけは何か只事ではないと感じ、自分の事を抱きしめている風へ尋ねた。

「ねぇ、何か来るの？」

「盗賊ですよ」

「自分達の事しか頭にない者達です」

風の声にも稟の声にも怒りが滲んでいる。そう、盗賊達の多くは元は農民だ。朝廷の腐敗によって貧しく苦しい暮らしを強いられ、止むに止まれず卑しい行いに手を出した者達。だが、最初はあっただろう罪悪感を無くした時点で彼らは人ではない。そう稟も風も考えていた。

何せ、彼らが襲うのはかつての自分達と同じような弱者なのだから。弱い者が束になり、より弱い者を叩く。それが乱世を形作る一つの要因だ。しんのすけは二人の言い方から何かを感じ取ったのか、何度か無言で頷くと視線を遠くなった星へと向けた。

「……じゃ、悪い人達なの？」

「ええ」

「そっか。だから星お姉さんは、それを懲らしめるんだ」

「そうですね。まぁ、あの数ならば平気でしょ～」

懲らしめる。その言葉の意味する事が、自分と星達では大きく違う事をしんのすけが知るのは、この後の事だ。どれ程待ったかはしんのすけには分からない。だが、その間稟や風が話をしてくれたおかげで、しんのすけは恐怖を感じる事も退屈する事もなかった。

本当ならば隠れるべきなのだろうが、風も稟も星の実力を知っている。それに、この村人には悪いが、いざとなったら自分達だけでも逃げるために入口に残っているのだから。

三人の足元にいるシロも、その落ち着きを感じ取ったのか、あまり不安を表す事もなく、ただひたすらに星が向かった先へと視線を向けていた。そして、その目が星を捉えると、嬉しそうに声と共に

走り出した。それに気付き、しんのすけもそちらへ視線を向ける。
そこには無事な姿の星がいた。しかし何故かシロは、その傍に近寄ろうとしない。それどころか、星に怯えるように距離を取っている。それに疑問を感じながらも、しんのすけは星へ手を振って出迎えた。

「お～、おかえりんごジュースは百パーセント～」

「？　りんごじゅーすとは何だ？」

聞き覚えのない単語に星は足を止める。それと同時に手にした槍を地面に突き立てた。それにしんのすけの視線が動く。何故ならば、その槍から地面へ血が流れたのだ。

「星お姉さん、お怪我でもしたの？」

「ん？　いや、この通り無事だ」

「じゃ、この血は？」

不思議そうに首を傾げるしんのすけ。それに星は平然と答えた。

――盗賊のものに決まっているだろう？

――な～んだ、盗賊さんの……え？

その言葉を聞いて、しんのすけは笑って答えようとした。しかし、その内容を理解した途端、その表情が固まった。それに気付かず星は稟と風にもう盗賊は全滅させたから心配はないと告げていた。
それに二人も安堵の表情をみせる。そんな二人にもしんのすけは

言葉が無かった。彼が知っている正義の味方とその仲間は、決して人を殺す事はしなかった。どんな悪人であろうと、命を取らずに改心させていたのだから。そう、しんのすけにとって懲らしめるとはそういう事。

だが、しんのすけは星が告げた全滅との言葉から、ある事を想像した。故に、それを否定するために急いで村の外へ向かう。それに三人が気付き後を追う。震えるシロが見つめる先を見て、しんのすけは愕然となった。

そこには、物言わぬ存在となった多くの男達が倒れていた。一面を赤く染める血。あちこちに残る武器の数々。あの戦国世界でしんのすけが見る事の無かった乱世の現実がそこにはあった。

そんな惨状を眺め無言のしんのすけ。そこへ三人が追いつき、同じ光景を見る。そして、子供に見せるものではないと考えた風がしんのすけを連れ戻そうと近付くと、しんのすけは星も来た事に気付いたのだろう。そのまま振り向かずに後ろの星へ向かって問いかけた。

「……これ、星お姉さんがやったの？」

「そうだが？」

心なしかしんのすけの声がくぐもっているような気がして、星は不思議そうに声を返す。それにしんのすけが手を握り締め、一度だけしゃくり上げたかと思うと、勢い良く振り返り、叫んだ。

――どうして殺したの！？　死んだら、ごめんなさいだって出来ないんだぞっ！！

その涙ながらの叫びに、誰も言葉が返せなかった。正論を告げ、しんのすけを黙らせる事は出来る。しかし、しんのすけの訴えは三人の心に強く響いていた。死んでは何も出来ない。例え改心したくても、後悔しやり直そうとしてもそれは叶わない。そんな風に聞こえたのだ。

無論、非情にならなければ危ない事を星達は知っている。故に星は盗賊の頭らしき者と対峙した際、最後に確認したのだ。仲間はいないかと。それに相手はいないと答えた。だが、念のために仲間がいても連絡出来ないように、そして二度と悪事を出来ないようにしたのだから。

平和な時代を生きていたしんのすけ。だが、彼も幾度にも渡る冒険で知っている。平和ではない場所があり、そこでは自分が話の中でしか知らないような恐ろしい現実が存在する事を。それ故に、時には誰かの命を奪う事さえある事も……

それでも、それでもしんのすけは星達だけは違うと思っていた。友人達や憧れのヒーローのような三人なら、きっとどんな相手だろうと勝利して許し、更生させると。それを裏切られたように思いながらも、しんのすけは想いよ届けと告げる。

「父ちゃんが言ってた！　本当はみんな優しいんだぞ！　母ちゃんはいつもお便秘で怒ると凄く怖いけど、買い物行くとチョコビ買ってくれるし、ひまも時々イタズラしてオラのせいにするけど、大切なビー玉くれたりするし、父ちゃんは足臭くてなさけないけど、オラ達のためにいっしょ～けんめい働いてくれてるんだぞ！」

涙を流し、しんのすけは叫んだ。誰だって本当は優しい心を持っている。悪い事をしたからといって殺すのは間違っていると。それは、彼もまた問題児だからこその言葉。しんのすけ自身、何度も悪い事をしては注意され直すようにと言われ続けている。

それにしんのすけは応える事が中々出来ないが、それでも素直にその時は謝り、改善すると言って許しを得ている。悪い事をしたら謝る。そして同じ過ちをしないようにする。それで解決してきた生活しか知らないしんのすけ。それは、この時代では甘い。だが、甘いからこそ理想になる。

「……しんちゃん。しんちゃんの言いたい事はよく分かるのですよ。でも、この人達が同じように何度も人を殺してるとしても、しんちゃんはそう言えますか？」

しんのすけの言葉の意味を感じ取り、風は優しく抱きしめて声をかけた。それはまさに姉が弟を諭すような雰囲気がある。

「それは……」

「言えないですよね？　なら分かってください。星ちゃんは、風達の事を守るために戦ってくれたのですよ」

それでしんのすけが納得してくれた。そう風は思った。すると、しんのすけが真剣な眼差しでこう答えた。

――でもそれじゃ……いつか誰もいなくなっちゃうぞ……

風の言葉を理解し、しんのすけはそう返した。殺したから殺してもいい。守るためなら仕方ない。そんな理論をしんのすけはそう解釈した。殺し殺されが拡大すれば、待っているのは人の滅び。その感受性と想像力に風は思わず声を失った。

子供だからこれで納得するだろうと、そう考えていた。しかし、しんのすけは理解した上で更に言葉を返してきた。極論だが、可能性がない訳ではない。無論、風も稟もこれを否定する事は出来る。

それでも、これは子供が辿り着く考えではなかった。

風が驚きから沈黙したように、稟と星もまた沈黙した。平和な世界にいたから、子供だからという事で、しんのすけの言葉を処理しようとしていた事に気付いたからだ。彼は決して平和な世界しか知らない訳ではない。多くの困難や試練を乗り越え、その上で笑っているのだ。

幾多もの冒険で彼が知った現実。とても五歳の子供が見るような光景や聞くような事実ではないそれら。しかし、それでもしんのすけは変わらない。いや、本質は、だろう。だらしなく、スケベでマセているが、優しく素直で勇気を持っている少年。彼はもう”本当の強さ”の意味を感じ取っているのだから。

しんのすけは風の腕からすり抜けると、何も言わない三人に再び背を向けて、盗賊達の遺体に近付いた。そしてしゃがむと、その手を合わせた。その口からは、安らかに眠ってくれるようにとの願いを述べて。

（死者には、もう何の罪もない。故に、死後は静かに眠れ……か。本当に平和な時代、いや良き時代に生まれたのだな、しんのすけは）

（ごめんなさい……ですか。どうしてそんな言葉を……？　そうか。しんのすけはきっと、改心の機会を与えたかったのでしょう）

揃って考える事は違えども、抱く気持ちは同じ。しんのすけの考えは、この乱世では中々抱いても貫けぬ想い。悪人であろうと、改心しようとするのなら許そうとする気持ちだと。そう星も稟も考え、しんのすけへ視線を向けて思う。どこまで優しい子なのだろうと。

何故ならその足元には、いくつかの水滴が落ちている。それを見て、二人だけでなく風も思う。しんのすけは、誰であろうと他者の

死を悼む事が出来る優しさを持っていると。三人が揃ってしんのすけの背中を見つめる。それに気付いたシロがしんのすけへ近付いて、その顔をすり寄せた。

その温もりにしんのすけは目元を拭い、頷いて立ち上がる。それを見て、三人はしんのすけの言葉を待った。何かが先程までと違う。そう感じたからだ。

「……ね、ここに悪い人達は沢山いるの？」

「ああ、あちこちにいる。もっと多くの者達を擁する盗賊や山賊もいるだろう」

「何でみんな、それをどうにかしないの？」

「残念ながら、賊を増やさぬようにする事が今の朝廷……国には出来ません」

「じゃあ、どうするの？」

「ですから、風達はそんな世の中をどうにか出来て、お助けしたくなる相手を捜しているのですよ」

しんのすけにも分かるようにと、稟と風は難しい表現を避けるように告げた。それを聞いて、しんのすけは振り向いた。その目は赤く腫れているものの、表情は真剣なもの。何かを決意した男の顔だ。それに三人は小さく驚くも、次のしんのすけの言葉に心から驚く事になる。

――なら、オラもお助けするぞ。もうお姉さん達がこんな事しないでいいように。誰かが悪い人にならなくていいように。

それに込められたのは、紛れもない覚悟。ただ共に居るのではなく、星達を、ひいてはこの世界を助けたいという言葉。帰る事が難しいとしんのすけは感じているからだけではなく、この星達が住む世界をどうにかしたかった。いつか帰る方法が見つかるとしても、その時まで自分が無事でいられるか分からない可能性もあるし、星達に助けてもらうだけは嫌だったのだ。

しかし、そのための方法をしんのすけが知るはずもない。だから決めたのだ。星達の手伝いをしようと。それが一番の方法だと。そして何よりも、自分の恩人で正義の味方である三人に、これ以上悪人であれ誰かの命を奪って欲しくはなかったのだ。

そんなしんのすけの宣言を聞いて、三人は揃って予言は本当だったと感じていた。しんのすけには大きな力はない。しかし、その存在が与える影響力は馬鹿に出来ないものがあると。そう、三人は揃って今のしんのすけから”何か”を感じていたのだから。

幼く、この国に何の縁もないしんのすけ。それがここまで言ってくれた。子供でさえこの状況を憂いている。そして、その微々たる力でも役に立てたいと思ってくれた事に、三人はこみ上げるものがあった。

「いいのか？　帰る方法を探さないでも」

「それも探すぞ。でも、まずオラがご無事じゃないと意味ないぞ」

「風達と一緒にいる間は大丈夫ですよ～？」

「でも、ゼッタイじゃないぞ」

「では、しんのすけは本当にこの大陸を助けたいと？」

「たいりくじゃなくて、みんなだぞ。悪い事した人達も、ちゃんと謝ったら笑って暮らせるようにするんだ」

しんのすけはそう告げると、片手を空に突き上げて叫ぶ。

――――かすかべ防衛隊、ファイヤ～っ！！

それは彼と友人達の合言葉。弱気な自分を励まし、押し寄せる苦難を乗り越えるための鼓舞だ。故に、これを口にした後の行動が世界を救うキッカケになった事は多い。もう一つ、彼には同じように逆境を跳ね除ける言葉があるのだが、それはここには相応しくない。それは、彼の家族と共に叫ぶものだから。

しんのすけにとって、星達は家族ではなく友人。ならば、ここで叫ぶのはこちらだと。そう思ったからの叫び。そんなしんのすけの叫びに、星達はどこか圧倒される。

「……しんのすけ、それは？」

「合言葉だぞ。これをみんなで言うと、ピンチを乗り越える事が出来るんだ」

「ぴんち？」

「雰囲気から察すると、危機とか危険ですかね～？」

しんのすけの言い方からその意味を察する風。しんのすけもそれに頷いたので、稟も星もそういう言葉なのかと理解した。そして、しんのすけが星達に言った。全員で力を合わせて頑張るために、一緒にこれを言って欲しいと。

それに星は即座に応じ、風も構わないと告げた。稟はやや躊躇いがあったが、しんのすけの考えは分かるので頷いた。この難局を乗り越えるために一致団結したい。その思いは、痛い程分かるのだから。

「さ、ではやるか」

「いいですよ～」

「号令はしんのすけがお願いしますね」

「ブッ、ラジャ～」

全員で手を重ね合わせる。シロもそこにはいる。掛け声に関して稟からある変更要請があったが、それをしんのすけは快く同意し、星と風にもその事を伝え、もう準備完了していた。そして、しんのすけが大きく息を吸い込み……

――たいりく防衛隊、ファイヤ～っ！！

――ふぁいや～っ！

――キャンキャ～ンっ！

青空に響き渡る五つの大きな声。その力は、あまりにも小さい。しかし、その絆はもう小さくはない。あの男性が呟いた言葉。この世界には、しんのすけの力も絆もない。それは確かにそうだっただろう。ここには、彼の家族も友人もいないのだから。

だが、あの男性も一つ肝心な事を見落としていた。しんのすけの力とは、人との絆。そして絆とは、誰かと心を通わせる事なのだ。

絆はないのではなく、結ばれていないだけ。現に、彼はもう三人の英傑と心を繋ぎ出しているのだから。

今、大陸に静かな風が吹く。それはまだ、そよ風でしかない。

その勢いが激しくなり、嵐となって大陸に吹き荒れる時、彼らは知る。

本当の英雄とは、どういう意味かを

……

――――――

第四話

木々の中を歩くしんのすけ達。星を先頭に、次の目的地目指してただひたすらに歩く。あの村を発ってもう数日経つが、しんのすけにとってはつい昨日の事のように感じていた。野宿にも慣れ、食べられる木の実やきのこなどを稟や風から教えてもらったり、星との鍛錬は少しずつではあるが確実に動きを良くさせていた。

あの後、しんのすけは星とシロと行動を共に事になり、稟と風の二人といずれ別れる事が決まった。しんのすけとシロが増えた事により、路銀が心許なくなったためだ。なので、路銀を稼ぐために星はそこから近い幽州へ行く事にした。しんのすけ達は自分を守れる星と一緒にいる方がよいとなり、稟と風はしんのすけが大陸へ来る原因となった鏡を探す事になったのだ。

そんな彼の現在の生活は、朝に星との鍛錬。昼は旅を進めつつ、自分の世界の事や星達の世界の事を話し合い、夕方は稟や風を先生に、簡単な読み書きや雑学などを教わるといった流れだ。

そして夜には空へ向かって家族達への報告をし、翌日に備えて眠る。そんな生活にも次第に慣れ、しんのすけは微かにではあるが、逞しくなっていた。

「……で、そこでオラが風間君の耳にはむってしたんだ。そしたら、風間君があは～ってなって……」

「お前は男色の気もあるのか？」

「だんしゃく？　オラ、おイモじゃないぞ」

「しんのすけ、星は男の人も好きなのかと言っているのです」

星の言い方が難しく、聞き間違いをするしんのすけ。それに気付き、稟が分かり易く言い直す。それを聞いて、しんのすけは理解したと頷いて、首を横に振った。確かに風間の事は好きだが、それは友人としてであってそういう対象ではないと。

自分としては、ちょっとしたからかいと触れ合いのつもりなのだから。だが、しんのすけの行動を聞いていると、そう取られてもおかしくない。そう判断し、風があまりそういう事をしない方がいいと告げた。せめて、それは女性――しかも自分と思いを通じ合わせた相手にするべきだと。

「まぁ、しんちゃんの性格なら、そういう相手にこそ奥手になりそうですがー」

「どうしてです？」

風の発言が信じられず、稟は聞き返す。しんのすけは女性関係に滅法強い印象があったからだ。それが、自分を好きでいる相手に対して奥手になる事は想像出来ないと。そう思ったからの言葉。どうも星も同じ事を思ったようで、その表情は疑問を浮かべている。それに風は、ならばと思い、しんのすけへ問いかけた。

「しんちゃんは今のような事を風達に出来ますか？」

「えっ？！　えっと……その……」

風の言葉にしんのすけは驚き、どこかもじもじしながら三人を見る。それに星も稟も軽く驚いた。きっと出来ると即答すると思ったのだ。だが、実際は戸惑いと躊躇いを表情に出し、やや恥ずかしが

ってさえいるのだ。
　そんなしんのすけを見て、風は言った通りだろうといわんばかりの視線を二人へ向けた。それに二人も意外そうに頷き返す。一方、しんのすけは風の言葉に考え込んでいた。

（オラにはななこお姉さんがいるし……でもぉ～風ちゃん達も美人だし……あ～っ！　決められないぞ～！！）

　真剣な表情でいたかと思えば、次にはにやけた顔になり、最後は自分の頭を強く手で押さえるようにしながら、苦渋の決断を迫られている表情になるしんのすけ。そんな百面相に三人は驚き、呆れ、そして笑う。
　シロはそんな雰囲気に嬉しそうな声を出す。どこから見ても楽しげな光景。とても乱世の旅路とは思えぬやり取りがそこにはあった。絶えず起こる笑み。それは全てしんのすけが原因。きっと三人では、ここまで笑う事はなかっただろうと星達は感じていた。

　こうしてこの日も危なげなく時は過ぎていく。日が暮れたのをキッカケに、野宿の準備をし始めるしんのすけ達。昨日とは違い、今日は近くに川がないため、星が一人で水を探しに出て、しんのすけと風は周辺から枝を集めてながら、何か食べられる物はないかを探す。稟はシロが見つめる中、火を熾す。
　そうして色々と準備を終え、稟が荷物から食料を取り出し、それをそれぞれに手渡していく。シロには骨が与えられ、それに嬉しそうに駆け寄った。そこへ星が戻り、比較的水源が近くにあったと嬉しそうに告げる。

　更にその日は、しんのすけの口からあの戦国時代へ送られた思い出話が語られた。それを聞いて星達はある推測を立てた。それは、

しんのすけを元の場所へ帰すには、予言通り乱世を止める必要があるのではないかと。
それも含め、色々な情報を手に入れる事を視野に入れての別行動。鏡を手に入れられるならばそれでよし。手に入れる事が出来なくても、せめて情報だけでもと。たいりく防衛隊として、三人は今出来る事をやろうとなったのだ。

「ではな」

「ええ。そちらも気をつけて」

笑みを見せ合って背を向けて歩き出す両者。その離れていく姿を振り向きながら見て、しんのすけは大声で叫ぶ。

「稟お姉さ～ん！　風ちゃ～ん！　またね～！　おみやげよろしく～！」

「キャンキャン！」

「はいはーい。でも、あまり期待しないでくださいねー」

それに答えるは、どこか楽しげに聞こえる風の声だ。稟と星もそんな風の言葉に笑みを浮かべていた。それもそのはず。その心に悲しみはないのだ。また会えるだろうと感じているからだろうか。
しんのすけはそう考えているからこそ、気楽でいる。いや、きっと全員そうなのだろう。例え何があろうと大丈夫だと、そう感じているのだ。あのたいりく防衛隊の誓いがある。それが彼らの心を強く結びつけたのだから。

こうしてしんのすけ達はそれぞれに歩き出す。しんのすけ達は幽

州は公孫賛の下へ。稟達は袁紹が治める南皮へと。互いの果たすべき事を胸に彼らは一時の別れを経験する。それが本当に一時的なものとなるようにと願いながら……

そして、幽州で開かれている武術大会に星が出場し、優勝して主催者である公孫賛の興味を引く事に成功した。それをキッカケに仕官しようとする星の思惑通り、しんのすけ達はその前へ呼び出されたのだが……

「え？　残念さん？」

彼女の名乗りを聞いてのしんのすけの第一声はそれだった。無論、周囲が一瞬呆気に取られたのは言うまでもない。そこから真っ先に我に返ったのは、当然ながら名前を間違えられた本人だ。

「私の名前は公孫賛だっ！」

「ほーほー、見事なツッコミですな。芸人さん？」

「んな訳あるかっ！」

「おー、お姉さんやるね。さっきよりもキレがあるぞ」

「そ、そうか？　って、ちが～う！」

「おおっ！　今度はノリツッコミ!?　やっぱり芸人さんでしたか

ぁ」

しんのすけと漫才を繰り広げる公孫賛。そんな彼女へ平然としているしんのすけに苦笑しながら、星はやや不敵な笑みを浮かべてその間へ割って入る。

「こら、いい加減にしろしんのすけ。せめて残念さん殿と呼ばぬか」

「そうそう残念さん殿なら……ってお前もかっ！」

「はっはっは！　何を怒っておられるのです、公孫賛殿。私は残念との言葉に親しみを込めてですな」

「さらりと残念言うな！　その親しみで私に殺意が湧くわっ！」

「クゥ～ン……」

公孫賛の名前をネタに完全な漫才を繰り広げる三人を見て、シロは疲れを感じて床へ伏せる。それでも彼女は、太守である自分へ物怖じしないしんのすけと星の事を気に入った。シロは、二人と違って自分を癒してくれる事で気に入ったのが実にらしい理由と言える。

こうして客将となり、彼女の下で働く事になった星。しんのすけもそれに伴い、公孫賛傍付きの雑用係として職を得る。まぁ、主な仕事は庭の草むしりなどだったがそれでさえたまにサボったりする始末。

「おいしんのすけ。庭掃除が終わったのなら、次はお茶をもらってきてくれるか？」

「ほんじつのえーぎょーはしゅーりょーしました。またのご来店を

おまちしております」

「そうかぁ～、もうそんな時間か～……ん？　おいっ！」

「お？　さすが残念さん。気付かれましたか」

「当然だっ！　後、残念さん言うな！」

「ほ～ほ～。なら、こうそもさんですな」

「せっぱっ！　って、違うだろ！」

そんな風に漫才しながら、しんのすけは公孫賛に呆れられつつも気に入られていく。不真面目でもあるが、真面目な時もありどこか憎めない性格。それもあってか、そうしている内に彼女とも親しくなり、しんのすけがその真名を預かる頃には大陸に不穏な空気が漂い出していた。

だが、それは北の幽州にはまだ薄っすらでしかなく、しんのすけはのほほんとしていた。白蓮に天の御遣いであると知られた後も、特にその周辺に変化が無かったのもある。そう、星が白蓮ならばそれを話しても大丈夫だろうと踏んだのだ。

その読み通り、白蓮はしんのすけが天の御遣いだと星から聞いても、特に驚く事も呆れる事も無かった。何故ならば、彼女には薄々そんな予感がしていたのだ。しんのすけの言動がそれを感じさせていたのだから。

「あー、道理でな。いや、時々聞き覚えのない言葉を使うし、礼儀なんかもいい加減だからさ。でもそうか……しんのすけがねぇ」

「驚いた？」

「少しな。で、どうする？　天の御遣いって扱われたいか？」

「どーして？　オラはオラ。おつかいなんかじゃないぞ～」

白蓮の問いかけに平然とそう返して、シロと一緒になって庭を走り始めたしんのすけ。彼は天の御遣いとの名前にこだわりも無ければ、執着もない。子供故の感覚でむしろかっこ悪いとさえ思っていたぐらいなのだ。

そんな事を知らない白蓮と星。だが、その顔は揃って苦笑していた。眼前を楽しそうに走るしんのすけとシロを眺め、白蓮は少し呆れながら隣の星へ静かに告げた。

「聞いたか？　自分は自分だってさ。大人でさえそう考えて言える奴がどれだけいるか。ホント、あいつは馬鹿なのか大物なのか分からないな」

「ですな。しかし、白蓮殿はそう言える方と私は見ておりますぞ？」

「どこか茶化すような言い方だけど、まぁいいさ。そういう星は違うのか？」

二人はそう話しながら、庭を楽しそうに走り回るしんのすけとシロを眺め、小さく微笑む。子供が何も怯える事無く遊べる世の中。それが早く当然となるようにと願いながら……

ある日、白蓮を頼ってある三人組が幽州の城を訪れる。彼女達は桃園の三姉妹と呼ばれる事になる者達。劉備、関羽、張飛の三人だ。劉備が白蓮の同門で親友だったため、その縁を頼って姿を見せたのだ。

三人で村々を賊から助けたりしながら世を正そうとしていたが、それも既に限界に来ている。そう強く感じ取った三人は、まずは力を得ようと幽州太守である白蓮の下で働こうと考えたのだ。

そこで彼らは、白蓮から紹介されたしんのすけが天の御遣いとふとした事から知る。彼がいつもの調子で天の言葉を使ったためである。そのため、劉備は彼へ懇願した。大陸を救って欲しいと。だが、しんのすけに当然ながらそんな力はない。それを本人と星から告げられ途方に暮れる劉備だったが、そんな彼女へしんのすけはこう告げた。

「お姉さんは一人？　違うなら、オラと同じだぞ。みんなで力を合わせれば何とかなるよ。だいじょーぶ」

「一人じゃない……みんなで力を……そうか！　そうなんだね！大事なのは誰かを頼るんじゃなくて、私がみんなの力を集める事なんだ！」

しんのすけの言葉から己がすべき事を自覚し、劉備は奮い立つ。それを見て関羽達もまた思いを新たにする。

「この乱世を止めるのは一人の英雄ではなく、この大陸に生きる一人一人か。成程、天の御遣いはそれを我らに教えるために降り立ったか」

「よく分からないけど、みんなで頑張ればいいって事だけは分かったのだ！」

姉である劉備が告げた言葉を聞いて、関羽と張飛も自分なりにすべき事を考え始める。そんな二人を見て、星は愉快だとばかりに笑った。しんのすけにそこまで深い考えはない。だが、勝手にそう考えて納得している劉備達を好ましく思ったのだ。

「ははっ、劉備殿達は素直だな。だが、それがいいのかもしれん」

「キャンキャン！」

星の言葉に賛同するように声を出すシロ。そんな彼らの一番後ろで忘れられたように佇む女性が一人。白蓮だ。劉備はしんのすけと楽しげに話していたし、関羽と張飛は星やシロと語らい始めたのだから。

そう、誰も彼女を見ていなかったのだ。まるで最初からいなかったのではないかと言わんばかりの空気感。それをヒシヒシと感じ、彼女は噛み締めるように呟いた。

「なぁ、私の影が薄い気がするんだが……」

それは誰かに告げたものだったのか。それとも自問だったのか。それは彼女にしか分からない。こうして、しばらく白蓮の城で働く事となる彼女達。しんのすけはその能天気さで次第に打ち解け、それぞれから真名を預かる事となる。

特に平和主義者の桃香とは彼女の性格などもあり、仲良く接する事が多かった。まぁ、スケベな目を向けて愛紗に怒られる事も多かったが、そんな彼女をその被害に遭わせたりしたので、しんのすけ

としては満足だった。
桃香とは共に護身のための早朝鍛錬をするようになり、それに付随して彼女を鍛えるために張り切る愛紗や鈴々などからも教えを受ける事が出来るようになった。

精神年齢が近い鈴々とは親友となり、どこか世話焼きな愛紗は母みさえのような存在として恐れながらも、しんのすけは楽しく日々を過ごす。白蓮や桃香へ茶を運んだり、鈴々とシロと共に遊んだり、愛紗と星から武術を教わったりしながら。

そんな中、ある日の全員でした雑談で、桃香はしんのすけがどうして大陸を救いたいと思ったかを知る事となった。村を襲った盗賊達。それに関する話を星が乱世の象徴として語ったのだ。
最後にはしんのすけの抱いた理想の世界を聞いて、桃香はその心に大きな衝撃を受ける。自分も抱く乱世の不条理。それを天から来た少年も感じた。にも関らず、子供のしんのすけが難しい事を抜きとはいえ救国の信念を抱いたと知ったからだ。

それは、それだけ今の大陸が乱れているという確かな証拠。子供でさえ、どうにかしなくてはいけないと思ってしまう世の中。それがどれだけおかしいかは桃香も強く理解出来たのだから。

「そっか。しんちゃんは悪い事をした人でも、反省して謝れば笑って暮らせるようにしたいんだ」

「うん。オラ、嫌なんだ。星お姉さん達が……ううん、誰かが誰かを殺さないとダメなんて正義じゃないぞ。だから、誰も殺さないでもいいようにしなきゃって、そう言ったら星お姉さん達も……今は白蓮ちゃんもきょーりゅーしてくれるって言ってくれたぞ」

「それを言うなら協力だよ。でも……うん、そうだね。誰かが誰かを殺さないといけないなんて間違ってるよね」

しんのすけの話す言葉。それを聞き桃香は言い間違いを指摘しつつ、心から頷いた。彼女が目指すもの。それこそそういう世界だと。愛紗や鈴々もしんのすけの願う世界に桃香の理想を見て、はっきりと頷いた。しかし、それに白蓮が少しだけ真剣な声で告げた。

「だがな、しんのすけ。それを無くす事は本当に難しいんだ。現に今もどこかで賊は生まれているかもしれない。なら私達は」

「白蓮ちゃん、それだからこそだよ。難しいって諦めたら何も変わらない。悪い事をする人達だって、最初からそうなりたかった人ばかりじゃないよ。こんな状況から助けてって言ってる人がいるなら、例え無理だとしても手を精一杯伸ばすべきじゃないかな。私達が一番しちゃいけないのは、現実だけを見て、理想を夢物語だって思って諦める事だと思うんだ」

「現実に囚われ過ぎず……けれど理想だけを追わず。それは確かに肝要ですが……桃香様、それは困難で険しい道です」

桃香の言葉に愛紗はそう告げた。だが、それは不安を感じているのでも、無理だと思っているものでもない。それは桃香への覚悟を問いただすものだ。自分が仕えると決めた相手へ、義姉と慕う相手へ、もう一度その決意を示して欲しい。そんな思いからの言葉。

それに桃香は迷う事無く頷いた。分かっている。そう力強く返したのだ。それでも自分はその道を歩きたいとまで言い切ったのだから。それに鈴々が嬉しそうに笑顔を見せた。

「やっぱりお姉ちゃんは強いのだ！　鈴々はそんなお姉ちゃんにつ

いてくのだ！」

「おおっ！　なら、みんなでがんばろ～！」

しんのすけはそう言うとあの高笑いを始めた。それに周囲も感化され笑い声を上げる。青空に響く複数の笑い声。それを聞きながら星はふと思う。

（悪人を正すだけではなく、それを生み出す世の中を正す、か。桃香殿のその気持ちこそ、乱世を止めるに真として必要なものかもしれないな）

心からの笑顔で笑う桃香を見つめ、星はそう考えた。桃香が持つ根底の気持ち。それは正義感と言う名の強さだろう。誰かを憎むのではなく、悪事を憎む。誰も最初から悪人だった訳ではない。だが、自分にはそれを止める力が無いからこそ支え合う。

強い誰かを頼るのではなく、全員で頼り合う。そんな助け合いの精神。桃香は弱さを強さに変えられる人だ。自分を非力と感じるからこそ、他者を求める。だが、きっと無力とは思っていないだろう。故に桃香は、自分がみんなの力を集める事を決意したのだから。

星はそう思って、小さく笑う。自分が槍を捧げるに値する相手を一人見つけたと。だが今はまだその時ではない。この広い大陸を見て回ってからでも遅くはない。そう思ったのだ。

だが、もしこの大陸を見て回った時に桃香以上の相手がいなければ、自身の槍を躊躇いなく捧げよう。そう決めて星は視線を上へ向けた。そこに広がる空に、今はいない二人の仲間の顔を浮かべて彼女は小さく告げる。

――――稟、風、私は仕えるべき相手の候補を見つけたぞ。お前達は今どうしている？

願わくば、あの二人にも桃香達と会って欲しい。もしかすれば、たいりく防衛隊の仲間となってくれるかもしれないからだ。今は少しでも多くの仲間が欲しい。そう思いながら、星はある事を思い出して苦笑する。

そう、既にしんのすけと自分は桃香達から真名を預かっていたのだ。それはつまりそれだけ親しくなっている事。愛紗などはしんのすけの母親のように世話を焼いているぐらいだ。それを思えば、もう仲間と言えない事もない。そう判断し、星は楽しげに笑う。

「意外としんのすけの御遣いとして役目は、こうして人の縁を取り持つ事かもしれんな」

言いながらそれが正解のように感じられ、星はまた一人小さく笑う。出来ればその力で全ての者達が平和的に縁を結んでいければと、そう願いながら……

やがて大陸へ大きな動きが起きる。後に黄巾の乱と呼ばれる集団決起が起きたのだ。それを受け、桃香達三人は白蓮の下を去る事を決意する。それを白蓮自身も勧めたのだ。桃香が目指す理想。それを実現するために乱世へ名乗りを上げ、戦功を立てろと。

それに感謝し、桃香達は義勇兵を募った。その結果が出る日の朝、しんのすけは城の中庭でいつものように星と一緒に鍛錬を行おうとした。だが、そこには桃香達だけでなく白蓮もいた。

彼女達はしんのすけが来た事を確認すると、桃香が鈴々を前に押し出すようにした。

「ほら、鈴々ちゃん」

「う、うん……しんのすけ、今日は鈴々と勝負なのだ！」

「お？　鈴々ちゃんと？」

突然の申し出に軽く疑問を浮かべるしんのすけ。すると、愛紗は星の前へ歩み出た。それだけで星は何かを理解し、小さく笑みを浮かべて一歩前に出る。

「私の相手はお前か、愛紗」

「ああ。これでしばらく出来なくなるだろうからな」

互いに笑みを見せ合ったのはそこまで。そこからは武人の顔となり、無言で見つめ合う。桃香も白蓮の前に立ち、真剣な眼差しで告げる。

「白蓮ちゃんは私の相手をお願い」

「だと思ったよ。いいさ。本気で行くからな」

同門の者として、二人は頷き合って歩き出す。星と愛紗も同じように動き出す。しんのすけと鈴々だけがそこに残された。しんのすけは四人を見送り、その雰囲気から何か今日は違うと感じ取っていた。

故にそれを聞き出そうと思い、鈴々へ視線を向けた。だが、それを尋ねる事は出来なかった。鈴々の表情はどこか悲しそうだったのだ。その原因が分からず、困惑するしんのすけ。そんな彼へ鈴々は無言で構える。そして、小さく息を吸い込み、告げた。

「しんのすけ、これが鈴々からの餞別なのだ」

「え？　せんべい？」

「行くぞっ！　なのだ！」

蛇矛がしんのすけへ突き出される。それを上体をそらす事で避けるしんのすけ。それに鈴々は若干驚きを見せるも、嬉しそうに頷いて攻撃を続ける。しんのすけはそれらを避け続ける。だが、徐々に押し込まれるように後ろへと下がり始めた。

鈴々は本気を出していない。だが、ある意味で本気だ。それは倒すという気持ちではなく、しんのすけへの惜別の思いを込めているから。今日、桃香達はこの城を出る。その後は、おそらくしんのすけと再会する事は難しいと、鈴々は感じている。

だから、この時間が最後になるかもしれない。そんな思いが鈴々を突き動かしていた。蛇矛を動かしながらも、脳裏にしんのすけとの日々が思い出される。初めて遊んだ時、色々な天の遊びを教えてくれた事。初めてのアクション仮面ごっこで自分に主役をやらせてくれた時、後から聞いたら、しんのすけはその主役が大好きだと知った。なので、どうして自分へと尋ねた際、まずは楽しさを知ってもらいたかったと告げられた事。

昼食を共にし、他愛もないシロの仕草を見て二人で笑ったり、休みが重なった時は二人で庭で疲れ果てるまで遊び、汚れた互いの顔を見て笑い合った事。思い出せば、この短期間でもしんのすけとの

多くの思い出が鈴々の中にはある。

（しんのすけと別れるのは嫌だ！　でも、そのせいでしんのすけの帰りを遅くするのはもっと嫌なのだ！）

蛇矛を振りながら、鈴々はどんどん視界が滲んでいくのを悟り、片手で目元を慌てて拭う。だが、それでも滲みは酷くなる一方だった。その度に手で拭う。拭う。拭う。それでも止まらない。涙はまるで堰を切ったダムのように止めどなく流れ出す。

いつしか鈴々は足を止め、両手で目元を拭っていた。蛇矛は地面に転がり、足元にはいくつもの水滴が落ちている。嗚咽を漏らし、しゃくり上げる鈴々。そこへしんのすけが静かに近付き、鈴々に対して軽く首を傾げて問いかけた。

「鈴々ちゃん、どうして泣いてるの？　どこか痛いの？」

「ヒック……痛く、なんか、ない、のだ」

「そっか。鈴々ちゃんはオラよりも強いもんね。そんな事じゃ泣かないか」

そのしんのすけの言葉に鈴々は完全に堪え切れなくなった。自分は強くない。しばし別れるだけで泣いているのだ。しんのすけは家族達と知らない間に別れているにも関らず、今はこうして笑っている。それを思い、鈴々は大声で泣いた。

強くなんかないと。別れたくなんかないと。そう涙混じりの大声で叫ぶ鈴々。それに星達も手を止め、視線を向けた。そこには、燕人張飛はいなかった。親友との別れを嫌がる一人の少女がいるだけだった。

「鈴々……」

「星よ、あの気持ちは私も同じだ。鈴々は我らの代わりに泣いてくれている」

「……そういう割には、目が潤んでおるぞ？」

「う、うるさいっ！　こういう時は分かっていても言わぬものだろう！」

星の返しに愛紗はそう言い返すと顔を背けた。その顔は耳まで真っ赤だ。しかし、その星の言葉が自分を気遣ってのものと理解し、愛紗は内心で礼を述べる。軽くからかう事で泣き顔を見せずに済むようにと。そう思って星が言葉をかけてくれたのだから。

愛紗もしんのすけの事を弟のように思っていた。色々とからかいや悪戯もされたが、それでも憎めず、微笑ましく思う時さえあった。鍛錬も思った以上に励み、その成長を感じる度に強い喜びを覚えたものだ。時折、星から冗談交じりに母親のようだと言われるぐらい、愛紗は世話を焼いたのだから。

一方、桃香と白蓮は二人と違い、完全にもらい泣きしていた。そう、今日別れる桃香だけでなく、白蓮もどこかで知っている。いつかしんのすけと星が自分から離れていくと。だからこそ、いつか来るだろう別れを考えまいと、白蓮は首を左右に振った。

そんな白蓮の横で桃香は涙を流しながら、改めて決意を固めていた。彼女は、しんのすけから希望を見つけたのだ。辛い現実を見ても挫けず、それを変えていこうと強く思い続ける心。それがあれば、人はどんな時でも笑い、誰かを笑顔にする事が出来るのだと。

自分はそれを胸に生きていこう。辛い現実に屈する事無く、誰か

の笑顔を守る事が出来るように。決して理想だけを追いかけるのではなく、まずは自分に出来る事を少しずつしていく事で現実を良くしていきながら。

（私は……もう迷わない。この大陸を誰もが笑顔で暮らせるようにする。偽善でいい。私は私に出来る事を一生懸命やろう！）

手にする靖王伝家を握り締め、桃香は小さく頷く。力を振るわずに誰かを助ける事が出来ないのなら、それを躊躇いなく振ろう。だが、その前に言葉を尽くして止める事が出来るならそうしたい。

武器を振り降ろす前に事態を収拾出来るのなら、それが一番なのだ。そう思いながら、桃香は目の前の光景を眺めた。未だに鈴々は泣き続けている。それに桃香は再び涙が流れるのを感じた。

「ぐすっ……鈴々ちゃん、泣いちゃ駄目だよぉ」

「桃香ぁ、言いながらお前もまだ泣いてるぞ」

「白蓮ちゃんだって……」

「うるさいな。私はああいうのに弱いんだ……」

二人の視線の先では、しんのすけが泣き止まぬ鈴々を心配して、汗拭きようにと持ってきた手拭いを無言で手渡していた。その行動を指して白蓮はそう言ったのだ。桃香もそれに納得し、小さく微笑む。そう感じる心がいつかきっと乱世を終わらせる力になる。そう信じて……

「すごいですな……」

「キャン！」

「こんなに集まるのかよ……やっぱり許可するんじゃなかった」

「おー、人がたくさんいるぞ！　ねぇねぇ、お祭りか何か？」

城壁の上から城門前を見つめているしんのすけ達。ちなみにしんのすけは見えないと言ったため、星が持ち上げている。シロはそんなしんのすけの腕の中だ。一方、義勇兵を募った桃香達も予想以上の数に驚きを隠せなかった。

「うわ～、凄いねぇ……」

「よもやこれ程とは……」

「にゃ～、たくさんなのだ」

桃香達としては、精々三千いけば良い方だと思っていたのだが、それを楽に超えるとなれば驚きもする。その原因は、白蓮の下で将をしていた愛紗と鈴々の武勇を聞き及んだ者達がこぞって参加したからだ。

そのため、これだけの者達がいる。白蓮が募ってもここまでは集まらないだろう。やはり名を上げている者がいるだけで、これ程の差が出るのだ。白蓮はそう思い知ったのか、ため息を吐いて桃香達へ近付いた。

そして、約束通りに鎧など一式を用意すると告げた。それに桃香達も戸惑うも、白蓮が苦笑しながら告げた言葉に有難く甘える事にした。

――――いいさ、あれが全部平和のための力になると思えば。

それにしんのすけを除く全員が苦笑した。すると、しんのすけが星に何かを言って、自分を下ろしてもらう。そして、桃香達の元へ近付き、シロを下ろして手を差し出した。それに桃香達が疑問符を浮かべる。

しかし、星だけはそれで全てを悟った。なので、しんのすけの隣へ歩き、同じように手を差し出して、その手に重ねた。それに桃香達が益々疑問を強める。

「ね、桃香ちゃん」

「何？」

しんのすけの声に視線を動かす桃香。すると、星も彼女の傍へと歩み寄っていた。

「これで我々はしばらく会えなくなるでしょう」

「だから、オラ達とお約束しよ」

そんな二人の言葉に白蓮は合点がいったとばかりに手を打って、微笑みながら桃香達へ近付いて告げた。

「大陸防衛隊の誓いだろうさ」

「キャンキャン」

白蓮の声に反応したのか、シロはそう肯定するような声を出す。
それに桃香達は笑顔を見せ、しんのすけ達と共に城壁の上で手を重ね合わせた。これが最後にならないようにと、そう心から願って。

「じゃ……お願いね、しんちゃん！」

「天の言葉による誓いか……些か慣れん言葉だが」

「鈴々は無問題なのだ！」

星の口から説明された内容を聞いて、思い思いに笑みを浮かべる桃香達。笑顔の桃香。苦笑の愛紗。元気な鈴々。表情は違えども、根底の気持ちは同じだ。
志を同じくする者がいるという嬉しさ。それだけで心が強くなれるのだから。しんのすけはそんな三人の言葉に力一杯頷き、大きく息を吸い込んだ。

――たいりく防衛隊、ファイヤ～ッ！

――ふぁいや～っ！

――キャンキャ～ンッ！

そして、幽州の空に彼らの声が響き渡る。この日の誓いを決して忘れないとばかりに。天まで届けとばかりの大声で。絆は消えない。そう宣言するかのように。
これがしんのすけと桃園の三姉妹との出会いと別れ。これがこの乱世を止める力の一つとなり、本来あるべき流れを大きく変える一

つの要因となるのだが、それはまだ先の話……

ーーー

第五話

大陸で猛威を振るう黄巾賊だったが、曹操などの有力諸侯が本格的に動き出したのを契機にその勢力は歯止めがかかった。更に飛将軍呂布が一人で三万もの軍勢を蹴散らすという快挙を成し遂げ、その勢いに翳りさえ生じる始末。

そんな中、桃香達は徐々にではあるが名を上げていた。愛紗や鈴々の武勇は一騎当千と知れ渡っていく。それと同時に聞こえる名があった。孫呉である。彼らも袁術の客将でありながら、その主人よりも有名になる程の戦振りを示したのだ。

こうして大陸に新たな時代の風が吹き始めた中、しんのすけの周囲もまた動きが起きようとしていた。

「わ～っ、はっはっはっは！」

「お～っ、ほっほっほっほ！」

大空へと響く二つの高笑い。それに項垂れる白蓮と顔良。一方、星と文醜はどこか呆れ顔だ。ここは白蓮と袁紹の領地境。黄巾賊の討伐をしていた白蓮達だったが、それを元々追っていた袁紹達がそこへ現れたのだ。

そして、現状となった。しんのすけが勝利の高笑いを始めると、負けるものかと袁紹が対抗したのだ。実に一分以上も高笑いをしている二人に、周囲の反応がそうなるのも無理はなかった。

「なぁ、斗詩。麗羽の奴、イキイキしてるな」

「ですねぇ。あの子、麗羽様と気が合うのかもしれません」

疲れた声で話す苦労性の二人。その視線を上げて見つめるは、満足そうにしているしんのすけと袁紹だ。今は互いに高笑いについて褒め合っている。そんな光景に再びため息を吐きながら項垂れる二人。

一方、星は文醜と二人で呑気に世間話をしていた。しんのすけと袁紹。その二人の事をよく理解している彼女達は、もう既に眼前の光景から意識を逸らしていたのだ。

「そうか。文醜殿も色々と大変ですな」

「まぁな。でも、斗詩がいるから平気だぜ」

「ふむ、であれば顔良殿が一番苦労していそうだな」

「あー、それは間違いない。何せ麗羽様のわがままって、大抵斗詩へ向けられるからさ」

互いに笑みさえ浮かべながら話す二人。まるで周囲の事などお構いなしだ。それに白蓮と顔良が恨みがましい目を送るも、それに気付かぬ振りをして星と文醜は話し続けるのだから大したものだ。

この後、袁紹達はしんのすけと星を気に入ったのか、一度訪ねに来いと言い残して戻って行った。それを手を振って見送るしんのすけ。一方、星はそれをキッカケにある決意を固めるのだった……

それから少しして、黄巾の乱は終結した。首魁張角は曹操軍によ

って討ち取られ、大陸に一時の平穏が戻ってきたのだ。それを待っていたとばかりに星は白蓮へ職を辞する事を告げた。

その理由は再び大陸中を見聞したいため。白蓮はついにこの時が来たかと思い、星を強く引き止める事はしなかった。その事に星は感謝し、しんのすけとシロを連れて翌日城を出た。

その見送りに来た白蓮へ、しんのすけは一つの竹簡を渡した。それは、彼が白蓮への気持ちを書いた物。慣れぬ漢字を苦労しながらも書き、したためた物だ。

そんな彼の背には一本の木刀がある。鍛錬用として白蓮が用意してくれた物だ。しんのすけが竹刀をイメージして意見を出し、それを職人が出来る限り再現した一振りで白蓮からの贈り物である。

「これ、白蓮ちゃんにあげるぞ」

「竹簡？　ああ、昨日くれと言ってきたから渡した奴か」

「白蓮殿、それは寝る前に読む事ですな。私も少し感じ入るものがありましたので」

どこか不思議そうな白蓮へ星はそう告げて不敵に笑う。それにどこか嫌そうな顔をするも、白蓮はこんなやり取りも今日で最後かもしれないと思ったのか、特に何か言う事は無かった。

だが、シロの事を抱き上げてその温もりを忘れまいとしたり、しんのすけの頭を軽く撫でながら体の心配をしたりと彼女なりに別れを惜しんでいた。星へは良い主君と出会えるといいなと告げ、苦笑されたのが白蓮らしいと言えた。

「じゃ、そうゆーことで」

「キャンキャン」

「短い間でしたがお世話になりましたな」

「気にしなくていいさ。しんのすけ、シロ、星……元気でな。またいつでも来いよ」

互いに笑顔で別れるしんのすけ達。見送る方も見送られる方にも悲しみは強くないように見えた。遠ざかるしんのすけ達を白蓮はずっと見送った。その姿が見えなくなるまで、その場で見つめ続けた。

やがて完全に見えなくなったのを確認し、白蓮は静かに城へと足を向ける。その背中にはどこか哀愁さえあった。客将でありながら自分を密かに支えてくれた星。執務で疲れた時にそっと癒してくれたシロ。そして、子供らしい振る舞いと時に見せるそれらしくない行動で自分を振り回したしんのすけ。

そんな彼らとの日々は、白蓮にとって中々忘れる事の出来ないものだった。それをもう一度噛み締め、白蓮は足を止めて振り返る。そこには当然誰もいない。それに軽い喪失感を覚え、白蓮は思わず呟いた。

――凄いもんだな。たった二人と一匹いなくなっただけで、こんなにも寂しくなるんだ……

そう思って白蓮は再び歩き出す。彼らの存在感を改めて感じ、どこか感心したように思いながら白蓮は行く。心なしかその歩みは少しだけ遅かった。この日、白蓮は執務室を一歩も出なかった。

昼食も夕食も執務室で取った。それは、廊下に出たくなかったから。そこから見える中庭にはしんのすけとシロとの思い出が沢山ある。それだけではない。星も含めてした他愛ない雑談なども思い出

すのだ。

桃香達がいなくなった事。しんのすけ達がいなくなった事。自分の元から居て欲しい者達がいなくなる。そう思い、白蓮はやや自分の人望の無さにため息を吐いた。しかし、きっとそれが原因ではないと理解もした。

（あいつらは私を主君として最初から見てなかった。でも、私を太守ではなく白蓮として見てくれた。だから気にするだけ無駄だな。また会う事があれば笑顔で会えるさ）

そんな風に自分を励まし、白蓮はその日の仕事を終えた。だがその夜、白蓮はしんのすけからの竹簡を読んで声を失う。そこには辛うじて読める字でこう書いてあった。〝謝々　再見〟と。

それは感謝と再会を願うもの。汚い字で何とか読めるぐらいのそれ。しかも少し間違えたのだろうが、それをそのまま強引に書き終えたその文字を見て、白蓮はしばし呆然となっていた。

しかし、白蓮は徐々に視界を滲ませながら笑い出した。嬉しくもあり悲しくもあるような笑いだ。理由は複雑なのだろうが、強いて一つを挙げればこれに尽きる。それは彼女の竹簡を見つめての呟き。

――ったく、間違えたのなら書き直せよな。ま、確かにあいつらしいか。

しんのすけらしさをそこに見たからだ。出来る限り丁寧に書こうとして、逆に力を入れすぎて失敗したのだろう。そう判断し、白蓮は目元を拭いながら竹簡を大事に抱きしめる。次に会った時は色々と言う事が出来たと思って。

ふと窓へと視線を動かす白蓮。そこから見えるは綺麗な星空。き

っとこの空の下で、あの少年は大いびきをかいているのだろう。そう考えて、白蓮は愛おしさを込めて小さく告げる。

――しんのすけ、私も同じ気持ちだからな。でも、これはないだろ。今度は、機会があれば勉強させてやるから覚悟してろよ。

そう言い終わると、白蓮は楽しそうに笑う。それを聞いて嫌そうな顔をするしんのすけの顔を思い浮かべたのだ。そして、その口が音を発する事なく動く。謝々、再見と……

それから少し時間が経ち、南皮にある袁紹の城へしんのすけ達は来ていた。あの誘いに応えるためだ。念のため、白蓮の書いた書状を門番へ手渡し待つ事少し。案内を受けて通された部屋でしんのすけ達は袁紹達と再会した。

初めて見るシロの姿に顔良が喜び、嬉しそうにその頭を撫でる横で星と一度手合わせをしたいと告げる文醜。そんな親しみを増している二人とは違い、真剣な表情で互いを見つめるしんのすけと袁紹がいた。

「では……いきますわよっ！」

「ほいっ！」

まるで試合でもするかのような雰囲気だが、本人達にとってはそうなのだ。二人は一度大きく息を吸い……同時に構えた。

「わっはっはっは！」

「おっほっほっほ！」

「わ～っ、はっはっは！」

「お～っ、ほっほっほ！」

満面の笑みで高笑いを上げる二人。それに全員が呆気に取られた後、苦笑する。そう、これはあの時の再戦と理解したのだ。シロは初めて見る光景だったが、袁紹からしんのすけと似た匂いを感じたのか、星達と同じ気持ちでそれを眺めていた。

そんな四対の視線を受けながら、二人は楽しそうに笑う。自由奔放を地でいくしんのすけと袁紹。故に互いは理解しているのだ。自分達は似た者同士だと。だが、それを頭ではなく感覚で察している辺りが彼ららしさだろう。

（やっぱりよいしょーさんはスゴイぞ。オラも負けないようにしよっと）

（やりますわね、しんのすけさんは。子供ながら大したものですわ）

互いに相手へにやりと笑い――いや、しんのすけはヘラヘラという感じだったが――その高笑いを称える二人。ちなみによいしょーさんとはしんのすけが袁紹との名前を聞いた響きからつけたものだ。

そんな二人の様子を眺め、顔良がシロへ小さく問いかけた。

「ね、シロちゃん。しんちゃんっていつもああなの？」

「……キャン」

「ふふっ、確かにそうだな」

「あはは、何だよ。やっぱりあいつも麗羽様と同じか」

認めたくないがその通り。そんな声を返すシロに顔良だけではなく星と文醜も笑った。本当ならば袁家の家長である袁紹相手に、しんのすけのような振る舞いは許されないのだろう。だが、そんな事を気にする袁紹ではない。

いや、今は気にしていないだろうか。子供と接する事自体彼女にとっては初体験に近い。親戚である袁術も確かに子供に近いだろうが、一応彼女は普通の子供とは違うのだから。

正直に言えばしんのすけも普通とは言い難い。だが、礼儀を知らないという点では子供だ。だが、それを一々気にする程袁紹は小物ではない。悪く言えば神経が細くない。こうして二人は互いがむせるまで高笑いを続け、星達を大いに呆れさせる。

その後、まだ仕事が残る袁紹達と一旦別れ、しんのすけ達は客室へと案内された。星は早速稟達と連絡が取れるかやまだここに滞在しているかを調べるために街へと向かった。しんのすけはそれを見送り、シロと二人で遊ぶ事に。

「じゃ、オラがつまづいて転んだ時に頭打って死んだ人やるから、シロは道草食べて食あたりして死んだ犬ね」

「クゥ～ン……」

選ばれた遊びは彼の十八番とも言える”死体ごっこ”だ。それに

不満そうな声を出すシロだったが、それをしんのすけは当然のように勝手な解釈をする。

「え～、もっとマシな理由がいいの？　んもぅ、ワガママだぞ」

「キャンキャン！」

しんのすけの言葉に「違う。そうじゃない」とばかりに声を出すシロ。だが、当然そんな声は届かず、彼の死因は散歩していたら飛んできたボールに当たって死んだ犬に変更された。

正直、まだ最初の方が現実味があるとシロは思ったが、もう何を言っても無駄と思ったのかそのまま廊下へ伏せる。それを見てしんのすけも廊下へ伏せた。そのままぴくりともしなくなる両者。見事な死体役が出来上がった瞬間だ。

やがて、そこへ仕事を終えた文醜が現れた。暇潰しがてらしんのすけと遊ぼうと考えたのだろう。だが、そんな陽気に歩いていた彼女が見たものは、廊下でうつ伏せに倒れるしんのすけとシロの姿だった。

「なっ？！」

即座に周囲へ警戒心を示す文醜。賊が侵入したのかもしれない。そう考えたのだ。袁家も敵がいない訳ではない。そのため、彼女は少しずつ少しずつしんのすけ達へ近付いていく。

息はある事を感じ取り、死んではいないと安堵する文醜。真剣な表情のままで倒れているしんのすけへ軽く蹴りを当て、意識を取り戻させようとする文醜だったが、当然彼は起きる事はない。

それにやや焦りを感じる文醜。彼女の中では賊が侵入した事にな

っている。つまり相手の事を少しでもしんのすけから聞き出したいのだ。故に内心で謝りを入れながら、文醜は強めに蹴りを入れた。さすがにそれにはしんのすけも堪らず声を上げて怒りをあらわにした。

「ちょっと！　痛いぞっ！」

「悪い。で、しんのすけ。刺客はどんな奴だ？」

「しかく？　……おおっ！　四角ね。こんなのだよ」

しんのすけはそう言って指で四角形を作って文醜へ見せた。それに文醜は突っ込む事無く頷いた。刺客の顔がそういう顔だと受け取ったのだ。そこから詳しい事を尋ねていく文醜。服装や武器などだ。それに対し、文醜が聞いているのは四角の事だと思っているしんのすけは、服はないと返し、武器もないと告げた。

それに戦慄する文醜と何故そんな事を聞くのだろうと不思議に思うしんのすけ。そこへ袁紹の執務手伝いから解放された顔良が姿を見せる。彼女は疲れをシロで癒そうと考えたのだ。

「お、がんちゃんだ。ほっほーい」

その姿を見たしんのすけは、どこか嬉しそうに手を振って呼びかけた。そんな言葉に顔良は苦笑しつつ手を振り返す。そこが律儀な彼女らしい。

「くすっ、元気だね、しんちゃんは。あ、文ちゃんもいるんだ」

「斗詩っ！　賊がいるから気をつけろ！」

そんな呑気な彼女へ、文醜が鋭い声で警戒をするよう呼びかけるのは当然と言えた。顔良はその言葉に驚きを見せて周囲の気配を探る。だが、一向にそれらしいものは感じない。

「ね、文ちゃん。気配感じる？」

「それがさっぱりだ。腕の立つ奴だろうから気ぃ抜くなよ、斗詩」

額から汗さえ滲ませて答える文醜。そんな彼女とは違い、顔良はどこか疑問符を浮かべながら小首を傾げた。武将である顔良と文醜。そんな二人が揃って気配を微塵も感じない事などあるのだろうか。

そう思って顔良はどうして賊が侵入したと文醜が理解したのかを問い質す。そこから出た言葉に彼女は一つの可能性を見い出した。そう、もし賊が侵入したとすれば始末した死体を放置するはずはない。それに、子供相手とはいえ加減などするはずもないのだ。

（これ……もしかして文ちゃんの早とちり？）

そう思うもまだ口には出さない顔良。そして警戒心を表情に出す文醜と横目に、彼女はしんのすけへ問いかけた。それは、どうしてここでシロと一緒に倒れていたのかと言うもの。それに文醜は意味がないと言おうとして、その耳を疑った。

――死体ごっこしてたんだぞ。オラの好きな遊びの一つなんだ。

目を点にする文醜と安堵と呆れの息を吐く顔良。そこでシロがゆっくりと起き上がった。彼は彼なりに空気を読んで今まで伏せていたらしい。顔良はそのままそこでしんのすけへ説教を始める。

紛らわしい事しないように。そして、あまり周囲に心配をさせな

いようにと厳命したのだ。それにいつもの調子で返事を返すしんのすけを見て、内心苦笑する顔良。彼がまったく反省もしていないし、堪えてさえいないと気付いたのだ。

文醜はしんのすけへ言葉ではなく、軽く小突く事で説教に変えた。だが、そんな彼女へ顔良は少し苦い顔で確認を怠ったからだと指摘する。それに痛い所を突かれたのか、文醜は小さく呻くと顔を背けるように拗ねたのだった。

「とにかく、今回の死体ごっこだっけ？　それはこれでおしまい。代わりにしんちゃんにお願いがあるんだ。白蓮様のところにいた時の話をしてくれないかな？」

「お、それあたいも聞きたい」

「ほ～ほ～。では、立ち話もなんですから中へどうぞ」

「キャンキャン」

案内するように歩き出すしんのすけとシロ。そんなしんのすけの言い方に小さく苦笑する二人。それが玄関先で会話している庶民を想像させたからだろうか。どこか楽しげな笑みを浮かべていた二人を眺め、シロは静かに頷く。

あの最初の三人組以降、出会う者達はみな良い者達ばかりだと改めて実感していたのだ。これなら無事に帰れるかもしれない。そんな事を思いながらシロはしんのすけの横を歩く。

そして、そのまま客室へと入ろうとする二人だったが、そこでしんのすけが更に告げた言葉には素直に笑った。

――せまいところだけどかんべんしてね。

まるで自分の家のような言い方なだけではない。その内容が軽く客室への不満に感じられたのだ。勿論二人はしんのすけがそれを心から思っていると考えていない。だが、子供がそんな事を言った事が面白かった。

その後、二人はしんのすけから白蓮や桃香達との思い出話を聞く。しんのすけ達があの黄巾の乱で名を上げた桃香達と親しい事を知り、意外そうな反応を見せる顔良と文醜。

特に一騎当千と名高い愛紗と星が同等と聞いて、試合が楽しみだと文醜が笑う。顔良はそんな彼女に苦笑しながら、怪我をしないようにと注意をしていた。それに嬉しくなった文醜が顔良へじゃれるように抱きついたのは、最早お約束みたいなものだろう。

「えへへ、斗詩が心配してくれるなら気をつけないとな～」

「ちょ、ちょっと文ちゃん！　しんちゃんがいるからっ！　いるからっ！」

手が妙な位置へ動いているのを悟り、顔良は慌ててそれを止める。そんな様子を眺め、しんのすけはシロへ尋ねた。自分がいるから何なのだろうと。それにシロはやや困った反応を返すのだった……

夕方になり、しんのすけ達は袁紹達と共に夕食を食べていた。場所は街で一番の高級店。支払いは当然だが袁紹持ち。だから星もこ

の店で食事をしているのだ。星と明日試合をする約束を取り付け、満足そうな文醜。そんな彼女を見て微笑みを浮かべる星とシロ。

一方、袁紹と顔良はしんのすけから家族の話を聞いていた。ひろしとみさえの喧嘩の様子を物真似しながら語るしんのすけに、二人は笑い声を上げていたのだ。

「あなた、この口紅は何？　違うんだみさえ。これはせったいでしかたなく……。キィ～！　この浮気モノ～っ！　……で、父ちゃんが母ちゃんにごめんなさいする」

身振り手振りを交えての熱演に楽しげな声を上げる袁紹と顔良。実に分かり易い力関係だと思ったのだ。この世界は基本女性が強い。それでも庶民の暮らしまでそうではないのだが、しんのすけの家庭は完全にカカア天下だと理解出来たからだ。

「ふふっ、しんちゃんの家はお母さんが一番強いんだね」

「庶民の生活は話に聞いた事がありますけど、しんのすけさんの家は楽しいようですわね」

笑顔で口々に意見を述べる二人。生まれが名家の袁紹は未知の世界にやや意外そうな反応を。顔良は自分と比べているのかどこか懐かしそうだ。

「うん、オラの家は楽しいぞ。いつかよいしょーさん達も遊びに来るといいよ」

「ですからっ！　よいしょーではなく袁紹ですわ！」

「……すっかりその突っ込みが板につきましたね、姫」

しんのすけの呼びかけに即座に反応する袁紹。それを聞いて苦笑するように呟く顔良。そう、もうこのやり取りを何度見た事か。あの後、しんのすけが袁紹の事をそう呼んでいると知った顔良は、何とかそれを訂正させようとしたのだが、結局断念。

見事袁紹へ直接その呼び方を使って今のような指摘をされたのだ。しかし、しんのすけがその程度で直るはずもなく、何度も何度もよいしょーさんと呼び続けているのだ。

しまいには、袁紹から覚え難いなら無理に名前を呼ばずともいいとまで言われたのだから、それがどれだけ根強いかは分かるだろう。白蓮さえ真名を預けるまでひたすら残念さんと呼ばれたのだ。

そんな賑やかな時間。星と文醜はすっかり酒盛りの様相を呈し、シロは顔良とそれを横目に楽しく食事をしている。袁紹はしんのすけから更なる話を聞いていた。彼は、既に家族ではなく幼稚園の友人達の事を語っていたのだ。

「アイちゃん言ってた。いつも誰かいるからうっとーしーって」

「傍付きが常にいるのは確かにそうですわね。私も同じですからその気持ちは分かりますわ」

それも袁紹と似ている酢乙女あいの事を話していた。彼女も自分と共通点があるからだろう。何度も頷いては、同意するような言葉を返していたのだ。今も常に護衛がいる事へ不満を述べている。

しかし、袁紹はそう言いながらも寂しがりやな部分もある。なので、一人となってもしばらくすると必ず誰かを呼びつけるのだ。ワガママで自分勝手。だが、根は素直で優しい袁紹。だからこそ、文醜も顔良も傍にいるのだ。

「それにしても、時折妙な言葉を使いますわね。しんのすけさん、今の話で出て来たすべりだいとは何ですの？」

「えっと……オラの住んでるところにある遊ぶ道具だぞ。上からほっほ～いってすべるの」

「……まぁいいですわ。そういう物がある事だけは分かりました。で、他にはどんな話がありますの？」

しんのすけの要領の得ない説明にやや苦笑しながら、袁紹は次の話を催促する。だが、どこかで彼女は疑問を抱いていた。しんのすけが使う聞きなれない言葉。それは本当にこの大陸にある物なのだろうかと。

しかし、何故そう自分が考えるのか分からず、袁紹は内心小首を傾げつつしんのすけの話へ耳を傾けるのだった。それがある推測を導き出す事になると知らぬままに……

翌朝、訓練場にしんのすけ達の姿があった。袁紹は顔良が持ってきた椅子に腰掛け、しんのすけとシロはその横で地面に座り、顔良は星と文醜の間に立ち、審判をしている。そう、これは二人の試合なのだ。

二人の手には、それぞれの得物が握られている。当然だが、それは下手をすれば相手を殺しかねない物だ。それでも、両者に恐怖も不安もない。自分を信じるように、相手の事もまた信じてるのだ。

「しんのすけが言うには、かなり強いらしいけど……あたいも負けねえぞ」

「それは楽しみですな。では……ここより言葉は不要っ！」

「おうっ！」

互いに得物を構え、相手を睨む。それを見て顔良が告げた。

「試合、開始っ！」

「おりゃ！」

「何のっ！」

文醜の大剣をかわしつつ、突きを返す星。それを文醜は手にした大剣を動かす事で受ける。剣であり盾。そんな使い方も出来るのが、文醜の所持する斬山刀だ。星はそんな文醜の防ぎ方に、少し感心したような表情を見せる。

ただ考えも無しに大剣を使っている訳ではないと理解したのだ。そして、自分が思っているよりも文醜は強いとも。まだ自分も見る目がないと思いながら、星は一旦距離を取る。そうはさせじと文醜が星に迫る。

大剣と槍では、圧倒的に槍の方が有利だ。大剣は大勢を相手にするには有効だが、一対一には向いてないと言わざるを得ない。そう、小回りが利かないのが大きな欠点。自分よりも実力が劣る相手ならばいい。だが、それが自分よりも動きが速い相手となると途端に不利になる。

だが、それでも文醜は大剣を使う事を止めない。自分が自信を持

って使える武器。それがこの斬山刀だったのだから。不利も何も関係ない。強い相手に通用しないとしても、その事実を捻じ伏せてでも通用させようとするのが文醜だ。

「文ちゃん、頑張れっ！」

「キャンキャンッ！」

「何をやってますの、猪々子さん！　早く倒しておしまいなさいっ！」

「星お姉さんも、ぶんちゃんもガンバレ～！」

それぞれに声援を送るしんのすけ達。その声を受けながら、互いの力量を正しく測っている両者。その表情は対照的だ。やや焦り気味の文醜と意外そうな星。互いに事前に思っていた以上の強さを感じているからこその表情だ。

（くそぉ、やっぱ速いな……でも、諦めねぇぞ！）

（猪突猛進だな。だが、荒削りながらも何かしらの輝きがある。文醜殿もまた才の持ち主か……）

星は文醜の戦い方をそう分析し、小さく頷くと反撃に出た。相手に合わせる事無く槍の利点を使った戦法で。連続して放たれる神速の突き。それを文醜は時に大剣で受け、時にかわす。だが、そこから攻撃する事が中々出来ないでいた。

間合いで言えば互角に近いが、攻撃速度で言えば槍。大剣が有利なのはその威力と頑丈さだけだ。文醜もそれは分かっている。それでも、この戦いを挑まずにはいられなかった。武人である以上、他

者から己よりも強いと言われた相手を倒したいと思わぬはずがない。

（しんのすけ、見てろ！　あたいだって強いんだかんな！）

昨日、ほんの出来心で文醜がしんのすけへ尋ねた事がある。それは、自分と星はどちらが強いとの問いかけ。それにしんのすけは迷う事無く星と告げたのだ。それを思い出し、文醜は絶対に惨めな負け方だけは出来ないと気を引き締め直す。

そう、防戦一方になりながらも文醜は勝ちを諦めていなかった。星の方が自分よりも実力が上なのは、悔しいが文醜も理解した。それれでも、良い所無しで終わる訳にはいかない。そんな武人としての誇りがあった。

仮に勝つ事が出来ないでも、相手に一矢報いてやる。そう、目に物見せてやるとの思いが文醜を動かしていた。格上の相手と認める事が出来る星。それが自分と戦ってくれた事に対する礼と喜びを込めて、文醜は自身の全てを出し切ろうとしていた。

「行くぞぉぉぉっ！！」

「っ？！」

文醜の動きに星の表情が変わる。そして、それを見ていたしんのすけ達も同じように。

「「「えっ！？」」」

そう、文醜は星の繰り出す突きを敢えて体に受けた。脇腹を狙った突きだったが、それは際どく致命傷を避けている。真剣勝負の試合とは言え、まさか自分から一歩間違えれば死ぬ真似はしないだろ

う。そうどこかで考えていた星は、そんな文醜の行動に一瞬ではあるが動揺してしまった。

「しまった！？」

「うおぉぉおっ！」

その隙を見逃す程、文醜は凡将ではない。痛む体が上げる悲鳴を無理矢理捻じ伏せ、手にした大剣を星へ突き出す。星はそれを回避しようとするも、ある事を悟ったため動かず立ち止まった。

星の腹部へ当たる直前で停止する大剣。祈るように顔を伏せている文醜。大剣を見つめ無表情の星。静まり返る訓練場。袁紹でさえ、声を発しない。誰もがその光景に言葉を失っていた。

「……お見事」

そんな静寂を破るように、星がどこか悔しそうだが嬉しそうな声を出す。それに文醜がはっとして顔を上げた。

「趙雲……でも、今のはっ！」

「確かに試合としては些か考え無しの行動かもしれんが、今のが戦場ならば文醜殿が正しい。己が命を賭け、相手を倒そうとするその執念。この趙子龍、感心致した」

文醜の言いたい事を察し、星はそう遮って告げた。試合であれば、死んでしまうかもしれない行動はするべきではない。だが、これを戦場での一騎討ちと考えれば、文醜の行動は理解も納得も出来る。

星はそう思ったのだ。そして己の慢心にも気付いた。試合だからと、どこかで心構えが緩んでいた。試合であろうと何が起きるか分

からない。何事にも動じない心。それを常に心掛けなければいけない。そう改めて思わされた。だから、あの時動かなかった。自分の弛んだ気持ちを気付かせてもらえたと思った故に。

一方、文醜もまた気付いた。星が最後に敢えて避けなかった事に。それは情けなどではないと分かっている。そうならば、星の出した声に悔しさなどあるはずがない。つまり、自分の行動に星が動きを止める何かしらの理由があった。

そう考え、文醜は痛む脇腹に目をやった。そこからは血が滲み出し、服を汚している。重傷ではないが、掠り傷で片付けるには少々問題がありそうだ。すると、そこへ顔良が血相を変えて慌てて走り込んで来た。

「ぶ、文ちゃん、大丈夫!?」

「おう。って、言いたいけど……ちょっと辛いかも」

「すぐ手当てをした方がいいだろう。それと、顔良殿は念のために医者を。私は文醜殿を部屋まで連れて行こう」

「お願いします!」

星の言葉に頷き、顔良は急いで走り去って行く。それを見送りながら、星は文醜へ肩を貸す。

「わりぃ」

「気にするな。それに、これは当然の事だ。まぁ、悪いと思うのだったら……後で美味い酒でも買ってもらおう」

文醜の詫びる声に星は普段の口調で答える。それに文醜が一瞬呆気に取られ、笑い出す。だが、笑うと傷が痛むのか、どこか苦笑のようにも見えた。それに星が楽しそうな笑みを返し、歩き出す。

しんのすけはそんな様子を見つめ、視線を袁紹へ向けた。袁紹はどこか不安そうに文醜を見つめている。その表情を見たしんのすけは、袁紹の手を軽く引いた。それに袁紹が意識を戻し、しんのすけへ視線を向けた。

「何ですの？」

「だいじょーぶ。ぶんちゃんは強いぞ。あんな傷なんかに負けないよ」

しんのすけの言った負けないとの言葉。それが意図した事を察して袁紹は返す言葉に詰まる。それは自分を安心させるようだったのだ。しんのすけは袁紹の手を軽く引っ張り、自分達も行こうと声を掛けた。

それに袁紹は小さく笑みを浮かべて立ち上がった。自分へ指示をするだけでなく、励ます事さえしてくる相手に。それが庶民の子供なのだから、袁紹としては楽しくて堪らない。

（不思議ですわね。本来なら腹立たしくなってもいいはずですのに、どうしてこんなにも心和むのかしら……？　まぁいいですわ。まずは猪々子さんの勝利を祝って差し上げましょう）

そんな事を考えながら歩く袁紹。だが、その動きをしんのすけとシロが止める。しんのすけは手を引き、シロは軽く声を発して。それに袁紹が疑問符を浮かべると、しんのすけとシロが揃って椅子を指した。

「いす、忘れてるぞ」

「キャン」

「お～っ、ほっほっほ！　そんな事を何故……」

「オラだけじゃ持って行けないぞ？」

　袁紹の言葉を斬って捨てるように遮るしんのすけ。それに袁紹が高笑いの姿勢のまま固まった。シロはそんな袁紹に脱力するようにため息を吐き、しんのすけはそれを見て楽しそうに笑う。

　やがて袁紹は仕方ないとばかりに椅子を持ち上げ、歩き出す。しんのすけはその反対側を一応持つようにしてついていく。シロもそれに合わせて歩き出した。

――しんのすけさん。私にこんな事をさせたのは、貴方が初めてですわ。

――おおっ！　オラ、おねいさんの初めての人ですかぁ。照れますな～。

――……何やら妙な感じがする言い方ですけど、そうですわ。この事、決して忘れませんわよ？

――ほ～ほ～。なら、オラも忘れないぞ。

　そんな風に話しながら歩くしんのすけと袁紹。シロはそんな二人の傍を駆け回るように走る。こうして、星と文醜の手合わせは終わりを迎えたのだった……

文醜の怪我は、しばらく安静にしていれば心配ないとの事だった。それに顔良が安堵し、星と袁紹は気付かれない程度に息を吐き、文醜は最初から分かっていたのか、そんな三人に苦笑。しんのすけだけは、文醜と同じで信じていたのか平然としていた。

しかし、問題が一つあった。そう、文醜の担当する調練だ。自主的な訓練でもいいし、顔良が引き受けてもいいのだが、文醜が星へ頼んだのだ。自分の代わりに引き受けてくれないかと。

理由は、星が白蓮の下で客将をしていた事もあった人間だからだ。しかし、その意見に星は兵士達が心から納得しないと返す。それに顔良が、自分がついて行き文醜が認めたと説明すると返した。だが、それでも不満が残るのではないか。そう星が言おうとした時だ。文醜が真剣な眼差しで告げた。

――心配ねーよ。あたいの真名を預けるから。

その文醜の言葉に、星だけでなく全員が驚きを見せた。だが、文醜はそんな周囲に構う事無く星へ視線を向けて告げた。

「あたいの真名は猪々子。あたいが心から強いって認めた趙雲に、受け取って欲しいんだ」

「……分かった。私の……」

星は文醜の声に込められたものを受け、真剣な表情で頷いた。そ

して、それに自分も応えようとした星だったが、それを文醜は遮った。

「いや、いい。お前の真名は、あたいへ本当に預けたくなった時に預けてくれよ」

「猪々子……」

にかりと笑う文醜に、星は呆気に取られる。しかし、少しの間を置いて頷き返して立ち上がった。そして、顔良へ視線を向けて無言で頷く。それに顔良も我に返ったように頷きを返し、部屋を出るために動き出す。簡単に食事を済ませ、調練に行くためだ。

それに続くように星が部屋を出ようとした時だ。何かを考えていた袁紹が、その背に向かって声を掛けた。

「お待ちなさい、趙雲さん」

「……何か？」

「貴方、このまま私の臣下になりませんこと？　今ならかなりの待遇を約束しますわ」

それに顔良と文醜の表情が驚きに変わる。星の表情も驚いてはいるが、二人に比べると少しだけだ。袁紹の視線を受け止め、星はちらりと視線をしんのすけへ動かしすぐに戻す。

「有難い申し出ですが、今はお断りさせて頂きます」

「なっ！？　……いえ、そうですの。残念ですわ」

星の返答に驚きを見せて、一呼吸置いて残念そうに返す袁紹。それに顔良と文醜は不可解な印象を受けた。声を掛けた事も意外ならば、それを断られてすぐに引き下がったのも意外だったからだ。そのまま星は部屋を退出し、顔良はその後をやや慌てるように追い駆けた。

それを見送り、文醜は袁紹へ視線を移す。袁紹はもう視線を動かし、しんのすけを見つめていた。その視線はどこか不思議そうだ。それが益々文醜の中で疑問を強めていく。

「あの、姫？　どうしてあっさり引き下がったんです？」

「少し気になった事があったのですわ」

「は？」

袁紹の答えに思わず間抜けた声を返す文醜。それに袁紹は答える事なく、しんのすけへシロと共に朝食を食べてきていいと告げる。おそらく今から行けば顔良がいるだろうし、居なかったとしても食堂にいる者へ自分が許可を出したと言えばいいと。

それにしんのすけが嬉しそうに頷き、シロと共に部屋を出て行く。それを見送る袁紹と文醜。そして、その足音が遠ざかったところで、袁紹が大きくため息を吐いた。

「まぁ、本当は趙雲さんが欲しいと言うより、しんのすけさんが欲しいと思ったのですけど」

「しんのすけを……？」

益々分からない。そう思う文醜。そんな彼女へ袁紹はこう告げた。星はしんのすけの面倒を見ているだけと思った。だが、どうもそれ

だけではないような気がした。だから、確かめた。自分の臣下にすると声を掛ける事で。

もし自分が感じた予感が正しければ、それを受けないだろうと。しんのすけの面倒を見ているだけならば、待遇がいい自分に仕えるだろうが、もし他の目的があればおそらく断る。そう袁紹は考えたのだ。

「それに……」

「それに？」

「いえ、何でもないですわ。とにかく、猪々子さんは体をお休めなさいな。それと、中々良い試合でしたわよ。ま、最後に優雅さが足りませんでしたけども」

袁紹の言葉に苦笑いの文醜。そして、袁紹はそのまま部屋を後にする。去り際に一言、此度の勝利、大儀でしたと告げて。それに文醜は呆気に取られるものの、それからしばらくして嬉しそうに笑みを浮かべ、部屋の中から出来るだけ大声で返した。

――ありがとうございます、麗羽様っ！

食堂へ向かって歩く袁紹。その表情は疑問を浮かべている。その原因は言うまでもなくしんのすけだ。

（あの時……気のせいかもしれませんが、趙雲さんはしんのすけさ

んへ視線を向けた気がしましたわね）

それが先程文醜へ言わずにいた事。もしそれが見間違いでないのなら、それは何を意味するのだろうかと袁紹は考える。名族たる自分の破格の待遇を簡単に蹴り、子供と犬を連れて旅をする。その目的は何なのだろうと。

そんな事を柄にでもなく考える袁紹。直感や運だけは優れる彼女。故に、何となくだがしんのすけの異常性を感じ取っていたのだ。自慢の武将である文醜が強いと認める事になった星。それが何故か面倒を見ているしんのすけ。

庶民だから礼儀もなく、常識も知らない子供。だが、何故かそれが不愉快に感じない。そして、時折話す聞き覚えのない言葉。しんのすけは自分の住んでいた場所の言葉だと言っていたが、それにしてもあまりに聞き覚えがなさ過ぎるのだ。

「ようちえんにぼでぃがぁど……すべりだいにひまわりぐみ」

昨夜のあいの話を聞いていた時に出た言葉だけでも、これだけあるのだ。これでは袁紹だろうと疑うというものだった。自分達が知る言葉に似てもいない。地方の言葉であれば、どこか似た響きや聞き覚えのある言葉があってもいいはず。

しかし、どれ一つとしてそういう言葉がなかった。袁紹はただ生まれだけで名族と名乗っている訳ではない。この時代では、受ける事が中々出来ない教育をきちんと受けているのだ。

いくら周囲から馬鹿と思われていても、それは行動においてはだ。知識面だけは、袁紹は決して劣ってなどいない。朝廷での作法や礼儀などを理解している事からも、それは明らかなのだから。

そんな事を考えている内に、袁紹は食堂に辿り着く。そこに袁紹が顔を出す事など滅多にない。だが、今日ここへ来たのは目的があったからだ。

「……いましたわ」

視線の先では、しんのすけがシロへ料理人からもらったのだろう骨を与えていて、自分は肉まんを口にくわえている。星と顔良は簡単に摘める物を受け取り、今は今日の事での打ち合わせを別の場所でしているのだ。

本当は食堂でしてもよかったのだが、星がその話から周囲に文醜の怪我の原因を探られるのは良くないと判断したためだ。文醜は袁紹の懐刀。そんな人物が一介の武芸者となった自分に傷を負わされたとなれば、周囲に与える影響は少なくない。なので、文醜の受け持つ兵士達のみで留めておこうとしたのだ。

「おいひい？」

「キャン」

行儀が悪いと一喝されるようなしんのすけの行動だが、周囲はそれを見ても苦笑するだけで怒鳴りはしない。誰もが優しく注意しているのだ。それにしんのすけも頷き、椅子に腰掛けて食べ始めた。それに周囲が微笑みを浮かべ、また仕事に戻るべく動き出す。その様子を見て、袁紹は声を掛けるなら今かと判断した。

「ちょっと、しんのすけさん……」

突然現れた袁紹に驚く周囲の者達。それに意識を欠片として向けず、袁紹はただしんのすけへ視線を向けていた。それに気付き、し

んのすけは咀嚼していた肉まんを近くにあるお茶で流し込んだ。

「ん？　……っぷは。何？　よいしょーのお姉さん」

「よいしょーではなく袁紹ですわっ！　間違えるぐらいなら、無理に名を呼ばずともいいと言いましたのに」

周囲がしんのすけの言った言葉に笑いを必死に堪えている事に気付かず、袁紹は彼だけを見つめていた。

「それで何かご用？」

「一つだけ教えて欲しい事がありますの」

袁紹がやや真剣な眼差しを向けた事に気付き、しんのすけは肉まんに伸ばしていた手を止めた。それに袁紹が別に手に取ってもいいと視線で告げる。しんのすけはそれに頷き、肉まんを手に取ろうとして――片手ではなく両手を伸ばして二つ取った。

それに不思議そうな表情を浮かべる袁紹。すると、そんな袁紹へしんのすけは肉まんを差し出した。それに周囲が息を呑む。袁紹は高級な料理しか食べない。庶民が食べるような物は口にした事がないからだ。

「……何ですの、これは？」

「肉まんだぞ。知らないの？」

「勿論聞いた事ぐらいはあります。で、これをどうしろと？」

「一緒に食べよ。おいしいぞ」

しんのすけはそう言って自分の分を一口で入れる。その大口に袁紹が軽く驚きを見せた。そして、そのままもぐもぐと咀嚼していく。袁紹はそれを黙って見つめた。やがてしんのすけはそれを飲み込むと、お茶を静かに啜りほっと一息。

そこで手を合わせて、噛み締めるようにこう告げた。おいしゅうございましたと。それに袁紹が頷き、ならばと軽く湯気が立ち上る肉まんへかぶりつく。その柔らかな饅頭へ歯を立てると、中から熱めの肉汁が溢れ出す。それにやや戸惑いながらも、袁紹はその味に及第点を出す。

（あら？　意外といけますわね）

そして、咀嚼していく。中の具材の旨味と歯応えの妙、そして饅頭のほのかな甘味に少し顔を綻ばせる袁紹。その笑みにしんのすけが気付いて見とれる。普段のお嬢様然としたものではなく、どこか優しい笑みがそこにはあった。

それに気付き、袁紹がしんのすけへ不思議そうに視線を向ける。それでしんのすけも我に返り、袁紹へ何でもないと手を振った。それにやや疑問を抱くも、袁紹は納得したように頷き、肉まんを食べ続けた。

こうして二人は用意してあった肉まんを全て平らげ、共にお茶を啜ってほっと一息。

「「おいしゅうございました（ですわ）」」

手を会わせてそう言ったところで、ニヤニヤと笑うしんのすけ。一方の袁紹は高笑い。互いに、同じ言葉を言った事に対して微かな恥ずかしさと不思議な嬉しさを感じたのだ。そのため、それを誤魔

化すような反応がそれという訳だった。
それが落ち着いて、再び袁紹がしんのすけへ尋ねた。それは、しんのすけの故郷。それにしんのすけは、特に考える事もなく普通に答えたのだ。春日部と。

それに袁紹は不思議そうな表情を返したが、若干の間の後、何かを悟ったような表情に変わった。そして自分を納得させるように小さく頷く。それに疑問符を浮かべるしんのすけへ、袁紹は気にする事はないとだけ告げ食堂を去った。

「……何だったんだろうね、シロ」

「クゥン？」

「だよね。分かんないぞ」

しんのすけは袁紹が去っていた方向へ視線を向け、そう言う事しか出来なかった……

それから数日後、しんのすけと星は文醜が仕事に復帰すると同時に袁紹の城を出た。星が掴んだ情報によれば、稟と風は黄巾の乱の直前に南皮を発ったらしく、商人への最後の伝言は陳留へ向かうとの事だった。しかし、それ以降の連絡は途絶えているらしく、星はそれを受け陳留に向かう事にしたのだ。

それを星が袁紹に告げると、顔良に言って墨と紙を用意させた。

それに戸惑うも用意する顔良。それに袁紹は何かを書き込み、星へ告げた。陳留を治める曹操とは古くからの友人。故に紹介状を書いてやるから持っていくといいと。

それにしんのすけ以外が呆気に取られた。まさかそこまでするとは思わなかったのだ。そんな周囲へ袁紹は高笑いをし、感謝するようにと告げる。それに星達三人がため息を吐いて納得した。

つまり、袁紹は自分の凄さを理解させ、有難みを感じさせるために紹介状を書いたのだと。だが、それでも礼を言わねばと思い星が感謝を告げた。すると、それに袁紹は微かに笑みを見せてこう言った。

――出来るのなら、しんのすけさんをしっかり守ってみせなさい。

それに顔良と文醜が苦笑い。星を軽く皮肉っているのだろうと思ったのだ。文醜に負けた事を暗に言っていると、そう捉えて。だが、星は違った。袁紹の笑みが小馬鹿にしたものではなく、遠回しの激励に見えたのだ。

そして、それが意味する事を考え、星はまさかと思い心の中で首を振る。気持ちを整理し、袁紹に言葉を返す星。こうして紹介状を手に、星はしんのすけとシロを連れてそこを後にした。

「これから行くのはどこ？」

「陳留だ。稟と風がそこに向かったらしい。出来るのなら一度会って相談するべきかと思ってな」

南皮の城下町を歩きながら話す二人。シロはしんのすけの隣をついて歩いている。目指すは陳留。そこにいるだろう二人の仲間に再会するために……

「それにしても……姫、紹介状を書くなんてどうしたんです？」

「そうですよ。まぁ、趙雲もしんのすけも良い奴らでしたし、ちょっと優しくしたくなるのは分かりますけど……」

顔良の言葉に同意して文醜も続く。それを聞いて、袁紹は心底呆れたような表情を返す。それに二人が不思議そうな顔に変わった。何もそんな風に思われる理由に心当たりがなかったのだ。

すると、袁紹は大きくため息を吐いて首を横に振った。自分しか気付いていなかったのか。そう思って袁紹は益々戸惑う二人へこう告げた。

――貴方達は何も分かっていないんですのね？　しんのすけさんは、おそらく天の御遣いですわ。

そう、袁紹は春日部との出身地に聞き覚えはない。それは、この大陸ではない事を意味する可能性が大きい。少なくとも彼女にとっては。五胡かとも考えたのだが、それであればこちらに対しての態度に納得が出来ない。それに、しんのすけは幽州で白蓮の保護下にいた。書状にはその白蓮と同じように扱って欲しいとまであったのだ。

そこから袁紹はそう結論付けたのだ。物的証拠は何もないに等しい。全て状況証拠と憶測でしかない。それでも、しんのすけは天の御遣いだろうと袁紹は確信した。そう、だから態度が誰に対しても

同等だったのだ。礼儀や世間知らずなのもそれで全て説明がつく。
袁紹の告げる説明に二人は言葉がない。

「じゃ、じゃあ……」

「私達、天の御遣い様を……」

「ええ。庶民の子供として扱っていたんですわ」

「「えぇぇぇぇぇっ？！」」

大声で驚く二人を無視し、袁紹は楽しそうに高笑いを上げた。しんのすけが天の御遣いとしても関係ないのだ。だからこそ、単純に日々が楽しかった礼として、袁紹はしんのすけ達に曹操への紹介状を書いて渡したのだから。

そこにはこう書いてある。礼儀知らずの子供だが、袁家縁の者のため多少は大目に見て欲しいと。それならば曹操もあっさり門前払いをする事はないと思ったのだ。

――しんのすけさん、忘れませんわよ。私に椅子を運ばせ、庶民の食べ物を共に食した事は……

しかし、その文面がただの礼だけではない事を知るのは彼女のみ。慌てふためく二人を他所に、袁紹は一人嬉しそうに笑みを浮かべるのだった。またいつか高笑いで勝負をしようと、そう内心で思いながら……

こうして、微かにではあるが袁家の者達と縁を作ったしんのすけ達。次に向かうは、曹操が治める陳留。そこに稟と風がいるはずとの情報を頼りに彼らは行く。そこでも、また新たな出会いが待つと

知らずに……

ーーー

第六話

「お～っ！」

「さすが陳留だ。賑わっているな」

「キャンキャン」

南皮を発って数日。しんのすけ達は無事陳留に到着した。南皮とはまた違った活気を感じ、しんのすけは目を輝かせ、星は頷き、シロは嬉しそうに声を出す。道行く者達の表情は明るく、影が少しも見えない。あちこちから威勢のいい声や元気な会話が聞こえてくるのだ。

それが何からくるものかを星は理解し、視線を町から城へと向けた。そこに住む曹操が自分の領地内の治安を安定させ、流通の安全を確保しているのだ。ここに来る途中出会った商人から、星はそんな話を聞いた。

「さて、早速城へ向かうぞ」

「え？　もう、そーそーさんに会いに行くの？　お宿は？」

まずは宿の確保ではないのか。そう思ったしんのすけ。旅をするようになって、まず何を確保するべきかを覚え始めているのだろう。だが、星はそれにやや考え、頷いてこう返した。

今回は袁紹からの紹介状がある。それで上手くすれば、前回のように客人として部屋を貸してもらえるかもしれないと。それに、おそらくこの賑わいからすれば宿も一軒や二軒ではない。故に、急いで宿を確保する必要はないだろうと。

「何しろ、あの袁紹殿の紹介状だ。おそらく曹操殿も無碍には出来まい。宿の確保は、謁見が終わってからでいい」

「ブッ、ラジャー」

「キャン」

星の声に了解との返事をし、しんのすけとシロは動き出す。往来を行く人波に飲まれぬように気をつけながら、しんのすけ達は曹操の住む居城へと向かうのだった。

星は、この後宿を確保しなかった事を少し後悔する事になる。そう、それは部屋が与えられた事が素直に歓迎出来ない状況になるが故に……

袁紹の時と同じく門前で待つしんのすけ達。違いと言えば、星が門番と会話をしている事だろう。町の様子から始まり、曹操の人となりなどを聞いているのだ。門番も自分が住む町や主君の事を褒められれば嬉しくないはずがなく、星へ饒舌に話していく。

しんのすけはそんな星とは違い、シロと戯れていた。南皮の時は袁紹達が招待してくれたため、シロを連れても平気だった。しかし、今回はそれと状況が違うにも関らずだ。それは星が、犬連れでも袁紹からの紹介であれば問題ないだろうと判断したからだ。

「そうか。曹操殿は噂通りの名君のようだな」

「ああ。曹操様程の方はいないだろう。世が世なら、今頃は朝廷の重鎮になってただろうさ」

星の言葉に嬉しそうな声を返す門番。丁度そこへ紹介状を持って、伺いを立てに行っていた方が戻ってきた。そして、星へやや畏まったような言葉遣いをし、案内を始めた。それに星は自分の予想が間違っていなかった事を悟った。

袁紹からの紹介状には、扱いに関する事も書いてあったのだと。しんのすけへ声を掛け、星は門番の後ろをついて歩き出した。歩きながらも、城内の様子を見るのを忘れない。調練の様子に城内で働く者達の表情、文官達の様子に女官達の雰囲気など全てが曹操の情報だ。

（ふむ……やはり評判が良い者が治めているだけはある。誰も不安や恐怖も抱かず、イキイキとしているな）

星はそう考えながら周囲へ視線を動かしていた。同じように横を歩いていたしんのすけも視線をあちこちへ動かしていたのだが、その視線があるものを捉え、足を止めた。それは中庭をよたよたと歩く大量の本。いや、本を運ぶ誰かだ。

おそらく書庫から持ち出したのだろうが、本の量が多く些か不安定。それを見たしんのすけはその人物を手伝おうと思い、そちらへと歩き出す。シロは星の傍を歩いていたため、それに気付けなかった。

しんのすけが中庭へ向かって、遅れる事数分。星は自分以外の視点も聞いてみるかと思い、歩きながら横にいるはずのしんのすけへ声を掛けた。

「しんのすけ、お前から見てこの城をどう思う?」

だが、当然ながら星の問いかけに返事はない。嫌な予感を感じて視線を横に向ける星。そこにしんのすけが居なかった。シロも星の反応からそれに気付き、周囲の匂いをかぎ出す。その横で立ち止まり、周囲を見渡す星だったが、しんのすけの姿は見当たらない。

歩いている時に女性が通り過ぎたかと思い出す星だったが、そんな事はなかった。確かに周囲に女官はいたが、それらは全て自分も見ていた。ならば、それを追い駆けて行ったとは考えられない。

「シロ、しんのすけはどこに行ったか分かるか？」

「……クゥ～ン」

「そうか……」

鼻を地面に向け、匂いを辿ろうとしたのだろうが、既に距離が開いてしまったためにそれも出来ず、シロは申し訳なさそうに項垂れた。それに星は気にしなくていいとばかりに優しく頭を撫でる。

すると、星がついてこない事に気付いた案内役がそこへ戻ってきた。そしてその様子から何かあったのかと思い、問いかける。

「どうかしましたか？」

「あ、いや……連れの子がはぐれてしまったのだ。少し待ってもらう事は可能だろうか？」

しんのすけを見失ったままでは少し不味いかと思い、星は案内役にそう言った。だが、それに相手が困った顔をした。何でも曹操は忙しい身のため、少しでも時間を無駄にしたくないと考えているのだ。それを聞いて、星は仕方ないと思い歩き出す。

しかし、相手へこう頼む事にした。しんのすけを案内が終わった後で捜してもらえないだろうかと。それに相手は苦笑し、分かりましたと引き受けた。星はそれに感謝し、シロを預ける事にした。しんのすけの匂いを辿る事が出来るだろうと考えて。

こうして、星は一人で曹操との面会に向かう事になる。一方、しんのすけはと言うと……

「ね、オラが少し持つぞ。だから、それ一度下に置いて欲しいんだ」

「どうしてこんな所に子供がいるのよ……？」

猫耳のようなフードを被った少女――――荀？は抱えた本の重さに表情を少し歪めながら、隣で声を掛けているしんのすけへ視線を向けた。そもそもは、曹操に頼まれた資料を運ぶついでに、自分が使おうと思った資料も運ぼうと思ったのが間違いだった。

量を見てさすがに厳しいとは思ったものの、戻すのも時間の無駄だと判断し、何とか今のように抱えて歩き出したのだが、正直腕が辛いのだ。今もプルプルと震えている事からも限界が近い。それをしんのすけも感じ取っていた。

「腕がプルプルしてるし、お顔もたいへんって顔してる。オラ、こう見えてもけっこー力あるぞ。毎日たんれんしてるから」

「鍛錬？　あんたが？」

「ほい。ね、だから少し持つぞ」

しんのすけの言った内容に若干驚きを見せる荀?。そして、しんのすけがどこまでも素直に手伝いを申し出るので、荀?も仕方ないかと思ったのか、本を持つ手をゆっくりと下げる。だが、地面にはつけようとはしない。それにしんのすけが軽く疑問を浮かべると、荀?はやや急かすように言った。

「大事な本を土で汚す訳にはいかないの！　辛いんだから早く取りなさいっ！」

「あ、そうゆーことね」

しんのすけは納得したとばかりに返事をし、上の方の本を数冊持ち上げて抱えた。たった数冊だが、それでもかなりの重さを軽減した。荀?はそれに息を吐き、しんのすけへ視線を向けた。

「一応礼は言っておくわ。ありがとう」

「どういたましてー。で、これどこに持ってくの?」

「華琳……曹操様のお部屋よ。ついてらっしゃい」

「ほーい」

子供相手に真名で言っても分からないだろうと思い、荀?は名で言い直した。だが、それにしんのすけは大して思う事もないので、平然と返事をするだけ。

荀?の後ろを追うように歩き出すしんのすけ。歩きながら、荀?

からしんのすけは様々な質問を受ける。どうしてここにいるのかとの問いから始まって、何故助けようと思ったのかを聞かれた。
それにしんのすけは簡単に経緯を話した。この陳留に来たのは、別れた二人の仲間を捜しての事。この城に来たのは袁紹からもらった紹介状があったから。助けようと思ったのは、荀?が困っていそうだったからだと。

「それだけ?」

「そーだよ。オラ、困った人をお助けするって決めたんだ」

「子供のくせに……」

「ネコミミのくせに……」

「煩いっ！　別にそれは関係ないでしょ！」

「うるさいぞっ！　別にそれは関係ないでしょ！」

しんのすけの返しに言葉に詰まる荀?。その反論内容にではない。その一連の言い方が自分の真似だと気付いたからだ。下手な事を言うとこのまま真似ばかりされる。そう思った彼女は、その後一切口を開かず黙って歩いた。

そして、一枚の扉の前で荀?が止まり、しんのすけもそれに続くように止まった。すると、荀?が中へ向かって声を掛けた。華琳様、頼まれた物を持ってきましたと。それに対して返事はなく、荀?は不思議に思う。だが、しんのすけは何となく部屋に誰もいない気がした。

「……ね、いないみたいだぞ」

「そんなはずは……あ、そっか。あんた達は袁紹の紹介状を持って来たのよね？」

荀？がそう問いかけると、しんのすけはそれに頷いた。それだけで荀？は理解した。おそらく自分が運ぶのに手間取っている間にそれを誰かが知らせに来て、曹操はそちらを優先したのだろうと。

なので、二人は部屋へ入って本を机に置いた。しんのすけのは全て曹操の頼まれ物だったのでそれで良かったのだが、荀？は自分の分もあったのでそこから選別し、再び本を持とうとした。しかし、その動きが止まる。

（腕が辛いわね。さすがに少し休みたいけど……）

文官である荀？は、今までの負荷で腕がかなり疲労している事を理解した。だが、それでも時間を無駄には出来ない。そう思い、小さくため息を吐きながら本を抱えようとしたのだが……

「よっと」

「えっ……？」

「腕疲れたでしょ？　オラが持つぞ。次はどこに持ってくの？」

「私の執務室だけど……」

「おむつしつ？　赤ちゃんでもいるの？」

「執務室！　仕事をする部屋よっ！」

怒る荀?にしんのすけはニヤニヤと笑う。それに彼女がやや苛立ちを込めた視線を向けると、しんのすけはこう言った。

――知ってるぞ。だって白蓮ちゃんもそこでお仕事してたもん。

そう告げて慌てるように部屋を出るしんのすけ。それに少し沈黙する荀?だったが、すぐに自分がからかわれた事を理解し怒りを露わにそれを追う。そこで叱ろうとした彼女へ、しんのすけがある事を思い出してそれを止めた。

そう、曹操を待たせているのではないかとの言葉だ。それに荀?も言葉に詰まり、仕方ないとばかりに怒りを抑え込んだ。しかし、それならば余計早く行けと告げ、本を奪おうとしたのだ。

しかし、それにしんのすけは星がいるから急ぐ必要はないと返し、本を渡そうとはしない。結局荀?が折れ、しんのすけを連れて仕事部屋向かって歩き出す。

そこで再び会話が始まるのだが、そこで二人は同時に同じ事をした。互いの名前を聞いたのだ。しんのすけは、荀?が鈴々と同じぐらいに見えた事もあり、友達になれるかもと思い名前を聞こうとした。

一方の荀?は、あの袁紹から紹介状を貰ったしんのすけの事を少し探ろうと思った。なので、まずは名前を聞こうとしたのだ。結果、こうなるのが決まっていたようなもので……

「「ねぇ……」」

重なる声。それに互いが軽く驚き、しばし沈黙。視線は相手を促している。しんのすけは単純に相手の方の話を聞きたくて、荀?は

大人として相手を優先させようとしていた。だが、それでは埒が明かないと思ったのだろう。仕方ないとばかりに荀?がしんのすけへ問いかけた。

「……はぁ。あんた、名前は?」

「オラは野原しんのすけ。名前がしんのすけだぞ。あざなっていうのはない」

「そう……変わった名ね」

「みんなそーゆー」

しんのすけの名乗りに荀?は驚きを感じるも、それを表情に微かにしか見せない。そして、しんのすけが今度は荀?へ名前を尋ねる。それに荀?が名乗りの返礼とばかりに胸に手を当てて告げた。

「私は荀?。字は文若よ」

「お〜、カッコイイ……けど覚えにくいや」

最初こそ、しんのすけの声に自慢げな表情を浮かべていた荀?だったが、最後の一言にその姿勢を崩す。それにしんのすけが大丈夫かと声を掛けるが、誰のせいでこうなったと返す荀?。そんなやり取りをするも、しんのすけは軽く謝っただけですぐに話題を変える。

荀?の事をどう呼べばいいかとのものだ。それに荀?はどういうものなら覚えられると聞き返す。子供相手だからか、幾分かその声は本来男性に向けるものより優しい。

「そうだなぁ……じゅんちゃんは?」

「はぁ？！」

「お？　それがダメなら……ネコちゃん」

「また猫か！　でも、それは絶対却下よ。それなら、まだ荀ちゃんの方がマシじゃない」

「じゃ、じゅんちゃんとゆーコトで」

これで話は終わりとばかりにしんのすけは言い切った。荀？はそんなしんのすけに軽い眩暈を感じるが、それでも気付いている事がある。それは、子供にしてはちゃんと自分の言っている事を理解して、言葉を返している事。

この陳留には、将軍でありながら彼女の言っている事を理解出来ない者もいるのだ。それに比べれば、しんのすけがどれだけマシかが分かるものだろう。

（春蘭は子供にも劣るのかしら？　ま、あいつは猪だから当然かもしれないけど……）

荀？はそんな事を考えながら、しんのすけを導くように歩く。やがて荀？の執務室に到着し、彼女はしんのすけから本を受け取った。少しとは言え腕を休める事が出来たので、もう少しの間なら本を持つ事が出来るようになったからだ。

「ここまでいいわ。ここを真っ直ぐ行けば応接室よ。早く行きなさい」

「お～、道教えてくれてありがとう、じゅんちゃん」

「別にいいわ。ここまでの礼みたいなものよ。ほら、急ぎなさいしんのすけ」

「ほーい」

教えられた通りの方向へ走り出すしんのすけ。それを見送り、荀?はやや疲れたように部屋の中へ。そして机に本を置き、ため息一つ。

「どうして子供の癖に厄介なのかしら……?」

しんのすけの言動を思い出し、荀?はそう心から呟いた。この時の彼女は知らない。しんのすけのその厄介さを味わう事になるのは、大抵自分のような人間だと。そして、彼女の事を大人と思わず、自分に近い年齢と思っている事を。

そんな事とは知らず仕事を始める荀?。そこへしんのすけの匂いを辿ったシロと共に、彼女のもっとも嫌う大人の男性が現れるのはそれから少し後だった……

しんのすけと荀?が曹操の部屋へ辿り着いた頃、星は一人曹操達と対面していた。そう、そこにいるのは曹操だけではなかった。夏侯惇と夏侯淵の姉妹も同席していたのだ。

星は、その理由を曹操の護衛と考えていた。だが、実際は違う。夏侯惇は仕事が休みだったためにここに来て、夏侯淵は姉が何か粗相としないように監督するために自主的にやってきたのだ。

「……そう。不思議な鏡を、ね」

「ええ。何かご存知ないでしょうか？」

簡単な自己紹介を終え、陳留の様子から感じた事を軽く話し、今はしんのすけ帰還のために必要と思われる鏡の情報を尋ねていた。曹操は最初から何故そんな物をと言わず、特徴などを聞き出す事で星に話を続けさせる。その時の表情は、どこか興味を抱いたというような印象を星に与えた。

特徴は何も分からず、不思議な力も秘めているとだけしか情報はない。そう星は答え、鏡を求める理由は、袁紹の趣味だと告げた。それに三人は納得したように頷いた。袁紹の事をよく知る三人としては、星の告げた理由はそれだけらしかったのだ。

（鏡、ね。あの麗羽が欲しがりそうな物だけど、この趙雲という者が麗羽に従うようには思えないのよね）

曹操はそう思い、星を見つめる。直感が訴える。この者が欲しいと。何せ、夏侯惇が星を袁紹の使者と思い、最初に軽く睨むように向けた視線を受け、平然としていたのだ。それどころか、そんな夏侯惇へこんな事を言ってのけたのだから。

――そんな風に睨まれますと、眉間に皺が出来ますぞ？

飄々とそう告げられた言葉に、夏侯惇は慌てて目つきを戻したのだ。曹操と夏侯淵は、そんな星に軽く感心をした。夏侯惇の睨みを受けて平然としていられるだけでなく、余裕さえ浮かべてそれを嗜めた事に。

そんな星が袁紹のような者を主君とするはずがない。絶対ではな

いが、曹操にはそんな確信めいた自信があった。故に、この鏡の話は袁紹が言い出したのではなく、星が元から探している物ではないかと考えていた。

「ねぇ、趙雲。一ついいかしら？」

「何ですかな？」

曹操は楽しそうな笑みを浮かべて星へ問いかける。その笑みに嫌な感じを受けながらも、星は平然と構えた。

――――麗羽はその鏡の話をどこで聞いたのかしら？

その言葉に星は内心で舌打ちをした。曹操が自分の話を疑っていると悟ったからだ。その問いの答えは勿論用意している。だが、目の前の曹操の表情は、明らかに自分の話が袁紹の告げた話ではないだろうと確信しているものだった。

やはり侮れない。そう思い、星はあまり得意ではないが、頭をいつも以上に使う事にした。どこかで、それでも目の前の者には通用しないと悟っている。だが、それでも万に一つでも可能性があれば賭けてみよう。そう考え、星は口を開いた。

「夢のお告げだと、そう言っていました」

「夢、ね……」

「袁紹殿は、どこか我らと違う場所を見ておられますからな。寝惚けて天の声でも聞いたのでしょう」

それに付き合う方の事も考えて欲しい。そう馬鹿にするように星

は締め括った。それに夏侯惇だけが同意するように笑う。曹操と夏侯淵は笑いこそしたが、その質が夏侯惇とは違う。そう、曹操は楽しそうにしているのだ。夏侯淵は冷ややかな笑み。共に、星が言う事が嘘だと思っているのだ。

それでも星はうろたえない。自分自身に言い聞かせる。自分の話す言葉は全て真実だと。そうしなければ、自分ではなくしんのすけが危なくなるのだと思い込ませて。曹操がしんのすけを天の御遣いと知れば、必ず利用するだろうとどこかで察しているのだ。

その後も曹操による星への追求は続いた。夢で見た不確かな物をどうやって探すのかと聞かれれば、それらしい話や言い伝えがある物を用意すれば、納得させる事が出来ると返し、気紛れな袁紹はそんな物で納得しないかもしれないと言われれば、根は単純故に、物と話さえあれば何とでもなると返した。

「……いいでしょう。趙雲、まだ宿は決めていないのではなくて？とりあえず、しばらくこの城に滞在しなさい。その間に出来るだけ調べてあげるわ」

「寝床だけでなく、そこまでして頂けるとは……感謝しますぞ、曹操殿」

「いいのよ。麗羽からも良くしてくれとあったし、私自身もそうするに相応しいと感じた。また暇を作ったら話を聞かせて欲しいしね」

星の話を聞いて、曹操はどこか満足そうに頷いてそう告げた。一方の星は、そんな申し出に内心ため息を吐いた。曹操の興味を嫌な意味で引いてしまったと感じたのだ。きっとまた必ず機会を設けて追求してくるだろうと。

宿を取っていれば少しは違ったかと思う星だったが、それでもきっと結末は同じかと思い直し、再び内心でため息。そんな星の内心を読んでいるのか、曹操はどこか獲物を捕らえたような笑みを浮かべていた。

そうして、話が終わったと誰もが思った時だ。応接室の外から二つの声が聞こえてきた。一方は、星が良く知る声。もう一方は曹操達が良く知る声だ。

「駄目だよ。今、大事なお話の最中なんだから」

「だから、オラはそのお部屋にお呼ばれしてるの」

「嘘吐いたら駄目だぞ。大体、どうしてここに子供がいるのさ？」

「じゅんちゃんも同じ事聞いてきたけど、オラ、よいしょーさんからのお手紙を星お姉さんと一緒に届けに来たんだぞ」

桃色髪の少女――許緒は午前の仕事を終え、ここで夏侯惇を待っていた。昼食を一緒に食べに行こうと思っていたのだ。まぁ、退屈だったので部屋の中を覗き見てはいたのだが。そこへ、しんのすけが現れて普通に応接室に入ろうとしたので、現状のように止めたという訳だ。

だが、そんなしんのすけの最後の言葉に、許緒は次々と疑問符を浮かべた。一つ目はじゅんちゃんとの名前。次によいしょーさん。最後は星お姉さんだ。それらが理解出来ない名前ばかりだったため、許緒は一つずつそれを解明していこうとした。

まずじゅんちゃん。それは誰と聞かれ、しんのすけは荀？の特徴を告げた。そう、猫耳のような特徴を持つ頭巾を。それで許緒は誰

かを理解し頷いた。

「桂花ちゃんの事かぁ。でも、よくそんな呼び方許してくれたね？」

「お名前覚えにくいから、じゅんちゃんかネコちゃんだとどっちがいいって聞いたんだ。そしたらじゅんちゃんがいいって」

しんのすけの言葉に許緒は小さく笑って頷いた。それなら確かにじゅんちゃんを選ぶだろうと。そして、続いてよいしょーさん。それはしんのすけが袁紹の特徴を伝えたのだが、生憎許緒は袁紹と会った事はない。そのため、しんのすけがどれだけその真似の高笑いをしても、許緒には理解してもらえなかった。

「ぜぇ……っ……ぜぇ……これでも分かんない？」

「ご、ごめん。僕が知らない人みたい」

高笑いのしすぎで疲れているしんのすけを見て、許緒は少し申し訳なく思ってそう返した。それにしんのすけも仕方ないと思い、頷いて気を取り直して次の人物の説明をした。そう、星だ。

白い服装の女性。それだけで許緒には心当たりがあった。そう、今曹操達が話をしている相手も同じ格好だったのだ。そこで、更にしんのすけが髪の色などを告げる。それで完全に許緒は、しんのすけの言っている相手が部屋の中の人物だと理解した。

「それ、華琳様達とお話してる人だよ。本当に呼ばれてたんだ」

「うん」

「そっか……疑ってごめんね。ちょっと待ってて。今、華琳様達に

聞いてみるから」

しんのすけの言った事を最初から疑ってかかった事に謝罪し、許緒は応接室の中へ伺いを立てようとする。しかし、その瞬間扉が開いた。

「話は聞いていたわ。季衣、ご苦労様」

「え？　あの、華琳様。僕、何もしてませんけど？」

曹操に労を労われるも、その理由が分からない許緒。曹操は素性の分からない者を通さず、丁寧にその者を確かめていった事に満足していたのだ。だが、それを意識せずしていた許緒には曹操の喜びが理解出来なかった。

「しんのすけ、どこへ行っていたのだ」

「じゅんちゃんがご本たくさん持ってて、大変そうだったからお手伝いしてた。そしたら、ここの場所教えてくれたんだぞ」

星の問いかけにしんのすけはそう答えた。じゅんちゃんが誰を意味するかを室内で曹操達から聞いた星としては、それだけでも色々と思うところがあるのだが、今はそれよりも言っておく事があった。

「そうか。人助けは立派な事だが、それで私やシロに心配を掛けるのは感心せんぞ？」

「えっと……ごめんくさい」

「分かればいい。それと一応言っておくが、正しくはごめんなさい

だぞ、しんのすけ」

素直に頭を下げるしんのすけへ微笑みを浮かべ、星は柔らかくそう注意した。それに頭を上げて頷くしんのすけだったが、その目が星の後ろにいる曹操達を捉える。そして、曹操の両隣にいる夏侯姉妹へ視線を向けた途端、その目が輝いた。

無言で立ち尽くせば黒髪の美人に見える夏侯惇。姉が絡まない限り、知的で冷静な美人の夏侯淵。どちらもしんのすけからすればキレイなお姉さんだった。故にしんのすけは見慣れたにやけ顔になり、二人へ近付いた。

「ヘイヘイ、おねいさん達。オラと一緒にヤムチャしな～い？」

「「は？」」

子供に口説かれるという珍しい経験に、思考が停止しかかる二人。これが一般男性だったのなら、二人はそれぞれらしい反応を返しただろう。だが、初対面で子供から口説きを受けるなどは、誰でも予想出来るはずがない。

しかし、しんのすけは戸惑う二人に構わず、口説き続けていた。それを見て楽しそうに笑う星。一方、許緒は呆気に取られ、曹操は微かな怒りを抱いていた。しんのすけがお姉さんと扱ったのは、夏侯姉妹。自分はそう扱われなかった。それが密かに身長や容姿に劣等感を持つ曹操を刺激したのだ。

（私は大人じゃないって言うのね、この子供は……いい度胸じゃない）

「ちょっと、そこの子供！」

一喝。並の者であれば、それだけで動く事が出来なくなりそうな威圧感。それを曹操はしんのすけへ放った。だが……

「ね～、オラと夕焼けの下でドゥエットしよ～」

「あ、あのな小僧……」

「華琳様が呼んでいるのだが……」

曹操の一喝などどこ吹く風とばかりに口説きを止めないしんのすけ。みさえの激しい怒りは曹操のそれと同等だったのだ。それを受け続けたしんのすけに、曹操の一喝は聞き慣れたものといえたのだろう。

そんなしんのすけに困惑する夏侯姉妹。曹操はしんのすけの様子に一瞬呆気に取られるも、すぐにわなわなと震え出した。だが、それがスッと治まった瞬間、曹操は優しく声をかけた。

――ねぇ、私の話を聞いてくれないかしら？

その声にしんのすけがびくりと震えて背筋を伸ばす。そう、それは優しい声だった。だが、同時にとても恐ろしい声だったのだ。しんのすけが知る限り、その声は相手の怒りが頂点に達した後、それを突き抜けた時に出る声だったのだから。

ゆっくりと顔を曹操の方へ向けるしんのすけ。そこには、にこやかな笑みを浮かべる曹操の姿があった。見れば、その異様な雰囲気に呑まれたのか、許緒と星が完全に固まっていて夏侯姉妹も身じろき一つしない。

「まず、貴方の名前を教えてくれるかしら？」

「の、野原しんのすけ……五歳」

「そう。名がしんのすけでいいのね？」

曹操の問いかけに無言で何度も頷くしんのすけ。それに曹操は満足そうに頷き、笑みを深めて告げた。

「ではしんのすけ。貴方、春蘭と秋蘭をお姉さんと呼んだわね？」

「ほ、ほい」

「じゃあ、季衣はどう呼ぶの？」

その問いかけに、しんのすけは視線を許緒へ向けた。丁度、相手もしんのすけへ視線を動かしたようで、視線が合った。

「えっと……お、お名前は？」

「あ、僕は許緒。字は仲康って言うんだ」

「……なら、きょーちゃんかな？」

お見合いの出だしのような会話。それに少しだけ緊張が解れたのか、許緒がその呼び名に頷き返した。構わないという事なのだろう。それにしんのすけも頷き返し、視線を曹操へ向けた。曹操はそんなやり取りに少しだけほだされたのか、その恐ろしい雰囲気を若干和らげていた。

星や夏侯姉妹はその事に安堵し、揃って息を吐いている。それでも、未だにしんのすけへ向く視線は鋭いままだったが。

「季衣はそう呼ぶのね。なら……」

そこまで言って曹操は何かに気付いたのか、口を閉じた。そして同時に一瞬恥ずかしそうな表情に変わる。だが、それをすぐに引っ込めた。それでも、そこに先程までの怒りはない。それに全員が気付き、視線を曹操へ向けた。

（つい怒りに任せて言い出してしまったけど、これで自分の呼び方を聞いたら、私が子供扱いされた事に腹を立てた事を認めるしかないわ……）

ゆっくりと怒りが収まってきたためか、曹操は自分が余計に墓穴を掘っていた事に気付いたのだ。しかし、ここで止めるのはおかしすぎる。でも聞く事が出来ない。何か上手い纏め方はないかと曹操は考え始める。

そんな曹操を見て、疑問符しか浮かばないしんのすけと夏侯惇に許緒。夏侯淵は何かに気付いたのか、密かに苦笑しているし、星も曹操の様子から何となく察しをつけたようで、不敵な笑みを浮かべていた。

そして、星はしんのすけへ静かに近付き耳打ちをする。それにしんのすけが頷いて、考えを纏めようとしている曹操へ告げた。

――ね、お姉さんがそーそーさん？

それに曹操が思考を切り替え、しんのすけへ視線を向けた。そして、視界の隅で不敵に笑う星を見て、急にしんのすけがそんな事を聞いてきた背景を察した曹操。だが、それに乗るしかないかと思い、至って自然を装って答えた。

「ええ、私が曹操よ。字は孟徳」

「ほ～ほ～。ん～、じゃあ……もうちゃんかな？」

「あら、どうして私は字なのかしら？」

「その方が可愛いし、もうちゃんってどこかみんなと違うから。う～んと……」

可愛いと評された事に曹操が軽く驚き、少しではあるが楽しそうに笑みを浮かべる。そんな曹操に気付かず、しんのすけは違う点を思い出そうとしていた。

（確かみんなから”かれー様”って呼ばれてたっけ？　かれーかぁ……あー、カレー食べたいぞ。お家にならあれがあるのに。えっと、何て言ったっけ？）

周囲からの呼ばれ方を思い出して、しんのすけはある物を連想していく。それは彼の好きな食べ物、カレー。そんな彼のために、家には常備されているレトルト商品がある。そう、その名もカレーの王様。それを思い出した事こそ、ある意味での運命の分かれ道。

「おおっ！　王様だぁ！」

やっと思い出せたとばかりにしんのすけが言った言葉。それに曹操だけでなく星達も驚いた。今はまだ地方の諸侯でしかない曹操。それと接して、しんのすけが告げた王様との言葉。それが持つ衝撃は大きい。何も知らない者が感じた曹操の印象。それを王者の風格と言ったと思ったのだから。

勿論、しんのすけは既に自分が何を話していたかなど忘れている。しかし、その発言が見事に流れに合ってしまったのだから恐ろしい。ともあれ、その言葉で真っ先に反応する者がいた。

その人物。曹操はやや愉快そうな笑みを浮かべると笑い出した。それに周囲の視線が集まる。だが、それに構わず曹操は、ただしんのすけだけを見つめて告げた。

――面白い！　この曹孟徳を王と評するか、しんのすけ。

――お？　うんと、よく分かんないからそれでお願いするぞ。

――ふふっ、お願いするって……いいでしょう。気に入ったわ。今夜趙雲と一緒に夕食を共にしなさい。

――ほーい。

物怖じせず、曹操へ自分の意見を告げるしんのすけ。その態度が子供らしくもあり、どこかそれらしくもないと感じた曹操は、もっと話をしてみたいと思いしんのすけを食事へ誘う。

一方、星はしんのすけの告げた王様との言葉に息を呑んでいた。曹操こそが乱世を止める者なのだろうかと、そう考えたのだ。しんのすけの直感が王と感じた存在。桃香や白蓮には言わなかった表現。それが持つ意味は、星にはこの上なく大きい。

夏侯姉妹と許緒は、その王様との言葉に違う意味を感じていた。主君曹操は、何も知らぬ子供から見ても王者たる風格を持っている。それは彼らにとっては喜びでしかない。やはり自分達の主君は凄いと、そう強く思う事が出来るのだから。

そこへシロを連れた兵士が現れ、星はしんのすけを捜し続けてく

れた事に感謝した。曹操達はシロとじゃれ合い、楽しそうにしているしんのすけを見て笑みを浮かべ、兵士に客室へ案内するように告げて別れた。

そしてそのまま、しんのすけ達はその兵士について行き、客室へ。すると、部屋に入った途端、星はしんのすけへ先程の曹操とのやり取りを確認した。そう、星にとってはそれは見過ごす事の出来ない話だったのだから。

「しんのすけ、曹操殿を王のように感じたというのは間違いないか？」

「それなんだけど、オラ、もうちゃんを王様だって思ったなんて言ったっけ？」

しんのすけの言葉に星は呆気に取られた。それがあっての曹操からの誘いだったのだから。しかし、しんのすけはそれにカレーの話を聞かせた。それを聞いて星は脱力。しんのすけが曹操と他者との違いを言おうとしていた事を、完全に忘れていたと理解したからだ。

それを星が簡単に説明してやると、しんのすけはそこでやっと会話の流れを思い出したのか、手を打って頷いた。

「あ、そっか」

「あ、そっか、ではない。まったく、お前という奴は……」

「う～ん……でもそう言われると……」

「何だ……？」

不思議そうにしんのすけを見つめる星。最初の言葉が直感から来

たのかと思ったのだが、そうではないと星は理解した。だが、急にしんのすけが何かを思い出すように考え込んだ事に、星はその先が気になったのだ。

「寂しそうだったから、王様かも」

「何？」

予想外の答えに星は戸惑った。何故寂しそうなのが王なのだろうと、そんな疑問を抱く星。それに気付かずしんのすけは自分が感じた事を話していく。曹操には友達がいないだろうと思った事をだ。そう、白蓮と桃香は友達。更に白蓮には星と自分という仲間が、桃香に愛紗や鈴々という義姉妹がそれぞれいる。

しかし、曹操にはそんな存在がいないと思ったのだと、しんのすけは語った。それに星は、曹操にも夏侯姉妹を始めとする者達がいると返す。しかし、それにしんのすけは首を横に振った。

「違うぞ。あのお姉さん達はオラ達みたいなお仲間じゃないよ。えっと……部下じゃなくて、し、し……何て言ったけ？」

「もしや臣下か？」

「おおっ！　それだ！」

それで星はしんのすけの言いたい事を何となくだが理解した。白蓮や桃香は同等と思う存在がいた。自分を偽る事もなくさらけ出せる相手が。だが、曹操にはそういう相手がいないのだろうと星は思った。

それは、曹操の周囲への態度や言葉遣いから感じたものだったが、それだけではない理由がしんのすけにはあった。それは……

（あの時のもうちゃん、目が寂しそうだった……）

別れる前、自分と許緒が名前を呼び合って遊ぶ約束をしているのを見て、誰もが笑みを浮かべていたのだが、曹操だけはそこに微かな悲しみがあったのだ。まるで、何も考えずに自由に振舞えるしんのすけ達が羨ましいとでも言わんばかりに。

星は、そんな事を思い出し妙な表情をしているしんのすけを見て、抱いた疑問をぶつけた。どうして寂しそうだと王なのかと。それにしんのすけは、自分が絵本や紙芝居などで見た王様の事を思い出して告げた。

「王様って、みんな一人ぼっちなんだぞ。だって、王様は一番エライんだもん。だから、友達が欲しくなったり、みんなと仲良くなりたいって思ったりするんだ」

「……そうか。王とは孤独なもの。故に、孤独さを感じさせた曹操殿は王らしい。そういう事か」

「それにみんな、もうちゃんの事、ぜったい様って付けて呼ぶし」

「お前は、意外と周囲に気を配っているのだな。いや、それでこそか」

しんのすけの最後の結論に苦笑した。白蓮も桃香も様を付けずに呼ぶ者がいた。だが、確かに曹操の周囲にはそんな呼び方をする者がいない。それを指摘したしんのすけの観察眼に、星は感心した。

そして、星はそれを聞いて曹操を主にする事を保留にした。しんのすけが王と感じた理由を聞いて、それが天命によるものではないと判断したのだ。

次に話は別の事に移った。そう、稟と風の所在を調べる事についてだ。星は街へ出かけ、聞き込みなどをして足取りを追うつもりだった。それについてくるか否かをしんのすけに尋ねたのだ。無論、それにしんのすけは即座に頷いた。

そんな話を終え、どうするかと星が思った時だ。それまで床に伏せていたシロが突然起き上がり、尻尾を振り出したのだ。それと同時に星も部屋へ近付く気配を感じ、笑みを見せた。

「しんのすけ、許緒殿が来たようだぞ」

「お、きょーちゃんもう来たんだ。早いね」

許緒が食事を終えた後に軽く遊ぶ約束をしていたしんのすけ。本当なら一緒に食事へと誘われたのだが、星が先程の事を確かめたかったため、遠慮したのだ。しんのすけとしては星がそう言うのならと思い、残念そうにする許緒へまたの機会と言ったのだから。

「しんちゃん、いる？」

「ほっほーい」

許緒からの呼びかけにしんのすけは元気よく返事をし、扉を開ける。そこには笑顔の許緒の姿があった。その視線が部屋にいる星を見て、少し意外そうなものに変わる。

「あ、趙雲さんもいたんですね」

「ああ。これから少し街へ行こうと思ってな」

「そうですか。じゃ、僕が案内しますよ。それにしんちゃん達、ご飯まだだよね？」

許緒はそう尋ねる、それに星は頷くが、ふと思った事があったので尋ね返した。そう、許緒には仕事があるのではないかと。それに許緒は苦笑して答えた。夏侯惇が、自分としんのすけが思う存分遊べるようにと、午後からの仕事を代わってくれたのだ。

それを聞いて、星は夏侯惇の優しい面を見た気がして軽く驚きを見せた。しんのすけは夏侯惇の計らいに感嘆の声を出し、嬉しそうに頷いていた。しんのすけの反応が夏侯惇を褒めたように見え、許緒も嬉しそうに笑みを見せる。

「えへへ、春蘭様は優しいんだよ。と言う事で、趙雲さんも一緒にみんなで街へ行きましょう。僕がオススメのお店教えますから」

「そうか。ならば、お言葉に甘えるとしよう」

「きょーちゃんのオススメかぁ。楽しみだぞ」

「キャンキャン」

こうして許緒に連れられ部屋を出るしんのすけ達。向かうは陳留の街。そこでしんのすけは、更なる出会いを得る事になる……

食事を終えて、星と別れたしんのすけとシロは許緒の案内で街を歩いていた。そこで出会ったのは、オシャレなオープンカフェのよ

うな店で話す于禁と李典だった。彼女達を軽く紹介されたしんのすけだったが、二人を口説く事はしなかった。

その理由はそれをする前に邪魔が入ったため。そう、二人は仕事をサボっていたのだ。それを同僚で親友でもある楽進に見つかったために、二人は強襲されたのだ。

今もしんのすけの目の前では、楽進に説教される二人の姿がある。それを眺め、自分もよく愛紗に説教をされた事を思い出すしんのすけ。シロもその光景を思い出しているのか、どこか懐かしそうな目をしていた。と、そこでしんのすけはふと気になった事を尋ねた。

「ね、きょーちゃん。あのキレイな髪のお姉さんもお知り合い？」

「凪ちゃん？　うん、そうだよ」

「後でしょーかいして」

「いいよ」

しんのすけの申し出に笑顔で頷く許緒。言われなくてもそうするつもりだったのだ。そんな風に和む二人の前で、楽進は説教を終えたのか息を軽く吐いた。そして、許緒の呼びかけに反応して振り向き、しんのすけへ名乗りを始めたのだ。

「私の名は楽進。字は文謙だ」

「オラは野原しんのすけ。名前がしんのすけだぞ。それとあざなはないぞ。で、こっちはシロって言って、オラの……家族？」

「クゥ～ン……」

「しんちゃん、シロがそこは言い切ってって言ってるよ」

しんのすけの疑問での終わり方に、シロは脱力するように地面に伏した。それを見て許緒は苦笑い気味にシロの心境を告げた。そんなしんのすけとシロに三人は小さく笑みを浮かべる。その後、許緒はしんのすけが曹操を王様と呼んだ事を告げ、三人を驚かせた。

そして、しんのすけは三人へどんな呼び方をすればいいかを尋ねた。覚えられない訳ではないが、やはり簡単な呼び方を決めておくに越した事はないのだ。そう、袁紹にもそれをしていれば間違える事も無かったのだと、しんのすけが考えた事もある。

三人はしんのすけの言い分にやや考え込み、まず于禁が表情を明るくして告げた。

――うっちゃんはどう？　なのー。

それにしんのすけがお笑いの人みたいだねと告げるが、当然誰もその意味が理解出来ない。しんのすけは、そんな周囲の反応に自分の言った事が通じない類の物だった事を思い出し、やや照れたように忘れて欲しいと告げた。その反応に許緒達が笑った。何かと間違えて照れたのだろうと思ったのだ。

「じゃ、うっちゃんね。えっと……」

「そうなるとウチはりっちゃんやろか？」

「お？　それでもい～い？」

李典はしんのすけの言葉にやや楽しそうに頷いた。初めての呼ば

れ方だと言って、笑ってさえいたぐらいだ。それにしんのすけも頷きを返し、最後に楽進へ視線を向けた。それに楽進は、自分も流れから言ってがっちゃんだろうと思っていた。

正直その呼ばれ方には抵抗がある。なので、彼女はしんのすけへ別の呼び方を考案してもらえないかと告げた。しかしそれに于禁と李典から不満が出る。二人は楽進だけ呼び方を変更する事に文句を言ったのだ。

自分達も心からそれを望んでいるのではない。それを言われ、楽進は言葉に詰まる。子供であるしんのすけが、難しいから簡単な呼び方をさせて欲しいと言ったからこそ、二人も先程の呼び方を認めたと分かったからだ。

そんな会話を聞き、許緒がしんのすけへどうすると問いかける。それに彼は”がくちゃん”との呼び方を提案。楽進はがっちゃんよりはマシかと思い、それで妥協する事にした。こうして、呼び方に関する事は片がつき、楽進は早速とばかりに同僚二人へ厳し目の視線を向けた。

それだけで二人には何かを理解し、真剣な表情で答えた。それはもうサボったりしないとの約束。それに楽進が当たり前だと返すと、その重圧から逃げ出すように于禁が走り出した。それを追うように走り出す李典。その後ろ姿を見送り、手を振るしんのすけ。楽進はそんな二人にやや呆れたようなため息を吐き、許緒は苦笑していた。

シロは去って行く二人を見つめ、視線を楽進へ向けて苦労しているだろうなと思い、小さくため息を吐いた。どこにも苦労をしている者がいるのだなと、そんな風に考えて……

しんのすけと許緒は午後の仕事をする楽進と別れ、シロと共に城へと戻った。そして、そこで許緒はしんのすけから天の遊びを教わる。無論、それはしんのすけの故郷のものだと誤魔化して。それを通してしんのすけは鈴々の事を思い出した。その懐かしそうな表情から、許緒はその理由を尋ねてその時の話を聞き、意外に思ったのだ。

そう、許緒と鈴々は既に顔見知りだった。黄巾の乱で一緒にいた事がある。そう聞いて、しんのすけは許緒から桃香達の話を聞き、お返しとばかりに自分の知る思い出を語る。それを聞いて、許緒は鈴々に抱いていた印象を少しではあるが変えていく。

「え？　しんちゃんの親友で、お別れの時に泣いた？」

「うん。白蓮ちゃんのお城を出てく時、オラの前で泣いてくれたよ」

強くない。離れたくない。そう言って大泣きした鈴々。その話を聞いて許緒は、不思議と鈴々の事を弱虫とか情けないなどとは思えなかった。自分でも仲の良い友人ともう会えなくなるとしたら、それぐらいの事を言いそうだったからだ。

しかも、親友ともなれば余計に。故にその気持ちが理解出来ると共に、許緒は抱いた親近感から密かに鈴々の事を見直していた。やたら共にいた時は張り合ってきた生意気な鈴々の姿を思い出す許緒。

（あいつ、意外と優しいんだ。……今度会う事があったら、しんちゃんの事を教えてやるか）

今度会う事があったら話をしてみよう。もしかしたら、少しは互いの事を話して仲良くなれるかもしれない。しんのすけという共通の友人を得た今なら……と、許緒はそう思えたのだ。

もし鈴々に会うとしたらいつになるのだろうと、そう考える許緒。それと同時に、故郷の村に残してきた親友の顔を思い出す。手紙を送って陳留に来るよう呼んでみようか。許緒はそんな事を考えて笑みを浮かべた。

（そうだ、流琉を呼ぼう！　手紙書いて、お城で働いてるんだって教えて……きっと驚くだろうなぁ）

自分でも未だに少し信じられない時があるのだ。親友も同じように信じないかもしれないと思いながらも、微かに再会を計画し、胸躍らせる許緒であった……

――――――

第七話

「じゃ、とんのお姉さんとえんのお姉さんね」

「う、ううむ……」

「姉者、それでいいではないか。桂花はじゅんちゃんだぞ？」

「そうね。春蘭、それが嫌なら貴女は惇ちゃんになるわよ？」

「あー、それちょっと可愛いですよ、春蘭様」

「いいんじゃない？　お似合いよ、子供みたいなあんたにはね」

食堂に響く多くの声。しんのすけと星を招いての夕食。卓に並ぶのは全て曹操と夏侯淵の手作り料理だ。許緒が楽進達も誘ったのだが、三人は恐れ多いと断り、現状の顔ぶれとなっていた。本当はどこかの店にしようと考えていた曹操だったが、自分を満足させる店があまりない事を思い出し、自分が腕を振るう事にしたのだ。

既にその食事は粗方片付き、今は雑談時間となっていた。だが、しんのすけが夏侯姉妹の呼び方を決めていなかったため、こうして決めている最中だったのだ。星は先程から話題が自分ではなく、しんのすけへ振られている事に若干の不安感を覚えていたが、思ったような内容ではなく、しんのすけと自分の人となりを理解しようとしている内容ばかりだったため、少し安堵していた。

今は夏侯惇と荀？が言い合いを始め、それを眺め曹操と夏侯淵は笑みを見せ、しんのすけは許緒から、二人はいつもこうなのだと教

えられていた。星はそんな周囲を眺め、いつ話を切り出すかを迷っていた。

それは稟と風の事。宿で仕官すると言っていたのなら、仕官先はこの陳留しかない。であれば、曹操が何か知っているはず。だが、それを言い出す事が中々出来ない。星が懸念しているのは、そこから自分が仕官するように仕向けられる可能性だ。

（曹操殿は無類の人材好きと聞く。自分が欲しいと思った相手は何が何でも手に入れようとするとか。私も目をつけられたようだし、下手な事は聞けないな……）

星はそう判断し、切り出すとしても曹操本人ではなく、軍師をしている荀？にしようと決めた。曹操本人に言うよりも、仕官の誘いを受ける可能性が低いだろうと思ったからだ。その相手である荀？は夏侯惇との毎度の言い争いを終え、しんのすけが差し出したお茶を受け取り飲み干していた。

それにしんのすけがいい飲みっぷりと褒め、それを聞いた周囲が酒ではないと言いながら笑っている。言われた荀？は多少照れくさそうだったが、しんのすけの言葉が盛り上げるためのものと理解していたのだろう。それに小さくため息を吐き、言うのなら自分のような者ではなく、大酒飲みにしろと助言していた。

「じゃ、星お姉さんだね」

「ん？」

急に名前を挙げられたため、星はやや意外そうな表情を見せた。そんな星を曹操達が見つめ、楽しそうに笑みを見せる。

「趙雲、貴女お酒は強い？」

「まぁ、それなりには」

曹操の問いかけに星は素直に頷いた。別に何か誤魔化す類ではないと判断したからだ。それに夏侯惇が嬉しそうに頷き、杯を差し出した。

「そうか。なら、飲め」

「姉者、もう少し言い方があろう」

「そうですよ、春蘭様。もっと飲みたくなるような言い方しないと」

夏侯惇の言い方があまりに直球すぎるため、夏侯淵と許緒が揃って苦笑した。そんな二人の言葉に夏侯惇はキョトンとした顔をし、そんなものかと問い返していた。どうも彼女的にはそれで飲みたくなるようだ。

そんな三人を他所に、荀？はしんのすけから桃香達の事を聞き出していた。先程から、星があまりその事を喋らないようにしていると気付いたためだ。しんのすけはそんな事に気付くはずもなく、荀？の質問に素直に答えていく。

「で、劉備達とは公孫賛の城で共に過ごしていたのね？」

「ほい」

「そう……で、諸葛亮達はその頃からいた？」

「お？　誰？」

「諸葛亮よ。後は鳳統ね。どちらでもいいけど知らない？」

「そだね。オラ聞いた事無いぞ。そんな名前の人が桃香ちゃん達と一緒にいたの？」

「そうよ。でも、しんのすけが知らないか。そうなるとあの二人は城を出てから劉備に出会い、すぐに軍師になったのね」

自分達が桃香達と出会った時期を思い出し、星が話した城を出た時期を擦り合わせ、荀？はそう結論付けた。そこから分かるのは、桃香の運の良さと諸葛亮と鳳統の頭の巡りの良さだ。きっと、桃香は二人が才能の持ち主だとは知らなかったはず。そう荀？は断言出来た。

直接会った際、その人物は把握したのだ。とてもではないが、人の才を見抜く力はなさそうだと。そう、一言で言うのならお人好し。だが、それがただのお人好しではなく、どこまでもそれを貫こうという明確な意思を感じさせたのが意外だったが。

（現実を見ない夢想家と思えば、意外と見てたのよね……）

黄巾の乱の際、協力する事になったために荀？も桃香達と話す事はあった。そして初めての打ち合わせの時、乱を起こした者達を出来るだけ助けたいと言い出した際、曹操が余計な混乱や無用の揉め事を起こすと注意した事があった。

それに、桃香は確かにそうかもしれないと返した。だが……

――――でも、そうやって全てを悪い風に考えていったら何も変わらないと思うんです。まずは信じる事。悪い事を悪いと思って、考えを改めてくれる人はいるって。そういう希望を捨てない事も強さだ

と、私は思います。

そう言い切って、桃香は更に曹操へ問いかけたのだ。それは間違っていると言えますかと。さしもの曹操も、その桃香の言い分を絶対に間違っているとは言えなかった。だが、こう反論した。今の状況では、相手へ武器をちらつかせながら助けると言っている事と同義だと。

それに桃香は迷いもなく頷いた。それしか今の自分は出来ないからと。相手を無防備で助ける事が出来ない。でも、心から出来るだけ助けたいとは思っている。今は無理でも、いつかはそれを可能にするんだと努力し続けよう。偽善でいい。それで少しでも助けられる人がいるのなら。そう桃香は曹操へ語ったのだから。

（珍しく華琳様も楽しそうに笑っていたものね。自らの行いを偽善と言い切った劉備に）

その歩む道は曹操とは違う。曹操は最初から全てを助けるなど考えていない。自分へ刃向かう者を倒し、従う者を守る。それ以外の括りは曹操にはない。故に桃香の考えとは真っ向から対立するのだ。桃香は自分に従わない者だろうと、悪事をせず平和に暮らすのならそれでいいと言うからだ。

荀？はそんな事を考え、視線をしんのすけへ向けた。桃香がそんな風に言えるようになった原因が、しんのすけにあるような気がしたのだ。その要因として、しんのすけから聞いた桃香達との思い出話がある。

それを聞き、軍師として思った事があるのだ。それ故にしんのすけはある意味で危険だと勘が告げている。そのしんのすけは既に彼女から視線を外し、今は夏侯惇と話をしていた。

「関羽と趙雲は互角だと？」

「そうだぞ。とんのお姉さんはどれぐらい強いの？」

許緒から桃香達と曹操達が共にいた事を知っているしんのすけは、夏侯惇からも話を聞こうとした。当然ながら、根っからの武人である彼女が話すのは、同じ武人である愛紗や鈴々。

そこで夏侯惇が星はどれぐらい強いのかと思い、尋ねた事に対するしんのすけの答えが愛紗と互角。それに意外そうな表情を返す夏侯惇。何せ星は飄々としていて、強いと欠片と感じさせる事が無かったからだ。

そこへ返されたしんのすけからの問いかけ。それは夏侯惇の誇りを刺激した。愛紗とは手合わせをした事はない。それでも、遠目で見た限りかなりの強さだと感じた相手だったのだ。それと星が同じとなれば、自分の強さを示す簡単な手段は一つ。

それをどこかで悟ったのか、星は夏侯惇へ機先を制して告げた。自分は文醜に遅れを取ったと。それに周囲が驚きを見せる。文醜を知る曹操達は星の言った事の意味に。一方、文醜を知らない許緒は、星が躊躇いもなく自分が負けたと告げた事に。

「ちょ、趙雲？　それは本当か？」

「ええ。いや、私もまだまだ未熟でした」

「……ふむ、嘘ではないようだな。しかし、お前と関羽は同等としんのすけは言っているが？」

星の表情に少しも悔しさがない事に疑問を感じながらも、夏侯淵

はそう判断した。だが、ならば余計にしんのすけの言葉が浮いてしまう。愛紗の強さを知っている彼女としては、星が互角ならば文醜に負けるはずはないと考えたからだ。

星はそんな夏侯淵の言葉に何かを思いつき、苦笑しながら答えた。愛紗と手合わせしたと言っても明確な決まりもなく、ただ鍛錬の一環としてやっていただけ。故に、どこかで加減されていたのかもしれない。それで互角でも実戦ではどうかまでは分からないと。

それに夏侯淵だけでなく曹操や夏侯惇も納得しつつ、どこか疑問符を浮かべた。一応理屈は通っている。だが、何故か腑に落ちないと感じたのだ。星はそんな三人の反応を見て、夏侯惇への評価を改めていた。

頭の巡りは悪いかと思ったが、戦関連になるとそうではないらしいと。良くも悪くも武人なのだろうと思い、星は一人納得した。星が自分を低く見られるように言い出したのは、無論曹操の興味を薄れさせるためだ。

（猪々子に負けたとなれば、袁家を良く知る曹操殿だ。さぞ正確に私の力量を見誤ってくれるかもしれん。それが確認出来れば、稟と風の事も安心して聞けるのだが……）

しかし、星の目論見を曹操はどこかで見破っているのだろう。微かに楽しそうな笑みを浮かべ、夏侯惇へ視線を向けた。それに気付き、夏侯惇は不思議そうに曹操へ視線を向ける。

「春蘭、趙雲はああ言っているけど、一度手合わせしてみたら？しんのすけは趙雲は強いと言っているのだし、貴女の力をしんのすけに見せて、本当の強さを教えてあげるのもいいと思うのだけど」

「曹操殿、それはつまり私に夏侯惇殿と戦えと？」

「あら、嫌なの？　貴女も武人なら強い相手と手合わせしたいと思うでしょ？」

「趙雲、私は一向に構わんぞ。文醜に負けたらしいが、私はお前がそんな奴には見えんしな」

曹操は雰囲気から、夏侯惇は感覚的に、それぞれ星の実力を感じ取っていた。周囲もそれに同調するかのような視線を向けている。夏侯淵は微笑を浮かべ夏侯惇を見つめているし、荀？はどこか疑うように星を見つめ、許緒は素直に興味を持って。

それでも、どこか頷くのを躊躇う星。それに曹操が何かを思いつき、視線を荀？へ向けた。それに頷き、彼女はしんのすけへある言葉を告げる。それが星を頷かせる決め手となる。

「しんのすけ、趙雲は春蘭に負けると思う？」

「お？　誰が相手でも星お姉さんは負けないぞ？」

しんのすけの中では、星はアクション仮面でもあるのだ。故に、負けは無い。しんのすけの思う敗北とは、ヒーロー達が見せなかった姿。つまり諦める事を言うのだから。しかし、それを周囲が知るはずはない。星は、しんのすけが迷いもなく断言した事に内心で嬉しく思いながら、表情は仕方ないとばかりにため息を吐いた。

そこまで言われては受けない訳にいかないと思ったのだ。きっとしんのすけは気にしないだろうが、これで受けずに逃げれば彼の言葉が嘘になってしまう。星はそう考え、一度目を閉じた。

（お前はどこまで私に苦難を与えるのだ？　だが、純粋に信じてく

れるその想い……応えねば武人ではないか）

そう思い、誰にも気付かれないように小さく星は呟く。

――――私は、決して負けない……か。

そう噛み締めるように呟き、星はゆっくりと目を開く。その表情に曹操達は息を呑んだ。先程まで試合を渋っていた者のそれではなかったのだ。それだけではない。その眼光は静かに、だが激しく輝いていたのだから。

「では夏侯惇殿、一手お相手願えますかな？」

「う、うむ。なら、明日の朝に中庭でどうだ？」

「承知した」

夏侯惇が僅かに気圧される程の眼力。それに曹操は、自分の目が間違っていなかったと確信していた。そして、同時にしんのすけがどれ程星の中で大きな存在になっているかも。

それは星を手に入れようとするならば、しんのすけを手に入れなければならないと曹操に思わせた。そこまで考え、曹操は何故星がそこまでしんのすけに入れ込むのかを疑問に思う。

（最初は本当に麗羽の縁者かと思ったけどそうではなさそうだし、趙雲の縁者でもなさそうね。ふむ、旅を共にしている理由……それは一体……？）

そう考え、曹操は久々に面白くなってきたとばかりに笑う。星と夏侯惇の試合。しんのすけと星の関係。鏡を求める訳。どれも自分

の好奇心を満たすには十分だ。そう思い、曹操は酒を軽く煽って窓へ視線を向ける。明日は楽しい一日になりそうだと呟きながら……

翌日、城の中庭には曹操を始めとする主だった者達が揃っていた。楽進達三人もそこにはいる。李典が簡易的に作った観客席に座り、夏侯淵と許緒は何かを話しているし、荀?は曹操と共に特別製の観客席に座り、隣で侍女のような事をしている。

楽進は于禁と李典と星の実力がどれ程かを話し合い、予想を言い合っていた。しかし、李典が周囲に賭けを持ちかけようとして楽進の目が鋭くなる。それに李典が軽く怯み、于禁が楽進を宥めていた。

そんな者達から少し離れ、しんのすけは星と夏侯惇の二人と話をしていた。

「星お姉さんも、とんのお姉さんもお怪我しないようにね」

「ああ。心配するな、しんのすけ」

「そうだぞ。趙雲はともかく、私は決して怪我などせん。まぁ、その気持ちは嬉しく受け取っておくがな」

しんのすけの子供らしい言葉に二人は笑みを返す。そんな二人の返事にしんのすけは頷いて、ふと何かを思い出したように表情を変えて、夏侯惇へ視線を向けた。

「あ、とんのお姉さんに一つお願いがあるんだ」

「ん？　私にか？」

星ではなく自分が指名されるとは思わなかったのか、夏侯惇はどこか意外そうにしんのすけを見つめた。

「星お姉さんが勝っても怒らないでね」

「何かと思えばそんな事か。ああ、いいぞ。私も武人だ。そうなった時は、潔く負けを認める」

「ほう……では、負けを認めてもらうとしますかな？」

「言っていろ。華琳様の前なら私は無敵だ！」

そう言って夏侯惇は星から距離を取るために歩き出す。しんのすけはそれを見て試合が始まると理解し、星へ頑張ってと告げて観客席へと歩き出す。その背中を見送り、星は笑みを浮かべる。

そして、それを消して夏侯惇へ視線を戻す。先程夏侯惇が告げた宣言。それに対し、星も返す言葉がある。だが、それは今言うべきではない。そう思い、星は槍を握り締める。あの文醜との試合を思い出し、星は一人頷く。もう、何事にも動じないと。

一方、しんのすけは曹操に呼び止められ、許緒達の座っているのとは違う観客席にいた。曹操が少し聞きたい事があるし、ここの方が眺めもいいと言ったためだ。だが、そこは曹操と荀？の分しか場所が無かったため、しんのすけは意外な場所に座っていた。

それは、曹操の膝の上。荀？は最初それを自分が代わると言ったのだが、しんのすけは子供とは言え、それなりに重い。それを膝に乗せ続けるのは文官の彼女には辛いと曹操は告げ、自分の膝に乗せ

たのだ。それにしんのすけは曹操を心配し地面でいいと返したのだが、それには荀?も呆れた。

――ったく、子供がそんな事心配すんじゃないわよ。

――気にしないでいいわ。貴方くらい平気よ。

二人にそう言われたため、しんのすけは嬉しそうに頷いて現状に至る。

「ねぇしんのすけ、貴方は趙雲が勝つと思っているの?」

「勝つかはわからないけど、負けないって事はわかるぞ」

「あのね、負けないなら勝つしかないじゃない」

しんのすけの言葉に荀?は呆れるように言葉を返す。だが、それにしんのすけは不思議顔。それを見て、曹操は何かを理解したのか意外な表情を見せた後、小さく微笑む。それに荀?が気付き、疑問符を浮かべた。曹操の笑みの理由が今一つ理解出来なかったのだ。

そんな彼女の心境を察したのだろう。曹操は笑みを浮かべたまま、しんのすけの考えを説明した。しんのすけの負けは自分達が考える勝ち負けとは違う感覚なのだと。

「しんのすけの考える負け。それは相手に屈する事よ。どれだけ惨めになろうとも、負けたと思わない限り負けない。そういう事でしょ?」

「おー、もうちゃんってエ……スゴイね」

危なくエスパーと言いそうになり、思い留まるしんのすけ。その間の思案を見て、曹操は言いたい言葉が出てこなかったのだろうと思い、少し苦笑。

「成程……にしても、あんた本当に子供？」

「あれ？　五歳って大人だっけ？」

「歳の事言ってんじゃないわよ！　はぁ～、いいわ。あんたはやっぱ子供よ」

しんのすけの考え方が子供らしからぬ気がした荀？だったが、その対人対応は未熟な事を痛感し、呆れるようにそう言い切った。それに曹操は苦笑するものの、しんのすけの考え方には共感出来るものがあった。

相手を完全に負けさせる事は難しい。圧倒的な力で叩こうと負けを認めない者は認めない。或いは、どれだけ絶望的になろうと諦めず抗う者達もいる。それが良い意味でならばいい。しかし、曹操は知っている。それを悪い意味でしている存在を。

（朝廷がそうなのよね。どう考えてももう死に体。それでも、権威にしがみ付き無様に生き恥を晒し続けながらも負けを認めない。厄介なものだわ……）

そんな事を考え、曹操は意識を切り替える。試合が始まったからだ。視線の先では、夏侯惇の斬撃を星がかわしながら槍を振るっている。その様子に、夏侯淵達は感心したような眼差しを星へ向けていた。

星が文醜に負けたという事を既に知っている夏侯淵達。だが、それならば目の前で繰り広げられる光景は何なのだろうか。曹操軍で

一番の武を持つ夏侯惇相手に、一歩も引かぬ戦いをしている星。それが意味する事は、ただ一つ。

（（（趙雲の話は嘘か、或いは何か事情があって文醜に負けた……））））

文醜を知る曹操、夏侯淵、荀?は揃ってそう判断した。特に、かつて袁紹の元に居た荀?は強くそう思った。一方、星と直接戦っている夏侯惇はそんな事さえ忘れているようで……

「やるな、趙雲っ！」

「まだ未熟な身ではありますが、褒めて頂けるとは光栄ですな」

夏侯惇の斬撃を槍で払い、即座に突きを返す星。それを上体の動きだけでかわす夏侯惇。そこから蹴りを放ち、槍を上に叩き上げる。しかし、そこから星も夏侯惇の蹴り足を蹴る事で、相手の体勢を崩し反撃を鈍らせる。

そこから互いに、もう一度距離を取り構える二人。その表情は笑みだ。そう、星も夏侯惇も理解していた。目の前の相手は自分と全力で戦える存在だと。それがどういう事かを考え、両者は同じ表情を浮かべる。

そして、再び動き出す。夏侯惇は七星餓狼という剣を使う。だが、その長さは星の持つ龍牙に負けていない。間合いがあまり大差ないのなら後は使う者の力量次第とばかりに、星の速度に夏侯惇は負けずついていく。一進一退の攻防。攻め手と守り手が瞬く間に入れ代わるそんな光景。

それを見つめ、周囲も徐々に熱くなっていく。故に観客席から声援が出るのは当然と言えた。それが、夏侯惇を応援するものばかり

になるのも当然。ここは曹操の城なのだから。

「春蘭様、頑張ってくださーい！」

「そこやー！」

「いけいけなのー！」

許緒の言葉に続くように声を張り上げる李典と于禁。だが許緒は敬愛している上の応援に対し、二人はとりあえずの雰囲気から応援しているに過ぎない。

「強い……春蘭様相手に趙雲殿は少しも負けていない」

「うむ、姉者相手に五分とはな。この大陸にまだあのような者が埋もれていたとは……」

一方で楽進と夏侯淵は星の実力に感心し、その挙動を見逃さないようにしていた。遠い幽州の地で戦っていた星。その名はそこまで轟く事は無かったため、二人にとっては思わぬ存在として目に映ったのだ。

「ちょっと春蘭！　いつまで時間かけてるのよ！　さっさと終わらせなさいよっ！」

声を張り上げる荀?。それは応援と言うよりは苦情だったが、その根底には夏侯惇の武への信頼がある。それを感じ取り曹操は小さく笑うも、視線を試合ではなく膝の上のしんのすけへ向けた。しんのすけは、一度として声を出さずに試合を見つめていたのだ。

それが曹操には意外だった。てっきりしんのすけも、他の者達と

同じで星に声援を送ると思っていたからだ。曹操がそんな事を思い、しんのすけにそれを問いかけようとした瞬間だった。しんのすけは小さく頷くと拳を握り締め、息を吸い込んで叫んだ。

「星お姉さんもとんのお姉さんも負けるな～っ！」

その言葉に込められた意味を知る曹操と荀？はそれに軽い反応を示す。あの文醜との試合で心構えを固めた星はその言葉にも平静としていた。

だが、その三人以外がその声に揃って戸惑いを見せたのだ。つまり、夏侯惇もである。

「「「「「「は？」」」」」」

「どういう意味だ、それはっ！？」

更に夏侯惇は思わず視線をしんのすけへ向けたのだ。星だけの応援であれば何とも思わなかった。だが、自分にまで負けるなとはどういう意味か理解出来なかったためだ。彼女の失態はそこ。声が聞こえてしまったが故に考えてしまった。

夏侯惇が視線を動かしたその瞬間、しんのすけ以外が呆気に取られた。試合の最中にそんな事をすればどうなるか。それを誰もが理解していたからだ。

星はそんな夏侯惇に情けも何もかけず槍を動かす。あの文醜との戦いで決めた心構え。何が起きても動じない事。それが星を動揺させる事なく、しんのすけの言葉と夏侯惇の突然の行動にも対処させた。

星の動きに気付き、夏侯惇が動こうとした時にはもう勝負はついていた。夏侯惇の喉元に突きつけられる槍先。しかし、星はどこか

驚いていた。

「……やりますな」

「ふんっ！　……これが精一杯だったがな」

星の視線の先には、自分を斬り上げようとする夏侯惇の剣があった。そう、星が夏侯惇を仕留めようと一歩踏み込めば、その剣が体を襲う。つまり、これが実戦であれば夏侯惇は星に命を絶たれているが、最低でも星へ痛手を負わせる事が出来ただろう。

更に、上手くすれば相討ちにさえもっていけるかもしれない。あの瞬間でそんな動きを夏侯惇はやってのけたのだ。それに星は感心したという訳だが、それは最後の悪あがきと理解している夏侯惇はどこか不機嫌だった。

その理由は簡単。曹操の前なら無敵と言ったにも関らず、何とか引き分けにもっていくのが精一杯だったからだ。

（くそっ！　華琳様の前で無様な姿を晒してしまった……）

そんな事を考え、自身へ苛立つ夏侯惇。その彼女へ星は声を掛けた。

「夏侯惇殿……」

「何だ！」

思わず不機嫌な声を返す夏侯惇。勝ち誇られるとでも思ったのだろう。だが、そんな思惑をどこか外すように星は不敵に笑って告げる。

――私はしんのすけの前なら負けませんぞ？

それが試合前の自分が言った言葉に対するものだと気付き、夏侯惇は怒りを覚えた――のだが、すぐに何かに気付きそれを鎮めた。それに星は意外そうな表情を浮かべた。これで必ず怒るだろうと踏んでいたのだ。それをキッカケにからかおうとも思っていたのだから。

そんな星へ夏侯惇は視線を向け、その心情を読み取ったのだろう。呆れたようにこう言った。

――お前にとってのしんのすけが私にとっての華琳様なら、その言葉に怒る事などない。その気持ちは誰よりも分かるからな。

そういう事だ。そう言って夏侯惇は曹操の前へと歩いていく。その背中を見つめ、星は呆気に取られる。しかし、すぐに立ち直り楽しそうに笑った。その言葉は、どこか愛紗も言いそうなものに思えたからだ。どこにも忠義者はいるのだなと、そう思い星は笑みを浮かべる。

（主君への忠心が強い者はどこにでもいるものなのだな。いや、名を上げる者の下には必ずそういう者がいるのだろう）

星の視線の先では、曹操から最後の余所見を指摘され反省する夏侯惇の姿がある。しんのすけは、そんな夏侯惇へ何かを言って怒鳴られていた。だが、荀？がしんのすけに賛同しているようなので、きっと正論を言ったのだろう。そう思い、星もそちらへと歩き出す。

「春蘭、何を言われても動じないでいなさい」

「はい……」

「もー、しっかりしてよね」

「申し訳ありません……って、お前が言うなっ！」

「でもしんのすけの言う通りでしょ。あんな事、試合中に普通しないわよ」

「あんな言葉を言われたら気になるのが普通だ！」

そこから始まる二人によるいつもの言い合い。それを聞きながら苦笑する許緒や夏侯淵。楽進は、しんのすけの言った言葉の意味が気になっているようで、先程から考え込んでいる。李典と于禁はまさかの結末に賭けなくて良かったと言って安堵の息を吐いていた。

曹操はそのやり取りを聞きながら、視線をしんのすけへ向けた。しんのすけは既に膝から下りて、星の傍で何かを話している。その表情はどこか嬉しそうだ。それに曹操はふと思った事があった。

「趙雲、ちょっといいかしら」

「何ですかな？」

「しんのすけは貴女の何なの？」

その問いかけに星は躊躇う事無く答えた。夏侯惇にとっての曹操だと。それにさしもの曹操も呆気に取られ、やがておかしくて仕方ないとばかりに笑い出した。周囲も星の答えが面白かったのか笑い出し、星はそれに不敵な笑みを返すのみ。

しんのすけはそんな周囲に不思議そうに思うものの、それに呼応

するようにいつもの高笑いを上げた。その様子にまた違う笑いが起き、こうして星と夏侯惇の試合は終わりを告げた……

その日の夜、曹操の部屋に荀?は呼び出された。その理由は聞かされなかったが、何となく彼女は悟っていた。

「お話とは何ですか、華琳様」

「桂花、趙雲を手に入れるにはどうしたらいいかしら?」

そんな曹操の突然の言葉にも、荀?は驚く事もなく答えた。

「今は諦めるしかないかと思います」

「どうして?」

「趙雲の目的はおそらく主君探し。であれば、全ての諸侯を見ない内は納得しないでしょう」

「……そう。つまり、全ての可能性を潰さないと私に心から従わないという事ね」

「御意」

曹操はその答えに納得したように頷いた。自分の考えと同じだったからだ。星は自分が仕えるに相応しい者を探している。だからこ

そ、あちこちを旅している。そう、話を聞く限りは思っていたのだ。
しかし、曹操にはもう一つ聞いてみたい事がある。なので、荀？へ次の質問をぶつけた。これに関してはどういう考えを持っているのか。それが曹操としては非常に興味深かったのだ。

「では、しんのすけはどう？」

「それは……止めた方がよろしいかと」

その問いかけに荀？はそう返した。曹操としてはそんな彼女の反応が面白い。自分とは違う意見を持っていると感じたからだ。故に聞いてみようと思い、無言で先を促した。

「しんのすけは子供です。ですが、趙雲はしんのすけをこう例えました。春蘭にとっての華琳様だと。つまり、しんのすけを主君かそれに近しいような存在を考えています。季衣達はあれを冗談か何かと取ったでしょうが、私はあれが真実と考えています」

「その根拠は？」

「二人の現状です。この時勢に子供を連れて旅をする。趙雲の目的からだとしても、どこか腑に落ちません。親類でもない子供を連れて行く必要性がありませんし」

「でも、しんのすけを主君のように考えていれば納得出来る……」

「はい。それに……しんのすけの異常性には、華琳様も気付いていらっしゃるかと」

その荀？の言葉に曹操は頷いた。名前の響きの珍しさ。更に許緒

の話では真名もないとの事を彼女は聞いている。それらが示す事は、少なくてもしんのすけはこの大陸の者ではないという事。それだけでも妙なのだ。

何よりも曹操が感じた異常性。それは、その考え方。子供らしからぬ部分が時折見えるのだ。それをおそらく荀?も感じたのだろう。しかし、曹操はしんのすけを得るのはそこまで難しいとは思っていなかった。

「でも桂花、それならしんのすけを手に入れる事は趙雲を手に入れるのと同義ではなくて?」

「確かに普通ならそうでしょう。しかし、あの二人はどこか異質な関係と思われます」

荀?は語った。しんのすけと星の関係は主従のようで対等。であれば、どちらかが従わないのなら片方もそれに追従するだろう。つまり、しんのすけを引き止めようとも、星を引き止められないのならそれは不可能。

そして、逆もまた然り。星が主君を見つけようとも、それをしんのすけが認めなければ仕える事はないだろうと。そこまで言って、荀?はこう締め括った。

「華琳様がどうしてもあの二人を欲しいと言うのでしたら、今は善意で協力する方が良いかと思います。下手に仕官の誘いをするより、二人にはその方が有効です」

「……成程。趙雲はともかく、しんのすけは単純だものね。確かに今は恩を売る方がいいか……」

「ですが華琳様、一つだけご忠告を」

曹操の思案を遮るように荀?は声を発した。それに曹操は不思議そうな表情を返す。何か他に注意するような事があっただろうかと。曹操がそれを尋ねる前に、荀?はこう言い切った。

――趙雲はともかく、しんのすけは華琳様の敵かもしれません。

その言葉には、明確な警戒心が込められていた。その理由を詳しく曹操は聞き出す事にする。そこで荀?は語るのだ。しんのすけから聞いた桃香達の話を。

あの思い出話から彼女が感じた事。そう、桃香の思想にしんのすけが与えた影響力だ。それを聞き、曹操がむしろ余計に興味を覚えるとは思わずに……

それから数日後、しんのすけと星は陳留を後にする事になった。星は一度たりとも仕官の誘いを受けなかった事を疑問に思いながら、ならばと稟と風の事を尋ねる事が出来た。しかし帰ってきた答えは、二人が仕官したという報告はないとのもの。

それに星は愕然となったが、それを隠し調べてくれた事に感謝を告げた。鏡の情報も特になく、星は収穫なしと思いやや不満そうだったが、連絡に使っていた商人と出会い、もし稟と風に会った時のための伝言を預ける事は出来た。それに、しんのすけは許緒や楽進達といった友人を得た。そう思う事にし、無駄ではなかったと考えるようにした。

「では、夏侯惇殿、夏侯淵殿、お体にお気をつけて」

「うむ、また顔を出せ。お前との再戦を楽しみにしているぞ」

「お前も達者でな、趙雲。それと今度は姉者と凪だけではなく、真桜や沙和も相手をしてやってくれ」

「そうですな。特に李典殿は私と同じ槍使いですし……昨夜のメンマ餃子をまた作って頂ける事で手を打ちましょう」

この数日で何度か手合わせをし、互いを認め合い始めた星と夏侯惇。夏侯淵は、夏侯惇との繋がりで星を気に入り、最後の日には彼女の好物であるメンマを使っての餃子を作り、最後の夕食に華を添えた。

夏侯淵が星の最後の言葉に頷きながら笑い、夏侯惇はそれに食い意地の張った奴だと返す。そんな雰囲気でも、三人が武人として笑顔を向け合っている横では、しんのすけは許緒達と別れの挨拶を交わしていた。

「しんちゃん、また遊びにおいでよ。今度はもっと色んな遊びを教えて」

「うん、いいよ」

「しんのすけ、趙雲殿をあまり困らせないようにな。それと、今度は趙雲殿を手こずらせるという動きを見せてくれ」

「元気でね、しんちゃん。今度来た時は、もっと安全な街になってるのー」

「しんのすけ、あのからくり話はおもろかったわ。今度はじっくり

聞かせてな」

「がくちゃんもうっちゃんもりっちゃんもお元気でね。オラ、みんなの事忘れないぞ」

許緒とはあれからも数回共に遊ぶ事があった。鈴々とも盛り上がったあっち向いてホイなどは、かなりの熱戦となったのだ。楽進とは星絡みで接する事が多かった。早朝鍛錬にも何度か参加し、しんのすけの動きを見て感心した楽進。だが、星からもっと速く動く事もあると教えられ、それを見たくてしょうがなかったのだ。

まぁ、それを星は敢えてしんのすけへやるなと告げていた。楽進の性格を考え、再会した際の楽しみにしようと思ったのだろう。

于禁は一度休みにしんのすけと共に街へ出かけた。その際、二人は盗みの現場に遭遇したのだ。その際ふと漏らした警邏の愚痴に、しんのすけが告げた言葉が警備隊の効率化への道を作り出していた。おまわりさんはいないのとの言葉がそれ。

それを詳しく聞き、交番などの要素を知った于禁はその日の内に楽進や李典と相談。三人で草案を作り、荀？へ提出して指摘を受け、更に練った物が昨日曹操に提出されたのだから。

李典とは昼食を共にした際にしたからくり話。しんのすけは簡単な仕掛けのからくりを見せてもらった際、カンタムロボのおもちゃの話を聞かせたのだ。その時は、しんのすけの思いついた話として李典は捉えた。バネを使って腕が飛ぶ仕掛けやボタンを押すと作動する点等、李典の発明家精神を大いに刺激する内容だったのだ。

そんな風に二人と別れを惜しむ夏侯惇達を見て、曹操と荀？は笑みを浮かべていた。無論、その質は同じではなかったが。曹操は夏

侯惇達の様子に微笑み、荀？はまるで仲間を見送るぐらいの雰囲気にやや呆れていた。

それでも、彼女もどこか寂しそうだったのであまり人の事は言えないだろう。しんのすけと星はそれぞれに別れの言葉を告げ、最後に曹操の前に歩き出て声を掛けた。

「曹操殿、荀？殿、お世話になりましたな」

「もうちゃん、お部屋貸してくれてありがと。じゅんちゃんは……何となくありがと。オラ、楽しかったぞ」

「ちょっと！　何となくって何よ！　他に何かあるでしょ、何か！」

しんのすけの言葉に怒る荀？。それを横目で見て微笑む曹操。しんのすけはそんな荀？の反応に嬉しそうな顔を返し、ならばとこう告げた。

――あは～、そーゆームキになってるじゅんちゃんが好き～。

それに荀？が言葉に詰まり、周囲が笑う。苦笑する者、微笑む者、呆れる者と様々だが、誰もが楽しそうな笑みを浮かべていた。やがて荀？の怒りが収まったのを見て、曹操は二人へ返事を返す。

「別に礼を言われる事ではないわ。それに、楽しませたつもりは無かったわよ。しんのすけも趙雲も達者でね」

「趙雲、あんた達がこれからどこへ行くか知らないけど、少ししんのすけの言葉遣いに気をつけさせなさい。相手によっては酷い目に遭うわよ」

曹操は二人の言葉を思い出し苦笑していた。心からそう思っていたからだ。世話したのは自分がしたかったから。滞在中に楽しんだとすれば、それはしんのすけが自分でそう思っただけなのだから。

一方、荀?はしんのすけを心配して星へ忠告した。数日とはいえ、しんのすけの利発さには密かに感心していたので、彼女個人としてはその行く末をどこか若干楽しみにしていたのだ。まぁ、曹操の軍師としては少々複雑な心境ではあったが。

荀?の言葉に星はしっかりと頷き、しんのすけは少し嬉しそうに頷いた。荀?の言葉が心配してのものだと気付いたのだろう。そんなやり取りを終えた二人へ、曹操はこう告げた。

もし恩義に感じたのなら、いつか返しに来いと。それに星は苦笑し、しんのすけは分かったと声を返した。そして、最後にこう星へ言った。

――一度洛陽に行ってみなさい。貴女としんのすけは今の都を見た事がないでしょ?

その言葉に星はふむと呟き、目的地を与えてくれた事に感謝して、シロを連れてしんのすけと共に城を去った。

こうして、しんのすけと星は次の目的地へ向かう。それは、大陸の首都である洛陽。そこではどんな出会いが待つのだろうか。そんな事を思いながらしんのすけは歩く。

目当ての二人に会えなかった事だけが不満ではあるが、しんのすけも星もその無事を疑ってはいない。いつか会えると、そう信じているからだ。

「次はみやこですかぁ。一番大きい街ってホント?」

「そうだ。些か不安もあるが、私も楽しみにするか。如何なるメンマがあるのだろうか……」

「クゥ～ン」

青空の下を歩きながら笑みを浮かべるしんのすけ達。次に訪れる先が都と聞き、期待に胸を膨らませるしんのすけ。星はそんな様子に笑みを見せながら、好物のメンマに思いを馳せる。シロはそんな星にやや呆れるように声を出し、項垂れながら歩く。

三者三様の表情を見せながら彼らは行く。ここで得た縁と思い出を胸に次の街へと……

「それにしても、趙雲が捜している者達の情報も無かったとはね」

二人が去った後、執務室で仕事しながら曹操はふと呟いた。それを聞き荀?も頷いた。星から聞いた名前の者達はいなかったのだ。黄巾の乱の最中やその後に仕官した者の中から、文官として採用した者限定で捜したのだが、該当する者が見つからなかったのだから。

「はい、戯志才と程立と言う者はいなかったものですから。ただ……」

「ただ?」

荀?の言葉に不思議そうな表情を浮かべ、曹操は続きを尋ねた。それに荀?はため息混じりに告げた。似た名前の者が一人だけいた

と。ただ、同時に仕官した者の名前が余りにも違うので、その者も別人だと判断したのだと。

星は一つ思い違いをしていた。二人が仕官するなら仕方なくしたのだろうと考え、稟の名前を正しく伝えなかったのだ。そう、偽名を使っているだろうと。更にそこにある出来事も加わり、再会は果たせなかったのだから。

そんな荀？の報告を聞いて、曹操は興味を抱いたのかその者達の名を尋ねる。それに荀？は調べた際見た記述を思い出し、告げた。その名は……

――――郭嘉と程？です。

こうして運命はすれ違う。再会の日は遠ざかり、しんのすけ達は二人の近くに来ていた事を知らないまま離れていく。絆が再び絡み合うのはいつの日か。それは、誰にも分からない……

――――――

第八話

しんのすけと星は言葉を失っていた。シロさえも眼前の光景に声さえ発しない。期待を抱きながら訪れた洛陽。首都という事もあり、どれ程賑わっているのかと思っていたしんのすけにとって、その実情は絶句するに相応しいものだった。

道行く者達はどこか生気がなく、胸を張って歩いている者は見渡す限りいない。いや、いるにはいる。そう、兵士だ。やたらと威張り散らすかのように我が物顔で歩いているのだ。

「……しんのすけ、一先ず宿を探すぞ」

「ほい」

今まで訪れた中でもかなり酷い部類に入ると思いながら、星はしんのすけを促すように声をかける。星はどこかで洛陽が廃れ始めているとは知っていた。それでも、ここまでとは思わなかった。立っているだけで疲れる。見るに堪えない。そんな気にさせられる光景に、星は改めて朝廷の現状を見た気がした。

星はしんのすけへ、ここでは言葉遣いに細心の注意を払えと真剣に言い聞かせていた。荀?から言われた指摘。それがここでは身近で起きそうだと思ったからだ。しんのすけも周囲の雰囲気から何となく今までと違う事は感じ取ったのだろう。神妙な表情で頷いた。

星が町人から宿の場所を聞き出して歩くしんのすけ達。シロも、これまでと違う異質な空気からか、あまり二人の傍を離れないようにしていた。宿に辿り着き、星は宿の主人から疑問に思った事を聞き出そうとした。その原因をどこかで察している星としては、主人に迷惑をかけるつもりもないので、比較的軽く尋ねる。

「主人、最近の景気はどうだ？」

「へぇ……ご覧の通りで」

宿からはあまり人の気配がなく、活気もない。星はその答えからやはりと思い頷いた。

「そうか。あちらの方が理由かな？」

「……大きな声じゃ言えませんけどね」

星が言葉と共に視線を向けたのは、王宮のある方角。それに主人は微かにため息を混じらせて返す。そこから星は話が長くなると判断し、しんのすけへシロと共に部屋へ行っていろと告げる。それにしんのすけも頷き、シロと共に部屋へと向かう。

その背中を見送り、星は内心で曹操がどうして洛陽へ行くよう薦めたかを理解していた。この大陸の頂点に君臨する朝廷。それがどんな存在となっているかを教えるためだと。だからこそ、曹操はこう言ったのだろう。

――貴女としんのすけは今の都を見た事がないでしょ？

（何故今のとつけたのかと思っていたが、やはりこういう事か。曹操殿は知っていたのだな。洛陽が腐敗した朝廷の影響を受け、衰退している事を）

嫌な情報の教え方だと思いながら、星は小さく息を吐く。南皮や陳留といった都市を見てきた後だと余計にその酷さが分かる。これは、たいりく防衛隊としては見過ごせないものだ。よりにもよって、

朝廷のお膝元が一番活気のない街になっているなどとは。
しかしそれを正すのは今は無理。そう思い星は主人と話を続ける。愚痴を聞きながら、少しずつではあるが現在の洛陽の事を知っていく星。しかし、その表情は時間が経つにつれて険しさを増していくのだった……

（怒りを通り越して呆れるしかないとは……）

主人との話を終えた星は、部屋に入り寝台の上に座って強烈な疲労感を感じていた。聞けば聞くだけ朝廷の腐敗振りを嫌と言う程に感じたのだ。しかし、それが怒りだったのも途中まで。頂点を過ぎると怒りさえ湧かなくなり、どんどん無気力になっていくのだ。
呆れ果てて物も言えない。最後には星も主人も同じ顔をし、大きくため息を吐くしか出来なかったのだから。

「ね、どうしたの？」

「いや、長話に少し疲れただけだ。もう少ししたら食事に行くぞ。先程主人から美味い店を教えてもらった」

「おー、それは楽しみだぞ」

「キャン」

しんのすけの変わらない雰囲気に、星は少し癒されたように笑みを返した。しんのすけは星の告げた言葉に嬉しそうに返事を返し、

シロへ視線を向けて軽くじゃれ合いを始める。その光景を眺め、星は小さく笑う。

ゆっくりと鬱屈していた心が解されていくような感覚。安らぎと呼べる気持ちをその光景から得ていく。静かにだが、確かにある幸せ。それを噛み締めるように星は微笑む。

「しんのすけ、シロ、ここは明日にでも発とう。あまり情報も期待出来んしな」

「ほい」

「キャン」

星の意見にしんのすけとシロも反論などなく、むしろ今すぐにでも立ち去りたいぐらいだった。しかし、疲れているのも事実。それに、どこかで少しだけ期待している事があった。旅の醍醐味の一つ、食事だ。

しんのすけも星もそれだけをどこかで楽しみにしている。それからは今後の行き先の相談となった。星としては黄巾の乱で名を挙げた孫策の事が気になっているので、この後は江東に行きたいと考えていた。しんのすけはそれに構わないと返す。

「星お姉さんが行きたいとこ行けばいいよ。オラ、それについてくだけだし」

「そうか。だがしんのすけ、今の内に言っておくが……」

星のその言葉にしんのすけは不思議そうな表情を見せる。星の表情が真剣だったのだ。何かそんな重要な話があるのだろうかと、そう思いしんのすけはその続きを待つ。シロも星の雰囲気からお座り

の姿勢になり、静かにその言葉を聞いていた。
星はそんな光景に頷き、はっきりと告げた。それは自分の決意であり覚悟。ある意味での臣下の礼。

――この旅が終わった時、出会った者達の中からお前が助けたい者を決めてくれ。私はそれに従う。その相手が誰であろうと、だ。

その言葉にしんのすけは声が無かった。出会ってから今まで、自分は星達についていくだけだった。何かを言うとしても参考程度に過ぎず、決定権などは無かったからだ。しかし、星の言った意味はしんのすけでも理解出来た。
以前聞いた星の旅の目的。その答えを自分に決めて欲しいと言われた事を。世の中を救う相手の選別。それを任されてしまったと。そこまで考え、しんのすけは混乱した。

「お、オラが……決めるの？　それで星お姉さんはいいの？」

「ああ」

「えっと……じょーだんだったり……？」

「しない」

「……だよね」

そこでしんのすけは星の覚悟が本物だと確信した。故に項垂れた。それは決して面倒だと思ったからではない。その責任感の重さを分かってしまったからこその行動だった。今まで彼は、明確に誰かの人生の大きな選択を自分の判断で決める事などなかった。
だが、今回の星の言葉はそれだ。星とて、子供であるしんのすけ

にこんな事を任せるのは、正直心苦しい。しかし、星はしんのすけに決めて欲しかったのだ。ずるいとは思っている。だが、しんのすけは感受性が豊かだ。きっと、自分の気持ちを感じ取り考えてくれると信じていた。

（許してくれとは言わん。私はある意味でお前を利用しているのかもしれん。あの日の誓いを自分で破っているのやもしれない）

それでも、星は躊躇わない。しんのすけが告げたあの日の決意。それを支えると決めた以上、主体を自分ではなくしんのすけに置きたかったのだから。稟や風が聞けばどう思うだろうと考えながら、星は黙ってしんのすけを見つめた。

「星お姉さん……」

「……何だ？」

どれ程沈黙が流れたのだろうか。一刻のようにも、一瞬のようにも感じる間の後、しんのすけは顔を上げて、いつもの表情でそう切り出した。

それがどこか星には意外に思えた。てっきり真剣に取り合い、表情もそれらしくなると思ったのだ。そんな風に星が内心疑問を抱いていると、しんのすけは平然とこう返した。

――今は、いいよもやだも言えないけど、ちゃんとオラ考えるぞ。で、答え出るまでけっこー待ってて欲しいんだけど……ダメ？

その最後の小首を傾げての言葉に、星は呆気に取られる。そしてしばらくしてから笑い出した。重大な問題と考えたからこそ、即答を避けたしんのすけ。その返事の仕方に星は心から嬉しく思えたの

だ。それと同時に、自分もどこかで性急に事を進めようとしていたと思い、内心苦笑。

しんのすけは星が笑い出した事に最初こそ面食らっていたものの、自分の言葉に答えてくれていないと気付いて抗議した。

「ちょっと、オラへのお返事は！」

「くくく……いや、すまん。そうだな。それでいい。むしろそうしてくれ。お前が納得するまで考えてくれる方が、私としても嬉しいからな」

怒った顔のしんのすけへそう謝罪し、星は言い切った。その言葉にしんのすけも納得し、怒りを静めて頷く。そして、この話は終わりとばかりに星が食事をしに行こうと立ち上がって、しんのすけとシロもそれに倣うように立ち上がる。

洛陽に着いた時から先程までの陰鬱な空気はもう既になく、しんのすけ達はいつもの和やかな雰囲気で歩き出す。時折笑みさえ見せながらどんな店だろうかと話すしんのすけと星。そのはつらつとした表情は周囲から浮いていたが、それを気にもせず彼らは洛陽の街を行くのだった……

訪れた店内はそれなりに賑わっていた。そこまでは街中に比べれば、やや活気があるように感じられるぐらいには。星はその原因を兵士がいない事だろうと察し、一人頷いた。しんのすけはシロと共に空いている卓へ近付き、星を呼ぶ。

菜譜――メニューを眺め、しんのすけは見た事のない料理がな

いかを探す。星はそんなしんのすけが見つける料理名を答えたり、時に共に考えたりするのが外で食べる際の決まり事だった。

そんな恒例行事も終え、二人はそれぞれに注文する。洛陽は都。だが、宮廷料理などを日常的に庶民が食べるはずもなく、そこも庶民的な料理ばかりを取り扱う店だった。しんのすけはチャーハンを、星はラーメンを頼み、ついでにいらない骨があれば一つ分けてくれないかと告げる。

星の視線を追い、シロの姿を見た店主は少し不思議そうな顔をした。真っ白の犬が珍しかったのだろう。それを悟り、しんのすけがシロへわたあめと声をかける。それに呼応しその場で丸くなるシロを見て、店主や客達が揃って面食らった後笑い出す。

「面白いもんを見せてくれた礼だ。一番いい骨をやるよ」

「キャンキャン」

久々に笑ったと言いながら、店主は言葉通り見た目からして上物の骨をシロへ手渡した。周囲の客達もシロへお代とばかりに食べている物を少し分けてくれ、しんのすけと星はそんな周囲に笑顔で礼を述べる。

そんな和やかな雰囲気のまま、しんのすけ達は食事を終えた。そして、宿へ戻ろうと歩いていると大通りが騒がしい事に気付いた。何か揉め事かと思い星は道を変えようとするのだが、しんのすけは興味本位から覗きに行こうと提案した。

「ね、ちょっと見てこうよ」

「お前は、君子危うきに近寄らずという言葉を知らんのか？」

「知らない！」

「威張るな。まぁ、私とて興味がない訳ではないが……何やら嫌な予感がするのでな」

星の告げた教えに胸を張って即答するしんのすけ。それに苦笑しながら、星は自分が感じた事を告げた。しんのすけはそんな言葉に頷くも、やはり気になるのだろう。少しだけと言って星の手を引っ張った。

そんな子供らしい行動に、星はどこか仕方ないと思い歩き出す。シロもそんな星と同調するかのように息を吐いていた。大通りに出たしんのすけ達は人垣に遭遇した。それを掻き分けながら出た先で見たもの。それは兵士二人に睨まれ怯える幼い兄妹だった。

「どうゆーコト？」

「おそらくぶつかったのだろうな。それであの兵士達がその事に対して怒りをぶつけているのだ」

しんのすけのやや疑問符を浮かべた言葉に、星は自分の予想を告げた。すると、それを聞いていた周囲の者達が小声でそれを肯定した。しかも、これは珍しい事ではないらしい。だが、誰一人として兄妹を助けようとはしない。その理由を星は理解しているため、何か言う事はない。

相手は官軍の兵士。つまり、朝廷の兵だ。それに刃向かえばどうなるかなど誰にも分かる。故にこうして、誰も手を出さないで見つめる事しか出来ないのだ。それを兵士達も知っているのだろう。それが悪循環となり、この街から活気を失わせていると星は悟った。

（ここまで腐っているのか、この街は。いや、街ではない。朝廷が

腐っているのか）

おそらくこのような事は日常茶飯事なのだろう。だからこそこの街の者達はみな生気がないのだ。兵士達に怯えながら暮らす日々。それのどこに活力が見出せる。あるのは、恐怖だけだ。

そこまで考え、星は拳を握る。盗賊よりも性質が悪いと。官軍である事を良い事に私利私欲のために民を迫害して暮らす。それがどれ程腹立たしいか。星は湧き上がる怒りを抑えていた。

（相手は腐っても官軍……迂闊な事は出来ん。しかし、これを見逃す訳にはいかないっ！）

理性が叫ぶ。止めろと。だが、それと同じ大きさで魂が叫ぶ。行けと。そんな相反するせめぎ合いが星を襲う。その争いにけりをつけたのは、やはり彼だった。

――星お姉さん、どうしてお助けしないの？

しんのすけの声に込められた疑問と悲しみ。それが星の心に響く。正義の味方であろうと思った事や、しんのすけの憧れの存在と同じだと言われた事などが浮かび、星はゆっくりと拳を開いた。

そして、静かにしんのすけの頭に手を乗せると、そこで大人しく待っていろと告げる。その雰囲気が鍛錬の時と同じ事に気付き、しんのすけは黙って頷いた。人垣の中から歩み出る星。手には愛用の槍がある。

もう、星に迷いはなかった。理性も魂も凌駕する程の心の声が吼えたのだ。”正義”であれと！

――そこまでだっ！

大通りに響き渡る大声に誰もが視線を動かす。星はその視線を受けながら手にした槍を構えた。この事がどれ程危険な事か分からぬ星ではない。それでも、やらねばならない。ここで眼前の兄妹を見捨てては、救国どころかしんのすけと共に居る資格無しと考えたのだ。

驚く兵士達を見据え星は告げる。そう、正義の味方としての宣言を。彼女が趙子龍たるために。そして、あの優しい少年の正義のヒーローであり続けるために。

「幼い者達を脅かし、己が立場を利用するその行い。例え天が許そうとも、この私が絶対に許さん！」

「何だぁ？　今何て言ったんだ、この女」

「許せないとか言ったな。誰を相手にしてるか分かってんのか？」

兄妹から視線を外し、兵士達は星を見た。その表情は馬鹿にするような下衆な笑みを浮かべている。それに星は無言で槍を構える。その気迫、まさに龍が如し。その迫力に兵士達も呑まれる。だが、それでも自分達に手を出せないと考えたのだろう。腰が引けていながらも、星へ強がりを見せる。

「へ、へへっ、中々様になってるじゃねぇか。でもな……」

「や、やれるもんならやってみろっ！」

半ば捨て鉢になって星へ襲い掛かる一人の兵士。それに星が一歩踏み込んだかと思うと、次の瞬間には相手が地に伏していた。それを見て残った方が逃げていく。それに目もくれず、星は幼い兄妹へ

静かに告げた。
　早くここから離れなさいと。そして、周囲へ告げる。早く離れ、自分に巻き込まれないようにと。その意味に気付き、誰もが素早く去っていく。兄妹は星へ視線を向けた後、互いを見合い力強く頷き合って走り去る。しんのすけとシロは周囲の行動を不思議そうに見つめ、立ち尽くす。

（何でみんな逃げてくんだろ？　悪い奴は星お姉さんがやっつけたのに）

　星のした事の大きさを理解出来ないしんのすけ。やがて人垣が消え開いていた店々は閉めて大通りは閑散となった。そこに残ったのは、星としんのすけにシロ。そして倒れた兵士のみだ。すると、やや離れた場所から大勢の足音が聞こえてくる。
　それに星は小さく呟く。こういう時は早いのだな、と。そしてしんのすけとシロへ背を向けたまま、星はどこかに隠れていろと告げた。その意味を分からないしんのすけだったが、星の声が鋭い事に気付き何も言わず近くの物陰へと隠れた。

　大通りに現れる大勢の兵士達。その中には先程逃げた者がいる。星は表情を変えず、大勢の兵士達を睨みつける。そして、ゆっくりと槍を構えると歩き出した。その威圧感にたじろく兵士達。それでも、何人かは星へと向かっていく。
　それを一振りで倒し、星は一歩ずつ一歩ずつ進んでいく。その表情を一切動かす事無く星は行く。無表情。だが、その纏う雰囲気は憤怒だ。静かにだが深く怒る心。それによる怒気が星の周囲から漂っていた。

　一人、また一人と倒れていく兵士。初めは三十人程度いたそれも、今や五人にまで減っていた。

「つ、強い……おい、こうなったら……」

「どうした！　官軍の兵士は賊一人倒せんのかぁ！」

自分を見て怯え竦む兵士達。その一人が何かを言い出した瞬間、星は初めて感情を発した。そうでも言わなければ逃げ出しそうだったからだ。洛陽を守る立場にありながら、そこに住まう物達を迫害するかのような振る舞い。しかも、おそらく少数ではなく大半がそうしているだろう事。

そんな事をしていながら、いざとなった時に役目を放り出そうとしかねない事に星は心底怒っていた。せめて意地を見せて自分を捕まえようぐらいすれば、少しは捨てたものでもないと思えた。だが、倒れた者も自棄になって向かってきた者だけ。残っているのは、怖くて逃げているだけの者となれば救いようがない。

（この者達も権威に笠着る事でしか自分を守れないのかもしれんな。だが、日頃の行いを少しは悔いてもらうぞ！）

微かに兵士達に同情するも、因果応報と思い星は槍を持つ手に力を込める。だが……

――動くなっ！

その時、後方から声がした。その声が最初に倒した者の声と気付き、星は嫌な予感を感じながら振り向いた。そこには、しんのすけを捕まえた兵士の姿があった。

「しんのすけっ！？」

「へへっ、やっぱりこのガキは知り合いか。お前の事をずっと見てるからそうじゃないかと思ったんだ」

その言葉から、星は相手の要求を察し槍を持つ手をゆっくり下げていく。だが、それを見たしんのすけが叫んだ。

「星お姉さん、オラにかまわず戦って！」

「っ！？」

「黙れ、このガキっ！」

「悪い奴はこらしめるのがオラ達たいりく防衛隊だぞ！　それに、星お姉さんは正義のヒーローなんだから負けちゃダメ～っ！」

自分を押さえる兵士の腕をもがくようにして抜け出そうとするしんのすけ。その必死の言葉と行動に星は再び槍を握り締めた。そして、力強く頷くとしんのすけ向かって走り出す。

それに兵士は慌てた。さすがに子供を殺す程の覚悟はなかったのだろう。自分の脅しにも屈する事無く向かってくる星を見て、兵士はどうしようかとうろたえた。

それを感じ取ってしんのすけがその腕を噛む。同時に隙を窺っていたシロも足に噛み付き、兵士の拘束が弱まった。少しでも力が弱まれば、柔軟性の高いしんのすけなら逃げ出せる。見事に兵士の腕から抜け出し、星の元へと走るしんのすけ。シロもそれに合流するように追い駆ける。

「星おねいさ～んっ！」

「キャンキャン！」

両手を伸ばして走るしんのすけと並走するシロ。その二人の前に星は駆け寄ると、すぐに一度だけ強く抱き締めて背後の兵士達へ視線を向けた。

「しんのすけ、シロ、あの兵士を任せてもいいか」

「ブッ、ラジャー！」

「キャン！」

星の言葉に答え、しんのすけは背中の木刀を手に取った。シロは兵士相手に唸りを上げる。それをちらりと見て、星は頼もしく思い頷いた。

「では、行くぞっ！」

「ほいっ！」

「キャンっ！」

声と共に走り出すしんのすけ達。兵士は子供と犬相手にしてやられたためか、ならばと威嚇ではなく本気で剣を引き抜く。それで多少怯えると踏んだのだろう。

だが、それを見てもしんのすけは慌てない。真剣は確かに恐ろしい。だが、星や愛紗などの英傑から受けた鍛錬を思い出しその動きを見つめた。

相手の動きから決して目を逸らさず、しんのすけは立ち向かう。

予想に反して止まらないしんのすけに違和感を覚えつつも、兵士は剣を振り下ろした。その動きは、星の突きを毎朝受け続けている彼にとって目に見えて遅かった。

（星お姉さんの方がもっと速いぞ！）

そう思いながらしんのすけはその攻撃を見事にかわし、相手の死角に回り込み手にした木刀で兵士の急所を思いっきり突いた。

「ほいっ！」

それだけで兵士は剣を取り落としうずくまる。更にしんのすけとシロはそこから追い討ちをかけた。足へシロが噛み付き、しんのすけが頭を叩く。その容赦ない攻撃の前にやがて兵士は気絶する。そして、星が残った者達を全て倒したのもそれと同時だった。

「……これで片付いたな」

「星お姉さん……」

「クゥ～ン……」

倒れた兵士達を眺め、星は開き直ったように笑顔を浮かべた。そこへしんのすけとシロが近寄った。その声に星は振り向き、しゃがんでしんのすけとシロを優しく抱き締める。それにしんのすけは強く抱き返した。

その行動に星は悟る。涙こそ流さないが怖かったのだろうと。なので星は片手でその頭を静かに撫でた。勇敢に信念を叫んでみせたしんのすけを褒めるように。そして、次は主人を助けたシロの忠心を褒めるように。

「予定変更だ、しんのすけ」

「えっと、今からお宿戻って街を出るんだね？」

「そうだ。急ぐぞ」

星の言葉に無言で頷いて、しんのすけとシロも動き出そうとした時だ。どこからか馬の足音が聞こえてきたのは。それに星は小さく舌打ちをした。街中で馬を走らせる者など限られているからだ。

そして、この状況ならそれはもう一つしかない。星はそう考え、しんのすけとシロを庇うように後ろへやりその相手を待ち構えた。馬相手に逃げても無駄だと思ったのだ。やがて、しんのすけ達の前に二人の武将が現れた。

「……おー、これは大したもんや」

「ふんっ！　所詮何進の兵などこの程度だ」

「気持ちは分かるけど程々にし。聞かれたらどないする気や？　ま、全員気絶しとるみたいやけど」

二人の女性はしんのすけ達へ目を向ける事もなく、周囲の状況を見てそんな言葉を交わす。星は目の前の二人から感じる気配から、やや焦りを抱いていた。

訛りがある方は偃月刀を持ち、確実に自分と同等か下手をすればそれ以上の腕前。もう一人は戦斧を持ち、自分と同等かそれより少し劣るぐらい。つまり、自分だけでは勝ち目がない状況だった。

と、そこで星はふと気付いた。相手の女性達は中々の美人。つま

り、それを見て動く存在がいる事を。まさかと思い振り向く星。そこには力無く項垂れるシロの姿があるのみ。

――ねぇねぇおねいさん達、オラと一緒に勝利の高笑いしよ～。

星の背後から聞こえてくる声。それは紛れも無くしんのすけのものだった。

（遅かったか……）

そんな風に思いながら振り返る星が見つめる中、しんのすけは馬上から倒れる兵士達を眺める二人へ口説き文句を並べていく。それに二人は目を点にした。幼い子供からよもや口説かれるなどとは思わなかったからだ。

しかも、武将として名高い二人を口説こうとする男など今までいなかったから余計だろう。そんな異常な存在であるしんのすけに、二人は我に返ると互いの顔を見合わせた。

「な、なぁ……どないする？　この子供、ウチら口説いとるで」

「そ、そのようだな」

「くつはく時どっちから足入れる？　オラ右足派」

困惑する二人を他所に、しんのすけは自身の事を告げて質問する。それに二人はやや呆れた後、揃って笑い出した。

「靴履く時はどっちの足が先か、なぁ。いや、そないな事考えた事無かったわ」

「まったくだ。お前はかなり変わった奴だな」

「いやぁ、それほどでも～」

「「褒めとらん」」

最早しんのすけとしてはお決まりの流れ。それに喜びを感じてその顔を緩ませる彼を見て、益々笑う二人。と、そこで二人はここへ来た目的を思い出したのか、しんのすけへ耳を塞いでいるように告げると頷き合って息を吸った。

それが何を意味するかを察し、星もシロへ耳を塞ぐように告げる。その次の瞬間、空間を振るわせんばかりの大声が大通りに響き渡った。

「いつまで寝とんねん！　このド阿呆共っ！！」

「さっさと起きろ！　首を刎ねられたいかっ！！」

怒号。そこに居る者の全身を振るわせる程のそれは、気絶していた兵士達を全て叩き起こした。そして、その中の隊長格へ揃って二人が視線を向けた。

それに気付いてその兵士は恐怖に震え出す。それはそうだろう。目の前の相手が目を吊り上げ、自分を見据えているのだから。その雰囲気も誰が見ても上機嫌には見えない。

「ちょ、張遼将軍に華雄将軍……」

「貴様達、何を勝手に持ち場を離れている。何進様の指示か？」

「あ、いえ……その……」

「何にせよ、見事に全員大通りで寝とるとは……ええご身分やな」

「け、決してそのようなつもりは……」

「イイワケは聞いてないぞっ！」

「は、はい！」

二人の言葉と表情に怯えるような反応しか出来ない兵士達。しんのすけも、ちゃっかり二人と同じように兵士達へ文句を言っているのだから性質が悪い。

しんのすけのそれに反論出来ないのも仕方ないのだ。二人の威圧感は、星であっても多少気圧される感があるぐらいなのだから。そんなものを直接浴びているのだから、兵士が声に詰まるのも当然だろう。それでも何とか言葉を紡ごうとはするのだが、やはり中々出来ない。

それを見ながら、星は二人の名を思い出して驚いていた。張遼に華雄。それは、官軍の中でも名を轟かす勇将だったのだ。特に張遼は”神速”と渾名される存在だったのだから余計に。

二人はその後も少し兵士達を威圧した。すると、兵士が思い出したように星の方を見て何かを言おうとした瞬間、それを遮るように張遼がこう告げた。

――――もうええ。この事は何進様には黙っといたる。ウチらが我慢しとる内にさっさと持ち場に戻らんかいっ！

――――次はないと思えっ！

二人の吐き捨てるような言葉。それを聞いて兵士達は理解したのだろう。これ以上何か言い訳をしたり、次回何か事を起こせば自分達の命がないと。なので一目散に去っていく。

それを眺めてしんのすけはあの高笑いをした。それに張遼と華雄が一瞬驚きを浮かべた後、楽しそうに笑い出す。星はその笑いを聞いて安堵した。二人はおそらくしんのすけだけは見逃してくれるだろうと思えたからだ。

そうして兵士達が全ていなくなったのを確認し、張遼と華雄がゆっくりとしんのすけを促して星へ近付いていく。星は特に何かするでもなく、静かに二人を見つめていた。

そして二人は星の前に馬を止めると、揃ってすまなさそうな表情を見せた。それだけで星には分かる事があった。おそらく二人は兵士達を止めるために来たのだろうと。そんな風に考えている星へ、まずは張遼が口を開いた。

「堪忍な。この街の兵はあないな奴らばかりちゃうねん」

「確かにああいった者がいるのは認めるが、全てと言う訳ではない。気を悪くせんで欲しい」

それに安堵する星だったが、何故そんな事をと疑問に思った。すると二人も星の疑問に気付いたのか、笑みと共にその理由を教えてくれた。星が最初に助けた兄妹。それが、兵士の詰め所に必死の表情で駆け込んだのだ。

それを取り合ったのが華雄の部下。そこから報告を受け、華雄とその猪っぷりで問題を起こさないようにと張遼が出張ったのだ。実は以前から街の警備兵が横暴な態度を取っているという噂はあった。しかし、証拠がなく大将軍である何進の兵という事もあり、中々

取り締まる事が出来なかったので今回の報告は願ってもない機会だった。それ故に華雄はどこか喜び勇んで出て来たという訳だ。そんな説明を聞いて、星はどうしてこの騒ぎに二人のような大物が出張ってきたのかを理解した。

一方二人は説明を終えて星を見つめた。その表情はどこか楽しそうだ。

「聞いた時は信じられへんかったけど、ほんま大したもんや。ある意味朝廷相手に喧嘩売るなんてな」

「経緯は簡単にだがその兄妹から聞いた。中々見上げた根性をしているようだが、名は何と言う？」

「我が名は趙雲。字は子龍」

「オラは野原しんのすけ。あざなはないぞ……ほら、シロも」

「……キャンキャン。キャン」

星に続けと名乗るしんのすけ。その彼に促され、シロもどこか仕方ないとばかりに声を出す。それを聞いて呆気に取られる二人だったが、少し間を空けて笑い出した。それにしんのすけも乗っかるようにあのポーズをし、視線を星へ向ける。

その意味を悟り、星は小さく笑うとしんのすけと同じポーズを取って高笑いを始めた。久しぶりの悪を倒した状況。故に、正義のヒーローとして勝利の高笑いをしよう。そうしんのすけは考えたのだ。

星もそれを理解し、心から笑った。シロもそんな二人に脱力する事もなく、嬉しそうな声を出す。そんな風にしばらく大通りには笑

い声が響いたのだった……

あれからしんのすけ達は張遼と華雄に礼がしたいと宿を告げ、一旦戻った。星のした事については、二人の配慮で問題にはならないようにすると告げられた。何せ、街を守る兵士がたった一人にやられたのだ。しかも賊紛いの手まで使って。

それを公にされれば、兵士の上司である何進の失態に繋がる。それを張遼がそれとなく仄めかして、お咎め無しにするからと。その提案に星は感謝しそれに対して張遼は気にしなくていいと返した。

――うちもスカッとしたわ。中々うちらには尻尾出さんようしっとったからな。

警備兵達が街で狼藉を働いているとは聞いていたが、その証拠を掴もうにも街の者達へ圧力を掛け自分達の前では大人しくしていたらしく、張遼や華雄としてもやはり苛立っていたらしい。

それもあって、二人は天の配剤に感謝した。まず星があの兄妹を助けなければ、次にその兄妹が知らせなければ、今頃どうなっていたか分からなかったからだ。そして、今後はもう同じような事を誰も出来ないだろうと二人は断言した。一度でも実態を掴んでしまえば、後はこちらで御してみせると張遼は笑ったのだから。

そして今は二人と共に昼食を食べた店に来ていた。そこで、先程の礼も兼ねた夕食を共にするために。

「へぇ、主君探しついでの見聞の旅なぁ」

「それは分かるが、何故子供連れで……」

「奇妙な縁とでも言えばいいのでしょうか……まぁ、私ぐらいしか頼る者がいないのですよ、しんのすけには」

星がそう答えると二人は納得がいったとばかりに頷いた。戦乱で親を失ったとでも思ったのだろう。そして、視線をしんのすけへ向ける。

「アロハ～オエ～」

「わはは、面白いぞ小僧」

「綿犬を落とすなよ～」

頭の上にシロを乗せ、しんのすけは店の中央で半けつフラダンスをしていた。その奇妙な踊りを見て、客達は酒が入った事もあってかやんややんやと声を掛ける。そんな様子に二人は意外な印象を受けた。

とても戦災孤児と思えない程明るいからだ。そんな事を考える二人を見て星は笑みと共に告げた。しんのすけは悲しんでいると周りも悲しむと知っているため、ああして明るく振舞っているのだと。

それに二人は小さく驚きどちらともなく笑った。それは大人物だと言いながら。そんな二人に星も笑う。二人は軽い冗談にも近い雰囲気だが、星自身は本当にそう思っているからだ。

そこへしんのすけがシロを頭に乗せたまま戻ってきた。その見事なバランス感覚に張遼と華雄が少しだけ関心を示す。それが星にも分かったのだろう。自分がしんのすけを鍛えている事を告げた。そ

れを聞いた瞬間、張遼が何かを思い出したかのように星へ告げた。

「な、趙雲言うたな。見た感じ結構強そうやし……どや、明日うちと一手打ち合ってみる気はないか？」

「それは嬉しいお言葉ですな。ですが、生憎明日にはここを発とうと思っておりますので」

星の言葉に張遼と華雄が表情を曇らせた。旅の目的を聞いた今、その決断は正しいものだと思ったからだ。この洛陽は朝廷の街。皇帝を主君とするのならいいのだろうが、今の時勢を二人も理解している。

既に皇帝の権威は地に落ち、朝廷も形骸化して久しい。であれば朝廷は星が仕えようと考える相手ではないのだ。それに力無き民を救おうと兵士に立ち向かった星が、その元凶を作り出している朝廷に仕えるはずはないと思ったのだ。

「そうか。お前の判断は理解出来る。張遼、残念だが諦めろ」

「しゃーないか。久しぶりに強そうな奴と思たから、結構楽しみにしとったんやけど……」

「お？　じょーろさんも強いの？」

華雄の言葉に悔しそうに返す張遼。それを聞いてしんのすけが思った事を尋ねた。その中のじょーろとの名前に張遼が苦笑。星は少し困り、華雄は笑った。

「じょーろやなくて、張遼や。呼びにくいかもしれんけど、堪忍な」

「ほーほー、ちょーりょーですかぁ。えっと……じゃ、ちょーのお姉さんって呼んでもいーい？」

「おい、しんのすけ……」

星は張遼の性格を大まかにではあるが捉えた。明るい雰囲気に頼りになる姉御肌。しかし、それでも相手は官軍の将軍。それを考え敢えて少し注意するように告げた。それを聞いた張遼がどう反応するかを悟っていたために。

案の定、張遼はそのしんのすけの呼び方に構わないと返す。下手に間違えるより余程いいと笑いながら。華雄はそのままでもいいのではないかをからかうように告げる。すると、それに張遼は不敵な笑みを返してしんのすけへこう尋ねた。

「な、うちの隣の奴の名前言うてみ」

「え？　おかゆさんでしょ？」

「なっ！？　誰がおかゆだ！」

しんのすけの返しに爆笑する張遼。星もつい笑ってしまい、華雄はそれに顔を真っ赤にしながら叫ぶ。それでも拳を振るわないのは相手が子供だからだろう。しかもその怒声を聞いても、しんのすけは平然としていた。

だが、名前を間違った事だけは理解したので素直に謝罪。頭を下げ、もう一度名前を教えて欲しいと告げる。それに華雄も仕方ないともう一度名乗り、しんのすけの目を見て言った。

「いいか？　もう間違えるなよ」

「ほい、おかゆさん」

「お前！　今言った」

「じょーだんだぞ」

華雄の言葉を遮るように平然と告げるしんのすけ。その表情に華雄は湧き上がった怒りを何とか押し留めた。

「ぐっ……」

「ちゃんとかゆーのお姉さんって呼ぶから、怒っちゃイヤ～ン」

「やはりからかってるだろ、お前は！」

「そんな事ないよ。マジメにふざけてるだけだよ」

「なお悪いわっ！」

「かゆーのお姉さん、ダメだよ。怒りっぽいと早く老けるって母ちゃんが言ってた」

「誰のせいだ！」

華雄を翻弄するかのように話すしんのすけ。そのやり取りを聞き、張遼はずっと笑い続けていた。星ももう抑える事もせず、張遼と一緒になって笑い続けていた。その会話を聞いていると白蓮の事を思い出すからだ。

華雄とは違い怒りからの突っ込みではなかったが、ここまで見事に翻弄される様はどこかそれに近いものがある。そう思った星は隣

で笑う張遼にその事を話した。余計笑うだろうと踏んでだ。予想通り、張遼は白蓮の話で更に苦しそうに笑い出した。

白馬長史と名高い白蓮。騎兵として名を馳せている張遼としても、その名はよく聞いた事がある相手だったのだ。そんな相手の笑い話。張遼は星へ止めてくれと言いながら、腹を抱えていた。

しんのすけと華雄もそんな張遼達に気付き、漫才のような会話を切り上げてそちらへと意識を向けた。そして聞こえてくる星の語る白蓮の笑い話。それにしんのすけが懐かしいと補足をしたり、白蓮の関連で袁紹の事も話し出す。それには華雄も一緒になって笑い出した。

「くくっ……お、お前達は袁家とも繋がりがあるのか？」

「そうだよ。よいしょーさん達ともお知り合いだぞ」

「よ、よいしょー？　もしかして、それは袁紹の事か？」

しんのすけの呼び方に華雄は少し戸惑いながら問いかける。それにしんのすけは迷いもなく頷いた。それに華雄はやや驚きを浮かべるも、聞いた事のある噂の類から推測出来る性格を思い出してどこか納得。それで袁紹は怒らなかったのかと尋ね、しんのすけがそれに答えていく。

だが、張遼はそんな呼び方が想像する性格と一致した凄さに感心すると同時に、実際に呼ばれた際の袁紹の話などを聞いて小刻みに震えだしていた。

「よ、よいしょー……あ、あかん。また笑いそうや……」

ようやく収まってきた笑いが再燃するかもしれないと思い、張遼

は慌てて耳を塞ごうとする。だが、星がそうはさせじと耳元へ近付き呟く。

――白馬長史が残念さんで名門袁家はよいしょーですぞ。

それに張遼が堪らず再び大笑い。星はそれに不敵な笑みを見せ、華雄へと近付く。しんのすけから曹操との思い出話を聞いていた華雄だったが、その耳元で星が先程と同じ事を言うと大笑いはしなかったものの吹き出させる事には成功した。

しかし、すぐに華雄が立ち直って星へ笑わすなと反論。それに星は楽しませようと思ったとさらりと返す。そして不機嫌そうな華雄へこう告げた。

――失礼ですが、こんなに簡単に怒るようでは将としていかがなものかと思いますぞ？

その言葉に華雄は一瞬答えに詰まるが、言われなくても分かっていると返してその話題を終わらせた。星はそれに内心苦笑し、しんのすけはそんな華雄の反応を見て可愛いと告げた。

その発言に華雄が反応。今まで女性らしい褒め言葉など言われた事がなかったからだ。その顔は完全に動揺を示していて、頬には微かに朱が混じっていた。

「な、何っ？！　今、何と言った？！」

「え？　かわいいって。だって、星お姉さんに言われた事が恥ずかしかったんでしょ？」

「ふんっ！　……別に恥ずかしくなど思っていない」

「あ、その言い方愛紗お姉さんみたいだ」

華雄の照れ隠しの言葉に、しんのすけは思わずそう答えた。星はそれに感心したように頷き、確かに似ている部分があると思った。一方、華雄は愛紗との名前に反応した。それは誰かと尋ねたのだ。親近感でも抱いたのだろう。

しんのすけはそれに答えていく。いつの間にか張遼もその話を聞いていて、愛紗の正体を知ると興味深そうに視線を星へ向けた。

同じ偃月刀使いであるため、張遼もその噂は聞いていたらしい。腕前などを詳しく聞きたいと言われ、星は出来る限り武人としての腕前のみを語った。人柄や性格などはあまり言わない方がいい。そんな風に思ったのだ。

明確な理由はない。ただぼんやりとこう考えたのだ。性格などは接する者によって違う印象を持つ事もある。下手な先入観を与えない方がいいだろう。そう結論付けたのだ。

「でも、かゆーのお姉さん」

「何だ？」

話も終わってそろそろ解散するかと思い始めた矢先、しんのすけが華雄に声を掛けた。それは純粋な疑問。将軍と呼ばれる者がどういう立場かをおぼろげに感じているからこそ、しんのすけが思った事。

――かゆーのお姉さんって、エライ人なのにそんな簡単に怒っちゃうの？

それに華雄はそんな事はないと返す。しかし、それに張遼が軽い

指摘を入れた。挑発の類には滅法弱いくせにと。それに華雄は誇りを傷付けられて黙っているのは武人ではないと言い切った。それには張遼も苦笑ながらも頷いた。

しかし、しんのすけにはそれが分からない。何故誇りを傷付けられると黙っていられないのか。そう思い、もう一度尋ねた。どうして我慢出来ないのと。

「あのな、しんのすけ。うちらは武に生きる者や。その……まぁ、生き甲斐みたいなもんを馬鹿にされて黙っとる訳にはいかへんのや」

「そうだ。多少の事なら我慢はするが、度を過ぎればそうもいかん。武人とはそういうものだ」

二人の言葉に星も同意するように頷き、しんのすけへ視線を向けた。これで少しは理解出来たかと思って。だが、しんのすけは心底理解出来ないという表情でこう返した。

――でもそれで他の人達まで巻き込むのはダメだぞ。だって、お姉さん達はしょーぐんさんでエライ人だもん。

その言葉に二人は返す言葉が咄嗟に出なかった。傍で聞いている星でさえも同じく。しんのすけがそう言った裏には、勿論あの戦国での戦が関係している。

春日の城へ攻め入った相手。その者が偉く多くの兵士を動かす権力を持っていたからこそ、しんのすけは戦が起きて又兵衛を失う事になったと知ったのだから。

偉い者が戦を起こす。それがしんのすけの中での事実。偉い者が平和を望み正義を行えば、世界はそうなっていくのだ。そんな子供の考えしか彼にはない。それが厳しいのは風から言われた。それで

も、しんのすけにとってはそれが事実だと思っているのだから。

（偉い者なのだから他まで巻き込むな、か。この小僧、戦の起き方を知っているとでもいうのか？　いや、それはどっちでもいい。確かに戦場で私が将軍として動けば部下達も動く……大勢の命を犠牲にしてでも、誇りとは守るべき物か否かと問われた気がするな）

華雄はしんのすけの言葉からそう結論を出し、どこか意外そうな表情を浮かべた。武人として動くのは構わない。だが、その際は完全に個人でなければならないのだ。そう言われた気がして華雄は小さく笑って呟いた。

生意気な、と。だが、それがどういう気持ちから生まれた言葉かを理解している華雄は、その笑みを隣の張遼へと向けた。丁度張遼も華雄と同じように考えているところだった。

（偉いから巻き込むなとはなぁ。しんのすけはどこぞの将の息子か？　いや、それにしても中々鋭いとこ突いてくるな。どんな時でも戦を起こすんは偉い奴や。それを子供のくせに知っとるちゅうだけでもおもろい奴やで）

張遼は戦争の起き方を知るような口振りのしんのすけに興味を抱いた。彼女が知る中でそんな事を言う子供は当然ながらいなかった。大人は言い出さなかった。戦争が起きた時、その責任を誰もが他者へ押し付けるからだ。

起こした者は相手に非があると主張し、起こされた側は相手が攻めてくるからだと返す。そこに至るまでにいくつもの出来事があったのは隠したままで。偉い者達は戦を正当化する。それが当然なのだ。義は我にあり。そう言わなければ誰が命を賭けて戦おうとするだろう。

だが、張遼はしんのすけのような考えをする者ならばそうは言わないだろうと思った。どんな理由があるにしろ、他者を巻き込んで戦う以上それは悪い事でしかない。

きっとそう言って彼のような者達はこう言うのだ。戦を起こす者も起こされる者も悪いのだと。相手と心を通じ合わせていれば、ちゃんと仲良く平和に暮らそうとすれば戦争など起こす必要はないのだ。まぁ、それでも起きてしまう事もあるのが戦争の恐ろしいところでもあるのだが。

そんな風に張遼は考えを纏めると隣の華雄の視線に気付いた。その視線は面白い者に会ったと言っている。それに張遼も同じ視線を返して笑みを浮かべた。

「しんのすけ、今度はもっとゆっくり話をしよか。やから、またいつか来い」

「おおっ！　ちょーのお姉さんからお誘い受けたぞ！」

「私もだ。待っているぞ」

「おー、かゆーのお姉さんまで……オラ人気者ですなぁ」

にやけた顔で頭に手を置くしんのすけ。その姿を見て楽しそうに笑う張遼と華雄。星とシロはそんな三人を見て小さく頷く。そして、互いへ視線を向けると小声で告げる。

「また妙な縁が生まれたな」

「キャン」

こうして楽しかった時間も終わりを告げ、しんのすけ達は二人と別れた。去り際に、また来る事があれば自分達の名を出すといいと教えられ、更にいつか必ず会いに来いと言われた時には、しんのすけも星も心からそれに頷く事が出来たのだった……

「……張遼」

城へ戻る道すがら、華雄は隣の張遼へ声を掛けた。その声が妙に真剣みを帯びている事に気付き、張遼は何事かと思って視線を向ける。

「どないした？」

「いや、お前に頼みたい事がある。今後、もし私が怒りに我を忘れ、将としてあるまじき行動を取ろうとしたら……」

華雄のその言葉に、張遼はしんのすけから言われた言葉が相当効いたのだなと悟った。子供に言われた事で自身の頭に血が上り易い事を真剣に考えたのだろうと。故にそこから先の言葉を聞かずとも、張遼には理解出来た。

なので、それを遮るように手を振った。安心しろと。もし華雄が大局を見失い自分の感情に流されそうになったら全力で止めてやる。それこそ、意識を刈り取ってでも、と言って。その言葉に華雄は一瞬嬉しそうな表情を浮かべたが、すぐにそれを消してこう返した。

――ふんっ！　意識を刈り取る程度で私が止められると思うな！

――はぁ～……よっしゃ分かった。なら殺してでも止めたるわ。それでええな？

その呆れた声に華雄は満足そうに頷いて歩く速度を速めた。それぐらいの気概で来い。そう言わんばかりに。その後姿を見つめ、張遼はどこか呆れるような、それでいて楽しそうな表情で呟く。

――そーいうとこやと思うで。可愛い思われるんわ。

翌朝、しんのすけは星とシロと共に大通りを歩いていた。大都市にたった一日の滞在はしんのすけにとっては初めての事だったが、それも仕方ないと思っていた。張遼や華雄と出会えた事は喜ばしい事だし、昼食と夕食を食べた店は気のいい者達ばかりで楽しかった。

それでも、やはりこの街は長く居たいと思える部分が少なすぎる。もし、昨日の事件がなければここまで思う事はなかっただろう。しかし、今のしんのすけ達には共通した思いがある。

「……次に来る時は、堂々と戦える事を願うのみだ」

「悪い奴をオラ達がこらしめるために？」

「そうだ」

しんのすけの言葉に星は力強く頷いた。今は、大将軍である何進が十常侍と呼ばれる者達と権力争いをしているらしく、張遼と華雄

はその点からも昨日の争いは大きくしないだろうと言っていたのだから。

星はそんな事を思い出し、これからの朝廷の動向に思いを馳せる。次なる大きな戦乱。それは、朝廷がキッカケになるだろうと考えながら。しんのすけはそんな事を知る由もなく、シロと共に歩いていた。すると、シロが何かに気付いて足を止めた。

「お？　どうした、シロ」

「キャンキャン」

シロが視線を向ける方向へしんのすけも視線を動かした。そこには赤い毛並みの犬がいた。だが他には誰もいない。星もしんのすけとシロの様子に気付き、視線を向けてその犬を見た。

「捨て犬……ではなさそうだな。人にどこか慣れている」

「じゃ、迷子？」

「かもしれん。どうだ、シロ。何か分かるか？」

星の言葉にシロは赤毛犬へと声を掛ける。それに向こうも声を返しシロへと近寄った。そして、二匹は会話するように声を掛け合う。しんのすけと星はそれを眺めるだけ。ある程度そんな事をし、シロは二人へ視線を向けた。

それに二人は事情を聞き出したのかと思い質問をしていく。ここにはその犬だけで来たのかと聞けば、シロがそれを否定するように首を振る。飼い主とはぐれたのかと聞けば、肯定するように首を振る。そこから、星は散歩の途中ではぐれてしまったのだろうと結論付けた。

「やはり飼い主とはぐれてここまで来たのか」

「でも、シロ良かったね。お友達が出来たぞ」

「キャン！」

しんのすけの言葉に嬉しそうに答えるシロ。その声に、赤毛犬もシロへ楽しそうにじゃれ付きだす。仲良くじゃれ合う二匹を眺め、しんのすけと星は笑みを見せる。すると、そんな二匹の声を聞いたのか一人の女性が近付いてきた。

女性は犬と同じ赤い髪をしていて、表情は無表情にも近い。だが、視線の先でシロとじゃれ合う赤毛犬を見て柔らかく微笑んだ。星はその相手の気配に気付き後ろを振り返った。当然ながらその視線が交差する。

「……セキト、ここにいた」

「「セキト？」」

女性の告げた名前を同時に繰り返すしんのすけと星。それに女性は頷いてセキトと呼ばれた犬へ手を伸ばす。それにセキトは駆け寄った。そして女性はセキトを抱え上げるとその目を見つめて告げる。

「勝手に離れちゃ、駄目」

女性の言葉にセキトは分かったとばかりに頷いた。それを見てしんのすけと星が感心する。シロと同じように言っている事を理解したからだ。女性はそれに頷き返し、視線をシロへと向けた。

そしてしんのすけと星へ視線を移し、少しの間何かを考えるよう

に黙り込んだ。それに星は妙な感覚を感じ、しんのすけはシロを女性と同じように抱き抱えその目を見つめ続けた。

「……その子、名前は？」

「お？　シロだぞ。で、オラは野原しんのすけ」

「シロ……いい名前……」

女性はしんのすけの言葉にそう返し微かな笑みを見せる。それにしんのすけは声も出さず魅入るのみ。独特の雰囲気に喋り方。大人のようで子供のような空気を感じさせる相手に、しんのすけは何とも言えない気持ちになっていた。

星はそんなしんのすけを横目で見て苦笑しつつ、女性の隙の無さに驚いていた。出会ってから一度として隙が見えないのだ。そして、薄っすらではあるが思う事。それは相手がかなりの武人だろう事だ。

「失礼ですが、お名前を聞いてもよろしいですかな。私は趙雲。字を子龍と申す」

「恋の名前は呂布。字は奉先」

「っ！？」

星は相手の名前に息を呑んだ。呂布奉先。それは黄巾の乱で三万もの軍勢をたった一人で打ち倒したと言われた武将の名だったのだ。そんな星の反応から呂布は彼女も武人である事を理解し、視線をしんのすけへ向けた。

呆然と自分を見つめるしんのすけに不思議そうに小首を傾げる呂布。するとシロがそこでしんのすけに声を掛け、やっと彼は我に返

った。今まで彼は呂布の不思議な雰囲気に魅入っていたのだ。

「あ、その……オラのお名前は呼んでくれないの？」

「？」

「だってさっき、シロだけしかお名前呼んでくれなかったから……」

どこか寂しそうにしんのすけが言うと、呂布はそれに少し困った顔をした。その表情から何となく星は呂布の困惑する理由を察した。おそらくシロの名前を尋ねたので、それしか聞いていなかったのだろうと。なので、もう一度しんのすけへ名乗るように告げる。

それにしんのすけは、自分と同じで一度では覚えられなかったのだろうと思い頷いた。だから、もう一度呂布の目を見て自分の名を教える事にした。ただ、先程と違いどこか真剣な眼差しだったが。

「オラは野原しんのすけ。字はないぞ」

「……しんのすけ？」

「変わった名ですが、そうです。好きに呼んでくださって結構ですぞ」

「も～、星お姉さん。それはオラのセリフだぞ」

しんのすけの軽い文句に星は笑ってすまんと返す。それにしんのすけがなら許すと言うと、シロがやや脱力するように項垂れた。そんな光景を見て呂布は小さく笑う。だが何かをそこで思い出したのか呂布はしんのすけ達へ背を向けた。

それにしんのすけ達が気付いて視線を向けると、呂布は朝食の時

間だからと告げた。そしてそこから歩き出す。去り際、一度だけしんのすけの方へ顔を向けて――――。

――――……またね、シロ、しんのすけ……

と言い残して。それにしんのすけとシロも呂布とセキトへ声を返し見送る。星はその離れていく背中を見つめ密かに微笑む。噂に名高い飛将軍。それがまさかあんな人物だったとはと、そう思ったのだ。

立ち去る前に凄い人物と出会えたものだと考えながら、星はしんのすけとシロへ歩き出すよう促す。それに頷き歩き出すしんのすけ。シロをその腕に抱えたままで。

次の目的地は江東。そこにいる孫策と会うために星はその方法を考えるのだが、ふとしんのすけへ視線を向けて苦笑した。下手な事をせず、気ままに動いた方がいいような気がしたのだ。

これまでも出会いのキッカケや原因になっていたのはしんのすけ。その行動に委ねてみるのも手かと、そう考えたのだ。

「次に目指すは江東だ。距離がかなりあるから気を引き締めて歩け」

「ほーい。次はどんなお姉さんがいるのかなぁ……？」

「クゥ～ン……」

「女の事しか頭にないのか、お前は。そうシロが言っているな」

「チッチッチ、分かってないなぁシロ。オラは、男として正しい道を歩いてるんだぞ！」

そんなしんのすけの答えに笑い出す星とため息を吐くシロ。自信満々で告げられた言葉は、どう聞いても褒められたものではない。しかし、確かに男としては正しいかもしれない。そんな風に思いながら星は視線を前へと向けた。街を抜けた先には当然地平線が広がっているのだが、そこに予想だにしない光景があった。

それは一台の馬車と大勢の兵士達。どこかの諸侯でも洛陽に来たのだろうか。そう思い、星はしんのすけを自分の傍へと引き寄せた。そしてその一団が過ぎていくのを待つ。星はその編成に騎馬が多い事から涼洲の者達ではないかと察しをつけていた。

（騎馬で有名な涼洲の者達だろうか？　しかし、そんな辺境の者が何故この洛陽に……？）

そんな事を考え、星はその通り過ぎた者達を見つめていた。しんのすけはそれとは違い目の前を過ぎていく者達を大口を開けて見つめていた。その威容に感嘆の声を上げながら。

そしてそこを馬車が通り過ぎた。馬車の窓は開いていて、そこから白い肌の少女が外を眺めていた。その視線が丁度馬車を見上げていたしんのすけの視線と交わる。

（かわいいぞ……しかも馬車に乗ってるなんて、お姫様みたいだ……）

（子供と子犬？　旅人かな……？）

頬を染め呆然とその少女を目で追うしんのすけ。それに少女も気付き微笑むと手を振った。しんのすけはそれに驚き、シロを慌てて下ろして手を振り返す。その微笑ましさに少女も笑顔を浮かべた。

そのまま馬車は遠ざかる。それを見送りしんのすけは手をゆっく

り下ろした。あの少女がどうして洛陽に行くのかは分からない。だが、それがあまり良くない気がするのだ。あの街に対する印象のせいもある。だが、どこかそれだけではない気がしんのすけにはした。

――――何だろ……？　嫌な予感がするぞ……

そんな呟きをするも星が行くぞと声を掛けたために、しんのすけは後ろ髪を引かれる思いで歩き出すのだった……

「どうしたの、月？　急に手なんか振って」

「うん、外に真っ白な犬を抱えた子供がいたんだ。それで目が合ったら、ずっと私を見てたから何だか可愛くて……」

「そう」

月と呼ばれた少女は、向かいに座る眼鏡の少女の言葉に笑顔で答えた。その表情に相手も嬉しくなったのか笑顔で返事を返す。だがそれもそこまで。眼鏡の少女はすぐに険しい表情に戻り、今後の事へ思考を巡らせる。

今はまだいいかもしれない。しかし、絶対にこれから自分達を良くない事が襲うだろうと思っていた。朝廷の権力抗争へ関るのだから。自分はそれによる危険から何とか月を守り切るつもりだ。自慢ではないが頭の回転には自信がある。しかし、それでも全てを見通せる訳ではない。想定した事態以上の脅威や状況に陥る事もある。そこまで考え、少女は拳を握り締めた。

（何弱気になってるのよ、賈文和！　僕が月を守るんだから！）

眼鏡の少女――――賈駆はそう心に言い聞かせ、これから待つだろう状況を考え、一人誓う。何があっても月を守り抜くのだと……

しんのすけが洛陽を去った日、洛陽に入った者がいた。その名は、董卓。この日から、静かに洛陽が混迷を深める事となる。それを知らず、しんのすけは行く。自身の感じた予感もすぐに忘れて。穏やかだった大陸の風。それが再び荒れ始める日は近い……

――――――

第九話

「雪蓮！　雪蓮っ！」

「駄目ですねぇ～。もういなくなってますよぉ」

「くっ……相変わらずだな、この素早さは」

眼鏡をかけた褐色肌の女性はそう言って大きくため息を吐いた。その隣の眼鏡の女性は対照的に白い肌をしていて、大き目の胸部を揺らしながら周囲をキョロキョロと見渡していた。

二人は仕える主を捜していた。というのも、その主はよく仕事から逃げ出してしまうのだ。なので、こうして見張りをしなければならないのだが、今日はどうやらその動きさえ予測していたように消えていたのだ。

（まったく……勘をこんな時にまで使わないで欲しいわ）

主君であり親友である相手の事を思い出し、女性はもう一度ため息を吐いた。すると、もう一人の女性が机の上に置かれた竹簡を見つけ出して苦笑した。

「冥琳様ぁ、これ見てください」

「……雪蓮らしいな」

冥琳と呼ばれた女性は竹簡の文面を見ると、そう言って小さく笑みを見せた。それは諦めの笑み。隣の女性はそれに同意するような笑みを浮かべていた。

そこにはこう書いてあった。何か面白い事が起きそうな気がするから街へ行く。仕事は自分でなければ駄目な物以外は冥琳と妹の蓮華に任せると。その奔放且つ他人任せな内容に二人は揃って息を吐いて仕事に戻るのだった……

洛陽から歩く事しばらく、しんのすけ達は江東の地に足を踏み入れていた。今まで活気のある街を見てきた彼ら。だが、その活気が街毎に違う事を認識し表情に驚きを混じらせていた。

南皮はただその土地の豊かさで、陳留は治める者の力で、そしてここは住まう者達自身の力で活気を生み出している。そんな風に星には見えた。袁術の客将でしかない孫策。それが治めるこの街が活気付いている事に、星は孫策の人望を感じ取っていた。

「こっちはあったかいね」

「南に近いからな。食べ物なども幽州とはかなり違うぞ」

「お～、それは楽しみですな」

「キャンキャン」

しんのすけの言葉にシロも同意するように声を出し、楽しそうに歩いていく。星も笑顔でその後を追う。まずは宿の確保をして、軽く街を見て回ろう。そんな事を話し合いながら彼らは歩く。南方原産の野菜や果物、魚などを見たりしながら街の者に宿の場所を尋ねる星。

しんのすけとシロはそんな星の後ろをついて歩きながら、周囲をキョロキョロと見渡していた。威勢のいい声や食欲をそそる匂い。市場ならではのそれらに意識を奪われつつ歩いていたのだ。

その速度は徐々にゆっくりとなり、星から離れていくのは当然といえた。シロは嗅覚で感じ取れたため、しんのすけへ声を掛けて急ぎ目にその後を追った。しんのすけもその声に視線を動かし、星から離れている事に気付いて少し走り出す。

と、そこで人ごみの中から出てきた誰かにぶつかった。咄嗟に避けようとしたが、それでも完全に避け切る事は出来なかったのだ。何せ市場は人が多い。下手に動けば別の人にぶつかる事になると思ったからだ。

「きゃいんっ！」

「あら？　ごめんね、坊や。怪我はない？」

しんのすけが自分の足に引っ掛かって転んだ事に気付き、その相手は少し不思議そうな表情のまま声を掛けた。彼女としんのすけの位置関係では完全衝突しかなかったはずだったからだ。そんな相手の声にしんのすけは起き上がって土を払うように手で服を叩いた。

そんな光景を見て相手は少し意外なものを見たかのような反応を見せた。幼い子供が平然と立ち上がり、何事も無かったようにしているのが珍しかったのだろうか。しんのすけはそんな相手に気付かず、服を叩きながら返事を返す。

「……っと、へーきだぞ。オラ、男の子だし」

「そう……」

「あ、ぶつかってごめんくさい」

「あはは、いいのよ。私も少し気を抜いてたし」

しんのすけの言い方に少し面白いものを感じたのか、相手はややおかしそうな声を返した。それにしんのすけは顔を上げて、初めて相手を見た。褐色の肌に桃色の髪。露出度が高めの服装に魅力的なスタイル。目には力があり、曹操とはまた違った強さを感じさせるものがある。

しんのすけはそんな相手に見とれた。すると、相手はそんなしんのすけの反応に小首を傾げる。ああは言ったが、どこか強く打ったのだろうかと思いながらしんのすけへ近付く女性。

「えっと、どうしたの？」

しんのすけの前にしゃがみ、声を掛ける女性。それにしんのすけは我に返り、顔をにやけさせた。

「おねいさん、今一人？　よければオラとご飯でもどう？」

「えっと、お誘いありがとう。でも……遠慮しとくわ」

（奇妙な子だわ。しかも、この歳で女を口説くとはねぇ……世も末かしら？）

しんのすけの子供離れした言葉に女性は若干苦笑しながらもそう考えた。しかし、何かが彼女に訴える。この子供を放っておいてはいけないと。これまで彼女が頼りにしてきた勘。それが何故か目の前の子供に強く反応していた。

故に彼女は初めて自分の直感を疑った。どうしてそんな風に思う

のかと自問をする女性へ、しんのすけがお決まりの事を問いかける。
そう名前だ。

「そっか。ねぇねぇ、ここで会ったのも何かのご縁だし、お姉さんのお名前教えて。オラ、野原しんのすけ。あざなはないぞ」

「そう、野原が姓で名がしんのすけってとこね。私は孫策よ。字は伯布」

変わった名前だと思いながらも、孫策は笑顔で名乗りを返す。それを聞いてしんのすけは響きから違和感を覚える。そう、それはここへ来る前から星に聞いた名だったのだから。しかし、それまでは思い出せずにしんのすけは頭に両手の人指し指を当てて考え込む。

「そーさく……？　あれ？　どこかで聞いたお名前だ」

「ふふっ、そうなんだ。それと、そーさくじゃなくて孫策よ。……ま、確かによく捜されるけど」

そのしんのすけの仕草に微笑みを浮かべ、孫策はそう言った。だが、それが最後には苦笑に変わる。よく自分を親友が捜索している事を思い出したためだ。その言葉を聞いてしんのすけが不思議そうに問いかける。

「え？　お姉さんは迷子？」

「違うわよ。にしても、私を知らないって事はしんのすけはこの街の人間じゃないのか」

しんのすけが自分の事を知らない事で旅人だと理解する孫策。す

るとそこへ星とシロが戻って来た。あまりにもしんのすけが遅いのでシロと共に来た道を戻っていたのだ。

傍にいる孫策の只ならぬ雰囲気に内心疑問を抱くも、星はしんのすけの姿に安堵した。シロもそれは同じだったらしく、嬉しそうにしんのすけへ駆け寄ったのだから。

「ここにいたのか、しんのすけ」

「キャン！」

「お、星お姉さんとシロ」

「あら、可愛い犬。それと、どうやらそっちは保護者みたいね。気をつけた方がいいわよ。この市場は結構賑わってるから」

孫策はそう星へ告げると手を振って歩き出す。目を離さないようにねと、そう言い残して。それに星は礼を述べ、しんのすけの手を掴んで反対へ歩き出した。しんのすけは星に謝りながら、視線を去っていく孫策へ向け手を振った。だが、その時しんのすけが言った言葉に星は呆気に取られる。

――バイバイ、そーさくお姉さ～ん。

それに星は足を止め、勢い良く振り返った。しかしそこにはもう孫策の姿はない。

「……孫策と名乗ったのか、先程の女性は」

「うん、そうだよ？」

「そうか。本当にお前という奴は……」

洛陽を出る時抱いた希望。それを本当に叶えた事に星が呆れたような笑みを浮かべるも、しんのすけはその理由が分からず不思議顔。だが、星が笑顔ならそれでいいと思ったのだろう。

しんのすけは平然と道を歩き出す。それに軽く引っ張られるようになりながら星も歩みを再開した。シロはそんな二人の近くをトテトテと歩いてついて行く。目指すは宿だ。

しかし既に星としては、孫策が平然と街を出歩いている事を知れただけでも収穫があったといえる。街の様子を知る事。それは暮らす者達の事を知ろうとしているのだろうと考えたからだ。そのため、その表情は少し嬉しそうだった……

（しんのすけ……ねぇ）

孫策は先程会ったしんのすけの事で気になった事があった。まず名前。この大陸では珍しい呼び名である事がまず一点。次は去り際に聞いたばいばいとの聞いた事のない言葉。最後は自分の直感が反応した事。

保護者として現れた女性も自分から見て武人だろうと感じた事もあり、しんのすけへの興味が孫策の中で少しずつだが強くなっていたのだ。また会えるだろうかと思いながら孫策が歩いていると、視線の先に見慣れた顔があった。

「祭？　ああ、今日は休みだったっけ」

そこにいるのは祭――黄蓋だった。孫呉の宿将である彼女は孫策にとって家族にも近い。そんな彼女は酒屋から出て来たところだったようで、手には酒が入っているだろう入れ物があった。

「祭！」

「ん？　おおっ、策殿か」

「何？　日も高い内からお酒？」

孫策がどこかからかうようにそう言うと、黄蓋は大きく口を開けて笑った。そしてこう言ったのだ。孫策だけには言われたくないと。それに孫策も確かにと笑って返す。だが、その話はそこで終わった。あまり言い過ぎると二人して苦手としている相手の事を思い出しそうだと、そう無言の内に感じ取ったのだ。

そこから話題を変えて話す二人。その話題は孫策が先程会ったしんのすけの事だ。色々な意味で気になる子供だったとの言葉に、子供が苦手な黄蓋も興味を持ったのか詳しくと告げると、孫策は視線を酒瓶へ向けて不敵に笑った。

「むぅ、いいでしょう。ただし、内容によっては新しい物を買って頂きますぞ」

「やったぁ」

孫策の言いたい事を理解し、黄蓋はやや悔しそうにそう告げる。それに孫策は嬉しそうな笑みを見せて口笛を吹き出した。その子供のような振る舞いに黄蓋は少し呆れながらも、どこか好ましく思っ

て笑みを浮かべる。それは、どこか母のようにも見える笑みだった……

宿に着き星は荷物を置くと、早速とばかりにしんのすけとシロを伴って街へ戻った。向かう先は宿の主人から聞いた食事処。そこで食事がてら情報収集をと考えたのだ。集める情報は鏡と孫策の事だ。

相手が街を出歩いているのは知った。なら、どこか良く現れる場所でもあればとそう考えたのだ。しんのすけを連れて行けば、もしかすれば話を出来るかもしれない。そう思ったのもある。

「孫策殿ともう一度会えるといいのだが」

「お？　そーさくお姉さんに会いたいの？」

「お前……さては私の本来の旅の目的を忘れたな？」

星のその言葉にしんのすけは忘れていないと返した。だが、孫策が世の中を救ってくれるのかと問いかけたのだ。それに星はそれを見極めるために会いたいのだと告げる。

そうして、星は昼食を食べるための店に入って思わず言葉を失った。そこには孫策と黄蓋がいたのだ。しかも酒を飲んでいるらしく、表情は楽しそうだ。それを見てしんのすけが声を上げて孫策を指差した。

――あー、そーさくお姉さんだ！

それに孫策達も振り向いてしんのすけ達を見た。孫策は意外そうな表情をした後、笑みを浮かべて手を振った。

「あら、また会ったわねしんのすけ」

「ですなぁ。オラとおねいさんは赤い糸で結ばれてるのかも～」

嬉しそうな表情で孫策へ近付くしんのすけ。その物言いに黄蓋が少し驚き、納得したかのように頷いた。孫策に聞いていた通りの奇妙な印象を受けたからだ。子供が物怖じしないと知っていても、ここまで軽々しく口を利いてくる事には驚きを禁じ得ない。

この街の子供達でさえ、孫策にこんな事を言ったりはしないのだ。黄蓋がそんな風にしんのすけへ驚きを感じていると、星がそんな彼女へ近付いて一礼した。

「失礼。私は旅の者でしんのすけの面倒を見ている趙雲と申す者。しんのすけは故あって幼くして親と別れたため、以来私と旅ばかりしておるのです。それ故奔放になったはいいのですが、あまり礼儀を知らぬ子になってしまいまして……」

「そうか、幼くして親と……いや、分かった。趙雲とやら、そなたも大変じゃったろう」

星の嘘ではないが真実でもない説明に黄蓋は納得した。基本礼儀を教わるのは周囲から。だが、旅の日々ではそれも中々身に着かないだろうと。それに礼儀を知らぬとしても、子供だと思えば仕方ない。そう思い、黄蓋はしんのすけへ視線を向けた。

孫策相手に口説き紛いの事をしている彼を見て、黄蓋は呆れた。実に板についていたからだ。その彼女の視線にしんのすけも気付いたのか顔を動かした。絡み合う二人の視線。するとしんのすけが黄

蓋を見て一際大きな声を出した。

――おおっ！　おねいさん、スゴイボインだ！

その言葉に星以外が疑問符を浮かべた。何を言ったのだろうと。星はそんな周囲に気付き平然としんのすけへ注意した。

「こらしんのすけ。あれ程異国の言葉を使うなと言っただろう」

「え？　……あ、ほい。ごめんくさい」

星の視線が黙って頷いておけと言っているように思え、しんのすけはそう返して頭を下げた。一方孫策は星の言った単語に反応を示した。

「異国の言葉？」

「ええ。しんのすけの父はどうも学者だったらしく、異国の文化を調べていたようなのです。それで、時々異国の言葉を無意識に使ってしまうようで……おそらく幼い頃に聞いていたためでしょう」

「そうか。となると正しい意味は分からんのか」

星の説明に感心したような表情を見せる孫策と黄蓋。その疑問の言葉に星は頷いて、本人も感覚で言っているのでと告げた。だが、何となく状況から大きいと言いたかったのではないかと告げた。

それにしんのすけもそんな感じと返し、黄蓋は納得したように頷いた。しかし何故か一度自分の胸へ目をやり、しんのすけへ再度視線を向けると愉快だとばかりに笑った。

「小僧、お前は儂の乳を見て驚きよったか」

「だって、オラそんなにおムネ大きい人初めて見たもん」

「わっはっはっは！　正直な奴じゃ。ん？　そういえばお主、先程儂の事をお姉さんと言いおったか？」

「そーだよ？」

何故そんな事を聞くのだろう。しんのすけはそう思って黄蓋を見つめる。すると、黄蓋は嬉しそうにまた笑い出し、しんのすけの頭へ手を置いて告げる。自分はもうかなりの高齢なのだと。しかし、それを聞いてもしんのすけは信じられないとばかりに小首を傾げる。

黄蓋はどう見ても綺麗なお姉さん。そうとしかしんのすけには見えなかったのだ。それが母であるみさえ以上の年齢だと言われても、納得出来るはずがないのだから。そんなしんのすけの反応に好ましいものを感じる黄蓋。世辞などではなく、本心から言っていると分かったからだ。

「中々見所のある奴じゃ。それにしても、まず驚くのが胸とはのう。その歳で男として目覚めておるのか？」

「え？　オラ、寝てるみたいに見える？　ほーら、ちゃんと起きてるぞ」

黄蓋の問いかけにしんのすけは意味が分からないとばかりにそう返して、自分のまぶたを指で広げて見せた。それに黄蓋は呆気に取られてから笑い出す。更に孫策と星だけでなく周囲の客達も笑い出した。そんな笑い声の響く中、しんのすけだけは状況がよく分からないが楽しそうに笑うのだった……

あれから二人に星が自己紹介をし、しんのすけは黄蓋の名を聞いてごーかいさんと呼ぶ事にした。その呼び方に黄蓋がどこか嬉しそうな表情を見せた。

本当ならばそこにお姉さんとの呼び方が続くはずだったのだが、その呼び方は恥ずかしいので止めてくれと黄蓋が頼んだためにそうなった。ちなみにそんな彼女の様子を見て、孫策は密かに笑っていた事を記す。

そして二人と共に食事を済ませたしんのすけ達は、妹に会わせてみたいとの孫策の思いつきにより彼女の城へと招かれていた。だが、孫策は城門前に潜んで待ち構えていたお団子で髪を纏めた鋭い目つきの女性に連行された。

抵抗しようとした孫策だったが、その女性が何事かを耳元で囁くと項垂れたように大人しくなり、しんのすけ達へまた後でと告げて疲れたような表情のまま城の奥へと消えていった。黄蓋はそれに苦笑しながらしんのすけ達を案内するように歩き出したのだ。

「先程の者は甘寧と言ってな。権殿――つまり孫権様の傍付きのような役目も負っておる」

「孫権殿ですか。確か孫策殿の妹君でしたな。成程、それであの身のこなしを」

星は少しだけだが見た甘寧の動きを思い出し、感心したように頷いた。護衛をするために気配を殺す術を身に着けているのだろうと

思ったからだ。それを察したのか黄蓋も嬉しそうに頷くが、まだまだ未熟よと言うのを忘れなかった。だがその声はどこか嬉しそうだったので、星はきっと黄蓋自慢の者なのだろうと思った。

しんのすけはそんな会話を聞き、自分が見た甘寧の感想を黄蓋へ告げた。

「あのお姉さん、スゴク速かったぞ。オラ、いつ出て来たか分かんなくてびっくりした」

「ははは、それは当然じゃ。お前に見えるようでは孫家の武将とは言えん」

「あんな事出来る人、他にもいる？」

「そうじゃな。もう一人おるぞ」

「おおっ！　スゴイね！」

しんのすけの素直な驚きに黄蓋は楽しそうに笑う。その会話で出て来た孫家との響きに星はやはりと思い、内心である予感を強めていた。それは、この孫策達がいつか独立するだろうというもの。

袁術の客将で燻り続けるはずはない。もし仮にそうなら、わざわざ孫家などとは言わずただ武将と言えばいいはずだ。それに孫策自身の器や黄蓋の雰囲気、そして先程の甘寧の動き。星から見ても天下を狙えるだけのものがあると思わされた。更にこれから出会う孫策の妹達も孫策に負けず劣らずの器であったのなら、それは確実といえるだろう。そんな風に考え、星は歩く。

一方、しんのすけはシロを抱えて城の廊下を歩きながらキョロキョロしていた。この城に入った時から何か妙な声が聞こえていたのだ。だから黄蓋へあんな事を聞いたのだが、ふとしんのすけは足を止めた。その聞こえてくる言葉を信じてある事を試そうと。

シロはそんなしんのすけを見上げた。星と黄蓋はそのまま歩き続けているので、シロは声を掛けて追いかけようと告げる。だが、しんのすけはそれに構わずシロを下に置いて誰にでもなく告げた。好きに触っていいよと。だが、当然何も起きない。なので、しんのすけはならばとシロへ告げる。

――シロ、わたあめ。

――くぅ～ん……？

疑問に思いながらも体を丸めるシロ。その瞬間、突然そこに何かが現れた。

「はぅあ！　可愛いのです！　もふもふなのですっ！」

「あ、やっぱり誰かいた」

しんのすけがシロを抱えて歩いている途中、たまに聞こえていたのだ。誰かが微かな声でもふもふしたいと言っているのを。最初は空耳かと思ったのだが、あまりにも聞こえてくるので試しにとシロのわたあめをやってみせる事にしたのだ。

黄蓋に聞いた言葉もその判断を後押しした。甘寧のように姿を消す事が出来る者がいる。もしかしたらそれが自分の聞いてる声の相手かもしれないと。結果はご覧の通りだったという訳だ。

「はぅぅぅぅぅ」

シロを抱え、満足そうに表情を緩める黒髪の少女。それを見てしんのすけは頷いて問いかけた。

「ね、満足した？」

「え……？　はぅあ！？」

しんのすけの声に我に返ったのか、少女は驚くとびくりと体を震わせた。だがそれに構わずしんのすけは再度問いかけた。満足したのかと。それに少女は戸惑いながらも頷き返す。しんのすけはその答えに納得したように頷いて、次の質問を出した。

「お名前は？　オラ、野原しんのすけ。名前がしんのすけであざなはないぞ」

「あ、えっと……私は周泰。字は幼平です」

「ほ～ほ～、しゅーまいかぁ。おいしそうですな」

周泰の名を聞き間違えるしんのすけ。その名前は普通人には付けないとは考えない。しかし、周泰はしんのすけが自分の名前を間違えたと気付き、やや慌てるように指摘する。

「え？　あ、いえ、周泰です」

「あ、そうなんだ。間違えてごめんくさい。えっと……なら、しゅーちゃんでいい？」

「周ちゃん？　えっと、それは私の事ですか？」

しんのすけの呼び方にどこか意外そうな顔をする周泰。それにしんのすけは頷いた。駄目なら別のを考えると。それに周泰が理由を尋ねる。しんのすけはこっちの名前は難しい物が多く、間違える事が多いので簡単な呼び名を付けさせてもらっていると返した。

それに周泰も納得し、ならばとその呼び名を許可した。と、そうなったところでそこへ星と黄蓋が現れた。ふと気がつけば、しんのすけがいなくなったため捜しに来たのだ。すると二人は周泰の姿を見て同じように軽い疑問を抱く。星は単純に誰だろうとのもの。黄蓋はどうしてここにというものだ。

「明命、何故お前がここにいる？」

「あの……実は先程仕事から戻って参りまして、そこでこのお犬様を見てしまい……」

少々言い難いそうに周泰はそう告げた。黄蓋はそれだけで事情を察して呆れたように息を吐いた。周泰は猫に目がない。そして同じように可愛らしい物に弱いのだ。そう、周泰は綿のようなシロを見て一目で虜になってしまった。それこそ任務の結果報告を忘れて追い駆ける程に。

黄蓋はそんな周泰へ叱りつけるかと思って声を出そうとした瞬間、しんのすけがそれを遮るように声を発した。

「お犬様じゃないよ。シロだぞ、しゅーちゃん」

「え？」

「シロってお名前で呼んであげて欲しいぞ。な、シロ？」

「キャン！」

しんのすけの声に応えるようにシロは周泰の腕の中で元の姿に戻った。周泰は綿のような状態では無くなった事に少しだけ残念な顔を見せるも、すぐにシロが頬を摺り寄せてきたので再び嬉しそうに笑みを見せた。それには黄蓋も叱る気が失せた。

何せ、心から幸せそうな笑顔なのだ。そんなものを見て怒りを抱ける程、黄蓋は鬼ではない。しかも、これが仕事中などであればその限りではないが、今は仕事を終えた状態。なら多少は大目に見てやろうと考えたのだ。

「シロは大人しいのですね……」

「そうだよ。あ、しゅーちゃん。良かったらシロのお友達になってくれない？」

「いいのですかっ？！」

「おおっ！？　しゅーちゃん、ちょっと驚き過ぎ」

思わず身を乗り出す周泰。それにしんのすけは若干驚いて距離を取る。それに気付いた周泰は少し恥ずかしそうに顔を赤めた。そして、一言謝り頭を下げた。それにしんのすけはそこまで気にしなくてもいいと告げ、シロへ視線を落としてからその頭を撫でる。

「それと、オラともお友達になってくれると嬉しいぞ」

「お友達……はい、喜んでっ！　えっと、しんちゃん、シロ、これからよろしくです！」

しんのすけの申し出は周泰にとっては嬉しいものだった。彼女は本当は猫の方が好きなのだが、それに嫌われてしまう事が多い。だが、シロはそんな自分が何をしても嫌がらずにいてくれる。しかも飼い主であるしんのすけと友人になれば、そのシロと遊ぶ事が簡単に出来るようになる。

それに、武将である自分と初めて友達になろうと子供に言われた事が嬉しかった。そのため、周泰は笑顔でしんのすけとシロへ返事をする。それにしんのすけは頷いた。

「よろしく」

「キャン」

しんのすけはそう言って周泰へ手を差し出す。それに倣うようにシロも周泰へ前足を出した。それが握手を誘っていると理解し、周泰はその手で交互に優しく握った。それを眺め星は黄蓋へ告げる。しんのすけは友人を作るのが上手いのだと。それに黄蓋は心から納得するように笑うのだった……

一旦任務の報告に行く周泰と別れ、しんのすけ達は黄蓋の案内である部屋の前まで来ていた。そこに孫策が会わせようと思った妹がいるらしい。黄蓋は扉の前に立つとそこから中へ声を掛けた。

「小蓮様、策殿が会って欲しい者達がいると言っておりましてな。今、ここにその者達を連れて参りました」

孫家の末娘の彼女は、姉達に会いたくてお忍びで遊びに来ていた。まぁ、彼女だけならいざ知らず、かなり目立つ存在を伴って連れて来たため、それを姉達に叱られたのでこうして城に軟禁状態となっている。

それを思い出し、孫策はしんのすけを彼女に会わせようと思ったのだ。自由奔放な性格で子供らしさも残す彼女。ならば、しんのすけと会う事で友人にでもなれば。そう思ったのだ。

「雪蓮お姉ちゃんが？　ふ～ん……じゃ、入ってもらって」

丁度退屈だった事もあり、少女は気晴らしになるかと思って返事をする。その返ってきた声にしんのすけと星は同じ感想を抱いた。鈴々や許緒と同じぐらいの年頃だろうと。

黄蓋が部屋の扉を開け中へ入る。それに続くようにしんのすけ達も中へ入ると、そこには孫策と同じ髪の色をした少女がいた。褐色の肌で背丈的にも鈴々と同じぐらい。しんのすけはそんな彼女を見て反射的に告げた。

――おー、かわいいけどワガママそう。

それに全員が呆気に取られた。だが、黄蓋はすぐに立ち直るとおかしくて仕方ないとばかりに笑い出し、星は笑いこそしないが中々言い当てているかもしれないと思い、内心苦笑していた。当の言われた本人はその評価にわなわなと震え、しんのすけを指差して叫んだ。

――そんな事ないもん！　シャオは結構尽くすもんっ！

更にそこから続けてこう言った。孫家の姫である自分を捕まえて可愛いと言うのはともかく、ワガママそうとは許せないと。それに

しんのすけが二度程頷き、更に告げた。違うなら怒らなければいいと。

「ムーっ！　あんた、初対面のくせに失礼にも程があるわよ」

「それほどでも～」

「ちょっと！　褒めてないんだけど！」

「あ、そうなんだ」

「そうなんだって……普通分かるでしょ？　も～、何か怒ってるシャオが馬鹿みたい……」

「お？　よく分かんないけどお元気出して」

「誰のせいでこうなったと思ってるのよ……」

そう言ってため息を吐いて項垂れる少女。それにごめんくさいと頭を下げるしんのすけ。そんなしんのすけの態度に面白さを感じる少女。それによくよく考えればしんのすけは自分を馬鹿にしてる訳ではないと気付いた。

だからだろうか、どこかでこのやり取りが楽しく思えた。それに比例するように怒りも消え始めたので、目の前にいる少年の事を知ろうと考えた。何せ姉が会ってみろと連れてきた相手なのだ。

「ま、いっか。えっと、あんたの名前は？」

「野原しんのすけ。名前がしんのすけであざなはない」

「ふぅん、しんのすけって言うんだ。変わった名前ね」

「みんなそーゆー。で、そっちのお名前は？」

孫家の姫を相手にしていると思えない程の態度。それにしんのすけの事を何も知らない少女は、彼は胆が太いのだと感じた。それと同時に自分を特別扱いしない事に好感を覚えた。

それはどこかで自分が友人に望んでいた態度。そう、友達が出来るのならこんな風に接して欲しい。そんな風に思っていたからだ。そこには、幼い頃から見てきた姉とその親友の姿が大きく影響している。

「シャオは孫尚香って言うの。字が無いのはあんたと同じ。そうね……尚香って呼んでいいわ」

「しょーこー？　ひめちゃんじゃダメ？」

「姫ちゃん？　どうして？」

「だって、お姫様なんでしょ？　その方が覚えやすいし、可愛いぞ」

「成程……それもそっか」

しんのすけの告げた理由に理解を示し、尚香は笑みを見せて頷いた。それに、もう一つ尚香にはその呼び方を許す理由があった。それは、その呼び方が親しみを込めるためにつける愛称のように思えたからだ。

そして尚香は、何故姉の孫策がしんのすけと会わせようとしたのかを自分なりに考えていた。自分の友人を作ってあげようとしたのではないかと。孫呉の姫である尚香には、当然ながら対等の関係で

接する友人などいない。姉である孫策には、幼い頃からの親友である周瑜がいる。もう一人の姉である孫権には、臣下として分を弁えているが友人のように支えている甘寧がいるのだ。

それを考えた時、自分にはそんな相手はいない事に気付いた。なのでそれを不憫に思った姉が、市井の子供の中から自分に物怖じしない者を連れて来たのではないのかと、そう尚香は考えた。

自分が姉達と共に暮らす日はまだ先だが、その時が来ればしんのすけとも仲良く遊んだり出来るだろうかと思う尚香。その表情は少し嬉しそうに笑みを浮かべていた。

（えへへ、シャオにもお友達が出来るなんてね。雪蓮お姉ちゃんに後でお礼言っておこう）

「じゃ、しんの……ちょっと待って」

「どしたの？」

しんのすけへ呼びかけようとした尚香だったが、何かを思い出したように考え始めた。しんのすけはそれに不思議そうな声を返す。すると、尚香は一人納得するように頷いてこう言った。

――シャオが姫ちゃんだから、そっちはしんちゃんね。

――あ、そんな事か。ほーい。

自分が親しみをもって接しようと思って告げた事に対するしんのすけの素っ気無い返事。尚香はそれにどこか不満そうだが、しんのすけの性格をどこか理解したのか文句を言う事無く遊ぶために部屋の外へと出て行く。勿論しんのすけを誘って。しんのすけはシロも

一緒に遊んでもいいかと尋ね、それに尚香は即答で許可を出す。

こうしてしんのすけと尚香はシロと共に部屋を出て中庭へと向かって走り出す。その遠ざかる声を聞きながら、星は黄蓋へ視線を向けた。孫策に負けず劣らず自由奔放だと感じたためだ。すると、黄蓋もそう思っているのだろう。互いに微笑みを見せ合い、二人は同時に呟く。

――孫家の姫らしい御方だ。

そんな事を言われているとは知らず、尚香はしんのすけとシロへ自分の大事な家族でもあり友人でもある者達を紹介していた。それは、パンダの善々とホワイトタイガーの周々だった。それにしんのすけは恐怖するのではなく心から驚き、それに易々と乗ったり出来る尚香へ憧れるような眼差しを送った。

シロは若干怯えていたが、二頭が敵意がない事を察してゆっくり近付きその手を舐めた。それに二頭も応じるようにシロへじゃれるような接し方をしたのだが、やはり体格差のためかシロはどこか怯えたままだった。

――ね、ひめちゃん。オラも乗せて乗せて！

――いいけど……周々に変な事しないでよ。

――ほい。

その後、しんのすけはやや怯えるシロを尻目に、尚香と共に見事周々へ乗りご満悦だった……

そのまま中庭で尚香達と遊んでいたしんのすけとシロだったが、そこへある者達が現れてそれを中断する事になる。それは二人の女性だ。

「ん？　あれは……シャオか」

「そのようです。傍にいるのは先程お話した子供のようですね」

甘寧の言葉に女性は頷き、視線を中庭へと戻す。そこで周々に乗って何かを話しているしんのすけと尚香へ大きめの声をかける。

「シャオ、そこで何をしているのだ？」

「あ、蓮華お姉ちゃんだ」

「お？」

突然掛けられた声に尚香が反応し、しんのすけもそれにつられるように視線を動かす。そこには孫策や尚香と同じ髪色をした女性がいた。そしてその背後には孫策を連行した甘寧の姿もある。

だが、しんのすけはそれに構わず素早い動きで乗っていた周々から降りると、蓮華と呼ばれた女性へ向かって駆け寄った。その動きに尚香達は驚きの表情を浮かべる。唯一甘寧だけはそれに嫌な物を感じて、女性の傍へと近寄った。

「おねいさんはひめちゃんとそーさくおねいさんの家族？」

「そ、そーさく？　あ、雪蓮お姉様の事か。そうだけど……」

にやけた顔で自分を見上げる子供という異様な光景に、女性は普段の口調ではなく素の口調になってしまう。それに構わず、しんのすけはそのだらしない表情のまま頷いて、一際嬉しそうにこう言った。

――――あはー、おねいさんもびじんさんだ～。

それに女性はどう反応を返せばいいのか戸惑う。褒めてくれてありがとうと喜べばいいのか、なれなれしいと怒るべきなのかと。相手は子供。だが、自分は孫家の姫だ。

そう思えば、やはり一度叱るべきか。そんな風に考える女性だったが、その相手であるしんのすけが突然何かに気付いたのか、視線を女性からその横辺りへ動かした。

そこにはやや鋭い目つきをした甘寧がいた。その表情はどこか怒りを秘めているように見える。

「お姉さん、さっきそーさくお姉さんを連れてった人だよね？」

「そうだ。お前の事は雪蓮様から聞いている」

甘寧の言葉にしんのすけは頷く。そこへ尚香もシロを抱えて近付いてきた。周々と善々もその後ろに控えるようにいる。

「ね、しんちゃんの事を雪蓮お姉ちゃんは何て言ってたの？」

「はっ、礼儀知らずで異国の言葉を使う事もある奇妙な名前の子供だと」

甘寧の説明に疑問符を抱いたのだろう者達の声が返ってくる。しかし、何故かそれは二つではなく三つだった。

「「「異国の言葉？」」」

「お二人はともかく、本人のお前が問いかけるな」

「おおっ！　今のオラの事だったのかぁ。てっきりシロ辺りの事かと……」

「どうして犬の事を話さねばならん。それに犬は喋らんだろうが」

少しずつではあるがしんのすけの態度に怒りを強めていく甘寧。それを感じ取り、尚香がしんのすけの耳元へ口を寄せ軽く注意する。怒らせると厄介な相手だから少し大人しくした方がいいと。その忠告に頷き、しんのすけは甘寧を黙って見つめた。

甘寧には先程の尚香の忠告が聞こえていた。だが、それを一々取り合っていては仕方ないと思い、何も言わずにしんのすけを見た。女性は、甘寧の鋭い視線を正面から受けてもこれといった反応を示さないしんのすけに違和感を抱き、それを問いかけた。

「お前は思春の睨みが怖くはないのか？」

「お？　ししゅ……っと、危ないぞ」

孫権の告げた名を尋ねようとしたしんのすけだったが、視界の中に映る甘寧の視線が鋭くなったのを見てある可能性を思い出し、何とか思い止まった。それを聞いて甘寧が小さく頷き、孫権はしんのすけが自分達の名を知らない事を思い出した。

そして、もう少しでしんのすけが甘寧の真名を呼ぼうとしていた事にも気付き、彼がこの大陸の人間ではないのではと思った。珍しい名に真名と名の区別が瞬時に出来ない事などからだ。だが、しんのすけは孫権がそれを問いかける前に彼女の問いかけに答えた。

「えっと、母ちゃんの怒った顔の方がもっと怖いから」

「そうか……どこでも母は怖い者なのだな」

しんのすけの答えに女性はどこか懐かしむ目をして微笑んだ。それに尚香はやや寂しそうな表情をし、しんのすけがそれに気付く。

「ひめちゃん、どうしたの？」

「えっ？　あ、何でもない。ねぇ、それよりもしんちゃんのお母さんってどんな人？」

「オラの母ちゃんはみさえって言って、お便秘に悩むおケチな主婦だぞ」

尚香がやや慌てるように誤魔化し、話題を変えようとそう返す。それを聞いたしんのすけは、彼女の反応を特に気する事もせずに話し始めた。そんな中、孫権と甘寧は尚香の態度から何を考えていたのかを理解した。

特に孫権は妹が母の記憶をほとんど持たない事を思い出し、自分を軽く責めた。姉の孫策と自分は母である孫堅の事を覚えている。だが、歳の離れた妹である尚香はあまり共に過ごした思い出がないのだ。

戦に生きたと言ってもいい猛将だった孫堅。そのため、尚香が物

心つく頃は戦場を駆け回ってばかりいたのだから。

（シャオには辛い事を思い出させてしまったわ。もう少し気をつけないと駄目ね）

そんな孫権の前ではしんのすけのみさえ話が披露されていた。その実の親をけなす発言を平気でする事に驚く三人だったが、その内容に次第に孫権と尚香の笑みが増えていく。

しんのすけがうんざりしながら語るお仕置き関係は、聞いているとくすりと笑える物からあまり笑えない物まであり、どれ程彼が問題行動をしているかを教える事になった。甘寧はそんな内容に呆れるしかなかったが。

だが、根底にあるしんのすけの母への思慕も伝わったのだろう。最後には尚香や女性だけでなく、甘寧さえもどこか穏やかな表情をしていたのだから。

そんな話を終えて、しんのすけは忘れていたとばかりに女性と甘寧へ視線を向けて自分の名を告げた。それは相手の名前を聞くための行為。相手の名を聞く時は自分の名を名乗る事。それが基本だとこの大陸に来てから、しんのすけは自然と身に付けたのだ。

案の定、女性はしんのすけの名に珍しいと反応を返し、甘寧も確かに聞いた事がない名前だと同意した。そして、聞いたのだからと女性がしんのすけへ名を名乗り返す。

「私の名は孫権。字は仲謀だ」

「名は甘寧。字は興覇」

「えっと、つんけんお姉さんにかんでんお姉さんか。しびれそうだ

ぞ」

孫策の名前を間違えて覚えているしんのすけは、見事なまでに二人の名前を間違えた。それを聞いて思わず笑ってしまう尚香。一方孫権は苦笑し、甘寧は怒気を漂わせる。

それをすぐさま感じ取り、しんのすけは自分がまた間違えたと理解した。しかも、今回はかなり怒らせてしまったとも。なので、いつも以上に誠意を以って謝罪の意を示した。

――お名前間違えてごめんなさい。お願いだから、間違えないようにもう一回お名前聞かせて欲しいぞ。

その申し出に甘寧は子供にしては丁寧な対応だと思ったのか、先程までの怒気を消した。そして、もう一度ゆっくり名前を名乗る。それを聞いてしんのすけが甘寧の名を完全に理解した事を確認し、彼女は小さく頷き次はないと告げた。

それに苦笑いを浮かべる孫権だったが、自分の名も間違えている事を教えて正しく呼んでくれともう一度名を告げた。尚香は不敵な笑みを浮かべるも何か言う事はない。それが甘寧にはどこか納得出来ないものだったが、事を荒立てるつもりはないとばかりに無言を通した。

そんな風に三人が落ち着いたのを見計らい、しんのすけが孫権へこう切り出した。

――ね、じゃあお姉さんの事をけんのお姉さんって呼んでもいい？

そのしんのすけの言葉に甘寧が若干眉を顰めるが、孫権がそれを抑えて理由を聞く。孫策と姉妹なら策と権で呼び分けたい。そう夏侯姉妹の名を例に挙げて告げると、それに三人が驚きを見せた。

「お、お前は夏侯姉妹と知り合いなのか？」

「そーだよ。もうちゃんともお知り合い」

「もうちゃん？」

「まさか、曹孟徳の事か？」

しんのすけの告げたもうちゃんとの呼び方に首を傾げる孫権。だが、甘寧はどこか違っていて欲しいと思いながら予想される名を告げた。それにしんのすけが平然と頷くと三人は一際驚いた。

黄巾の乱で首魁張角を討ち取った英雄。それを子供がもうちゃんと呼んでいる。それが三人に与える衝撃は大きかった。本人はそこまで感じていないのだろうが、他の者がそんな呼び方をすればどうなるかは容易に想像がつく。子供だからとはいえそんな呼び方を許可した事が意味するのは、曹操がしんのすけを周囲に比べ優遇しているとしか思えなかったのだ。

「お前は一体何者だ？」

「オラは野原しんのすけ。どこにでもいる五歳児だぞ」

「お前のような子供がどこにでもいてたまるか」

純粋な疑問をぶつける孫権。それに返したしんのすけの答えに甘寧が即座に突っ込んだ。そこには、曹操の事だけではなく孫権に向けた邪な視線なども関係している。

それを知るはずもない孫権と尚香はそれに苦笑した。言われた本人は甘寧の言葉に特別扱いされたと感じて、嬉しそうに反応を返し、

それにまた孫権と尚香が笑う。

「それにしても……けんのお姉さんに聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

しんのすけの問いかけに不思議そうな表情を返す孫権。しんのすけは視線をその頭部へ向け、指差した。そこには彼女独特の髪飾りのような物がある。ハンガーのようにも見えるそれが、しんのすけには気になってしょうがなかったのだ。

「それ、スゴイね。重くない？」

「これか？　まぁ確かに多少は重いが気になる程ではないぞ」

「ほーほー。で、おいくらですかな？」

「ん？　値段を聞いてどうするのだ？」

「何となく聞いてみただけ。でもそれ、オラだったら首の骨折りそうだぞ」

「あははは。確かにしんちゃんは無理よ。お姉ちゃんだって重いって感じるんだし」

「こほん。シャオの言う通りお前には辛いと思うぞ。それにしても……何となくで聞くのが値段か。本当に変わっているな」

楽しげな尚香と苦笑する孫権。しんのすけはそれににやけた笑いを返す。そんな彼にやや不機嫌な眼差しを向けている者がいる。甘

寧だ。

（こいつ、蓮華様に対して馴れ馴れしすぎる。だが蓮華様自身が気になさってない事を私が言う訳にも……）

しんのすけの態度に複雑な考えを浮かべる甘寧。すると、しんのすけが甘寧の方へ視線を向けた。ぶつかり合う両者の視線。だが、しんのすけは何事も無かったかのようにこう言った。

――ねぇ、かんねーお姉さん。どうして髪下ろさないの？　そしたらもっとびじんさんだぞ。

その言葉を甘寧はたった一言邪魔になるからだと一蹴。だが、それにしんのすけは不思議そうに首を傾げた。ならばどうして切らないのかと返したのだ。すると、珍しく甘寧が少しだけ言葉に詰まった。尚香と孫権はそんな甘寧に意外な表情を浮かべた。

甘寧はそれに気付いたのか、やや早口でこう返した。短く切るとまた伸びてきた時が鬱陶しく感じる。なので、ある程度髪が長いと伸びる速度が遅くなる事を利用し、いつも同じ長さで調整しているのだと。それにしんのすけは感心したように声を上げた。

「お～、そうなんだ。オラ知らなかったぞ」

「そうか。なら、これで少しは賢くなったな」

「ほい。あ、教えてくれてありがとございます」

「……礼はいらん。そんなつもりは無かったからな」

素直に頭を下げるしんのすけに甘寧はやや面食らったものの、そ

う返した。礼儀がなってないと思いきや、他愛もない知識を教えてもらった事にちゃんと礼を述べたのだ。その意外さに甘寧も少しだけ感心したのか、声には驚きが微かに混ざっていた。

そんなやり取りをし、尚香はシロをしんのすけへ返して部屋と戻った。孫権が遊んでばかりいないで勉強をしろと言ったためだ。尚香は下手に抗うよりも従った振りをした方がいいと考えたのだろう。

それを見送り、孫権はしんのすけへ尚香と仲良くしてやって欲しいと姉らしい言葉を掛け立ち去った。当然甘寧はその後を追うのだが、その前にしんのすけへ一言言い残した。

――――蓮華様に邪な目を向けないようにな。

――――よこしまはダメ？　ならたてしまならいいの？

その声に微かに警告めいたものを混ぜる甘寧だったが、それにしんのすけが気付くはずもなく平然とそう返した。その言葉に呆れる甘寧だったが、そういう事ではないと告げるとそれ以上何も言わずに孫権の後を追った。

時間の無駄だと踏んだのだろう。なので孫権とあまり離れない事を優先したのだ。遠ざかる甘寧へ手を振って見送るしんのすけ。シロはそんな彼へため息を吐いた。ちゃんと言われた事を理解していないと思ったからだ。

誰もいなくなった庭で、しんのすけはシロへ視線を落としてどうするかと問いかける。それにシロは尚香の部屋の方を指差す。そちらへしんのすけが視線を向けると、星がこちらへ向かってくるところだった。

「あ、星お姉さん」

「尚香殿が戻ってきたのでな。勉学の邪魔にならぬようにと部屋を出て来た」

星はそう言ってしんのすけを誘導するように動き出す。どうも孫策がしばらく動けそうにないので宿に帰る事にしたらしい。その旨を共に部屋を出た黄蓋に伝えたのでまた明日にでも来ればいい。星はそう言って歩く。しんのすけはそれに頷き、シロと共に歩き出す。

だが、しんのすけ達が城から出ようとした時だった。後ろから呼び止める声が聞こえたのは。それに振り向くしんのすけ達。そこには息を弾ませた孫策がいた。

「ちょっと待ちなさいよ。挨拶も無しに帰ろうとは酷くない？」

孫策はそう言って少し怒りを見せる。どうも黄蓋がしんのすけ達が帰ろうとしている事を話したのだろう。だから急いで現れたようだ。星はそう判断し、孫策へ気後れする事もなく言葉を返す。

「無論挨拶に行こうとは思いましたぞ。しかし黄蓋殿が言うには、おそらく周瑜殿に見張られ仕事中だろうから今は行くだけ無駄だと」

「そうなんだ。あれ？　じゃ、さくのお姉さんお仕事は？」

「クゥ？」

星の言葉にしんのすけが納得がいったと頷き、ふと浮かんだ疑問を問いかける。シロもそれに続くように首を傾げて孫策を見つめる。そんな二対の視線に孫策が小さく呻く。

そう、彼女はある目的のために仕事を放棄してここへ来たのだ。そんな孫策の反応から星は逃げてきた事を悟り、不敵な笑みを浮か

べた。そして孫策の後ろを見て何かに気付いたように告げたのだ。

――――あ、周瑜殿がこちらに……

――――っ！？　って、騙されないわよ。

その言葉に驚愕の表情を浮かべた孫策だったが、それも一瞬だった。すぐに不敵な笑みを浮かべそう告げたのだ。しかし、一応それとなく振り返って確認するのを忘れない。無論そこには当然ながら誰もいない。そして、こう指摘した。星が周瑜の顔を知らない事を。

（やはりこんな子供だましでからかうのは無理か……）

内心ため息を吐くも、こんな見え透いた手をする自分も自分かと思い、星は苦笑するしか出来ない。星はそのまま孫策に冗談が過ぎたと謝罪してきたので、彼女としてもこの件に関してあまりきつく言う事は出来なかった。

「それにしても……趙雲、あなた中々面白いじゃない」

「そうですかな？」

「私を引っ掛けようとした事が十分面白いじゃない。惜しいなぁ。母様が生きていれば将にでも取り立ててくれそうなのに」

「ほう。孫堅殿は流浪の私を将にしてくれるのでしょうか」

「多分ね。祭とあれだけ飲み交わす事が出来るし、私の勘が告げてるの。あなたがかなり強いだろうって」

楽しそうに会話を交わす二人。だが、孫策の目がやや鋭くなっている。星はそれが武人ではなく猛獣の類に近いと感じ、虎の娘も虎かと思っていた。星の考えが分かったのか、孫策も嬉しそうな表情を浮かべている。

そこから孫策は星へ一度手合わせをして欲しいと告げるのだが、星としては正直どうするかを迷っていた。武人としては受けたい。だが、どこかで直感が告げるのだ。それは止めておけと。受けた事で何か自分の身が危険に晒されるような気がする。そう感じたのだ。

そんな風に星へ手合わせを迫る孫策の後ろから一人の人物が現れた。しんのすけはそれに気付き、視線を動かした。そこにいたのは褐色の肌に流れる黒髪の眼鏡を掛けた女性だった。それにしんのすけが動き出すと、星はそれに気付いて止めようとするのだが、孫策が逃がさないとばかりに引き止める。

「ちょっと、私の誘いに対する答えは？　あ、もし良ければ私のとこで働かない？」

「いや、お誘いは嬉しいですし、応えたいとも思わないでもないのですが……」

「あら？　何か不満でもある？」

孫策の目がゆっくりと細くなる。それに妙な威圧感を感じ、星はどうしたものかと思案した。下手な答えは要らぬ誤解を生みかねない。なので、丁寧に自分の旅の目的を話して理解してもらうのが一番と判断し、孫策へ語り出した。

一方、黒髪の女性は自分に背を向ける形で星と話す孫策を見た途端、大きくため息を吐いた。そして、冷徹な表情に変わり近寄ろう

としたのだが……

――――ヘイ！　そこの眼鏡のおねいさん。オラと一緒にお茶しな～い？

その足元には、既ににやけ顔のしんのすけがいた。女性は見た事のない子供がいたために停止せざるを得なくなったのだろう。そしてこの城にいる子供という点で、彼女はしんのすけが孫策が連れてきた存在だと気付いた。

「……お前がしんのすけか」

「あれ？　お姉さん、オラの事知ってるの？」

「やはりそうか。雪蓮――――孫策が連れてきたという話は聞いているからな」

その説明にしんのすけは納得したと頷いた。だが、すぐに女性へこう問いかける。名前は何と言うのかと。それに女性が教えようとして、何かを思い出したのか不敵な笑みを浮かべてどうして名乗る必要があるのかと尋ねた。ふと思ったのだ。孫策が変わった子供だと言っていたのを。それがどういう事かを確かめようと考えたのだろう。

「オラはお姉さんのお名前知らないのに、お姉さんだけ知ってるなんてずるいぞ。お名前聞いたら教えるのがれーぎじゃないの。しつれーだぞ」

「ふむ、そうきたか」

意外にしっかりとした反論をすると思い女性は感心した。子供特有の感情混じりの言葉ではあるが、それでも屁理屈ではない。確かに相手の名を聞いて答えないのは礼を失する。さてどうしたものかと女性が考えると、しんのすけはそれに気付かずこう続けた。

「それに、お姉さんが教えてくれないなら、オラが勝手に呼び方考えて呼ぶぞ」

「ほう……どう呼ぶのだ？」

しんのすけの言った言葉に少し興味が湧いた女性は、思考を中断してそう不思議そうに尋ねた。

「えっと……へそ出し眼鏡さん」

「なっ……」

「それか眼鏡のしつれーさん。後は……」

女性の要望に応えるようにしんのすけが告げる呼び名。それはとてもではないが許容出来るものではない。しかも、更にそれがエスカレートしそうだったので、女性がそれに気付いて止めるように言葉を遮った。

これ以上何かを言わせては、色々と厄介な事になりかねないと思ったのだ。何せ、少し先には孫策がいる。今の呼び名を聞いていれば必ず後でからかいで呼び始める事は請け合いだ。もしここでしんのすけの声が大きくなれば、確実に気付く。

「すまん。私が悪かった。名乗るからその呼び名は止めてもらえるか？」

「お？　いいけど、だったら最初から教えて欲しいぞ」

女性が急に素直になったように思い、しんのすけはどこか不思議に感じながらもそう言った。それに女性は小さく苦笑。まさか子供にそんな事を言われるとは思わなかったのだろう。中々良い性格をしている。そんな風に思いながら、女性は自分の名を告げた。

「私は周瑜。字は公瑾だ」

「しょーゆ？　変わったお名前だね。じゃ、どこかにソースさんもいるのかな？」

「そぉす？　何を言っているか分からんが、私の名は周瑜だ」

しんのすけの言ったソースとの単語に周瑜は少し眉を動かすが、それをすぐに消して名前を再度告げた。それにしんのすけが頷いて片手を上げてこう返した。

「ほーほー。じゃ、分かりにくいからしゅーのお姉さんってことで」

しんのすけがそう言うと周瑜は何かを言おうとしたのだが、それよりも早く何かが彼女へ抱きついてそれを阻止する。それは孫策。星は先程と同じ位置で安堵の息を吐いている。今まで孫策の妙な威圧感の中で説明をしていたのだ。それだけではない。説明が終わった後も、ならせめて手合わせだけでもと執拗に迫られていたのだから。

そんな星を横目で見てだが、孫策の表情が楽しそうに笑っている。仕事から逃げていたために周瑜を警戒していたにも関らず、孫策が

笑っていられる訳。それに周瑜は気付いてやや嗜めるような顔をする。

それを見て孫策が不敵な笑みに変わり、こう告げた。子供相手に文句を言わないと。それに、また間違えられるのとどちらがマシと言われてしまえば、周瑜としても強く言い返す事は出来なかった。しかし、すぐに気を取り直して孫策へやや鋭い目を向けるのを忘れない。

「で、雪蓮？　用を足しに行った割には大分遠くまで来ているな」

「あー、ちゃんと戻って続きするわよ。だからお説教は勘弁して」

「まったく……いいだろう。では早速戻るぞ」

「は～い。じゃ、またね。趙雲、しんのすけ」

ため息と共に歩き出す周瑜と苦笑いを浮かべてしんのすけ達へ手を振ってその後に続く孫策。それにしんのすけは手を振り返し、シロも声を掛ける。星はそれを見送り、しんのすけへ自分達も宿に戻るぞと呼びかける。

それに返事をして走り出すしんのすけ。星はそんなしんのすけに笑みを浮かべ歩き出す。星の隣へ並び、しんのすけは速度を落として歩きへ変える。そして、先程の周瑜とのやり取りを星へ教えて笑いを取る。そんないつもの雰囲気のまま、しんのすけ達は宿へと向かうのだった……

「どう？」

「ああ。あれは間違いなくこの大陸の者ではないな」

執務室へ向かう廊下。そこで孫策と周瑜はやや真剣な表情で話し合っていた。孫策の直感が感じたしんのすけへの警戒心。放って置いてはいけないとのそれ。その正体を孫策はあの昼食の際である程度察しをつけたのだ。

異国の言葉を話す事。孫家の者である自分を相手にしても平然とし、礼儀などをあまりにも知らない事。そして、聞いた事のない姓と名。そこから少なくてもこの大陸の者ではないのではないかと。それ故に彼女は自分の予想を周瑜に告げて、ある事を手伝ってもらう事にした。予想を確かめてもらおうと思ったのだ。

そのため、黄蓋から星の伝言を聞いた孫策は如何にも仕事を抜け出してきたように装い、しんのすけ達を呼び止め星を引き付けたのだ。しんのすけの行動をある程度知った彼女は、周瑜が現れればそちらへ意識を向けて動くと踏んで。

自分は星を引き止め、しんのすけの方へ行けないようにした。そう、先程のようにしんのすけの言動を制御する事が出来ないように。そして周瑜は更にこう続けた。大陸の者だとすれば腑に落ちない点が多いと。

「そぉすなどと言う聞いた事のない言葉を話していた。趙雲とやらの話が事実としても、しんのすけの両親が調べていた異国とは五胡ではないな。あまりにも聞き覚えがなさ過ぎる。少なくても西涼よりも西か、もしくは私達が未だ知らない国だろう。現実的にはかなり怪しいがな」

その言葉に孫策がどうしてと言う顔をした。それはローマ辺りな

らば有り得る話ではないかとでも思ったのだろう。そう取った周瑜はそれにこう答えた。

仮にそうだとしても、そこの情報を得る事は難しい上に確かめるにも時間がかかり過ぎる。更には、どれだけの資金がいるかも分からない。そう告げると孫策も納得したかのように頷いた。それを確認し、周瑜は最後とばかりにこう告げた。

「それに、お前が動いた直後に思春からも報告があった。しんのすけは思春の真名を言いかけたらしい」

それを聞いて孫策は成程と言うように頷いた。そして、周瑜はこう締め括った。もし仮に大陸の者だとするのなら一番の問題点がある。それは、真名で呼ばれている星がしんのすけの事を名で呼んでいる事。つまり真名がない事だ。

そこまで聞いて孫策はまさかという顔を見せた。だが、すぐに獲物を捕らえたような表情へ変わる。そのまま、孫策は周瑜へ問いかけた。

「……そっか。じゃ、冥琳、結論を聞かせてもらえる？」

「お前と同じだと思うがな」

孫策の面白そうな声に周瑜も同じ声で返す。そして、二人は視線だけで頷き合うと同時に告げた。

――――しんのすけは天の御遣いだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――

第十話

翌朝、しんのすけと星はシロを連れて街を歩いていた。朝食を食べるためになのだが、宿で聞いた店ではなく市場へと向かっていたのだ。昨夜は宿で聞いた店を利用したので、朝は自分達の勘を頼ってみようかと思ったのだ。

昨日孫策と出会った場所を通り、様々な屋台が並ぶ所に出たしんのすけ達。色々な匂いが漂い、威勢の良い声があちこちから聞こえてくる。どこにしようかと星がしんのすけへ意見を求める。するとしんのすけは足元のシロへ視線を向け、どこがいいと尋ねた。

「キャン」

「あ、あそこだって」

「ふむ、ならシロの選択を信じてみるか」

シロが声と共に動き出した屋台へ歩き出すしんのすけと星。シロは屋台の前で尻尾を振っていた。主人はその姿を見て一瞬野良犬とでも思ったのか怪訝な表情をしたものの、首輪をしている事と後ろから現れた二人に気付き、そうではないと理解したようで一人頷いていた。

そこは魚介類を専門に扱うようで、今は大きめの貝を網に載せ焼いていた。そこへ魚醤らしき物を掛ける。それが貝から零れ独特の焦げる匂いを出す。それにしんのすけが食欲をそそられ、星も期待出来そうだと笑みを見せた。

「主人、まずはその貝を二つもらえないか。後、もしあれば犬用に何かもらえると助かるのだが」

「へい、分かりやした」

星の注文に主人は返事をすると小皿に焼けた貝を載せていき、同時に隣の屋台に声を掛けて豚の骨らしき物をもらってきてくれた。それをシロへ与え、しんのすけは貝の熱さに苦戦しながら息を弾ませている。星はそれを見て笑みを浮かべつつ、貝を口に入れる。

その熱さに彼女もしんのすけ同様息を弾ませるものの、その味に頬が緩んでいた。一度噛むと貝の旨味とたれの旨味が混ざり、口の中にやや癖はあるが美味しいと言えるスープが溢れる。それだけではなく貝の身の甘さも感じるし、噛めば噛むほどにスープが出てくるのだ。それをしっかりと味わいながら、星はしんのすけと同時にそれを飲み下した。

「「……うまいっ！」」

「ありがとうございやす」

二人して笑顔で告げた評価に主人は嬉しそうに笑みを返す。二人は貝殻に残った汁も啜り、頷いた。この屋台は当たりだと言わんばかりの視線を互いに向け合い、足元で骨をかじるシロへ笑顔を向けた。

「やるな、シロ」

「大当たりだぞ」

「キャンキャン」

二人の言葉にシロは嬉しそうな声を返す。星はそれに笑みを返し、

主人へ何かオススメはあるかと尋ねて注文をしていく。しんのすけはその間シロの頭を撫で、この屋台を選んだ功績を褒めるようにしていた。

その後は魚を野菜と共に蒸した物と魚介の出汁で作ったスープのラーメンを食べ、満足したしんのすけと星は上機嫌で屋台を後にした。シロも少しではあるが魚をもらい、しんのすけ達は市場を後にしようとしたのだが……

「あ、あれ、さくのお姉さんだ」

「何？」

しんのすけが指差した方向へ星も視線を動かす。そこには確かに市場の者達と親しげに話す孫策の姿がある。それを見て星は孫策がどれ程街の者達から慕われているのかを知った。

おそらくこのように街を歩く事は珍しい事ではなく、よくある事なのだろう。民の上に立つ者でありながらその暮らしを実際に見て回るだけでなく、その民達と親しくする。

それは確かに君主となるべき者からすれば少し問題なのかもしれない。だが、星は民の暮らしを知らずに政治をする者達よりも上に立つ者らしいと感じた。

（桃香殿と近いものがあるかもしれんな、孫策殿は。まぁ、孫策殿の方は好戦的でもあるから似てない部分もあるが）

きっと桃香も同じような事をしているだろうと考え、星は一人笑みを浮かべる。しんのすけはそれに気付かず孫策へ向かって手を振りながら呼びかけていた。するとその声に気付いた孫策が視線をしんのすけ達へ向けた。

その視線が一瞬だけ鋭くなった気がして、星は違和感を感じた。だが次の瞬間には笑みを浮かべて近付いてきていたので、自分の気のせいかと思う事にした。

「おはよう、しんのすけ、趙雲」

「キャン」

「ごめん、シロもね。忘れてた訳じゃないのよ?」

孫策が挨拶をしてくれなかったと思ったのか、シロが声を出す。それに孫策は苦笑して、しゃがんでシロの頭を撫でながらそう返した。それにシロが嬉しそうに声を返したので、孫策も頷き賢い犬だと改めて思い笑みを浮かべた。

「それで孫策殿は何を?」

「ああ、散歩みたいなものよ。それとこうして街のみんなから話を聞いてるってとこ」

星の質問に孫策は楽しげに言葉を返す。聞かれると思っていたのだろう。その理由も簡単に説明した。暮らしている者達が何を思い、何を望んでいるのかを知らないと、とてもではないが政など出来ない。故にこうして直接聞いているのだ。

自分で聞くのは途中で意見が歪んでしまったり、取り違えてしまわぬように。人を介するとその可能性が上がってしまうから。それにこうして自分が話を聞く事で、街の者達に孫家の者は自分達の意見に耳を傾けてくれると思わせる事が出来ると。

それを聞き、星は成程と頷いた。孫策が何も善意だけではなく、

自身の行動を政治に利用するためにしている事に感心した。これが桃香であればそういう打算無くするだろう。それはそれで素晴らしいが、やはり孫策の方が治める者としては上のように星は感じた。

「さすがは孫家の長と言ったところですな。民草の事を良く考えておられる。執務から逃げた方とは思えない」

「あはは、それは言わないでよ」

星の言葉に笑顔で応じる孫策。そんな彼女へ星は不敵な笑みを返し、こう告げた。

「ですが、いいのですか？　そんな風に自分の行動理由を話して」

「いいわよ。聞かれて困る事じゃないわ。みんな、そんな事どこかで気付いてるだろうしね」

星の言葉に孫策は苦笑して答えた。それに星も頷き返すが、孫策へ静かに近寄りこう呟いた。

――――袁術の下にいるのが信じられないですな。貴方の方が政を上手く出来るだろうに。

それに込められたのは、紛れも無い本心。孫策はそんな星の言葉に内心でやはりと思った。自分達の中にある気持ち。それを星は感じ取っていると。何故なら、その星の声にはどこか期待するような響きがあったからだ。

星の性格を何となく理解している孫策だったが、それでも念には念を入れるべきかと思い、昨夜抱いたある気持ちもそれを後押しする。少ししんのすけと星には悪いがそうさせてもらおうと決意して、

孫策は密かにある事を周瑜に相談しなければと思う。だがそれを表情には出さず、こう笑顔で問いかけた。

「ね、趙雲。この後はどうするつもり？」

「そうですな。少し探している物があるので、それを調べようかと思っています」

「調べ物？　なら城に来なさいよ。書庫を使わせてあげる。それとうちの知恵者を一人紹介するわ。冥琳は仕事だから無理だけど穏なら……あ、陸遜って言うんだけど、今日非番でかなり物知りな子がいるのよ」

孫策の申し出に星はどこか意外に思いながら感謝を述べた。孫策が自分としんのすけを気に入ったのは感じている。それでも、何か妙な感じがしたのだ。まるで、曹操の時と同じで嫌な意味で興味を引いてしまったような。

だがそんな要素は無かったはずと、そう星は思ってまだそこまで警戒する事はないかと考える。しかし、最低限の警戒はするべきかとも思い、孫策へしんのすけ達と共に後で城を訪れると告げ、その場を後にした。

その後姿を眺め、孫策は小さく呟いた。気付いたのだ。星が自分の申し出に裏があるのではと感じた事を。

「やっぱり趙雲も只者じゃない、か。出来る事なら穏便に進むといいんだけど……」

孫策が手を回しておいてくれたのか、それとも門番が覚えていたのか。しんのすけ達はあっさり城の中へ入れてもらえ、廊下を歩いていた。すると周泰が突然現れ、星を書庫へ案内するようにと孫策に頼まれたと告げた。

それに星が感謝を述べると周泰は笑顔で気にしないでいいと返す。そして視線を動かし、周泰は案内が終わった後シロと遊んでもいいかとしんのすけに尋ねた。今日は休みらしく、シロを一日中もふもふしていたいとの事。

「駄目でしょうか？」

「いいよ。シロ、しゅーちゃんに遊んでもらえるって」

「キャンキャン」

「ふむ、シロも異論はないようだ。では周泰殿、案内とシロの事を頼みます」

「はいっ！」

星の言葉に心から笑顔を返す周泰。こうして周泰の案内でしんのすけ達は書庫へと向かう。星は中へと入り、しんのすけはシロを周泰へ預けた。周泰はしんのすけもと誘ったのだが、それを彼は断った。少し考えたい事があるとらしからぬ理由で。

それを聞いて周泰も違和感を感じたが、それならとシロを抱えて素早くどこかへと消えた。それを見送り、しんのすけは自分はどうするかと考え始めた。星は調べ物をするだろうから邪魔は出来ないし、周泰とシロの邪魔もしたくなかったのだ。

自分達がここに滞在するのはおそらく数日。であれば、周泰がシロと過ごす事が出来るのは限られた時間しかない。それを考え、しんのすけは今日は遠慮する事にした。周泰と友達になったからこそ、彼女の望む事を出来る限りしてあげたいと考えたのだろう。

しかし、する事がないのも事実。なので、尚香に会いに行こうと動き出そうとしてその視線が廊下へ動いた。すると……

「お？」

そこには一人の女性がいた。小さめの眼鏡を掛け、大きな胸を揺らしている白い肌の女性だ。女性はどうも書庫へ行こうとしているのだが、何かを抑えるように悶えていた。実は彼女はかなり知識欲が旺盛で、知る事に異常な興奮を覚えてしまうという変わった人物だったのだ。

そんな彼女にとって書庫は魅惑の場所。今日、彼女は孫策に星の調べ物について協力するよう言われた。非番だったため出来れば遠慮したいと考えた彼女だったが、孫策が書庫に行ってもいいと言うと即座に了承した経緯がある。

「どうしましょ～。書庫に行くだけでも興奮するのに、雪蓮様の話だと趙雲さんって旅をしている方ですしぃ……私の知らない事を沢山教えてくれるかも……」

そこまで考え、女性は大きく身震いをして体を左右に動かす。

「ああん！　困っちゃいます～！」

その声の艶っぽい事と言ったら無い。それに声を掛けようとしていたしんのすけが立ち止まり、同じように体を左右に動かして叫ん

だ。

――――ああん！　オラも目のやり場に困っちゃ～う！

それに女性が気付き、視線を動かした。そこには彼女の揺れる胸を見てニヤニヤしているしんのすけがいた。

「あら？　もしかして貴方がて……オホン。しんのすけさんですかぁ？」

「？　そーだよ。オラが野原しんのすけ。お姉さんは？」

思わず天の御遣いと言いそうになり、軽く咳払いをする女性。それにしんのすけは不思議そうな表情をするものの、名前を聞かれたので肯定するように名乗る。

そして女性へ問い返すのも忘れない。もう手馴れた感さえあるやり取りだが、しんのすけにとっては綺麗なお姉さんの名前を知る事は大切なので、声は普通でも意味合い的には重要だ。

女性はそんなしんのすけへ笑みを返し、明るい声で名乗り返す。

「私は陸遜。字は伯言ですよ。よろしく～」

「ローソン？　お～、それはそれは……カラアゲ君一つお願いします」

「からあげ君？　どなたの事ですかね？　それとぉ、私の名前はろぉそんではなく陸遜ですよ～」

「りくそん？　また間違えたや。ごめんくさい」

毎度のように頭を下げるしんのすけ。それに陸遜はまだどこか不思議そうにしていたが、もう気にしてないからと返して頭を上げさせた。その間延びする特徴に気付き、しんのすけは小さく頷くと……

――じゃ、オラ気にしないぞ～。

と、同じように間延びしたような声で返すしんのすけ。陸遜はそれに苦笑して、しんのすけへある事を尋ねた。それは呼び方に関する事。既に尚香からしんちゃんと呼ばれている事を聞いた陸遜としては、自分もそう呼んでいいかと尋ねたのだ。

それにしんのすけは即応。彼にとっては呼び方よりも、その相手と仲良くなれる方が大事。なので、そこまでこだわりはない。陸遜はしんのすけがすぐに許可を出したので、その名に対する考え方の片鱗を感じ取ったのか意外そうにした。

「ね、ならオラはりくちゃんって呼んでもいーい？」

「陸ちゃん、ですか？　う～ん……せめて陸お姉さんにして欲しいですね～」

「りくお姉さんか。それでもいいぞ。呼び易いし」

「では、それでお願いしますねぇ」

子供であるしんのすけにちゃん付けは抵抗があったのか、陸遜は別の呼び方を提案。それをしんのすけはそういう呼び方もあったかと納得し頷いた。陸遜もその反応に頷いて笑顔で返す。

そして、しんのすけを連れ立って書庫へと向かう。だが、書庫に入った陸遜は、懸念していた症状に陥る暇もなく星から鏡の話を聞

いて考え込んだ。不思議な伝承の残る鏡。そんな物に心当たりがなかったのもある。しかし、一番はその星の雰囲気にあった。

（不思議な鏡。一体何の目的で探しているのでしょう……？　もしかして、それは趙雲さんの探し物ではなくしんちゃんの探し物なのでは～）

天の御遣いと聞いているからこそ、陸遜は星の探し物がしんのすけに関係するのではないかと思った。星の話す袁紹が探している物との理由は、もう一つの袁家の事を知る彼女としても納得出来るものだった。それを星が探す訳は世話になったための礼みたいなものとの話も。だが、星の雰囲気からそう察した。

星が袁家のために探すような相手に見えなかったのもあるし、もし仮にそうなら袁紹を通じて袁術へ働きかけているはずなのだから。だが、陸遜はそれを口にする事は無かった。下手な警戒心を与える訳にはいかないからだ。そう、今孫策達は何とかしんのすけを仲間にする事が出来ないかと考えているのだから。

天の御遣い。それを手元に置く事がどれ程の力になるかを知らない周瑜や陸遜ではない。今は袁術の客将となっているために大っぴらには出来ないが、時が来ればそれを有効に活用し乱世に名乗り出る事が出来る。

孫呉復興。そのために孫策を始めとする一部の者は、しんのすけと趙雲をどうするかを考えていた。出来る限り穏便に事を運びたい。袁術に悟られる事無く、自分達の下に置くために。孫策と周瑜、それに陸遜しかこの事は知らない。他の者達に教えると気付かれる可能性があるとばかりに伏せられている。

陸遜はそんな事を思い出しながら、平然と星の問いかけに答えた。

「そうですねぇ……大陸に残る伝承の類にはそういう物もありますが、もしかすると趙雲さんの探す鏡はそういう物ではないかもしれません」

「と言うと？」

「例えばぁ、まだ見つかっていない物という事も考えられます。それに、袁紹さんはお告げで聞いたのですよね？　なら、もしくは……」

陸遜は少しだけ探りを入れる事にした。これで何か反応を見せれば、自分の感じた事が正しいと自信を持つ事が出来ると。そんな事も知らず、星は陸遜の言葉を待った。袁紹の夢話にしたのを少しだけ悔やみながら。

――――天界に関連している物だと考える事も出来ますし～。

その言葉に星は一瞬息を呑んだ。だが、それを下手に誤魔化すのではなく、自分が恐れ多い物に手を出そうとしている事に気付いた風に装った。それは陸遜がある種の予想を抱いていなければ通用したかもしれない。もしくは、彼女が平凡な者ならばそのまま信じただろう。

しかし、それを陸遜は見て確信した。星の探す鏡。それが天の御遣いであるしんのすけに大きく関る物だろうと。故に、そこからは鏡の話を天界から少し遠ざける。夢のお告げ自体があやふやな事もあるし、それだけで天界と結びつけるのも早計かもしれないと笑いながら言って。

「それにこの話。私もですけど趙雲さんも疑ってますよね？」

「まぁ、袁紹殿の夢ですからな」

「なら、有りもしない可能性もありますから。とにかく、私や冥琳様ではお役に立てそうにありませんね～」

少し申し訳なさそうに陸遜は締め括り、星へ視線を向けて軽く頭を下げた。星はそんな陸遜に感謝で返し、資料に使った書庫の本を戻すべく動き出す。しんのすけは二人の話を聞いていたのだが、段々退屈して今は机に突っ伏して眠っていた。

それを見て陸遜が小さく笑みを浮かべた。天の御遣いといってもそこらの子供と変わらない気がしたからだ。そして少しだけその頬を突いた。その柔らかい感触に陸遜は笑みを深めた。

「しんちゃん、起きてくださーい。趙雲さんが本を片付け終わったら、私達いなくなっちゃいますよ～」

「う～ん……一人は嫌だぞ……」

陸遜の言葉にしんのすけは寝ぼけながらもその手を掴んだ。その意外な程強い力に陸遜は驚いた。まるでその手を決して離すまいとしているようだったのだ。陸遜は知らない。しんのすけがどれだけ孤独を恐れているかを。

今の彼を支えているのは星とシロだ。しかし、厳密にはそれだけではない。今までの出会いと思い出もその力にしている。だがそれでも、それでも奥底にある寂しさはなくならない。

両親と妹から離され、親しい友人達さえいない状況。それは初めてではない。だが今までの冒険では、必ずどこかで助けに来てくれた存在。その存在との長期の別れがしんのすけの心にどれだけの影

を与えているのか。それを知る者はいない。そう、彼自身さえもそれを完全に理解してはいないのだから。

「片付け終わりましたぞ、陸遜……おや？」

「あ、趙雲さん。これ……」

片付けを終えたと報告しようとした星だったが、陸遜へ向けた視線が捉えた光景に不思議そうな表情を見せる。それに陸遜がやや困ったような表情を返す。しんのすけの手がしっかりと陸遜の手を掴んでいる。

それを見て星は小さく苦笑し、しんのすけを揺さぶって声を掛ける。起きないと置いていくぞ。そんな風に優しく声を掛ける星。それが姉のようにも母のようにも聞こえ、陸遜はどれだけ星がしんのすけを大事に思っているかを理解した。

やがてしんのすけも目を覚まし、星はすぐに陸遜の手を離すように告げた。しんのすけはその言葉に視線を動かし、自分の手が陸遜の手をしっかり掴んでいる事を把握すると、嬉しそうに顔をにやけさせて二人を苦笑させた。

「りくおねいさん、このままでもいーい？」

「うーん、それはちょっと困りますね～」

「しんのすけ、陸遜殿は休みを使って話を聞いてくれたのだ。早く自由にせねば申し訳ないぞ」

その星の言葉にしんのすけは本当かと視線を陸遜へ向けた。それに陸遜が頷き、すまないがそうして欲しいと告げるとしんのすけは

分かったとばかりに手を離した。そうして三人は揃って書庫を出た。陸遜はどこか後ろ髪を引かれる思いだったが、客人であるしんのすけと星に痴態を見せる訳にもいかないと強く言い聞かせる事で我慢した。

そのまま陸遜は二人と別れ去って行った。星は陸遜が言った言葉を思い出し、前提が間違っているのかもしれないと思っていた。鏡はこの大陸のどこかにあるのではなく、しんのすけが帰るべき時にならないと現れないのではないかと。

もしそうだとすれば自分達がしなければならない事は鏡を見つける事ではなく、しんのすけが役目を終えたと天に判断されるようにする事。つまり、乱世を止める事ではないのか。そう考え、星は小さく息を吐いた。それはため息ではない。自分の役目が分かったと思ったのだ。

（私はしんのすけと出会い、この大陸を救うために戦う事を宿命として生まれてきたのだな。この槍の才は、そのための天からの授かり物だったか）

星は視線をしんのすけへ向ける。初めて出会った時はただの子供としか思わなかった。だが、話をする内にその異常さに気付き気にかけるようになった。他人でしかなかった自分と凛や風を強く結びつけ、正義の意味をもう一度見つめさせてくれた。

それだけではない。自分だけでは出会えなかっただろう多くの縁。それを導き、繋いでくれたのだ。星はそう思い、しんのすけの頭へ軽く手を置いた。それにしんのすけが不思議そうに視線を向けた。

「どーしたの？」

「何、私はお前と出会った時に天命を授かっていたのだと気付いた

のだ」

「てんめー？　お店の名前なんてもらったの？　オラの名前使うつもりなら、しよーりょーいちおくまんえんいただきます」

しんのすけの言った内容に星は心から楽しそうに笑う。金額が分からんと言いながら星は歩き出す。しんのすけがそれもそうかと頷き、こっちではどう言えばいいのかと考え始める。その様子を眺め、星は柔らかい笑みを浮かべて空を見上げる。

広がる青空。それをどこかで見ているだろうたいりく防衛隊の仲間達を思い出し、いつかその輪が繋がる事を想像して星は苦笑する。愛紗と稟が口煩くしんのすけを注意し、それを桃香と風が眺めて笑い、白蓮がしんのすけを嗜める。鈴々はシロと一緒になって遊び、自分はそんな周囲を見て酒を飲む。そんな平和な光景を。

――――……稟、風、お前達は今どこにいる？

その何気ない呟きは、江東の風に乗って空へと消えた……

書庫を貸してもらった事と陸遜を動かしてくれた事に感謝するべく、星はしんのすけと共に孫策の執務室を訪れていた。そこでは、孫策が周瑜に睨みを利かされながら結構な量の竹簡と戦っていた。それに桃香の姿を思い出して星は小さく笑った。ここまで似ている部分があるとは。そんな風に思ったのだ。

「少しよろしいですかな？」

「ん？」

「あ、趙雲じゃない！　しんのすけも。いいところに来たわ」

星の声に周瑜が視線を動かし、孫策が助かったと言わんばかりの声を出す。

「何か用か？」

「いえ、書庫や陸遜殿の事で礼をと思いまして」

「あは、律儀ね。ま、貴方らしいかも」

星の告げた内容に嬉しそうに笑う孫策。周瑜も同意するように笑みを見せた。だが、すぐに二人はそれを消すと星へ視線を向けたまま、こう切り出した。大事な話があると。それに星は何事だろうと思い、しんのすけを自分の手元に引き寄せて聞く姿勢を取った。

それに孫策が苦笑しつつ、しんのすけの事を考えたその対応は正しいと告げる。すると周瑜もそれに続くように苦笑した。そしてまずは孫策が口火を切った。その言葉に星は絶句する事となる。

――――しんのすけは天の御遣い。それに間違いないわね？

一瞬何を言われたのか星は理解出来なかった。それだけ孫策の告げた一言は強烈だったのだから。そんな驚愕の表情を浮かべる星を見て、孫策がやや落ち着かせるような声で続ける。

「あ、私達に事を荒立てるつもりはないわ。まず、話を聞いてくれ

ない？」

「信じましょう」

「そう言ってくれて助かる。最初に言っておくが、我々としてはしんのすけを利用しようとは思っていない」

星の言葉に周瑜がそう返すと、孫策も同意するように頷いた。星はそれに安堵した。二人の目は真剣だった。嘘を言っていない。そう星へ誓うような眼差しだったのだから。

そこから始まる話は至って単純だった。しんのすけ共々自分達の仲間になって欲しい。それだけだ。星はその直球の申し出にやや拍子抜けしたものの、表情を崩す事無く問い掛ける。

「申し出は分かりました。ですが、何故私だけではなく利用するつもりがないしんのすけも仲間にしようと？」

「シャオの事を考えてね。あの子、しんのすけを気に入ったみたいなのよ」

「そういう事ですか。しんのすけ、良かったな。尚香殿に気に入られたそうだぞ」

孫策の微笑みに星は納得しながら視線をしんのすけへ向けた。彼は話が長くなりそうなのを感じ取り、やや退屈そうにしていた。それを見ていた星達が揃って苦笑する。

カバのような大口を開けて欠伸をしたのだ。それはもう見事な程の大欠伸を。その光景が実に子供らしく思え、三人は笑ったのだ。そんな三人に気付いたしんのすけは、口を閉じると視線を彼女達へ動かした。

「何？　三人してオラに何かご用？」

「聞いていなかったのか。まったく、お前は」

「本当に自由気ままね、しんのすけは」

「お前と似ているな、雪蓮」

周瑜が笑いながらそう言うと孫策が小さく呻き、星が笑った。しんのすけはそんな孫策を見て小首を傾げる。何故呻いたのかが分からないのだ。そんな和やかな雰囲気のまま、話は進む。

もし仲間になれないのなら、せめてここで見聞きした事を袁術へ知られないようにして欲しい。こちらもしんのすけの正体については他言無用とするから。そう周瑜が締め括ると、星はふむと顎に手を当て少し考える振りをする。

答えは決まっているのだ。今は仕官出来ない。それにしんのすけが出す答えを待っている星としては、ここで自分の意見を告げるつもりはなかった。

（孫策殿達はいつか袁術から独立するはずだ。それを待ってからでも遅くはないだろう。しかし、袁家に気取られないようにしているのは分かるが……ここまでとはな。つまり、あの袁家相手にそれだけ慎重になっているという事か……）

念には念をとの事なのだろうと結論付け、星は息を吐いて頷いた。そして告げる。仲間になる事は出来ないが、孫策達の事で気付いた事などは決してどこかで話したりしないと誓うと、そう星は言い切ったのだ。

更にそれだけでは信頼度に欠けると思ったのか、自分の槍としんのすけに誓うとまで言った。それに孫策と周瑜は呆気に取られたが、やがて小さく笑みを浮かべた。その様子を見て、それまで退屈そうにしていたしんのすけが口を開いた。

――ね、もう終わった？

その言葉に三人が揃って顔を見合わせ、すぐに笑い出した。ぶれないなと星が言えば、どこもぶれてなどいないとしんのすけが自分の体を見てから返した。それに周瑜がそういう事ではないと言えば、孫策がある意味でそういう所だと言ってカラカラと笑う。

そんな風に場の空気が一層和んだところで、しんのすけが三人へこう言った。喉が渇いたと。それはお茶が欲しいとの言外の要求。その言葉に孫策が笑い、周瑜が苦笑しながら用意させようと告げて動き出す。

星は小覇王と美周朗相手に普段通りの態度を取るしんのすけを見て小さくため息。しかし、しんのすけは子供。故に二人も許してくれているのだろうと思い、その寛大さに感謝した。

「申し訳ありませんな。中々礼儀を覚えてくれないもので」

「えっへんっ！」

「あはは！　威張る事じゃないわよ。ま、礼儀正しいしんのすけって何か違和感がある気がするからいいけどね」

「だが、少しぐらいは覚える努力をしろ。礼儀を覚えて損な事はないぞ」

星の言葉に対するしんのすけの反応。それにそれぞれの意見を告げる二人。そんな中、孫策は思い出す事があった。それは昨夜の事。夕食時に尚香とした会話だ。

そこで妹である尚香から聞いたしんのすけと過ごした話があまりにも微笑ましかった。それに、尚香が親しげにしんちゃんと言っていたのもそれに拍車をかけた。自分の初めての友人だと嬉しそうに語る妹の笑顔。それを見て孫策は思ったのだ。

実は孫策も最初こそ天の御遣いであるしんのすけを利用しようと考えた。だが気付いたのだ。自分は幼い子供を利用しなければ独立出来ない訳ではないと。

妹の友人を道具にする程、自分達は落ちぶれてはいない。そう考えたからこそ、孫策は周瑜へ告げた。鋭い星が自分達から気付いた事に対する口止めにしんのすけの事を持ち出そうと。

その裏にあるものをどこかで察したのか、周瑜は大きくため息を吐くと分かったと返した。彼女としても、しんのすけの利用価値の低さを理解していたのだ。そのため、一番いい利用法はそれしかないと判断したので、今の現状に至るのだ。

「しんのすけ、ちょっといいかしら？」

「なーに？」

「またいつかシャオに会いに来てくれる？　あの子、友達がいないから」

「ほい！」

孫策は一人の姉としてそう告げた。孫家の長ではなく、妹を思う

姉の顔で。それにしんのすけは力強く返事を返す。それが安心させるように聞こえ、孫策は笑みを返す。星は孫策の天の御遣いに対する考えをどことなく察して、小さく息を吐いた。

利用しようと思ったが、それが難しいと判断したと。星達でもヘルメットやフィギュアが無ければ同じ事を思ったのだから、そうなのだろうと結論付ける事が出来たのだ。

「そういえば趙雲、次はどこへ行くつもりだ？」

「そうですな。一度平原に行こうかと思っています」

「平原？　劉備が治めている所よね？」

「ええ。実は……」

孫策の問いかけに星が答えようとしたのだが、それを遮るようにしんのすけが勢い良く割り込んだ。

――桃香ちゃん達に会いに行くの！？

それが劉備の真名だと気付いて、孫策達はしんのすけと星が彼女と深い仲だと察した。星はそれに苦笑しながら、お聞きの通り知り合いなのでと締め括った。その間もしんのすけは桃香達と再会出来るのかと嬉しそうにしていた。

孫策と周瑜はそんなしんのすけに笑みを浮かべるも、星へ桃香の事を尋ねた。どういう人物なのかと。それに星は少し考え、不敵に笑ってこう言った。

――孫策殿と気の合いそうな方ですな。一度会ってみる事をオススメしますぞ。

それに孫策が楽しそうに頷き、周瑜が気の合いそうという部分でやや嫌そうな表情を見せた。その対照的な二人に星は浮かべた笑みを深める。しんのすけは話も終わったと見て尚香の部屋へ行ってもいいかと孫策達へ尋ねた。

それには周瑜が勉強をしていたら邪魔をしないように戻ってこいと告げた。それに元気良く返事をし、しんのすけは執務室を出て行く。それを見送り、星は孫策へこう言った。

――仲間になって欲しいと言われた事は忘れません。もし縁があれば、その時に……

それに孫策は嬉しそうに笑みを見せて待っていると返すのだった

……

翌日、街を出るために歩くしんのすけ達の姿があった。次の目的地を桃香達の元に設定し動き出したのだ。これには、鏡に対する星の仮説が関係していた。今はない可能性がある物を探し続けるより、乱世を止めるための力を――絆を手に入れるべきではないかと。

曹操達の話で桃香達の下には新しい者達がいると分かった。その者達は軍師をしているので、そこからも情報を得る事が出来るかもしれないと考えたのもある。

孫策達への別れは昨日の内に済ませた。尚香と周泰は寂しそうにしていたので、しんのすけがまた必ず来ると言うとシロがそれに同調するように声を出した。すると、周泰がシロを抱きしめその感触

を忘れないようにさせて欲しいと告げた。
　一方、尚香は姉達と共に暮らす事になった際は一緒に遊べると思っていた分、余計にしんのすけとの別れが残念だった。それを雰囲気から察したしんのすけから、今度は色々な遊びを教えると約束されると、それに尚香は嬉しそうに笑顔を返す事が出来た。

　孫権はたった二日しか滞在しなかったにも関らず、尚香達と仲を深めていたしんのすけとシロに驚きを見せるも、次に来る時があればもう少しゆっくりしていってくれと告げた。それが妹に出来た友人への姉としての言葉だったのだろう。しんのすけはそれに嬉しく思い、力強く頷いた。
　甘寧は、孫権の言葉に素直な反応を見せるしんのすけに頷き、今後もそういう対応を心掛けろと告げた。それにもしんのすけが素直に返事を返すと、少しだけだが甘寧も視線を和らげて頷くのだった。

　一方星は、黄蓋から飲み仲間が出来たと思いもう少し楽しめると考えていた事を告げられた。それ故に早すぎると文句を言われ、苦笑。なのでいつか必ず共に飲もうと約束を交わし、笑みを見せ合った。
　周瑜と陸遜からは、今度はしんのすけから聞いた天の話を聞かせてくれと頼まれ、機会があればとだけ返した。それに二人は待っていると楽しみにするような声を返して笑った。

――では、孫策殿。色々とありましたが、明日にはこの街を去りますので。

――でも、きっとまた来るぞ。

――キャン。

――ええ、待ってるわ。その時はお互いに忘れられない日になる事を願ってる。

孫策はそう締め括り、最後までしんのすけ達を見送った。もっとも、その後すぐに周瑜によって執務室へと連れて行かれたが。

そんな事を思い出して星が苦笑すると、しんのすけがそれに気付いてどうかしたのかと問いかけた。それに星が昨日の孫策の様子を思い出したと言うと、しんのすけもそれを思い出して頷いた。愛紗に連れて行かれる桃香みたいだったと表現するしんのすけ。それに星が同じような事を考えるものだと思い、嬉しそうにそうだなと声を返す。

晴れ渡る空の下、彼らは歩く。次はあの三人と再会を果たすためにと思いながら。だが、その再会は望む形で果たされる事はない。次に訪れる街。そこで出会う者が彼らの余裕を無くす事をするからだ。

その名は袁術。そして、次なる戦乱を起こすキッカケとなる存在。彼女との出会いこそが、しんのすけに決断を迫る事となる……

――――――

第十一話

孫策達の治める街からそう離れていない場所。そこを星は一応訪れる事にした。そこは袁術が治める街。平原へ向かう通り道に近い事もあり、一日だけの滞在も決めていた。

その理由は、そこを見る事で袁術と孫策の違いをはっきりさせておこうと思ったのだ。しんのすけはそんな事は知らず、シロと共にそこの様子を見てある事を思い出していた。

「……あの街とどこか似てるぞ」

「クゥ～ン……」

しんのすけの呟きに同意するようにシロも声を出す。眼前に広がる光景。通りを歩く者達はどこか元気がなく、表情は明るいとは言い切れない。道行く兵士達はやや威張っているように見え、街全体の活気がそこまでない。

それは、あの洛陽をどこか彷彿とさせるものがある。だが、あれ程荒れてはいない。何故なら人々は怯えてはいないからだ。ただ、疲れているようには見える。しんのすけがそんな風に思っていると、星が先導するように歩き出す。

「しんのすけ、シロ、今は宿を探すぞ」

話はそれからだと言外に星が告げる。それをどこかで感じ取っているのだろう。しんのすけとシロはそれに続くように歩き出した。

ここでもあの洛陽と同じ事が起きているのだろうかと、そんな不安を抱きながら……

「ここを治めているのは、孫策殿達の主人に当たる袁術だ」

「主人？　どーゆー事？」

宿の部屋に入り、寝台に腰掛けて話すしんのすけと星。シロは床に大人しく座っている。星が告げた内容が理解出来ず、首を傾げるしんのすけ。星は無理もないかと思い、簡単に説明するべくこう言った。

孫策達は訳あって袁術の下で働いている存在。かつての白蓮と自分の関係と同じ扱いなのだと。その説明にしんのすけは納得したと頷いたのだが、ふとある事に気付いた。

「ね、よーじゅつさんはよいしょーさんのお知り合い？　何かお名前の感じが似てるぞ」

「確か親戚だったはずだ。ふむ……そういう事か」

しんのすけの言い間違いを訂正するのも面倒だと思い、星はそう答えた。しんのすけがどうしてそんな事を聞いてきたのかを予想したのだ。袁紹と同じ系統とすればしんのすけにとってはお得意様だ。もし会えるのなら何か言いたい事でもあるのだろうと。

しんのすけは星がそう尋ねると、即座に頷いた。このままではこの街が洛陽のようになってしまう。それを出来る事なら阻止したいと考えているのだ。そうしんのすけが告げると、星は頼もしそうに笑みを返した。

「そうだな。確かに会えるのなら、それについて注意を喚起するぐらいはしたいものだ」

「お城へは行けないの？」

「無理だな。袁紹殿に頼む事が出来れば分からんが、今は何も伝手が無いに等しいから門前払いが妥当だろう」

星がそう平然と告げる。しんのすけはそれにやや残念そうに肩を落とすも、何かに気付いたのかすぐに顔を上げた。それに星がどうしたのだろうかと視線を向けると、しんのすけは少し外を見てきていいかと尋ねた。

星はその理由を聞こうとして、それを理解した。外から子供達の楽しそうな声が聞こえるのだ。そのため、星は苦笑して周囲に気をつけて遊べと言って送り出した。シロはどうしようか迷ったものの、きっと弄ばれると判断して床に伏せて目を閉じる。

「お？　シロは来ないの？」

「どうやら早めの昼寝のようだ。では私もここに残って槍の手入れでもするか」

シロの行動理由をどこか察して星は笑って、槍を手に取りそう告げた。しんのすけはならばと部屋を出ようとする。その背中を見て、星が待ったをかけた。そして、壁に立てかけてあった護身用の木刀を手に取り、しんのすけへ投げ渡す。

「しんのすけ、これを忘れるな」

「あ、そうだった」

「まぁ必要ないと思うが一応な。それと、いざとなったら逃げてくるんだぞ？」

「ブッ、ラジャー」

星の言葉にそう返してしんのすけは急ぎ目に部屋を出て行く。その離れ行く足音を聞きながら、星はふと思う。しんのすけの場合、いざとなった時こそ逃げないような気がすると。そう考え、星は小さく笑う。

そんなしんのすけだからこそ、自分は支えたいと思ったのかもしれない。危ないとしても、そこに助けを求める者がいるのなら最後まで手を伸ばそうとするだろう彼を。

――さて、しんのすけの答えはいつ出してもらえるのだろうか……？

それが今は心から楽しみだとばかりに、星は嬉しそうに笑みを浮かべるのだった……

宿の外に出たしんのすけは、聞こえていた声が遠ざかっている事に気付いて急いでそちらへと向かって走り出す。だが、その途中で裏路地を歩く変わった格好の少女を見つけ、急停止。

「今の子……よいしょーさんみたいな髪の色してた……」

あまり見ない髪の色。それに格好も珍しかった事もあり、しんのすけはこのまま声を追い駆けるか裏路地へ行くかを迷った。しかし、ある事を思い出して裏路地を選んだ。声は少なくても三人以上はいる。だが、少女は一人だった。ならばそちらに行こうと思ったのだ。

一人は寂しい事を今のしんのすけは誰よりも知っている。自分しかいない状態では笑っている事さえ難しいと。なので、しんのすけが孤独な少女を選ぶのは至極当然と言えた。

裏路地へ入り、しんのすけは視線を動かす。そこには煌びやかな服を着た金髪の少女がいた。その後ろへ静かに近付いていくしんのすけ。少女はそんな事も知らず、トボトボと歩いていた。その足取りは重い。

「ここは薄暗いの。う～……やはり退屈じゃからと城を抜け出すのではなかったか」

少女はそんな事を呟きながら肩を落としながら歩いている。しんのすけはその後ろへ近付き、そっと手を伸ばした。

「ねぇ」

「ん？　なん……」

肩に手を置かれ、少女は振り返ろうとした。だが、その頬が軽く凹む。しんのすけの指が突き出されていて、それが頬の一部を押したからだ。微かに流れる沈黙。何が起きたのか理解出来ない少女と相手の反応待ちのしんのすけ。

そんなお見合いがしばしあって、やっと少女が自分の状況を把握して我に返った。見も知らぬ子供が自分の頬を突いていると。故に少女はしんのすけの指をどけようと手を伸ばした。だが……

「ほい」

「なっ……」

その手はむなしく空を切る。しんのすけが指を引っ込めたのだ。それが馬鹿にされたように感じられ、少女は悔しくなってまた手を伸ばす。それをしんのすけは手を上に上げて避ける。また悔しくなって少女が手を動かす。それをしんのすけがかわす。

そんなやり取りを延々繰り返す二人。最初こそ悔しさから動いていた少女も次第にそんな事も忘れてしまったのか、途中からは楽しそうにしんのすけの手を捕まえようとしていた。その原因の一つはしんのすけが楽しそうに笑っていたからだ。その笑みに少女もつられるように笑顔になっていき、気持ちがそれに追随していったのだ。

「む～……中々掴めんのじゃ～」

「はっはっは……そんな事じゃ、オラの動きにはついてこれないぞ」

「そんな事ないわ。妾の本気を見てみよ！」

少女はそう言ってもう一度とばかりにしんのすけの手を掴もうとする。それをしんのすけはさせじとかわす。それをまた数回繰り返し、少女が何かを思いついたのか動きを止め、視線と共に指を空へ向けて叫んだ。

「なんじゃ、あれは！？」

「え？」

「今なのじゃっ！」

子供騙しの手だったが、しんのすけには効果てき面。遂に少女はその指を掴む事に成功した。すると、しんのすけが少し頬を赤めてしなを作る。その意味が分からず、不思議そうに小首を傾げる少女。しんのすけはそんな彼女へこう告げた。

――――もぅ、だいたんなんだから……

その言い方に一瞬言葉を失う少女だったが、すぐにその奇妙さがおかしくなったのか笑い出した。

「はっはっは……お主は中々愉快な奴じゃな」

「はっはっは……それほどでもあるぞ」

「自分で言うとはの。うむ、気に入ったぞ。お主、名を何と言うのじゃ？」

しんのすけの笑い声を聞いて、袁術は楽しそうに笑みを見せるも名前を聞いていない事に気付いて興味津々で問いかけた。それにしんのすけは、忘れていたとばかりに手を打ち名乗りを始めた。

「おおっ！　オラ、野原しんのすけ。名前がしんのすけで、あざなはないぞ」

「しんのすけと言うのか。変わった名じゃな……？　まぁよいか。妾は袁術。字が公路じゃ」

胸を張るような姿勢で告げる袁術。それは、当然ながらしんのす

けが自分を知っていると考えているからだ。この街にいる者ならば知っているだろう名。確かにそれは正しい。しんのすけは袁術の名を知っていた。だが、それは決して彼女の望むような意味で知っていた訳ではない。

しんのすけは袁術の名乗りを聞いて、理解するように頷いたところではたと動きを止めて考え込んだ。そう、当然袁術の名に聞き覚えがあったために。そしてそれを見て袁術は、しんのすけが名前を思い出しているのかとやや期待に満ちた眼差しを向ける。

「えっと……」

「何じゃ？」

「お名前、もう一回聞いてもいい？」

「？　よいぞ。妾の名は袁術と言うのじゃ。しかと覚えるとよいぞ。ふはははは」

しんのすけの信じられないという表情を不思議に思いながらも、袁術は改めて名乗る。最後の高笑いはどこか袁紹に通じるものがあるのは、やはり袁家の血の成せる業だろうか。ともあれ、しんのすけは袁術の再度の名乗りに確信して頷いた。

そして、楽しそうに笑う袁術へこう問いかけた。それは確認。目の前の少女がこの街を治めているのかと。それを袁術は自慢げに肯定してみせる。それにしんのすけは頷くと、目の前の相手がこの街の現状と洛陽が近い事を知っているかどうかを問いかけた。

――ねぇ、えんちゃんは知ってる？　ここ、みやこってところと同じになってきてるぞ。

その問いかけに袁術は理解出来ないという顔を返す。どうして自分が治める街が洛陽と同じになるのだろうと。そんな風に困惑する袁術を見て、しんのすけは安堵するように息を吐いた。そう、それは袁術が知らないと分かったからだ。

分かってないなら分かってもらえばいい。そう考え、しんのすけは戸惑う袁術へ自分が見た洛陽の話を聞かせる。更に自分が経験したあの出来事も。それを聞いて袁術は驚いた。洛陽が衰退し始めていて、尚且つそれに自分が治める街が近付きつつあると言われたのだ。

「し、しんのすけ……それは嘘であろ？　この街が荒れ始めておるというのは」

「ううん。オラには何でこうなったかは分からないけど、街の人達がお元気ないんだ。他の街は……ええっと、よいしょーさんとか、もうちゃんとか、さくのお姉さんの街はもっと元気だったよ」

しんのすけの告げた名前の内、二つは袁術も誰かは分からなかった。しかし、最後の一つはすぐに分かった。孫策の事を言っていると。故に驚く。自分の客将である孫策の方が自分よりも良い街づくりをしていると言われたのだから。

袁術の中に悔しさが生まれる。だが、それをどうこうする前に袁術には聞かねばならない事があった。それは、どうすれば自分が孫策に負けない街づくりを出来るかだ。

「しんのすけ、教えてたも！　どうすればこの街を孫策の街に負けぬ街に出来るのじゃ！」

「そうだなぁ……まずは、兵隊さん達をもっと優しい人にする事だぞ」

「兵士達を……？」

「街のみんなを守るのが兵隊さんだぞ。だから、もっと兵隊さんが街の人を大切にするようにしなきゃ」

そう言うと、しんのすけは袁術の手を掴み歩き出す。それに袁術も素直に歩いていく。しんのすけは裏路地から大通りへ出て何かを探す。するとすぐにそれは見つかった。しんのすけは袁術へ指し示すようにそれを――一人の兵士を指差した。そこには、どこか我が物顔で歩く兵士の姿があった。

それを見て街の者達がどこか避けるように動いている。表情は皆一様に怖がっていた。それを確認し、袁術は言葉がない。そんな彼女へ普段と同じ声でしんのすけはこう告げた。

「あんな風にしちゃダメって事。みんなが笑っていられるようにしないと」

「本当なのじゃ……これでは守るべき兵士が民を苦しめておるようなものではないか」

袁術は初めて見る自らの領地の姿に深い驚きと悔しさを感じていた。今まで彼女は政を全て下の者達に任せ、自分は自由気ままに振舞っていたのだ。しかし、それは無責任だからではない。誰も彼女に政治をさせようとしなかったのだ。

本人がしようと思わなかったというのもあるだろう。だが、それでもこの光景の責任が自分にないと思う程、袁術は愚かではなかった。自分がちゃんと少しでも意見していれば、少しでも現実を知ろうとしたのなら。そんな仮定が浮かんでは消える。

（妾は何も知ろうとしなかった。何もしようとしなかった。ただ、毎日が楽しく蜂蜜水だけ飲めればそれでよいと思っておった……）

彼女とて簡単な教育は受けている。袁紹程ではないが、それに近い程度には知識もある。それ故、自分の暮らしを支えているものが何であり、どこから来るものかも知っている。

だからこそ、この光景がいずれ何を呼ぶかを理解した。破滅。それは自分が送っている生活が最終的には出来なくなる事。それだけではない。自分の配下である孫策に負ける事も意味すると。それを考え、袁術は強く拳を握り締める。自分が負けるなどあってなるものかと。

「……しんのすけ、妾がする事はこれだけでよいのか？」

「後はね、たまにでいいから街を歩いてみる事だぞ」

「ん？　何故じゃ？」

「さくのお姉さんがやってたぞ。それで街の人の声を聞くんだって」

それが袁術に与える効果は大きかった。孫策は街を歩いて住人の話を聞いたり、または意見を取り入れる事でその不満を解消し要望に応えている。しんのすけはそう星から簡単に聞いた孫策の話を聞かせた。

「だから、えんちゃんもそうするといいよ」

「……のう、しんのすけ。どうして孫策は、妾にこの事を知らせなかったのじゃろ？」

この街を通って孫策は袁術に会いに来る。もうそれは何度となくあった。にも関らず、孫策は自分へ何も言ってはくれなかった。それが袁術には不思議で仕方なかった。聞いている限りは民を重んじる孫策。それが、何故か自分の街の事は一言として話さなかった事に袁術は疑問を抱いたのだ。

袁術のそんな疑問にしんのすけは考える。彼は知らない。孫策がいつか袁術へ復讐し、独立を考えているなど。なので、彼が思いつく結論は当然……

――きっとえんちゃんに自分で気付いて欲しかったんだぞ。人に頼ってばかりじゃダメだよって。

その言葉は、孫策が誰に対しても優しいお姉さんと思っているしんのすけだからこそ。袁術はそれを聞いて一際驚いたように目を見開き、意外に思いながらゆっくり頷いた。孫策が自分の成長を促そうと考えていたと受け取ったからだ。

客将という事で軽い扱いをする事もあった相手だった孫策。それにも関らず、自分をそこまで思っていてくれた。そう袁術は勘違いをした。故に密かに誓う。今後は出来る限り忠臣と思い接しようと。

（孫策がそんな風に妾の事を案じていたとは……意外だったのじゃ。七乃に言って、これからは孫策達への扱いを改善せねばならんかの）

きっと自分へ感謝するだろうと思い、袁術は嬉しそうに笑う。その笑顔を見て、しんのすけは何か良い事でもあったのだろうかと思うのだが、それを尋ねる前に二つの音が鳴り響いた。

「お腹すいたぞ……」

「妾もなのじゃ……」

同時にお腹を押さえる二人。だが、袁術はそれが気恥ずかしかったため、照れを隠すようにしんのすけへこう告げた。何か食べ物を持って参れと。それにしんのすけが少し考え、懐へと手を入れた。

するとそこから小さめの袋が出て来た。それは、幽州での日々で得た給金が入っている物。星や白蓮に無駄遣いするなと厳命されているそれ。しんのすけはそれをしばし見つめ、袁術へ視線を動かした。それに袁術が小首を傾げる。何を見ているのかと思ったのだ。

「何じゃ？　妾の顔に何かついておるのか？」

「うんと……何でもないぞ」

お腹を空かせている女の子へ何か買うぐらいはいいだろう。そう思い、しんのすけは小さく頷いた。そして、そう言ってしんのすけは袁術の手を掴んだままで歩き出す。だが、何故か袁術は手を振り解こうとした。思わず足を止めて振り向くしんのすけ。そんな彼に袁術ははっきりと言い切った。

「もう妾は歩きたくない。ここで待つ」

「どうしても？」

「どうしてもじゃ！」

「はぁ……分かったぞ。オラは男の子だから、えんちゃんのために動くね」

「うむ！　早う持ってきてたも」

しんのすけがトボトボと歩き出すのを見送り、袁術は満面の笑みを浮かべていた。そして、その背中がある程度離れたところで気付く。自分が先程からちゃん付けで呼ばれていた事に。だが、それが気にならなかったとも気付き、袁術は不思議な気持ちになった。

今までは様付けでしか呼ばれた事のない彼女。それが庶民の子供から略称で呼ばれる事になるとは思わなかったのだ。不快に思ってもいいはずの呼び方。しかし、それがそう思えないのは何故だろうかと袁術は考える。そこから出た答えは、至って単純なものだった。

――――妾の事を友人のように接してくれたからじゃな……

名族たるが故に幼くして君主となった袁術。それは、彼女に子供らしからぬ状況を押し付けた。それでも彼女はその自由気ままな性格を失う事無く振舞っていた。しかし、そこには当然対等の立場の存在はいない。全てが下。自分が頂点だったのだから。

だからこそ、しんのすけの態度が新鮮に映ったのだ。権力に媚びる事もなければ、気にする風でもない。その態度は、彼女の中ではあまり見ないものだった。孫策はそれに近いものの、どこか礼儀的に臣下として振舞っている部分もあったのだから。

そんな事を袁術が考えていると、そこへ肉まんを一つ持ったしんのすけが戻ってきた。そしてそれを袁術へと差し出す。それを反射的に受け取り、袁術は早速とばかりに食べようとして――――ふとその動きを止めた。

「しんのすけは食べぬのか？」

「オラはいいよ。まだ我慢出来るぞ。えんちゃんは食べて」

しんのすけは無駄遣いをしないようにと言い聞かせ、袁術の分だ

けにした。星もそれならばきっと許してくれるだろうと思ったからだ。一方、袁術はそんなしんのすけの言葉に食べる事が出来なくなっていた。

普段食べている食事よりも質素で安いだろう肉まん。それが急に高価な物に見えてきたのだ。袁術とて子供がそこまでお金を持っていないと知ってはいる。それを思い出し、しんのすけが買ってきたこの肉まんがどんな意味を持つかを感じ取ってしまった。

（……妾は、何をしておるんじゃろ。これでは今までと同じではないか）

自分がワガママを言って誰かを動かす。それが誰かを困らせる事になる。そう気付いた袁術は、手にした肉まんを少し眺めて頷くと、しんのすけへ声を掛けた。

「しんのすけ」

「お？」

「これはそなたの物じゃ。妾は食べる事が出来ぬ」

そう言って袁術は肉まんをしんのすけへ差し出した。それをしんのすけは見つめ、袁術へ視線を動かした。袁術は早く受け取れとばかりにしんのすけへ視線を向けていた。それにしんのすけは頷き、その肉まんを手に取る。袁術がそれに満足そうに頷いた。

すると、しんのすけは手にした肉まんを半分に割り、片方をもう一度袁術へ差し出した。それに袁術は声を失った。しんのすけが何を思ってこうしたのかをすぐに理解したからだ。

――ほい、これでオラもえんちゃんも食べれるぞ。

――い、いいのかや？

――とーぜん！　くまった時はうがい手洗いだぞ。

――……どういう意味か分からんが有難く頂くとするか。礼を言うぞ、しんのすけ。

困った時はお互い様。そんな言葉を言いたかったしんのすけ。しかし当然のようにその言葉は滅茶苦茶だ。袁術も結局理解する事は出来ず、不思議そうに思いながらも差し出された肉まんを受け取り、嬉しそうに笑ってみせる。

「熱いから気をつけてね。ヤケドするかもだぞ」

「わ、分かっておる……」

そして、二人同時に肉まんへかぶりつく。餡から溢れる肉汁にハフハフと口を動かして冷ますしんのすけ。それを見て袁術も真似をし、二人は同時に息を吐く。そしてどちらともなく笑い出す。

道行く者達が袁術に気付いてどこか驚きを浮かべるも、最後には微笑みを浮かべながら通り過ぎて行く中、二人はずっと笑顔で肉まんを食べ続ける。それは、とても仲の良い子供同士に見えた……

しんのすけが袁術と肉まんを食べ合っている頃、星は少し不安そうな表情でシロを連れて街を歩いていた。昼時になったため、しん

のすけを迎えに行ったのだが、子供達が遊んでいた場所にはいなかったためだ。

念のためにあちこちで聞き込みをしているし、シロに匂いを辿らせているので心配はそこまで強くない。裏路地に入った事は確かで、先程シロが強い反応を示した場所もあった事から、どうもそこで少しの間留まっていた事も分かった。

なので、今はそこから先へ向かっていたのだが、一つだけ気になる事があった。それは、シロがそこで不思議そうな反応も示した事。なので、別の誰かと共にいると星は判断した。そこには、シロもそれを肯定するように返事を返した事もそれを後押ししていたが。

「ん？」

星の視界の先に白い服装の女性がいた。しんのすけが見ればガイドさんと呼んだだろう外見だ。見た目からそれなりの物と分かる事から、それなりの地位にいる者だろう。

星は服装からそう結論付けて、疑問符を浮かべた。そんな者がどうして裏路地などを歩いているのだろうかと。しかも、女性は周囲をキョロキョロとしているのだ。まるで何かを探しているように。そこに自分と同じ雰囲気を感じ、星は声を掛ける事にした。

「いかがしました？」

「ちょっと人を捜してまして……これぐらいの小さくて可愛らしい女の子なんですがー」

女性は星の方を振り返る事もせず、捜しながらそう答えた。だが、その行動に星は正直目を疑った。女性は道の端にある大きめの石を持ち上げたり、或いは家の裏などを覗き込んでいた。明らかに人が

隠れる事が出来ないだろう場所ばかりを狙い、捜すその光景に星は呆れた。

「出てきてくださいよ、お嬢さまー。かくれんぼは終わりにして、蜂蜜水を飲みませんかぁ？」

「……もしよろしければ手を貸しますぞ。何かその子の匂いがする物でもあれば、このシロが辿ってくれるので」

「え？　……あれ、まだ居たんですねぇ。てっきり呆れていなくなっちゃったと思ってました。物好きですねー」

星の申し出に女性は初めて振り向き、意外そうにそう言った。その言い方から、星は女性がわざと先程の理解に苦しむ行動を取っていたのだと気付いた。しかしその理由が分からない。すると、女性が星の疑問に気付いたのだろう。

周囲を多少警戒するように星へ近寄り、その耳元で告げた。主君である袁術が城から抜け出し、それを捜しているのだと。それで星も納得がいったと頷いた。もしただの脱走ならいい。これが誘拐などになっていれば大問題だ。故に女性は周囲に遊びを装っていたのだ。

「そうでしたか。では、貴方は袁術殿の？」

「はいー。私、傍付きのついでに大将軍している張勲と言います」

（……これはまた癖のある相手だな）

肩書きとして上に来るべき方をついで扱いする事に、星は張勲をそう評した。そんな気持ちを表情には出さず、星は平然と言葉を返

す。

「張勲殿ですか。私は趙雲と申す者。それで、協力する前に一つ聞きたい事があるのですが……」

「何です？　あ、報酬とかは無いですよー。仕官なら考えない事もないですけど、あまりオススメはしませんからねぇ。確かにお給金はいいですし、仕事も楽ですけど、合わない人にはまったく合わないですよ、うちって」

星がしんのすけの事を尋ねようとした途端、張勲は機関銃のようにベラベラと喋り出した。その速度は星でさえ思わず黙ってしまう程だ。何よりも語る内容が酷い。主君である袁術を馬鹿にし、貶す。だが、それも全て含めて愛しいと言い切る張勲に星は軽く眩暈を感じた。

そう、張勲は袁術が問題だらけと知りながら、それを少しも是正しようとしていないと分かったからだ。しかも性質が悪いのは、普通主君の事を思えばそんな事は出来ないはずなのだ。だが張勲は、主君を大事に思うからこそそのままがいいと考えていた。それが星には理解に苦しむ部分だった。

話を終えて分かりましたかと尋ねる張勲へ、星は心から疲れたとばかりに息を吐いた。しかし、しんのすけの事を聞かねばと思う事で何とか萎えた気持ちを立て直し、それは分かったと返して問いかけた。

「これぐらいの黒髪の少年を見ませんでしたかな？　背に木刀を差しているのですが」

「うーん、見てませんねぇ」

張勲は心当たりはないとばかりに答え、懐から何かの布を取り出してシロへ差し出した。

「で、これがお嬢さまの手拭いです。これで居場所は分かりませんか？」

シロはその匂いを嗅ぎ、一度不思議そうに首を傾げてもう一度嗅ぎ直す。そして、驚いた表情へ変わって星へ何度も声を掛ける。それだけで星はシロの言いたい事に気付いた。

「しんのすけと共にいる相手と同じ匂いなのか？」

「キャンキャン！」

「えっと……どういう事です？」

「私の捜す者と袁術殿が一緒にいるという事です。さ、行きましょう」

事情が飲み込めないという張勲へ星はそう答え、シロを先導に動き出す。それを見て張勲もとりあえずは追い駆ける事にしたのだろう。星とシロに置いていかれないようにその後を追う。こうして星達はしんのすけ達がいる場所まで向かうのだった……

「……だからオラ達は、いつかみやこにいる悪い奴をこらしめたい

んだ」

「そうなのか。しんのすけ達は偉いの……」

先程の場所から少し移動し、二人は地面に座って話をしていた。最初は地面に座る事に抵抗があった袁術だったが、しんのすけが何の躊躇いもなく座ってしまったので、ならばと隣へ座ったのだ。砂や小石の感触に違和感を覚えた袁術だったが、しんのすけの思い出話が始まってしまえばそんな事さえ気にならなくなり、現状に至る。

今はしんのすけが洛陽で抱いた決意を聞かせていた。それを袁術は聞いて、大陸の民が望んでいる事はそれではないかと思っていた。都である洛陽。そこが一番住み良い街になる事こそ、この大陸の平穏に繋がるのではと。

しんのすけが更に詳しく語ったその現状。それは袁術でさえ酷いと思うものだった。だから、袁術は気付いた。この街だけではなく、そんな洛陽を自分が率先して変えようとすれば、誰もが自分が成長したと考えてくれるのではないかと。

（今の洛陽は、何進が死んで十常侍が駆逐されたらしいと七乃が言っておったの。ならば、動くとすれば今しかないのじゃが……）

つい最近入った情報を思い出し、袁術は考える。何か洛陽へ軍を動かす方法はないかと。今動かなければ、また誰かが何進や十常侍のような振る舞いをしないとも限らない。しかし、洛陽は大陸の首都。おいそれと軍などを向ける事は出来ないのだ。

袁術は結局良い案が浮かばす断念した。だが、しんのすけから聞いて知った様々な事実が袁術へある変化をもたらした。袁術の中にあった僅かな誇り。それが変化して生まれた小さな、けれど確かな正義感。その灯は消える事なく、燻り続ける事となる。

「えんちゃんはこれからどうするの？」

「そうじゃな……まずは兵達を叱る事にしようかの。それから、街の者達へ今まで気付かずいた事を詫びねばならぬし」

しんのすけの問いかけに袁術はそう答えた。自分が未熟だったと気付いた以上、これからは領主としてしっかりしなければ。そんな思いが彼女を動かしていた。そんな気持ちからの発言に、しんのすけが心底感心したとばかりに声を出した。

「おおっ！　みんなに謝るって、えんちゃんエライぞ！」

「そ、そうかの？」

「うん。オラ、そう教えられたよ。自分が悪い事したらちゃんと謝れる人はすごくエライ事なんだよって。だから、えんちゃんはエライぞ」

「うむ……うむっ！　妾は偉いか！」

「うん、えんちゃんはエライぞ！　よっ！　えんちゃんスゴイ！　だいとーりょー！」

「わはははは！　言ってる事はよく分からぬが、もっと褒めてたも！」

ここに孫策がいたのなら呆れた事だろう。何せ、その二人の会話はどこか張勲とのやり取りを彷彿とさせたのだから。違いと言えば、袁術がちゃんとした理由で褒められている事だろうか。いつもは悪

口のような表現でそんな流れになっているのだから。
そんな風に二人が盛り上がっているところへ星達が姿を見せた。
そして高笑いする袁術とそれを囃し立てるしんのすけを見て、星は呆れ、シロは突っ伏し、張勲はどこか悔しそうにしていた。

「やはり心配するまでもなかったか……」

「クゥ～ン……」

「お嬢さまをあんな風に乗せるなんて……やりますねぇ」

そんな三人に気付かず、二人はそのまま盛り上がり続けるのだった……

「ごめんくさい」

「手間をかけたの」

二人が落ち着いたのを見計らい、星と張勲はそれぞれを叱り付けた。しんのすけへは本来と違う行動を取った事を星が、袁術へは城を抜け出した事を張勲が注意した。それに二人は素直に頭を下げて反省の意を示したので、星も張勲もそれ以上何か言う事はなかった。
シロはここまでの働きを星に褒められ、張勲にも軽く頭を撫でられ嬉しそうにした。しんのすけはシロを袁術へ紹介し、その得意技であるわたあめを披露して楽しませた。そんなやり取りをし、袁術は張勲と共に城へと帰ったのだが、その去り際に……

――しんのすけ、妾と……その……

――何？

――と、友達になって欲しいのじゃ！　……駄目かの？

――いいよ。じゃ、お友達の握手だぞ。

命令ではなく要望の形にしたのは、袁術の本心だったのか。それとも、その時ばかりはただの人として接したかったのかは分からない。とにかくこの出来事を通して、しんのすけと袁術は友人となった。張勲はそんな袁術にどこか意外そうな表情を見せていたが、最後にはその笑顔を見て嬉しそうに表情を輝かせていた。

「ここに来て良かったか、しんのすけ」

「そうだね。えんちゃんとお友達になれたし、この街をみやこみたいにはしないって言ってくれたぞ」

「ふふっ、そうか。それは良かったな」

「キャンキャン」

食事をするために歩く道すがら、そんな会話をするしんのすけ達。少し頂点から下がり始めた日差しを浴びながら、その姿は通りの雑踏の中に消えるのだった……

その頃、袁術と言えば……

「え？　洛陽へ向けて軍を動かす方法ですかー？」

「うむ。何か手はないかの、七乃」

城に戻るなり、兵士達へ街の者達を怖がらせる事無く警備をするように厳命しろと言い出した袁術。しかも、他にも何か街の者達が不満に思っている事や問題になっている事はないか調べるようにとくれば、張勲と言えど色々と思う事もある。最たるものが孫策達への待遇改善指示だ。それにはさすがに張勲もどうかと意見したのだが、袁術は孫策こそ忠臣であると取り合わずに張勲が折れる形となった。

それらに違和感を感じながらも、張勲はそのために同僚である紀霊を始めとした重臣達にその旨を伝えた。その矢先、とどめとばかりにそう言われれば、間違いなく原因はしんのすけと思おうものだ。

だが、それによる変化で袁術に対しての気持ちが失せるような張勲ではない。むしろ自主的に動いて空回るだろう袁術を見たいと思い、愛すべき主君のためにとその普段は眠っている能力を使い、要望を叶えるために考えを巡らせていく。

「……袁紹さんを利用しましょうか」

「麗羽を？」

「ええ。今の洛陽は荒れてると聞いたんですよね？」

張勲の言葉に頷く袁術。しんのすけから聞いたから間違いないと。それに張勲は頷いてこう告げたのだ。袁紹を動かして諸侯を全て巻き込もうと。袁術だけでは動けないし、不安もある。しかし、そこに袁紹を始めとする連合軍を作り洛陽へ侵攻すればいいのだと。

それに袁術が良い案だと褒めるのだが、すぐにある事に気付いた。それは大義名分がない事だ。何の理由もなく諸侯が動く訳がない。そう袁術が言うと、張勲は指を左右に動かし、任せろとばかりに告げた。

「洛陽が荒れてるのが事実ですから、それを大義名分にする事は簡単ですよー。それに誰もが名を上げる機会を窺ってるでしょうから。で、その機会を与えるこれは、絶対上手く行きますしー。まぁ、さすがに朝廷が悪いとは言えませんからねぇ。なので、肝心の原因をそこにいる人のせいにすれば、その人を倒して洛陽の人達を助けようって名目が出来ます」

「おお！　さすが七乃じゃ！　褒めてつかわすぞ！」

「ああん、勿体無いお言葉ですよぉ、お嬢さまぁ」

袁術からの言葉に表情を緩める張勲。その笑顔は眩しいぐらいだ。その笑顔を見て袁術も笑みを返しも、表情を若干曇らせて気になった事を問いかける。

「でもよいのか？　一体誰は知らんが、そんな相手に仕立て上げても……」

「何言ってるんですか、お嬢さま。戦いに犠牲は付き物ですよ」

「そんなものか？」

「はい。犠牲を恐れて戦争は出来ないですからねー」

袁術の疑問に張勲はそう断言した。それから袁術へ袁紹が参加するだろう理由を告げた。この時、袁紹は十常侍を暗殺している。そこから考えても袁紹が洛陽に関る事を拒否するはずはないと。そう張勲は考えていた。後はその気持ちを後押ししてやるだけ。それも単純な袁紹が即座に反応するような内容で。

だがこの頃、袁紹はまだ洛陽を治める形になった董卓へそこまで関心を払っていなかった。しんのすけと出会い、自分が天の御遣いと同等であると言われたため、余裕を持っていたためだ。十常侍を暗殺した理由は、単に振る舞いが優雅ではないので気に入らなかったからなのだから。

それを張勲は知るはずがない。それでもその性格を理解している張勲は、どこか納得出来ないような表情をしている袁術へ自分の段取りを説明していく。悪役を仕立て上げる事に疑問を抱いていた袁術も、張勲に洛陽を救う決意をした事を褒められてしまえば、意識をそこから逸らしていくのが当然で……

「さすがお嬢さま！　全ての諸侯を巻き込むなんて、私達には出来ない事を平気でやってのける。そこに痺れる憧れるぅ！」

「あはははは！　あまり褒めるでないぞ、七乃！」

「しかも汚れ役を他人に押し付け。よっ！　汚い！　さすがお嬢さま汚いっ！」

「わはははは！」

最後の内容は張勲発案なのだが、それに気付いて突っ込む程袁術は鋭くない。いや、一度乗せられてしまえば、だろうか。褒め言葉と皮肉の違いも分からず、歓声と罵声さえ取り違えるのだから。

そうして張勲は袁術を乗せ続け、上機嫌で高笑いを続ける彼女を一しきり堪能した後、一人今後のための動きを起こすべく袁紹宛ての手紙を書き始める。勿論、袁術の代筆という形で。

今の洛陽が荒れ始めているという噂がこの街へも聞こえてきた。その原因は、幼い皇帝を仕立て上げ朝廷を蔑ろに自分勝手に動かして政治を行う存在がいるからと民達が口々に言っている。名族袁家として、それを正すために正義の軍勢を以って洛陽へ攻め入るべきではないか。

ちゃんと途中には、自分では役不足であり、袁紹しかそれを諸侯へ伝え動かせる者はいないとおだてるのを忘れない。こうして張勲は、単純に言えばそんな内容を書き上げ、最後に倒すべき相手の名を書き記すべく筆を下ろそうとして、その手を止めた。

「ええっと……確か今の洛陽を占拠してるのは……」

そこで張勲は少しだけ難しい顔になる。以前聞いた情報を思い出すためだ。現在、洛陽で懸命に何進や十常侍が原因で起きた事態を収拾しようとしている者。本来であれば、責められる事などない相手である存在の事を。

少しの間の後、その名前を思い出した張勲は一人満足そうに頷いてこう締め括った。

――――逆賊、董卓を討つために……

しんのすけと出会い、無能な君主ではなくなろうとし始めた袁術。だが、その気持ちが逸り過ぎる事で次なる戦乱を呼ぶ。動き出す大

陸を覆う次なる嵐。それは、予言通りしんのすけがキッカケで起こるもの。

さあ、開幕の鐘は鳴らされた。動き出した乱世の風に立ち向かうは、平和を願う幾多の想いと嵐を呼ぶ少年。かくして外史の流れは変わり出す。激しく静かな渦巻いて……

――――――

第十二話

袁術の要望から生まれた張勲の計画。その洛陽侵攻を正当化するための策は着実に動き出した。張勲の書いた手紙を読むや否や、袁紹はその文面に踊らされるように各地の諸侯へ檄文を送るよう指示を出す。

曹操、孫策と言った名だたる者達へ送られるそれ。ある者はその行動が本来持つはずだった裏に気付いてため息を吐き、ある者はこれこそ自分達の待ち望んだ機会とばかりに笑い、ある者は素直にその内容を信じて義憤に燃える。

それを知らず、しんのすけ達は行く。目指すは桃香達がいる平原。だが、その旅路は思わぬ中断を余儀なくされる。それは、とある街に立ち寄った際の事。

――洛陽で董卓という者が私欲のままに朝廷を牛耳っているらしい。

そんな噂と共に聞こえてくる反董卓連合の話。袁紹を筆頭に各地の有力諸侯が次々と参加を表明しているとのそれ。星はその話を聞いて、自分が待ち望んだ時が来たと悟った。義勇兵としてその連合に参加し、洛陽に巣食う悪の芽を正々堂々と摘み取る事が出来ると。

そこまで考え、星はしんのすけへ問いかけた。それはその連合に参加した時の事。おそらくそこには、この旅で出会った者達がほとんど顔を揃えている。ならば、そこでしんのすけの決断を聞こうと思ったのだ。

「しんのすけ、少しいいか？」

「なぁに？」

「洛陽の悪を成敗出来る機会が出来た。私はそれに参加しようと思うのだが、そこにはおそらく桃香殿達もいる」

「おー、そうなんだ。じゃ、桃香ちゃん達に会いにそこへ行こー」

星の告げた内容の半分しか理解していないしんのすけ。しかし、星はそれでもいいと思ったのだろう。それに頷き、続きを語る。そこには曹操達などもいるだろうから、そこでしんのすけが誰を救うかを決める事は出来ないかと。それにしんのすけはやや考え込むように腕を組んだ。

星からの申し出を受けるか否かを決めていなかったのもあるが、やはりまだ決めかねている部分が多いのだ。そのため、しんのすけはこう返した。その場へ行き、もう一度それぞれの顔を見て決めたいと。それに星は頷いた。

そしてしんのすけ達はその街でその連合が集合している場所を聞き出し、そこへ向かって急ぎ目に行動を開始した。たいりく防衛隊としての行動を起こすために。だが、星にはふと思い出す者達がいた。

「張遼殿達は……おそらく相手側か」

「どーしたの？」

「くぅ？」

「いや、何でもない」

しんのすけへはまだ言わない方がいいだろう。そんな風に考え、星は何事も無かったかのように歩き出す。その横をついていくように歩くしんのすけとシロ。向かう先で待つのは一体何か。あの盗賊との戦い以来となる乱世の顔。それをしんのすけが見る事になる日は近い……

「これは参加するべきだね」

「ですが桃香様、あまりにも情報が……」

桃香の言葉に諸葛亮はそう言い難そうに声を出した。主君として仰ぐ桃香の性格は彼女とてよく知っている。袁紹から送られてきた檄文の内容からして、必ずそう言うとは思っていた。しかし、この文には情報が少なすぎるのだ。

洛陽が荒れ果て、そこに住まう民が苦しんでいる。その原因は朝廷を意のままに動かす董卓だ。それだけしか情報がなく、しかも真偽も定かではない。それを諸葛亮が指摘するのだが、それでも桃香はそれを承知していてこう答えた。

「それでも、洛陽が荒れて住んでる人が困ってるのは事実だと思う。火の無い所に煙は立たないって言うし」

「……桃香様らしいです」

「では、我らは連合に参加して洛陽の民を救うと？」

桃香の迷い無い言葉に諸葛亮が軽く苦笑して返せば、それを聞いて愛紗がそう桃香へ確認を取る。それに桃香は頷いた。大陸の民を救う事。それが自分のすべき事だからと、そう言い切って。

それに愛紗と諸葛亮が頷き、鈴々は頷くも何かを思い出したのか嫌そうな顔をした。それに隣にいた鳳統が気付き、不思議そうに問いかけた。

「どうしたの？　鈴々ちゃん」

「またあの春巻きと会うかもしれないのだ。そう思ったら、少し行くのが嫌になったのだ」

「許緒ちゃんでしたね。あの怪力は鈴々ちゃんといい勝負でしたから」

「にも関らず仲はあまりよくなかったな。歳も近かろうに……」

諸葛亮の言葉に続くように愛紗が呆れつつそう告げた。それに桃香も鳳統も苦笑した。曹操軍と共に行動していた時、鈴々は許緒と喧嘩ばかりしていたのだ。力を張り合う事などしょっちゅうだったのだから。

それを思い出し、鈴々以外が懐かしむように笑う。もうあの黄巾の乱から時間も経った。政治にもある程度の成果が出始め、やっと色々と形になってきた矢先、再び戦乱を告げる檄文が来た。それに対し桃香が思うのは、しんのすけの事。

（しんちゃん、もう白蓮ちゃんの所にいないもんなぁ。星さんと旅をしてるらしいけど、今、どこで何をしてるんだろ？）

少し前に送った手紙で知った事実を思い出し、桃香は思いを馳せ

る。きっとこの檄文の事を知ったのなら参加するだろう少年へ。そんな彼にもう一度会いたい。そんな風に思いながら、桃香は檄文に記された期日に間に合わせるために動き出すべく指示を出す。

諸葛亮と鳳統が主になり、愛紗と鈴々は軍を整える。それを眺め、桃香はふと胸騒ぎを感じた。この戦いが自分が一番望まない状況への第一歩になるような、そんな予感を……

白蓮は後悔していた。それは何も袁紹からの檄文に共感し、連合に参加した事ではない。あまりにも早く着き過ぎた自分の残念さにだ。何故ならば、そのために彼女は、袁紹と二人きりで他の諸侯を待つはめになったのだから。

「どうしましたの、白蓮さん。何か元気がありませんわね」

「いや、まぁ……ちょっとな」

袁紹から軽く心配されるという珍事を経験し、白蓮は少しだけ意外に思いながらため息を吐く。それでも、先程の会話に比べればそこまで驚く事は無かったが。

（まさかしんのすけの事を言い当てるとはなぁ……）

そう、袁紹は白蓮へ話したい事があると言って自分用の天幕へ呼び出したのだ。そこで、しんのすけが天の御遣いだろうと袁紹から言われた。それに白蓮は驚いたが、それを利用しないと言われたのはもっと驚きだった。

袁紹はそんな白蓮にこう言った。しんのすけが天の御遣いだとしても、それは何の役にも立たないだろう。何せしんのすけには威厳も無ければ神秘性もない。つまり、天の御遣いと周囲へ知らしめる手段が無さ過ぎると。

白蓮はそれに同意した。そんな白蓮に袁紹は最後にこう告げた。

――それに、子供を利用するなんて優雅ではありませんわ。

それに白蓮は思わず笑ってしまった。理由が袁紹らしいと思っただけではない。その言葉がどこか以前自分が星へ告げたものと同じに聞こえたからだ。

――天の御遣いなんて端から当てにしてないさ。それに、大人の尻拭いを子供に押し付ける気はない。

故に自分が知る袁紹ではない何かをそこに感じ、白蓮は察した。しんのすけが袁紹に影響を与えていった事を。

「でも麗羽、よく洛陽の事をどうにかしようと思ったな。お前ならそんな事に構わないと思ってた」

「お～っほっほっほ！　私も最初はどうでも良かったんですけど、美羽さんから来た手紙にあったんですわ。民達に正義を示すのが名族の務めだと」

「正義、ねぇ……」

袁紹の言葉に白蓮は苦笑した。袁紹は、正義などという言葉が似合わない相手だったからだ。これが星や桃香辺りならそうは思わな

かっただろうが、袁紹には違和感しかない。白蓮はそんな事を考え、ふと高笑いをする袁紹へこう告げた。

袁紹の所から離れた後、しんのすけはどこへ行ったのかと。それに袁紹は高笑いを中断し、少し思い出すように腕を組んだ。そしてすぐに思い出したのかこう答えた。

「華琳さんの所でしたわね。私が紹介状を書いて差し上げたから間違いないですわ」

「曹操か。また気難しい相手の所だなぁ。あいつ、何か変な事してなきゃいいけど……」

そんな事を白蓮が呟くと、そこへ顔良と文醜が入ってきた。顔良の手にはお盆があり、そこには茶器が二つ載っている。

「麗羽様、白蓮様、お茶をお持ちしました」

「それと、まだ他の軍は現れません」

「ありがとう斗詩さん。にしても、揃いも揃ってノロマですわね」

「まぁ、仕方ないだろ。私はすぐにあれが届いたけど、他はそれなりに遅いだろうからな」

袁紹の言葉に白蓮は宥めるように答えた。それに顔良も同意するように頷き、文醜はそんな言葉に何かを思い出したのか、ぶつぶつ言い出した。それを見て顔良がどうかしたのかと問いかけた。すると、文醜は少しだけ不満そうにこう答えた。

「いや、きょっちー達はもう来てもおかしくないと思ってさ。あた

しらが直接行ったんだし」

「色々と準備してるんだよ。曹操さんはかなりしっかりした人だから」

顔良はそう言って苦笑した。曹操が参加すると言った時、彼女は意外に思ったのだ。確かにこの檄文は断る事が出来ない内容だ。しかし、それでも即決するとは思っていなかったのだから。それが曹操は意外にもあっさり参加を告げた。

その理由は色々と考える事が出来るが、顔良としてはそこに何故かしんのすけが関係している気がしていたのだ。それは、曹操に聞かれた言葉が原因。

――しんのすけは麗羽とどういう関係なの？

迂闊な事は言えないと瞬時に判断した顔良は、それに自分は知らないと答えた。袁紹しか知らない事の一点張りで。疑われても構わないと思って答えたのだが、曹操はそれに納得したのかそれ以上何も聞いては来なかった。

文醜に聞かれていたらどうなっていたかは分からなかったが、顔良はその時ばかりは同僚の頭の巡りの悪さに感謝した。それを知っている曹操だったからこそ、自分へと尋ねたのだろうから。そして、そこから顔良は曹操の考えをある程度推測していた。

（曹操さんが、もししんちゃんの正体を知っているとすればあんな事は聞かないはず。きっと、曹操さんはまだしんちゃんの事を変わった子供ぐらいにしか思ってないんだ）

それでも気になるからこそ、その正体を探ろうとしてるのだろう。そう顔良は結論付けてため息を吐く。今、この大陸で強い勢力にな

りつつある曹操。そこがしんのすけの正体を知った時どうなるかを考えたのだ。

利用するしかない。しかも、それはしんのすけの望むと望まざるに関らず曹操のためにその存在を使われる。それは顔良からしても許せる事ではない。袁紹はそれを優雅ではないと断言し、自らはしないと告げた。

「……しんちゃんは誰の物でもない。この大陸に遣わされた平和の使者なんだもんね」

そう呟き、顔良は考える。曹操が本当にそうするかは顔良には分からない。だが、その可能性がある以上、絶対にそれを教える訳にはいかない。白蓮と袁紹はしんのすけの正体を知りながらも利用しないと決めた。だから、そうと考える相手と分からない内は警戒し続けよう。そんな風に思い、顔良は密かに頷いた。

そんな彼女の横では、文醜が一人大きく伸びをしながら天幕の外に向かって叫んでいた。

「早く来いよ、きょっちぃぃぃぃ！！」

「くしゅん！」

「季衣、どうしたの？　風邪？」

突然くしゃみをした親友を心配して問いかけるショートカットに

大きなリボンの少女。それに許緒は何でもないとばかりに笑い、手を左右に動かした。

「違うと思う。多分いっちーが早く来ないかなって噂してるんだよ、流琉」

「あー、あの時の人か。確か文醜さんだったよね」

典韋がそう思い出すように言うと許緒がそれを肯定するように頷く。曹操に直接反董卓連合の誘いをしに来た顔良と文醜。その二人はまず、城ではなく街の中にある一軒の料理店へ足を運んだ。実はそこへ案内したのは許緒。街の警備をしている兵に屋台街を教えてもらい、そこへ案内された二人と許緒が出会ったのだ。

性格が似ているからか文醜と軽い喧嘩腰になった許緒だったが、夏侯淵が薦めていた店に連れて行ったのだ。そこは典韋が働いていた場所だったため、再会した許緒と典韋が軽く揉めた。それをその場にいた顔良と文醜が止めに入った経緯がある。そのため、二人にとっては忘れられない人物となっていたのだ。

そう、揉めた原因は許緒からの手紙にある。それによって陳留に来た典韋だったが、城で働いているとの許緒の言葉を鵜呑みに出来ず、その近くで働いていると勘違い。そのため料理自慢の腕を活かして城近くで働きながら、一人許緒を捜していたのだ。

つまり、その事をちゃんと信じられるように書かなかった事を責める典韋と、自分が嘘を吐いた事がないのに信じなかった事を責める許緒が喧嘩したという訳だった。

「それにしても、趙雲さんが負けたのがいっちーだったとは思わなかったなぁ」

「趙雲さんって、春蘭様と互角に渡り合ったってみんなが言ってた人だよね？」

許緒の言葉に典韋が確認するように問いかけると、それを聞いていたのかそこへ割って入る声があった。

「そうだ。まぁ、原因は文醜自身から聞いたので納得はしたがな」

「うむ、まさか姉者と同じく試合中に意識を乱したからとはな。道理でしんのすけの言葉に動じないはずだ」

夏侯惇の言葉に夏侯淵が続くように告げた内容に二人も頷いた。夏侯惇と互角の者が負けた原因。それが試合中に文醜がやった命がけの行動に対して、星が動揺したからだと言われたのだ。

それを聞いて、曹操達は揃って星が何故あの時動じなかったかを理解した。同じ轍は踏まないという事だったのだと。しかし、それを話した文醜はこうも言った。

――それにあの時、趙雲はわざと避けなかったんです。なので、あたいは本当に勝ったなんて思ってないですよ。

その言葉に誰もが文醜を少しだけ意外そうに見つめたのだ。格上に勝ったと喜ぶ事無く、その勝利を自分でさえ拾わせてもらったものと考えている。それがどこか文醜の性格からすれば意外に思えたのだ。

その時の事を思い出したのか、楽進が噛み締めるように呟いた。同じ武人として星と真剣勝負を出来た文醜への羨望と、その結果の受け止め方に感心していたのだ。

「私も文醜殿のように趙雲殿と戦ってみたかった……」

「でもぉ、凪ちゃんは何度か手合わせしたんでしょ？」

「せや。早朝に稽古ついでにやっとった聞いたで」

于禁の疑問を込めた言葉に李典が乗っかるように告げる。それに楽進は頷いてみせるのだが、こう答えた。早朝にやっていたものはあくまで軽いもので本気の手合わせではなかった。しかもしんのすけへの稽古もあったため、結局一度として全力での試合は出来なかったと。

それを聞いていた周囲に混じって楽進へある事を問いかける者がいた。曹操だ。曹操は興味深そうに楽進へ尋ねた。しんのすけの稽古は何をしていたのかと。それに楽進はあっさり答えた。

「ひたすら趙雲殿の攻撃をかわす訓練をしていました」

「かわすだけ？」

「はい。趙雲殿が言うには、しんのすけには戦う術ではなく生き残る術を教えておきたいのだとか」

「生き残る術……か」

曹操は楽進の言葉に以前の結論を思い出していた。星から主君のような扱いを受けているしんのすけ。それはどうしてか。荀？と共に考えた結果、ある結論が出て来たのだ。

「桂花、やはり間違いなさそうね」

「そのようです。まぁ、あまり信じたくはありませんが……」

曹操の楽しそうな声に荀?はやや嫌そうに答えた。しんのすけに乱世を生き残る術を教える。それ自体は何もおかしくない。だが、戦うのではなく生き残る事に重点を置いた点から、曹操と荀?は自分達が出した結論に納得を与えた。

戦場に出ても自ら戦うのではなく、いざと言う時に生き残れるためにと鍛えられる。それは武人の生き方ではない。そう、それを望まれるのはもっと違う者達。どんな時でも生き残る事を望まれる存在。それは君主だ。

だがしんのすけには治める国などない。とすれば、残る可能性はただ一つ。と、そこまで考え、曹操は視線を自分の後方へ向けた。そこには二人の人物がいる。ある事がキッカケで曹操が呼び寄せた者達だ。

「どうやら趙雲にとって、しんのすけは余程死なれては困る存在のようね。貴女達も同じ気持ちなのかしら?」

「それは……」

曹操の問いかけに一人はどう答えるべきかと判断に迷う。曹操がしんのすけの正体に薄々気付きつつあると感じているからだ。なので、隣の親友はどうすると思い視線を動かす女性。だが……

「……ぐぅ～」

「「寝るなっ!」」

「おおっ!　いやー、あまりに答え難い問いかけだったのでー」

寝た振りをする相手を軽く叩いて起こす女性と怒りをぶつける荀?。それに相手は目を開けてそうさらりと言いのけた。その答えに曹操は小さく笑う。答えを言わないまでも、二人の反応だけで大体の答えになっていたからだ。

しかし、今ここでそれを周囲に教える必要はないと思い、曹操は前を向いて空を見上げた。そこには青空が広がっている。それに微笑みを浮かべると、そのまま後ろで揉め始める荀?達へ視線を向けて告げた。

「とにかく、今はこの戦を利用して今後のための動きをするとしましょう。桂花、稟、風。お前達の知略、見事活かしてみせよ!」

「「「御意」」」

その揃った返事に曹操は頷き返し、更に夏侯惇達へ視線を動かす。

「春蘭、秋蘭。お前達の武勇、大陸中に響かせよ!」

「「「はっ!」」」

「季衣、流琉。この戦で十分経験を積み、次なる戦に備えよ!」

「「「はいっ!」」」

「凪、沙和、真桜。此度の戦にて、我が軍の武将として恥ずかしくない戦いをせよ!」

「「「「御意（なの）っ!」」」」

その返事を聞き、曹操は凛々しい表情のまま告げる。それは、この戦いだけではなくこれからを見据えた言葉。

――――行くぞ！　この戦を我が覇道の始まりとするっ！

袁紹が待つ連合の集合地点目指して動く袁術軍。その中に孫策達孫呉勢の姿があった。その中心人物である孫策は、親友であり軍師である周瑜と共にやや困惑した表情をしていた。

「ね、袁術ちゃんの態度なんだけど……」

「ああ。最近妙だと思っていたが、納得した。原因があいつならばな」

「やっぱり？　まさかの忠臣扱いにいきなりの待遇改善。最初は何事かと思ったわよ」

孫策はそう言って楽しそうに笑う。今回の檄文について参加の意思を持った孫策は、一応の主君である袁術の許可を取ろうと思って出向いたのだが、そこではっきりさせたのだ。自分達に対する対応の急激な変化。その原因を。

「こちらを油断させるためかと思いましたが、よもやあの小僧が袁術めに変な事を吹き込んだとはのう」

黄蓋も二人の会話に参加し、しみじみとそう告げた。それに周囲

も同意するように頷き、同時に苦笑した。そう、孫策が袁術へ尋ねたのだ。どうして急に扱いを変えたのかと。それに対する袁術の答えは実に単純だった。

――妾の友人が教えてくれたのじゃ。お前こそ真の忠臣じゃと。感謝するとよいぞ、わははは！

袁術の友人など孫策の知る限りいない。ましてや、自分の事を袁術に忠臣と言う者などいるはずがない。そこまで考え、まさかという考えがよぎったのだ。それに変な勘違いをしたのか、張勲が孫策へ呆れ気味に答えた言葉が全てを理解させた。

背に木刀を背負った妙な子供が袁術へ色々と吹き込んだらしいと。その表現だけで孫策は全てを理解した。しんのすけが袁術と出会い、何かを教えて誤解させたのだろうと。だが、彼女達としてはそれに感謝したいぐらいだった。何故ならそれは……

「おかげで袁術がこちらへ警戒心を向ける事はなくなりましたね～」

「まさか結果的にとはいえ、独立のための援護をしてくれるとはな……」

「小蓮様が聞けば喜ばれるでしょうね！」

陸遜の言葉にやや嬉しそうに孫権が続くと、周泰が笑顔で締め括る。しんのすけと友人となった尚香。今は元居た街へ戻り退屈な時間を過ごしているだろうが、再会出来た時にはこの事を話さないといけないと、そんな風に思う周泰。

そんな彼女を見て、甘寧はやや憮然としていた。彼女にとってしんのすけは幼いにも関らず女性に色目を使い、孫権達へ礼儀もなっていない子供なのだ。それが知らぬ所で自分達の助けをしていたな

どと聞いて、不覚にもこう思ってしまったのだ。やはり只者ではなかったと。

「ですが、まだ油断は出来ません。袁術はともかく、張勲は警戒している可能性があります」

「そうだな。思春の言う通りだ」

甘寧の言葉に周瑜が頷き、周囲もそれに同調するように頷いた。これまで通り慎重に事を進めよう。そんな風に誰もが思ったのだ。だが、唯一孫策だけは少し迷うような表情を見せていた。

（袁術ちゃんがあそこまで変わるとは思わなかったわ。私の真似して街を見て歩いてるらしいし、積極的に民達の意見を聞いて政に活かそうとしてるし……）

憎いだけだった相手。それが少し変わりつつある。民を思い、良き領主を目指す存在に。そう考えると、孫策といえど今までのように躊躇いもなく殺せる相手と言い切る事が難しい。以前のままならば、周囲に操られる暗愚として一瞬たりとも迷う事無く処断出来た。

それが今のままでいけば、名君とはならないだろうが領民から慕われるぐらいの者にはなってしまう。そうなれば、袁術を殺した孫策達の評判はあまり良くはならない。ならば、方法は二つ。袁術が領民達から慕われるようになる前に独立してしまうか、或いは……と、そこまで考え孫策は小さく息を吐いた。

――まったく、困った事をしてくれたわね。これじゃ、有難いんだか迷惑なんだか分からないわよ……

孫策は誰にも気付かれる事無く小さく呟いた。その声には、しん

のすけに対する複雑な思いが込められている。そんな呟きは、静かに大勢の者が立てる足音の中に消えるのだった……

孫策達から離れる事少し。そこに袁術と張勲の姿があった。張勲の操る馬に乗り、袁術は意気揚々としていた。

「この戦で妾達が大勝し洛陽の者達を助ければ、天下に妾の名が轟くの！」

「そうですねぇ。しかも、諸侯の間でも更に名前が知れ渡るでしょうから色々と有難いですし」

大陸中に名を轟かし、しかもそれが善政のために戦ったとなれば、民の間での評判は天井知らずとなる。つまり、そんな存在を倒そうとする者は、余程の理由があるか袁術以上の人気者でない限り民達の不評を買う事になる。張勲はそう考え、現状でそんな事が許される相手を考える。

その数はあまり多くはない。だが、この戦でそれが変わる可能性がある事は重々承知している。だからこそ、張勲は孫策達を何とか利用しようとしていた。袁術には悪いが、張勲はあまり孫策達を信用していないのだ。

（お嬢さまは忠臣だって言うけど、以前はたまに凄い怖い目をしてたんですよねぇ。今は待遇良くしたせいか、そんな目をしなくなりましたけど……）

孫策の視線を思い出し、張勲は小さく震えた。その震えに気付いた袁術は、視線を上に向けて不思議そうに小首を傾げた。

「ん？　七乃、どうしたのじゃ？」

「はい？」

「いや、顔色があまり良くないように見えたからの。風邪でも引いたかや？」

その言葉に張勲は、先程自分が思い出していた事が原因で袁術に心配をかけてしまったと理解した。なので、嬉しそうに笑みを見せてそれに何でもないと答える。その張勲の顔がいつものように戻ったため、袁術もそれに納得して視線を前へ戻した。

しんのすけと出会い、聞いた洛陽の現状。それを何とかしたいと告げたしんのすけの気持ちを尊いと思い、自分がそれを代わりに成してみせようと思い立った今回の戦。そう、袁術は初めて自分の意思で自分の行動を決めたのだ。そう考え、袁術はふと思った事があった。

「のう七乃」

「何です？」

袁術がどこか不安そうな表情を見せたため、張勲はどうしたのだろうと思いながらも返事を返す。それに袁術は恐る恐る問いかけた。

「しんのすけは今の妾を褒めてくれるかの？」

「当たり前じゃないですかー。仮にもお嬢さまの友人なんですから、

ここで褒めないでどうするってぐらいですよ」

「そうか！　妾は褒めてもらえるか！」

「はい！　よっ！　さすがお嬢さま！　友人に褒めてもらうためだけに戦を起こすなんて、誰もが呆れ果てるぐらいの前代未聞の大馬鹿者です！」

「わはは！　それほどでもないぞ！！」

張勲の言葉に満面の笑みで答える袁術。それを見て張勲は益々嬉しそうな表情へと変わっていく。それは、まさしくいつもの光景。常人には入り込めない雰囲気がそこにある。実に恐ろしい事に、そんなやり取りは日が暮れるまで続くのだった……

「袁紹が発起人となった連合軍はかなりの規模になりそうね」

「まったく、こちらの事を何も知らん癖に！」

賈駆の言葉に華雄が忌々しげに机を叩いた。洛陽にある王宮。その一角にある会議室。そこに董卓を含む主だった者達が集まっていた。議題は当然ながら彼らを逆賊扱いして集結しつつある連合軍に対する事だ。

「色々とバタバタしとるところに戦とはなぁ。袁紹はそないに月が憎いんやろか？」

「というよりは、おそらく洛陽の実権を握っている事が気に入らないのですよ。実際はそんなにいい物でもないのですが……」

張遼の言葉に背の低い黒い帽子を被った少女が答えた。彼女の名は陳宮。呂布の軍師をしている少女だ。

「ねねの言う通りね。出来るぐらいなら押し付けてやりたいぐらいよ」

「それで詠ちゃん、どうすればいいの？」

賈駆の呆れ声にそれまで黙っていた董卓が口を開いた。平和的な性格をしている彼女は、出来る事なら戦う事無く全てを終わらせたいと考えている。それを賈駆も知っている。知っているが、それが出来ない事も理解していた。

連合の目的が洛陽から董卓を追い出す事ならば何とかなる。だが、おそらく追い出す事だけでは済まない。大陸中に自分達の正当性を訴えるためにその首を欲しがるはずだ。つまり、董卓を死なせずに戦を終わらせる方法はない。

「一先ず徹底抗戦しかないわ。？水関と虎牢関を有効活用すれば、どんな大軍相手でも何とか出来るから」

「時間を稼いでどないする気や？」

賈駆の告げた内容に張遼はそう切り出した。その裏にある目的を問いかけるために。二つの関を使えば確かに連合軍を相手にしても戦える。だがそれはあくまで防衛。

しかも、兵数で圧倒的に不利な今の状況では、一時的な優位には

立てるだろうが最終的な勝利を掴む事は難しい。だからこそ聞きたかったのだ。時間を稼いでどうするのかと。それには賈駆ではなく陳宮が答えた。

「万が一のために、逃げる準備をするからですぞ」

「……逃げるの？」

「ええ。この戦いは勝つ事が難しいし、負ける確率の方が圧倒的に高い。でも、それは大局的にはであって、戦略的には楽に勝てるの。それは、月を無事に洛陽から逃がす事。月がここから逃げ出せば、後は僕が何とかするわ」

呂布が言った言葉に賈駆が答える。本音を言えばそれでは勝てない。董卓が生きているとなれば、必ず捜索隊が結成されてしまう。つまり、董卓を逃がすだけではなく、誰かが董卓として死ぬ必要があるのだ。それもあって、後は自分が何とかすると言ったのだから。

だが、それを賈駆は言うつもりはない。言えば、必ず董卓がどうするかが分かるからだ。幸いにして、諸侯に董卓の顔は知られていない。董卓の事を知っていた者達は揃って今回のごたごたで死んでしまった。故に偽装は簡単なのだ。董卓と同じように顔を知られていない誰かが洛陽に残り、董卓と言い張って殺されればいいのだから。

そこまで考え、賈駆は周囲を見渡した。呂布に張遼、華雄の猛将に軍師の陳宮と自分がいる。たったこれだけだが、その力がかなりのものだと賈駆は知っている。

そして、その五人が董卓の事を助けたいと思っているのだから。ならば、結末は一つでしか有り得ない。そう思い、賈駆は董卓へ視

線を向けた。

「月、心配しないで。絶対上手く行くから」

「詠ちゃん……」

「大丈夫よ。さ、早速だけど？水関には霞と華雄に行ってもらうわ。虎牢関は恋とねねが守って」

董卓の不安そうな声に笑顔で返し、賈駆はすぐに軍師の顔へ戻るとそれぞれへ指示を出す。そんな姿を董卓は頼もしく思う反面、どこか心配で仕方なかった。いつも自分のために動いてくれる親友。それが今もまた無理をしようとしていると感じたからだ。

しかも、どうも今回はそれだけで終わらない気がする。そう感じて董卓は自分の手を強く握り締める。何か力になれる事はないだろうかと。いつも自分は誰かに頼ってばかりだった。だから、何でもいいから自分がやれる事が欲しかったのだ。

（詠ちゃん達に任せるだけじゃ駄目だ。私も何かお手伝い出来る事があるはず……）

「詠ちゃん、私にも何かやれる事はない？」

「……じゃあ、いつでも逃げ出せるように準備をしておいて。まぁ、それが無駄になるようにしてみせるけど」

董卓の言葉に賈駆はそうすまなそうに返すと、最後には笑みを浮かべてみせた。それに董卓も笑みを返し頷いた。それを見て、賈駆は周囲へ視線を動かして鋭く告げる。

「いい？　この戦いは防衛戦よ。余程がない限りこちらから仕掛けたりはしない事」

「分かった」

「了解や」

「……うん」

「分かってますぞー」

それぞれが賈駆の言葉に答えていく。静かにだが、そこには明確な闘志がある。それを感じ取り、賈駆は頷いた。自分の大切な親友を守るための戦い。それが今始まったのだと、そう心から思いながら。

だが、その一方で張遼と華雄はある者の事を思い出していた。それは、この連合の事を聞けば参加するだろう者の事。そう、洛陽の民のために朝廷へ喧嘩を売ってみせた星の事だ。

（あの趙雲の事や、きっとこの話に乗ってくるはず……戦うんを楽しみになんて言ったら、賈駆っちに怒られるか。ま、こんな形ではやりあいとーなかったけどな……）

（趙雲の奴ならば、おそらく連合側に付くな。だが、それは我々と戦うためではなく洛陽の民のためにだろうが……やりきれんな）

あの時交わした約束が嫌な形で果たされると思い、やや複雑な表情を浮かべる二人。出来る事なら真実を教えて手を貸して欲しいが、それが出来るぐらいならもうやっているのだ。既に大陸中で董卓は悪人と仕立て上げられてしまっている以上、それを覆すにはかなり

の時間と労力がいる。

そして、そのための手段を講じられる程の余裕が今の董卓軍にはない。それを重々承知しているからこそ、張遼も華雄も覚悟を決めていたのだ。武人として、人として守りたいと思ったもののために戦おうと。

「この戦い、絶対負けないわよっ！」

そんな二人を現実に戻すような賈駆の言葉が部屋中に響く。それに全員が一斉に頷いた。絶望はしないと、そう言わんばかりに力強く。こうして運命の輪が動き出すのだった。

天の御遣いによって繋がれた縁が静かに結ばれ、一つの流れを生み出していく。これは正義無き戦いとは知らず、しんのすけは行く。迫る決断の時を迎えに行くように。たいりく防衛隊の絆。それがもうすぐ目に見える形になろうとしていた……

――――――

第十三話

あれからしばらく歩き、しんのすけ達は連合の集合地点近くへとやってきた。遠くに見える陣容に感嘆の声を上げるしんのすけ。星も軽くではあるがその威容に声を漏らす。シロは何か声を出す事無くしんのすけの足元で尻尾を振っていた。

そうして少しの間眺めていたしんのすけ達だったが、星が歩き出した事をキッカケにその歩みを再開する。間近に見えてきた連合の陣。その凄さを感じながら歩くしんのすけ達。

やがて、その視界に数多くの天幕が近くに見えてくる。それにしんのすけがやや見上げるように頭を動かす。星はそんな様子に小さく笑みを浮かべると、足元に気をつけろと注意を呼びかけた。

すると、しんのすけが思わず足を止めた。星はそれに気付き、同じように足を止める。シロもしんのすけの横で不思議そうに視線を彼に向けていた。

「あれ？」

「どうした？」

「あれ……もしかして……」

しんのすけの指差す方を見るシロと星。そこには、彼らの知る者達が立っていたのだった……

しんのすけ達が連合陣地へ入ろうとしていた頃、その陣地にある一つの天幕では袁紹を始めとする多くの諸侯達が顔を合わせていた。

「……で、問題は誰が全軍の指揮を執るかですわ」

袁紹のその言葉に誰もがため息を吐いた。正直に言えば、この連合の総大将などという面倒な立場は御免被りたい。だが、それを誰かがやらねばならない。それを理解した上で袁紹がこれを言ったと考えてはいる。いるのだが、その袁紹の表情はどこからどう見ても自分しかいないと言っていた。

つまり、袁紹は誰かに自分こそ相応しいと言って欲しいのだ。それを悟っているからこそ、誰もがため息を吐いたのだから。言えば、その責任を取らされる。それは損する役回りを押し付けられる事に繋がるからだ。

「華琳さん、誰かうってつけの人はいまして？」

「さてね。それは貴女が一番良く知ってるでしょ、麗羽」

曹操は内心の呆れも隠す事なく、声にそれを混じらせて返す。それはその場の誰もが同じ心境だった。やりたいくせに自分からは決してそれを言い出そうとしない袁紹へ、誰もが呆れを感じていたのだから。

いや、一人だけ立候補しようとしている者がいた。袁術だ。だが、それを張勲が何とか押し留めていた。どうも下手に矢面に立つより、影ながら正義を為す方が褒めてもらえると言って抑えているようだった。そんな袁術と張勲を眺め、孫策はつい小さく笑みを浮かべてしまう。

（単なる功名心じゃなくて、洛陽の民のために……ね。本当に変わってきてるわ）

袁術の言っている内容を聞きながら、孫策は知らず笑みを浮かべていた。以前であれば、袁紹への対抗心や名家の誇りなどでしたであろう立候補。それを民のために自分がと言うその姿に、孫策は不覚にも微笑ましいものを感じてしまったのだ。

だが、すぐに自分が笑みを浮かべている事に気付き、それを周囲に知られる事無く消して孫策は隣の者へ声を掛ける。

「ね、冥琳。これが重要懸案？」

「言うな。これが茶番だと本人以外誰もが分かっている」

孫策は眼前の光景から思ったままを小声で告げた。それに周瑜がため息混じりに返した。周瑜がここにいられる理由。それは孫策が袁術に願い出たため。自分の軍師である周瑜はかなりの知恵者。そのため、軍議に参加させて意見を出させて欲しいと頼んだのだ。それを袁術は即答で了承し、現状に至る。

そう、先程からこの話題で止まっているのだ。この軍議を始めてそれなりの時間が経とうとしているが、他の事が決まったにも関らず、解散しない原因がこの総大将の決定だと誰もが分かっている。しかし、それでも中々動く事が出来ないのも事実なのだ。

まず、孫策達のような客将という立場では袁紹への意見が出来ない。次に曹操達諸侯も意見をしたくない。出来る事なら面倒事を避け、自軍が消耗する可能性を少しでも避けたいからだ。

結局、誰もが自分の事しか考える事が出来ないのが一番の理由。誰も洛陽を解放しようなどと考えてはいない。いや、それも考えて

はいるのだろう。それでも、自軍を大幅に消耗させてまでとは思っていないだけだ。桃香だけは先程から何か言いたそうだが、その度に諸葛亮に止められていた。

「麗羽、一旦休憩しよう。ここに来てすぐに軍議に参加している者もいる。少し休めば意見も出るかもしれないぞ」

そんな中、白蓮が仕方ないとばかりにそう切り出した。正直彼女自身もそんな事を思ってはいない。だが、今は少し外の空気が吸いたかった。どこか互いを牽制し合うばかりの状況に嫌気が差したのもある。とにかく、その白蓮の意見に袁紹も一理あると考えたのか承諾した。

「そうですわね。では、一時軍議を中断しますわ」

その言葉に白蓮は頷いて立ち上がると天幕を出て行く。それに続くように桃香も、袁紹に意見出来なかった自分に憤りを感じながら席を立つ。それに追随するように控えていた諸葛亮も動き出した。その背中を見送り、曹操は小さく笑う。

「さて、公孫賛に劉備か。しんのすけの事をどこまで知っているか試してみるのも面白そうね」

「ですが華琳様、程々にしておくべきかと」

「分かっているわ。変な警戒心を持たれても困るしね」

荀?の言葉に曹操は頷き、席を立つ。そして荀?を伴って天幕から出ようと動き出した。それを見て孫策と周瑜もその場を離れようとする。そんな二人の動きに気付いた袁術が二人へ振り向いた。そ

の表情はやや疲れ気味に見える。

「ん？　孫策、どこへ行くのじゃ？」

「ちょっと外の空気を吸いにね。駄目？」

「いや、それはよいのじゃが……」

袁術がそこで困った顔になったのを見て、孫策は疑問符を浮かべた。何か困るような事があっただろうかと。それは周瑜も同じだったらしく、袁術へ不思議そうな視線を向けていた。袁術も二人が自分へ何かを尋ねたいような表情をしている事に気付き、孫策へ手招きをした。

それに応じ、孫策が耳を袁術へ近づける。すると、袁術は孫策へこう告げた。

――何故誰もこの議題を終わらせようとせんのじゃろ？

それが総大将を決定しない事を疑問視していると理解し、孫策は意外そうな表情を浮かべた。袁術がこの茶番を不毛と察していると感じたからだ。故にやや驚きを隠しながら、孫策は小さな声でこう返した。

「……そうね。いっそ言い出した本人がやればいいのよ」

「そうであろ？　ったく、麗羽め。誰ぞに名を挙げて欲しいのじゃな。これだから愛人の子は……」

「美羽様、心の声が漏れてますよー」

孫策の言葉に袁術は大きくため息を吐いて、忌々しげにそう呟く。それを耳ざとく聞いていた張勲がやや嗜めるように袁術へ耳打ちした。それに孫策は小さく笑うと、袁術へ手を振って歩き出した。

そして周瑜と共に歩きながら、先程の袁術との会話を教える。それに周瑜は小さく驚きを見せ、同時に軽く難しい顔になった。それは孫策も同じだったため、何か言う事はない。

「変に聡くなり始めたな」

「ホント。ちょっと厄介ね」

「……その割には笑っているぞ」

「だって楽しいじゃない。これで少しは張り合いが出るってものよ」

孫策はそう笑顔で言い切ると、天幕から少し離れた場所で話している白蓮達を見つけた。曹操達もそこにいて、どうやら何か共通の事を話題にしているのか、白蓮と桃香達に驚きが見える。孫策はそれだけで何を話題にしているかを瞬時に悟った。

しんのすけとの会話から、彼らが色々な場所で妙な繋がりを得ている事を知っているのもあった。しかし、一番はその勘。それが悟らせたのだ。話題はしんのすけの事だろうと。そう考え、孫策はふと思った事があった。

（劉備達はしんのすけの正体を知っているのかしら？）

天の御遣い。それを知る者がどれだけいるのか。それが気になったのだ。それに、星が自分と気が合うかもと評したのもある。故に周瑜へ目配せをした。それだけで彼女も孫策の意図を理解したのか小さく頷いた。そして、二人は桃香達へと向かって歩き出す。

「ね、ちょっといいかしら？」

「あら？　珍しい者まで来たわね」

「うん？　お前は……確か孫策だったか」

「孫策さん？　あー、袁術さんが忠臣って紹介してた人ですね」

曹操の言葉に白蓮が視線を動かし、孫策の顔を見て名を思い出すように告げた。それを聞き桃香が笑顔で締め括った。そう、袁術は軍議前の簡単な紹介の際、孫策をそう言って紹介したのだ。客将である孫策をそう言った事に周囲が軽く驚く中、彼女は内心苦笑していたのはここだけの話。

「ま、そんなとこ。それでね、劉備に聞きたい事があるんだけど……」

「何です？」

孫策の言葉に不思議そうな表情を返す桃香。すると同時に陣地の入口から騒がしい声が聞こえてきた。それにその場にいた全員が視線を向ける。

「何だ？」

「誰か来たのではないでしょうか？」

「変ね。もう参加する者は揃ったはずだけど……？」

周瑜の言葉に諸葛亮はそう問い返す。それに荀?が応じながらどこか疑問を浮かべた。桃香はそれを聞いて諸葛亮へ視線を向けた。それだけで諸葛亮は意図を理解したのか、少し考えて頷いた。

「様子を見に行ってみましょう。もしかすると何か問題があったかもしれません」

「そうだな。しかし、一体何だって言うんだろうな」

白蓮がそう言って視線を騒いでいる方へ向けた。曹操達も同じように眼差しを向け続けている。騒ぎの原因。それが何かを彼女達が知るのは、これから少し後の事となる……

「これで終わったね」

「おう。さ、姫の所に戻るか」

陣地の入口で参加する諸侯の案内などを担当していた顔良と文醜は、桃香達が最後だった事を確認するために他の諸侯達の陣も見て回り、やっと自分達の仕事が終わったと把握出来た。なので、こうして互いに笑顔で話していたのだ。

しかし、そこへ二人からすれば思わぬ者達が現れた。それに気付いたのは、伸びをしながら陣の外を眺めていた文醜だった。

「ん?　あれ……」

「どうしたの、文ちゃん」

「いや、あそこから歩いてくるのって……」

そう言って文醜はある方向を指差した。それにつられるように顔良もそちらへ顔を向けた。するとそこには……

「やはり猪々子殿達でしたか」

「趙雲！」

「おー、やっぱりぶんちゃんとがんちゃんだ」

「キャン」

「しんちゃん！？　それに……シロも元気そうだね！」

そう、そこにいたのはしんのすけ達。期せずしての再会に笑顔になる二人。だが、二人が大きな声で言ったしんのすけ達の名前を他の者も聞いていた。

それは、比較的早くに陣を展開した曹操軍の者達と最後に合流したために入口に近い場所にいた劉備軍だ。許緒は典韋を連れてしんのすけの事をキッカケに鈴々と話していたし、稟と風は諸侯を見る絶好の機会とばかりに動いていた。

楽進、于禁、李典はそれぞれの仕事を終え、星と互角と言われていた愛紗へ会いに行こうとしていたところだった。まぁ、于禁と李典は親友が動いたので共に行こうとしただけなのだが。

「ん？　今、どこからか趙雲殿達の名を呼ぶ声が聞こえなかったか？」

「え？　沙和には聞こえなかったのー」

「ウチもや」

「そうか。気のせいだったか……」

楽進は親友二人の言葉にそう返して止めていた足を動かそうとした。だが、そこへかなりの大声が聞こえた。それは鈴々の声。

――――しんのすけなのだ～っ！

それに楽進達は揃って声のした方へ振り向いた。視線の先には鈴々が嬉しそうに走って行く姿があった。それを追うように許緒が典韋を引っ張るように走って行く。それに楽進達も感化されるように走り出す。

見れば、他からも鈴々を追い駆けるように走る者がいる。それは孫呉の者だった。周泰はしんのすけとの名前を聞いてシロの事を思い出し、与えられた任務を忘れて動き出したのだ。

一方、しんのすけとの名前を聞いて、驚きのあまり逆に動けなくなった者達もいた。

「……風、聞きましたか？」

「……勿論ですよ。聞き間違える訳ないじゃないですかー」

稟はその風の言葉に頷き、空を見上げた。ようやく再会出来る時が来たと。見れば風は聞こえてくる声に懐かしさを感じているのか、小さく笑っている。それに稟は同じ思いなのだなと感じて、嬉しそ

うに微笑んだ。

しんのすけ達が陳留を去って数日後、曹操は稟と風を呼び寄せた。それは曹操がもしやと思っての確認だった。もしかすると何かの手違いや間違いなどがあったのかもしれない。そんな可能性を思い当たり、曹操は二人に会ってみたのだ。

そして、そこでしんのすけとの名前に聞き覚えはないかと尋ね、二人が星の捜し人だったと知った。それと同時に抱いていた自分の予想をそれとなく二人へ告げ、反応を窺う事も忘れなかったが。

――趙雲がしんのすけを主君のように思っていると言っていたけど、貴方達もそうなの？

それに稟と風は内心で驚いたものの、変な反応を見せてはいけないと思い、そうではないと返した。それは事実。二人にとってしんのすけは主君ではなく助けたい存在。それは星と違ってしんのすけと離れて過ごしていたためなのかもしれない。

実際、星も最初からしんのすけをそういう存在と思っていた訳ではないのだから。それを二人は知らない。だが、何となく察しはした。星は仕えるべき相手の選択をしんのすけに委ねたのだろうと。

「さて……では行きましょうか」

「そうですねー」

稟の言葉を聞いても、一体どこへとは風は尋ねない。聞くまでもないからだ。今、二人が行くべき場所はただ一つ。あの懐かしい仲間達の前なのだから……

ちょっとした出来事が起こっていた。諸侯と知り合い、縁を作っていたしんのすけ達。それが現れた事でにわかにその周囲が騒がしくなっていたのだ。

「久しぶりなのだ！」

「しんちゃん、久しぶり～！」

「おー、鈴々ちゃんもきょーちゃんもお元気そうだねって、あれ？二人はお友達なの？」

鈴々と許緒の二人と再会し、しんのすけは嬉しそうに声を上げる。だが、途中である事に気付く。彼の手は二人と繋がれていたのだが、その距離が近い事に。それを指摘され、鈴々と許緒は揃ってやや照れくさそうだが頷いた。

そんな光景を見つめ、典韋がやや疎外感を受けながらも三人の様子から笑みを浮かべていた。

（季衣も張飛ちゃんもあんなに嬉しそうにしてる。そんなに会いたかったのかな？）

そんな事を思いながら三人を眺める典韋。彼女は許緒と鈴々からしんのすけとの思い出話を聞いていた。許緒は数日しか過ごせなかったが、共に変わった遊びを教えてもらった相手であり、再会を約束した相手だと二人は楽しそうに話していたのだから。

その横ではシロが周泰と顔良に可愛がられていた。周泰がその体を抱きしめ、顔良はその頭を優しく撫でる。シロはそんな二人に嬉

しそうな声を返していた。

「シロ、会いたかったです！」

「相変わらず癒されるなぁ」

「キャンキャン」

そんなシロの後ろでは、星が文醜達から再会の喜びとこの連合への参加を歓迎されていた。

「ホント久しぶりだな。いやぁ、実は来るんじゃないかと思ってたぜ」

「ほう、猪々子の勘は中々鋭いな」

文醜の言葉に星は不敵な笑みを返す。それが口から出任せの類ではないと感じ取っていたのだ。それを聞いていた楽進は、星がここへ来た理由を察して確認を取るべく尋ねた。

「もしや趙雲殿は義勇兵として？」

「ええ。ですがもし叶うのなら、ここにいる方々の中から仕える方を捜したいと思っています」

「それなら華琳様がいいのー」

「そうやで。ウチらも趙雲はんみたいな強い人なら大歓迎や」

于禁の言葉に李典が笑顔で続く。それに待ったをかけた存在がい

た。それは意外にも楽進だった。

「やめないか二人共。これは趙雲殿が決めるべき問題だ。私達だって自分から華琳様に仕える事を選んだのを忘れたか」

そんな楽進の言葉を聞いて、こっそり再度の勧誘を考えていた文醜が小さく呻いた。袁紹が一度聞いた時、今はと言ったのを覚えていたのだ。その理由は、彼女自身が星と共に戦場を駆けてみたいと思っていたため。

一方、星はそんな周囲に改めて自分が得た縁に驚いていた。袁紹や曹操といった君主だけではなく、その配下の者達とも繋がりを得ている自分。それは、下手をすればどこへ行っても士官の道が開いているようなものだ。それがどれ程恵まれているのかを思い出し、星は小さく苦笑した。

（白蓮殿に桃香殿達といった大陸防衛隊の仲間。それに袁紹殿に袁術殿や曹操殿の有力諸侯。孫策殿という将来有望株。どこにでも行ける私は幸せ者だな）

星がそんな事を思っていると、そこに懐かしい顔がまた増えた。

「星っ！？」

「おお、愛紗ではないか。久しぶりだな」

愛紗は星の顔を見るや大きな驚きを見せた。だが、それがすぐに嬉しそうな笑顔へ変わる。星も同じように笑顔を返し、その前へ歩み出た。

「元気そうだな」

「お前もな。噂は聞いたぞ。黄巾賊との戦いでは、かなりの活躍だったそうだな？」

「あれは……まぁ、私だけではなく鈴々もだ。それに、朱里達の知恵もあったからこそだしな」

愛紗の告げた聞き覚えのない名前に、星はやはりと思い問いかけた。その者は軍師で諸葛亮と言うのかと。それに愛紗は少し意外そうな表情を見せるが頷いて肯定した。そんな愛紗へ星は名前自体は曹操達から聞いたと教える。

そこから白蓮の城を出た後、袁紹などの諸侯を見て回った時の事を簡単に話すと、愛紗もその理由に納得し最後には楽しそうに笑った。しんのすけが原因で出会っているのが大半だったからだ。

そして、愛紗はそこで足元へ視線を動かしてしんのすけを見る。その瞬間、表情がとても穏やかになったのを星は見逃さない。しかし、それを指摘する事はしなかった。桃香達の中で、しんのすけに対して一番愛情深かったのは愛紗だからだ。

それを知っているからこそ、星は愛紗の反応に言う事はない。もし最初にしんのすけが自分達ではなく桃香達と出会っていたら、今の自分の立場は愛紗がしていただろうと思っているからだ。

「しんのすけ、元気そうだな」

「え？　おおっ！　愛紗お姉さんだっ！」

愛紗の声に視線を動かし、しんのすけは嬉しそうな声を出した。それに愛紗は微笑んだままで頷いた。シロにも声を掛け、愛紗はそこでしんのすけ達へ告げた。

桃香達もいるので、自分達の陣に来て会って欲しいと。それにしんのすけ達も異論はなく、そこから動き出そうとした。だが、その時、彼らが予想だにしない声が聞こえた。

――待ってくれませんか、星、シロ、それにしんのすけ。

――会いたいのは、劉備さん達だけではないですよー。

その声にしんのすけ達は思わず足を止める。そして、まさかとの思いからゆっくりとその声の方向へ視線を動かした。

「……そんな。どうしてここにお前達が……」

星は信じられないとばかりに声を出す。しかし、その声はどこか喜びに満ちている。信じてはいた。再会出来ると。だが、微かな不安もあった。もう会えないのではないかと。そんな色々なものを吹き飛ばすような感慨を受け、星は言葉を飲み込んだ。

だが、しんのすけは星とは違い、声を出す事さえ出来なかった。目の前にいるのは忘れもしない二人の女性。この世界へ来た時、優しく時に厳しく接してくれた姉のような存在。再会を願い、笑顔で別れた相手。

だからだろうか。しんのすけが小さく頷いた。まるで何かに納得するように。その妙な雰囲気を感じ取って周囲が見守る中、しんのすけは声を上げた。相手は当然目の前の二人の女性だ。

「稟おねいさんっ！　風ちゃんっ！」

きっと喜びを表すのだろう。そう誰もが思った時だ。

――おみやげは！？

その瞬間、ほとんどの者が体勢を崩した。崩していない者は呆然と立ち尽くしている者だ。しかし、すぐに誰もが楽しそうに笑い出す。しんのすけらしいと感じたのだ。

「キャンキャンッ！」

「何、シロ？　えっ？　そうじゃないだろって？　だって、オラはお願いしたもん。おみやげよろしくって」

しんのすけの発言に文句を述べるシロ。それを理解するも反論するしんのすけ。それを見て稟も風も苦笑するしかない。そして、稟はしんのすけへ、風はシロへ近付いた。そして、その体を力一杯抱きしめた。

――相変わらずですね。でも、安心しました。

――元気そうで良かったのですよー。

その二人の言葉にしんのすけとシロも頷いて、今までの分を取り返すように抱きしめ返す。優しく、強く、想いを込めて。すると、誰もがある事に気付く。しんのすけの目元に光るものがある事に。

そんな光景に誰もが言葉を発しない。事情を詳しく知らない者でさえ、しんのすけがどんな事を思っているかをその事から容易に想像出来たのだ。

そんな視線の中、稟と風は互いへ視線を向け合うと頷いた。そのままでは少々気恥ずかしいと思ったのだ。咳払いをしながら離れる稟。風は照れくさそうに笑っている。

周囲もそんな二人の反応に理解出来るものがあったのか、しんのすけ達への視線がより温かくなった。

「良かったね、風ちゃん。でも、ちょっと意外だったのー」

「……そうだな。しんのすけ達とお二人は関係があるとは聞いていたが、これ程とは……」

「会えて良かったなぁ、しんのすけ」

楽進達は軽く驚きと喜びを浮かべ、笑みを見せながらその光景を見つめていた。彼らは街の警邏を担当しているため、迷子などを世話する事もある。それが親と再会した時と似た印象を受けたのも、その要因かもしれない。

「しんのすけが泣くなんて……意外だったのだ」

「そっか。お前と別れる時でも泣かなかったって言ってたもんね」

「それだけあの子はお二人に会いたかったんじゃないのかな？」

「シロもあそこまで甘えているのは初めて見ます」

しんのすけの話題を通して若干仲良くなった鈴々と許緒は、彼の涙を見て意外そうな表情で言い合い、それを聞いた典韋がその理由を自分なりに告げた。周泰もシロの風への懐き方にやや羨ましむような声で続く。

「趙雲、あの二人って……」

「ええ。私とかつて共に旅をしていた者達です。しんのすけとも少しではありますが、旅を共にしています」

「そうか。あの二人が郭嘉殿と程立殿か」

「まさかこんな所で再会出来るなんて……嬉しいだろうなぁ」

平然と星へ尋ねる文醜だったがその目には涙が浮かんでいる。素直な彼女としては、目の前で繰り広げられる光景に少々感じ入ってしまったのだ。それ故、意識を逸らそうとして星へ話題を振ったのだから。

それに対する星の返答を聞き、愛紗は以前聞いた名を思い出して納得していた。しんのすけを天に帰すための情報を探して別れた二人。そんな二人とこんな場所で再会出来るとはしんのすけも思ってなかったのだろう。それ故、その心境を推し量って愛紗は黙り込んだ。

顔良はしんのすけ達だけなく、稟と風の気持ちにも思いを馳せていた。故あって別れ別れになっていた者達。それが想像もしない場所で再会を果たした。きっとその気持ちは言葉に出来ない程喜びに満ちているだろうと。

これが普通であればそのまま色恋に発展してもおかしくなさそうな展開だが、しんのすけは生憎子供。そのため、どこまでいっても微笑ましいものにしかならない。だが、顔良はそこでふと思うのだ。もし仮に天の御遣いが大人の男性だったらどうなっていたのだろうと。だが、その発想はすぐに消える事となる。大声によって考え事が中断させられたからだ。

――――しんちゃんっ！？

その大声に全員が視線を動かした。それは桃香が出したもの。更に後ろから曹操や孫策達も現れれば、違う意味で騒ぎが大きくなる。

「桃香ちゃん！　それにもうちゃんとじゅんちゃんに、さくのおねいさんとしゅーのおねいさんまでいる！」

「私もいるだろ！」

しんのすけが挙げた名前の中に自分が含まれていない事に気付き、白蓮はやや怒り気味に突っ込んだ。それに星や愛紗などは懐かしさを感じて笑った。そんな再会早々怒った白蓮だったが、しんのすけの目に涙が浮かんでいる事に気付いて少し驚いた表情に変わる。

「って、しんのすけどうした？　どこかぶつけでもしたか？」

「白蓮殿、しんのすけの前にいるのが以前話した者達です」

星がそんな白蓮へ納得出来るように一言添えた。それだけで白蓮も納得した。自分の所へ来る前に別れた二人と再会した。それでしんのすけが涙したのだろうと。だが、自分の時はそんな事はなかったと思って微かに凹む白蓮だった。

「稟、風、再会出来て良かったわね」

「はい。ここへ連れて来て頂いた華琳様には感謝しかありません」

「このご恩は忘れないのですよー」

曹操は稟と風の目を見て優しく笑みを浮かべながらそう告げた。そこには、覇王ではなく一人の人としての顔があった。それに稟も

風も少しだけ意外そうな表情を見せるも、すぐにそれを笑みに変えて返事をする。

「何言ってんのよ。見出してもらったんだからそれが当然でしょ。まぁ、でも……良かったじゃない」

荀?はそんな二人へいつもの口調で告げるも、最後には顔を背けてそう締め括った。それに曹操達は違った意味の笑みを浮かべる。

「騒ぎの原因はしんのすけかぁ。納得だわ」

「……改めて見ると恐ろしい人脈を持っているな」

楽しそうに笑う孫策とは対照的に、周瑜は小声で警戒するように呟いた。しんのすけが曹操と繋がりを得ているのは甘寧からの報告で知ってはいた。だが、それが単なる知り合いとは呼べないものだと気付いたのだ。

しかも、その繋がりの数も問題だった。自分達だけでなく、桃香達や白蓮。曹操達に袁紹達と袁術達。つまり、この連合はしんのすけの知り合いばかりなのだ。それに思い当たり、周瑜は密かに思う。天の御遣いとしての力は、これに現れているのではないかと。

そんな周瑜と同じ感想を抱く者がいた。それは桃香の後ろで控えている少女。諸葛亮であった。

(桃香様から話は聞いていたけど、まさか本当に子供なんて。でも、この繋がりはある意味凄いな。この子、本当に天の御遣い様だ)

名だたる諸侯達と親しげに話す事が出来る子供。それが諸葛亮には天の御遣いとの名を信じさせる要因となった。すると、その視線

がしんのすけと合った。

「はわっ！？」

「お？　知らない子だ。桃香ちゃん、その子は誰？」

「あ、紹介するね。朱里ちゃん……えっと諸葛亮って言って、私達の仲間で軍師をしてくれてるの」

「ほ～ほ～……ん？　じゃ、前にじゅんちゃんが言ってたしょーがっこーさんか」

しんのすけの告げた名前に全員が一瞬不思議そうな顔をした。だが、すぐに言い間違えていると察して一斉に突っ込んだ。諸葛亮だと。それにしんのすけが驚きを見せ、周囲へ告げた。

――おおっ！　みんな、息ぴったりだね！

それに誰もが大なり小なり笑い出す。寄せ集めの自分達。それにも関らず、こうして同じ事を思い告げた他愛もない出来事。それが何故かとても意外で、そして面白く思えたのだ。本来ならばこんな和やかな雰囲気ではいけないのだろうが、それでも今ぐらいはいいだろう。

そんな風に誰もが思い、一瞬だがこう思ってしまった。本当は誰もがこんな風に一緒になって笑い合えるのだと。しかし、それが現実的には難しいと思い、ただの妄想だとほとんどがすぐに笑い飛ばす。一部はそうではなかったが、それでもどこかで理想に過ぎないと思ってしまう。しんのすけと桃香を除いては。

そこへ袁紹や袁術までも現れた。いつまで経っても戻ってこない

桃香達を呼び戻すために。袁紹は人をやろうとしたのだが、文醜も顔良も戻ってこなかった事を思い出したため、仕方なく自分で動いたのだ。袁術は少し動きたかったのもあったので、自分から動いただけ。

そんな袁紹達を追って涼洲は馬騰の名代である馬超も現れた。騒ぎの原因と桃香達が戻らない理由が気になったのだろう。だがその視線がしんのすけを捉えると、不思議そうな表情を見せた。何故こんな所に子供が、と、そんな気持ちがありありと浮かぶような。

更にそこへ、騒ぎを聞きつけた夏侯姉妹や孫権達まで現れた事で騒ぎは最高潮に達した。しんのすけ達を知る者達は、誰もが揃ってその再会と無事を喜び、知らぬ者は周囲に促され自己紹介をさせられた。そんな、まるで第二の軍議会場とでも呼ぶような状況になり、しんのすけはその中心で思わず叫んだ。

――そんなにいっぺんに言われても、オラ、分かんないぞっ！！

その心からの叫びに、その場の全員が大いに笑ったのだった……

――――――

回までの流れをしっかり描こうと思いますので。

第一話

しんのすけ達との再会に沸く連合の集合場所。今はその熱も落ち着きを見せ、改めてしんのすけが知らない者達が自己紹介をしていた。

「わ、私は諸葛亮。字は孔明でしゅ。よろしくお願いします、しんのすけさん」

「わ、私は鳳統。字は士元って言います。よ、よろしくお願いしましゅ、しんのすけさん」

「かんでたけどだいじょーぶ？」

大勢に見つめられながらの名乗り。しかも相手は天の御遣い。そう思い緊張から噛んでしまう諸葛亮と鳳統。それを聞いて心配するしんのすけ。それに二人が余計恐れ多いとばかりに大丈夫と返そうとしてまた噛んだ。

だが、しんのすけは本人達が大丈夫と返そうとしたので気にしないようにしたのだろう。ならばとばかりに頷いて口を開いた。

「えっと、オラは野原。名はしんのすけ。あざなはないぞ。よろしく、えっと……」

名乗り返し、いざ名前を呼ぼうとするしんのすけだったがその言葉が詰まる。それに二人の少女が理由に気付いて小さく微笑んだ。自分達の名前が覚え難い。

そう桃香達から聞いていたため、すぐに理由に気付いただけではない。その様子が歳相応の子供にしか見えなかった事も原因だ。無

意識に笑みを浮かべた事で緊張も解れ、二人は今度は噛む事なく告げる。

「私は諸葛亮だから……しょーちゃんでいいですよ」

「私も鳳ちゃんで構わないです」

「ほーい。じゃ、オラはしんちゃんでいいよ。よろしく、しょーちゃんとほーちゃん。あれ？　そーいえば二人共しゃべり方かたいね」

二人から愛称を提案され、しんのすけは嬉しそうに呼ぶものの、二人の言葉遣いに気付いて小首を傾げる。それに二人は、しんのすけの事は普通の子供扱いしなければならないとの事を思い出し慌ててこう返した。

初対面の相手には丁寧な言葉遣いを心掛けるから。故に気になったのなら変えるとそう告げたのだ。そう、仕官してある程度した時、桃香達が話してくれた天の御遣いの存在。二人はそれを聞いて驚いたのだ。

それは、天の御遣いを桃香達は利用しようとしなかった事。それを聞いた二人はその決断をとても愚かで尊いと感じた。子供であるしんのすけ。それを利用して乱世を終わらせるなど、とてもではないが大義はない。天の御遣いであろうと子供は子供だと。

そう捉え、きっぱりとその利用価値を捨てた桃香。そんな彼女に二人は主君として選んで間違っていなかったと改めて思わされたのだから。

そんな事を思い出しながらの二人の説明を聞いて、周囲のある程度の者達は納得したがしんのすけの正体を知る者達は揃って悟る。それは、桃香達はしんのすけが天の御遣いである事を知っていると。

故に面白いと思って笑う。それを知りながらも周囲に隠そうとする桃香達に。

そうして二人の軍師が紹介を終えたのを見計らって、一人の女性が歩み出た。ポニーテールの凛々しい女性。彼女は純粋な興味からしんのすけを見ていたのだが、並み居る諸侯を相手に平然としているその様子に感心した。

故に自分も知り合っておくべきかと思ったのだ。何か普通の子供ではないと思わせるには、その雰囲気は十分だったのもある。そんな事を思いながら彼女はしんのすけへ声をかけた。

「ちょっといいか？」

「お？」

しんのすけは声のする方へ視線を動かし、女性の顔を見つめた。そして一度頷くとこう告げる。

――おねいさんびじんだけど、オラと同じで眉毛太いね～。

それに周囲が女性を一斉に見つめ、やや間を置いて頷いた。それに女性はやや頬を赤めて両手で顔を隠す。

「そんなにジロジロ見るな！　お前もいきなり言う事がそれか！」

「あのな、馬超。お前はまだマシさ。私なんかは、美人だけどどこか残念だって言われたんだぞ」

そんな項垂れながらの白蓮の言葉に周囲が一瞬静まり返る。そして直後大笑いが巻き起こる。そう、しんのすけと出会った者達は大

抵聞いていた白蓮の残念さん話。それを思い出した者達はそれで笑い、知らぬ者は項垂れる白蓮の様子で笑う。

馬超もその白蓮の言葉に、自分は本当にマシだと思えたので笑っていた。しんのすけはそんな周囲に感化されあの高笑いをする。それに懐かしさを感じるのは白蓮や桃香達に稟と風。故に彼らだけは、その笑みに他の者達とは違う色が混ざった。

「……さて、じゃあ改めて。あたしは馬超だ。字は孟起」

「あちょーさん？」

その間髪いれずのしんのすけの言い間違いに、再び周囲が笑う。馬超は名を間違えられると予想していたのか、どこか苦笑してこう返した。

「馬超だ。覚えられないなら……何か呼び易い呼び方を考えてくれ」

「う～ん……」

「しんのすけ、馬超は私と同じで馬に乗るのが上手いんだ。だから名前にちなんで馬のお姉さんはどうだ？」

中々思いつきそうにないと思い、白蓮が助け舟を出す。それに馬超はそれならと頷き、しんのすけを見た。しんのすけも本人がそれで納得するならと承諾。こうして、馬超の呼び方も決まったところで星がある事に気付く。

――ところで、いつこの連合軍は動き出すのですかな？

それに先程の軍議に出ていた者達は揃ってため息を吐き、参加し

ていなかった者達はそんな主君達を見て不思議顔。しんのすけは、それにかつて見た白蓮の城での軍議を重ねていた。何せ、白蓮の表情がその時とそっくりだったのだ。

「ね、白蓮ちゃん」

「何だ？」

「またみんなで口げんかしてるの？　みやこのみんなをお助けしないの？」

しんのすけのその言葉に誰もが返す言葉を失った。その言葉が洛陽の民達の言葉に聞こえたのだ。責めるのではなく、純粋な疑問。何故すぐに動いてくれないのか。助けてくれるのではないのか。そんな風に言いながら、誰もが縋るような視線を向ける民達を幻視した。

「……実はな、まだ総大将が決まらないんだ」

そんな中、白蓮が意を決して告げた。事実を教えたのは隠し事が苦手な彼女だからだろう。周囲がその言葉からある程度軍議の様子を想像する中、しんのすけはそれに頷いて袁紹を見つめた。

それに袁紹も気付き、何事かと思って見つめ返す。周囲も不思議そうな表情でしんのすけを見つめた。それに構わず、しんのすけは袁紹へこう言い切った。

――――これ、よいしょーさんが集めたんだよね？　なら、よいしょーさんがやったら？　こーゆーのは、言い出しっぺがにんじんをとるって父ちゃん言ってた。

それに全員が疑問符を浮かべるも、唯一稟だけはその言葉の意味を理解し、苦笑しながらそんな周囲へ今の言葉を説明した。

「しんのすけは、董卓を倒そうと言い出した袁紹殿が責任を取ってこの連合の総大将をするべきだと言ったのです」

「まぁ、確かにそれが無難でしょうねー。名門袁家が総大将なら誰も文句はないでしょうしー」

稟の言葉に続くように風が締め括る。それに周囲も同意を示し、袁紹へ視線を向ける。袁紹はそんな視線に軽くたじろくも、負けないとばかりに気を取り直してしんのすけへ問いかけた。その表情はどこか嬉しさに満ちていたが。

「つまり、しんのすけさんは私が相応しいと？」

「お？　うん、そだよ」

言い方は少し気にいらないのか、袁紹はややため息を吐いたがすぐに上機嫌で高笑いを上げた。それが御遣いに任命されたとの思いからの行動だと理解し、顔良と文醜に白蓮は項垂れた。他の者達はややうんざりしていたが、袁紹がしんのすけの言葉に喜んだのを見て不思議に思っていた。

そう、白蓮と顔良達以外は、誰も袁紹がしんのすけの正体を知っているとは考えなかったのだ。曹操のように袁紹をよく知る者達は子供だろうと自分を指名すればいいのかと呆れ、他は単純な性格だなと改めて認識するのだった。

だが、しんのすけはそんな袁紹に頷くと満足そうに笑ってこう言った。

「任せろって事だね。さすがよいしょーさん！」

「お～っほっほっほ！　って、さっきから流してましたけど、よいしょーではなく袁紹ですわっ！」

そこで高笑いが止まり、袁紹が答えた。同時に誰もが軽く笑った。ある者達はよいしょーさんが袁紹の呼び方だと気付いた事で、残りは袁紹を手玉にとっていると思った事で。

こうして袁紹が表面上は仕方ないとばかりに総大将をする事となり、そこからそれぞれに別れて動く事となった。しんのすけは桃香達を始めとするそれぞれから軽い誘いを受けるも、星と共に話す事があると断った。稟と風も積もる話があるが、今は曹操の軍師。なので、また後でと告げて去って行った……

「……星お姉さん」

「決まったか？」

誰もいなくなったのを見計らい、しんのすけは星へ声を掛けた。それに星も時が来たかと思い、やや真剣な表情を返す。

「うん。オラ、もうちゃんをお助けしたい」

「……曹操殿、か。理由を教えてくれるか？」

「稟お姉さんや風ちゃんがいるっていうのもあるけど、一番はもうちゃんが寂しそうだからだぞ」

「いつか言っていた王の孤独だな……」

しんのすけは星の言葉に頷き、自分が友達になってその寂しさを減らしてやりたいと返した。決して無くすと言わないのは、しんのすけ自身がそれが難しい事を知っているからだ。今もシロに星がいて、多くの者達と知り合った。それでも、それでも寂しいと思う事がない訳ではない。

故に、しんのすけは曹操の孤独を少しでも和らげたいと思ったのだ。何も考えず、何も飾らず過ごせる。でも一人ではない時間。その相手役に自分がなってやりたい。自分にとってのシロのような存在に。

しんのすけのそんな言葉を聞いて、星は分かったと頷いた。曹操を助けたいと考えたしんのすけ。それが直感ではなく過ごした時間から来るものだと理解した。天の御遣いとしてではなく、野原しんのすけとして助けたい。そうとも取れる理由を聞いて、星は自分の愚かさを感じていた。

（私はこんな事も忘れてしまうとはな。しんのすけは言っていたではないか。自分は自分。御遣いなどではないと）

最初から天の御遣いとしての判断など下すはずがなかったのだ。そう思い、星は苦笑する。もし天の御遣いとしての判断を下したのならば、それはあの盗賊との一件。この大陸を救いたいと告げたあの時こそ、それだったのだろうと。

そう考え、星は歩き出す。しんのすけとシロを連れて曹操達の陣へと向かうために。今、しんのすけと星の道は決まった。たいりく

防衛隊の誓いを立てた最初の顔ぶれ。それがまた揃う道へと……

「そう、私に仕官したいと言うのね」

「はっ、この趙子龍の力を乱世を止めるためにお使いください」

ここは曹操の天幕。そこに曹操軍の主だった者達が揃っていた。星はそこで曹操に臣下の礼を取り、そう告げた。それは、曹操の力になるのではなく、あくまでもしんのすけを天に帰すために力を振るうという言外の宣言。それをすぐさま理解したのは、稟と風のみだった。

夏侯惇や許緒などはそれに気付くはずもなく、夏侯淵さえそれが曹操のために働く事を意味すると捉えていたのだから。しかし、荀?と曹操はそれが意味する事に気付いた。

故に曹操は星の言葉に一瞬だけ眉を動かす。だが、それでも星が手に入るのならいいと思ったのだろう。しんのすけはそんな星の傍で正座していた。シロも同じくお座りの姿勢で隣にいる。

しんのすけとシロの中での礼儀正しい姿勢。それがそうだったのだ。曹操はそんなしんのすけ達へ視線を動かし、小さく笑う。しんのすけはそんな曹操の視線に気付き、嬉しそうな笑みを返す。それに軽く苦笑し、曹操はしんのすけへ尋ねた。

「まったく……それでしんのすけ、貴方も私に従うと考えていいのかしら?」

「お？　よく分からないけど、オラと星お姉さんは一緒にもうちゃんをお助けするって決めたから。だからここにいるんだよ」

「そう……ならば、趙雲、しんのすけ」

「キャン」

「あら、ごめんなさい。シロもそうだったわね。では、趙雲、しんのすけ、それにシロ」

曹操が二人へ何かを言おうとした瞬間、シロが忘れるなとばかりに声を出す。それに曹操達は小さく笑い、表情を和らげた。しかし、曹操は軽く謝るとすぐに表情を覇王のそれへ戻した。

「はっ！」

「ほい！」

「キャン！」

その星以外の返事に誰もが内心で微笑ましいものを感じる。子供と犬が真剣な表情で返事をしているのだ。だが、それでも曹操は表情を凛々しいままに告げた。

「その全てを私のために捧げなさい。……本当なら歓迎会をしたいところだけど、この状況じゃ無理ね。この戦が終わったら城に戻って本格的にやりましょう」

だが、最後には優しい声でしんのすけ達を歓迎するのを忘れない。それに周囲も頷き、こうしてしんのすけ達は曹操軍の一員となった

のだった……

進軍する連合軍。あの後、総大将となった袁紹が各軍に通達したのはこれだけ。華麗に優雅に進軍せよ。それを見た諸侯達が呆れて何も言えなくなったのは言うまでもない。

「ね、華琳ちゃん」

「何かしら？」

「ごーかくさんってどんな人？」

「合格じゃなく董卓よ。それが誰も知らないの。顔さえ分からず、ほとんどの事は闇の中」

今、しんのすけはあの赤い服に黄色の半ズボンを着て華琳と同じ馬に乗っている。彼がここに来た時の格好だ。今まではそれが目立つからと庶民と同じような服装をしていたのだ。

それを初めて見た華琳達の反応はさまざまだったが、共通していたのはそれが実に似合っていると思った事だった。そんな中、しんのすけが華琳へ頼んだ事があった。それは旗を作って欲しいという事。

あの戦国で見た青空に白い雲の旗印。それと同じような物が欲しいとしんのすけは告げたのだ。その理由を話し、華琳達は一様に納得した。子供故に武人の証へ憧れたのだろうと。

それを面白がった華琳はしんのすけへいつか旗を作ってやると約束した。それにしんのすけは嬉しそうに頷き、その旗についての案はもうあるからと返して周囲を苦笑させた。無論、それがその話で出た旗だろうと誰もが思ったからだ。

馬には、最初星と共に乗るといいと誰からも言われたのだが、しんのすけは天の御遣い。故に星がこう言ったのだ。君主である華琳と共にいるのが妥当ではないかと。

それは、しんのすけが華琳と友人になりたいと考えているから。それを知るからこその星の提案だった。だが、周囲もそれに納得したのかそれ以上何か言う事はなく、こうして、しんのすけは表向きは華琳の傍付きになった。

そう、華琳達はしんのすけが天の御遣いだともう知っている。それは、華琳が三人を迎え入れた後の事だ。

そこで華琳の口からしんのすけが予言にあった天の御遣いだと告げられた。それには星も驚いたが一番驚いたのは季衣と流琉だった。何せ、二人はその前にしんのすけと友人になっていたのだ。流琉は季衣と通してしんのすけの事を聞いていて、その素直さと可愛さを気に入り、迷う事無く友人となったのだから。

そんな彼が天の御遣いだと聞いて、二人は恐れ多いと思ったのだがしんのすけ自身はそれを気にしないで欲しいと告げた。自分は自分だからと。季衣には今まで通り。流琉には季衣と同じような接し方でいいからと返したのだ。

――オラ、季衣ちゃんや流琉ちゃんと同じだぞ。お友達だし、仲良くしよー。

――しんちゃん……うん！

――本当に不思議な子だね、しんちゃんって。

そう二人に笑顔を返され、しんのすけはいつもの高笑いを返して周囲を呆れさせながらも笑いを取ったのだ。

それに前後して、星は仲間となったからと全員に真名を預けた。それに返礼として華琳が真名を預けると、それに追随するように全員が預けてきた。それでも星がそれを呼ぶ事に躊躇いがないのは、心から仲間として受け入れられたと感じる事が出来たからだろう。

だが、当然しんのすけには預ける真名がない。そこで星達がしんのすけは名前が真名と同じだと告げると、一様に周囲が驚きを見せた。華琳さえそれは予想外だったらしく、しんのすけの態度に感心した程だったのだから。

それは、かつて星達三人が抱いた感想と同じ。真名に等しい名を誰にでも名乗り、呼ばせる。それはこの大陸で考えれば、相手に対する最上位の信頼を意味する。天では誰もがそうしていると知り、華琳はそんな天の考え方に理解を示したのだ。その生き方や天晴れと。

そして、しんのすけへも真名は預けられた。そこでしんのすけがシロにも預けてやって欲しいと告げると、季衣や流琉は笑顔でそれを承諾し、凪達三人も微笑みながら頷いた。春蘭と秋蘭は少し戸惑いがあったが、稟と風が、シロはしんのすけの家族も同然で自分達も預けたと告げると苦笑しながら預けた。桂花はどうしようかと迷っていたようだったが、華琳が面白いとばかりに預けるのを見てそれに続いたのだった。

そんな事を頭の片隅で思い出しながら、華琳は董卓の事を考えていた。だが、そこへとても場違いな感想が返ってきた。

「おー、なんかカッコイイぞ」

「カッコイイって……まぁ、当事者以外にはそう思えるのかしら。でも、実際戦う私達には厄介でしかない。どうしてか分かる？」

しんのすけの他人事全開の言葉に軽く呆れつつも、華琳はしんのすけへ問いかける。その声はどこか先生が生徒にするような響きがあった。しんのすけはそれに考え込むのだが、出て来た答えは意外と的を射ていた。

――――誰がとーたくさんか分からないから？

その答えに華琳は及第点をやる事にした。不十分ではあるが、子供が出したにしてはちゃんと本質を捉えていたからだ。華琳はしんのすけへ軽い笑みを返し、それもあると告げる。だが、ちゃんと理解をさせるために説明をした。

何も情報がないのは、作戦を立てる上で非常に困る。性格や好みなどの個人情報があるだけで、どんな手段を好みそうか、またどんな事が苦手かを把握して動く事が出来るのだから。

「董卓がどんな人物か分かれば、それに応じた行動が取れるの。まぁ、傍にいる軍師の事もあまりよく分かってないから一概には言えないけど、その人物を知っていればどんな手段を好み、また嫌うかが分かる。なら、それを利用すれば有利に事を進める事も出来るかもしれないのよ」

「えっと、よーするにとーたくさんを知ってるとラク出来るかもって事？」

「あら、意外と要点を押さえた答えを出したわね。その通りよ」

しんのすけの言葉に華琳は嬉しそうな笑みを見せて、その頭を軽く撫でる。それにしんのすけはにやけた顔を返し、華琳を苦笑させた。その隣では、桂花がそんなやり取りを聞いて妙な顔をしていた。

「ホント、妙に利口なのよね。しかし、天の御遣いが華琳様の元に、か。これを利用出来るか否かで言えば……」

桂花はそう呟いてため息を吐いた。そんな事は出来ないと瞬時に判断したのだ。華琳が子供を利用して覇道を進むはずはない。そんな事をすれば、周囲からどう思われるかは容易に想像出来るからだ。それに天の御遣いの存在など使わずとも、華琳ならば天下統一を成し遂げるだろうと。

それに華琳は、今もしんのすけを天の御遣いではなくただの変わった子供としか扱っていない。その理由は一つ。その異常性を周囲に理解させる事がし辛いからだ。そう、星も稟も風もまだ隠しているのだ。ヘルメットにフィギュアといった天の物を。

それを教えれば、しんのすけが天の御遣いと民達に信じ込ませる事を容易としてしまう。それは、その存在を利用させる可能性を大きくさせる事に繋がる。そして、それは三人にとっては絶対に許せない事だからだ。

「桂花、どうした？」

「何やら難しい顔をしているな」

そんな事を知らず、桂花がしんのすけの扱いに頭を悩ませていると、春蘭と秋蘭が声を掛けた。それに桂花は言葉ではなく視線で応えた。二人はその視線を追い、その原因を察した。

「何だ。しんのすけの事で悩んでいたのか」

「何だとは何よ。天の御遣いなだけじゃなく、劉備や公孫賛とも深く繋がっているのよ。かなり厄介な奴だって思わないの？」

「思わん。天の御遣いだろうとなかろうと、あいつは華琳様を王と評したのだ。思えば、あの時にあいつは華琳様の傍に来る事が決まったのかもしれん」

春蘭はそう平然と言い切り、笑みを浮かべた。それに秋蘭も頷き、桂花を見つめて告げた。

「姉者の言う通りだ。それにしんのすけは御遣いとしてではなく、あくまで人として星達や劉備達からも真名を預かったらしい。先程その経緯を軽く聞いたが、中々どうして大したものだ」

「ま、まぁ……私も風から聞いたからそれは認めるけど」

先程風から聞いた思い出話。それは桂花としては、しんのすけを詳しく知るための情報収集だった。考え方が華琳よりも桃香よりと思っているしんのすけ。その事をはっきりさせ、桂花は華琳との思想の違いを少しでも無くそうとしたかったのだ。

だが、それをどこかで気付いていた風は桂花がしんのすけへの警戒心を抱かない部分しか話さなかった。つまり、あの盗賊との一件での決意は言わなかったのだ。それは、それが華琳寄りではなく桃

香寄りの考えと風が理解しているからこそ。それを言えば桂花がしんのすけへ変な影響力を与えてしまう。そう判断したための処置だった。

――しんちゃんは自分から変わっていく事が望ましいですからねー。

それが風と稟の共通した考えだった。誰かが意図して影響を与えるのではなく、あくまで自然に関る中で自発的に変化していく事が、しんのすけにとって一番望ましい成長。そう風達は考えているのだ。

それだけは華琳と言えど変えさせるつもりはない。二人にとって、華琳はしんのすけを早く戻してやるために見つけた理想の主君でしかないのだ。全てにおいて優れ、今後訪れるだろう群雄割拠の時代を切り抜けていくだろう野心と才能を持つのだから。

そう、稟と風は華琳へ仕官した理由。それは単純に旅が困難になったからだけではない。実際情報を求め、旅しながら考えた結果、見つけ難い鏡を探すよりもまず乱世を終わらせる事で一致したのだ。

そして、現状で乱世を治める力を一番有しているのは華琳と判断した。だから仕官した。それは、しんのすけのための決断。早く乱世を終わらせ、安全となった大陸から鏡を見つけて天へ帰してやりたい。そのために少しでも早く大陸を平和に出来る勢力へ手を貸そうと。そのために稟も風も華琳から呼び出された際、その才を見せる事で側近となったのだから。

確かに華琳の人柄に対しても敬意は払っているし、尊敬出来る部分もある。しかし、二人が仕官を決めたのはしんのすけが一番の要因だったのだ。そんな事を知るはずもない桂花へ、秋蘭は更に続ける。

「それに、心配せずともしんのすけは裏切りや騙す事などしないさ。劉備や公孫賛もそれを出来るとは思えんしな。逆にやってみせれば褒めてもいい」

「……そうね。確かにそれは同意するわ」

秋蘭の笑い混じりの声に桂花はそう返した。桃香達の性格は黄巾の乱で把握し、白蓮はしんのすけ達からの話で把握した。共に卑怯な真似は出来そうにないと。つまり埋伏の計は使えないだろうと判断したのだ。

それにしんのすけの性格は、あの時の数日間でほとんど理解したと言ってもいい。ただし、桂花はしんのすけの本性をまだそこまで知らない。それでも、多少大人の女性にだらしない部分はある事は知っている。だがそれを見ても、桂花は従来のような強い嫌悪感を抱く事は無かった。

それは、やはり下手に隠さない事と言い訳しない事。何より一番は子供だからだ。しんのすけが秋蘭や凪にデレデレするのを見ても、確かに呆れはするが怒りは湧かない。大人の男であればそこに性欲が関連するのだろうが、子供であるしんのすけはそれがない。

純粋に、綺麗だから可愛いからと反応しているに過ぎないのだ。故に、しんのすけは相手が誰であってもそういう反応を示す事がある。華琳の微笑みや風の軽い冗談などで。

（ま、大人共よりはマシね。いっそ、あいつらもしんのすけみたいに……どちらにしろ不潔か）

桂花はそう結論付け大きくため息。そんな彼女を見て秋蘭は苦笑する。一方で春蘭は、華琳からある事を告げられていた。

「張遼と呂布を、ですか……」

「そうよ。今回の戦で相手側にいる将の中で私が欲しいと思う者達。それを何とかして手に入れたいの」

華琳がそう言うと、彼女を背にして軽く眠りかけていたしんのすけが目を覚ました。聞き覚えのある名前が聞こえてきたからだ。

――――え？　ちょーのお姉さんとセキトのお姉さん？

その言葉に華琳と春蘭が疑問符を浮かべた。しかし、それを尋ねる前に後方で控えていた星が告げる。

「張遼殿と呂布殿でしたら、我々は一度洛陽で会っています」

「何だと？」

「そう。で、貴女から見てどうかしら、星」

「そうですな。両者共にかなりの武人。特に呂布殿は、私も一人では無理でしょうな」

星がそう答えると華琳は何かを考え込んだ。張遼と呂布。官軍で名を轟かせる武将。それを何とかして手に入れたい。どうしてそこまで華琳が二人に執心なのか。それは一度華琳が二人に会っているためだ。

黄巾の乱の後、張角を討ち取った功績を称えるために朝廷からの使者として陳留に来た者達。それが呂布と張遼だったのだ。実はそこには陳宮もいたのだが、彼女の事は華琳の中ではそこまで大きな位置を占めていなかったりする。

「……星、張遼ならばどう？」

「私に任せて頂ければ何とかしてみせましょう」

「なっ！？　おい、星！　元々は私が受けたお話だぞ！」

星の告げた内容に春蘭は不満を述べる。だが、そんな春蘭へ星は不敵な笑みを浮かべてみせる。そして、こう言った。自分は以前張遼と出会った際、交わした約束があると。それに春蘭は返す言葉に困る。律儀な性格をしている彼女にとって、約束を破らせる事はしたくないのだ。

そんな春蘭を見て、星はそれなら呂布を相手にすればいいと続ける。自分が呂布より実力が下であろう張遼を引き受けるので、華琳の懐刀である春蘭が一番の強敵を相手取ればいいのだと。

それに春蘭は成程と納得するも、さすがに一人では呂布を相手に出来ないと判断し、やや困った視線を星へ向けた。それに星が真剣な眼差しを返して頷く。その意味を理解した春蘭は嬉しそうに頷き返す。呂布の相手を春蘭に任せるだけではなく、星も手伝うとの気持ちが伝わったのだ。

それだけではない。互いが互いを信頼しているとの思いも感じられたのだ。あの数日間での手合わせで築いた信頼。それが真名を預け合った事で今や更に強くなったのだと。

「では華琳様、呂布は私にお任せください」

「いいけど、一人で大丈夫なの？」

「それについては心配いりません。な、星？」

その春蘭の言葉に星が頷いて告げる。心配せずとも秋蘭と自分が援護に入ると。更に途中から話を聞いていた秋蘭が、季衣や流琉などもいるから最悪それで何とか可能にしてみせると告げた。

しかし最後には、呂布相手では下手をするとそれでも全員失う事になるかもしれないと、そうしっかりと釘を刺すのを忘れない。それに華琳は仕方なく、場合によっては呂布を手に入れるのを諦めるかと考え始めるのだった……

日も暮れ始め、進軍はその場で止まる事になった。そしてどこも天幕などを張り出した。しんのすけは忙しく働く兵士達に混じって荷物を運んでいた。とはいえ、彼に運べる物は小さな物しかない。それは華琳の食事だ。野営する事になったのを受け、しんのすけは華琳へ自分は何をすればいいのかを尋ねたのだ。

それは幽州での日々などからの発言。働かざる者食うべからず。その言葉を教えた稟は、そこで星から聞いた幽州での話に笑みを零したのだ。そんなしんのすけの言葉に華琳はやや驚くものの、ならばと出した指示がそれだった。

――なら私の食事を天幕まで運んで頂戴。貴方の分は私が運ばせておくから。

しんのすけはそれに返事を返し、今のように動いていた。華琳のいる天幕を目指し、しんのすけは歩く。その途中、シロと戯れる風と凪を見つけてその足を止めた。

「お？　風ちゃんと凪ちゃんだ。シロと何してるの～？」

その声に風達が振り向き、しんのすけへ視線を向けて笑みを浮かべて歩き出す。それに呼応するように、シロはしんのすけの傍へと駆け寄り、嬉しそうに声を出した。

「キャンキャン！」

「お、シロ嬉しそうだね。風ちゃん達と遊んでたの？」

「まあ、そんなところだ。後、ここで稟様と沙和達を待っている」

「おや、それはしんちゃんの分ですかー？」

凪がシロの頭を軽く撫で、そう柔らかな笑みで告げる。風はそれに頷いて、しんのすけの手にした物に気付いた。だが、それがどこか子供用の量には思えず、やや不思議そうに問いかける。それにしんのすけは首を横に振って否定した。

「違うよ。華琳ちゃんの分だよ」

「華琳様の？　では早く持って行った方がいい。華琳様もしんのすけを待っているだろうからな」

「おおっ、そうだね」

凪の言葉にしんのすけは華琳も空腹だろうと思い、頷いて歩き出そうとした。だが、それに風が待ったをかける。

「待ってください、しんちゃん。今日は風と凛ちゃんの三人で一緒に寝ませんかー？」

「おー、風ちゃんと凛お姉さんからのお誘いだぁ。じゃ、後でお邪魔するぞ」

「はい、待ってますよー」

手を振ってしんのすけを送り出す風。凪はしんのすけの言葉に小さく微笑み、風と同じように手を振った。シロも見送るように声を出し、それを背に受けながらしんのすけは再び歩き出す。

すると、今度は沙和と真桜に出会った。二人も食事を手にしているので、凪達の元へ行くのだろう。しんのすけはそう思い、通り過ぎようとした。足を止めさせると、風や凪の食事が遅くなると考えたのだ。だが、そんなしんのすけに二人が気付いた。

「あれ？　しんちゃん、どこ行くの？」

「お、食事まだやん。良かったら、ウチらと食べるか？」

「うんと、これ華琳ちゃんのご飯なんだ。オラの分は華琳ちゃんが用意してくれてるから、ごめんなさい」

しんのすけの言葉に二人も納得し、呼び止めてすまなかったと去って行く。だが、今度は一緒に食べようと言われたので、しんのすけは嬉しく思い元気良く了解の返事を返した。

それから華琳の天幕につくと、既にそこにはやや量の少ない食事が用意されていた。そして華琳だけではなく、春蘭と秋蘭もそこにはいた。その二人の前にも食事が既に置かれている。

「あれ？　春蘭お姉さんに秋蘭お姉さんもいるんだ」

「ええ。二人も一緒で構わないでしょ？」

華琳の言葉にしんのすけは迷う事無く嬉しそうに頷いた。そんな反応に三人は笑みを浮かべる。だが、そこで春蘭が何かを思い出してしんのすけへ告げた。

「そうだ。しんのすけ、季衣達が一緒に寝ないかと言っていたぞ。眠くなるまで色々と話をしたいらしい」

「季衣ちゃんと流琉ちゃんが？　でもオラ、今日は風ちゃん達と寝るってお約束しちゃったし……」

「そうか。なら、後で季衣達には私と姉者から伝えておこう」

「おおっ！　ありがと秋蘭お姉さん。季衣ちゃん達にごめんねって言っておいて」

「それはいいが、あまり気にしないでいい。それなら、また別の日にするだろうさ」

その言葉にその手があったと感心するしんのすけを見て、秋蘭は苦笑しつつ手にした物を置くようにと告げた。苦笑の理由は、しんのすけと季衣達の仲の良さを垣間見たからだ。風達だけでなく季衣達からも話をしたいと言われるのは、やはりそのためだろうと。

それに天の話を聞きたいのかもしれない。そう気付き、秋蘭は自分も機会があれば聞いてみたいと思った。なので、食事をしながら尋ねてみるのもいいかと考え、一人頷く。そうしている間にしんのすけは華琳の前に食事を置いて、自分も華琳の向かいへ座った。そ

して、いつものように手を合わせて軽く頭を下げながら告げる。

「いただきます」

「ねぇ、しんのすけ。一つ聞きたいのだけど、それは天の作法かしら？」

「そーだよ。食べる前はいただきますで、食べ終わったらごちそうさまって言うんだ」

「ふむ、基本的な作法はこちらと変わらんのだな」

「そだね。あ、いつも残さず食べなさいって母ちゃんは言ってた」

「成程。それもこちらと同じだな」

しんのすけの取った行動。それに華琳が意外そうな表情を見せる。そこからしんのすけが告げた内容に秋蘭が思った感想を告げた。それにしんのすけが肯定してみせ、春蘭は感心したように頷いた。

そして、春蘭は早速とばかりに手を合わせた。それに華琳と秋蘭は笑みを見せる。しんのすけは春蘭がやろうとするので、自分ももう一度と思い手を合わせる。だが、その視線は華琳と秋蘭へと向けられていた。見れば、春蘭も二人を見ている。

「何かしら？」

「華琳ちゃん達もやろ」

「私達もか？」

「いいではないか。幼い頃はみなで言うのが当然だったしな。さ、華琳様も」

そんな風にしんのすけと春蘭が言うと、華琳と秋蘭も小さく苦笑しながら手を合わせる。そして、それを見てしんのすけが頷いて三人へ視線を向けると同時に、華琳達と揃って声を出した。

「「「「いただきます」」」」

それだけで華琳達は笑う。まるで幼い頃に戻った気がしたからだ。故に妙な気分になったのだが悪くないと、そう思って笑う華琳達。しんのすけは、こうして四人という人数での食事が久しぶりだったため、嬉しくなって笑っていた。そう、四人での食事は星達と旅をしていた頃を思い出させるのだから。

そんな笑顔のまま、四人での食事は始まった。当然のように華琳達がしんのすけへ尋ねるのは天の話。それにしんのすけは自分の知る範囲で話していく。あまり難しい事は分からないだろうと華琳や秋蘭が配慮する中、春蘭は自分が興味ある事を何でも聞いていく。

しんのすけがそれに精一杯答えようとするも、さすがに天の世界の軍はどのぐらいの人数などと聞かれれば答えようがない。精々出来たのがこの答え。

「えっと……オラのお国だけでもたくさんいたはずだぞ」

「ん？　お前の国だけでもとどういう事だ？」

「えっと、オラは日本に暮らしてて、他にもお国がいっぱいあるんだよ」

しんのすけの言葉に華琳達が息を呑む。天の国は一つだけだと考えていたからだ。しかし、しんのすけの語った言葉がその勝手な概念を崩していく。アメリカ、中国などの誰もが名前だけは知っている国名を挙げるしんのすけ。

それを聞いて、華琳達は自分達が思い違いをしていたと気付く。天界も自分達の世界と同じで幾多の国々が存在しているのだと。しんのすけはその中の一つから遣わされた存在。そう判断したのだ。

「しんのすけ、一ついいかしら？」

「何？」

「貴方の国は平和なの？」

「そーだね。でも、他のお国には違うお国もあるよ」

しんのすけは語る。テレビなどで見たり聞いたりしたおぼろげな知識や、両親から食事時にたまに言われる”外国には食べ物がなくて困っている人もいる”との言葉を。それは華琳達の中の天界の概念を粉々にしていく。

平和で争いや飢餓など無縁だと、どこかで思っていた。しかし、天界も自分達が知る状況と大差ない場所がある。そう思い、華琳達はこう考えた。何故しんのすけが選ばれたのか。それは、彼の住まう国が天界の中でも一番平和だからではないかと。故に平和の尊さを自分達へ伝えるために遣わされたのではないか。

（そうか。しんのすけは文字通り天からの遣いなのだな。平和を知り、それが当たり前となる事がどれだけ尊いのか。それを我々に教えに来たのだ）

（天も平和なだけではないのか。どこかで争いを続ける場所もあるとは……そうかっ！　だから天は我らに遣いを出したのだ。このままでは、我らの大陸もそうなるぞと伝えるために！　そうだ！　そうに違いない！）

秋蘭と春蘭が多少の違いこそあれ、同じ結論に達する中、華琳は一人別の結論に達しようとしていた。

（何故御遣いが子供かと思ったけど、納得出来たわ。あまり詳しい天の話をさせないためね。聞くだけだと天は比較的平和なようだし、私達に希望を与える要素ばかり。これを広めさせて、いつかこの大陸も平和に出来ると訴えろとでもいうつもりかしら）

覇王としての考えがしんのすけの語った話を曲解していく。なまじ天の御遣いと知っているからこそ、その言動の裏を読んでしまう華琳。素直で純粋なしんのすけ。その言動が嘘ではないと知っている。だからこそ読んでしまう。ありもしない天の考えを。

しかし、それでも華琳はそれを馬鹿げていると言い切る事はない。何故ならば、それを言っているのがしんのすけだからだ。今も遠い日の思い出を語るしんのすけ。その内容は穏やかな日常風景だ。

両親との馬鹿らしくも笑顔の絶えない時間。妹との微笑ましく温かな時間。友人達との賑やかで楽しい時間。それらを表情豊かに語る姿は、まさにただの子供。だが、そんな彼が自分に仕えたいと思った理由は、簡単にだが馬上で本人から聞いた。

――華琳ちゃんとお友達になりたかったからだぞ。

背を預けながらのその言葉に、華琳は一瞬言葉を失いそれから小さく微笑んだのだ。誰にも、しんのすけにさえ見られる事無かった

その笑みは、久しぶりとなる〝ただの少女〟としての笑みだったのだ。

それを思い出して華琳は思う。もしかすると、しんのすけはただ自分の友人となるためだけに天からやってきたのではないかと。そんな馬鹿げた事を考え、華琳は一人有り得ないと自嘲的な笑みを浮かべる。視線の先ではしんのすけによる両親の物真似が始まっていた……

華琳達による質問も終わり、しんのすけは一足先に食事を終えた。息を吐き、華琳達が食べ終わるのを待つしんのすけ。だが、それを見て春蘭が問いかけた。

「腹は膨れたか？」

どこか確認にも聞こえるそれに、しんのすけが自分の腹部をさすりながら考える。ややあって、少し足りないと返した。すると、それに春蘭は頷いて自分の分を差し出した。

「なら、これを食え」

「え？　でも春蘭お姉さんは？」

「それがな、今日はあまり動かなかったためか少々苦しいのだ。だから、お前が食べてくれると助かる」

春蘭はそう笑顔で告げ、しんのすけへ残りを手渡す。それを受け

取ったしんのすけは、嬉しそうにそれを食べようとして、はたと動きを止めた。そして、春蘭へ視線を向けて笑顔で告げる。

――春蘭お姉さん、ありがと！

それに春蘭は、少し恥ずかしそうにしながら礼はいらないと返す。華琳と秋蘭はそれを見て、春蘭の気遣いに小さく笑みを浮かべた。しんのすけが理解してるのかは分からない。だが、どことなく感じ取ってはいるのだろう。春蘭が自分のために嘘を吐いてまで食事を分けてくれた事を。華琳と秋蘭は既にその事に気付いている。

そんな事を知らず、春蘭は勢い良く食べるしんのすけを見つめ、満足そうに笑っていた。春蘭は、季衣の事を妹のように思っているように、しんのすけの事を弟のように思い始めていた。素直で純粋な者には春蘭は優しい。それは、彼女が同じような性格だからだろう。親近感を覚えるため、優しくなるのかもしれない。

そんな事もあり、春蘭は上機嫌でしんのすけを眺めていた。華琳と秋蘭がそれを眺め、同じような表情をしていると知らずに。

「春蘭」

「はい？」

「星だけじゃなく、しんのすけも気に入ったのね」

「ま、まぁ、華琳様の事を王と言いましたし、それに季衣達とも友人となっていますから……」

華琳の小悪魔的な笑みに春蘭はやや照れるように言葉を返す。し

かし、その言葉を遮るように華琳が表情をそのままでこう返した。

「あら？　季衣と仲が良かったのは以前からじゃなかったかしら？」

「そ、それは……華琳様ぁ、いじめないでください～」

「姉者は可愛いなぁ……」

どこか言い訳するように告げる春蘭へ、華琳は容赦なく問いかける。それに春蘭は反論しようとするのだが、いい言葉が浮かばず縋るような眼差しを華琳へ向けた。それに華琳と秋蘭は笑みを見せる。

しんのすけはそんな会話を他所に黙々と食べ続ける。少しぐらいは残るだろうと、そんな春蘭の予想を超えて完食してしまうとは知らずに。それに春蘭が若干驚きと悲しみを浮かべ、苦笑しながら秋蘭が自分の分を多少分ける事になり、華琳はそんな光景に小さく笑うのだった……

しんのすけが華琳達と食事をしている頃、星は稟と風の三人で食事をしていた。シロは凪達の傍で食事をしている。可愛い物好きな沙和がシロを気に入っていて、今夜一晩面倒を見たいと言ったためだ。

今は風が名前を変えた事を教えてもらっていて、星はそれが原因で自分達が滞在した際に二人と出会えなかった事を知った。そしてその変名の理由を聞いて、星は楽しそうに笑っていた。

「そうか。日輪の夢か」

「そうなのですよー。その日輪を支える事が風の役目だと思ったのでー」

「それで程？と名乗るようになったらしいのです。私も最初にそう聞いた時はどうかと思ったのですが……」

　稟はやや苦笑気味にそう言って風を見る。風はそんな稟に微笑みを返していた。そう、この夢で見た日輪。それは風には二つの意味を持っていたのだ。

「最初は華琳様の事だと思いました。何せ、仕官しようと決めたその日にその夢を見たのでー。でも、よくよく考えたらそれだけではないかもしれないと気付いたのですよ」

「と言うと？」

　風が告げた言葉に星は不思議そうな表情を返した。稟は既に聞いているのか小さく笑っている。星はそんな稟を視界に入れつつ、風の答えを待った。風はそんな星へ笑みを浮かべてこう告げた。

　しんのすけの妹の名を思い出して欲しいと。ひまわりと言う名は天の国にある太陽を模した花だ。では、夢で見た日輪は天にいるひまわりではないかと、そう考えたのだ。

「しんのすけの妹？」

「そうなのです。華琳様に仕官しても、今まで通りお兄ちゃんを助けて欲しいという願いもあるのではと、そう捉えたのですよー」

「私もその意見に賛成しました。きっと天にいる妹の兄への想いが、

夢という形で私達に届いたのでしょう」

風の言葉を受けて稟が静かに締め括る。星はその内容に胸を打つものがあったのか、一瞬だけ驚きを見せて目を閉じた。こじつけかもしれない。だが、星にはそうも言い切れないと思えたのだ。

遠く離れた場所から、年端もいかない幼子が兄を想って祈りを送る。それを否定出来るような星ではない。例えそれがどれだけ有り得ない事だとしても、既にしんのすけと出会った以上、星にはそれさえも信じたいと思ったのだから。

――兄と同じで優しい妹だな……

噛み締めるように星が告げた言葉に風も稟も頷いた。それが勝手な推測からくるものだと二人も分かっている。しかしそれでもそう思いたいのだ。兄を心配し、その帰りを待ち続けているだろう妹。その思いを推し量り、三人は思う。必ずしんのすけをその元へ帰してやろうと。

その後、三人は食事を始めた。星は稟と風との三人での食事が久しぶりだと思い出し小さく笑う。すると、同じように二人も笑った。それだけで互いが何を考え、何を思い出したかを理解し合った。

「懐かしいな、この組み合わせは」

「そうですね」

「最後がしんちゃんと出会う前日ですからねー」

もう今からどれ程前になるだろう。そう三人は思い返す。しかし、そんな懐かしむ雰囲気は食事を終えるまで。食事を終えると思い出に耽る時間は終わったとばかりに表情を鋭くして、三人は互いの顔

を見つめ合う。互いが別れた後の結果報告をするためなのだが、星には一番に聞いて欲しい事があった。それを二人に告げ意見を聞こうと思っていたため、星は真剣な眼差しで口を開く。

「まず、私の話を聞いてくれないか。鏡に関してだが、ある仮説が浮かんできた」

「「仮説？」」

二人の声に星は頷いて、陸遜から言われた言葉を告げた。鏡は現在この大陸になく、全ての事を終わらせた時にしんのすけの前に出現するのではないだろうかと。その話を聞いて稟と風は何かを考え込んだ。星はその間二人の言葉を待ち続けた。

「……実は、私もそんな気がしていたのです」

沈黙を破ったのは、稟の肯定する言葉だった。それに星はやや驚くものの、風が驚いていない事に気付き黙って先を聞く事にした。稟はまず星へこう言った。二人で情報を探していたのだが、あまりにもそれが少なかった。それから自分も星と似た考えに至ったのだと。

そして、二人へこう告げた。しんのすけが以前経験した体験の中で一番近い事を例にすると、元の世界への帰還は突然のようでちゃんとした流れがある。それは、しんのすけが現れた先で必ずやるべき事が決まっていて、それを終えると自然と戻る事になる事。今回の原因は鏡だったが、もしかするとそれは探し出すのではなく、出現出来るように条件を整える必要があるのではないだろうか。そんな風に稟は締め括った。

「ではー、風の見解を言いますねー」

風は稟の意見を聞いた上でこう告げた。もしかすると、鏡は行きだけの手段で帰りの手段は別の物になる可能性もある。そう、鏡だけとは限らないのだ。何せ、しんのすけがかつて別の場所から戻った方法は、全てを終わらせた後にその世界へ来た際の場所で戻りたいと願う事だったのだから。

「つまり、今回も同じように乱世を終わらせ、最初出会った場所へ行く必要があるかもしれないのですよー」

「……そうか。どちらにも共通するのは――」

「しんのすけが過去に体験した”ぶし”という者達の世界へ行った時の帰還方法です」

星の言葉を受けるように稟はそう言った。そう、それはしんのすけが語った中でも一番現状に近い冒険譚。戦国時代へ彼が行った時の思い出。何かに導かれるように時間を超えて、そこで歴史を動かした事実だ。

星達はそこまで詳しく知らないが、しんのすけが感じているのと同様に、今回の出来事はそれと似たものだと捉えている。故に、もしかすれば帰還の手がかりはその思い出にあるかもしれないと思うのは仕方ない。

「では、私達の目標は変わらないな」

「ええ」

「ですねー」

星の言葉に稟と風も気負う事なく、平然と返す。そして三人は小さな笑みさえ浮かべて同時に口を開いた。

――大陸防衛隊として、乱世を終わらせよう。

そう言い合うと、三人はゆっくりと立ち上がりその手を重ねた。それはあの日と同じ行動。星の手に稟と風が手を重ねる。だが、あの時と違う事がある。それは、天に突き出すようにしていた前回と違い、今回はそれを普通に重ね合うだけだったのだ。

その理由は一つ。今度は天に告げるのではなく、大陸に告げようと思ったからだ。そう、何故なら今の彼らはたいりく防衛隊。故にその一員として告げるのならば、当然大陸相手となる。

――私は新たな誓いを立てる。正義を阻むものあらば、この身を賭して貫かん。

――私も新たな誓いを立てます。希望を阻むものあらば、この才を以って退けましょう。

――風も新しい誓いを立てますねー。平和を阻むものあらば、この知を尽くして戦いますよー。

それは、あの時と情勢が変わったからだけではない。しんのすけが明確な意思を持ち、乱世に乗り出したからだ。その新たな誓いを立て、星は二人へ白蓮達の事を話した。たいりく防衛隊の仲間として、彼らもしんのすけ帰還のために力を貸してくれていると。

それに稟と風は驚きを見せるが、すぐにしんのすけらしいと笑みを浮かべた。知らず仲間を増やしていた事に対してだ。そして、誰ともなく呟く。そんな風に全ての者が繋がる事が出来ればいいのに

……と。

――――――

第二話

今、連合軍はある場所に偵察隊を出していた。それは？水関と呼ばれる洛陽へ向かう要所の一つ。にも関らず、既にそこへ攻撃を仕掛けた者達がいる。本来攻撃を受け持つはずではない袁術軍だ。しかし、それは袁術の自発的な指示ではない。張勲によるものだ。

そして、当然ながら先鋒は孫策軍が担当させられた。それでも孫策達は逆らう事無く？水関攻略に向けて動いた。しかし、それは敗北に終わる。華雄と張遼の二人の将軍がいた事に加え、袁術軍からの糧食が滞ったためだ。

だが、それを孫策が怒りの感情のまま直接袁術へ伝えに行くと彼女は驚いてすぐに張勲を問い詰めた。

――どういうつもりじゃ、七乃っ！　孫策達を殺すつもりか！？妾のために危険な先鋒を務めてくれたと言うのにっ！

袁術は張勲にこう言われていた。？水関は洛陽侵攻の最初の難関。それを突破するのに時間をかけると後々に響く。なので、兵数が多い自分達が先行し攻撃して突破しよう。更には勇猛で知られる孫策軍を頼り、敵の抵抗が弱った瞬間を狙って本隊の数を以って攻めきろうと。

それに袁術は躊躇いを見せた。しかし色々と思う事はあれど、一刻も早く洛陽を解放したいとの思いから結局は許可する事になる。忠臣と思う孫策を危険に晒すのは本意ではないが、その力が一番自軍で強いのも事実。だからこそ、袁術はせめて万全の態勢で支えるようにと厳命していたのだ。

それを裏切られたと思っての袁術の怒りの言葉を聞いて張勲は慌

てて言い訳した。その内容は、簡単に言えば指示が上手く伝わっていなかったとのもの。孫策からすればとても信じられるものではなかったが、袁術はそれを信じる事にした。そして、孫策へ張勲を許してくれるように頼み、そこで明言したのだ。

――もう安心せよ。今後は妾が必ず確認を取るからの。それと……すまぬな、孫策。妾が至らぬせいで死なせてしまった兵達には何と詫びればよいか……

――すみません、孫策さん。もう二度とこういう事はないようにしますからー。

――絶対よ？　それと袁術ちゃんは気にしないでいいわ。悪いのは張勲だし、その言葉が聞けただけでも十分よ。さて……じゃ、頼むわね袁術ちゃん。それと張勲、さっきの袁術ちゃんの言葉に免じて今回の事には目を瞑ってあげる。

そう告げて孫策は怒りを静めた。そして、袁術達の言質を取れたと思いつつ、どこかその君主たる姿勢が様になってきたように感じて孫策は複雑な心境になった。死した兵への責任。あれの主語が張勲ではなく袁術だった事がその理由。

それでもそんな内心を表情には出す事なく、孫策は袁術へ手を軽く振って戻って行った。そんな去り行く孫策へ、袁術は一先ず攻略を止め休んで欲しいと告げる。そして張勲へ再度孫策達への指示を言い聞かせながら、自分がまだまだ他人任せだったと痛感して反省するのだった……

そして、そんな袁術軍の後を受けて攻め手を引き受ける形になったのは白蓮と桃香達だった。本来は彼らが攻める事になっていたのだが、孫策達の力を削いでおこうと考えた張勲によってその役目を奪われる形になっていたのだ。

そんな事は知らない白蓮達だったが、孫策達が敗れた原因や？水関を守る将などの情報には困っていなかった。そう、共有して損のない情報だけはある者達から提供されていたからだ。それは……

「曹操さんからの情報？　うん、こっちにも来たよ」

「そうか。いや、あいつら桃香達のところにも行くって言ってたけど、本当に来たのか」

白蓮はそう言うとやや信じられないとばかりに息を吐いた。この時代でも情報は重要だ。だからこそ、白蓮はそれを無条件で提供してくる華琳達へ不信感を持った。しかし、桃香はそれに笑みを浮かべて答えた。

「白蓮ちゃん、曹操さんのところにはしんちゃんがいるんだよ。だから、私達に協力してくれてるんじゃないかな？」

「いや、それだけじゃないと……あー、でもそんな考えでいいか」

桃香の言葉に何か反論しようとした白蓮だったが、しんのすけが居れば確かに変な事はしないだろうと思って納得する事にした。華琳も少しではあるがしんのすけ達と関っている。それに、あのしんのすけが選んだ相手だ。そう思う事で白蓮は自分を納得させた。

そんな白蓮を見て愛紗は諸葛亮へ視線を移す。それに諸葛亮も頷き周囲へ説明をした。華琳は物事を正確に把握し、自分の損にならない情報だけはある者達から提供されていたからだ。それは……

ない程度に情報を提供してくれるだろうと。伝えるべき情報を隠して味方の足を引っ張る事は華琳自身の失点にも繋がるからだ。そう諸葛亮は締め括る。

「それに、今回の目的はそれだけじゃないですから」

「どういう事なのだ？」

「あの……おそらく曹操さんは？水関の一番乗りを狙っています」

鈴々の疑問に鳳統がそう答えた。それに誰もが成程と納得する。いや、鈴々だけは理解出来ないのか小首を傾げていた。そんな鈴々に愛紗が説明するべく告げた。

「つまりな、我々が？水関を守る将を倒した後、その際にこちらは敵の反撃などを警戒して一度引かねばならん」

「曹操はそこを突いて入れ替わるように攻めるつもりなんだろうさ。理由は……」

そして、愛紗の言葉に白蓮がそう言って視線を諸葛亮へ向ける。それに諸葛亮は手にした扇を口元に当て告げる。

――――疲弊した私達を敵の反撃から守るため……辺りが妥当かと。

――――後で袁紹さん辺りが文句を言っても、現場での即時判断だと言えば黙らざるを得ません。

諸葛亮の後を受けるように鳳統がそう言うと桃香が感心したように頷いていた。鈴々はどこか理解出来ていないようだったが、愛紗

が一言で纏めた言葉に納得した。

――要するに、私達に戦わせ一番の手柄は自分達がもらおうとしているのだ。

桃香達がそんな話を終え、？水関を攻略しようと動き出した頃、華琳達は？水関を眺めながらどうしたものかと考えていた。そこには華琳が欲しがる張遼がいたのだ。故に何とかして外に引きずり出したい。しかし、防衛に秀でた？水関からわざわざ出てくる程愚かな相手でもない。

そう思うからこそ華琳はどうするかと考えていたのだ。桂花達軍師も同じように知恵を出そうとしているが、どう考えても籠城した方がいい状況で張遼が出てくるとは思えなかった。

「……何か手はある？」

「挑発ぐらいしか思いつきませんねー」

華琳の問いかけに風はあっさりと答える。しかし、それに桂花と稟も意見を言う事はない。二人も今のところはそれぐらいしかないと考えていたのだ。すると、それを聞いていた星がはっきりと告げた。

張遼は挑発の類に乗ってこない可能性が高いと。その理由を尋ねられる前に星は洛陽での会話を話した。華雄の短気さから派生してしんのすけが告げた言葉。それを張遼が覚えていれば、そう易々と見え透いた挑発には乗らないだろうからと。

「そうなの。困ったわね」

「でも、それが本当なら華雄は結構挑発には弱そうね」

「そうですな。もしかすれば華雄殿は引きずり出せるかもしれません」

桂花が言った言葉に星も頷いた。張遼は無理でも華雄ならば。そう判断すると華琳は早かった。すぐに伝令を桃香達へ送り、華雄を引きずり出すには挑発が有効かもしれないと伝えさせる。そして、星へ華雄達と出会って話した会話を詳しく思い出すよう告げた。

それを桂花達に聞かせ、そこから他に何か手はないか考えるよう指示を出す。それに答えるように星はあの夕食時の事を思い出しながら語り出す。

一方、しんのすけは華琳達から離れた場所で？水関を眺めていた。季衣や流琉と並んで？水関を見つめている様はまるで子供の遠足のようだ。シロはといえば、凪達と共にそこから近い場所で同じように眺めていた。

桃香達が戦っているのを眺め、しんのすけはどこか遠い景色を見ているような気分になっていた。桃香達と共に過ごした日々の中、彼は一度として戦に関る事はなかった。故に優しい桃香達が戦っているのがどこか不思議に思えたのだ。

「……桃香ちゃん達、いくさしてるんだね」

「そうだよ？　えっと……あっ！　あそこで張飛が戦ってるんだけど、見える？」

しんのすけの呟きに季衣は不思議そうな声を返して、指を動かしてある場所を指し示した。しんのすけはそこへ視線を動かす。そこには蛇矛を振り回し、飛んでくる矢を叩き落とす鈴々の姿がある。

だが、生憎しんのすけはそこにいるのが鈴々だと辛うじて分かったものの、その姿を鮮明に見る事は出来ない。流琉はそんなしんのすけへ疑問符を浮かべて問いかけた。

「どうしたの？」

「えっと……オラ、桃香ちゃん達がいくさしてるの初めて見るんだ。だから、何か変な感じがして」

「そうなんだ。じゃ」

しんのすけの答えを聞いて流琉が何か言おうとした時だった。視線を鈴々へ向けていた季衣が悔しそうに言った一言にしんのすけは意識を前方へと戻す事になった。

――あれじゃ張飛でも無理かもしれないなぁ。

どうしてだろう。そう思ったしんのすけは視線を流琉から戦場へと戻した。そこには、相変わらずの光景が展開されている。だが、何かが先程と違う。その理由が最初は分からずしんのすけは間違い探しをするような感覚でその光景を見つめた。

すると、その最中に流琉がしんのすけの視線に気付き答えを教えた。それは、射掛けられる矢の数。それが増えているのだ。しんのすけはそれに軽い驚きを示すが、どうして増えたのだろうと首を傾げた。

「ね、どうして矢が増えたの？」

「そうだね……多分相手も張飛ちゃん達が強いって分かったから、必死になったんじゃないかな」

「そっか。そーいえばあそこにちょーのお姉さん達がいるって聞いたんだけどホント？」

「え？　張遼って人の事かな？　それなら確かにいるけど……」

流琉の言葉にしんのすけは納得し、頷きながら視線を前方へ向け続けていた。すると桃香達が一斉に退却を始めた。それに首を傾げるしんのすけ達だったが、それを見ていた華琳達はその目的に気付いた。

「あら、あれは……」

華琳が呟いた言葉を聞いて稟も自分の考えを述べた。

「どうやら挑発だけではなく、敗走を装っておびき出そうとしているようですね」

「諸葛亮辺りの策だろうけど、中々上手い手を思いついたわね」

「相手は少しでもこちらの戦意を削いでおきたいでしょうし、散々挑発までされてますからねー。ここで戦力を減らせるのならと、攻めるための大義名分を与えたのでしょー」

稟の告げた言葉に桂花も頷き、自分の感想を述べる。風は華琳や秋蘭だけではなく春蘭へ分かるようにその意図した事を説明する。それに華琳はふむと頷いて春蘭へ問いかけた。

「春蘭、貴女が相手ならどうする？」

「そうですね……確かに絶好の機会と捉えるかもしれません」

「秋蘭は？」

「私は敢えて動きません。風の考えも分からないでもないですがこれは守りの戦。下手に打って出ればその隙を突かれて負ける可能性を生みます」

春蘭と秋蘭の意見を聞き、華琳は張遼は出てこないと踏んだ。だが華雄は分からないと思った。春蘭の意見が血の気の多い華雄の、秋蘭の意見が用兵に長けた張遼の意見に思えたからだ。

華琳がどうして二人に問いかけたのかを軍師三人も理解し同じ感想を抱いたため、視線を戦場から離さないで見つめ続けていた。退却を続ける桃香達。それを前にどう動くのだろうと思いながら。

華琳達は知らない。その頃、季衣と流琉がしんのすけがいなくなった事に気付いてやや慌てて周囲を見回している事を……

「華雄、待たんかい！」

「何故だ！？　奴らは無様に退却している。ここで追撃をかけ連合軍の戦力を減らしておくべきではないかっ！」

？水関の守将二人が関の上で揉めていた。原因は眼前の光景。華琳達の読み通り、先程まで散々鈴々に挑発され怒り心頭にきていた華雄はそれを晴らす絶好の機会とばかりに武器を手にしていた。

そう、挑発自体は耐える事が出来た。見た目が幼い鈴々から馬鹿にされるという屈辱を受けても、張遼から宥められる事と董卓や自分の兵達を無用な危険に晒す事は出来ないと思う事で。しかし、そんな相手が惨めに敗走し始めた事でその心配もないと考えたのだ。

「気持ちは分かるけどな、よー考えてみ。少しおかしないか？　確かにこっちが射掛けてそれなりに損害は与えた思う。でも、まだ戦えるはずや」

「これ以上やっても無駄と思ったのだろう。消耗を避けるために逃げ出したのだ！」

「そうやとしてもっ！　……そうやとしてもこっちから打って出るのはあかん。詠が言うた事忘れたんか？」

張遼のその言葉に華雄は呻く。これは防衛戦。余程がない限り打って出ないように。その指示を思い出したからだ。しかし、華雄はだからこそ今がその余程ではないかと返した。連合軍の戦力を減らせる好機。それをものにするためなら、多少の危険は覚悟の上で攻めるべきだと。

それに張遼は強く言い返す事が出来ない。確かに華雄の言う事にも一理あったからだ。自分は防衛に意識を置いているが、本来ならば守りよりも攻める方が得意なのは華雄と一緒なのだ。張遼も武人。先程の挑発で怒りを感じない訳ではない。しかし、それに流される事はしたくないと言い聞かせていたのだ。

（月を守る。それがうちらの目的や）

それは優しい少女を思えばこそ。己の誇りよりも他者の命を優先する事。それが人としての張遼の判断だった。華雄は張遼が何かを我慢していると見て、それに思い当たったのか戦斧を握る手に力を込める。

「……分かった。ならば張遼、私が単騎で出ればどうだ？」

「なっ……何考えとんねん！　死にに行く気か！？」

「え？　しにに行くの？　四か二かどっちなの？」

「いや、そうやなくてな。死にに行くちゅうのは、死ぬ気かってちゅう事や」

「ああ、そーゆーこと」

「分かったのならいい。それでな……」

しんのすけが納得したのを受けて話を戻そうとする華雄。だが、その瞬間華雄と張遼が揃って動きを止めた。そして勢いよく顔を同じ方向へ動かした。

「「しんのすけっ？！」」

「や。また会いましたな」

二人の声に片手を挙げて平然と返すしんのすけ。そこは当然ながらかなり高い場所。そこに二本の足でしっかりと立ち、しんのすけは何事も無かったかのようにしていた。

どうやってここへと疑問を抱く二人。だがそれを尋ねる事はしなかった。何故ならしんのすけが額を拭いながら語り出したのだ。関の横にある岩壁を登ってここまで来たと。

「いやぁ、中々のものですなぁ。よーちえんのジャングルジムよりも歯ブラシがありました」

「そ、それを言うなら歯応えではないか？」

「おー、そーともゆー」

「いやそうとしか言わんし、大体突っ込むとこがそこちゃうやろ」

信じられないといった表情で問いかける華雄とそれに気楽な声を返すしんのすけ。それを聞いて張遼は両者へ指摘するも、心なしかその顔は呆れていた。それも無理はないだろう。何せしんのすけは誰にも気付かれる事なくここまでやってきたのだ。いくら子供とは言えそれは中々出来る事ではない。と言うか出来るはずがない。

と、そこで何かに気付いた華雄が下の様子を見つめた。桃香達の軍勢が安全圏まで近付きつつあったのだ。このままでは逃げられてしまう。そう思い、華雄は先程言おうと思っていた事を張遼へ告げた。

「張遼。私は行くぞ。もし奴らが敗走を装っているのならそれで動きがあるはずだ。本当に逃げているのなら、それでも逃げ続けるだろう」

華雄の提案の意味を知るも張遼としては頷けるものではなかった。華雄は自分を使って相手の出方を窺い、それによって追撃か現状維

持かを決めさせようとしていたのだ。それは、本当に好機だとすれば逃がしたくないとの思いからだ。

董卓を脅かす者達。それを少しでも減らしておきたい。故に華雄は張遼へ告げる。いざとなったら一人である事を活かして逃げ切れるから心配するなと。そして、何かを言い淀む張遼へこう締め括った。

「もしあれが相手の策ならばその時は門を閉めてくれ。……董卓様を頼む」

「……このど阿呆」

「ねーねー、ちょーのお姉さん。かゆーのお姉さんどこ行くの？オラも一緒に行っていい？」

出撃するために歩き去る華雄の背中へ張遼は一言だけ告げる。そんな彼女の足元へ降り立ち、しんのすけが不思議そうに尋ねた。その時、下から華雄の部下達の声が聞こえた。その雰囲気に張遼は深いため息を吐いた。将が将なら部下も部下だと思ったのだ。

そう、華雄の部下達は揃って共に出撃させて欲しいと懇願していたのだ。それを華雄が嗜めるものの、その意志の強さに最後には折れた。そこから響く雄叫びに張遼は呆れながらしんのすけを眺めて項垂れた。

――……しゃーないか。お前がおるっちゅう事は趙雲もおるって事やろ？　どこにおるか教え。送ったるわ。

――おおっ！　それはわざわざすみませんなぁ。

そんなしんのすけの言い方に苦笑し、張遼が周囲へ出した指示は

一つ。万が一に備え虎牢関への退却準備を始めろと告げたのだ。張遼とて思ったのだ。華雄を見捨てて何があっても門を閉めるのがある意味正しいとは。

しかし、董卓がそれを知れば怒るだろうとも思ったのだ。それに張遼も同僚で戦友である華雄を簡単に切り捨てられる程冷酷ではない。しんのすけを理由に自分も単騎で戦場を駆け、桃香達を混乱させようと考えたのだ。少しでも華雄の生還率を高めるために。

「ええかっ！　ウチはこの小僧を曹操んとこへ置いてきたらすぐ戻ってくる！　せやけど、相手の敗走が策ならそれを待たずしてここを放棄し！」

もう一度指示を出し、張遼は騎乗するとしんのすけを前に乗せて華雄に続くように馬を走らせた。しかし、目指す先は華雄の元ではなく華琳の陣。単騎駆けとなるが不安は無かった。それはしんのすけの存在。子供を連れて戦場に出るなど有り得ない。故に自分を見て誰もが戸惑うはず。その僅かな時間さえあれば張遼には駆け抜けるには十分なのだから。

「しっかり掴まっとくんやで！　後、あまり喋るんやない！　舌噛むからなっ！」

「ほいっ！」

その返事に笑みを一つ返した後、張遼はそれを凛々しくして手綱を握る。神速の張遼と呼ばれる所以。それを遺憾無く発揮するために……

？水関の門が開いた事を受け、桃香達は作戦が上手くいったと即座に反転。だが、張遼がしんのすけを乗せて単騎で向かって来た事もあって若干の動揺が走った。それでもすぐにその目的を理解した諸葛亮達が張遼を通すように指示を出して桃香達は華雄達を迎え撃った。

愛紗が華雄と一騎打ちを行う中、鈴々がその部下達を蹴散らしていく。華雄は善戦するも愛紗の強さの前に敗北。だがその命を取られる事は無かった。桃香と諸葛亮が止めに入ったのだ。

それには華雄が敗北を潔く受け入れた事も関係していた。その理由は鈴々と戦う部下達の助命。故に悪足掻きのように抵抗する事なく、自分の運命はそちらへ委ねると語る華雄に桃香はならばと尋ねたのだ。

――董卓さんは本当に洛陽の人達を苦しめてるんですか？　教えてください。

その言葉に華雄は耳を疑った。桃香は心の底から董卓の真実を知ろうとしていると聞こえたからだ。だがそんな事はないと思い、華雄は無言を貫こうと黙った。そんな彼女へ諸葛亮が密かに耳打ちした。

――桃香様は今回の檄文の内容を全て信じている訳ではありません。

それに華雄が目を見開いて視線を動かす。それに桃香は真剣な表情で頷いた。それに華雄は搾り出すように問いかける。

――貴様……本気か……？

――私達は洛陽の人達を助けたいだけです。もし、董卓さんが噂通りじゃないのなら倒す必要はないですから。

――それを私に信じろと……そう言うのか。

桃香の返事は華雄に話をさせる気を僅かに起こさせる。しかし、それでもまだ躊躇う華雄へ桃香は目を逸らす事無く語った。これを信じてもらえないと分かっている。でも、だからこそ教えて欲しい。華雄は無理矢理戦っている感じではなかった。しかも、自分を犠牲にしてでも部下を助けようとした。そんな人が、どうして悪政をしていると言われている董卓へ従っているのかと。そう桃香は締め括って、華雄の反応を静かに待った。

それに華雄が微かに気圧される。だから一言だけ告げる。董卓が噂通りの人物ならば自分が付き従ったりすると思うかと。それ以外は何も口にしなかったが、桃香にはそれで十分だった。真剣な表情で何とか董卓の事を助ける事は出来ないかと言い出す桃香に、諸葛亮達は苦笑しつつ考え始める。

そんな桃香を見た華雄は、その姿に少しだけだが主君である董卓を重ねて、誰に気付かれる事無く笑っているのだった……

一方、華琳達は騒然としていた。張遼が単騎で桃香達を抜けて自陣へ向かって来ていたからだ。更にその馬にはしんのすけも乗って

いるとくれば動揺を通り越して困惑するしかない。しかし、一人星だけはその目的が何かを悟って張遼を迎えに行くべく陣を離れて動いていた。

（まったくしんのすけの奴め。どれだけ周囲をかき乱せば気が済むのだ？）

馬を走らせながら星はそんな事を考え苦笑する。その視界に凄まじい速度で駆ける存在が見えてきたのはその時だ。その馬上には見慣れた少年の姿がある。すると向こうも星に気付いたのか速度を落とした。やがて馬は向かい合うような距離で止まった。

「お久しぶりですな、張遼殿」

「せやな。こないな形で会いとー無かったけど」

互いに浮かべるは複雑な表情。喜びと悲しみとを半々に混ぜたような感情がそこには出ていた。しかし、そんな雰囲気を一瞬にして壊す者がいた。

「星お姉さん、おかえり」

「それを言うならただいまだろうが。本当にお前と言う奴は」

「びっくりしたで。いきなり関に現れるんやからなって……」

「しんのすけこちらへ来い。張遼殿、お早く」

周囲が張遼を包囲しようと動き出していたのだ。それは曹魏の軍ではない。であれば星では止められない。それに気付いて星はしん

のすけを急かした。張遼は周囲を警戒しながら視線を華雄のいる辺りへ向けていた。

二人の雰囲気から何かを察したのかしんのすけも素早く動いて星の馬へと乗り移る。それを受けて張遼が馬の向きを変えて走り出す。去り際、星へ一言だけ告げて。

――しんのすけへウチらの事情を教えといた。正しく覚えとるかどうか分からんけどな。

それに星が言葉を失いながらも視線をしんのすけへ向けた。しんのすけは去り行く張遼へ手を振って見送っていた。

「ばいば～い！」

「……この戦、もしかすると正義はないのかもしれんな」

しんのすけに聞こえないように小さく呟き、星は離れ行く張遼の姿へ視線を動かした。願わくば生きて再び会える事をと思いながら……

「今だっ！　？水関へ突入せよ！」

華琳は星が張遼と接触したのを聞いて春蘭達へ指示を出した。これから関へ戻るだろう張遼を手に入れるために。そう、最初からそのつもりではあったのだ。華雄の敗色が濃厚になった時点で門が開いたままならば？水関へ突入せよと。最初こそ門を閉めると考えた

桂花達だったが、何故かその心配は杞憂に終わったため、好機に違いないとばかりに春蘭達が動き出す。

やがて華雄が愛紗に敗北したのを受け、先陣を切ったのは当然ながら春蘭だった。彼女は星が一度自陣へ戻る事を理由に張遼を自分が負かして華琳の希望を叶えようと考えたのだ。関へ駆けて行く張遼を追いかけながら彼女は叫ぶ。

「張遼！　夏侯元譲が相手だ！」

春蘭はそう大声で叫ぶもののある事を見て目を見開いた。張遼との距離が開いていくのだ。懸命に追いかけようとするも距離は詰められないまま離れていく一方。それを感じて春蘭は舌打ちをすると馬の速度を落とした。

関の中は既にもぬけの空。誰一人として残っていなかった。剣の一本さえもなく、華雄が敗色濃厚になったのをキッカケに虎牢関へ撤退していったのだろうと誰もが判断した。春蘭も即座に思考を切り替えると？水関への一番乗りを果たした証として曹の旗を掲げさせた。

「旗を揚げろ！　？水関は我らが一番乗りだ！」

それを以って？水関の戦いは終わりを迎えた。華琳は目当ての張遼にまんまと逃げられた事にやや不満を持ったが、それでも当初の目的は果たしたため良しとした。

問題はその後の軍議だ。予想通り袁紹が華琳の独断を指摘し責めるものの、華琳は張遼が華雄を倒した事で油断した桃香達を襲う可能性があったとしてその意見を斬って捨てた。まぁ、その後は勝手な判断を現場でしてすまなかったと言いはしたが。

だが、その声が少しも悪いと思っていない者の声だとほとんどの者が気付いてはいた。しかし、誰もその事を言い出す者はいなかった。尚も文句を言おうとする袁紹へ桃香が助かったのも事実だからと割って入ったのを合図にこの件は片付いた――のだが……

「では華琳さん。次は貴女が先陣を務めてくださいな」

袁紹は？水関への一番乗りを掠め取るようにやってのけた華琳へ反発し、そんなに一番乗りしたいのならと先陣を任せたのだ。そこには華琳が抱く思惑も大きく関係していた。

「いいでしょう。引き受けたわ」

（これで心置きなく張遼を狙えるわね）

願わくばここでと思っていた相手。それを逃がしてしまったため、華琳としてはどうしても虎牢関で先陣を切りたかったのだ。呂布という恐ろしい相手を迎え撃つ危険を犯してでも。

それを知らず、袁紹は意外と素直に華琳が従った事に疑問を抱きつつも自分の思惑通りになったと思って喜んでいた。その内心では次の虎牢関への一番乗りを華琳達と同じ手段でやってやろうと思っていたのだ。

「お願いしますわよ？　さて、これで軍議は終わりですわね」

袁紹はそう思い軍議を終了させようとする。それは、自分の総大将としての存在感を周囲に知らしめようとの思いからなのだが、しんのすけの正体を知る顔良がその発言に正気かと思っていた。

何故ならば次の虎牢関には呂布がいる。しかも、ここで逃がした

張遼も合流しているのだ。その戦力は正直今回の比ではない。それを顔良が密かに耳打ちするも、袁紹は一度言い出した事を引っ込める事が出来ない。こうして、袁紹は内心で自分の浅慮を悔やみながら軍議を終わらせたのだった。

（私も迂闊でしたわ。しんのすけさんが華琳さんの元にいる事を忘れるなんて……）

天の御遣いを危険に晒す事になりかねない自分の判断を嘆きつつも袁紹は願う。いつかの自分の言葉通りに星がその命を守ってくれる事を……

その日は？水関で夜を明かす事になり、それぞれが慌しく動く中、華琳達は次の虎牢関での動きについて話し合っていた。そして、早速とばかりに華琳が星へ視線を向けた。

「星、次の虎牢関だけど分かってるわね？」

「私が張遼殿と戦い、その力と勝利を手に入れてみせましょう」

星が張遼を見送った事について華琳は何も言わなかった。何せ張遼はしんのすけをわざわざ届けてくれたのだ。そこで捕まえるのは華琳としても望ましくない。故に星の行動を黙認する事にしたのだ。

「くそ、まさかあそこまで速いとは……」

「神速との名は伊達ではなかったと言う事だな、姉者。しかし、出来るのなら呂布がいないここで戦えればよかったのだが」

秋蘭の言葉に星も頷いた。星としても張遼の口から直接事実を聞いてみたかったのだ。彼女達が董卓へ仕える理由を。張遼も華雄も不正を許せる人間ではないからだ。噂が全て事実だとは星とて考えていない。それでも華雄や張遼と出会い接した者としては気になるのだ。

洛陽の民を守るためとはいえ、官軍の兵士と戦った自分を気に入ったと言ってくれた張遼と華雄。それがどうして悪政を行っていると言われている董卓に反旗を翻す事無くいるのか。どこかで感じている自論へ納得を与えて欲しいと思い、星は視線を上げる。

（しんのすけの奴は見事に肝心な事を忘れていたしな）

陣へ戻る最中に尋ねた時の事を思い出し、星は密かにため息を吐いた。星はどうして張遼達が董卓の元で戦っているのかを知りたかったのだが、その理由をしんのすけは聞いてないのかそれとも聞いたはずなのに忘れたのか、星へこう告げたのだ。

――――とーたくさんをお助けしたいからだって。

その言葉が本当に理由とは星は知らない。優しい董卓を助けたいから二人は戦っているのだと。いかに星でも董卓が本当はどんな人物かは知りえないために。そんな風に星が考え込んでいると、話し合いも既に終わったのか春蘭がある事を口にした。

「そういえば華雄が劉備達に捕らえられたと聞いたが、本当か？」

その言葉に星は思考から意識を脱却して視線を動かした。事情を

聞き出せる相手がいたと気付いたからだ。

「ええ。でも、ずっとだんまりを決め込んでいるらしいわよ」

春蘭の問いかけに桂花がややどうでもいいという風に答えた。現在、華雄は桃香達の捕虜となっていた。しかしあれ以来一言も話す事はなく無言を貫いていた。それでも桃香は構わなかった。華雄が告げた最後の言葉。それだけで董卓が悪人ではないかもしれないと思う事が出来たのだから。

そんな事を知らない星だったが、出来る事なら会って話をしたいと華琳へ願い出た。自分は洛陽で再会を誓い合った相手。ならば華雄も何か教えてくれるのではと。その言葉を聞いて華琳は即座に理解を示した。

桃香へ話を通しておくから明日の朝に会いに行くといいと告げたのだ。それに感謝を述べ、星は視線をしんのすけへと向けた。出来る事ならしんのすけも連れて行き、理由についてはっきりした事を教えてもらおうと思ったのだ。

「しんのすけ、明日華雄殿へ会いに行くぞ」

「お、かゆーのお姉さんに？」

「そうだ」

「ほっほーい、かゆーのお姉さんとお話出来るぞ。でも、愛紗お姉さんと戦ったって聞いたけどお元気にしてるかな？」

しんのすけがどこか心配するような声を出すとそれに春蘭が笑って答えた。

「安心しろしんのすけ。ああいう奴はそう簡単に弱らんからな」

「あんたが言うと説得力があるわ」

桂花が告げた皮肉に気付かず春蘭はそうだろうと胸を張った。それに呆れる桂花。華琳達は苦笑を浮かべしんのすけと季衣だけは何故笑っているのかが理解出来ず不思議顔。それでも、春蘭が嬉しそうに見えたので二人も嬉しそうに笑みを浮かべる。

だがそんな中、凪がしんのすけの言葉から思い出したかのようにぽつりとある事を告げた。

「それにしても、関羽殿は強かったな」

「せやな。華雄ちゅうのも弱い訳やなかったけど、関羽はんの方が上やったわ」

「沙和じゃ五合ともたないのー」

華雄と愛紗の戦いを遠くからではあるが見つめていた凪達。その強さを目の当たりにし星と互角との話に偽り無しと実感したのだ。それを聞いて稟と風も頷いた。二人は星からしんのすけの帰還を手伝ってくれる相手と聞いていたため、その強さを見る事で複雑な気持ちになった。

今はいい。だが、これが群雄割拠の様相を呈すれば嫌でも華琳と桃香はぶつかる事となる。そうなれば愛紗の強さは厄介でしかない。それでも、こうも思うのだ。あの力を自分達へ貸してもらえれば、もっと早く乱世を終わらせる事が出来るのにと。

そう思うと同時に稟はある事を懸念して華琳へ告げる。

「華琳様、お願いですから関羽殿を欲しいと言わないでください」

「あら、どうして駄目なの？」

「関羽さんは劉備さんと義姉妹だとか。それを本当に手に入れるとなると、劉備さんもいなければお話にならないのですー」

風は言外に桃香の傍でなければ愛紗の真価は発揮出来ないと告げた。それを華琳も感じ取ったのかやや考え込んだ。華琳は桃香の在り方を認めていない訳ではない。偽善を自覚しながら、助けられるだけ助けようとする姿は潔いと思えたからだ。

それでも、自分とは相容れないとは思っている。全てを助けたいとする桃香と自分に従う者は助ける華琳。その差は埋めるには深い。故にどうするかと思案する。どうすれば愛紗を手に入れ、その心を自分に帰順させる事が出来るかと。

（関羽は劉備と一蓮托生。では、無理矢理奪うのではなく、劉備自身にその縁を切らせる事が出来れば……）

そんな事を考える華琳。それに気付く事なく季衣はしんのすけと流琉の三人で鈴々の事を話していた。

「張飛ちゃんも結構頑張ってたね」

「そーだね。鈴々ちゃん、かっこよかったもん」

「む、でも僕らの方が凄いんだから。ね、流琉」

「もー、季衣はすぐに張り合おうとするんだから」

季衣の言葉が鈴々への対抗心からのものと理解し苦笑しながら流琉は答えた。しんのすけの親友である鈴々。それに季衣は少しだけ嫉妬しているのだ。自分はまだ友人でしかない。その思いがそこにはある。

しんのすけはそんな季衣の気持ちは知らない。だが、彼にとっては友人と親友の差は明確にある訳ではない。鈴々の事を親友と呼んだのは、やはり真名の預かり方にも関係しているのだ。心から真名を預けたいと思いしんのすけへ告げた鈴々。だからこそ、しんのすけは親友と呼んだのだから。

「だいじょーぶ。季衣ちゃんも流琉ちゃんも強いってオラ知ってるよ。てゆーか、オラからすればみんなスゴイ人ばっかりだ」

「いや、私からすればしんのすけも凄いと思うんだが……」

季衣へそう言いながらも途中からは今まで出会った者達を思い出して、自分を納得させるように頷くしんのすけ。それに凪が真面目に返す。星の槍捌きを受け続け、それによって回避能力には目を見張るものがあるしんのすけ。

凪がそれを例に出してやるとしんのすけはそんなものだろうかと思って小首を傾げる。しんのすけとて、最初から今のような事が出来る訳ではなかった。星が徐々に速度を上げていったからこそ、それを避ける事が出来るようになったのだから。

だから、その事を踏まえてしんのすけは返す。自分に出来る事は誰にでも出来るはずだと、そう思って。

「凪ちゃんも毎朝すれば出来るぞ。オラだって、最初は星お姉さんにたくさ～ん転がされたよ？」

「こ、転がされた……」

「何や、想像するとおもろいな」

「でも実際そうでしたね。私達も知っている限り、毎朝少なからず擦り傷などを作っていましたから」

しんのすけが星に槍で突かれてころころと転がされる様を想像し真桜は笑う。それに稟が苦笑しながら旅している頃を思い出して補足した。星も風も懐かしむように頷き、凪へ視線を向けた。

「望むのなら、星ちゃんがしてくれますよー？」

「えっ？」

「ああ、以前もしていたような事だ。もっとも、今後はあの時とは違い全力で付き合ってもらうが？」

星の言葉に凪は一瞬驚いた表情を浮かべるが、すぐに真剣な表情に戻り是非と返した。それと同時に凪はしんのすけへ視線を向け、ある事を果たして欲しいと頼んだ。それは以前別れの際に約束した事。

そう、星を手こずらせる動き――ケツだけ星人を見せて欲しいとの約束だ。それを聞いてしんのすけは星へ視線を向ける。それに星は不敵な笑みで頷いた。許可する。そんな笑みだ。だが、それがどう見てもよくない類の笑みだったため、華琳達が疑問符を浮かべた。

「星、その動きというのはどういうもの？」

「そうですな……一言で言えばしんのすけにしか出来ぬ動きです」

「何だと？　そんな技があるのか、こいつには」

「信じられんな」

華琳の問いかけに星はやや真剣な表情で返す。それに春蘭と秋蘭が疑うような表情を見せ、桂花も同じような顔をしていた。稟と風は生憎と知らないため、真桜や沙和からの質問に自分達も見た事はないと返した。

しんのすけ本人は季衣と流琉に同じ事を聞かれ、秘密だと返した。自分の得意技だからとだけ答え、二人がどんなものかと予想して告げるが、当然正解どころか近い答えさえ出る事はない。そのため、しんのすけと星が同じように不敵な表情で笑う。

そんな二人に気付いた者達が揃って苦笑を浮かべていく。まるで親子か姉弟のように見えたのだ。そんな和やかな雰囲気のまま、この日の話し合いは過ぎて行くのだった……

その頃、虎牢関では張遼達が敗北したとの知らせを聞き、呂布が陳宮へ今後の事を相談していた。

「……どうする？」

「う～ん……華雄は捕らえられたらしいですが霞はこちらへ向かっ

ているようですので、ここで連合軍に一度打って出てみるのも手ですぞー」

「……いいの？」

呂布は賈駆が言っていた言葉を思い出しながら尋ねた。それに陳宮は胸を張って頷いた。呂布の武は天下無双。一騎当千の力を持っているため、それを存分に発揮させる事で連合軍の勢いを削ぐ事が出来る。それに、長時間ではなく短時間ならば関に張遼を残しておけば不安も少ない。

そう陳宮は告げて呂布へ窺うような眼差しを向ける。それは呂布への負担が大きいからだ。だが、そんな陳宮の視線に呂布は小さく頷いた。そして、手にした方天画戟を軽く振って視線を？水関のある方向へ向ける。

――……何が来ても、恋が月を守る。

その眼差しは普段のどこか抜けたものではなく飛将軍と呼ばれる鋭いもの。それに陳宮は心から嬉しそうな笑みを浮かべると、同じ方向へ視線を向けて叫んだ。

――いつでもかかって来いなのですぞーっ！

？水関の戦いは連合側の勝利で幕を閉じる。次なる戦場は虎牢関。そこで待つは、たった一人で三万もの軍勢を打ち倒した呂布奉先。彼女がしんのすけへ容赦無く戦場の現実を叩きつける事になる。星に待つ苦い再会。それはもうそこまで迫っていた……

ーーー

第三話

「趙雲、それにしんのすけか……」

「久しぶりですな」

「かゆーのお姉さんさっきぶりぃ」

虎牢関へ向かう準備をそれぞれがしている中、しんのすけと星は桃香達の陣を訪れて華雄との面会を果たしていた。華琳から連絡を受けた桃香達はしんのすけ達ならばと承諾し、本来ならば見張りなどを立てるのだがそれさえも無しにして、華雄との面会をさせていた。

そこには、星の希望と互いが顔見知りだという点が関係している。桃香達では聞けなかった事も二人ならば聞けるのではないかと。そう期待した桃香の指示によるものだ。

「やはり参加していたのだな。ま、しんのすけと出会った時点で分かっていたが」

「ええ。しかし、出来る事なら参加する前に洛陽に赴き、貴殿か張遼殿に事情を聞いてみたかったのですが……」

「気にするな。お前が聞いた頃にはもう情勢は決まっていたのだろう？　それで、董卓様の事を聞きに来たのか」

「いえ、私は洛陽の現状を知りたいのです」

星がそう言うと華雄はどこか拍子抜けしたような顔をする。しか

し、その意味を理解したのか苦笑して答えた。未だに混乱は続いていると。十常侍は数を減らしたが残っている者もいる。それがいるせいで中々事後処理も進まない。

それだけ言うと華雄は星を手招きする。それが意味する事に気付き、星も静かに華雄の傍へと近寄った。その背後には同じように気配を殺し、忍び足で歩くしんのすけがいる。

「董卓様は平和を望む温和なお方だ。出来る事なら助けたい」

「……やはりそういう事ですか。分かりました。色々と厳しいですが私に出来る範囲で手を尽くしてみましょう。幸か不幸か分かりませんが張遼殿を曹操殿が欲しがっています。私が相手取る事になっていますので、上手く事情を告げ出来る事なら張遼殿と共に董卓殿の事を考えてみます」

華雄の言葉から星はおそらく董卓の存在を疎ましく思う者の陰謀だろうと見当をつけた。その星の言葉にあった張遼の話に複雑な表情を浮かべる華雄だったが、そこにもう一つの声がした。

――ね、とーたくさんってどんな人？

それがしんのすけのものだと気付き、二人は苦笑した。ついその存在を忘れていたのだ。何せしんのすけは星と華雄が話を始めた時から黙っていたのだから。

華雄はしんのすけの問いかけに答えようとするが、ある事を思い出して一つ約束させる。それは、決して今から聞く事を誰にも教えるなという事だった。その理由を何となく察して星はしんのすけへ告げた。これは、一人の人の命を預かるにも等しい事だと。

「いいな？」

「ほい。オラ、ぜったいに誰にも言わないぞ」

「……董卓様は色白で紫の目をされた可憐な方だ」

「お姉さん？」

「お前からすればな。背丈としては……張飛だったか。あいつよりは高い」

その華雄の言葉を聞いてしんのすけは頷くと今聞いた情報を自分なりに総合して想像し始めた。だが、その姿が何かと被って見えてしんのすけは思わず小首を傾げる。そう、洛陽を去る日に見た馬車の少女。それを思い出したのだ。

（なんでだろ？　どーしてかあの子の事を思い出すぞ……）

しんのすけが疑問に思うのも仕方ない。華雄が告げた答え。お姉さんとの言葉と鈴々より少し背が高いとの特徴。それをしんのすけが正しく捉えられるはずがなかった。

まず、馬車の中で座っていたから正確な背丈は分からない。更にしんのすけからすれば少女はお姉さんではなかった。こうして変に情報を得たために、しんのすけは気付けなかった。自分があの日出会った少女。それこそが董卓なのだと。

こうして二人は華雄へ礼を述べ、桃香達へも軽い感謝を述べると華琳達の元へと戻って行った。その背中に桃香達の複雑な思いのこもった視線を受けながら……

それから時間は経ち、ようやく虎牢関に展開した連合軍。その数を見て張遼達はやや嫌な表情を浮かべていた。理由は一つ。その数にある。最初こそ来た来たと笑っていた張遼だったが、それも徐々に苛立ちへと変わるのに時間はあまりかからなかった。

今はうんざりとした表情でその光景を眺めているのだから。陳宮も最初こそ強気だったが、その数があれよあれよと膨れ上がっていくのを見て、戦意喪失したような表情となっていた。

「やっぱ嫌になるな、これは……」

「予想以上なのです……」

張遼は前回の戦いの時にも感じた数の多さに呟き、陳宮はその張遼の報告以上の戦力に泣きそうになっていた。しかも、あの時は袁術軍が先陣を切り、それと入れ替わるように劉備軍と公孫賛軍が主に攻めていた。

つまり、華琳率いる曹操軍は最後の最後にしか攻めていなかったのだが、今回は最初から華琳達が先陣を切るのだ。その意気も質も連合軍の中では抜きん出ていると言ってもいい軍勢だ。更にその後ろには大軍の連合軍がひしめいている。そんな光景に、陳宮が事前に考えていた作戦を変える必要があるかと思いだした時だ。陣容を眺め、沈黙していた呂布が口を開いた。

――――数なんて関係ない。みんな、やっつけるだけ。

それは一人で三万もの軍勢を相手にした者だからこその言葉。そして自分達が勝たねば、多くのものが失われる事を知っているからこその言葉。元よりそれしか道はないとばかりに呂布が告げると、張遼と陳宮が笑みを浮かべた。

――せやな。元からそれしかなかったわ。

――さすが恋殿なのです！　ねねもそのつもりで心構えをするですぞー！

英傑とは、こういう者を言うのだろう。一言だけで周囲を鼓舞する事が出来るのだから。それには実績だけではなく、呂布の人柄もある。有言実行。穏やかにして寡黙だからこそ、その闘志を秘めた言葉は重い。

迫り来る連合軍を見つめ、三人は鋭い視線を向ける。特に呂布と張遼は全身から殺気にも近い闘気を放っていた。それを受けながらも陳宮は恐れる事無く告げる。相手に一泡吹かせてやろうと。それに二人も無言で頷き返すのだった……

虎牢関に着いた華琳達は、籠城戦のつもりで作戦を立てていた。だが、それを実行に移す前に予想だにしない報告が入る。何と相手が打って出たというのだ。それに思わず桂花が叫ぶ。

「嘘でしょ！？　春蘭でもあるまいし！」

「何故私を引き合いに出すっ！」

その発言に春蘭が当然のように怒鳴る。周囲はそんなやり取りに内心苦笑を浮かべつつも、表情は凛々しいままに詳しい報告を聞く。どうも相手は関を出ただけで、深く攻めては来ていないとの事。ま

るで攻めてくるのを待っているかのように、門前で待ち構えているそうなのだ。しかも、門を閉める事無く。

そう聞いた華琳は思い当たる事があったのか、こう問いかける。旗は何だと。それに返ってきた言葉に誰もが納得する事になる。

――真紅の呂旗ですっ！

呂布奉先。その恐ろしさを連合軍の中で一番知る華琳達だからこそ、その報告に成程と頷いた。そう、華琳達に呂布の恐ろしさを教えた存在がいたのだ。その者達が官軍で一番に挙げた恐ろしい相手こそ、呂布だったのだから。

「……人和の言った通りだとすれば、迂闊な事は出来ないわね」

「華琳様、それは誰です？　私は初耳の相手なのですが」

星は華琳の告げた名前に反応を示した。初めて聞く名だったからだ。すると、それに答えたのは華琳ではなく桂花だった。人和とは、黄巾の乱を起こしたと言われている張三姉妹の末っ子。実は張角達は死んでおらず、華琳に協力する約束で生きているのだと、そう桂花は語った。

星は一体何故と思うのだが、稟が詳しい話はまた後日と打ち切り、視線を華琳へ向けた。華琳はそれに頷き、春蘭と秋蘭へ視線を向ける。それだけで二人は頷き返し、季衣と流琉へ視線を向けた。

「季衣、いいな。油断するなよ」

「はいっ！」

「流琉、お前は初陣だ。もし何なら今回は――」

「いえ、私も行きます！　秋蘭様達を守るために、そして季衣を守るためにもっ！」

四人が意気を高めているのを眺め、星は手にした槍を握り締める。自分も行かねばならないと思ったのだ。相手は呂布。あの日洛陽で出会った相手。覚えているかは分からないが試してみる価値はあると踏んだのだ。

「華琳様、私も出撃許可を頂けますかな？　呂布殿にも一度挨拶をしておきたいので」

「いいでしょう。ただし……」

「張遼殿が出てきた場合はそちらへ向かいます。どれだけ疲弊していても勝ってみせましょう」

星がそう言い切ると華琳は満足そうに頷いた。だが、それを聞いたしんのすけが星へ問いかける。呂布に会いに行くのかと。それに星は小さく頷き返す。すると、しんのすけは星へある頼み事をした。

「またセキトとシロを遊ばせてやって欲しい？」

「ほい。セキトとシロって少ししか遊べなかったから、今度はもっと遊ばせたいんだ」

星はそんなしんのすけの言葉にどう返せばいいかと迷うが、意を決して笑顔で頷いた。ちゃんと伝えておいてやると。それにしんのすけは嬉しそうに笑みを見せシロを抱き上げる。そんな二人のやり

取りが終わったのを見て、華琳は周囲へ告げる。

それは、この戦いへ向かう全ての者達への鼓舞。相手に飲まれる事無く戦えるようにと言い聞かせる一種の呪文。

「聞け！　曹の旗に集いし勇者達よ！」

その声だけで全ての音が消える。誰もが一言たりとも聞き逃すまいと耳をそばだてるように身構え、ただその続きを待つ。それを感じながら華琳は続けた。

「この一戦こそ、今まで築いた我らが風評を真実と知らしめるための戦い！　黄巾を討った実力が本物であると、天下に見せつけなさいっ！」

その言葉に春蘭達だけでなく星も頷いた。自分がその力を華琳達へ再度示す絶好の機会だったのだ。だが、その視線が一瞬だけしんのすけへ向けられる。しんのすけは華琳の傍でシロと共に大人しくしていた。

戦を嫌うしんのすけ。その気持ちはどうなのだろうと思い、星は槍を持つ手に力を込める。願わくば、この戦が最後の戦になってほしいと、いつものように思いながら。

「総員突撃！　相手は寡兵だが油断するなっ！　その力を存分に振るい、食い破れっ！」

その声に雄叫びを返し動き出す春蘭達。それを見送り、しんのすけはシロを風に預けて華琳へ問いかける。

「ねぇ、華琳ちゃん」

「何？」

戦場の方を見つめ、華琳はやや険しい声を返す。それにしんのすけは怯む事無く口を開いた。

――どうしても戦わないとダメ？

その問いかけに華琳は即座に頷いた。そして、しんのすけへ告げた。

――しんのすけ、この戦いをしっかり見ておきなさい。目を逸らしたくなったら逸らしてもいいけど、その時はもう私の傍には立たせないからそのつもりでいなさい。これから進む道は今から始まる光景ぐらい当然になるのだから。

その言葉の裏には、この後起きるだろう事を予想した華琳の優しさと厳しさがあった。呂布隊を相手にして無事で済むはずはない。そんな光景に耐え切れないようなら、しんのすけを二度と戦場には連れてこないようにしよう。その反面、これぐらいを耐え切れないのなら傍付きではいさせない。そういう華琳の背反する思いがそこにはあった。

「いい？」

「ほい」

だが、意外な事にしんのすけはそんな華琳の言葉に素直に頷き、視線を迷う事無く戦場へ向けた。そんなしんのすけに若干呆気に取られる華琳と桂花。一方稟と風はやはりと思い複雑な表情を浮かべ

ていた。
あの盗賊と星の戦い。その結果を目を逸らす事無く見つめたしんのすけ。ならば、きっと華琳の問いかけにも頷き従うだろうと思っていたのだ。しかし、それがどんな結末をもたらすかまでは予測出来ず、二人はしんのすけにも華琳にも何も言えずにいた。

そして、遂にその瞬間がやってきた。しんのすけの視線の先で、呂布へと向かった兵士達が一瞬にして斬り捨てられる。飛び散る血飛沫。響く断末魔。それを見つめても、しんのすけは逃げる事無く立ち続けた。ただ、しようと思っていた事が出来なかった。
それは声援。せめて声だけでもとそう考えていたのだが、それを忘れてしまう程の光景だった。彼に出来たのは、辛うじてその視線を何とか呂布のいる場所へ向け続ける事だけだった。そんな彼に華琳が告げる。今、兵士達を殺したのが呂布だと。

（あれがセキトのお姉さんっ！？　あんなに優しそうなお顔してたのに！？）

その言葉にしんのすけは信じられないとばかりに目を見開いた。遠目に見える呂布の姿。それが無表情で躊躇いなく向かってくる兵士達の命を奪っていく。その光景を見て、しんのすけは愕然となった。あの時と同じで、自分が知る優しいはずの者が誰かを殺す現実に。
それでも、しんのすけは流れ出そうな涙を堪えていた。泣いている場合じゃない。自分は呂布を止めに行かないといけない。そんな風に思い直し、しんのすけがその場から動き出そうとした瞬間、その視界に見覚えのある者達が映る。それがしんのすけの足を止めた。何故ならその光景は、彼が一番見たくない光景だったのだから……

風を裂いて鋭い斬撃が煌いた。並みの者ならそれだけで命を失うだろう一撃。それを放った春蘭は、平然とそれを受け止める相手に舌打ちをしたくなった。

「くっ！」

「……お前、弱い」

「なっ……舐めるなぁ！！」

挑発の類ではなく、心からそう思っての発言に春蘭は怒りを爆発させた。そんな怒りの一撃が呂布を襲う。だが、それを呂布はまるで子供をあしらうように弾き飛ばす。それで態勢を崩して隙を見せる春蘭へ追撃を掛ける呂布だったが、それを怪力の持ち主である季衣と流琉の攻撃が止める。

「させないっ！」

「春蘭様、今の内に体勢をっ！」

「すまんっ！」

「……力は強い……でもそれだけ」

季衣と流琉の力を受けながらも呂布はそう呟くと、再度繰り出された二人の攻撃を見て、手にした方天画戟に鉄球の鎖とヨーヨーの鎖を敢えて絡ませ、引き千切らんばかりに引っ張った。

その意外な怪力に季衣と流琉が意表をつかれたのか思わず体勢を乱した。それを好機と取り、呂布が二人へと走る。そこへ風を裂いて何かが飛来し、呂布の足を止めた。それは矢。呂布はそれを確認すると同時にその場から後方へ軽く跳んだ。

「季衣、流琉、大丈夫か！」

「「秋蘭様っ！」」

「……弓は、少し厄介」

秋蘭は呂布の足を止める事に成功すると同時に矢を番え、再度構える。その間に季衣と流琉も体勢を整え、再び戦闘態勢へと戻った。春蘭も手にした七星餓狼を構えて隙を窺うものの、その隙がなく額には汗が流れていた。

誰もが呂布の強さを感じ取りながら、機会を窺う。すると、呂布が何かに気付いて視線を動かした。それに春蘭達も僅かにだが視線を動かす。そこにいたのは……

「久しぶりですな、呂布殿」

「「「「星（さん）！」」」」

「……誰？」

「やはり覚えていませんか。では、綿のような犬は覚えていませんかな？　シロという名の犬です」

星はどこかで予想していた返答に苦笑しながらも、告げた内容に呂布から当てられる殺気が次第に弱くなるのを感じて小さく息を吐

いた。どうやらシロの事は覚えているようだと。呂布はその予想通り、ややあってから頷きを返した。星はそれに内心安堵し、ならばとこう告げる。

――そのシロの飼い主の少年と共にいた、と言えば思い出してくれませんかな？

――……しんのすけと一緒にいた人……？

呂布がそう言うと、星は小さく頷き再び名乗る。それを聞いて呂布も思い出せたのか、小さく頷き返した。だが、それでも隙はなく、同時に構えも解かない。星はそれを当然と受け止め、槍を構えて春蘭達へ視線を向けた。同時に手を出すなとばかりに片手で制するような動きを見せて。

それに春蘭達は驚くものの頷いて、呂布へ意識を集中する。危なくなった際、いつでも星を援護出来るようにだ。呂布は星が自分の敵になったと理解し、無表情のままで方天画戟を構え直すと最後に一つだけ尋ねた。

「……シロとしんのすけ、元気？」

「ええ、華琳様の傍……曹操軍の本陣にいます。なので、出来ればそこは見逃して頂きたいですな」

「……全部は無理。でも、シロ達だけは考えてみる」

「それは重畳。それとしんのすけから伝言です」

「？」

「シロとセキトをもう一度遊ばせてやりたいとの事。出来るか否かはともかく、その気持ちだけは覚えておいて欲しいものですな。では、趙子龍参るっ！」

星が伝えたしんのすけとシロの現在位置。それに呂布は僅かにだが意識を向け、困ったように返事を返す。それに星は頷き、更に伝言も伝えて最低限の目的は達したとばかりに先陣を切るように動いた。

その全力の突きを呂布は事も無げに避ける。余裕さえ感じさせるそれを見て、星は怒りではなく感心を抱いていた。自分の予想を遥かに超える動き。それを目の当たりにしただけではない。呂布はそれを避けながら、自分へ助言をするかのような言葉を言っていたのだから。

「……結構速い。でも、まだ駄目。力みすぎ」

「そうですか……ならば、これはどうですかな！」

「……良くなった」

どこか嬉しそうな呂布。星も思わず笑みが浮かぶ。だが、そんな雰囲気もそこまで。銅鑼の音が鳴り響いたのだ。それを聞いて呂布は星の槍を払う。そして、すぐにその場を走り去ろうとする。先程の銅鑼の音は帰還の合図だったのだ。

だが、自分達へ躊躇う事なく背を向けて走り去る呂布に対し、侮られたと取ったのだろう。春蘭が思わず追いかけるように動き、その手にした剣を振りかざして襲い掛かろうとした。

「簡単に逃げられると思うなっ！」

「っ？！　くっ、間に合えっ！」

そんな春蘭に呂布は僅かに視線を動かした。その視線を見た秋蘭は嫌な予感を感じ、即座に番えていた矢を呂布目掛けて放った。呂布は後ろから斬りかかる春蘭へ振り向く事無く、手にした方天画戟を振り払うように動かそうとした。だが、少しだけその動きが変化した。秋蘭の矢を払うための動きも加えたためだ。

それが本来であれば春蘭の腕を切り落とすはずだった斬撃を、軽く傷付ける程度へと抑えた。それでも負傷した事で春蘭はそれ以上の追撃を断念し、去り行く呂布を見つめるしか出来なかった。

「……くそっ！」

「春蘭様っ！？」

「分かってはいたが、ここまでとはな」

悔しげに地面を叩く春蘭。それを見つめながらも、閉じて行く門へ視線を動かす秋蘭。季衣は春蘭へ駆け寄り、腕の傷を見て小さく安堵した。流琉もそれと同じような表情を浮かべ、秋蘭へ指示を仰ぐ。

それを聞きながら、星は一人呂布が去って行った方向を見つめ、小さくため息を吐いていた。周囲には曹操軍の兵士が倒れている。春蘭達が呂布を相手取る前に彼女と戦い、一瞬で命を刈り取られた者達だ。それが流した血が大地を赤く染め、星に否応無く呂布は敵でここは戦場である事を認識させる。

「星さん、一旦退却しましょう」

「……そうだな」

流琉の言葉に星は苦々しく答え、踵を返す。その視線の先には季衣と共に動く春蘭の姿があった。

「春蘭様、大丈夫ですか？」

「ああ、これぐらい平気だ」

「しかし姉者、無理はしないでくれ。最後のは本気で肝が冷えたぞ」

華琳達がいる本陣まで戻る中、どこか安堵したような空気を漂わせる秋蘭達。星はそれに笑みを浮かべそうになるも、今後の事を考えてすぐに表情を引き締め直す。呂布だけでも今のように手玉に取られたのだ。ここに張遼がいればどうなるか。そう考え、星は呟く。

――思っていた以上にやり難いものだな、顔見知りと戦をするのは……

「……そう、春蘭は無事なのね」

「はっ、右腕に軽く傷を負いましたがそこまで大きな傷ではありません。ですが、呂布相手にはそれでさえ致命傷です」

華琳は秋蘭からの報告に息を吐いた。万全の状態で呂布と戦った春蘭達。それが結局一撃も加える事が出来ないまま、撤退まで許してしまった。それが意味する事を考え、華琳は決断した。呂布を手

に入れるのは諦めると。
そして、星へ無言で視線を向ける。それに星は頷き、再度出撃するための準備へと向かった。張遼は何としても手に入れろ。その華琳の言葉を理解したのだ。それを察して華琳は視線を戻すと、周囲へ気になっていた事を尋ねていく。

「秋蘭、季衣と流琉はどう？」

「多少気落ちしていますが凪達が傍にいますし、すぐに立ち直るでしょう。季衣は姉者がやられた事で余計に気合を入れるかと」

「そう……では桂花、呂布が単騎ではなく部隊を連れ、更に張遼と共に出て来た時はどうするの？」

「劉備達を利……頼りましょう。しんのすけが危険に晒される可能性があるとなれば、借りになどせずに手伝うはずです」

「呂布さんはしんちゃんを狙わないと言っても、部下の方までは分かりませんからねー。関羽さんに張飛ちゃんの力があれば、春蘭様と星ちゃん抜きでも呂布さん相手に五分の戦いが出来るかとー」

しんのすけがいる事に配慮し、桂花はそう告げた。そんな桂花の意見に内心は心苦しいものを感じながらも、風も冷静にそれを後押しした。呂布が星へ告げた内容は聞いたものの、部下までそれを守るとは言えないと思う事で。稟はそんな二人の意見に頷き、軽く眼鏡を指で押し上げながら華琳へ告げる。

「そのために私が劉備殿の陣へ出向きます。呂布を追い詰めれば確実に張遼が出てくるでしょうから、星はそのために風から説明を聞いて欲しいので。残る私が使者としては適任かと」

「……いいでしょう。ならば、稟は劉備へ協力を打診し、打ち合わせをしてきなさい。桂花は秋蘭と共にその時の動きを話し合い、風は張遼への対応を説明して準備を進めて」

「「「「御意」」」」

華琳の言葉に四人は返事を返し、素早く動き出す。風は星へ張遼をおびき出すための段取りを説明し、秋蘭は桂花と共に季衣達がいる場所へと向かっていく。稟は素早く桃香達の陣へと向かう。華琳はそれらを見送り、しんのすけへ視線を向けた。しんのすけの足元にはシロが擦り寄っているものの、先程から一言も発せず、ただ戦場を見つめていた。

その背中が泣いているように見え、華琳は静かにその後ろへと近付いた。そして華琳が見たしんのすけは、戦場に向かって両手を合わせていた。目を閉じて祈るように。その意味が分からず、華琳は問いかけた。

「しんのすけ、何をしているの？」

「クゥ？」

華琳の接近に気付いたシロが視線を動かす。その目も悲しみに満ちている気がして、華琳はシロの頭を軽く撫でた。それにシロは小さく嬉しそうな声を出して目を閉じる。そんな様子を見る事なく、しんのすけは華琳へ答えた。

「……死んじゃった兵隊さん達に、ごめんなさいって謝ってるんだぞ」

「ごめんなさい……？」

「オラ、たいりく防衛隊なのに何も出来なかった。セキトのお姉さんを止める事も、お声だってかける事が出来なかった。だから、ごめんなさいって」

華琳の問いかけにしんのすけはそのままで静かに答えた。涙は流していないが、その声はどこか悲しみに満ちている。そこには、華琳へ言わなかった事も関係している。それは自分の知っている者達が戦をした事。

星達と呂布が戦うのを見て、しんのすけは動く事が出来なかった。いや、正確には動こうとはした。だが、それを華琳が制止したのだ。覇王の声と表情で。

――星達を信じなさい、しんのすけ。

それに込められた思いに気付いて、しんのすけが足を止めたのだ。星達は呂布に負けない。そして、呂布もまた星達には負けない。そうしんのすけには聞こえたのだ。故にしんのすけは足を止め、静かに華琳の横へと戻ったのだから。

華琳はそんな事を思い出しているしんのすけにどう言葉をかければいいのかと戸惑う。戦場で兵士が死ぬのは当たり前だ。死者無しの戦などない。しかし、それを伝えても意味がないと悟っていた。

そう、しんのすけが既に乱世の不条理を見ていると気付いていたのだ。呂布が一瞬にして多くの兵士達を殺した瞬間。それをしんのすけは目を逸らす事無く見つめていたのだから。それに、今は華琳としんのすけにシロしかその場にいない事も関係していた。無理に覇王としての自分を示す必要がなかったのだ。

「……しんのすけ、その言葉は違うわ」

華琳がそう言いながらしんのすけの肩に手を置いた。結局思いついたのは、しんのすけの言葉がある意味では傲慢だと教える事だった。しかし、その声は戦場にいるとは思えない程優しいもの。それにしんのすけは何か言う事無く黙って続きを待つ。

「助けられなかった事に謝罪するのは、助ける力のある者がする事よ。貴方にはそんな力はない。ならば、するのは謝罪ではなく感謝よ」

「……ありがとうって事？」

華琳の告げた内容にしんのすけは確かめるように尋ねる。そんなしんのすけに華琳は無言で頷いた。そして、告げる。命を賭して自分を守ってくれた存在への感謝。それは、その犠牲を忘れずに生きる事とそれを無駄にする事無く進む事。

必ずその犠牲者達が報われたと思える世の中にする。それこそが、生かしてもらった自分達が出来る最大の礼。そう華琳は締め括った。その言葉は難しい部分もあったが、しんのすけにも大筋は理解出来るように華琳は語った。

その華琳の言葉を聞いてしんのすけは心から尋ねるような眼差しを向けた。そして、同時に問いかける。

「華琳ちゃん、オラって間違ってたのかな……？」

「私はそう思うけど、どうかしら？　貴方が今後、力をつけて助けられるようになりたいと願うのなら、それは間違ってはいないかもね」

「……そっか」

そんな華琳の優しい声に、しんのすけはそう噛み締めるように返し、戦場から華琳へと体を向けた。そして華琳へ頭を下げる。ためになる事を教えてくれてありがとうと、そう言って。それに華琳は苦笑しつつも、どこか嬉しそうにその頭を撫でる。

「気にしないでいいわ。私も忘れそうになる事を改めて思い出せたのだから」

「そうなんだ……じゃ、おあいこって事で～」

「まったく……ふふっ、そうね。お互い様かしら」

「キャンキャン」

先程までの神妙さが嘘のようなしんのすけの陽気さに、華琳は呆れながらも笑みを浮かべて答えた。そんな雰囲気を感じ取り、シロが嬉しそうに声を出す。その戦場とは思えない空気感は、桃香達との話し合いが終わった稟が戻ってくるまで続いたのだった……

「すまんな、手を借りる事になってしまって」

「気にするな星。呂布とやらの強さは私達も見ていた。確かにあれならば複数でもなければ無理だろう」

「それに、しんのすけを守るためなら無問題なのだ」

星は隣にいる愛紗と鈴々の答えに感謝するように軽く頭を下げ、すぐに視線を前に向けた。

「張飛、あいつかなり力も強いからな」

「絶対一人で挑まないようにね」

「分かってるのだ。それはさっき眼鏡のお姉ちゃんに散々言われたのだ」

鈴々は稟が告げた内容を思い出し、苦い顔を浮かべていた。最初こそ一旦一人で挑もうとも考えた鈴々だったが、稟がこう言ってそれを嗜めたのだ。もし万が一鈴々が怪我でもしたらしんのすけが悲しむから止めて欲しいと。

そう言われては鈴々も無理は出来なかった。親友であるしんのすけを悲しませる事など鈴々には出来ない。自分ならばと思ったのだが、星と互角の春蘭さえ呂布相手に怪我を負わされたという事実もそれに納得を与えていた。鈴々は星と戦い、勝敗を決した事がない。つまり、自分も同じ事になる可能性が高かったのだ。

「私は季衣と一緒に援護するから……」

「鈴々は愛紗と一緒に攻めるのだ！」

「そういう事！　僕らの力で呂布に目にもの見せてやろう！」

「「「おーっ（なのだ）！」」」

しんのすけを通じて仲良くなった三人は笑顔で声を合わせる。そんな声を聞いて笑みを浮かべる愛紗。すると、そこへ涼やかな声が掛けられた。

「関羽、お前が攻撃の要だ。しっかり頼むぞ」

「承知している。それに夏侯淵殿の援護もあれば、そう簡単には遅れは取らんだろうしな」

秋蘭の言葉に愛紗はそう返すと信頼の笑みを見せる。それに秋蘭も笑みを返して頷いた。陣営こそ違え、今は目的を同じにする者同士。ならば警戒心などは必要ない。背を預ける仲間として、今は手を取り合えばいいだけだ。

そう思い、二人は笑みを見せた。そんな二人を見つめ、春蘭は悔しそうな表情を浮かべる事しか出来ない。腕の怪我は大した事はないのだが、それでさえ呂布と戦うには問題になると華琳に判断され、彼女は呂布の部下達を相手にするようにと命じられていたのだ。

「関羽、秋蘭に怪我をさせたら承知せんぞっ！」

「……分かっている。妹が心配なのは分かるが夏侯惇殿こそ油断しないようにな」

「何をっ！　私が呂布の部下如きに遅れを取ると思っているのか！」

愛紗はその言葉にやや苛立ちを感じ、拳を握り締めた。そんな愛紗に気付き、喧嘩腰の春蘭へ秋蘭はため息を吐いて告げた。

「姉者、それぐらいにしろ。関羽、すまんな。姉者は自分が呂布と

戦えない事が悔しいのだ」

「それは私にも分かる。武人たる者、戦の借りは戦で返したいと思うのは当然だからな」

「……だそうだぞ、姉者。関羽も姉者の無念は理解している。それに呂布を相手に出来ずとも、その周囲を抑える事は並みの者では出来ん。姉者だからこそ、華琳様もそれを託してくださったのだ」

「そ、そうか？」

「うむ。そう思わないか、関羽」

愛紗はそこへ秋蘭の狙いを理解した。春蘭への命令もかなり重要なのだと思わせ、こちらへの未練を断ち切ろうとしているのだと。故に愛紗は真剣な表情を浮かべ、頷いてみせる。

「そうだな。私もそう思うぞ。曹操殿は夏侯惇殿だからこそ、安心してその命を託したのだろう」

「そうかっ！　華琳様は呂布と戦えない私の無念を知って、この命を与えてくださったのだな！」

「姉者、頼むぞ。我らが呂布を相手にしている間、そちらを抑えていてくれ」

「任せろっ！」

満面の笑みで答える春蘭を見て、愛紗と秋蘭は小さく笑みを見せ合う。ただし、愛紗は呆れが混じったもので、秋蘭は微笑ましいも

のという違うはあったが。

そんな彼らを凪達は不思議な気持ちで見つめていた。彼らは星に協力して、張遼の部下達を抑える役目を負っている。そのため、星の近くで待機していたのだが、目の前の様子には正直意外な印象を隠せなかった。

桃香の義姉妹である愛紗と鈴々。それが春蘭や秋蘭、季衣に流琉と笑みさえ見せて会話している。そんな光景がどこか不思議に思えたのだ。確かに今は連合軍として協力している。それでも、普通であればどこかぎこちなさがあるはずなのだ。

しかし、今の彼らからはそれが見られない。その理由を考え、凪は一つの結論に達した。

「そうか……しんのすけがいるからか」

「そういえば、しんちゃんって関羽さん達の真名を預かってたのー」

「成程なぁ。つまり、関羽達はしんのすけを守るっちゅう理由でウチらと一致団結しとるんやな」

真桜の言葉は的を射ていた。本来ならば他人行儀なはずの桃香陣営。それがどうしてここまで親しげにしていられるのか。それは天の御遣いであるしんのすけがいるからだ。彼を守りたいとの思いが利害関係を考えずに手を組ませていたのだから。

ただ、曹操軍は華琳を守る事の方が比重が重いのだがそれでもその傍にいるしんのすけを守るとの思いもあるのは確か。こうして即席ではあるが、劉備軍と曹操軍の将による共同戦線が成立したのだった……

懲りずに現れた曹操軍を見た陳宮は、ならばと呂布へもう一度出撃してもらうよう頼み、虎牢関の門が再び開かれた。しかも将の中に華雄を倒した愛紗がいたので、念のために呂布隊も連れていくようにと。

しかし、今度はさしもの呂布も苦戦を強いられる事になった。理由は、呂布隊を春蘭が抑えた事に加えてもう一つ。星と春蘭がいなくなった代わりとして参加した愛紗と鈴々。一騎当千の武を持つ二人が主軸となった事で、軍師達の予想通り呂布も余裕を持つ事が難しくなっていたのだ。何せ二人は義姉妹。その連携は春蘭と秋蘭にも負けないものだったのだから。しかも、春蘭と秋蘭と違い、二人は完全に接近戦。そこに秋蘭の弓による援護と季衣に流琉といった怪力による攻撃が呂布を襲った。

更に秋蘭達は先程の戦いを教訓として動く事で、より的確に愛紗と鈴々を支えて呂布を次第に追い詰め始めた。そんな呂布を助けようとする呂布隊は春蘭が完全に押さえ込む。そんな風に彼女を孤立無援にさせていた事も影響し、誰の目からも危機としか見えない状況となっていた。

それを見て焦った陳宮は、張遼へ援軍に行ってもらうよう打診。それが桂花達の計略通りとは気付かず、張遼はそれに応じて部隊を率いて呂布救出に向かったのだが……

「今だっ！　総員、迎え撃て！」

「行かせるな！　なの！」

「秋蘭様達の負担を増やすんやないでっ！」

凪の号令に呼応し、沙和が、真桜が叫ぶ。それに応じて兵士達が張遼隊へ攻撃を開始する。そんな中、張遼は自分の目の前に現れた人物へ視線を合わせて、現状を理解していた。

「お待ちしていましたぞ、張遼殿」

「……趙雲か。成程な、全部ウチを引きずり出すための準備ちゅう訳やな」

門を出て呂布達へ接近しようとした瞬間、張遼を迎え撃つように星と凪達率いる部隊が強襲を仕掛け、救援を阻止したのだ。星は単身、張遼との一騎打ちをするためにその前に現れ、馬から降りて静かに槍を構えた。張遼はそれに応えるように馬から降りると偃月刀を構えて、その視線を星へ向けると周囲に響き渡る声で叫んだ。

「ええかっ！　誰も手ぇ出すんやないで！　出したら誰だろうと命はないと思いっ！」

「こちらもだ！　誇りある曹操軍の兵として不意打ちの類など決してするな！　すれば私が即刻首を切る！」

互いに周囲への手出し無用を命じて、二人は複雑な表情を見せ合った。

「……こないな状況ではやりとーなかったわ」

「同感ですな。ですが、これが定めだったのでしょう」

「かもしれんな。……一応聞くわ。華雄はどないしとる？」

星の答えに苦笑し、張遼はため息を吐いた。そして尋ねるのは戦友の事。捕まったと知ってはいる。だが、星の口から詳しい事を聞きたかったのだ。それを察してか、星もその問いかけに即座に応じた。

「無事です。桃香殿……劉備殿の下で捕虜となっています。扱いについてはご安心を。私自身も会って確かめましたので」

星の言葉に張遼は小さく安堵し、気を取り直して視線を鋭くした。それが武人のものと理解し、星は身構える。最早言葉はいらないと、張遼が無言の内に告げたと理解したのだ。

そこで星は華雄からの頼まれ事を思い出した。そのため伝えたい事があったのだが、それは最早戦いが終わった後しかないと思い、手にした槍へ力を込めた。

「行くでぇ！」

「応っ！」

張遼の一閃を星は槍で払い除ける。それが開始の合図。そこから星が神速の突きを繰り出せば、張遼はそれを負けじと防ぐ。そして星の息が一瞬疲れのために乱れた瞬間、張遼が待っていたとばかりに攻め手に転じた。

星に負けず劣らずの激しい攻撃。それがどこか愛紗を思わせるのは、得物が同じ偃月刀だからだろうか。ともあれ、星は張遼の攻撃を時に捌き、時に流しながら耐える。先程の張遼のように一瞬の隙を窺い、そこをものにするために。

しかし、それを張遼も熟知している。なので、自然な隙ではなく作為的な隙を作る事でそれを阻止する。星はその隙が作られたものだと分からぬ訳ではない。よって、攻撃をする事が出来ないまま張遼が呼吸を整えるのを許す事になる。

だが、星とてそんな事を二度も許すはずはない。同じような事を張遼が再度仕掛けた時、星は敢えてその作為的な隙を狙った。当然ながら張遼はそれに対応するも、星はその動きを読んでいた。愛紗との手合わせや今回の張遼との戦いで、その動きや考え方をある程度推測していたのだ。

「させへんでっ！」

「くっ！」

そんな星の反撃も張遼には通じなかった。しかし、そこから星が攻め手に転じて張遼を再び追い詰めるべく攻撃を再開。その槍捌きを張遼はいなし、或いは弾いていく。

「へっ……結構速いやないか」

「速度を神速の張遼に褒めてもらえるとは……思いませんでしたな」

どちらも引かず譲らずの戦いだったが、それが戦場である事を忘れる程楽しいとばかりに笑みを見せ合う二人。そして、一旦互いに距離を取ってそこから仕切り直してもう一度と、そうどちらも思った瞬間だった。そこしかないと思ったのか、そんな二人へ割って入る声があった。

――申し上げます！

睨み合うように星と対峙する張遼。そこへ一人の兵士が声を掛けた。それは華琳の兵でも張遼の兵でもない。陳宮の兵だった。彼は張り詰める緊張感の中、意を決して張遼へと近付いた。当然、張遼がそんな彼を横目で睨みつける。

「何やっ！　今、見ての通り取り込み中や！」

その眼光に僅かに怯む兵士だったが、それでも意を決して張遼へと近付き、その耳元で告げた。

――賈駆様から急使です。虎牢関を捨て、洛陽へ即時撤退するようにと。

その内容に張遼は目を見開いた。防衛戦と言っていた賈駆。それが虎牢関を捨てて洛陽まで後退しろと言う状況を考え、張遼は一つの要因に思い当たった。

「なっ？！　……分かった。すぐ戻る」

（くそ十常侍共やな！　ちっ、詠の奴どこが大丈夫なんや！）

内心で悪態を吐きつつも、すぐに了解の意を返す張遼。星との戦いが盛り上がっていた事も相まってか、その表情は不機嫌そのものだった。

「はっ！」

それに若干の焦りを見せるも、兵士はその場を去って行く。その走り去っていく兵士へ一度として視線を向けず、張遼は星へと告げた。勝負を預けさせて欲しいと。事実を知る星としては、何とかそ

れを飲んでやりたい。だが、飲めない理由があった。

「何か急ぎのようですが……正直、私としてはここで貴方を捕らえねば華琳様の信頼を失うのですよ」

「捕らえる、な。そういう事なら……」

星の言葉に張遼は何かを悟り、不敵な笑みを浮かべて大声で叫んだ。

――張文遠は趙雲以外と勝負せーへんっ！　ええか！　それ以外が来たらどうなっても知らんからな！　よー覚えとけっ！

それを周囲は聞いて呆然となったが、星だけはそれがどういう意味かを察した。張遼は自分がむざむざ逃がしたとしても、再戦可能なように周囲を証人としたのだろうと。華琳が張遼を欲しがっていると星は先程言外に告げた。

それを理解した張遼なりの華琳への宣言だったのだ。自分が欲しければ星以外を差し向けるなと。張遼は星へこれでどうだと視線で問いかける。星はそんな彼女に苦笑する事しか出来ない。見れば呂布も既に撤退を終えていて、残るは張遼達のみとなっていた。

「張遼殿、次はありませんぞ？」

「分かっとるわ。これ、借りにしといたる」

「いえ、私が信頼を失わずに済む機会を残してくれたので貸し借りなしで結構。さ、お早く。董卓殿が危険なのでは？」

「趙雲……お前ほんまに……」

「華雄殿に会ったと言ったはずですが？」

そう言って星は視線だけで張遼へ馬に乗るように急かした。張遼はそれに応じ、馬へ素早く乗ると駆け出した。星の最後の言葉から、彼女が華雄を通じて真実を知ったと理解して。これは意外なところから助けられる可能性が出来たかもしれない。そう思いながら張遼は急いだ。

それに呼応し、張遼隊が撤退を始める。その去って行く姿を見送りながら星は大きくため息を吐いた。前回と違い、直接対峙した今回は逃がした事を責められる。それ自体は構わないのだが、それで変な疑いをかけられる可能性がある。その事だけが星の不安の種だった。

（何か上手い言い訳を考えるか？　……ふむ、稟辺りに相談するとしよう）

華琳と桂花を相手にするのならそれぐらいしないといけないだろうと思い、一人頷く星。そこへ張遼隊を相手していた凪達がやってきた。どうも相手のほとんどが騎馬だった事もあって追撃は諦めたらしい。そんな三人は張遼の去って行った方向を見つめ、星へ問いかけた。

「星様、良かったのですか？」

春蘭と互角の星を凪は様付けで呼ぶ。星は以前と同じ殿でいいと告げたのだが、生真面目な凪は以前は客人だった事もあって様と呼ぶ事は出来なかったが、本来であれば自分よりも実力者の星を様付けするのは当然と返し現状に至る。

その凪の声は何となく事情を察しているような声だった。おそら

くそうなのだろうと察しをつけた星は、それでも問い詰める事無く信じているような凪の振る舞いに感謝しながら頷いた。

「あ～あ、逃げられちゃったのー」

「これ、華琳様に叱られるんちゃいます？」

そんな星を責めると言うよりは、同情するような声の沙和と真桜。こちらは凪と違って気付いてはいないようだったが、その優しさには星も嬉しく思い苦笑混じりにこう返した。

「そうだな。まぁ、正直に話してみるさ」

その答えに三人が星らしいと感じて笑みを浮かべる。それを横目にしながら星は馬へと乗った。先の事を考えても仕方ない。そんな風に開き直り、星は凪達へ自分達も虎牢関に突入すると告げると視線を後ろへ向けた。視線の先では、呂布がいなくなった事で虎牢関への門を阻む者がいなくなり、袁紹軍を先頭に次々と突入しようと走って行く連合軍の姿があった……

――――――

次回、遂に反董卓連合の戦も終結……予定。洛陽の城攻めから頑張って董卓軍敗北まで描ければ……いいなぁ。

第四話

虎牢関に張られた華琳の天幕。そこに不満そうな表情の華琳と疑うような眼差しの桂花、それに普段の飄々とした顔の星の姿があった。張遼を見逃した事についての説明中なのだ。

他の者達は今回の戦いによる被害を受け、軍の再編などを行っている。しんのすけは邪魔にならぬようにという名目でシロと共に桃香達の陣へと遊びに行かされていた。勿論、そうさせたのは華琳だった。呂布の行動と星達との戦いに受けた衝撃を少しでも癒せるようにとの配慮である。

「それで逃がしたのね？」

「あそこで下手に止めるよりも恩を売る方が良いと思いまして。張遼殿の性格からしても、これで負かした際にこちらへ引き込む事が出来る可能性が高くなったかと」

咎めるような華琳の言葉に星は澱みなくつらつらと答える。まるでそれが自分の元からの考えであるように、だ。当然、それは稟からの入れ知恵なのだがそうとは思えない程の見事さで星は言い切った。

どこかでそれに気付いているのだろう華琳だったが、飄々とした星のその胆力に目を細めるとやや楽しそうに頷いてみせた。自分の鋭い視線を受けても平然と受け流すその態度。それが味方ながら中々食えないと思わせたのだ。

「……いいでしょう。聞けば張遼自身も星を指名したようだし……次こそ期待に応えてもらうわ」

「はっ！　この槍に賭けて！」

華琳の言葉に星はそう凛々しく答えると、一礼して天幕を後にした。それを見送り、華琳は桂花へと視線を向けた。

「さて……桂花はどう見るかしら？」

「おそらく繋がってはないかと。もしそうならば、張遼との一騎打ちで見逃す理由をあからさまにはしないはずです」

桂花の言葉に華琳も納得したのか、小さく頷いて視線を星が去った方向へ向けた。星が華琳へ告げた逃がした理由。それは、張遼が伝令からの報告を受け、勝負を預けて欲しいと言ってきたからだと。それがあまりにも正直過ぎたため、桂花も星が董卓軍と繋がっているとは思えなかったのだ。

もし繋がっているのなら、せめて不覚を取って逃げられたなどと言えばいい。もしくは、止めようとしたが邪魔が入ったでも構わない。しかし、星は一切包み隠さず話し、凪達の見てる中でそれを見送ったのだから。

これが星ではなく、軍師のような言動に裏がありそうな者ならば桂花も繋がっている事を疑う。しかし、星は軍師ではなく武人だ。ならば、この言動が意味するのは疑われても構わないとのものだ。つまり、星は自分が繋がっていないからこそ張遼を敢えて見逃したと言えた。全ては、華琳のために張遼を確実に味方とするために、と。

「そう。まぁ、もしそうならば、しんのすけと星は最初から董卓陣営へ加わっていたでしょう」

「……ですね」

華琳の締め括りに桂花も納得しながら、息を吐いた。自分でさえ気が付けば、しんのすけ達を信じたいと思い始めていると感じたからだ。確かに華琳の言う通り、しんのすけと星の性格ならば連合軍へ潜入し、董卓軍の利になるように動くなどはしない。そんな事を考えるような者達ではないからだ。

そんな考えに対して、疑問を欠片も抱かない自分。それが桂花のため息の訳だった。そんな桂花に気付き、華琳は小さく笑うとこう言った。

――――心配する必要はないわ。星は味方よ。しんのすけも、ね。

呂布や張遼と直接戦った華琳達と違い、桃香達はそこまで損害を受けなかったために比較的再編などに時間を取られず済んでいた。そんな陣中で、久しぶりにゆっくりと会話するしんのすけ達の姿があった。

最初こそ呂布関連の事が尾を引いてどこか暗かったしんのすけも、桃香の穏やかな雰囲気に触れて次第に明るさを取り戻し、今では普段の調子を取り戻していた。

「そっかぁ。しんちゃん達は袁紹さんや孫策さんとも仲良しになってるんだね」

「うん、えんちゃんもだよ」

「袁術殿までそんな呼び方か。お前はやはり天の御使いだな……」

しんのすけの告げた名前が誰かをすぐに理解し、愛紗は苦笑しながら答えた。名門だろうと親しげに呼ぶ事が出来る関係を築き上げる。そこに愛紗は天の御遣いとしての存在感を感じていた。

それは傍で聞いている諸葛亮と鳳統も同じ。桃香だけはそれに軽い驚きを見せながら、他の話を聞いていく。聞きたい事は山ほどあるのだ。自分達がいなくなってからの事や旅の思い出などと、挙げればきりがないのだから。

それにしんのすけが答えていく中、鈴々が食べ物の話で涎を垂らしたり、諸葛亮と鳳統がそれぞれの街の様子などで興味を示したり、愛紗は星と手合わせして勝利した文醜に感心したりとそれぞれに反応を返す。

そんな中、桃香が反応を見せたのはこの話だった。それは孫策の事。星から聞いた孫策の話。街を歩き、住んでいる者達の意見を自分で聞いて政に反映させるとのそれは、桃香にとっていいお手本に感じられたのだ。

「孫策さんはそんな事をしてるんだ……」

「そーだよ。あ、星お姉さんが桃香ちゃんとさくのお姉さんは気が合いそーって言ってたぞ」

「私と？」

桃香の問いかけにしんのすけは大きく頷いた。桃香は星が言っていた言葉から、自分と孫策が気が合いそうとの意味を理解する。それは、どこか似た部分があるからだろうと。

それに気付き、桃香はふと思う。今度孫策へ会いに行き、治めている場所を良くするために何をしているか聞いてみようと。自分がしている事を話して、孫策のしている事を詳しく聞けばもっとお互いの治める場所が良くなるはずだと、そう考えて。

「シロ、お前は少し痩せた感じがするのだ。ちゃんと食べてるのか？」

「キャン」

桃香がどうやって孫策と会話するキッカケを作るかを諸葛亮へ相談する横で、鈴々はシロと楽しげにじゃれていた。それを羨ましそうに見つめる者がいた。それは鳳統。引っ込み思案なところがある彼女は、自分もシロと遊びたいと思いながらも言い出せずにいた。

そんな彼女の視線に気付き、シロが自分から鳳統へと近付いた。そして、軽く驚く鳳統へ顔をすり寄せると、甘えるような声を出す。それに鳳統が柔らかく微笑み、しゃがんでその頭を撫でた。その感触が普通の犬と違う事を実感し、嬉しそうに笑う鳳統。

「くすっ……シロちゃんはふわふわしてるんだね」

「クゥ～ン」

「シロが甘えてるのだ。雛里もやるのだ」

「鈴々ちゃんこそ、シロちゃんが嬉しそうにしてるよ」

シロを互いに優しく撫でながら、笑みを見せ合う二人。そんな光景に愛紗は小さく笑みを浮かべるが、それがすぐに曇った。そう、しんのすけが選んだのは華琳。自分達とは今後の事を考えれば敵対

する可能性があるのだ。
　勿論、桃香達はしんのすけ達と戦いたくはない。それでも、華琳の考えが自分達と噛み合わないのは理解している。つまり、この連合軍の間はこうして触れ合い、笑い合う事が出来るだろうが、その後は定かではないのだ。

（しんのすけに曹操殿の元ではなく、こちらへ来るように言ってみるか？　……いや、無駄だな。それにもうしんのすけ達は曹操殿達に受け入れられている。そこへ我らがしゃしゃり出ては妙な事になりかねん）

　愛紗が弟のように思っているしんのすけ。それが選んだのが華琳だった事に最初は驚いたのだが、どこかで仕方ないとも思っていた。華琳の下には稟と風がいる。それだけでもしんのすけには大きな要素だ。
　そう思い、愛紗は自分を納得させたのだ。しかし、どうしても思う事がある。もしも、もしもしんのすけと最初に出会ったのが自分達であれば。そんなありもしない事を考えてしまうのだ。それならばしんのすけは自分達を選び、この光景が当然のものだったのだから。

　そんな事を思い、微かに悔しむ愛紗。自分では稟や風の代わりにはなれなかったと、そう思った瞬間、愛紗は自分に呆れた。誰かの代わりになどなれるはずはない。そう気付いたのだ。
　あの白蓮の城で過ごした時間もそうだった。自分はしんのすけの母代わりにはなれなかったと、そんな事を思い出したために。そのため苦笑しながら愛紗は視線を動かして、その先の光景に小さく微笑んだ。そこには、シロと遊ぶ鈴々に鳳統と一緒になって笑うしんのすけの姿があった……

連合軍が洛陽への進路を歩き出した頃、その洛陽の城にある庭では董卓達が揃って話をしていた。穏やかな談笑風景だったが、その裏では董卓が知らないある事が行われていて、それを知る者達はそこから何気なく抜け出し城壁の上へと移動していた。

「月に手ぇ出そうしとった奴らは全部片付けといたわ」

「……そう。ありがとう」

張遼の言葉に賈駆は無表情で礼を述べた。残っていた十常侍は董卓軍の旗色が悪い事を知ると、即座に保身のために動き出した。そして、董卓の身柄を連合軍へ引き渡す事で命だけは助けてもらおうとしたのだ。

それを察知した賈駆だったが、自分一人では守り切れない可能性が高いと判断。故に虎牢関を守っていた張遼達を引き戻し、その対処に当てたのだ。呂布は董卓の護衛。張遼は十常侍の相手として。

「しっかし、あいつらの厄介さは性質悪いなぁ。知っとった気でおったけど、あれは相当やったわ」

張遼の言葉に賈駆は何も返さない。汚い仕事をやらせたと自覚しているからだ。武人である張遼にそんな事をさせたくはなかったが、頼める相手が彼女しかいなかった。そのため、賈駆は心を鬼にして十常侍の始末を頼んだのだから。

そんな彼女の心境を読んだのだろう。張遼はどこか悔いるような賈駆を見て、一瞬だけ嬉しそうな笑みを浮かべるもすぐにそれを消

して、仰々しくため息を吐いた。

「……はぁ～、賈駆っちが気にする必要ないわ」

「っ……でもっ！」

「そこまでや。……すまん思うなら、最後の最後になったら全ての責を負ってみせ。月を助けるんやろ？」

何かを賈駆が言おうとするも、それを遮って張遼はそう問いかける。その言葉に賈駆は何も言えない。しかし、僅かな沈黙の後、力強く頷いてみせた。それに張遼も満足そうな笑みを返して告げる。

「まぁ、それなら最後まで付き合ったるわ。乗りかかった船やしな」

「当然よ。私が操る大船に乗ったんだから、ね」

互いに不敵な笑みを見せ合いながら歩き出す二人。思いは一つ。董卓を助けたい。それを果たすために、今一度思いを新たにする張遼と賈駆だった……

遂に洛陽まで辿り着き、攻城戦を開始した連合軍。しかし、それが中々難航していた。数日間にも及ぶ城攻めにも関らず、未だに攻め落とせていないのがその証拠。

原因はやはり董卓軍の激しい抵抗と連合軍の連携の悪さにあった。華琳達と桃香達が呂布戦で見せたのは、あくまでも将単位での話。

部隊単位ともなれば、違う陣営の軍が見事な連携を取るのは難しいと言わざるを得ないのだ。

それだけではない。この遠征も始まってそれなりに時間が経ち、後少しとなったところでの足止めだ。攻める兵達の士気も下がっていく一方だったのだから。

「不味いわね」

「ええ。徐々にですが、我が軍も士気が落ちています」

桂花の呟きに稟がため息混じりに返す。もう攻城戦を開始して数日が経過した。だが、一向に進展する気配がないのだ。それも手伝い、士気の低下は曹操軍にまで起き始めている。ならば、他の諸侯も同じかそれ以上に酷い状態だと理解するのは難しくない。

「今も袁紹さんが攻めていますが、おそらく効果は期待出来ないでしょー」

風が告げた言葉に桂花も稟も頷いた。それは袁紹軍だからという意味ではなく、どこがやっても現状のままでは同じ事だと感じていたのだ。それでも、何とか手はないかと考える三人。

そんな中、華琳も現状を打破する手段を考え続けていた。このままでは泥沼となる。それだけは避けなければならない。しかし、中々いい案が出ないのだ。気分を変えようと思い、華琳は視線を動かした。その動かした先にはシロと戯れるしんのすけの姿があった。

「ふむ……しんのすけ、ちょっと来なさい」

「ほーい」

華琳は気分転換と情報収集を兼ねてしんのすけから天の話を聞こうと思ったのだ。そう、聞き方によっては思いもよらない事が出てくるかもしれない。そんな思いを抱いて。

「ねぇ、しんのすけ。天には城はあった？」

「お城？　う～ん……むかしはあったよ」

「そう。じゃ、城の弱点や壊す方法は知らないかしら？」

「そーだね……バクダンとか？」

しんのすけが思い出したのは、春日の城が攻められた時の記憶。投げ込まれた爆弾の威力や恐ろしさを思い出しての発言だった。華琳はしんのすけの説明と響きからその意味を推察するも、それは使えないと内心で却下。

火薬は貴重で簡単に使える物ではなかったし、当然ながらここにはない。しかし、しんのすけがそういう事にも多少知識があると知れたので、華琳としては思わぬ収穫と言えた。

「成程、火薬を使って爆ぜる玉を天では爆弾と言うのか。天では火薬が容易に手に入るのかもしれないわね。他には？」

「えっと……うんと……」

懸命に思い出そうとするしんのすけだが、その知識は当然少ない。それでも考えるしんのすけに華琳は微かに微笑むと、ならばとこう告げた。何でもいいから今あったら便利な物を挙げろと。

勿論、華琳としては城攻めに対して便利な物という解釈での言葉

だった。だが、それにしんのすけが頷き、ならばと即座に答えた物は本当に言われたままの意味だった。今あったら便利な物。それは……

――コンビニだぞ！

その発言にその場の全員が疑問符を浮かべた。それに気付いたしんのすけがコンビニの説明をしていく。いつでも開いている便利な店。休む事無く営業し続け、食べ物や本に雑貨などを扱う庶民の味方だ。自動販売機も浮かんだのだが、それはジュースしか買えないと思い止めた。

そう、しんのすけは常々思っていたのだ。小腹が空いたとしても、夜になっては食べ物を買える場所もなければやっている店もないと。それに、コンビニはそれこそあちこちに点在している。それがもしあれば、ここでもチョコビが買えて漫画などが立ち読み出来るのだと、しんのすけは思い出すように告げた。

「それに時々てーいんのおねいさんがびじんな時もあるし～」

「……やっぱりあんたも男よね」

しんのすけがにやけて告げた言葉にうんざりする桂花。華琳は苦笑し、稟と風は実にらしいと小さく笑う。だが、しんのすけはそんな桂花へこう返した。

「あ、桂花ちゃんがてーいんさんなら、オラ毎日会いに行くぞ。カワイイから」

「なっ！？　来られても困るわよ！　と言うか会うだけなの？！

物買いなさいよ！」

「あは～、桂花ちゃん照れてる～。それと、オラ子供だからお金がないぞ～」

「照れてないっ！　それにあんたにお金がないのなら――――っ」

しんのすけの反論に桂花は親と行けと返そうとして、それをすんでのところで飲み込んだ。それは言ってはいけないと思ったのだ。天から一人大陸へ遣わされたしんのすけ。それがどれだけの間家族と離されているかは桂花とて知っている。

そんな子供へ言っていい言葉ではない。そう思い、桂花は飲み込んだ言葉の代わりにこう返す事にした。しんのすけは桂花が一旦言葉を切ったので、どうしたのだろうとその続きを待っていたからだ。

「なら、働いて稼ぎなさい！　公孫賛の城で雑用をしていたんでしょ！」

「あ、そっか。でも、オラのお仕事なんてあるのかな？」

「ふん、心配しなくても城に帰ったらあんたにも仕事をしてもらうわ。あんたでも出来る雑用なんていくらでもあるのだから」

「おおっ！　ありがと桂花ちゃん。じゃ、出来るだけラクなのでお願いするぞ」

桂花の言葉にしんのすけは礼を述べつつも最後にらしい事を言うのを忘れない。そんな彼に華琳達は苦笑する。桂花の言い方はしんのすけが出来る仕事をちゃんと割り振ってやるとの約束だった。それは無理な仕事をやらせる事はしないと言外に告げていたのだが、

それをしんのすけは気付かない。

そうしてしんのすけと桂花のやり取りが一段落したのを見て、華琳が先程聞いたコンビニの内容を再確認していく。最初こそ呆れたが、その内容には興味を持ったのだ。なので、夜はどうやって明かりを取るのかと尋ねたり、深夜にも店を開けていて安全なのかなどと尋ねていく。

それにしんのすけは電気の事を教え、更に警報などのシステムを知っている範囲で教えて納得させた。漫画については絵本の一種だと華琳達は認識し、教養よりも娯楽思考の物だと判断した。

そんなコンビニ関連で陸遜の事を一瞬思い出すしんのすけだったが、それを華琳達に言う事はなかった。こうして、しんのすけの思わぬ話から天の安全性や利便性などを聞けて感心する華琳達だったが、ある事を思い出してその表情に笑みを浮かべた。

「……桂花、いい案を思いついたのだけど」

「はい、私もです」

「ふむ……日夜営業し続ける店、ですか」

「これはいい事に気付かせてもらったのですよー」

こうして、華琳は連合軍の諸侯を集めての軍議を袁紹へ提案する。この攻城戦を終わらせるために……

――昼夜無く攻め続ける?!

華琳の出した提案に全員がそう驚きを混ぜて声を出した。そう、華琳達はしんのすけの語った無休で営業するコンビニの形態から、そんな事を考え出したのだ。食事は攻められながらでも可能だ。攻め手が交替する時の隙を狙って済ませばいい。だが、睡眠はそうもいかない。

つまり間断なく攻め続ける事で相手の士気をとことん落とそうという考えだった。この時代、基本的に夜は非戦闘時間。夜襲なども確かに戦術としてあるが、それでもあまりしないのだ。それを考えれば、寝る時間もなく攻められる事がどれだけ恐ろしい事か。それを誰もがすぐに理解した。

「で、でも、どうやって昼夜無く攻め続けるのじゃ？　妾も夜は眠りたいぞ」

「そうね……一日を十二等分にしましょうか。そして、どこの時間帯を担当するかをくじで決め、その割り当て中はひたすらその部隊が攻め続ければいいのよ」

「……十二か。じゃ、それぞれの軍で振り分ければそこまで長い時間じゃないな」

華琳の意見に白蓮は成程と納得し、担当する時間もあまり長くないと告げた。それに周囲も異論はなく軍議は滞りなく進んでいったが、そこで手を挙げる者がいた。張勲だ。質問があるとばかりに華琳へ問いかけたのだ。

「あのー、もしこれが上手くいったとして、決戦の時は絶対日が出

てる時ですよねぇ。その前日に夜中の担当をしてたところはどうするんです？」

「仕方ないけど、方法は二つよ。撤退するか、そのまま参加するか、ね」

張勲の質問に華琳は意外と考えているなと感じながら平然と答えていく。それを聞いて聞き捨てならないとばかりに吼えた者達がいた。袁紹と袁術だ。二人は決戦に万全の状態で挑めないのなら意味がないと怒りをぶつけた。

無論、袁紹も袁術も功名心からではなく、純粋に正義を為すためにとの思いからの言葉だった。それを知る者は生憎本人達と限られた者だけだったが、華琳達大半の者からすればややうんざりするものだった。

「麗羽、袁術、貴女達は何のためにここへ来たの？」

「お～っほっほっほ！　それは勿論――――」

「洛陽を救うためじゃ！」

華琳の言葉に意見を揃えて告げる袁家の両名。まぁ、袁紹は自分の言葉を袁術に遮られる形になり、やや不服そうだったが。それに軽く周囲が苦笑するも、華琳はならばと口を開こうとした。だが、その前にある者が意見を出した。

「じゃ、こうしませんか？　一度決めたら絶対じゃなくて、毎日順番を繰り下げるんです。それで決戦前日に夜中の担当になったら、その日は自分の運が悪かったって事で納得しません？」

それは桃香だった。何かを言おうとした華琳を遮って、笑顔で告げられた言葉。それに全員が理解しようとやや考える。そして、周囲に理解の色が浮かび出したのと同じぐらいで、ある者がその意図を告げた。

「……つまり、劉備殿は担当決めのくじを一種の占いにするっていうのか」

「そうです。これなら納得出来ませんか？　誰だって、決戦当日に嫌な時間帯になったって事は運が良くないかもって思えるし。そこから無理するか大事を取ってお休みするかはその人の自由で」

桃香の提案の意図を気付いて馬超が告げた答え。それに桃香は笑顔で頷いた。袁紹と袁術はその意見ならばと賛成し、華琳としてもそれぐらいで納得出来るのならと敢えて口出ししなかった。その案には大きな欠点はない。日々の担当時間の変更は色々と問題があるのだが、それは後でいくらでも調整出来る。そう考え、華琳は桃香へ視線を向けた。

自分は一度きりの機会を物に出来なかったら、所詮それまでと袁紹と袁術へ言うつもりだった。だが、桃香はそれを決定ではなく誰もが納得出来る条件の案を告げてきた。

（面白いわね、劉備は。でも、やはり貴女は私とは相容れないようね）

自分との意見の違い。それはそのまま発想や思想の違いだ。相手を理詰めで納得させるのではなく、まず感情で納得させる。それを華琳は面白いと感じた。後で理屈はついてくる。もしくはつければいいとの考えにも聞こえるが、桃香の案はそこまで理屈がない訳ではない。

そう思い、華琳は小さく笑う。今は未熟なれど将来は化けるかもしれないと。それは、華琳が桃香をある意味で認めた瞬間だった。いつか自分の前に立ちはだかるのは桃香だろう。そう予想しながら華琳は周囲へ告げた。

「今の劉備の意見に異論はないかしら？　……じゃ麗羽、総大将として最終判断を下してくれる？」

「……何かとってつけたような言われ方ですけども、いいですわ。ならば、劉備さんの案を採用しましょう。早速くじを用意させますわ」

袁紹の言葉に顔良が頷き、すぐさまくじの準備を始める。その間、桃香は白蓮などから問題点となりそうな部分を指摘され、それをどうするかとの意見を言い合っていた。それを眺め華琳は思う。やはり桃香は協調性の人間だと。

他者を従えるのではなく、出来る限り共に歩こうとする。自分に従わぬでも、誰かに迷惑をかけないのなら見逃し、出来る限り協力しようとする。そんな桃香の思想をその光景から感じ取り、華琳は笑う。良き好敵手となれと願いながら……

「うぃ～っす……」

玉座の間に聞こえる気だるげな声。張遼は眠さ全開と言わんばかりの雰囲気を全身から出しながら、ゆっくりと足を進める。その先には呂布と陳宮がいる。賈駆もそこにはいるが、もう一人いなけれ

ばならない人物の姿はなかった。
それに気付き、張遼は体を軽く動かしながら問いかけた。董卓はどうしたと。それに返ってくた答えは一言。まだ眠っている。そう、連日の連合軍による昼夜を問わずの攻撃により、董卓軍は疲弊していた。兵数がではなく、士気が大幅にという意味ではあったが。

「……まさかこんな手ぇ打ってくるとはなぁ。数の有利があっての戦術やけど」

「ええ。実際やられた方としては堪らないわ。おかげで……ふぁ～」

「……ぐぅ」

「恋殿～、寝てはなりませんぞ～……ふみゅぅ……」

見事なまでに全員寝不足だった。当然だ。昼寝をしようにも攻められていては落ち着いて寝れるはずもないし、夜でさえも外からはひっきりなしに攻撃されているのだ。まともな神経であれば寝れるはずがない。
賈駆はまだ欠伸で止まっているが、呂布と陳宮などは既に立ったまま眠り出しているのだ。そんな二人を見つめ、張遼はこれ以上籠城戦をする訳にはいかないと思った。確実にこのままでは根負けするのが見えているからだ。

張遼がそう決意して視線を動かすと、その視線が賈駆と合った。その眼差しから相手も自分と同じ意見に達したと感じ、張遼は笑みを見せた。

「これはもう打って出るしかないな」

「そうね。なら、月を起こしてくるわ」

「ちょい待ち。まだ寝かせたり。月は戦う訳やないからな」

董卓を起こしに行こうとする賈駆を引き止め、張遼はそう優しい声で告げる。その思いに感謝しながら、賈駆も頷いて向き直る。そして、眠る呂布と陳宮へ視線を向けると、互いに苦笑。だが、こちらも呂布だけはぎりぎりまで寝かせようと意見を揃え、陳宮だけを揺り起こして二人は動き出す。

「相手は完全にこちらを包囲してるわ。気をつけてね」

「分かっとる。それでこそ戦い甲斐があるちゅうもんや」

外から聞こえる戦いの音に表情を引き締めながら、二人は歩く。ここで打ち勝たねば未来はない。そう思いながら……

次の日、城を攻めていた連合軍は、揃って相手の出方などから決戦が近い事を読み取っていた。抵抗が普段よりも弱かったのだ。そして、前日の夜中の担当を引き受けたのは孫策達。とはいえ、それは本来ならば彼女達がするはずではなかった。そう、敢えて引き受けたのだ。

そのくじを引き当てたのは袁術だったが、彼女はそれを心底悔しがりながらも決まり事故仕方なしと諦めようとした。だが、孫策がそれを自分が代わると言ったのだ。それは袁術への恩を売る事と自軍を消耗させないため。

もうこの戦で戦功を上げるのは厳しいと判断した孫策は、ならばとばかりに無理なく兵を下げられる方法を取ったのだ。ついでに袁術へ恩を売れるのならば一石二鳥だと。しかし、そこには孫策なりの気持ちも少しある。

いつかは独立し、戦う相手となるだろう袁術。しかし、それでも今の袁術は孫策には憎めない相手になりつつあったのだ。なので、少しぐらいしたい事をさせてやるかとの思いで、夜中の担当を代わったのだから。

「……さて、私達は高みの見物と行きますか」

「これで袁術の兵も減ってくれれば助かるのだがな」

孫策の言葉に周瑜がそう返す。そんな彼女の言葉に孫策は何故か返事を返す事は無かった。それに意外そうな表情を見せる周瑜を横目に、孫策はただ無言で視線の先を見つめる。そこには、門が開くのを今か今かと待ちわびる連合軍の姿があった。

実は孫策は、一人で決戦に参加するつもりだったのだ。しかし、それを周囲に気付かれて止められたのだ。兵を下げた以上、下手に参加するのは許さないと。孫策が参加するとなれば、護衛として動きたいと言い出す者達もいる。それを宥めたり、止める事に労力を使わせるな。そう周瑜が強く言い聞かせたのも大きい。なので、こうして仕方なく見物する事にしたのだ。

そんな風に城外の雰囲気が高まり出した頃、董卓軍の者達も城壁からそれを感じ取っていた。

「これが文字通り最後の決戦……やな」

「よく六万もいない軍勢で今日まで戦っていたものです」

張遼の言葉に陳宮が信じられないという声を出す。それに張遼が苦笑した。もし華雄が以前のままの猪武者であれば、それがもっと減っていたからだ。そう予想し、張遼は告げた。華雄が冷静な武将として動いたからこそ、兵数がこれだけ残っていると考えるべきだと。

それに陳宮だけでなく賈駆も納得して頷いた。同時に華雄がここにいればとの思いも浮かぶ。呂布や張遼程ではないが、将として華雄は頼りになる。その力がここにあれば。そう思うも、無いものを強請っても仕方ないとばかりに両者は一度だけ息を鋭く吐いた。

「よっしゃ、なら……恋、準備はええな？」

「……全部倒す」

「頼むで。……賈駆っちとねねは城の守りを頼むわ」

呂布の単純かつ力強い言葉に張遼は不敵な笑みを返し、視線を軍師二人へと向けた。それに二人も頷き、任せろと返す。そこへ時期を見計らったように兵士が状況を伝えてくる。既に城は四方を囲まれていて、いつでも攻められる状態になっていると。

それに全員が時は来たとばかりに頷き、表情を鋭くした。こちらの動きを読んでいるのは承知済み。だからこそ、ここは景気付けとばかりに張遼がある事を考え、一瞬だけ視線を賈駆へと向けた。それが意味する事を悟り、賈駆は頷き返す。

「ええか！　お前ら、聞けぇ！！」

「皆の者！　今までよく頑張った！　これが最後の決戦だ！　ここで勝利すれば、再び静かに眠れる日々が戻ってくるだろう！」

賈駆の鼓舞に誰もが耳を傾ける。その内容に、否応無くこれが勝っても負けても最後だという気持ちを高めていく。そして、出来る事なら勝って終わりたいとの思いも強くしていく。その戦意の高揚を感じ取りながら、賈駆は更に言葉を紡ぐ。

「しかし、もし少しでも退けば、その怯えがこの悪夢の日々を未来永劫続かせる事になる！」

それは兵達だけではなく、自身への言葉。弱気になるな。そう自分へ言い聞かせるように思いながら、賈駆は最後の言葉を力の限りに叫ぶ。

「我らの平和を、あの穏やかな日常を、略奪者から守るのだ！　総員、戦闘準備っ！！」

そう賈駆が噛み締めるように叫ぶと、それに呼応して雄々しい声があちこちから沸き起こる。そして誰もが動き出す。自分達の暮らしを守るために。その命の限り戦うために……

華琳達は城の方がにわかに活気付いたように感じ、攻撃の時を今か今かと待っていた。そこへ遂に待ちに待った報告が入る。

「報告っ！　城の正門が開いていきます！」

凪の言葉に誰もが表情を鋭くする。この長かった遠征の終わり。それが目の前まで迫っている。そう思い、全員が視線を華琳へと向けた。華琳は開いていく門を見つめ、凛々しいままに呟いた。

――――やっと来たわね、この時が。

そして、鋭く息を吐くと覇王の顔で周囲へ告げた。

「皆の者、聞きなさい！」

その声に全員が息を殺して続きを待ちわびる。自分達の主君が告げる内容へ、自分達を鼓舞し前に進む力となる言葉を一言も聞き逃さぬようにと。それに華琳も当然気付いている。だからこそ、その声にも熱が入る。

「ここが正念場！　この戦いに勝利すれば、長い遠征も終わる！だがっ！　もし奴らをあの城へと戻してしまえば、この遠征は終わりを失い続くだろう！」

勝利のもたらすものと敗北がもたらすもの。それを理解させるように華琳は告げていく。それは、自分にも再度理解させているのだ。ここで決着を着けろと。この戦を自分の望む形で終わらせるために。

覇王としての言葉の裏には、優しき少女としての思いもある。本来、戦乱を好む性格ではない華琳。それを殺し、仮面をつけるように気高い王として振舞う彼女の、紛れも無い素直な気持ち。それが、次の言葉に込められていた。

「この戦いばかりの日々を終わらせるのよ！　総員、戦闘準備っ！！」

それに誰もが動き出す。すると、門から董卓軍が現れた。桂花達がそれぞれに状況を把握する中、華琳は一瞬だけ視線を自分の横へと動かした。そこにはしんのすけがシロと共に立っている。

その視線を春蘭達へ向けて無言で立ち尽くしていたのだが、華琳が軽くその背を手で触ると意を決したように小さく頷き、春蘭達へ向かって思いを込めて告げた。

「オラ、ここでみんなが戻ってくるの待ってるから。ゼッタイに誰も負けないって信じてるぞ！」

「えへへ、心配いらないよしんちゃん」

「そうだぞ。お前はここで華琳様達と共に我らの活躍を見ておればいい」

「ほ～い。あ、この前にみたいにおケガしないようにね」

「なっ！？　あ、あれは少し油断しただけだっ！」

「だが姉者、もうあの時のような事は勘弁願うぞ。正直次は上手く援護出来るとは思えん」

先程までの雰囲気から一変し、いつもの脱力した声でさらりと春蘭へ告げるしんのすけ。それに反応を示す春蘭と冷静に突っ込む秋蘭のやり取りに、これから戦だと張り詰めていた雰囲気が少し和らいだ。桂花が軽い呆れを浮かべ、季衣達が笑みを浮かべるのを見てしんのすけがあはは と笑う。

（今ので適度に力みが抜けたようね。意識していないのがある意味

恐ろしいわ）

華琳は周囲の雰囲気からそんな事を感じ取った。決戦前に適度に力を抜けるというのは中々難しい。しんのすけの言葉は結果的に戦に向かう者達への何よりの激励と言えたのだ。

「じゃ、みんなおケガしないで頑張ってきて～」

しんのすけは本音を言えば華琳達と張遼達を戦わせたくなどない。殺し合いなどさせたくない。だが、それを止める事が今の自分には出来ない事を華琳によって理解させられている。だからこそ、自分に出来る事は星達の無事を願う事だと思ったのだ。

しかも、本当にしんのすけが望んでいるのは最後の言葉にある。誰も怪我などをしないで帰ってきて欲しい。そんな思いを込めた言葉に華琳達は小さく笑みを浮かべると、眼前の敵を睨むように視線を鋭くする。そして、華琳はしんのすけの作った流れを受けて一番張り切っているだろう者へ合図を出す。

「では春蘭、貴方の本当の力をしんのすけと董卓軍に見せてあげなさいっ！」

「はっ！　総員、突撃ぃっ！！」

その号令と共に雄叫びが上がり、兵士達が走り出す。それを見届け、しんのすけは強く拳を握り締める。もう自分に出来る事はない。もしあるとすれば、それは目の前の戦いを見守る事。そして、もう一つ。自分を守るために戦ってくれる者達へ感謝を捧げる事。

そうしんのすけは思い、血が流れ首が飛ぶような光景から目を逸らす事はしなかった。時折、その顔に怯えや悲しみが浮かぶものの、それこそが自分なりの戦いだとばかりに、足に力を入れて耐えなが

ら。

そんなしんのすけを見た華琳は、静かにその肩に手を置いた。ただそれだけだ。言葉も何もなく、ただ手を置いただけ。それでも、しんのすけはそれまでの光景に感じていた恐怖が弱くなった気がした。

（華琳ちゃん？　もしかしてオラを心配してくれてる……？　そうだ……オラは男の子だもん！　なら、華琳ちゃんに心配させちゃダメだぞ！）

それは男の意地。友達になりたいと思う少女から心配されたと感じ、しんのすけの中に湧き起こった気持ち。小さな意地は大きな勇気へと変わり、しんのすけの悲しむ表情は凄惨な光景を見ても先程よりも怯む事ない表情へ変わる。

その変化に気付き、華琳は意外に思いながらも優しく微笑む。それは覇王のものではなく、一人の少女のもの。すると、しんのすけはその視線を華琳へ動かした。それに華琳は慌てて表情を戻していく。

「っ？！　な、何かしら？」

「華琳ちゃん、ありがと。オラ、もう平気」

「別に礼を言われる事はしてないわ。私は丁度いい所にあった肩に手を置いて休んでいただけよ」

「え～っ、オラが心配だったんじゃないの？」

「馬鹿な事を言わないの。大体、ここはまだ安全なのだから心配無

用でしょ」

すっかり調子を取り戻したしんのすけを華琳は冷たくあしらいながら、その手を肩から離した。そんな華琳にしんのすけは少しだけ残念そうに肩を落とすも、すぐに視線を戦場へと戻した。

それを密かに見つめ、華琳は小さく笑う。桂花達はそれに気付かず、軍師として逐一入る戦況を聞きながら話し合いを続ける。何せ眼前の相手は張遼率いる部隊だったのだ。今は部隊の方を凪達が引き受け、張遼を星が相手取っている。

しかし呂布隊も出現していて、そちらへも戦力を割かねばならない状態となっていたのだ。

「呂布さんへは春蘭様と秋蘭様が季衣ちゃん達と向かっていますし、他の人もそこにはいるでしょうからまず負けはないかとー」

「劉備軍と袁紹軍が展開している辺りですからね。前回の事から考えても十分戦えるはずです」

「こっちは星が張遼を引き受けてるし、凪達は周囲を相手に立ち回ってる。これなら大丈夫か」

互いに勝利は固いと思える意見を出しつつ、それでも万が一を考慮して手を打つべく話し合う。曹魏を支える三人の賢者。それが本来よりも早い段階から噛み合い出し、その勝利を確実なものへと近づけていくのだった……

「相手は機動力が高い！　無理な行動はするなっ！」

「複数で相手すれば勝てない相手じゃないの！　怯むなっ！　なのっ！」

「無理に乗っとる人間を狙うんやない！　残酷やけど、馬の方を狙いっ！」

　凪達が張遼隊を崩していくように打ち破っていく。凪が先頭に立って道を切り開く中、沙和が、真桜が討ち漏らす事無く倒して進む。それから少し離れるように星は張遼と一騎打ちをしていた。それは以前よりも白熱していて、誰も近寄る事が出来なかった。下手に近寄れば、文字通り首が飛ぶような攻撃の応酬だったのだから。

　星も張遼も気迫十分と言わんばかりの顔で互いを見つめ、その手にした得物を振るっていた。それを凪達は張遼隊を抑えながら見て、鬼気迫るとはああいう表情を言うのだと感じていた。

「……楽しいなぁ、趙雲」

　血沸き肉躍る戦い。それに張遼は言いようのない興奮を覚えていた。部下への指示も忘れ、一人の武人として眼前の相手にのみ意識を向ける。それが例え死合と呼ばれる結果になっても構わないと思いながら。

　そう、前回と違いもう互いに後がない状態が一騎打ちを本当の死合に変えていたのだ。一撃一撃に生への欲求が込められ、打ち出される。それを時にかわし、時に弾いて渡り合う。それが心底楽しいと、そう思うからこその張遼の言葉に星が返したのは意外な言葉だった。

「楽しい、ですか……」

「どないした？」

「私は正直楽しくない。酒を交わし、言葉を交わし、約束を交わした相手と殺し合うなど……欠片として楽しめんっ！」

星は吐き捨てるように叫ぶと、それまでの口調を変えながら手にした槍を張遼の体を穿つように動かす。その神速の突きを張遼はかろうじて避ける。だが、その脇腹に掠り傷がついた。それに張遼が驚いたように視線を向けると、星は再び槍を構えた。

武人としては確かに嬉しいものがある。強者と戦い、自分の限界へと挑める事は。だが、彼女は出会った。誰かと戦うを良しとせず、誰もが笑って暮らせるようにしたいと願う少年に。そんな彼が自分と張遼が殺し合っている今の光景を見ればどんな顔をするのか。どんな気持ちになるのか。そう思うからこそ、星は張遼の言葉に武人ではなく”人”として吼える。

――それでもお前は楽しいと……しんのすけを前にしても言えるのか！　張遼ぉっ！

――っ？！

その言葉に張遼が気圧された。いや、戸惑った。星が憤怒の表情で放つ突きと共に告げた名前。それが熱くなった彼女の頭を、そして心を一瞬冷やした。洛陽で出会い、その不思議さに興味を抱いた少年。戦を起こさないようにと願い、華雄と自分へ簡単に怒らないで欲しいと告げたその姿が思い出されたのだ。

そして、それが勝負を終わらせた。星が放った怒りの突きへ張遼

は僅かに出遅れたのだ。振り払おうにも間に合わず、避けようにも遅すぎる。そして、星の槍が立ち尽くす張遼の腹部へ突き付けられた。

「……お前の……勝ちやな」

「いや、違う。勝ったのは私ではなく、しんのすけだ」

その星の答えに張遼は一瞬呆気に取られるものの、すぐにおかしくて仕方ないとばかりに笑い出した。その目からは涙が流れている。それが悔し涙か笑いからの涙か、或いはもっと違う類の涙なのかは分からない。ただ笑ったのは、武人である自分を子供であるしんのすけが負かしたとの星の言葉に納得してしまったからだ。

星の攻撃への対処が遅れたのは、紛れも無くしんのすけとの思い出が原因。つまり、自分を負けさせたのだから星の言い分は間違っていないと思い、張遼はしばらく笑い続けた。周囲はそんな張遼の笑い声に意外そうな表情を浮かべるも、それでも戦い続ける。

「……あ～、負けや負けや。もう完膚無きまでに負けたわ」

「張遼……」

笑い疲れたのか、少し脱力したような張遼の言葉に星は静かに視線を向ける。そして、張遼は周囲へ視線を動かして叫んだ。

――――もうええ！　ウチらの負けや！　死なせたないから大人しゅうしとけ！

それはこれ以上部下を失いたくないとの気持ちからの言葉。それ

に呼応し、張遼隊が抵抗を止める。同時にそれを受け、凪達も攻撃を止めるように告げる。こうして張遼隊は敗北した。

「さて、なら曹操んとこに連れてけや」

「降ってくれるのだな？」

「ま、あの小僧とお前が選んだ相手やしな。前はろくに挨拶も出来ひんかったし……どんな奴か興味出たわ」

この後、約束通り星は張遼を連れて華琳の元へと戻る。凪達は残っている董卓軍へと向かい、それを鎮圧させ次第、城内の制圧へと乗り出す事にするのだった……

「ええいっ！　前回の借りを返したいのだが……くそっ！」

「……やはりこれでも厳しいか」

「でやあぁぁぁ！」

春蘭が悔しそうに叫ぶ言葉を聞きながら、秋蘭はため息混じりでそう告げた。それを掻き消すように季衣の声が響く。その鉄球は、いともあっさりと弾かれた。それをやってのけた相手は、手にした方天画戟を振り回して周囲に立つ者達を見つめる。

「……何度やっても無駄」

「そんな事ないのだっ！　許緒、典韋、もう一回なのだ！」

「うんっ！」

「ええ！」

鈴々が、季衣が、流琉がその自慢の力を叩きつけるように武器を振るう。それを呂布は何とか受け止め、振り払うと反撃を加える。それを三人は辛うじて受け止めるも、その威力に手が軽く痺れるのを感じていた。

そんな三人に続けとばかりに再び動く夏侯姉妹。春蘭が力強く剣を振り下ろせば、秋蘭が呂布の動きをある程度抑制する目的で矢を放つ。

「はあぁぁぁぁっ！！」

「……邪魔」

「やらせるかっ！」

「ちくしょう……隙がねえ……」

そんな光景を見つめ、文醜は容易に踏み込む事は出来ないと思っていた。先程から鈴々達に自分を含めた六人で攻めても、呂布は一度として焦りさえ見せた事がないのだから。

そんな呂布の人知を超えた力に、文醜は悔しく思いながらも手にした大剣を振り上げる。例え隙がなくてもやるしかない。星との試合が彼女を武人として成長させていたのだ。それは、ただ我武者羅

に戦うのではなく、一瞬の隙を狙う事や相手に隙を作らせる事を行う戦い方を身につけた事。

あの星との試合で勝ち得た勝利。あれこそが武人としての理想だと、今の文醜は考えていたのだ。そこへ、文醜にとって頼もしい声が聞こえてきた。

「文ちゃんっ！」

「斗詩っ！」

「こっちは大方終わったよ！　残りはもう……」

「呂布だけ……って事か！　なら斗詩、援護よろしくっ！」

「ちょ？！　待ってよ、文ちゃんっ！」

顔良の言葉に文醜はそう答えて走り出す。狙いは鈴々達の攻撃を受けた後の反撃の僅かな隙。それを掴むために。顔良はそんな文醜を止めようとするが、間に合わないと思って仕方ないと自分も走り出した。

鈴々達の一撃を薙ぎ払うように動く呂布の方天画戟。その瞬間、そこへ文醜が襲い掛かった。それに瞬時に反応し、方天画戟の動きを力づくで無理矢理変える呂布。それは完全に文醜の首を狙っていた。

「しまっ！？」

「させないっ！！」

だがそれが届く前にその一撃を叩き落とす者がいた。顔良だ。手

にした大鎚で上から叩く事で戟の軌道を下へと動かしたのだ。もし呂布が万全の体勢で繰り出していた攻撃であれば、それでも止め切れなかっただろう。だが、無理矢理動かしていたおかげで顔良だけの力でも、その軌道を変える事が出来たのだ。

呂布が無表情のまま、手にした得物を構え直す。今や呂布へ挑んでいるのは七人となっていた。それでも、呂布は退く事など考えずに戦う意思を見せていた。そして、顔良まで合流した事が結果として呂布を本気にさせる。

「……増えても無駄。もう、終わり」

鬱陶しい。そんな気持ちを込めた闘気を漂わせる呂布。その凄まじい気迫に誰もが息を呑んだ。本能が訴えるのだ。こいつには勝てないと。それでも何とか闘志と勇気で体を支え、その場に踏み止まっていた。

「秋蘭様、このままじゃみんな……」

「ああ、やられかねん。張飛、関羽は無理か？」

「にゃ～、愛紗はお姉ちゃんの傍なのだ」

「ちっ！　肝心な時におらんとはな」

流琉の疲れた声に秋蘭も事態を重く見て頷き返す。そして、愛紗がいれば何とかなるかと思い、秋蘭は鈴々へ参加出来ないのかと問いかけるのだが、それに返ってきたのは希望を断ち切る内容だった。

それに対して春蘭が告げた言葉が全てを物語っていた。これだけの者がいても、余裕どころか善戦するのが精一杯。足止めが限度な

のだ。そこから誰もが最悪の事を想像し、嫌な汗を流す中、人を捜す誰かの声が聞こえてきた。

それに最初に反応を示したのは呂布だった。視線をその声の方へと動かし、その相手を把握して呂布はどこか不思議そうに小首を傾げた。

「恋殿！　どこにいるのですか～っ！！」

「……ねね？」

「おおっ、ここにおられたのですか」

「……月は？」

「城は陥ち、月殿と詠殿は既にお逃げになられましたぞ。恋殿もお早くです！」

その言葉を聞き、呂布は自分へ警戒心を向ける春蘭達へ視線を向ける。それに秋蘭が代表して答えた。見逃すから行けと。それに呂布は頷き、陳宮と共にその場を去って行った。それを見送り、誰もが大きくため息を吐いた。

正直あのまま続けていたら、どちらが負けていたかは明らかだったのだ。それを誰もが実感しているからこそ、呂布を逃がすと言った秋蘭へ何も言わなかったのだ。

「……強いってもんじゃねーな」

「同感。あ、最後のはさすがに怖かったよ、文ちゃん」

文醜の呟きに顔良はそう返すも、ちゃんと注意するのを忘れない。
それに苦笑いを返す文醜と呆れるように息を吐く顔良を眺め、流琉は小さく苦笑しながら、視線を季衣達へ向けた。

「でも、これで何とかなりそうだね」

「そうだけど……鈴々は一旦戻るのだ」

「そっか。残りを片付けないといけないもんね。あ、ありがと張飛！　助かったよ～！」

「本当にありがとう！」

「礼はいらないのだ～っ！」

呂布がいなくなってもまだ残っている者達はいる。それを思い出し、鈴々は自分達の本陣へと戻るために走り出す。それを見送りながら、季衣は手を振って笑顔で感謝を述べた。流琉も同じように感謝を言いながら手を振った。それに鈴々も笑顔を浮かべながら、手を振り返して去って行った。

そんな様子を見つめ、春蘭と秋蘭は微笑みを浮かべるのだが、それをすぐに消して小さく呟いた。それはきっと来るだろう時を見越しての言葉。

「いつか劉備と戦う事になるとしたら……季衣と流琉には辛い戦となりそうだな、姉者」

「そうだな……願わくばない事を祈りたいが……」

春蘭でさえそれがどこかで難しい事は理解している。それでも、

そう思わずにはいられないのだ。季衣達が友人となった鈴々と戦う事を望まぬ者が華琳の傍にいる。それもその理由の一つなのだから。

乱世の理不尽さを改めて感じながらも、二人は文醜と顔良に手助けの礼を述べる。そして季衣と流琉へ呼びかけて、自分達も一度本陣へと戻る事にするのだった……

城内の制圧は比較的簡単に終わった。諸侯が一斉に侵入しただけでなく、既に董卓軍に抵抗する気力もなくなっていたせいもあり、あっさりと進んだのだ。

そんな中、城内に突入した凪達は二手に分かれて行動していた。凪は一人で残った場所の制圧に向かい、沙和と真桜は董卓の捜索を受け持っていた。董卓の顔は分からないので、とりあえずは生きている者を保護し、後で華雄か張遼に確かめてもらう事になっていたが。

「ん？」

「どうしたのー？」

真桜が何かを見つけたように足を止め、沙和がそれに反応して問いかける。真桜が見つめる先には、周囲を警戒するように動く二人の少女がいた。一人は眼鏡をかけたしっかりした感じの少女で、もう一人は可憐な印象を与える儚い雰囲気の少女だった。

二人も真桜と沙和に気付いて驚いたように足を止めた。だが、当然のように警戒するような反応を見せる二人に、真桜と沙和は事情を察して手を横に振った。

「ちゃうちゃう。ウチらはあんた達襲う気ないわ」

「連合軍だから安心して欲しいのー」

きっと董卓に仕えていた侍女辺りだろう。そう考えた二人は、安心させるようにそう笑顔で告げた。それに二人は一瞬驚きを見せるが、即座に眼鏡の少女がこれ幸いと告げた。

「そうなんだ。なら、助けてくれる？」

「え、詠ちゃん……」

詠と呼ばれた少女が告げた言葉に、もう一人の少女がどこかおずおずと声を掛ける。それに詠は安心させるように笑みを返して、すぐに視線を真桜と沙和へ戻した。その視線が助けてくれるのかとの確認に見え、それに二人は頷き返した。

だが、安堵する少女達へこう問いかけるのを忘れない。董卓がどこにいるか知らないかと。それに少女がびくりと体を震わせるものの、詠は自分達の方には誰もいなかったと返した。

「そうか……」

「でも、どうするの？　華琳様だと、この子達可愛いって理由で危ないのー」

目当ての情報が手に入らない事に落胆する真桜。一方、沙和は目の前の二人をどうするのかと尋ねた。その言葉を聞いた二人がやや不安そうな表情を浮かべたが、そこへ現れた者達がいた。

「どうかしたんですか？」

「そちらは……確か曹操殿のところの李典殿と于禁殿か」

「あ、劉備さんと関羽さんなのー」

「そっちも董卓の捜索です？」

桃香と愛紗の声に沙和が嬉しそうに声を返す。真桜はそんな二人の現れた理由を察して告げると、愛紗はやや苦笑気味に違うと返した。桃香が逃げ遅れた者がいないかと思い、それを助けるために来たのだと。だが一人では万が一もあると思い、愛紗が護衛としてついてきたのだ。

そんな事情を聞いて、真桜と沙和は渡りに船とばかりに二人の少女を桃香へ託す事にした。簡単に真桜達が引き受けられない事情を聞いた桃香と愛紗は苦笑しつつ、了承して二人を連れて城内を後にした。その際、桃香だけはどこか残念そうな表情を見せたが。

実際の桃香の目的は董卓の救出だった。しかし、それを大っぴらに言う事は出来ないためにこうして自分で動いたのだ。逃げ遅れた者がいないかと思って来たと、周囲が納得するような理由を掲げて。

そんな彼女は、この後連れて帰った二人の少女を見た華雄の反応からある事に気付いて嬉しそうな笑みを浮かべるのだが、それはまた別の話。

「さ、また董卓を捜そか」

「だねぇ」

去って行く桃香達を見送り、二人はやや疲れた表情を浮かべた。

本音を言えばもう見つからない気がしているし、先程までの戦いで疲れているので動きたくないのだ。
　すると、そんな二人の元へ凪が現れ、もう城内の制圧は完了したと教える。そして、既に残りの場所に生存者はいないと教え、こう締め括った。

「周囲が言うにはどうも董卓は逃げ出した後らしい。城が陥ちると分かった時、裏の方から馬車が一台走り去ったという情報もある」

「そうなんだ」

「なら、長居は無用やな。華琳様達のとこまで戻ろか」

　三人は頷き合って城内を後にする。既に沙和と真桜が董卓と出会っているとは知らぬままに……

――――――

第五話

あの後、董卓は馬車に乗って逃げ出したと思われたのだが、念のために城内の遺体確認をする事を桃香が提案した。それを袁紹達が賛成したのを受け、桃香側が華雄を、華琳側が張遼を連れて城内へ。その付き添いに二人が指名したのは星と桃香。星が選ばれた理由に関しては言うまでもないが、桃香の方は華雄がその姿にどこか董卓を重ねたからだった。

そんな付き添いの星と桃香が見守る中、二人は揃って一人の文官の遺体を指して董卓だと言ったためにその死亡が正式に認められる運びとなった。しかし、当然ながら星はそれが董卓ではないと知っていた。

それでも何も言わなかったのは董卓も乱世の被害者だと考えたから。そして、華雄と張遼が助けたいと願っている事を知っているからだった。しかし、桃香はそうではないはず。そう思って星は桃香へ尋ねた。

――桃香殿、これでいいのですかな？

――……はい。董卓さんには悪いですけど、私じゃ……これが精一杯ですから。

二人が遺体を董卓だと告げる前、密かに何かを話していたのを見た桃香だったがそれを見て見ぬ振りをして流したのだ。何故ならば、董卓が生きていると桃香は知っていた。

あの時連れ帰った二人の少女。その二人にはとりあえず雑用をしてもらう事になったのだが、そこへ愛紗が華雄を連れて現れたのだ。今後の華雄の扱いをどうするかを話し合うために。その互いの姿を

見た瞬間、三人は硬直したのだ。それを見て桃香達は全てを理解した。だからこそ、桃香は諸葛亮達から告げられたこの提案を通したのだから。

そんな事を思い出し、桃香は申し訳なさそうに告げる。それに華雄はそんな事はないと桃香を励ますように告げ、その手へ自分の手を重ねた。

――お前達のおかげで董卓様もこれからは安心して眠れるだろう。だから胸を張ってくれ、劉備。

――華雄さん……はいっ！

そして二人は星達へ先に戻っていると言葉を掛けて城外へと向かって歩き出す。その背中を見送り、星は張遼がこう小さく意外そうに呟くの聞いた。

――劉備も……知っとるんやな。

それが何かを星が聞く事はない。なので、星も張遼を連れて桃香達の後を追うように城外と向かった。華雄が告げた”安心して眠れる”との言葉に込められた意味。それを彼女も理解しているが故に。

こうして、董卓は制圧時の混乱に紛れて文官の振りをして逃げようとした。だが哀れにもその混乱に巻き込まれて死んだと、そう諸侯の見解が一致した。これにより、董卓は完全に表舞台からその名を消す事になったのだ。

そして、華琳達にはそれに前後して加わる者がいた。そう、張遼だ。星によって華琳の本陣へ連れてこられた張遼は、戦が一段落す

るのを見計らってから華琳へと引き合わせられたのだ。

「歓迎するわ、張遼。私の事は華琳と呼んでくれて構わないから」

「はぁ！？　……いきなり真名を預けるちゅうんか。仕えん言うかもしれへん相手に？」

「それならそれでもいいわ。その時は私の見る目が無かったという事でしょう」

張遼の言葉に華琳は間を置かずにそう言い切った。その潔さに張遼は一瞬呆気に取られるも、すぐに面白いとばかりに笑い出した。そして、少しして笑いを止めると華琳の目をしっかりと見つめて告げた。

「よっしゃ、今からあんたに仕えたるわ。ウチの真名は霞や」

「あら、仕えるからと言って別に無理に預けろとは思わないわよ？」

「ええんや。ウチはあんたみたいなの嫌いやないからな。それに、星としんのすけが認めた相手や。なら、預ける価値は十分にある」

星と先んじて真名を預け合った霞は、そう言って不敵に笑う。それには、だからがっかりさせるなという気持ちがありありと浮かんでいた。それに気付いた華琳はやや不機嫌そうな表情を見せる春蘭や桂花を抑え、その意気や良しと笑ったのだった。

これが華琳の下に神速の張遼こと霞が加入した瞬間。そして、また曹魏の旗が少し天下に近付いた瞬間でもあった。

その後、董卓の生存確認と平行して、早速とばかりに洛陽の復興に動いた者達がいた。華琳と桃香である。勿論他の者達も動き出していたが、いち早く動いたのはこの二人が率いる陣営だったのだ。それに負けじと他の諸侯も復興を手伝った。

そのおかげもあり、洛陽は戦乱の傷を急速に癒していく。華琳は主に公共の道や橋を直し、桃香は住人達に炊き出しを行って食事を振舞う。その支援の向ける先は同じく民。それに気付き、両者は更に強く互いを意識する事になる。華琳はぶれる事ないその在り方に、桃香はしんのすけが選んだ理由をそこに見た気がして。

そんな桃香を見た桂花は華琳へ忠告する。軍師としての直感ではなく、それは一人の人として感じた可能性だ。

――華琳様、いずれ劉備は覇道の障害となると思います。

――……そうでしょうね。その時は正面から……相手するだけよ。

華琳は叩き潰すと言おうとして、何かに気付いてそれを修正した。それは足元にいるしんのすけの存在。あまり直接的な言い方では悪い印象しか与えない。それが星を失う事に繋がっては不味い。

そう思ってだろうか、華琳は言葉を選んだのだ。しんのすけはそんな華琳の配慮に気付かず、シロと共に街の様子を見つめて頷いていた。以前来た時と比べ、人々の表情が明るいように感じたのだ。

「シロ、オラ達この街をお助け出来たのかな？」

「キャンキャン！」

「そっか。あのいばってた兵隊さん達がいないや」

シロがその場を回るように動いて発した声に、しんのすけも周囲を見渡してそう返した。すると、桃香達の方を見ていた季衣が何かを思いついたように笑顔でしんのすけへ声を掛けた。

「ね、しんちゃん。張飛達の手伝いしよ！」

「おおっ！　それいいね！」

「もう、季衣もしんちゃんも勝手に決めないの。華琳様、いいですか？」

季衣の勝手な提案にしんのすけが乗り気になったのを聞いて、流琉はしょうがないと思いながらも華琳へ伺いを立てる。それに華琳が小さく笑って許可を出したのは言うまでもない。こうしてしんのすけ達は三人揃って桃香達の手伝いへと向かった。シロは自分が邪魔になると理解し、敢えて残った。それを見て、相変わらず賢い奴と霞が笑いながら頭を撫でる。

一方、しんのすけ達は鈴々と共に炊き出しを手伝い始めていた。四人で笑顔を見せ合ったり、時に季衣と鈴々が軽い口喧嘩をしそうになって流琉としんのすけが注意したりする。それでも季衣と鈴々がその怪力を使って荷物を運んだり、流琉が諸葛亮や鳳統と共に食事の支度を手伝ったり、しんのすけが桃香のスカートの中を覗こうとして愛紗に叱られるなど、微笑ましい光景が展開される。

それを眺め、微笑む華琳と星。春蘭と秋蘭も笑顔を浮かべている。桂花は一人そんな光景に微かな不安を抱くものの、それでも目の前の微笑ましい光景にどこか笑みを浮かべていた。

「いいものですな、こういう光景は」

「そうね。これだけでも戦った甲斐があるというものよ」

「華琳様の仰る通りです。私達が戦以外で力を使える事こそ平和と言えるのかもしれません」

星と華琳の言葉を聞いて春蘭がそう締め括った瞬間、誰もが言葉に詰まった。いや、シロを撫でていた霞以外は、だろう。桂花など驚愕の表情を見せていたのだから。

「あ、あんた……今、何て言ったのよ？」

「ん？　いや、だから戦以外で力を使える事が平和なのだろうと……」

「華琳様っ！　この春蘭は偽者です！」

「どういう意味だっ！？」

春蘭の答えを聞いて桂花はそう断言した。それはもう見事に迷いなどなく、春蘭を指差してまでの断言だった。そんな桂花に春蘭が怒りを露わにして怒鳴るが、それでも彼女は止まらない。華琳へいかに春蘭が考え無しで、今のような事を言うはずはない事を力説していく桂花。

それにふざけるなとばかりに反論を開始する春蘭。華琳へいかに桂花が自分を馬鹿にして、ないがしろにしているかを力説していく。そんな二人の意見に華琳はどうしたものかと思案する。

そんな光景を見つめ、やや事態が飲み込めないような霞へ星と秋蘭が告げる。これが日常的で、春蘭が普段はどんな感じの人物かを。

それを聞いて霞は納得いったとばかりに頷くと、シロがそんな春蘭と桂花のやり取りに項垂れる。今は華琳にではなく、互いに意見をぶつけ合っていたのだ。

「大体、お前が私の何を知っていると言うのだ！」

「あんたの事なんてすぐに把握出来るわよ！　この馬鹿猪っ！」

「何だとっ！　ならばお前は屁理屈猫耳ではないかっ！」

「なっ！？　この単細胞っ！」

「ふんっ！　考える事しか出来んくせに！」

そんな会話に脱力するシロに、霞だけでなく星や秋蘭に華琳さえも苦笑していた。そうして目の前の言い合いを楽しそうに眺めていたのだが、それもそろそろ不味いと感じた華琳は、口論が過激になりつつあった二人へ内心苦笑しつつも表面上は呆れながら静かに制した。

「もう止めなさい、二人共。洛陽の民の前で私に恥をかかせる気？」

「「も、申し訳ありません……」」

即座に反応し、項垂れる二人。その見事なまでの一致に霞が笑う。星もそれに呼応し、秋蘭はやや微笑み混じりに春蘭を見つめていた。そんな中、霞はふと視線を桃香達へ向けた。聞き覚えがある声が聞こえた気がしたからだ。

そして、桃香達と共に洛陽の人々へ配給をしている二人の少女に気付いた。その二人の姿に霞は涙が流れそうになるものの、一番嬉

しいのはその傍にいる事になった華雄だろうと思い、一人苦笑。だが、それでもさり気無くその二人へ近付いて、こう言う事だけは我慢出来なかった。

――大変やろうけど、頑張ってな。

その言葉に二つの意味を込めた霞。一方、突然そう言われた二人は驚いたものの、相手が霞と分かるとその言葉も相まって、目に光るものを浮かべて返事を返す。

――はい、ありがとうございます。

――ええ、そっちも頑張ってね。

二人の言葉には多くの気持ちが込められていた。それを感じ取って霞も感謝を返す。ただ、それだけの会話。それ以上は何も話す事はないとばかりに霞はそこをすぐに離れ、華琳達へと合流する。

それは、自分の行動を華琳達に怪しまれぬために、二人の少女を危険に晒さぬために。だが、もっと話したいと思う気持ちを抑える霞のその目には、二人と同じで光るものが浮かんでいる。

「ん？　どうしたのだ、霞」

「いや、どうも砂が目ぇに入ったようや」

「……成程、そうか。まぁ、今はあちこちで作業をしているからな。大方そのせいだろう」

そんな霞の涙に気付いた星が問いかけた言葉に彼女が返した答えは、そんな当たり障りのないものだった。星はそんな霞が歩いてき

た方向へ視線をやり、その理由に気付くもそれは言わない。ただ小さく笑みを浮かべ、そう返して霞に背を向けて歩き出す。

その星の言葉に霞は内心感謝しながら、一度だけ後ろを振り返った。そこには、心からの笑顔で働く二人の少女がいた。それに霞も笑みを浮かべて小さく呟く。

――ええ場所見つけたんやな。もうウチは傍で守る事は出来ひんけど、今度はそこを無くす事がない事を願っとくわ……

その頃、事後処理を任された稟と風は、凪達と共に陳留への帰還準備の段取りも始めていた。これで完全に朝廷の権威は地に堕ちた。そう、この後の事を考えて少しでも早く陳留へ戻れるようにしておこうと考えたのだ。

この戦乱が終息し、起きるだろう次の流れ。それは、今以上に複雑で激しい割拠の時代だ。それを勝ち抜いていくには、国力を増す必要がある。それにはいち早く帰還するに越した事はないのだが、それが出来ないのも事実。

「……洛陽の復旧作業に一応の目処がつくまでは、ここに滞在する事になりますね」

「ですねー。まぁ、兵は呂布さんの頑張りで少々大目に失ってしまいましたが、許容範囲なのがせめてもの救いなのですー」

今回の戦で稟と風が桂花と共に出していた被害予想。それは最高の結果とはならなかったものの、十分許せる結果だったのだ。だが、

そう思った瞬間、稟も風も同じ表情に変わった。

「だとしてもやりきれませんが……」

「……ですねー」

稟の噛み締めるような呟きに風も同じような声で返す。揃って平然と命を数字として捉えているのが嫌になったのだ。それが軍師の仕事とは理解しているし、納得もしている。だが、それでもそう思わなければいけないとも知っている。

そんな二人に出来るのは、今回失われた者達が無駄死にとならぬようにする事だけ。そう自分に言い聞かせ、稟と風は再び仕事へと意識を向ける。その表情は軍師のそれだったが、それでもどこかに悲しみが見える。

「でも、これでしばらく戦は起きないのですよー」

「なんだかんだで他の諸侯も消耗しましたからね。当分は自国で力を蓄えるでしょう」

「……稟ちゃんはどこが一番最初に動くと思いますか？」

風が告げた言葉に稟の思考が止まる。それは予想だにしない事を聞かれたからではない。考えたくない事だったのだ。諸侯達はしんのすけと既に関りを得ている。つまり、どこが動こうと意味する事は一つなのだ。

それはしんのすけの知る者達同士が殺し合う事。いや、正確には戦を起こす事だ。稟はそれを思い出しながら、深呼吸をして止まった思考を動かした。そして、告げた言葉は軍師としてのものだった。

「袁紹殿でしょうね」

「……相手は公孫賛さん、でしょうねー」

風の悲しそうな声に稟は無言で頷いた。たいりく防衛隊の仲間と言うべき白蓮。それが袁紹と戦う事になるのは簡単に予想出来る。何せ領地が近過ぎるのだ。それに幽州を抑えれば、袁紹は北からの襲撃を考えずに南下出来る。

そこまで考え、二人は同時にため息を吐いた。気付いているのだ。そうなった場合、どちらが勝つかは。そしてそれが何を意味するのかも。そうなった時、果たしてしんのすけはどう思うのか。そんな事を考えそうになり、二人は呟く。どうしてこうも時代はしんのすけへ試練を与えるのだろうかと。

二人がそんな風に複雑な気持ちになっている頃、外では凪達が慌しく動いていた。負傷兵の世話、復旧作業に必要な資材の確保及びその管理運搬など、やる事が山ほどあるのだ。

「真桜、これはどこに置けばいい？」

「ん？　あー、それは向こうに同じ物が纏めてあるからそこに頼むわ」

「分かった。よし、向こうに運ぶぞ」

部下達に指示を出しながら自身も資材を運ぶ凪。それを見送る事もせず、真桜は再び視線を戻す。工作隊を任された真桜。凪はそんな真桜の手伝いをしていた。手先の器用さや工作の見事さでは真桜の右に出る者はいないと知っているからこそ、凪はその手伝いをする事に迷いはなかった。

（真桜はやはりこういう時頼りになる。私では戦でしか役に立てないからな）

真桜はそんな凪の気持ちをどこかで感じ取り、嬉しく思いながらも与えられた仕事をこなしていた。戦では自分は凪のように戦えない。そこまで役に立てない。武人としてよりもこういう事でしか力を発揮出来ないと思っていたからだ。

（ウチの出番はこういうとこや。戦以上に頑張らんとな）

二人がそうして汗を流しながら働いている頃、そこから多少離れた救護所では、沙和が負けじと懸命に働いていた。

「はい、これで大人しくしてるの」

「ありがとうございます、于禁様」

「礼には及ばないの。それよりも早く治るように無理はしないようにね」

沙和が包帯を腕へしっかりと巻いた兵士が告げた言葉。それに沙和は心から笑顔を浮かべてそう返した。力仕事も知恵を使った事も出来ない沙和。そんな彼女に与えられたのは、傷ついた兵士達の世話だった。

持ち前の優しさで分け隔てなく処置をしていく姿に兵士達は心から感謝を述べるも、本人としてはそこまで言われる程の事だと思っていないのだ。それは、沙和自身が自分に取り柄がないと思っているから。凪のように武に秀でる訳でも、真桜のように技術に秀でる訳でもない。それが彼女にとっての一種の劣等感になりつつあった

のだから。

（でも、こうして誰かに感謝されるってのは嬉しい事だよね。もっと頑張ろうなのー！）

それでも、兵士達の言葉が段々とそれを忘れさせていく。沙和はこうしてくたくたになるまで救護所で働くのだった……

董卓が死んでから少し経ち、連合は解散する事になった。洛陽の復興も一応のけりを着けたのもその要因だ。連合の影の発起人である袁術は目的だった洛陽解放が叶ったので、それをしんのすけへ褒めてもらおうとしたのだが、ふとある事を思い出したためにそれを思い止まった。

それは自分が結果として董卓を悪役に仕立てあげた事。しかも、死なせてしまった事だ。なので、袁術はその申し訳なさからしんのすけへ別れの言葉を告げる際、一言だけしか言えなかった。

――達者でな、しんのすけ。

――えんちゃんもお元気でね。今度はオラの友達をしょーかいするから、一緒に遊べるといいね。

その悲しみからくる声にしんのすけは袁術の手を握りそう約束した。その言葉だけで袁術はいくらか悲しみが軽減されたように感じ、嬉しそうに笑みを返して去って行った。

そして、孫策や袁紹に白蓮も華琳への別れの挨拶を兼ねてしんの

すけへ別れを告げにくる中、最後に別れを告げるべく現れたのは桃香だった。彼女は愛紗や鈴々の分までしんのすけへ言葉を伝えると、華琳へ頭を下げてこう言った。

――曹操さん、糧食の件ありがとうございました。それと、しんちゃんをよろしくお願いします。

――礼ならいいわ。余分な分を腐らせるよりは役に立てようと思っただけだしね。それと、そちらは言われなくても大丈夫よ。私の下にいる限り、誰からであろうと守ってみせるわ。

華琳は予備の糧食を炊き出しをしていた桃香へ譲渡したのだ。それについて桃香は心から感謝していた。華琳が民を大切にしていると分かったので、桃香としてはそれが同志を見つけたという気持ちになれたからだ。

そんな桃香の言葉に華琳はそうあっさりと返した。だが、その答えに桃香は嬉しそうな笑みを華琳に見せて去って行った。そんな事が最後にあって、この反董卓連合は終わりを迎えたのだった……

そして陳留に戻る途中、華琳はしんのすけへ桃香の事を詳しく聞く事にした。いつか立ち塞がるかもしれない桃香。その人物だが、自分が知るのは上辺だけの可能性もある。

なので、本当の桃香に近いものを知っているだろうしんのすけに、その人物を聞いておこうと思ったのだ。いつか戦うその時のために。そう華琳は表面上考えていた。本当は、どこかでしんのすけに近い雰囲気を感じ取ったためなのだが、それを華琳は言う事はないし認

めるつもりもない。

「しんのすけ、劉備は貴方から見てどんな者？」

「お？　そうだなぁ……優しいぞ」

「それ以外は？」

「えっと……お仕事苦手だぞ」

「……何となく分かるわ。他には？」

「え？　う～ん……おおっ、おムネが大きいぞ～」

華琳の質問に答えていたしんのすけだったが、最後の最後で彼にとっての桃香の一番の特徴を告げた。勿論、顔はにやけていてしまりの無いものだ。華琳はそれに青筋を浮かべるも、表情は優しい笑みのままにしんのすけへ問いかけた。

「そ、そう……それが最後かしら？」

「いやぁ、桃香ちゃんのおムネはサイコーなんだよね～。オラ、一回でいいからあのおムネにお顔をしずめてみた～い」

華琳の言葉を無視するようにしんのすけは桃香の胸について語り続けた。華琳はそんな内容に更に青筋を浮かべる。手綱を握る手に力が入っていく華琳。彼女が密かに気にしている事の一つにプロポーションがある。

背丈と胸。これは決して華琳の前では話題にしてはならないのだ。しかし、それをしんのすけが知る由もない。華琳はやや声に苛立ち

を混ぜながらしんのすけへ注意した。

「しんのすけ、それを言うなら沈めるではなく埋めるよ」

「お、そうなんだ。じゃ、オラ、桃香ちゃんのおムネにお顔をうずめてみた～い」

「……その前に私が地面に顔を埋めさせてあげようかしら？」

自分の聞きたい事ではない事を延々。それも、よりにもよって気にしている部位の話をされ、華琳は怒りを静かに燃やしていた。それが遂に声に乗る。それに気付いたしんのすけは華琳の方へ顔を向けた。

「あ、華琳ちゃんが怒った」

「当然よ！　いつまでも劉備の胸の話ばかりしないのっ！　私が聞いたのはそういう事じゃないでしょ！」

しんのすけの意外そうな言葉に華琳はそう言い切った。すると、しんのすけはその言葉に納得するように頷くものの、すぐに何かに気付いたのか怒り冷めやらぬ華琳へこう告げた。

――華琳ちゃんって、もしかして桃香ちゃんが気になるの？

それに華琳は即座に答えた。確かにそうだが、しんのすけの考える意味ではないと。それにしんのすけは少し残念そうな表情を見せる。華琳が桃香の事が気になり、そこから友達になれるならと思ったのだ。

友人は多い方がいい。それはしんのすけ自身が身に染みて知って

いる。今のしんのすけには、鈴々に季衣と流琉、それに袁術や尚香が友達としている。ずっと共にいる事が出来るのは今のところ季衣と流琉だけだが、いつかは全員と一緒にいれるようになるかもと、しんのすけはどこかで期待しているのだ。

「ね、華琳ちゃんはお友達欲しくないの？」

「友人は……いなくてもいいわ」

しんのすけの問いかけに華琳はかなり間を置いたが、平然とした声で答えた。だが、本人はそのつもりでもしんのすけには分かった。その声が悲しんでいる声だという事を。寂しいのに、それを言うと聞いた者が心配するからと平気を装うものだと。

だからしんのすけは華琳の手綱を握る手に自分の手を重ねた。それに華琳は普段通りの声でどうしたのかと問う。しかし、しんのすけはそれには答えず、ただ一言華琳へ告げた。

――いなくてもいいなら、いてもいいって事だね。

その言葉に華琳は小さく息を呑んだ。自分の本心がそこに知らず出ていたと思ったからだ。それに気付いた華琳がそれを否定しようと口を開くも、それを遮るようにしんのすけがこう安心するように告げた。

「良かったぁ……オラ、華琳ちゃんに嫌われるかと思った」

「どういう意味？」

「あれ？　オラ言わなかったっけ？　華琳ちゃんのお友達になりたいって」

「……ああ、そういえばそんな事を言ってたわね」

いかにも言われて思い出したとばかりに返す華琳。だが、本当は違う。しっかり覚えていたのだ。あの馬上で言われた一言を。初めて言われた”友達になりたい”との言葉。家柄も立場も身分も関係なく、ただ純粋に華琳自身と友人になりたいとの言葉を忘れるはずなかったのだから。

そんな事を思い出し、しんのすけを見つめる華琳。しんのすけは華琳へ背を向けたまま、何故嫌われるかと考えたのかを話した。友達になりたいと言った自分が尋ねた、友達は欲しくないのかとの問いかけ。それに華琳があまり気乗りしない声だったのが不安を煽った。

だが、ちゃんと聞いてみれば欲しくはないがいるならいてもいいと言われた。それで安堵したのだと、しんのすけは語った。その言葉に華琳は無言を貫いた。その表情は周囲の目もあって覇王のそれだ。その内心は激しく揺れていたのだが。

「だからオラ、華琳ちゃんのお友達になりたい。ダメ？」

「……勝手にしなさい。でも、馴れ馴れしいのは駄目よ」

そう言いながらしんのすけは顔だけを華琳へ向けて、見上げるようにそう尋ねた。それに華琳は少しだけ頬を赤めて流すように返す。そんな華琳にしんのすけは細かに頷いてみせた。

「ほ～ほ～、ではお手手つなぐのは？」

「駄目よ」

「じゃ、一緒にお昼寝するのは？」

「駄目と言いたいけど……機会がないでしょうから別にいいわ」

「お？　ならあったらいいの？」

「ええ。機会があればね」

いつも仕事が山のようにある華琳。それ故昼寝などが出来る事などないと言い切れた。何せ休みであっても仕事をやってしまう性格だったのだ。自分の事を正確に把握しているからこその言葉だったのだが、それを知らずにしんのすけは上機嫌で口を開いた。

「ほっほーい。華琳ちゃんとお昼寝出来るぞ～」

「はぁ……機会があればと言ったでしょ。勝手に確定させないの」

「じゃ、後はね……」

「ちょっとは私の話を聞きなさい」

それはもういつものやり取りだった。華琳もしんのすけも普段の雰囲気に戻り、きっと周囲が見ても聞いても違和感を感じる事は無かっただろう。とはいえ、ずっと傍で聞いているはずの桂花は稟や風と今後の事を相談していたし、秋蘭は流琉や季衣と城に帰った後の歓迎会の事を話していたので関係なかった。

星は霞と春蘭の三人で酒飲み対決をやろうと話している。だが、春蘭はそこまで酒に強い訳ではないのでやや難色を示していた。そ

れを星と霞が上手い事言いくるめようとしているのを聞き、真桜と沙和が凪へ二人を止めなくていいのかと尋ねていた。

まぁ、その顔が笑っているので、おそらくは凪をけしかけて楽しもうとしているのだろう。凪もどこかでそれに気付いているものの、二人の言う事も正論ではあるために困っていた。ちなみにシロは、沙和の腕の中で大人しくしていた。それでも、凪へ労わるような声を掛けているので、何となく彼女がいじられてる事を察しているのだろう。

片手でしんのすけの口を塞ぎながら、華琳はそんな周囲に気付き、小さく微笑むと楽しそうに告げる。勿論、しんのすけの口を塞いでいた手を離す事を忘れない。

「さ、城に帰ったら歓迎会兼祝勝会よ。その後しばらく忙しくなるだろうけど、みんな頼むわね」

「「「「「「「「「「「「「「「「御意（なの）っ！」」」」」」」」」」」」」」」」

「「はい！」」

「ほい！」

「キャン！」

華琳の言葉に全員が返事を返す。だが、しんのすけとシロの返事に華琳達が大なり小なり笑みを浮かべる。そんな優しい雰囲気のまま、しんのすけ達は華琳達と共に陳留へ向かう。今後はそこが住まう場所となると思いながら。

新たな絆を力に変えて、曹魏の旗と共にしんのすけは行く。それが彼にとっての辛い道の始まりとは知らぬままに。桃香を始めとす

るたいりく防衛隊の仲間達。頼もしいはずのそれが、やがて自分を苦しめる要因になるなどとは夢にも思わないのだから。

ここから穏やかに時間は流れていく。大陸に吹き荒れていた嵐が過ぎ去ったとばかりに。しんのすけは知らない。それが自分だけの認識だとは。

大陸に群雄割拠と言う名の嵐が吹き荒れる日は刻一刻と迫っていた……

――――――

幕間～華琳編～

その日、華琳は暇だった。華琳が暇というのは非常に珍しい。何故ならば、彼女はいつでもやる事がありすぎて時間が足りないと思う程なのだ。そんな彼女が暇をしているのには訳がある。それは、少しでも時間が出来ると何か仕事をしてしまう華琳を心配した春蘭と秋蘭がキッカケ。

そう、以前も実行した事を再現したのだ。つまり一日完全休養。幸い、本来よりも早く軍師が三人もいるために今回はその計画に不備はなく、即座に実行に移される運びとなり、華琳は朝議を終えた瞬間に桂花からこう告げられた。

――本日はお体をお休めください。くれぐれも執務をされませぬようお願い致します。

それに華琳は呆れつつも、確かに今後はこういう時間が取りにくくなるだろうと思い、仕方ないとばかりに執務室に行かずに自室へ戻った。だが、以前から読もうと思った本を片手に読書をしていた華琳は、ふと窓から入る風を感じて外でそれをしようと考えた。

そして、同時に風を感じながら昼寝も出来るように吊り床を用意させた彼女は、一人中庭にて読書を再開。以前も同じような日を設けられた際こうして過ごしたなと思いつつ、穏やかな日差しを浴びながら本に夢中になっていた華琳だったが、徐々にその瞼が重くなっていくのを感じ、休憩も兼ねて一休みする事にした。

（少し眠っておきましょうか。こんなに過ごし易い日だし……って、あの日もそうだったわね）

そんな事を思い出しながら華琳が眠りに落ちる。それからある程

度時間が経過した頃、中庭に現れる者がいた。しんのすけだ。彼が桂花から与えられた仕事。それは華琳の傍付き。本当は内心では反対したかった桂花だったが、何か仕事を彼に任せられる程しんのすけは信頼出来ない。

そう判断しての苦渋の決断だった。華琳ならばしんのすけを上手く雑用で使え、あしらえると稟や風が提言したのもそれを後押しした。こうして、彼は華琳の休みに合わせ休みとなっていたのだ。

「ア～クション仮面ー。正義の……お、いい風」

ご機嫌に歌を口ずさみながら歩くしんのすけの頬を優しく風が撫でる。それにふと立ち止まり空を見上げたしんのすけ。実は、最初こそ街に出て凪達と共に過ごそうかと思ったのが、それでは彼女達の仕事の邪魔になると思って踏み止まり、シロと先程まで遊んでいた。

だが、そのシロとの遊びも飽きてしまったのでこうして遊び相手を探してブラブラしているのだった。余談だが、そのシロは親衛隊の仕事をしている季衣と流琉へしんのすけによって預けられ、絶賛可愛がられる事になったりする。

「う～ん……お歌も飽きたぞ。何か面白い事ないかな？」

しんのすけはそんな事を呟きながら再び歩みを開始する。すると、その視線がやや離れた場所にある木々で張られた吊り床を見つけた。そして同時にそこで眠る華琳にも気付く。当然のようにその光景に関心を示し、しんのすけはその近くへ駆け寄った。

「おー、これテレビで見た事あるぞ」

吊り床――つまりハンモックを見つめ、しんのすけはそう嬉し

そうに呟く。だが、その光景を見て何かを思い出したのか、しんのすけは小さく頷いて眠っている華琳へ視線を向ける。

「……華琳ちゃん、お昼寝する事があったら一緒に寝てくれるって言ってたぞ」

あの洛陽から陳留に向かう途中の会話。それを思い出し、しんのすけはやや拗ねたような表情を浮かべる。華琳が言ったのは、機会があれば一緒に寝てもいいであって決して誘いをかけるとは言っていないのだが、しんのすけの中ではそういう事になっていた。

なので、その約束を果たしてもらおうと思うのだが、如何せん華琳の寝ている場所へしんのすけが登ろうとすると彼女を起こしてしまう。さすがに気持ちよく寝てる華琳を起こす程、しんのすけは自分勝手ではない。故に考える。どうすればいいのだろうと。

そんな時、しんのすけの耳に華琳の声が聞こえた。何かに苦しむような声だ。そのため、視線を華琳へ戻して理由を探すしんのすけ。すると、眩しい日差しが華琳の体に当たっていた。

最初の頃から時間が経過した事により太陽の位置が変化したため、直射日光を浴びる場所が多くなってしまったのだ。生憎しんのすけはそこまでは理解出来なかったが、何となく暑がっているのは分かったのだろう。すぐにそこから走り出してどこかへ向かうのだった……

（ん……涼しいわね……いい風が吹いているみたい。……？　でも途絶える事がないなんて妙ね……？）

まどろんでいた華琳だったが、ふと感じる心地良い風に目を覚ました。日差しによって掻いた汗を乾かすようなその風に、涼しさを感じつつも疑問に思ったからだ。そう、微かに感じて途切れながらならば納得も出来るのだが、それが切れる事無くはっきりと感じられれば不思議に思うというもの。

なので、薄く目を開けて確認する。近くに人の気配も感じたからだ。すると、その視線の先には扇を両手にして華琳を扇ぐしんのすけの姿があった。暑いのか、その額には汗が流れている。

「へぇぇぇ……オラも暑くなってきたぞ……」

華琳が起きている事に気付かず、そう呟くしんのすけ。それもそのはず。彼は下を向いたままで扇を扇いでいるのだ。普通の扇も持ってきたのだが、それではあまりに風が弱くて華琳には届かなかった。そのため、華琳を涼しくしようと思って大きめの扇を更に持ってきたのだ。

だがしんのすけの体では、それを使うには両手だけではなく全身を使って扇がねばならない。なので、汗を掻くのも当然と言えた。華琳はそんなしんのすけを見て小さく苦笑した。このまま寝入った振りでもしようかと思ったが、それではいつかしんのすけが倒れかねない。そう判断した華琳だったが、ちょっとした悪戯心からもう少しだけ様子を見る事にした。

「ん……？　涼しい……」

「お？　華琳ちゃん、やっぱ暑いんだ……」

華琳が小さく声を出したのを受け、しんのすけは扇ぐのを止めた。その顔は汗で光っている。それを見て華琳が内心でしんのすけの気

配りと頑張りを好ましく思っていたが、当然彼はそれに気付かずに再び扇で扇ごうとして……その動きを止めた。

「ちょっとだけオラも涼も」

そう言ってしんのすけは手にした扇を置き、最初に持ってきた小さな扇を手にした。それで自分を扇ぐためだ。上着を少し引っ張り汗を乾かせるようにするしんのすけ。そこへ手にした扇が風を送る。

「あー、暑い時はこれですなぁ」

熱を奪ってくれる涼やかな風にしんのすけは満足そうに笑う。華琳はそんな彼に密かに苦笑するも、そこから彼女への風がまったく来なくなった。しんのすけはひたすら自分ばかりを扇いでいるのだ。

だが、それに対する不満を口に出せば寝た振りをしていた事が分かってしまう。それは何となくだがしたくない。そう思い、華琳はじっと待った。それでも、そんなしんのすけへ怒りをぶつける事は忘れなかったが。

（いつまで自分を扇いでいるのよ！　貴方は何のために扇を持ってきたのかを思い出しなさい！）

すると、そんな心の声が聞こえたのか、しんのすけは自分を扇ぎながら華琳へ視線を向けてその額の汗に気付いた。

「あ、そうだった。華琳ちゃんも扇いであげなきゃ」

しんのすけのその声に華琳はやっとかと思いつつ、その元々の行動理由を予想して小さく笑う。きっと自分が日差しなどで暑がっていると考えたからだろうと。その優しさに微笑ましいものを覚える

華琳。

その彼女のためにと、しんのすけは持っていた扇を置いて再び大きな扇を手にする。そして、それを使って華琳を扇ぎ出した。華琳の全身を風が撫でていく。それと共に彼女の体を心地良い涼しさが癒す。

「よいしょ……よいしょ……でも、華琳ちゃんいつまで寝てるんだろ？　オラと一緒に寝てくれる約束、忘れちゃったのかな？」

（約束……？　ああ、洛陽からの帰りに言っていた話ね）

「起きたら、華琳ちゃんに文句言お。オラとの約束忘れるなんてヒドイぞって」

扇で扇ぎながら拗ねた声で独り言を呟くしんのすけ。それを華琳は少し可愛いと感じて、そろそろ起きてやるかと考えた。ちらりと視線を動かせばしんのすけは再び汗を輝かせながらも自分を扇いでいた。その懸命さに華琳はクスリと笑い、しんのすけへ起き上がりながら声を掛けた。

「私に文句とはいい度胸ね」

「おわっ！？　んもぅ、華琳ちゃんビックリさせないでよ。で、いつ起きたの？」

すると、それにしんのすけは驚いて、思わず扇を取り落とした。それに華琳は大袈裟なと思いつつも、子供だから仕方ないかと結論付けた。そして、即座にしんのすけの疑問に答える。

「そうね……いつまで寝てるのだろうと言った辺りよ。で、どうし

て扇いでいるの？」

しれっと嘘を吐く華琳。だが当然しんのすけはそれを疑う事無く信じた。そして華琳が尋ねた事に対しての答えを告げる。それは華琳の予想通りのものだった。

「華琳ちゃんが苦しそうだったから、もしかして暑いのかなって思ったんだぞ」

「……そう」

「ね、華琳ちゃん。お約束守って欲しいぞ」

「約束を？」

しんのすけの告げた言葉にわざとらしく疑問符を浮かべる華琳だったが、それに彼が不満そうな表情と共に返した内容に理解した振りをする。昼寝をする機会があれば一緒に寝てもいいとのそれ。それを聞いて、華琳は仕方ないとばかりに頷いた。

だが、それが本心ではないと自分で気付いている。何故ならば、実はその気になれば華琳はしんのすけを拒む事が出来たのだ。もう昼寝をする気はないと言えばいいのだから。しかし、それを言い出さないのは華琳なりの優しさだった。今日を逃せば、しんのすけが自分と昼寝を共にする事などはないだろうと考えたのだ。

「……いいわ。機会があればと言ったのは私だものね。じゃ、こちらにいらっしゃい」

「ほーい。って、あれ？　届かな～い！」

「もう、しょうがないわね」

しんのすけの身長では木に繋がれた吊り床には僅かに手が届かなかった。それを見て華琳はやれやれとばかりに手を差し出した。それを掴み、しんのすけは吊り床へ引き上げられる。その重みで吊り床が揺れた。

その感覚が面白かったのだろう。しんのすけは何度も吊り床を揺らした。華琳はそれにため息を吐いて軽く注意する。そんな事をしていると下手すると吊り床が落ちるかもしれないからと。それにしんのすけも動きを止め、大人しくなった。

そしていざ寝ようとするしんのすけだったが、華琳は先程軽く眠ったためにやはり眠気がそこまでなかった。なので、横にはなったものの目を閉じる事はしない。それに気付いたしんのすけは華琳へ問いかけた。もう眠くないのかと。

「ええ。貴方は気にしないで寝ていいわ。傍には居てあげるから」

「え～っ？　華琳ちゃん、一緒に寝てくれないの～？」

「……そんなに寝て欲しいの？」

「ほい！」

即答だった。しかも力強く頷いてまでの。その速度に華琳が思わず面食らってしまう程に速く返答したしんのすけ。そんな彼の素直さに華琳は苦笑。だが眠れそうにない事は理解しているので、しんのすけへこう告げた。

「貴方の気持ちはよく分かったわ。でも、悪いわね。もう本当に眠くないのよ」

「そっか……じゃ、お話しよ」

「お話？」

「ほい。オラの事と華琳ちゃんの事をお話するんだぞ。もっと仲良くなりたいから」

華琳はそのしんのすけの言葉に小さく微笑むと、ならばまずはそちらからと促した。それにしんのすけが自分の事を話そうと口を開く。

「オラは野原しんのすけ、五歳」

「それは知ってるわ」

毎度お馴染みの出だしを華琳ははっきりと斬って捨てた。

「なら、好きな物を教えるぞ。チョコビにカレーライス……あ、後はキレイなおねいさんとぉ……」

「ちょこび？　かれぇらいす？　それは何かしら？」

「チョコビはお菓子で、カレーライスはご飯だぞ。えっと……チョコビはね……」

華琳の質問にしんのすけは自分が分かる範囲で答えていく。そこから天の食材や料理を聞いた華琳は、色々と面白そうだと言って興

味をそちらへ向けていく。しんのすけも食べ物ならばある程度は説明出来る部分も多いため、華琳の質問や要望に応じた物を告げていく。

実はかなりの料理人でもある華琳。それ故、しんのすけの語る料理の数々に強い興味を覚えたのだ。作り方などまでは知らないしんのすけだったが、華琳は少ない情報から独自のレシピを思いついていく。

見た目や味、材料などをしんのすけが知る限りで教えてもらい、いつかは再現を目指してみるかと考えながら華琳は天の料理の話を聞いていた。それもやがて終わり、華琳は久しぶりに楽しい時間を過ごせたと思って笑顔でしんのすけへ告げる。

「成程ね。中々楽しい話だったわ、しんのすけ」

「どういたまして～。じゃ、次は華琳ちゃんの番だぞ」

普段の軽い感じで返すしんのすけに小さく笑みを見せつつ、華琳は何を話すかと考えて不敵に笑った。

「そうね。じゃあ……私は曹操、字は孟徳よ」

「それは知ってる」

「ふふっ、貴方の真似をしたのよ」

「おー、こいつは一本取られましたなぁ」

華琳の言葉にジト目を返すしんのすけだったが、それに対して告げられた言葉に楽しそうな笑みを浮かべた。そんな彼の反応に華琳

はつい自然と笑みを見せた。

「クスッ、冗談はここまでにして……私の事を聞きたいのだったわね？」

「ほい」

「なら聞かせてあげるわ。まずは春蘭と秋蘭と出会った頃辺りがいいかしら……」

そこから始まる華琳の昔話。しんのすけはそれを聞きながら、幼い頃から春蘭と秋蘭が変わっていない事を知って楽しそうに頷いたり、幼い頃の三人の思い出話に驚いたり呆れたりと忙しく表情を変える。

そんなしんのすけの反応に華琳も次第に楽しくなって、自身も思い返しながら話に夢中になっていく。終始互いの表情を動かしながらの華琳の昔話。それを終えた頃には日差しは頂点を過ぎていた。

「……あら？　もう昼時ね」

「えっ？　おおっ、ホントだ。お日様が高いぞ」

二人して視線を木陰から空へ向け、その日差しの感じから現時刻を把握する。そして、そう知覚した瞬間しんのすけの腹が空腹を訴えた。華琳はそれを聞いて苦笑すると吊り床から降りた。

「しんのすけ、街に出るわよ。昼食を取りましょう」

「おー、それはいいですなぁ。じゃ、アクショ～ンジャ～ンプ！」

華琳の申し出に笑顔を返し、しんのすけは吊り床から飛び降りた。見事に着地し、華琳の隣へ素早く近寄るしんのすけ。そして、自然とその手を華琳の手と繋いだ。それに華琳が気付いて何かを言おうとするも、どこか嬉しそうに、だが苦笑するように笑って歩き出す。

（こんな風に異性と手を繋ぐ事になるなんてね。しかも初めての相手は子供か。これはさすがに私でも予想出来なかったわ）

意外としんのすけは押しが強いのかもしれない。そんな事をどこかで考えて華琳は小さく微笑む。それに気付いたのかしんのすけが不思議そうに問いかけた。

――お？　どーしたの華琳ちゃん。

――何でもないわ。不思議な気持ちになっただけよ。

――ほ～ほ～、それで笑ってるんだね。

――ええ。こんな気分は初めてよ。でも……思ったよりも悪くないわね。

華琳から言われた手を繋ぐのは駄目との言葉を忘れているしんのすけ。それを覚えているも、その温もりが何故か妙に嬉しく思えて黙っている華琳。彼女が手を繋ぐなど滅多にないのだが、生憎それをしんのすけは知らない。

幼い頃、母と繋いだ以来繋がれた事のない華琳の手。それが初めて異性と、それも友人になりたいと告げてきた子供と繋がれた瞬間だった。華琳はそう考え、小さく笑う。自分も意外と甘いのだなと。

二人はそのまま手を繋いで何を食べるかなどを話しながら、街へ

昼食を食べるために向かうのだった……

「華琳ちゃん、けっこーキツイ事言うんだね」

「そうかしら？　むしろ貴方の方が酷いと思うのだけど」

街の屋台街を歩くしんのすけと華琳。二人が話しているのは、先程まで食事をしていた店の事。そこの料理はしんのすけにとっては美味しかったのだが、華琳には不満だらけだったのだ。そのため、食べながら問題点を指摘し続けて店の店主がすっかり気落ちしてしまったのだ。

それを見たしんのすけは、がっくりと肩を落として泣いている店主の肩へ静かに手を置いて一言。

――ま、こーゆー事もあるよ。

それで余計店主が泣き崩れたのは言うまでもない。華琳はそれをさして酷いと言っていたのだ。もしこれを人が聞いていれば、きっとどっちもどっちだと言い切っただろう。とにかく、二人はそうして一軒の屋台を再起不能にまで追い込んだとは知らぬまま、手を繋いで歩いていた。

すると、ふと華琳が足を止めた。その視線の先には一軒の服屋がある。しんのすけもその華琳の視線を追って、その店を見つめた。

「あのお店に行きたいの？」

「そうね……貴方に服を選ばせてみるのも面白そうと思ったのよ」

「お、オラが華琳ちゃんのおよーふく選ぶの？」

「ようふく？」

「あれ？　およーふくってつーつー語じゃないんだ」

華琳が疑問符を浮かべて問い返してきた事に、しんのすけは意外そうな表情を浮かべた。本来洋服とは、和服という物があっての言葉。つまり、服全般を指す言葉ではないのだ。それをしんのすけは知らず、ただ服の事だと思って使っていた。その認識がこうして華琳の疑問に繋がった訳だ。

「つーつー語？　……ああ、共通語と言いたいのね。ようふく……つまり服の事を言っているのね」

「ほい」

しんのすけの言葉から洋服の意味を考える華琳。すると、その答えは比較的簡単に出た。

「そう……成程、天にも国が沢山あるのだったわね。では、海を渡った先の国の服をようふくと言うのでしょう」

「お～、そー言われればそーかも。さすが華琳ちゃんだぞ」

「これぐらいは普通に理解出来るわ。だから褒めても何も出ないわよ？」

小さく笑う華琳。それにしんのすけもつられるように笑顔を返す。
そして、二人はそのままその店へと入っていく。初めて訪れるこの世界の服屋にしんのすけは不思議そうに小首を傾げた。思っていたよりも中国らしくない服ばかりだと感じたのだ。とはいえ、彼が考える中国の服はチャイナドレスぐらいしかないので、当然と言えば当然だったが。

そんな周囲をキョロキョロと見回す彼へ、華琳はついてくるように声を掛け奥の方へと歩みを進める。しんのすけもそれに置いて行かれないように追いかけ、店の奥へと向かう。そこで華琳は手近な物を手に取ってしんのすけへ見せた。

「これはどう？」

「う～ん……イマイチ」

「あら、意外とはっきり言うのね。いいでしょう。なら……これは？」

「お、それいいね」

「あら、そうなの。じゃあ、これは保留ね」

「あ、オラはこれを華琳ちゃんに着て欲しいぞ～」

「どれ？　……かなり露出の多い服ね」

「お・や・く・そ・く・だ・ぞ」

「一々区切らないの」

そんな風に会話しながら次々と服を手にしては、自分に当ててしんのすけへ意見を求める華琳。一方のしんのすけも、時に自分がいいと思った服を指差して華琳へ教えた。その会話を聞き、店主は小さく微笑んでいた。

その内容がどちらかと言えば主従というよりは仲の良い男女に近かったのもあるのだろうが、何よりもあの華琳が楽しそうだったのだ。とてもこの辺り一帯を統治する者とは思えないぐらいの雰囲気に、店主は密かに店先へ出て臨時閉店との札を出した。

（曹操様は今日の事を誰にも見せたくないだろうからなぁ……）

もし見られれば自分がどうなるか分かったものじゃない。それぐらいの凄い現場に自分はいるのだろう。そう考え、微かに恐怖に表情を歪める店主だったが、それでも店内に戻ると奥から聞こえる声ですぐに笑みが戻る。

「おー、華琳ちゃんカワイイぞ。おじょーさまみたーい」

「そう？　私はあまり好きではないのだけど……」

今、華琳が着ているのはフリルの付いた白いワンピースだった。普段と違い、どこか大人しい雰囲気を醸し出しているそれにしんのすけは嬉しそうな声を出すが、華琳自身はあまり好みではないのか表情は疑問を浮かべていた。

それでもどこか喜んでいるのは、やはり素直に褒められているからだろう。そんな華琳へしんのすけは二人で選んだ服を見つめ、楽しそうに尋ねた。

「ねぇねぇ、次は次は？」

「ちょっと待ちなさい。えっと、次はどれを着ようかしら……？」

さすがに結構な数を選んだせいで、どれを着ようかと迷い始める華琳。しんのすけもそれを聞いて、同じように服の山を眺めて一着の服を手にした。

「んっと……これは？」

「どれ？　ふむ、いいでしょう。で、これを選んだ訳は？」

「だって、これもオラが着て欲しい奴だもん」

「成程ね」

そのしんのすけの答えに華琳は納得。そして、その手にしていた服を受け取った。しんのすけの手にしていた服は先程と違い、黒を基調とした物だった。

そこで華琳はふと気付く。しんのすけが選ぶ物は白と黒が多いような気がすると。なのでその理由を尋ねた。どうしてその二色を選ぶのかと。それにしんのすけはあっさりと答えた。

――華琳ちゃんの色って感じするんだぞ。

――私の色……？

しんのすけは華琳から受ける印象から、黒が一番合っていると思った。だが、何故か白も華琳の色のような気がした。そのため、どうしてもその二色を選んでしまうのだと語った。華琳はその理由に一応理解と納得をしたが、当然のように白が自分の色とは思えなか

った。

それについてはしんのすけも同意出来るのだが、何故かそう感じてしまうのだ。しんのすけは知らない。それは華琳の本質である優しい雰囲気をどこかで白だと感じ取っているからだとは。

そんな試着会も終わり、結局華琳はしんのすけの選んだ服を二着購入して店を出た。白の物と黒の物だ。店を後にする二人を見送り、店主は再び札を外して一度だけ視線を離れていく背中へ向けて苦笑する。そして小さな声で「仲が良くて結構です」と呟いて店内へと戻っていく。

そんな事に気付くはずもなく、華琳は自然としんのすけと手を繋いだまま歩いていた。彼女にとっては初めての異性との買い物となったが、華琳にその感覚は薄い。それでも、いつになく上機嫌な自分に華琳は気付く。その理由が荷物を持つ手とは逆の手にあると悟り、少女は一人微笑む。それに気付かず少年は足元の小石を蹴りながら歩く。すると、それがちょうど華琳の前へと転がった。

「あ、華琳ちゃん、パス」

「ぱす？　要するに渡せって事ね？」

しんのすけの言葉に疑問符を浮かべながらも華琳は小石を軽く蹴り、彼の前へと転がして歩き出す。それに頷き、しんのすけはそれを軽く蹴って再び華琳の前へ。それに華琳は足を止め、しんのすけへ視線を向けた。

「これはどういうつもり？」

さすがに今のはしんのすけが意図して自分の前へ転がしたと分かった。そのため、華琳は悪戯のつもりかとやや視線を鋭くした。何

を意図したのかと思って理由を問い質すために。しかし、そんな視線も何のその。しんのすけはあっさりとこう返した。

「オラと華琳ちゃんでこれをお城まで運ぶんだぞ。せーこーしたら、今日のオラ達はぜっこーちょー」

「今日のって……もう半日終わっているのだけど……」

「もう、細かい事気にしないの。ほら、早くやろ」

そう言ってしんのすけが急かすので、華琳は苦笑しながら小石を蹴って彼の前に転がした。それにしんのすけが応じて華琳の前へと転がす。そんな風にお互いやや苦戦しながら小石を転がしていく。

最初こそどこか馬鹿にしていた華琳だったが、やってみると意外と難しい事に気付いた。歩いている相手へ合わせて小石を転がすだけではなく、歩みを止める事なく蹴るのは中々厳しい。しかもあまり遠くへ飛ばすと相手が蹴る事が出来ない上に他者に蹴られてしまう。その可能性を考慮しつつ、小石を見失わないように加減して転がさなければいけないのだ。

――しんのすけ、少し距離が遠いわよ。

――なら、華琳ちゃんは歩くの止まりそうだよ？

――言うじゃない……いいわ。なら少々本気を出してあげる。

――おおっ！　華琳ちゃんが本気になったぞ！

子供のちょっとした遊びを真剣な表情で行う華琳。それでも、次第にコツを掴んだ華琳は絶妙なパスを繰り出していく。しんのすけ

はそれに負けじと上手い具合のパスを出す。こうして二人は小石を蹴り続けて、見事城へと接近する。

後少しとなった時、小石が華琳の前へ転がってきた。もう門が目の前に見えてきた。これで成功間違いなし。そう思って華琳は最後だからと少々強めに蹴った。小石が門へ吸い込まれるように飛んでいく。それを見守るように見つめるしんのすけと華琳。

そして、小石が地面に落ちて転がっていく。それがもう門を越すとなった瞬間、それは起こった。突然突風が吹き、小石がそれに流されてしまったのだ。そのまま小石は二人からも遠ざかるように転がっていき、他の小石と混ざった。

「……失敗しちゃったね」

「そうね……まぁいい暇潰しにはなったわ。行きましょ」

しんのすけの残念そうな声に華琳は平然と返して歩き出す。当然しんのすけもそれにつられるように歩き出すが、その視線はずっと先程の小石を見つめていた。そして、華琳が門へと入ろうとした時、しんのすけがその手を引いた。

それに華琳が足を止め、視線を向ける。すると、しんのすけは華琳の手を掴んだままこう言い出した。

――あ～、体が勝手に引き寄せられるぞ～。

それに疑問符を浮かべる華琳を引っ張るように、しんのすけは門から離れ先程の小石へ向かう。そして、足元にある小石を見つめて華琳へ告げた。

「おおっ！　何故かここにさっきの石が?!」

「わざとらしいわね」

「と、言うわけでぇ……もう一回ね」

「一度失敗した以上、もう効果はないのではなくて？」

しんのすけの言葉に華琳は少しからかうように返す。だが、しんのすけはそんな華琳へこう返した。

――誰も失敗したらダメなんて言ってないぞ。やれるなら、何度でも頑張ろーよ。諦めないうちはだいじょーぶ。

その言葉に華琳は微かな驚きを見せてから呆気に取られるものの、やがてため息を吐いてしんのすけへ言った。いい性格をしていると。それを聞いたしんのすけが嬉しそうに笑ってこう言うのは、最早お決まりとも言えた。

「いやぁ～、それ程でも～」

「褒めてないわよ。じゃ、早く終わらせましょうか」

「ほーい」

こうして小石を城へ運ぶ事を再開した二人は見事門を突破。それに喜ぶしんのすけに華琳は呆れながらも、小さく呟いた。

――しんのすけ……やはり貴方は私よりも……

その声にはわずかな寂しさが混じっていた。その理由は先程の言

葉。そこに華琳はある人物と同じ思想を感じた。桂花が聞いたしんのすけが影響を与えた人物。それと同じだと思い出したのだ。

それでも華琳はすぐに気を取り直して歩き出す。その手に感じる温もりを離さぬようにしっかりと掴んだままで。そこにはある気持ちがある。覇王としての気持ちと一人の少女としての気持ちが半分ずつ混じったものだ。

（しんのすけが選んだのはこの私。ならば、この手はもう貴女が手にする事はないわよ劉備。天の御遣いに選ばれ、この大陸を統一するのは私なのだから）

そう思い、華琳はふと考える。自分が天下を統一した時、しんのすけはどうなるのかと。そして、その答えをその明晰な頭脳はあっさりと弾き出す。それが意味する事を考え、華琳は不敵な笑みを浮かべた。

（そうか……では、私が予言を叶えてあげましょう。しんのすけを大陸中に天の御遣いだと認めさせるように）

華琳の握る手が少し力強くなったのを感じて、しんのすけは若干不思議そうな眼差しを華琳へ向けるも、その表情を見て何も言わずに頷いた。そして、ある事を思い出して楽しそうに告げた。

――華琳ちゃん、オラ達これでぜっこーちょーだぞ。

――そうだったわね。なら、今から料理をするから手伝いなさい。

――ほーい。で、何作るの？

――そうね……せっかくだから貴方の国の料理を作ってみようか

しら？　流琉にも手伝ってもらいましょう。

　そんな会話をしながら廊下を歩く二人。この日の夜、星達は見た事もない料理の数々を目の当たりにする事になる。その説明を流琉がする中、ほとんどを調理した華琳は味見や意見役として疲れたしんのすけを隣へ座らせ満足そうに笑っていたという……

――――――

華琳の傍付きとして竹簡の運搬や簡単な連絡役などをするしんのすけ。それとは別に与えられた仕事は桂花達軍師への情報提供。つまり天の話をする事だ。これらを仕事として任され、しんのすけは白蓮の城にいた頃とは違う忙しさを感じていた。

華琳は基本容赦ない。例え子供といえど仕事を任されたのならば責任をしっかりと与えるのだ。失敗をすれば罰を与え、成果を出せば褒める。恩賞必罰を信条としているのだ。それはしんのすけとて例外ではない。

「しんのすけ、これを桂花達のいる場所へ運んで頂戴」

「ブッ、ラジャー」

「頼むわね。量が多いけど落とさないように。それが終わったら秋蘭を呼んできて。話をしておく事があるの」

「ほ～い」

間延びした声を出しながら、言われた竹簡を手に取っていくしんのすけ。それを聞きながら、視線を手元に落としたままで華琳は即座にこう返した。

「返事は短く」

「ほい」

「よろしい」

華琳の声を受け、しんのすけは執務室を出て桂花達がいる場所へと向かう。両腕に結構な量の竹簡を抱え、しんのすけはよたよたと歩く。そして何とか無事に桂花達の元へとそれを運び終え、次の指示である秋蘭を呼ぶために城の中を捜し始めた。

まずは秋蘭の部屋。当然いるはずもなく、次に向かったのは調練をしている場所。だが、そこには星や霞はいるものの秋蘭の姿はない。仕方ないのでしんのすけは中庭へ向かった。そこにもおらず、次はどこを捜すかと考えるしんのすけだったがあまり時間をかけすぎると華琳に怒られると思い、一旦執務室に帰る事にした。

「華琳ちゃん、ちゃんと理由を言えば許してくれるもんね～」

誰にでもなくそう言いながら廊下を歩くしんのすけ。と、その視線が目当ての人物を捉えた。秋蘭は春蘭と何かを話しながら歩いていたのだ。どうやら華琳の元へ行く途中で春蘭と出会ったのか、やや苦笑している。

しんのすけはこれで用件を全て終わらせる事が出来ると思い、少し急ぎ足で二人の後を追った。ゆっくり歩いているようでも二人は大人。その歩幅は子供のものよりも大きい。そのため、しんのすけが二人を追い駆ける様相になってしまうのは当然とも言えた。

「秋蘭お姉さん、ちょっと待ってほしいぞ！」

「ん？　……ああ、しんのすけか。どうした？」

後ろから聞こえた声に振り返る秋蘭。春蘭も同じように振り向いた。だが、何かを疑問に感じているのかやや不思議そうだった。

「と言うか、何故秋蘭だけなのだ？　私もいるのだぞ」

「華琳ちゃんが呼んできてって言ったの秋蘭お姉さんだけだぞ」

「そ、そうか……」

「華琳様が？　……ああ、あの事だろうな。分かった。しんのすけ、もう他に用事はないのだろう？　共に行くか」

しんのすけの告げた内容に納得する春蘭だったが、自分は呼ばれていないためにどこか寂しそうな表情を浮かべる。そんな姉を横目に秋蘭はその理由に思い当たるものがあるため、合点がいったとばかりに声を出した。

そして、しんのすけへ共に執務室へ向かおうと声をかけ歩き出す秋蘭。それにしんのすけも嬉しそうに頷いてその隣へと駆け寄ってから歩き出すのだが、春蘭もそれについてきた。その動きは本当に自然で違和感のないものだった。

しかし、それに気付いてしんのすけと秋蘭は足を止めて振り返った。そんな二人の視線を受け、春蘭はやや戸惑うような表情を返す。心なしか動揺しているようにも見えるのは気のせいではないだろう。

「な、なんだ？」

「先程のしんのすけの言葉を聞いていなかったのか、姉者？」

「華琳ちゃん、秋蘭お姉さんだけしかお名前言って無かったよ？」

「い、いいではないか。私はもう昼休みなのだから、華琳様を昼食に誘おうと思っているのだ！」

二人の指摘に顔を赤めて答える春蘭。そんな姉の姿に笑みを浮かべる秋蘭。しんのすけはそんな春蘭を可愛いと言って笑っていた。そのしんのすけの言葉に、春蘭が軽く照れながらもそんな事を一々言うなと反論。そこから始まる軽い言い合い。

そんなまるで大人と子供のそれとは思えないような雰囲気に秋蘭は小さくため息を吐く。だが、それがとても楽しそうな顔をしているので、彼女としてもそのやり取りは微笑ましく思っているのだろう。今はもう言い合いではなく、軽い追いかけっこになっているのもその原因だ。

廊下を走り回りながら笑うしんのすけ。それを追い駆けながら、どうして自分がそうしていたのかも忘れたのか不思議そうな表情を一瞬浮かべる春蘭。だが、すぐにそれが消える。楽しそうなしんのすけを見て彼女も笑みを浮かべたのだ。そこから捕まえようとする春蘭の速度が上がった。やや本気になってきたのだろう。

そんな光景を少しだけ眺め、秋蘭は小さく笑みを浮かべた。しかし、庭へ逃げて行きそうになったところで二人に対して声を掛ける事にした。このままでは華琳を待たせる事態になると判断したからだ。内心ではもう少し眺めていたいと思いつつ、秋蘭はやや苦笑して口を開いた。

「姉者、しんのすけ。そろそろ行くぞ。華琳様を待たせる訳にはいかんだろう」

「む、そうだな。行くぞ、しんのすけ」

「ほーい」

秋蘭の声で見事に動きを止める二人。そしてやや急ぎ足で秋蘭の元へと戻るとそこから三人で再び歩き出した。すると、しんのすけ

がふとある事を思い出して二人へ尋ねた。何を話していたのかと。
それに春蘭が嬉しそうに答えた。明日、久々に秋蘭の料理を食べられるのだと笑顔で告げたのだ。それに秋蘭が笑みを浮かべながら補足をした。明日は秋蘭が休みとなるので、春蘭が料理を作って欲しいと言ってきたらしい。要望は餃子。なので、この後街へ出かけて買い物をしてから下準備をするつもりなのだ。

と、そこまで話して秋蘭がやや苦笑しながらこう告げた。

「実はな、前も同じような事を頼まれた事があったのだ。その際、少々問題もあってな。今回はそれを踏まえて色々と手を打ってあるから心配ないと思うが……」

「ほ～ほ～……で、何したの？」

「なっ……どうして私が問題を起こしたと決め付ける！？」

事情も聞かずに、しんのすけは春蘭がその問題の原因だと決め付けた。故にジト目で春蘭へ視線を向ける。それに心外だとばかりに言葉を発する春蘭だったが、秋蘭がそんな彼女へぴしゃりと言った。

「では、空腹を我慢する苛々を壁にぶつけたのは誰だった？」

「うっ……そ、それはぁ……」

「どーゆー事？」

秋蘭の言葉に困った表情を返す春蘭。しんのすけはそれに疑問符を浮かべ、詳しい説明を求めた。秋蘭はそれにやや呆れるように簡単な説明をした。

秋蘭の料理を楽しみにするあまり、春蘭はその料理を食べるまでは一切何も食べないと決めた。そのため、空腹により神経を追い詰められた春蘭はその苛々を取り壊し予定だった壁へとぶつけて見事に破壊したのだ。

「……仕方ないではないか。秋蘭の料理を食べる事が楽しみだったのだ。それを万全の状態で食べるには、それぐらいしなければ」

「と、言う訳だ。なので、今回はちゃんと今日は食事をするように言ってある。明日の朝食を抜くぐらいは大目に見るがな」

春蘭の恥ずかしそうな声を聞いて、秋蘭はどこか嬉しそうにそう締め括った。それを聞いてしんのすけは理解したとばかりに頷いた。そして、その話を聞いてしんのすけが自分も食べたいと言い出すのは当然の流れだった。それに秋蘭は春蘭へ伺いを立てた。

「姉者、よいか？」

「うむ、私は構わんぞ。作る秋蘭さえ良ければな」

「そうか。なら、明日の昼に食堂へ来い」

「ほっほーい。秋蘭おねいさんの手作りだぞ～！」

「大袈裟な奴だ。まぁ、気持ちは分からんでもないぞ」

「ふふっ、以前城へ来た時も食べているのだがな」

嬉しそうに小躍りまでするしんのすけを見て春蘭も秋蘭も笑みを見せた。そんな会話をしながら三人は執務室へと向かう。この後、

しんのすけは華琳から休憩を与えられ、春蘭と共に秋蘭の買い物に付き合う事にした。

春蘭が華琳も共にと誘うもののやるべき事が一段落するまでは動く訳にはいかないと返され、泣く泣く諦めたのだった。こうして三人は昼食と買い物を目的に街へと出かけた。

「お、あれ凪ちゃん達じゃない？　おーい！　凪ちゃ～んっ！」

「どうやら奴らはこれから昼飯のようだな」

「そのようだ。丁度いい。我々も昼にしよう。凪達から聞きたい話もあるしな」

目の前を歩く凪達を目ざとく見つけたしんのすけが手を大きく振りながら呼びかける。それを聞きながら春蘭と秋蘭も凪達へ近付いた。凪達は丁度昼休憩を取っていたらしく、それを聞いてしんのすけが昼食を一緒に食べよう言い出し、春蘭達も同じ事を考えていたためにそれに賛同。やや凪が戸惑うも沙和と真桜は即座に了承した。

「本当にいいのでしょうか？」

「気にするな。何、私はお前達に聞きたい事もある。そのついでと思ってくれ」

「そうだぞ。ま、あまり難しく考えるな。ただ共に食事をするだけだ」

春蘭の言葉に凪はならばと納得し、これから行こうとしていた店へ案内し出した。その後ろではしんのすけが沙和や真桜と楽しそうに話をしていた。明るい性格の二人はしんのすけと気が合うため、

洛陽から戻った後はよく話すようになった。特に真桜はしんのすけの知るからくりの話が好きなため、時間を見つけては発想を得る事も兼ねて交流が多かったのだ。

「ねぇねぇ、今日は何を食べようとしてたの？」

「そやな～、季衣からえー店を色々聞いとるからその中から選ぼかって話はしとったけど」

「凪ちゃんが行きたい所があるからってそこになったのー。だから、沙和達は知らないんだよねぇ」

「ほーほー、つまり凪ちゃんしか知らないんだ。楽しみだぞ」

「「……激辛じゃない事を願うけどな（のー）」」

「お？　どーゆー事？」

二人のややため息交じりの呟きにしんのすけが反応した。その疑問に二人は凪の味の好みを話していく。その内容にしんのすけも最初こそ凪の一面を知れて喜んでいたのだが、段々二人の話に表情を曇らせていくのだった。そう、凪は辛い物が好き。しかも並の辛さでは物足りないと感じる程に。

過去あった例を教えられる度に、しんのすけが口内や喉に辛さを感じるような気がしてくるぐらいにだから相当だろう。そんな会話をしながらしんのすけ達は凪が案内する店へと向かう。幸か不幸かそこは激辛料理の店ではなかった。ただ、凪の好みに合致するような注文を叶える場所でもあったが。

「……凄い色だな」

「そう、だな。凪、そんな物をいつも食べているのか？」

出された皿はエビチリだったが、その色が目に痛い程の赤とくれば春蘭と秋蘭の言葉も頷けるというものだ。しかし、問われた凪は平然と告げた。

「はい。いつもではありませんが、週に一度は食べたくなる味ですね」

その瞬間、表情を何とも言えない複雑なものへ変える二人。既に知っている沙和と真桜は何も言わずにいた。ただ、その表情はやや呆れていたが。一方、しんのすけはそんな周囲に気付かれないようにそのチリソースへ手を伸ばして指につけた。そしてそれをそのまま口へ運んだのだ。

「あ、何だ。意外と……」

平気かもと言おうとしてしんのすけはその場で意識を失った。そのまま体が後ろへぐらりと倒れるものの、それに気付いた凪が慌てて受け止める。

「お、おい！　どうした、しんのすけっ？！」

「これは……まさか舐めたのか？」

「お前は馬鹿かっ！　どう見ても耐えきれるような物ではないだろうがっ！！」

意識を手放しているしんのすけの様子からその原因を瞬時に悟る

秋蘭とそれを聞いて怒鳴る春蘭。しかし、もう慣れたものとばかりに真桜が手にしていた水をしんのすけの口へ流し込むために動き出した。沙和はそれをすぐに理解し、手伝いとしてしんのすけの口を開いていた。

「はーい。しんちゃん、口を開けてーなの」

「油断も隙もない奴やな、ほんま」

それを黙って見つめる春蘭達。やがてしんのすけがゆっくりと目を開けた。

「あれ？　凪ちゃん達がいるって事は……ここって天国じゃないの？」

その言葉に全員が安堵の息を吐いた。そして秋蘭がその指を綺麗にするために店主から布巾を借り、凪は沙和と真桜に慰められていた。しんのすけが勝手にした事とはいえ、十分に注意しておくべきだったと思ったのだ。

そのちょっとした騒ぎを起こした張本人といえば、絶賛春蘭によって叱られていた。どう考えても口にすればただでは済まない料理に手を出すなと言われていたのだ。それにはしんのすけも反省しようと思うだが、素直に従うをよしとしないのかこう反論した。

「でも父ちゃんが言ってた。じんせーは一度きりだからやりたい事をやれって。これって間違ってるの？」

「む、いや確かにお前の父の言う通りだ。一度きりの人生ならば己のやりたい事をやり遂げるのは間違ってはおらんぞ」

「でしょ？　だからオラもそうした。春蘭お姉さんもしたい事をしたいよね？」

「それはそうだな」

「じゃ、そーゆー事だからオラの行動も仕方ないって事で～」

「成程！　そういう事なら仕方ないな」

「姉者、言いくるめられてどうする。しんのすけ、お前の言う事も分からんでもない。だが、危険に敢えて飛び込む必要がない時は飛び込まないようにしろ。お前にもしもの事があれば季衣や流琉が悲しむぞ」

春蘭の思考を誘導して話をうやむやにしようとするしんのすけへ、秋蘭は苦笑しつつも大切な事を告げた。それは自分の事を心配してくれる者達の存在を忘れるなという事。それはしんのすけの心へ確かに届いた。自分とて誰かが傷を負ったり苦しんだりする事が嫌なのだから。

故にその場で素直に頭を下げた。ごめんなさいと。それに分かればいいと頷く秋蘭と春蘭。凪達はその三人の様子を眺めてこう感じるのだった。まるで姉弟だと……

食事を終えたしんのすけ達は凪達と別れて乾物屋へと向かった。勿論料理の材料を調達するためにだ。勝手な事をしてはぐれないようにとしんのすけは秋蘭と手を繋いでいた。いや、繋がされていた

の間違いか。当初は春蘭が繋ごうとしていたのだが、先程の店でのやり取りを鑑みて秋蘭が自分にしたのは言うまでもない。

しかし、そんな秋蘭の心配を余所に、しんのすけはどちらが手を繋いでいても離れるつもりはなかった。彼としては綺麗なお姉さんである二人と共にいれる事が嬉しいのだ。それも手を繋げるとなれば余計気分も高揚するというもの。

「ここだ。姉者、すぐ済むからここで待っていてくれ」

「うむ。しんのすけを預かっておかなくてよいか？」

「ひつよーないからだいじょーぶだよ」

「お前が言うな！」

そんな会話を店先でした後、結局春蘭も心配だからと秋蘭の後をついていった。そこでしんのすけは初めて見る干しアワビや干し貝柱などを興味深そうに眺め、春蘭と一緒になって分からない物を見つけては秋蘭へ尋ねるのだから仲がいい。それに秋蘭も答えるのはやはり姉が好きだからか。そうして三人は店を出た後も賑やかに過ごす。

華琳へのお茶菓子を選び、城へと戻った三人はそれぞれに別れて動き出す。しんのすけは華琳の手伝いを、春蘭は自己鍛錬に励み、秋蘭は残りの仕事を片付けた後、翌日に備えての下準備。こうしてこの日は過ぎていくのだった……

翌朝、しんのすけが星やシロと共に中庭へ出ると元気一杯に剣を振る春蘭の姿があった。だが、どこか不満そうにも見せる。更に、周囲をよく見ると少し離れた位置に凪と霞が苦笑いを浮かべて立っている。その視線は二人揃ってしんのすけ達を見つめていた。

すると、春蘭もしんのすけ達に気付いて視線を動かした。その表情はまるで遊び相手を見つけた子供のようだ。シロはそんな春蘭へ嬉しそうな声を出しながら走り、しんのすけと星は慌てる必要はないとばかりにゆっくりと歩いた。

「キャンキャン」

「ん？　おおっ、シロも元気だな。いい事だ」

「相変わらず朝から元気だな、春蘭」

「当然だ。一日の始まりから力を出せなくてどうする」

星の問いかけに春蘭はシロを撫でながらそう返して笑う。そんな星へ凪がそそくさと近付き、鍛錬の相手を願い出た。今までは霞とすると言って春蘭から逃げていたのだ。そう、今朝の春蘭はいつも以上に張り切っていた。

その理由は言うまでもなく、秋蘭の作る昼食を美味しく食べるため。いつも以上に運動し、腹を空かせておこうと考えているのだ。だが、それを知らない凪はきっと春蘭が暴れたいのだと判断し、こうして内心申し訳ないと思いつつも逃げていたという訳だ。

「星様、お願いします」

「分かった。では、霞にしんのすけを見てもらうとするか」

「いや、それは私がやろう！」

星の言葉に力強く春蘭が答えた。それにしんのすけ以外が少々不安そうな表情を見せる。春蘭では子供に教えるという事が出来ないのではないかと、そう考えたのだ。しかも、シロまでもそんな春蘭の発言に不安を隠せずに項垂れた。

「クゥ～ン……」

「シロまで何だっ！　私では不服か！」

春蘭はそんな周囲の雰囲気を感じ取り、やや怒ったように表情を変えた。それでもシロへ手を出さない辺りに春蘭の優しさが見える。そんな春蘭の発言に霞は頬を掻きながら答えを返した。納得させるべきかと思ったのだろう。

「いや……別にええんやけどな。で、ちなみに春蘭はしんのすけに何をさせるつもりや？」

「うむ、まずは剣の使い方だな。それに天の剣術にも興味があるので、後で私が手合わせをする事にする」

その内容に最初は意外と普通だと思っていた星達だったが、後半を聞いてやはり春蘭は春蘭だと思って項垂れた。だから星はやや苦笑しながら霞へと視線を向けた。無理に止めるよりもいい方法を思いついたために霞の力を借りる事にした。

「……霞、すまんが春蘭の補佐を頼んでもいいか？」

「しゃ～ないな。ほら、さっさと始めるでしんのすけ。春蘭はとり

あえず手にしとるもんをしまい」

「何故だ？　剣の使い方を教えるには実際の物を……」

「子供がそんな重いもん持てる訳ないやろ。それに、しんのすけが真剣持つ事は絶対ない。……あったらあかんのや」

春蘭の言葉に霞はそう返した。最後だけはまるで自分に言い聞かせるように呟いて。子供が真剣を持つ。そんな事があってはならない。子供が人を殺める事があっては、起こさせてはいけないと思うからこその呟きだった。

当然しんのすけはそれに気付かず、春蘭の前へと近付いて愛用の木刀を見せた。これを以前から使っているし、それじゃ大きいから扱い難いと言って。それに春蘭は若干不満そうだったが納得した。だが、その目が少し不思議そうな色を見せる。木刀がやや珍しい形状をしている事に気付いたのだ。その疑問を浮かべたまま春蘭は木刀を手に取った。

「これは……刃の部分が変わっているな」

「白蓮ちゃんに頼んで、こーゆーの作ってくれる人にカタナをマネしてもらったんだぞ。いやぁ、オラの言ってる事を分かってもらうのに苦労しましたな～」

「かたな？　星、天の武器の事なんか？」

しんのすけの告げた刀という表現に春蘭と霞が揃って興味を示した。二人はしんのすけの木刀をまじまじと見た事が無かったため、今までその独特の形状に気付かなかったのだ。星は凪との鍛錬を始めようとしていたところだったので、それにやや出鼻を挫かれた形

になったもののそれに頷いて返した。

そこから星と凪との手合わせが始まったので、霞はそれ以上は聞けないと判断してしんのすけへ視線を向ける。そこには、春蘭から刀の事を詳しく聞かれうろ覚えの知識を話すしんのすけがいた。

出来れば鞘が欲しいと言うしんのすけに、春蘭がならば自分が買ってやると返して笑ってみせた。そう、星達はしんのすけを子供として考えているが、春蘭だけはしんのすけを武人に育てたいと思っているのだ。故に、武人が鞘も無しでは格好がつかないと考えたのだろう。

「今度、街へ出かける際に職人へ言ってそれを納める鞘を作らせよう。霞、それは多少重くても良いな？」

「せやなぁ……まぁええか。いざとなったら鞘をつこうて真剣を止める事も出来るしな」

「おー、オラの鞘はあえんごーきんで作ってもらえるの？」

「「あえんごーきん？」」

しんのすけの告げた亜鉛合金とはカンタムロボの歌にも出てくるフレーズである。つまり、彼にとってはカンタムロボの装甲材を意味しているのだ。しんのすけの中での堅い物。その代表格がそれだったために。

当然、その言葉に疑問を浮かべる二人へしんのすけがカンタムロボの事を話す。その内容に二人は驚きを露わにした。天では鋼鉄で出来た巨人が存在すると思ったのだ。そう、しんのすけがカンタムロボをアニメだと言わなかったせいで。

更にそこからカンタムロボの詳しい話をしようとしたところで、そこへ秋蘭が現れた。

「ん？　なんだ。あれだけ張り切っていた割には大人しくしているのだな、姉者」

「秋蘭か。この時間にここへ来るとは珍しいな。どうしたのだ？」

「いや、私もたまには参加してみようかと思っただけだ」

春蘭の問いかけにそう返す秋蘭。本当は、姉が何かしでかすのではと心配していたとは言わないところに春蘭への気遣いがある。そんな事をするはずもない春蘭は、秋蘭が来たのならと霞へ自分の補佐は必要ないと告げた。

霞も自分よりも秋蘭の方が扱いに慣れていると理解しているので、苦笑しながら星と凪の方へ近付いていった。しんのすけはいよいよ鍛錬が始まると思い、期待に満ちた眼差しを春蘭に向けて木刀を手にして構えた。

「姉者がしんのすけを指南するのか？」

「ああ、必要ないだろうが補佐を頼む」

「よろしくお願いするぞ」

二人の言葉に秋蘭は苦笑すると分かったとばかりに頷いた。そして、しんのすけへの指導が始まったのだが、二人には少し気になる事があった。

「それが天の剣術なのか」

「ほい。オラが教わったのはこんな感じ」

「ふむ、基本は分からんでもないがこちらとは少し違うのだな」

しんのすけの素振りの仕方を見て、春蘭と秋蘭は揃って同じように違和感を感じた。明確にどこがとは言えないのだがそれでもやはり違うような気がする。そんな何とも言えない感覚にもどかしいものを覚えるが、それでも春蘭はしんのすけへ剣の使い方の説明をしようとする。

しかし、しんのすけの手にした木刀の形状を見てその説明を中断した。気付いたのだ。この木刀の形状では自分がやっているような事は難しいだろうと。刀は基本受け流すか避けるしかない。そもそも斬る事に特化させた武器なのだ。つまり、その刃が薄いために相手の刃を受け止める事を考慮していない。木刀はそこまで刀と同じではないが、しんのすけが持ってもそこまで重くないようにやや薄めになっていた。

「……秋蘭、これでどう戦うと思う？」

「む……叩き斬るのは無理だろうな。であれば……」

春蘭の質問に秋蘭は念のためにしんのすけへ聞いてみるかと考え、視線を彼へ向けた。しんのすけはそんな秋蘭の視線に気付いてその視線を合わせた。

「お？　何かご用？」

「しんのすけ。一つ聞きたいが、天ではこんな剣でどうやって戦う

のだ？」

「え？　うんと……ズバッって斬るんだぞ。こうやって持って……こう」

しんのすけは木刀を持って袈裟斬りの形にそれを振り下ろした。
それを見て二人は何となくだが刀の本質を察した。

「どうやら天の剣は切れ味を優先した鋭い刃で斬りつけるようだな」

「うむ、それで刃が薄い事に納得がいった。分厚い刃は鋭くするのが難しいからか」

頑丈さで叩き斬るのではなく、鋭さで斬り裂く。それが刀の使い方なのだろうとそう二人は結論付けた。同時に中々難しい剣術だとも思った。人の体には当然骨がある。そこを斬るのは至難の技だ。特に刃が薄い刀のような武器では尚の事。

しんのすけも二人も知らない。故に普通刀は人を斬ってしまうともう刃こぼれを起こし、切れ味がかなり悪くなってしまうのだ。まぁそれはどんな刃物でもそうなのだが、刀はその性質上余計にそうなり易かった。達人であればその限りではないのだが、無論しんのすけも二人もそんな事を知るはずはない。

二人が刀についてある程度理解を示したところで鍛錬が再開された。春蘭の実演混じりの指導にしんのすけは素直に従い、その才の一端を二人へ見せる。そう、彼は元々春蘭と同じように感覚で理解するタイプ。

故に実演を伴う事でその剣の才を少しだが開花させ始めたのだ。
そこには星が基礎ばかりを重点的に鍛えていた事も関係している。
春蘭という剣の使い手から教わる前に下地を整えられたしんのすけ。

そこへ達人の教えを受ける事が成長に繋がりだしたのだ。

「そうだ。こう……気合を込めて力一杯振り下ろせ」

「ほい！」

春蘭の実演に返事を返すと同時に手にした木刀を振り下ろすしんのすけ。それを見て真剣なままに頷き、春蘭が次の指示を出していく。そんな様子を眺め、秋蘭はしんのすけの動きなどを注視していた。

（……少しずつだが振りに鋭さが出てきたか？　どうやらしんのすけも姉者と同じ気質のようだ）

揃って剣を振る春蘭としんのすけ。それを眺め、秋蘭は小さく頷いた。出来る出来ないを考える前に純粋な反応を返して挑戦するしんのすけ。それが春蘭の性格に見事なまでに噛み合っていると感じたのだ。

頭で考える者でなくて良かった。そんな風に考え、秋蘭は思わず苦笑した。子供はそれが普通だと思い出したのだ。体で感じて動く。頭で考えるようになるのはもう少し大きくなってからだと、そう思ったのだ。

（星が動きにはかなりの才があると言っていたが……確かにな。今でこれならば、絶えず鍛錬し成長すれば親衛隊にも配属出来るやもしれん。……ま、怠けなければだが）

（おおっ！　中々筋がいいではないか！　いや、きっと私の教え方がいいのもあるのだろうな！）

そんな事を考える秋蘭と春蘭。だが、その表情がそれぞれに変わる。春蘭は楽しそうな、秋蘭は呆れた感じにだ。その理由は秋蘭の視線の先での光景。

そう、しんのすけと春蘭が軽い手合わせをしようとしていたのだ。それはさすがにと止めに入る秋蘭。それに軽い不満をぶつける春蘭。しんのすけはその間、ずっと星と霞の手合わせを凪と一緒になって見物するのだった……

時刻は昼時。今、城の食堂はある種の熱気に包まれていた。しんのすけと春蘭が座るテーブルへ秋蘭が置いていく物がその原因。

「「おお～っ！！」」

「待たせたな。さ、食べてくれ」

食堂のテーブルに置かれるいくつかの蒸籠。その中にはそれぞれ三種類の蒸し餃子がある。だが、春蘭用の皿は普通よりも大きめの餃子となっていて、しんのすけ用の餃子の倍は簡単にある物が用意されていたのだ。そして、別の器には水餃子が入っているのでまさに餃子づくしだった。

だがそれだけで終わらないのが秋蘭だ。それとは別にスープ餃子も作り、ご飯のおかずには困らないようになっている。それに肉を大目に使った餃子と野菜ばかりの餃子、そして魚介を使った餃子の三種類を基本にしたので、それだけでも味の変化を楽しめるようになっていた。

「「いただきます！」」

綺麗に声を揃えて食べ始めるしんのすけと春蘭。その食べ方があまりにも似ているため、秋蘭は一人笑う。

「姉者、しんのすけ、少し落ち着け。料理は逃げんぞ」

「はふはふ……っぷは、逃げないけど冷めちゃうぞ」

「むぐ……うむ、その通りだ。熱い内に食べるのが最低限の礼儀だろう」

「「それにうまいっ！」」

満面の笑みを浮かべて言い切る二人に秋蘭はもう何も言う事が無かった。ただ、その言葉に込められた気持ちは嬉しいもの。故に笑みを返すのを忘れなかった。

「そうか……そこまで言ってもらえれば、こちらとしても作った甲斐があるというものだ。足りないのなら言ってくれ。まだ余分に作ってあるからな」

「「ほい（おう）っ！」」

箸に餃子を掴んだまま二人はそう即答した。それに秋蘭は再び小さく微笑む。やがて結構な量があった餃子もあれよあれよと消えていき、二人の胃袋へ綺麗に収まってしまった。だが、しんのすけはもう満腹となったにも関らず、春蘭は若干余裕さえ感じさせるのがらしいと言えばらしい。

「もうオラ無理～」

「そうか。秋蘭もそろそろ食べたらどうだ。もう給仕は必要ないだろう」

「そうだな。なら、私も食べるとしようか」

春蘭の言葉にそう返して秋蘭も席に着いた。しんのすけが食べていた分が少し残っていたので、秋蘭は片付けようと思ってそちらから箸をつけていく。既に冷め始めていたが、それでも自身でも美味しいと思えるものだった。それに満足し及第点を自分へ与える秋蘭。

そんな彼女の前では、春蘭が最後の一つを平らげて満足そうに笑っていた。しんのすけはそんな春蘭の横で同じように満足そうに腹をさすっている。と、そこでふとある事を思い出して口を開いた。

「華琳ちゃんもお料理じょーずだけど、秋蘭お姉さんもおじょーずだね」

「そうだろう！　秋蘭の料理は華琳様のとはまた違ったうまさがあるのだ！」

しんのすけの言葉に春蘭は自慢げに告げる。そんな姉の姿に秋蘭は喜ぶものの、それを子供相手に力説するところが実にらしいと感じてやや苦笑。それでも似た者同士な部分があるのか、しんのすけと春蘭は互いに秋蘭の事を褒めていく。

知的な美人との旨をしんのすけが言えば、弓の腕前は大陸で五本の指に入ると春蘭が言い切る。そんな二人へ秋蘭は小さく笑みを浮かべながらあまりそういう話をしないでくれと告げた。

「褒めてくれるのは嬉しいのだが、些か照れるものがある。それに、

姉者こそ大陸で知らぬ者はいない武人ではないか。魏武の大剣の異名は伊達ではないだろう」

「そ、そうか？」

「おー、何かスゴイね。ぶきのへんたいって」

「何！？　誰が武器を持つと誰かと戦わずにはいられなくなる変態だ！」

しんのすけの告げた言葉をある意味で正しく捉えた春蘭。その反論にしんのすけは少し驚くものの、秋蘭がそんな春蘭を嗜めた。しんのすけが聞き間違えをするのはいつもの事だからと。それに春蘭もそうだったと納得し、怒りを少し和らげた。

そして改めて教えるのだ、魏武の大剣の意味を。それを聞いて、しんのすけは意味は覚えられないものの大体の雰囲気は掴んだ。要するに華琳の軍の中で一番強い人。それが春蘭なのだと。

「よーするに春蘭お姉さんが華琳ちゃんをお守りする中で、一番強いんだね？」

「そうだ！　確かに星も霞も強いだろうが、華琳様への忠誠などを加味すれば私が一番強い」

「おおっ、さすが春蘭お姉さんだぞ。華琳ちゃんが大好きだもんね」

「うむ、秋蘭も同じぐらい好きだがな」

「ならオラもだぞ。華琳ちゃんも、春蘭おねいさんも、秋蘭おねいさんも、みんなみ～んな大好きだぞ」

そんな事をにやけた表情ではなく普段の表情で言い切るしんのすけ。その言葉がとても微笑ましく感じられ、春蘭と秋蘭は思わず笑みを浮かべた。今やしんのすけは華琳達の中ではマスコットにも近い存在となりつつあった。

天の御遣いという事を除いて考えているのもそこには関係している。歳の近い者は友人。歳の離れた者は弟。そんな風に感じる事が多いのだ。まぁ秋蘭はともかく、春蘭は周囲に時々友人のように見られているとは知らないのだが。

「そうか。皆大好きか。お前らしいな」

「まったくだ。これは大人になった時が見物だな」

「えっ？　どーして？」

秋蘭の言葉に疑問符を浮かべるしんのすけ。それに秋蘭は笑みを浮かべたままで応じる。子供の内はそんな考え方でいいだろうが大人になればそうもいかない。特に男性で複数の女性と関係を持つ事が出来るのは、かなりの社会的な力を持つ者だけなのだ。

そう秋蘭が教えてくれた事にしんのすけは頷き、指を頭に当てて考え始めた。そして、その答えが思いのほか早く出たのか彼は手を打ってはっきり告げた。

――だいじょーぶ！　オラ、しょーらい大物になるぞ！　だから全然モンダイないよ。

その答えに二人は一瞬呆気に取られ、それから大笑いした。そう、そう言われた瞬間、何を馬鹿なと思うよりも確かにそうかもしれないと思ってしまったのだ。さすがは天の御遣いだと春蘭が言えば、

まったくだと秋蘭が応じる。
二人が笑っている事を受け、しんのすけは自分の言葉が信じてもらえていないと感じて文句を言いながら両手を上げた。そんな彼に二人は更に笑みを深めた。

「分かった分かった。だから落ち着け」

「ああ。お前はきっと大物になるさ。華琳様に気に入られた時点で十分素質がある」

癇癪を起したようなしんのすけへ姉のような表情で宥める春蘭と秋蘭。それがどこか受け流す時の両親と同じ印象を受けたのか、しんのすけは更に拗ねていく。それにやれやれとばかりに苦笑し、どうするかと秋蘭と春蘭は困り顔を浮かべた。

「あ、そうだ。オラが大人になったら、春蘭お姉さんも秋蘭お姉さんも守ってあげるから安心していいぞ」

「「十年早い」」

「あは～、だよね～」

にやけた表情でその言葉を告げるしんのすけに二人は呆れ笑いを返す。その後も三人は談笑し賑やかで楽しい時間を過ごした。ゆっくり流れる優しい雰囲気は、やがて三人だけの思い出へと姿を変えるのだった……

ーーー

第六話

反董卓連合解散からしばらくの時間が流れた。あの日、稟と風が予想した通り諸侯は争う事もせず、ただ自分達の力を蓄える事に専念した。尤も、戦を起こしたとしても既に朝廷がそれを止める事など出来なかっただろうが。

華琳達はその間、盗賊や山賊などを討伐する事で領内の安定と通商の安全を確保していた。そんな中、しんのすけと星はある三人と引き合わされた。それこそいつぞや星が尋ねた者達だった。

「天和でーす」

「地和で～す！」

「……人和よ」

「ほっほーい！　オラは野原しんのすけだぞ！」

笑顔の天和と地和。だが、一人冷静な人和の反応を見てもしんのすけは上機嫌で名乗り返す。そして、勿論天和を口説きにかかるのを忘れない。それに天和は意外に感じるも嬉しそうに応対し、地和はそんなしんのすけにやや呆れ、人和は聞いていたのか平然としていた。

まぁ、それでもため息はついていたので本当だとは思っていなかったようだが。そう、三人はあの黄巾の乱を起こす原因となった張三姉妹。華琳が三人としんのすけ達を会わせたのは、ちょっとした訳があった。その理由とは……

「え？　オラがお名前つけるの？」

「ええ。天の御遣い様なら何か良い案があるんじゃないかって」

三人は、今旅芸人として華琳の領内を渡り歩くための準備中。その目的は領内の視察と義勇兵の募集。だが、その時に名乗る名が決まっていないのだと人和は告げた。自分達が成功するにはまず強烈な印象を与える事だ。そう分析した人和は兼ねてより聞いていた天の御遣いであるしんのすけの知恵を借りて、誰もが忘れられない名前を付けてもらおうと考えたのだ。

しんのすけはそんな人和の頼みに考え込み、色々なアイドルの名前を思い出す。だが、まったく同じでは意味がない。そう考えしんのすけは悩む。そんな彼に三対の熱視線が注がれる。だが、天和は軽い興味本位で、地和は疑いも混ぜて、人和は純粋に何かの参考に出来ればとの思いで。

「……おおっ！　なら、バキュームは？」

「「「ばきゅぅむ？」」」

「ほい。オラの大好きなアイドルで似たような名前があるんだぞ」

「「「あいどる？」」」

「えっとお歌を歌って踊る女の子の事だよ」

しんのすけの説明に三人は納得。人和はアイドルとの考えを何かに組み込む事にして、しんのすけにさっき告げた名前以外のものを出してもらう事にした。

バキュームでは響きとしての印象は強いが可愛さがない。そう判

断しての決断だったが、もし仮にこの言葉の意味をしんのすけが知っていればきっとその考えに同意しただろう。

こうして人和はしんのすけに天の言葉で可愛いや綺麗を意味する言葉を尋ねていく。それにしんのすけは意味する言葉だけではなくそんな風に聞こえる英語まで教えた。とはいえ、彼が知るのは本当によくアイドルなどが歌で使うものだったのだが。そして、それらを聞いて人和が考え出した名前は、この世界ではかなり珍しいものとなった。

「……じゃあ、らぶりぃすたぁずでどう？」

「えっと……天の言葉で可愛いとお星様だっけ？」

「違うわよ。可愛いは合ってるけど、星達でしょ」

「どっちでもいいわ。要は星って言う天に関係する要素が欲しいの。で、天の御遣い様による名付けって事にして広めていきましょう。華琳様、いいですか？」

姉二人が話す意味をさらりと流し、人和はそう華琳へ問いかけた。それに華琳は条件があると返した。だが、それを華琳が言う前に人和は眼鏡を軽く指で押し上げながら答えた。

「天の御遣いの明確な正体を明かすな……ですよね？」

その言葉に華琳は頷いた。人和はその事については問題ないとしてこう告げた。あくまで出会ったとだけして、姿は光に包まれて見えなかったとする。胡散臭い話だが、天の御遣いならばそうだったとしても有り得ない話ではない。

そして、天の御遣いは自分の手助けとして人和達三人を任命し、大陸の人々の心を歌で癒せと告げて去って行ったと言えばいい。そうする事で自分達三人が神秘性と天の御遣いによる使命を得て、余計に人が集まるようになるからと。

「……これでどうです？」

「いいでしょう。後はそれとなく噂を広めておけばいいかしら？」

「そうして頂けると助かります。初回公演でそれを私達が発表する事で一気に真実味が増すようにしますので」

人和はそう言うと、しんのすけへ視線を向けた。それにしんのすけは小首を傾げる。人和はそれに小さく微笑むと、頼みがあると告げた。それは、何か天の物をもっていたら貸して欲しいとの事。物的証拠も提示する事で更なる信用を得ようと考えたのだ。

それに考え込むしんのすけ。星達からは、ヘルメットとフィギュアの事を簡単に教えたり見せてはいけないと言われていたからだ。しかし、人和達の力にもなりたい。そのせめぎ合いで悩むしんのすけ。

と、そこで見かねた風が助け舟を出した。それはこのままだとしんのすけがヘルメットなどを教えてしまいそうだと判断したため。そんな風が提案したのは、天の物を見せるのではなく天の文字を見せる事だった。

未知なる物であればいいのなら、文字でも十分だと風は言い切った。それに人和がやや疑問を浮かべるも、風はならばとしんのすけへ頼んだ。それは、彼の知る文字で文を書いて欲しいとのもの。それにしんのすけは頷いて、風が用意させた竹簡へ汚いながらも平仮名で自分の名前を書く。

そして、片仮名でこう書いた。カリンチャン、と。それを見た全員がしんのすけへ尋ねた。何を書いたのかと。片方は自分の名で、もう片方が華琳の真名だと告げると、一様に納得したような声を出した。すると、それを聞いた華琳が好都合だとばかりに告げる。

「人和、これを周囲に見せてこう言いなさい。曹孟徳は天の御遣いへ真名を預けたと」

「それは……つまり……」

一同が息を呑む中、稟だけが代表するように声を搾り出す。それが意味するのは一種の覚悟だった。いや、決意とも言えるだろう。華琳は自分が天の御遣いと関係を持ったと教えてもいいと告げたようなものなのだ。そう誰もが考えた。

だが華琳はそんな風に考える周囲へ小悪魔的な笑みを返した。そして戸惑う稟達へこう告げた。何も心配する事はない。理由は天和達と基本を同じにすればいい。ただ自分は天の御遣いに出会い、大陸の人々を癒す役目を負った天和達を守ってやって欲しいと頼まれたとするのだと。

「その時に、私が天の御遣いに真名を預けたとすればいいわ。私が真名を預けたという事実は三人の話の信頼性を上げるでしょう」

華琳はそう言うとしんのすけへ視線を向けた。それにしんのすけは何かを悟ったのか、頷いてこう言った。

「オラも別にいいぞ。おつかいって名前が役に立つなら、じゃんじゃん使って」

「だそうよ。本人の許可も出た事だし、少しばかり大陸に天の御遣いの名前を広めなさい」

しんのすけの答えに華琳はくすりと笑みを見せるとそう周囲へ告げた。周囲もしんのすけのじゃんじゃんとの表現に苦笑しながら華琳の言葉に頷いた。星達もしんのすけ自体が許した事もあり、その内容に反対はしなかった。

それに、平和の役に立てるのなら天の御遣いの名前を使いたいとのしんのすけの気持ちに水を差すつもりはなかったのだから。こうしてしんのすけと本来ならば”数え役満☆シスターズ”と呼ばれる三人との出会いは終わった。その名前を”らぶりぃすたぁず”に変えて……

そして、遂に星達が恐れていた日がやってきた。華琳と天の御遣いが出会い、使命を受けた事などの噂が少しではあるが広まり始めた頃、一つの知らせが朝議の場へ飛び込んできたのだ。

――報告しますっ！　先日、袁紹軍が幽州へ侵攻しました！

それに星の目が見開いた。それでも、すぐに普段の表情へ戻して兵士の告げる内容へと耳を傾ける。見れば稟も風も冷静に聞いていた。だが、星はその微かな違和感に気付いた。二人は密かに手を握り締めているのだ。

（そうか……稟も風も白蓮殿を同じ大陸防衛隊の仲間と思っているのだな）

そう思い、星は小さく笑みを浮かべる。だが、それも一瞬だった。耳に入った華琳と桂花の言葉にはそれだけの衝撃があったのだから。

「そう……おそらく公孫賛は負けるでしょうね」

「はっ、戦力的にもまず勝ち目はないでしょう」

分かっていた事だ。それは星にも分かっていた事実だった。どちらが兵が多く、戦えばどうなるかなど少し考えれば分かる事だ。それでも、精一杯考えないようにしていたのだ。それが意味する結果を考えたくなかった故に。

だが現実は残酷で、そして皮肉なものだった。そこへある言葉が放たれた。それは、きっと本人としては何気ない言葉だったのだろう。ふと思いついたからこそ呟いたのだろう。何故ならば、彼女はとても素直で純粋だったのだから。

――――だろうな。せめて星がいれば助かる事が出来たかもしれんが。

その瞬間、玉座の間が静まった。それを言った春蘭は突然の雰囲気の変化に戸惑い、周囲を見回していた。誰もが春蘭へ責めるような視線を向けていた。それを受けて春蘭も気付いた。自分が今何を言ってしまったのかを。

そんな風に春蘭が申し訳なさそうな視線を星へ向ける中、彼女は春蘭の告げた言葉が耳から離れなかった。自分がいれば少しは白蓮を助ける事が出来たかもしれないとの言葉が。

それは、所詮想像でしかない。それに希望的観測でしかない。実際には星一人いたところで大きく変化はしないだろう。それでも、それで割り切れる程、星と白蓮の関係は浅くなかった。

あの共に過ごした日々を思い出している星の耳へ春蘭の声が響いたのは、そんな時だった。

「すまなかった、星っ！　決してお前を――」

「気にしていないさ。だが、もし春蘭が気になるならば……ふむ、今夜の酒でも奢ってもらうとするか」

春蘭の言葉を遮り、星は飄々と告げた。それに周囲が微かに呆気取られる。そして春蘭は戸惑いを表情に浮かべていた。まさかこうあっさりと返されるとは思っていなかったのだ。なので、確認の意味も兼ねて問いかけた。

「そ、それでよいのか？」

「ただしっ！　……少し値は張ってもらうぞ？」

「変に間をあけて脅かすな。しかし、何を言われるかと思えばそんな事か。ああ、構わんぞ。それで済むなら安い物だ！」

星がいつもの調子で応対してくれた事に心から安堵する春蘭。それが星なりの許しだと感じ取り、周囲も小さく安堵する。その後告げられたのは次の袁紹軍の動きについてだった。河北四州を袁紹が制するのは間違いない。だとすれば、次に狙うのは桃香達がいる徐州か自分達の領土しかなかったのだから。

常識的に考えれば規模が小さく勝つ事が容易いだろう徐州だ。しかし、相手が袁紹である事を考えて華琳は自分の方を攻めるだろうと考え――ふと迷った。そう、袁紹が妙な変化を起こしていたような気がしたのだ。

（しんのすけ達に持たせた紹介状の内容はらしくなかった。麗羽もしんのすけに変な影響を受けたのかしら……？）

だが、それでも根本は変化していないだろうと思い直し、必ず自分達へ戦を仕掛けてくるだろうと判断した。大きな宝箱と小さな宝箱があれば、迷う事無く大きな方を選ぶ。それが袁紹だからだ。それにもう一つ、袁紹が自分の領土へ侵攻する理由があると華琳は考えていた。

（麗羽はしんのすけへ妙な関心を寄せていたし、私から奪っていきたいと考えてもおかしくないわ）

あの反董卓連合での出来事。そこでの総大将決定に関係した光景。しんのすけが指名した事に嬉しそうにしていた事を思い出し、華琳は袁紹がしんのすけを手に入れたいと考えているだろうと予想した。事実は違う。確かに袁紹はしんのすけが気に入っている。それが侵攻を決めた理由の一つではある。だが、そこには華琳と同じ気持ちがあるのだ。自分を家柄などに関係無く接してくれる相手であるしんのすけ。そんな彼に自分の傍に居て欲しいのだ。

それを知る由もなく、華琳は桂花達へ袁紹の侵攻に備えるよう言い渡し、従来の朝議へと戻る。こうしてこの朝は始まった……

その頃、幽州では袁紹と白蓮が直接向かい合っていた。最後の決戦前の舌戦だ。しかし、本当は違う意味合いを持っているだろうと

知るのは、二人以外には顔良と文醜だけだった。そんな二人が見守る中、白蓮と袁紹は互いの顔を複雑な表情で見詰め合っている。

「……麗羽、お前は本当に天下を統一するつもりか？」

「ええ。天の御遣いと同等と言われた私こそ、この大陸の覇者に相応しいですわ。お～っほっほっほ！」

白蓮の問いかけに袁紹はそう普段の口調で答えた。だが、それを見て白蓮は小さくため息を吐いて鋭く告げた。表向きの言葉はいらないと。それに袁紹の高笑いがぴたりと止まる。そこから少しの間、互いに沈黙が訪れた。

二人はその間、互いの顔を見つめ続けた。白蓮は袁紹から目を逸らさず、袁紹も白蓮から目を逸らさないようにして。そうしてある程度時間が経った時、袁紹が微かに笑った。それは諦めの笑み。

――――……気付いてますのね、白蓮さんは。

――――当然だ。昔のお前ならわざわざ宣戦布告なんかしてくるもんか。

互いに浮かべるは苦笑。二人に共通するのはしんのすけを天の御遣いとして利用しない事。そして、その存在を好ましく思い、また傍に居て欲しいと考えている事だ。故に戦などは本当ならばしたくない。そう、しんのすけが親しいであろう相手と戦う事などは。

しかし、それをしなければならない時代になってしまっている。それに気付かぬ白蓮と袁紹ではない。それでも、白蓮は何とか戦をせずに済む方法を模索していた。だが袁紹はそれをしなかった。

無駄だと、そう気付いてしまったのだ。予言通りであれば、この

大陸は天の御遣いによって乱世を終わらせなければならない。そう、しんのすけを伴って戦い抜かねばならないのだと。

だから袁紹は動いた。白蓮を最初に選んだのは万が一の可能性に賭けての事。それは……

「それで、どうしても降ってはくださいませんの？」

そう、袁紹は宣戦布告前に打診したのだ。自分へ降伏し、乱世を止める事に協力してはくれないかと。しんのすけへの対処が同じだっただけではなく、真名を預け合った仲である白蓮。彼女ならば自分へ手を貸してくれるのではないかと、そう考えたのだ。

だが、白蓮の答えは当然拒否。だからこそこうして戦になっているのだ。正直に言えば、白蓮とて自分と袁紹が戦えば結果はどうなるかを知らない訳ではなかった。それでも、彼女には退けない訳があったのだ。それは白蓮の答えにある。

「ああ。この幽州を預かる者として、攻めてくる相手に無抵抗で明け渡すなどは出来ない。私にはこの地を守る義務があるし、慕ってくれている民達へも示しがつかないからな。こんな私がいいと、そう言ってくれる者達だっているんだ。個人としては、今のお前なら手を貸すのもやぶさかじゃない。でも、な……分かってくれ」

「はぁ……相変わらず真面目ですのね」

「ほっとけ。こういう性分なんだ」

白蓮の言葉に呆れつつも嬉しそうな袁紹。それに苦笑しながらも楽しそうな白蓮。そんな和やかな雰囲気が微かに流れる。だが、それもすぐに消え、二人は将の顔へ戻るとはっきり周囲に聞こえるように言い切った。

「お～っほっほっほ！　どうやら身の程を知らないようですわね、公孫賛！　いいでしょう！　この私の前に必ず跪かせてやりますわっ！」

「そちらこそ、この幽州へ侵攻した事を後悔させてやるぞ、袁紹っ！　我らが幽州の地は決して渡さんっ！！」

そう互いに告げ合い、馬の向きを変えて自陣へ戻ろうとする両者。だが、その際に小さく互いにしか聞こえない程度の声でこう告げる。

――死なないでくださいな、白蓮さん。しんのすけさんのためにも。

――分かってるさ。お前こそ、流れ矢とかに当たるなよ。

ほんの一瞬だけ真名を預け合った友として声を掛け合う二人。だが、その表情は総大将としての顔そのままに。皮肉なものだが死んで欲しくないと思いながらも戦をするしかないのだと、そう言い聞かせるように馬を走り出させる二人。

その馬上で揺られながら二人は心から思う。覚悟はしていたが真名を預けた者との戦がこんなにも辛いものとは思わなかったと。

そして、そう思う原因にあの幼い少年が大きく関っていると理解して小さく苦笑。その彼が望む時代にするためには、その彼が嫌うだろう事をしなければならない矛盾があると気付いたからだ。

（しんのすけ、お前の願いを裏切るようですまん。でも、分かってくれ）

（この大陸を平和にするには、私達にはこうするしかないんですの）

二人が自陣へ戻るとすぐに公孫賛軍と袁紹軍が激突した。しんのすけの知らぬ場所で親しい者達が争う。それを彼が知る事になるのは、これから数日後の事だった……

その日、朝議の席で告げられた内容に星は一人密かに安堵していた。白蓮と袁紹の戦いの結末。それが報告されたのだ。白蓮は敗北するも何とか徐州へ逃げ延び、袁紹はその勝利の勢いを乗せたまま河北四州を手中に収めた。

つまり、白蓮が生き残った以外は華琳の予想通りになったのだ。そして袁紹が次に攻めるのは自分達の領地だと華琳は告げる。その理由を聞き、星は心から納得していた。だが、星にはもう一つその理由がある気がしていた。

（もしここで華琳様を打ち破れば、しんのすけの存在を理由に桃香殿達は袁紹とは戦えない可能性が高い。袁紹はそれを狙っているのかもしれないな）

いつか袁紹に別れの際に掛けられた言葉を思い出し、星はそう結論付けた。守れるなら守ってみせろ。まるで、しんのすけをただの子供ではないと気付いていたかのような声だったのだ。そう思って星は呟く。袁紹はしんのすけの正体を知っているのでは、と。

そんな星の耳に入ってくるのは今後の事。袁紹との戦いを視野に入れた動き。そのための指示だ。桂花が主体となり、稟と風がそれを補佐をする事で話はまとまり、そこでその場は解散となった。

――……星、一先ずは安堵したと言うところでしょうか。

――少々複雑なところではありますがねー。

玉座の間を出る直前、星は稟と風に呼び止められた。そして告げられたのがそんな言葉だった。星はそれに小さく頷き、二人を伴って外へ出る。廊下を歩きながら三人は言葉を交わした。

「白蓮殿は桃香殿の元へ行ったのなら、おそらく大丈夫だろう。二人の仲は私もよく知っている」

「そうですね。劉備殿ならば無碍にもしないでしょうし、何より……」

「大陸防衛隊の仲間ですからねー」

風の言葉に星と稟は重々しく頷いた。それが今後どんな意味を持ってくるのかを理解していたからだ。だからだろう。次の星の問いかけは少し重い声だった。

――しんのすけへは……私が話した方がいいか？

その意味する事が何かなど二人には言うまでもなかった。しんのすけが真名を預かった白蓮。よいしょーさんと呼んで親しくなって袁紹。その二人が戦をし、結果として袁紹が自分達の住む場所へも攻めてくるだろうと。

その事を告げられてしんのすけが何を思うのか、どうするのかを考えれば迷うというものだ。その率直な気持ちを稟は隠さずに告げる。

「正直迷っています。袁紹と関りがないのなら構わないのですが、幸か不幸かしんのすけはほとんどの有力諸侯と接点がありますので」

「ですが、話さないというのは出来ないのです。おそらくその内華琳様が教えてしまうでしょー」

　稟の言葉に風はそう続けた。華琳にとって、この流れは待ちに待っていたと言っても過言ではない。であれば動かないはずがないのだ。しんのすけは天の御遣いであると周囲に喧伝するキッカケもこの戦で得る事が出来る。

　天下統一へ乗り出す際、自分には大陸を平和にしたいとの天の御遣いの願いを叶える義務があるというのだ。そのために自分は乱世に乗り出すのだと。その際、効いてくるのが天和達が広めつつある噂。華琳が天の御遣いと出会い、真名を預けた事だ。

　更に一介の旅芸人達にさえその真名を使う事を許している事も、その話へ信憑性を与えているだろう。華琳は天の物を提示する事以外で天の御遣いの存在を匂わせる事を成し遂げつつあった。

　隠す部分は隠し、公にする部分は公にする。それで天の御遣いの神秘性を失う事無く、自分との関係を持たせるように話を作っていたのだから。そんな推測を告げる稟と風。星はその話に苦笑した。

「華琳様はやはり強かだな。しんのすけを天の御遣いと教えずに利用するとは」

「ええ。こうなると、天の御遣いとの名が持つ力を上手く使うために天和達と出会わせたのかもしれませんね」

「そうだとしても、これならば風達も何も言えないのですよ。しんちゃんを利用するのではなく、天の御遣いの名だけを利用していま

すからねー」

「そうだな。さすがにこれは私達にも考えつかなかった」

三人は揃って苦笑しながら同じ感想を抱いていた。こんな方法が出来るのは、天和達という存在を有している華琳だからこそ出来るだろうと。他では天の御遣いとの存在を大陸中に匂わせるのは難しいのだ。証拠がないし、まず華琳の真名が持つ重さがある。

こう考えると、意外としんのすけの事を上手く隠したまま天の御遣いとして利用するのは難しい事なのだなと、星は改めて感じていた。三人はそこからそれぞれの仕事をするために別れた。しんのすけへは、星が事情を話す事にして。

（白蓮殿が生きている事を先に伝え、安心させてから袁紹の事を話すとするか。しかし……猪々子と再び戦う事になるのだろうか）

（袁紹との戦が華琳様が乱世に乗り出す最初の大戦になるはず。これに勝ち、しんのすけだけでなく万民のためにも早く乱世を終息させねば……）

（しんちゃんの願いを果たすために止めるべき戦をする。矛盾とはよく言ったものなのですよー……）

三人はそれぞれ複雑な思いを抱きつつ歩く。これから歩く割拠の時代。それがいかにしんのすけに辛い道になるのだろうと、そう思いながら……

その頃、南皮の城では次の動きをどうするかと袁紹達三人が話し合っていた。顔良は徐州の桃香達を攻めるべきだと主張。文醜もそれに賛成した。理由は両者で違うが、華琳を攻めない理由は一致していた。

しんのすけと星の存在。それがやはり踏み込めない理由だったのだ。対して袁紹はそんな二人へはっきり言い切った。自分が攻めるのは華琳達の領地だと。それに驚く二人へ袁紹はこう告げた。

――天の御遣いを華琳さんのような方に預けていては、悪用されかねませんわ。

その言葉に顔良だけは息を呑んだ。確かに最近噂が流れているのだ。天の御遣いが旅芸人の者達へ歌を使って人心を癒すよう告げ、その保護を華琳へ命じたとのものが。その証拠として旅芸人達は見た事のない文字が書かれた旗を掲げ、そこには華琳の真名が書かれているというのだ。

しかも、それを華琳自身も肯定しているとくれば袁紹の不安も理解出来るというもの。だが、顔良はふとそこで気付いた事があった。それは天の御遣い自身の事は一切情報がない事。

「でも姫、曹操さんはしんちゃんの事を一切明かしてないですよ？」

「斗詩さん、考えてもみなさいな。どこに子供が御遣いと言われて喜ぶ者がいますの。明かさないのではなく、明かせないの間違いですわ」

その反論に顔良だけではなく文醜までも黙った。神秘性が重要な天の御遣い。それがただの子供であると知れては何も意味がない。袁紹はそう告げて大きくため息を吐いた。

「まぁ、華琳さんは私のような名家の者ではないですから、そんな姑息な手段を思いついたのでしょうけど」

「……でも、それを趙雲が見逃してるって事は」

「多分何か理由があるんだよ。天の御遣いの名前を使っても動かない理由が」

文醜の呟きに顔良はそう返した。と、そこで袁紹が顔良へある事を尋ねた。それは密かに徐州へ送った書状について。そう、袁紹は桃香へこう書状を送ったのだ。天の御遣いの名が華琳に悪用され出したので、それを止めるべく協力せよと。

だが、それを見た桃香達は最初こそ怒りに燃えた。白蓮を攻めておいてよくもと。しかし、その逃げ延びた白蓮がそこに割って入ったのだ。袁紹は不器用ながらもしんのすけのために動いているのだと、そう自分の感じた事を伝えたのだ。それもあり、桃香達は一つの結論を出した。それは……

――それが事実ならば手を貸すのもやぶさかではない。

そこに込められた思いは複雑なものだった。桃香は、正直に言えば袁紹よりも華琳へ手を貸したかった。だが、それを華琳は決して望まないと諸葛亮達に断言された上に、袁紹からの情報の真偽も確かめなければならなかった。なので、結局しんのすけの事を考えて決める事になったのだ。

彼がその存在をいいように利用されているならそれを防ぎたい。天の御遣いの名は、誰かの自欲のために利用していいものではないのだ。そういう気持ち自体は桃香の中で変わらないものの一つだっ

たのだから。

「……どうも劉備さん達は、事の真偽を確かめるまでは動かないみたいです」

「あいつらもこんな返事を出すなんて勇気あるよな。これでこっちが怒って攻め込んだらどうするつもりだ？」

桃香達からの返答を告げる顔良。それを聞いての文醜の疑問に顔良は真剣な表情で答えた。

「多分それはないって踏んだんだろうね。そうするぐらいなら、書状なんて出さずに最初から攻め込んでくるだろうって」

「そっか。しんのすけの事をわざわざ持ち出したんだもんな」

「うん。でもきっと、それだけじゃなくて白蓮様が姫の真意を――」

「斗詩さん！　……そんな事はもういいですわ。それよりも猪々子さんと共に、華琳さんとの戦いの準備を進めなさい。威力偵察をしておいてくださいな。それと書状の方もお願いしますわね」

顔良の言葉を遮り、袁紹はそう命じた。そうして袁紹は少し一人になりたいと告げ、二人を玉座の間から追い出した。それに違和感を感じる文醜。だが顔良だけはその理由を何となくだが察し、不思議に思う文醜を連れて素早く玉座の間を出た。

誰もいなくなった玉座の間。袁紹はそこで一人玉座に座り、大きくため息を吐いた。彼女も出来る事なら白蓮や華琳と戦などしたくなかった。白蓮とはそれなりに仲が良かったし、華琳とも友人だ。

だが、彼女が出会った少年がそれを許さなかった。

「……しんのすけさん。貴方は分かっていますの？　貴方を天に帰して差し上げるには、誰かが戦を起こして天下を統一しなければなりませんのよ？」

そう袁紹は一人呟く。誰もいない場所でただ一人。返ってくるはずのない問いかけをするように。たった数日ではあったが、触れ合った日々。しんのすけがどんな者かを知った以上、袁紹はどうにかしなくてはと思った。

彼の話した思い出話。そこにあった家族の事を思い出せば尚更に。子供が一人親元を離され、乱世へと送られている。そう気付いた袁紹は、どうすれば親元へ帰してやれるかと考えた。そして、出た結論は一つだった。

――――予言を実現させればいい。

天の御遣いが役目を終えれば、自然とその存在は大陸から天へと戻る。ならば、諸侯の中でも一二を争う力を持つ自分がこの乱世を終わらせよう。そう袁紹は思い立ったのだ。それでも出来るだけしんのすけを悲しませずに済むようにと彼女なりに考えた結果、降伏勧告を出す事にしたのだから。

（きっと華琳さんもそれに気付いているはず。しんのすけさんに関った者達で正体を知っている者は皆同じ気持ちでしょうに……やり切れませんわね）

戦わずに全ての諸侯が平和にする事が出来ない。その理由は白蓮が言った言葉にある。自分が守る場所を無条件で明け渡す事など出来ないのだ。そこを任されている上に、そこに住む民達に慕われて

いれば余計に納得させるべく戦わねばならない。
そう考え、袁紹はもう一度ため息を吐く。だが、それはどこか先程のため息とは違うもの。どこか悔しくも悲しむようなそれ。その感情を乗せた息が消えると同時に袁紹は呟く。

「……華琳さん、天の御遣いの名を上手く利用する方法。まずは見事と褒めて差し上げますわ。でも、事実を隠すやり方が優雅ではありませんわね。まぁ、今の私が言えた事ではありませんけども」

袁紹はそう苦笑し、静かに玉座から立ち上がる。優雅でないと知りつつもその道を行く。それは以前の自分であれば有り得ない事。だが、今はそれでもいいと思う自分がいると気付き、小さく笑う。

――いえ、優雅ですわ。私の道は常にそうあるはず。袁家も何も関係ない。私だけの優雅さを見せつけましょう。

「え？　白蓮ちゃんが桃香ちゃん達の所に行ったの？」

「ああ。袁紹に幽州を奪われた形でな」

「……よいしょーさんがゆーしょーしたの？」

星の言った言葉にしんのすけはいつものように聞き間違いをした。だが、星は見逃さない。その返しをした瞬間、しんのすけが微かに表情を曇らせたのを。そこから星はしんのすけがわざと聞き間違えをしたと察した。

だからこそ、事実をしっかりと認識させるためにもう一度はっきり告げた。袁紹が白蓮と戦い、幽州を奪った事を。白蓮が何とか桃香達の元へ逃げ延びる事が出来た事を。

星がしっかり理解させるように話す度にしんのすけが表情を曇らせる。聞き間違いをしようにも、それが出来ぬようにと星はゆっくりとはっきり言葉を告げる。そしてそんな話が終わった時には、しんのすけは見るからに気落ちしていた。

「……よいしょーさんが白蓮ちゃんを追い出したの？」

「そうだ」

「それで……今度は華琳ちゃん達といくさをしようとしてるの？」

「おそらくそうだ」

しんのすけの否定して欲しいとの思いから問い返される言葉。それを星は容赦なく肯定していく。心を動かす事無く、しんのすけへ乱世の現実を教えるために。自分の知り合い達が戦う事をちゃんと理解するようにと。

星の無感情の頷きにしんのすけは言葉を失い、しばらく黙り込んだ。それを見ても星は黙って答えを待った。それは、しんのすけが何か答えを出すだろうとの気持ちではない。何か答えを出させようという気持ちからだ。

星の沈黙にしんのすけは助けを求めるような視線を返した。それに星は一瞬息を呑むも、その湧き上がる気持ちを押し殺し小さく首を横に振った。

「……オラ、華琳ちゃん達とよいしょーさん達を戦わせたくないぞ」

「それは出来ん。もう袁紹達は動き出している。今は来なくても、いつか必ず戦を仕掛けてくる」

「桃香ちゃん達も？」

「それは……そうかもしれん」

「そっか……」

星の苦しむような答えにしんのすけは俯いて拳を握り締めた。穏やかな桃香。厳しくも優しい愛紗。元気活発な鈴々。そして関りは少なかったが、しっかりしていた諸葛亮と消え入りそうな雰囲気の鳳統。しんのすけにとって彼女達はたいりく防衛隊の仲間。

だからこそ戦う事など出来ない。だが、星の言葉を聞く限りでは戦う事は避けられないと思ったのだ。いつかあの優しい者達と華琳達が争う事になる。そう思って、しんのすけはため息を吐いた。

その後、しんのすけは顔を上げて星へ言い切った。

――――……なら、オラに出来る事をするぞ。華琳ちゃん達も桃香ちゃん達も死んで欲しくないから、そうならないようにオラ頑張る！

星はその言葉にそれまでの無表情を一変させ、微笑みを浮かべて頷いた。なら、自分もそれに協力すると告げながらその頭を優しく撫でたのだ。そして、しんのすけはある決意を固める。そのため、華琳へ頼み事をする事になるのだ。

それを聞いた華琳は少し驚くのだが特に反対する事もしないで受

け入れた。それは、しんのすけが常に戦場へ連れ添う事。実はそれを言い出すまでもなく、華琳自身がしんのすけへそれを命じようとしていたのだから。

　こうして、しんのすけは常に華琳の傍で戦を見つめる事になる。
それが彼なりの戦へ踏み出した第一歩だった……

――――――

第七話

次の日、しんのすけは中庭での早朝鍛錬を終えたところで桂花に捕まった。というのも、袁紹との兵数差が大きい事を鑑みて天の知識の中から戦に役立てる事が出来るものはないかと考えたのだ。

だが仕事が始まってしまうと中々ゆっくり話を聞く事が出来ないと思い、こうして鍛錬終わりのしんのすけを狙ったという訳だった。本当は鍛錬途中で中庭に来ていた桂花だったが、最後までそれをさせてやるところに彼女の隠した優しさがある。

「……で、何かない？」

「そーだね……あ、石をいっぱい袋に入れて投げてたっけ」

「は？　石を袋に？」

「ほい。で、ぐるぐる回して投げると石が遠くへ飛んでくの」

「石を……遠くに……」

あの戦国の世界での光景。そこでの景色が一番この世界では有効な情報だと、どこかでしんのすけは感じている。その証拠に桂花もその言葉に考え、何かを思いついたのか不敵に笑ったのだから。

だが、その思いついたであろう内容を桂花は言う事無く、ただしんのすけへ礼だけを告げて去って行った。その去り行く背を見つめ、小首を傾げるしんのすけを置いて。

「しんちゃん、どうしたの？」

「何かあった？」

そこへ流琉と季衣が姿を見せた。二人も最近から早朝鍛錬に参加していたのだ。霞が加わったため、しんのすけの相手をする者として星がつくと数が余ってしまう。そこで春蘭が季衣へ声を掛けたのだ。

しかし、季衣だけでは少し不安だと流琉も参加する事になり、結局しんのすけへは星と凪がつく事になった。そして四人となったので、今日は春蘭と季衣、霞と流琉という試合を行ったという訳だ。

「お、季衣ちゃんと流琉ちゃん。あのね、さっきまで桂花ちゃんがいたんだよ」

「桂花ちゃんが？」

「珍しいね。桂花さんがこの時間にここへ来るなんて」

しんのすけの告げた名前に軽い驚きを見せる二人。しんのすけもそれに同意するように頷き、三人揃って軽く疑問符を浮かべる。何故ここへ桂花が来たのだろうと。しかし、いくら考えてもその理由が思い付かないからか、季衣はもう思考を打ち切り両手を上げた。

「もういいよ。後で桂花ちゃんに聞けばいいんだし」

「確かにそれが一番だね。しんちゃん、行こう」

「ほーい」

歩き出す季衣と流琉。しんのすけはその間を歩きながら今日の朝食をどうするかを二人と話し出す。こうして、彼にとっての一日が

始まるのだった……

「呂布が見つかった？」

「はい、どうも南方の小さな城へ落ち延びたようです。そこを拠点にする事にしたのでしょう」

華琳の問いかけに答える桂花。卓上の地図に置かれた碁石がその場所を示しているので、そこを指差しての答えだった。そこは周囲に大きな勢力は無く、確かに身を置くには適した場所といえる。そう判断し、華琳はふむと考えた。

呂布には軍師である陳宮が追従している事を思い出したのだ。なので、この呂布の行動はその指示かもしれないと考え、中々強かではあるかと陳宮への評価を修正した。そんな華琳へ稟が問いかける。呂布への対応だ。

「それでいかがしますか？　もし呂布が本腰を入れて動き出せば、この大陸に小規模とはいえ混乱を巻き起こす事になります。おそらくその場合、最初の相手は我が軍でしょうが」

それに春蘭達が嫌な表情を浮かべる。星も霞も同様だ。虎牢関では万全の状態で春蘭達四人で挑み、星も加えたにも関らずあしらわれた。洛陽では、春蘭達四人に鈴々と文醜や顔良を加えた七人で足止めが精一杯だったのだから。

星と霞はそれぞれ呂布の実力を感じ取っているので、それを思い出せばそこにいる者達の心境は同じだった。直接戦っていない凪達

でさえ、どこか緊張しているような表情を見せていた。

「そうね……今は放置でいいでしょう」

「なっ！？　華琳様、それはさすがに危険かと思います」

華琳の判断に桂花はやや驚きを浮かべて意見した。呂布の動き次第では袁術や袁紹の動きも変化する可能性がある。それを危惧しているのだ。正直、現在の曹操軍の戦力は大陸一とは言い切れないのだ。

質ではどこよりも勝っていると桂花は思っている。しかし、基本戦は数が決め手。その面で言えば袁紹軍が大陸一だろう。そこが呂布の動きに呼応するように動いたらどうなるか。それを指摘しようとした桂花へ横から口を挟む者がいた。

「桂花ちゃん、風も今は下手に手を出すよりもしっかりと見張っておく方がいいかと思うのです。呂布さんは基本、自分から戦をする性格ではないでしょうからねー」

華琳の意図を読み、風はそう補足するように告げた。それに頷くように華琳は視線を霞へと向けた。この中で一番呂布の事を知っているだろう相手。そんな彼女の意見を聞こうと思ったのだ。

「霞、呂布は風の言ったような人物で間違いないかしら？」

「あ～、まぁそんな感じや。それに、恋の奴は武人というよりも獣に近いしな」

「獣？　どういう事だ？」

霞の告げた呂布の評価に春蘭が疑問符を浮かべるが、それだけで秋蘭や星は理解出来たらしく一様に頷いていた。流琉もその言葉の意味が分かったので、どこか理解出来ていない季衣へ説明する事も含めて口を開いた。

「対峙した時思ったんですけど、熊とか虎に近い雰囲気でした」

「あっ！　確かにそんな感じだったかも！」

「……ま、そういうこっちゃ。これでええか？」

熊や虎を例えに出して理解を得ようとする流琉と、それで理解出来る季衣に呆れ混じりの笑みを浮かべつつも春蘭へ分かったかとばかりに告げる霞。それに春蘭も感覚的に理解したのだろう。そんな霞へ言葉と共に頷き返した。

「うむ。つまり、こちらが危害を加えない限りは襲ってこないのか」

「今んとこはな。でも、誰かが下手な知恵出したら……」

「獣は走り出す、か。そんな事にならない事を祈りたいがな」

霞の言葉を受けるように星がそう言って締め括った。それに対しては武将全員が似た気持ちだったのか無言で頷く。それに稟が安心させるように口を開いた。

「おそらくは大丈夫でしょう。あの辺りは治安も乱れていますし、南蛮へも注意を払わねばなりません」

「そうね。きっとしばらく動けないはずよ。華琳様、監視を強化す

るだけでよろしいですね？」

「ええ。細かい事は桂花に任せるわ。それよりも今は別の事に注意を払う必要があるものね」

桂花の言葉に満足そうな笑みを返し、華琳は周囲へそう告げた。

それに全員が頷き、意識を本来の議題だった袁紹の動きへ向けた。

白蓮を倒し、河北四州を手に入れた袁紹。それが次にどう動くのか。

それはほとんどの者が察しをつけていた。

それでも、情報は必要だとばかりに華琳は新たな報告はないかと尋ねる。そこに慌てるように一人の兵士が駆け込んできた。その口から告げられた報告は袁紹軍が結構な軍勢を率いてこちらへ向かっているというものだった。

しかも、その向かっている先にある砦が問題だった。そこには守備兵が七百程度しかいなかったのだ。対する袁紹軍は三万。どう考えても絶望といえた。それでも慌てる事無く稟はその目的を察して告げる。

「おそらく威力偵察でしょう。しかし、よりにもよって目を付けられたのが一番手薄な砦とは……」

「決断が早い上に運がいいわね。これだから麗羽は厄介なのよ。桂花、今すぐ動かせる軍勢はどの程度？」

「主力が全て揃っていますので、半日以内に二万は動かせます」

華琳の問いかけに即座に応じる桂花。しかし、それに華琳が頷く前に待ったを掛ける者がいた。

「お待ちください。援軍の必要はないかもしれませんよー」

「……どういう事かしら？」

「これをご覧ください」

疑問符を浮かべる華琳へ風が差し出したのは一通の書状。先程の兵士と入れ替わりに現れた兵が持ってきたものだ。差出人の名を見た華琳は不思議そうな表情を浮かべ、その内容を読んでいく。

その表情が段々不敵な笑みへ変わったのを見て、誰もが怪訝そうな顔になる。唯一風だけは何となくその内容を悟っているのか、冷静に普段通りの顔をしていた。

「……そう。確かにこれならば援軍はいらないわね」

「華琳様？」

華琳の呟きに思わず桂花が声を掛ける。それに華琳は不敵な表情を返し、こう指示を出した。

「桂花、今朝の話を早速動かしなさい。真桜、貴女は桂花から話を聞く事。他の者達は普段通りでいいわ。風、念のために麗羽への警戒は厳しく頼むわね」

「「「「「「「「「「「「御意（なの）」」」」」」」」」」」」

「「はい」」

全員の返事を聞きながら、華琳は手にした書状へ目をもう一度落とす。そこに書いてある差出人の名は袁紹だった……

そしてその日の昼、中庭には何やら巨大な物が存在していた。それの周囲で真桜が忙しく動き回り、その様子を凪と沙和が眺めている。シロもその光景を見つめ、尻尾をゆっくりと動かしていた。

丁度そこを星が通りかかると、それに気付いたシロが声を発した。それに三人の視線も動き星へ向いたので、思わず彼女は足を止める。そして庭にある巨大な物を見つけ、何かと思い三人へと近寄った。

「凪、これは一体何なのだ？」

「実はその……機密らしくて」

「真桜ちゃんが沙和達にも教えてくれないのー」

星の問いかけに凪はやや困惑したような表情を見せ、沙和が締め括るように言葉を放つ。だが、その恨めしそうな視線は真桜へと向けられていた。当の本人はそれにやや困った表情を浮かべ、頬を掻いている。

そう、機密となれば簡単に話す訳にはいかない。それを分からぬ真桜ではないし、沙和とて理解はしている。だが、それでもやはり気になる事を聞きたくなるのだろう。凪はそれを機密だからという事で納得しているのが対照的だった。

「……で、これを作るように指示を出したのはやはり？」

「桂花ですわ。何でも今後の事を踏まえての物やそうです」

星の問いかけがまだ答えられる範囲だったため、真桜はあっさり答えた。それに星は頷くと、おおよその見当を付けた。

「そうか……では、兵器の類だろうな」

「「兵器の類？」」

「あ～、さすがに星はんは分かりますか」

星の予想に疑問符を浮かべる二人に対し、真桜だけは苦笑していた。それが何よりの答えとばかりに星は笑みを浮かべ、しげしげと眼前の物を眺めて頷いた。今後の事。それが袁紹との戦を意味しているだろうと踏み、星はそう予想したのだ。

凪も星が兵器と言った事を受け薄っすらとではあるが同じ結論に辿り着き、沙和だけが何故そんな結論になるのかを理解出来ずに真桜へ尋ねていた。それに真桜が思いつく範囲で教えていく。

すると、そんな四人を見つめていたシロが何かに気付いて視線を動かした。そしてその相手を確認すると、嬉しそうに駆け寄ったのだ。

「キャンキャン」

「ちょっとシロ、くすぐったいじゃない」

足元に頬を寄せるシロへ桂花は小さく笑みを浮かべる。そのままもしゃがみ、その頭を撫でようとしたところで自分を見つめる複数の視線に気付いたのか、やや慌てるように立ち上がると照れ隠しに咳払い一つ。

「こほん……何よ、星までいるじゃない？　今日は非番だったからし
ら」

「いや、そうではないが……。桂花、すまないがこれについて教えられる範囲でいいので、質問に答えてくれんか？」

星の問いかけに桂花は少し考え込み、まぁいいだろうとばかりに頷いた。どうやら星ならばちゃんと事情を理解し、無駄な質問などはしないと踏んだらしい。凪達も星が聞き出してくれる情報を聞くべく、その近くへ近寄った。

星がまず聞いたのは攻撃用か防御用かの点だ。それに桂花は攻撃用だと返した。全てを隠すよりも、多少は知っていた方がいいと判断した部分は明かす。下手に悩まれるよりもその方がいいと考えたのだ。

「では、これはやはり兵器なのですか？」

「ええ。天の知識を少し参考にしてね」

「しんちゃんが考えたの？」

天の知識との表現で沙和が少し意外そうに問いかける。だが、それに桂花が答える前に星がそれを否定した。きっと本人は以前見た事を話しただけだろうからと。それに桂花も頷き、そんな感じの話し方だったと肯定する。

星としてはそれだけでもう十分だと質問を止めた。凪としてもそれで満足したのか特に何か言う事はなかった。沙和は最後まで明らかにして欲しいのだろうが、聞いても答えてもらえないと理解した。なので、渋々諦めたように口を閉じる。

真桜だけは意外とあっさり三人が興味を無くしたのがつまらないのか、不満そうな表情だった。彼女としてはもう少し食い下がって欲しかったのだ。そんな真桜の気持ちを察した凪がそれを見てため息混じりに注意した。

「機密を軽々しく教える事は出来ないのだから諦めろ」

「せやけどなぁ～……やっぱ聞いて欲しいもんやんか」

「キャン、キャンキャン」

「あはは、シロが真桜ちゃんは矛盾してるって言ってるのー」

シロの声をそう解釈する沙和だったが、周囲はそれに呆れる事無く笑った。確かにそうかもしれないと言いながら笑う星達。そこでふと星はある事に気付く。そして、視線を製作中の兵器へ向けて桂花へ問いかけた。

「桂花、これはこの大きさで完成か？」

「いえ、まだ大きくなるけど？」

「どうしてそないな事を？」

星の問いかけの意味が分からず、不思議そうな表情を浮かべる桂花と真桜。凪と沙和も同じように疑問符を浮かべていた。そんな四人から視線を動かし、星は話題の物を見つめてからかうような笑みを見せるとこう告げた。

「いやな、今より大きくなっても城門から出せるのだろうかと思ったのだ」

「「「「あっ……」」」」

「クゥ～ン……」

見事に一致する四つの声。それは星の指摘が盲点だったと気付いたとのものだ。その声を聞いてそれを察したシロは、残念そうに声を漏らして力無く地面に伏すのだった……

星達が中庭で兵器を見つめて話をしている頃、しんのすけは華琳から言われている仕事を稟と風相手にしていた。そう、天の話を聞かせる事である。とはいえその内容は戦や治安維持などに関係しそうなものを重点的にと言われていた。

そのため、稟と風はしんのすけからその類の内容を聞き出す事に腐心していた。中々そういう事は覚えていなかったり、知らなかったりするしんのすけ。そのため、どうにかして役に立てる事が出来る情報を聞き出すのは、本来ならば苦労する作業といってもよかったのだが……

「それで、そのけいさつというものが街の安全を守っているのですね？」

「うん。それで、街にはこーばんがあって、そこにはいつもおまわりさんがいるんだぞ。あ、これ沙和ちゃんにはお話したなぁ」

「あー、それで凪ちゃん達が警備改良案の中に待機所の増設を加えたんですねー」

しんのすけの言葉に納得がいったとばかりに告げる風。彼女がこの街に初めてきた時は無かった存在。それが軍師として城へ滞在するようになった時にはあった謎が解けたのだ。

二人にとって、しんのすけの思い出話や様々な日常話を聞き出すのはもう慣れたもの。よって、このように聞きたい話をさせる事などは容易い事になりつつあった。

「ですが、そのおまわりさんとの者達はどうやって選ばれるのです？　兵士とは違うのでしょう？」

「う～ん……でも、なりたい人がなってるぞ」

「志願制ですかー。では、こちらと同じですね」

「そのようですね。しかし、こちらではあまり数が増えないのが困り物ですが」

稟と風はしんのすけの話から警察官の事を誤解した。正しくは志願制ではなく、教育を受けて試験に合格した者だけがなれる選抜式なのだ。しかし、それをしんのすけが知るはずはない。

そのまま、二人は中々増えない警備兵の問題をどうするかを話し合う。だが、数を増やす術を考える二人へしんのすけは子供らしい発想でその方法を告げた。

――ねぇねぇ、おまわりさんはなりたいって子が多いんだぞ。街をお守りする兵隊さんも、なりたいって思う子増えるようにすれば？

その言葉に二人は議論を止め、視線をしんのすけへ向けた。そして確認をする。天の世界では、警備兵は子供達の憧れなのかと。それにしんのすけは頷いた。自分の周囲にもなりたいと考える者は多かったと告げて。

つまり、周囲からの評価を高くなるようにすればいい。簡単に給金などを上げる事は出来ないが、それをしている事に誇りや名誉を与える事が出来ればいいのだ。そうすれば、子供などが憧れて大人の中にもなりたいと思える要素が出てくるのでは。しんのすけの言葉はそう告げているように聞こえた。

「待遇面を改善するとしても、どうやら民達の意識からを優先するべきかもしれませんね」

「ですねー。子供がなりたいと思える仕事にするとは……天も考えたものですよ。そうですねー。今を凌ぐだけではなく、先の事も考えなければいけないのですから」

「先、ですか……では、警備兵も希望すれば本隊への編入試験を受ける事が出来るようにしては？」

「おおっ、それは名案なのですよー。簡単な訓練を受けて警備兵になって、頑張れば正規兵になれるとなれば今よりも志願者も増えるでしょー」

しんのすけの言葉から発展してそう案を出す稟。それに風は感心したように言葉を返し、早速それを形に出来るように凪や春蘭などと話をしなくてはと動き出す。稟はそんな風を見送り、しんのすけから他の話を聞き出すべく話題を振る。

「しんのすけ、他にも聞きたい事があります」

「なぁに？」

「かんたむろぼとは、あえんごうきんとやらで出来た巨人なのですか？」

それは以前しんのすけが春蘭と霞へしたカンタムロボの話だ。稟は二人からそれを知っているかと聞かれ、困惑したのだ。カンタムロボ自体は以前にしんのすけから教えてもらった事もあるし、フィギュアを見せてもらっていたので姿なども知っている。

だが、それが巨人だとは聞いていない。稟が聞いたのは平和を守る正義の味方。それだけなのだ。まさかそれが天にも届かんばかりの巨人どとは思わなかったのだから。

しんのすけはそんな稟の質問に頷いて、カンタムロボの簡単な説明をした。それを聞いて稟は当然ながら疑問に思う事ばかりだった。そして、どこかで似たような雰囲気の話を聞いた事があると思い、その記憶を辿っていく。

そうして思い当たったのはある話だった。それは英雄譚。項羽と劉邦の伝承だ。現実味があるようでどこか芝居がかった展開。だが、根底には人として大切な信念がある内容。全てがそれを思わせたのだ。

（成程……かんたむろぼとは天の世界での英雄譚の一種なのですね。しかも、どうやら本当にあった事ではないようです。子供向けに作られた道徳的な作り話、と考えるのが妥当でしょう）

稟がそう冷静に判断する中、しんのすけの話はいよいよ佳境を迎えていた。

「でね、カンタムがおよめさんと合体して、きゅーきょくカンタムになってギルギロスだいとーりょーを倒したんだぞっ！」

熱を込めて語るしんのすけ。拳を握り締め、稟へ自分が好きなヒーローの強さを伝える。その内容が彼にとっての理想に変わっているが、ここにそれを知る者はいないため、稟にはそれが真実となる。

正義のヒーローは決して悪に負けない。しんのすけは最後にそう言い切った。それに稟は優しく微笑みを返す。あのたいりく防衛隊の誓いを立てた日と同じ信念がそこにあると思ったからだ。

「正義は負けない、ですか。それで、もう天の世界は平和になったのですか？」

「えっと、それから少ししたらまた悪い奴があらわれたんだ。で、今はカンタムの子供が戦ってる」

「そうなのですか。新しい敵が現れたのですね……」

「でも、だいじょーぶ。ゼッタイ最後には正義が勝つんだもん！」

稟がやや複雑な表情をしたのを見たしんのすけは安心させるようにそう告げた。稟がその言葉に一瞬呆気に取られるもすぐに苦笑しながら頷いた。稟が複雑な表情をしたのは、作り話であっても平和になった後にまた悪が出現するという現実感が原因だ。

稟は知らない。それが決してそういう意図で作られた展開ではなく、ただスポンサー企業の注文だとは。ともあれしんのすけの子供らしい純粋な気持ちを再確認した稟は、正義が勝つとの言葉に笑顔で頷いて見せた。

その気持ちこそが今の大陸には必要なのだと、そう言い聞かせるように……

その頃、華琳は執務室で袁紹から届いた書状を自室でもう一度読んでいた。その顔は小さく笑っている。それが何を思ってのものかが分からず、その前にいた春蘭と秋蘭はやや困惑した。

「名族たる自分に天の御遣いであるしんのすけを渡せ、か。麗羽も正体を知っているとはね」

「おのれ！　袁紹め、勝手な事を言いおって！　しんのすけは自分の意思で華琳様を選んだのだぞ！」

「落ち着け姉者。……目的は劉備達への牽制としての役割でしょうか？」

弟のように思っているしんのすけを物扱いするかのような内容に憤る春蘭。それを嗜めながら、秋蘭は冷静に華琳へ問いかける。それに華琳は少し考え、それを肯定した。

「その可能性は高いわね。聞くところによると公孫賛に降伏を勧めたらしいし、劉備達はしんのすけと関係が深い。ならば、しんのすけを使って従わせようとしているのかもしれないわ」

秋蘭へそう答えながら華琳はこう考えていた。自分が知る袁紹であればそんな事を言わずに幽州へ攻め込んでいたはず。そう判断し、

華琳は思った。やはり袁紹はしんのすけと出会って変化していると。
そして、その彼を欲しがっているとも察した。その要因に天の御遣いである事が関っているだろうと結論付けて。そう考えた華琳は小さく鼻で笑う。自分へもいずれ同じような事を勧めてくるだろうと予想したのだ。だが、彼女にとって降伏など出来る訳がないし、何よりもしんのすけを渡す事など出来るはずがない。何故ならば華琳にとってしんのすけは……

（私の大切な者の一人だものね。まぁ、しんのすけ自身は友達……とか言うのでしょうけど）

そう思い、気付かず微笑む華琳。だが、それもすぐに消える。袁紹の兵数は自軍よりも多い。それに対抗するのは多少なりとも不安がある。そのため、勝てる方法を考えなければいけない。そう思い、思考を巡らせる。何か兵数の不利を覆せるものを用意しておく必要があると。
と、そこで何かを思い出したのか華琳は小さく笑った。既に今朝、桂花がそれを意識してある物の製作許可を取りにきていた事だ。やはり桂花は頼りになると思い、華琳は今夜にでも褒美に閨へ招くかと考える。すると、春蘭が何かを思いついたようで名案だとばかりの表情でこう告げた。

「ならば華琳様、我々が劉備達へ手を貸すように言えば袁紹も容易に手を出せないのでは？」

「確かにそうね。でも、却下よ」

「な、何故です？」

自分の中では良案だと思っていたものを即座に否定され、困惑す

る春蘭。そんな彼女へ秋蘭がやや呆れたような声で告げた。

「姉者、考えてくれ。それは形はどうであれ華琳様が劉備へ頼みをする事になるのだぞ？」

「そうだな」

「つまり、劉備へ借りを作る事になるのだ。いくらしんのすけの事があるとはいえ、な」

「しかし、以前も同じ事をしたではないか」

秋蘭の説明に納得がいかないとばかりに言葉を返す春蘭。華琳はその発言に小さくため息を吐き、理由を教える事にした。今回と前回の違い。それはやはり情勢だ。同じ敵を倒すために協力した前回と違い、今回は完全に自分達だけの敵を倒すための戦い。

それに協力を申し込む時点で完全にこちらが弱い立場にあるのだ。もしこれを好機と取って桃香達が華琳達を攻める事にすると袁紹へ隙を見せる事になり、逆に袁紹と戦う事になると桃香達へ隙を見せる事になるからだ。そう告げた後、華琳はこう締め括った。

「後はね、私達の風評の問題よ」

「姉者、袁紹と戦うのに劉備達を頼ったとなれば、我々の事を民達がどう思うと考える？」

「ううむ……そうかっ！　大軍相手に怖気づいたと思われるのか！？」

答えに辿り着いた春蘭の言葉に華琳と秋蘭が頷いた。それでは、

とてもではないが覇道など言える訳がない。だから華琳は却下したのだ。覇王としての誇りを守るために。どことも手を組まず、独力で大陸を統一するとの決意を貫くために。

春蘭はやっと自分が何を言ったのかを理解し、華琳へ頭を下げた。しかし、それを華琳が口煩く言う事は無かった。純粋に考えを巡らせた結果、そうなっただけなのだと理解していたからだ。

「春蘭、貴女の気持ちは分かったからいいわ。ただし、今後は気をつけなさい」

「はっ、肝に銘じておきます」

「では華琳様、我らはそろそろ失礼します。午後の調練がありますので」

秋蘭がそう言って一礼して退出すると、春蘭も同じように一礼し退出した。その背を見送り、華琳はそこで気付く。自分には兵数を覆せる優秀な臣下が大勢いるではないかと。故に笑う。それは覇王の笑み。

思い出したのだ。相手が袁紹であれば、勝負を分けるのは兵数ではなく率いる将の質だ。過去、武力で勝る項羽を相手に勝利してみせた劉邦がそうだったように。そう強く言い聞かせ、華琳は小さく呟く。

――麗羽、いつでも攻めて来なさい。私にあって貴女にないものがどれだけ大きな差になるかを教えてあげるわ。

そう呟く華琳の声は覇王のもの。告げられた言葉も覇王としてのもの。だが誰も気付かない。本人さえも気付けない。そのふとした呟き。それに込められた想いは一人の優しい少女のもの。何故なら

ば、そう呟く華琳の顔はとても優しい微笑みだったのだから……

同時刻、華琳の領地にあるとある砦前には三万もの袁紹軍がひしめいていた。威力偵察の部隊である。そこには顔良と文醜が指揮官として加わっていて、現在は目の前の砦をどうするかについて話し合っていた。

何せ、今回の行動は袁紹によれば威力偵察だ。単なる偵察とは訳が違う。しかし、それを本当に実行するとなると問題点がある。そのため、二人は話し合っていたのだ。そして、報告された事を確認して顔良が口を開いた。

「兵数は千もなさそうだね」

「楽勝だけど……なぁ」

「ここで砦を攻撃したら、書状の返事を待たずに戦になるよねぇ」

「な。はぁ……姫、やっぱりどっか抜けてるよな」

文醜のやや苦笑した言葉に顔良も苦笑して応じる。威力偵察では結果的に戦になるしかない。せめて袁紹が送った書状への返答が出るまでは相手を刺激しすぎない方がいい。答えが分かりきっていたとしても。そう二人は結論付けて、結局周辺の地形の把握だけに努める事にした。

とりあえず自分達が本気である事を分からせるだけでも十分。なので、砦の者達へ自分達の軍勢を誇示して意図を汲んでもらうとし

よう。それが二人の出した見解だった。部下へ指示を出すために動き出そうとする顔良だったが、その背に声が掛けられた。

「な、斗詩」

「何？」

顔良の視線の先では文醜は遠い目をしていた。普段の彼女らしくないと思った顔良は若干不思議そうに問いかけた。それに文醜は小さく噛み締めるように言葉を発した。そこには彼女なりの乱世へのやるせなさがこもっていた。

――――趙雲としんのすけはさ……やっぱ姫やあたい達と戦う事を選ぶんだろうな。

――――……うん。しんちゃんも趙雲さんも白蓮様の事を聞いてるだろうから、ね。

そのまま二人は少し悲しそうな顔で黙り込んだ。顔良だけでなく文醜もどこかで気付いている。袁紹の起こした行動の理由を。だからこそ、今回の華琳達との戦の準備も何も言う事無く賛成しているのだから。

天の御遣いであるしんのすけ。彼を天に帰してやりたい。親元へ戻り、平和に暮らしていて欲しい。そんな気持ちは文醜にもあるのだ。だが、それを自分達以外が成し遂げる事は認められない。天下を統一するのは自分達でないといけないとの思いが文醜にはある。

しんのすけを帰す事自体は別にいい。しかし、そのためにどこか他の者達が自分達を打ち倒すのは気に食わないのだ。この辺りの思考は袁紹に通じるものがあるのだが、本人達はきっと否定するだろ

う。

「……とにかく、さっさとやる事終わらせようぜ」

「そう、だね……」

この後袁紹軍は周辺の地形を入念に調べ上げ、他には何もせずに撤退する。この事を報告された華琳は警戒を厳しくする事だけを指示し、この件を片付けた。おそらくまだ時ではない。そう判断したために。

その読み通り、袁紹はこれからしばらく大きな動きを見せなくなる。こうして一先ず華琳達と袁紹達の衝突は回避された。だが、誰もが知っている。ぶつかり合うのは時間の問題だと……

動き始めた割拠の時代。だが、それは本来とはどこか違う顔を見せる。しんのすけを天に帰すためにと動く袁紹。それをどこかで察している華琳。そして、自分の知る優しい者達を死なせないとの決意を胸に抱くしんのすけ。

天の御遣いによる平和のための嵐。それが少しずつ動き出そうとしていた……

ーーー

すが……

幕間～桂花編～

その日、桂花は華琳にある調査を依頼されていた。だが、それには予想外の同行者がいた。護衛として凪達がいるのはいいのだがもう一人が問題だった。それは……

「し、しんのすけもですか？」

「ええ。あの麗羽の動きがあってから急に色々と頑張り出したでしょ？　それで、一度領内を見させておくのもいいかと思ってね」

「それは構いませんが……」

華琳の言葉に桂花も賛同はした。袁紹の威力偵察に前後するように、しんのすけは今まで以上に精力的に動くようになっていた。少しでも強くなりたいと早朝鍛錬にも力を入れ、今は星からだけではなく春蘭にも色々と教わり出していたのだ。

普段の雑務もこれまで以上に励み、自分の知っている事が何かの役に立てばと桂花達軍師だけではなく華琳や真桜などにも教えるようになっていたのだから。まぁ、ほとんどが他愛もない日常話になっているのはご愛嬌だ。

「桂花。貴女ならしんのすけを預けても平気だと思ったの。凪達にもちゃんと見ておくように言っておくけど、一番頼りになるのは貴女だから」

「華琳様……」

「頼むわね、桂花」

「はいっ！　お任せください！」

華琳直々の指名。それに桂花は魅了されたような表情で応じる。こうして、桂花はしんのすけと共に調査へ赴く事になったのだ。現在、桂花は凪達を連れてしんのすけと共に街を歩いていた。調査との事なのでしんのすけの格好は本来の格好だ。

その背には木刀を差しているので安全面でも備えているだろうとは分かる。しかし、桂花に不安がない訳ではない。なので、彼女は隣を歩くしんのすけへ注意を行っていた。

「いい？　絶対に一人で行動しない事」

「ほい」

「それと、基本無駄口を利かない事」

「おおっ？！　……それって呼吸しちゃダメって事？」

「違うわよ。必要ない事を言うなって事」

深刻な表情で問いかけるしんのすけへ、桂花は即座に突っ込んだ。どうしてそんな事になるとばかりに表情は呆れが混じっていた。子供らしいとは思えないのだ。そもそも彼女自身が子供とあまり接した事がないために。

一方しんのすけは桂花の言葉に納得したのか、安堵するように頷いていた。しかし、すぐに別の事が思い浮かんだのか自然な流れで桂花へ問いかけた。

「ほ～ほ～。じゃ、おしゃべりは禁止？」

「そうね……まぁ、度が過ぎなければいいわ」

「おおっ！　桂花ちゃん、ふとももー！」

「はいはい、それを言うなら太っ腹でしょ」

「そーともゆー」

「そうとしか言わないわよ」

街中をそう言いながら歩く二人。そんな感じの会話をしつつ歩くその姿は近所のお姉さんと少年だ。それを凪達は微笑みながら後ろから見つめていた。そんな三人の表情は一様に綻んでいる。

「桂花様としんのすけ、楽しそうだな」

眼前の光景を眺め、凪がやや苦笑気味にそう告げた。それに沙和と真桜も頷き、笑みを返す。

「そうなのー。とっても仲がいいみたい」

「まぁ、桂花って男嫌いやけど子供はそうでもないらしいし、しんのすけは華琳様も大事にしとるからちゃう？」

真桜は普段の桂花を思い出してそう告げた。男性は毛嫌いする桂花だがしんのすけにはそこまできつい事を言わない。しかし、それにはちゃんとした理由がある。一度桂花が男性へ放つ暴言をしんのすけが聞いてしまった事があったのだが、当然ながらその言葉を知らない彼はその意味を尋ねた。

――ね、ハラムってどーゆーハム？　オイシイの？

それを五歳の子供に教える事が出来る桂花ではない。何とか誤魔化し、以来絶対にしんのすけへは暴言の類を聞かせないようにしようと心に誓ったのだ。

そんな事を知らない凪は、真桜の発言が正解だろうと思い頷いた。

「そうかもしれないな。沙和、真桜、今日は普段以上に気合を入れるぞ。しんのすけと桂花様にお怪我などないようにな」

「「了解なの（や）」」

普段の警邏以上の頑張りを誓い、二人の後を歩く三人。こうして、波乱の調査は始まるのだった……

街を出た森の中を歩く一行。そんな中、しんのすけは懐かしそうにキョロキョロと視線を動かしていた。それに気付いた凪がどうしたのかと尋ねると、しんのすけは星達と旅をしていた頃を思い出していたと答えた。

あの乱世をそこまで感じる事の無かった時間。そんなしんのすけにとっては幸せな日々。その頃の話を軽くするしんのすけ。凪達もそれに少し自分達の幼い頃を思い出したのか、笑みを浮かべていた。誰しも子供の頃は他愛もないキッカケで取り留めもない話をするものだから。

「それにしても、ここに来るとあの人影騒ぎを思い出すな」

「あ～、そんなんあったなぁ」

「懐かしいの」

凪の言葉に真桜と沙和が笑顔で応じる。しんのすけは笑顔の三人とは違い、先程から黙って周囲を警戒している桂花へ視線を向けた。気のせいか桂花の目には恐怖が見えたのだ。

「桂花ちゃん、どーしたの？」

「……別に。何でもないわよ」

しんのすけの問いかけに平静を装って返す桂花。だが、やはりその声には警戒心が滲み出ている。それに気付くしんのすけだったが、それよりも気になっていた事があったので質問を変えた。

今日の調査とは何をするのかと。それに桂花が小さくため息を吐いて凪達へ視線を向けて告げた。以前と同じ報告がまた入り出した事を。そう、それは以前もあった怪しい人影の目撃情報だ。前回は結局何も得られぬままで終わった事を踏まえ、今回は何かしらの成果を出すのだと桂花は言い切った。

「では、手分けするのは以前と同じでしょうか？」

「そうね。しんのすけは私と凪の方へ連れて行くわ」

凪の言葉に頷き桂花はそう告げた。沙和と真桜もそれに了承の意を示す。そして、ある程度時間が経過したら現在位置に戻ってくる

事と桂花が言い渡して、しんのすけ達は二手に分かれる事になった。
しんのすけは桂花の傍から離れないようにと言われているため、隣を置いて行かれないように歩いていた。密かに桂花もしんのすけの歩幅に合わせて歩く速度を抑えているので、しんのすけは急ぎ足をする事もなくそれについて行く事が出来ていた。

凪はそんな桂花の配慮に気付いていたが、何も言わずに自分も歩く速度を落として小さく笑みを浮かべていた。勿論、周囲に気を配るのも忘れずに。

「桂花ちゃん、あれは何？」

「どれよ？　……ああ、あれはね」

そんな凪の視線の先では、しんのすけが手がかりを探しながら気になった物を桂花に尋ねるという光景が展開されていた。さながら遠足のようであるが、凪はそれをどうこう言うつもりはなかった。
以前も同じ調査をした際結局痕跡さえ見つけられずに終わったのだが、その時ふと凪には一つの推測があったのだ。それはその報告のあった人影が獣の可能性があるのではないかとのもの。何せ以前も気配も感じる事が出来ず、その目的さえはっきりしないままだったのだ。

（もし野生の虎か熊だとすれば、全てがあっさりと片付くんだが……）

周囲の気配を探りながら、凪はそんな事を考えていた。そんな彼女の前方を歩くしんのすけと桂花は、調査というよりも本格的に軽い勉強会の様相を呈していた。

「あ、このきのこって食べれないんだよね」

「そうよ。稟から聞いたの？」

「ううん、風ちゃんだぞ。オラに食べられる木の実とか教えてくれたよ」

「へぇ、稟よりも風の方がそういう事に詳しいのね」

しんのすけの知識の元が稟と風である事は桂花も既に知っている。だからこそ、しんのすけの話を聞くとその二人の得意分野が何となく分かるのだ。稟は学術方面で、風は生活方面の知識を主体に教えていると。

調査のために手がかりを探す二人だったが、やはり桂花としても純粋に疑問を解消しようとするしんのすけには少しだけ甘くなるのかその質問に答えてやっていた。そんな風に時間を過ごしていたのだが、そんな時ふとしんのすけが何かが動くのを見た。

「お？」

「どうしたのよ？」

「今、そこを何かが動いた」

しんのすけの言葉に桂花はまさかと思いながら視線を逸らさずに凪へ呼びかけた。一瞬彼女の中である存在の姿が思い出されたがすぐに意識を切り替えて。

「凪！」

「いえ、人の気配ではありません」

桂花の呼びかけの意図を理解し、凪はそう言い切った。それに桂花は少し安堵し息を吐く。すると、しんのすけがその影が消えた茂みへとゆっくり近寄った。そして、その影の正体を知る。

「あ、なんだ。ヘビさんか」

そこには中々大きな蛇がいた。幸いにして毒のない蛇で、しんのすけは以前風に聞いた特徴からその事に気付いて平然としていた。だが、その言葉を聞いた桂花と凪が硬直した。そう二人は女性らしく蛇が苦手。

しかも、桂花は以前の調査の際にも蛇の被害に遭いそうになった事がある。その際は桂花の悲鳴を聞きつけた凪が近付く音とその気迫で逃げ出したため、被害は無かったのだ。

「し、しんのすけ……今、何て？」

「ヘビさんがいたよ。こ～んなおっきな奴」

しんのすけが腕を動かして教える全長に桂花が軽く息を呑む。それに密かに凪も身を硬くするが、それでも見た目は平気そうにしていた。だが、やはり不安なのだろう。しんのすけが蛇の事を平然と話す様子を見て問いかけたのだ。

「……しんのすけは平気なのか？」

「ほい。だって、あのヘビさんは毒ないもん」

凪の声がどこか緊張しているため、しんのすけはやや不思議そう

に思いながらもそう返した。毒がないのなら噛まれても痛いだけですむ。ならば恐れる事はない。それに、しんのすけは実は密林で大蛇を相手にして普通に撃退した事もあるのだ。

その事を思い出せば、自分の手で掴む事が出来そうな程度はどうという事はなかったのだから。そんな話をしんのすけがすると二人の表情が余計に硬くなった。それはそうだろう。大人さえ絞め殺せる大きさの蛇など、二人には悪夢でしかないのだ。

「天の蛇って……化物なのね」

「私は天では暮らせそうにないな」

「だいじょーぶ。オラの住んでるかすかべにはおっきなヘビさんはいないし、大体ヘビさん自体あんまり見ないよ」

何故か自分達は大陸で生まれてよかったとばかりに安堵する二人へ、しんのすけは自分が住んでいた場所は大蛇はいないと告げる。丁度その瞬間、再び茂みが音を立てた。それに反応して三人の視線がそちらへ動き……

「「ひっ……」」

「あ、さっきのヘビさんだ」

そこにはしんのすけが見つけた蛇がいた。青大将程度の大きさで今はしんのすけ達を威嚇するように口を開いている。桂花は恐怖から黙り込み、凪もその場から動こうとしない。唯一しんのすけだけが蛇を眺め、その大きさが自分の見立て通りだったので頷いていた。

すると、蛇がしんのすけへ襲い掛かる。隙を見せたと思ったのだろう。しかし、それを見てもしんのすけは慌てる事無くその攻撃を

回避した。星との鍛錬で動体視力を鍛えられたため出来た芸当だ。しんのすけはそのまま視線を逸らさず、再度向かってくる蛇へ背にした木刀を引き抜くとその頭を強打した。

「ほいっ！」

見事にカウンターとなった一撃は蛇へ大きな衝撃を与えた。それで脳震盪を起こしたのか蛇は力無く地面に倒れる。だが、しんのすけはそれで終わらずにその体を掴むと、蛇をそのまま近くの木へ結びつけた。見事に木に結ばれた蛇を眺め、満足そうに頷くしんのすけ。

一方桂花達はあまりの事に言葉がなかった。時間にして数十秒。それでこの中で一番弱いと思われていたしんのすけに守られてしまったのだ。相手は蛇とはいえ、下手をすれば怪我などをしてもおかしくなかったと思い、凪は少し申し訳なく思った。

（何たる事だ。まさか守るべきしんのすけから逆に守られてしまうとは）

しかし、凪と違い桂花はどうしてしんのすけが蛇を木に結びつけたのかが疑問だった。その場から遠くへ投げればいいと思ったのだ。

「しんのすけ、どうして蛇を木に結びつけたのよ？」

「だって桂花ちゃんと凪ちゃんってヘビさん嫌いだよね？」

「いや……その……」

「確かにそうだけど……」

しんのすけの言葉に二人は揃ってやや恥ずかしそうに答える。大人が二人揃って子供に助けられたという事実。それがよりにもよって蛇が原因だった。そう考えると少し情けないと感じてしまったのだから。そんな大人の気持ちなど知らず、しんのすけはあっさりと答えた。

「だから結んだの。目を覚ましても動けないなら安心出来るでしょ？」

自分は男の子。なら女の子を困らせてはいけない。そう強く思い、しんのすけはそう行動したのだ。そこによく思われようなどの下心はない。ただ、しんのすけは桂花達を守りたいのだ。戦場では無理でも可能ならばそうしたいと。

星へ告げた新たな覚悟。自分が好きな者達を死なせない。そのために彼は少しずつでも力を得ようとしていた。そして、守られるだけではなく守れる存在へとなるために、本格的に教えを請い始めたのだから。

「そうか。ありがとう、しんのすけ」

「まぁ、あんたにしては気が利くわね」

「それほどでもないぞ。だって、オラは男の子だから女の子を守るのが当然だもん」

「女の子……私と桂花様が女の子、か」

しんのすけの表現に少し照れる凪。桂花はそれに構わずしんのすけが結びつけた蛇へ視線を向けて、それがもう動けないだろう事を確認すると立ち上がった。調査を再開するためだ。

しかし、先程とは違いしんのすけをより自分の傍へ近付けて歩き出す。それを軽い信頼と受け取り、しんのすけは嬉しそうに手に木刀を持ったまま歩く。凪もそれに気付いてその場から歩き出した。

「ね、人影ってホントに生きてる人？　ユーレイじゃない？」

「あのね、幽霊なんてものを見間違うはずないでしょ。大体何度も目撃されてるの。なら、ここには何かいるのよ」

「クマさんとかじゃないの？」

「……そうだとすれば色々と話が片付くのだけどね」

しんのすけの告げた熊との表現に桂花はそうため息混じりに返した。実際どこかで桂花も、目撃された人影は獣辺りを見間違えたのでないかと思い始めていた。この森は戦略的な意味合いから見ても何も利点がないのだ。

軍を動かすにも道は狭い上に警備兵に見つかるし、斥候だったとすれば何度も目撃されて警戒をされている場所へ潜むはずがない。つまり、今回の調査は最終的な判断を下すための行動だった。何か痕跡があればそれでよし。無ければないで、やはり人影は熊か虎辺りの見間違えだとし、警戒だけを注意深くさせるだけに留めるために。

（でも、先入観のないしんのすけでさえこう思うのなら、やはり目撃情報は斥候などではなく野生の獣と考えるのが妥当か。ここがもう少しそれらしい場所なら違うとも思えるのだけど……）

ここにこだわる価値がない。それが桂花にこれ以上の調査は無駄との結論を導き出させる。よって、桂花はしんのすけと凪に合流地

点へ向かう事を告げて動き出す。二人もそれに応じて歩き出した。
合流地点には真桜と沙和が待っていて、三人を見つけるなりやや苦笑しながら近寄った。それに三人が疑問を抱くと、その事を感じた沙和が笑顔でその疑問を無くす答えを告げた。

「ねぇねぇ、沙和達が人影の正体を突き止めたの」

「なんですって!?」

「いやぁ、見つけた時はちょう焦ったけどな」

沙和の発言に驚く桂花。真桜はそんな桂花へ自分達が見たものを語り出す。二人はふとした偶然で一本の大樹を見つけたのだが、その根元には大きな穴が出来ていたのだ。そこを注意深く観察すると一頭の熊が現れた。
その熊はそのまま森の中へ消えて行ったので、おそらくここを棲み処にしているのだろうと結論付けたのだ。そして、その熊が人影の正体だろうとも。桂花もそれを聞いてその可能性は高いとし、調査終了を言い渡した。

「さっさと帰るわよ。華琳様への報告をしなきゃいけないし、まだまだ仕事は多いわね」

「でも、正体が判明して良かったですね」

「森のクマさんかぁ。お歌みたいだぞ」

「「「「歌？」」」」

しんのすけが呟いた言葉に反応する四人。それにしんのすけが頷

いてあの童謡を歌い始める。その若干音程がずれている歌に微笑ましいものを感じながら桂花達は歩く。しんのすけも歌いながら次第に楽しくなったのか、他の歌も歌い始めた。

アクション仮面の歌やカンタムロボの歌などを次々と歌うしんのすけ。途中で桂花達からの質問を受け、その都度歌を中断して答えるところが意外と律儀な彼らしい。

――ちょっと、あくしょんせいって何よ？

――しんのすけ、ぱんちやきっくとは何だ？　動きを見る限り、打撃と蹴撃のようだが……

――ろぼって何？　からくりの事なのー？

――何や、気になる事が多いな、天の歌は。

矢継ぎ早に投げ掛けられる質問。しんのすけはそれに分かるものには答え、分からない事にはそれらしい事を返す。そんな賑やかな帰り道を行くしんのすけ達。そして街に戻ると警邏をすると言って凪達は別れた。しんのすけと桂花は華琳へ報告をするために城へと向かった。

廊下を歩きながらしんのすけはふと視線を桂花へ向けた。その視線に気付き桂花が疑問符を浮かべた。自分がした質問への答えはもう聞いたし、他の質問はもうしていない。なのにどうして見つめられているのだろうかと。

「何よ？」

「お？　えっと、桂花ちゃんとこんなに一緒にいたの初めてだなぁって」

「そうね。普段あんたは華琳様か星達といるもの」

それがどうした。そんな感じで返す桂花。それにしんのすけはにやけた笑みを見せた。その瞬間、桂花が嫌な予感を感じる。

「桂花ちゃん、オラと長くいれて嬉しい？」

「あんた馬鹿？　嬉しい訳ないわよ」

「んもぅ、照れ屋さんだぞ」

「どうしてそうなるの！」

「オラは嬉しいのに……」

「……だから？」

しんのすけの声が若干沈んだのを感じ取り、桂花は若干不思議そうに問いかけた。すると、しんのすけは悲しげな瞳を桂花へ向けた。それこそはかつて稟を罪悪感の中へ叩き込んだ眼差しキラキラだ。

そんなにオラといたくないの？　オラの事嫌い？　そんな風に聞こえてくる眼差しに桂花は一瞬息を呑む。しかし、それでもそっぽを向いて気にしないようにした。真横から感じる（桂花にとっては）純粋で無垢な悲しみの視線。それに桂花もさすがに罪悪感を感じるが、ここまできて屈してなるかとばかりに足を止めてしんのすけへ告げた。

――――あんたが私と一緒に居れて嬉しいのは分かったわ。でも、私にまでその感情を押し付けないで。迷惑よ。

それにしんのすけが完全に足を止めた。その表情をそれまでとは違う悲しみに変えて。それに気付かず桂花は再び歩き出す。しかし、少し歩いたところでしんのすけがついてきていない事に気付いたのか、ちらりと視線を後ろへ向けた。

「っ？！」

そこには膝を抱えて地面に指で何かを書くような動きをしているしんのすけがいた。気のせいか背中には哀愁さえ漂っている。それを見た桂花は先程とは違う意味で胸が痛んだ。自分は子供相手に何を言っていたのだろうかと思い、小さくため息を吐いてしんのすけへと近寄っていく。

そしてその背後に立ち、肩に手を置こうとしてさすがにそこまでする必要はないかと思い直し、小さく咳払い一つ。それにしんのすけは無反応を示し、そのまま地面に指でのの字を書いていた。

「い、いつまでそんなとこでいじけてるつもりよ。早く華琳様へ報告しなきゃいけないでしょ」

「……桂花ちゃんだけで行けばいいぞ。オラ、いらない子だし」

「なっ……どうしてそうなるのよ！？　話が飛躍しすぎでしょ！」

「でも、オラと一緒にいると桂花ちゃんがめーわくするし……」

そのしんのすけの言葉に桂花は言葉に詰まった。先程の言葉がどれ程しんのすけの心を傷つけたのかを思い知らされたのだ。言葉は時に凶器になる。それを知らぬ桂花ではない。

故に普段よりも優しい声を出す事を心がけながら、未だに落ち込

むしんのすけへやや早口で告げた。

――――別に迷惑だって思ってないわよ。本当にそう思ってるのなら話す事自体するはずないでしょ。

――――ホントに？

――――こんな事で私は嘘吐かないわよ。ほら、早く立ちなさい。

桂花の若干自棄になった言葉にしんのすけは即座に立ち上がると、嬉しそうに笑いながら廊下を走り出した。そして、曲がり角まで行くと桂花へ手招きをした。急げという事なのだろう。

その現金さに呆れつつ、桂花も後を追うように歩き出した。それを見てしんのすけは再び廊下を走り出す。それを軽く注意する桂花へ、分かったと返しながらも走るしんのすけ。そんな彼を見つめため息を吐く桂花だったが、小さくその背中へ向かって呟いた。

「迷惑なんて言って……悪かったわね」

その呟きを当然しんのすけが気付くはずはなく、再び廊下の先の方で足を止めると桂花の方へ振り返って両手を口に添えて叫ぶ。

「桂花ちゃ～ん、早く早く！」

「あー、もう……分かってるわよ！　あまり急かさないで！」

「ほーい」

「返事は短くっ！」

「ほい！」

こうして、しんのすけと桂花は華琳へ調査報告を終えると普段の仕事へ戻る事になった。だが時間が昼時を過ぎていたため、まずは遅めの昼食を食べる事になり、桂花はしんのすけを伴い再び街へと向かう事になる。

そこでもしんのすけに軽くからかわれたりしながら、凪達への労いも兼ねて五人で食事をする事にした桂花はそれなりに楽しい時間を過ごす事になる。しかし、そこでも……

――桂花ちゃん、あーんして。

――何で私がそんな事しなきゃいけないのよ！

――んもぅ、冗談だぞ。

――……あんた、時々本当に殺意を覚えるわ……

しんのすけからのからかいは終わらなかったのだ。だが、そんなやり取りをする桂花の声に普段の鋭さがないように凪達は感じる。そんな三人の前で、しんのすけと桂花は軽いじゃれあいのようなやり取りを続けるのだった……

――――――

幕間、桂花編。男は嫌いでも子供はそこまでじゃない桂花。性欲がないしんのすけ相手ならばこうかと、そう思いながら書きました。

次回は季衣＆流琉。子供らしい展開に出来ればいいなぁと思いますが……

幕間～季衣・流琉編～

しんのすけとシロは眼前の光景に黙り込んでいた。彼がいるのは城の中庭。いつもは華琳の指示で綺麗にされているそこは、今や見るも無残な姿へと変貌していた。地面には無数の穴があり、植木などは倒れているのだ。

それをやってのけているのはしんのすけの大事な友人の少女二人。そう季衣と流琉だ。二人は手にした得物を振るい激しい試合を行っていた。その原因はしんのすけの他愛もない一言。

――季衣ちゃんと流琉ちゃんって、どっちが強いの？

それを受けて季衣が自分だと言い出したのはもう当然としか言いようがない。流琉はそれでもいいと言い出すかと思いきや、そこは譲れないのか自分の方だと主張。こうして二人の試合が始まったのだ。

本来であれば自分達全員で街に出かけるかもしくは遊ぶかしようと考えていたしんのすけは、最初こそ浅慮だった自分の発言を後悔していたが、今は二人の試合に夢中になっていた。親友である鈴々と同じぐらい二人も強かったためだ。

（鈴々ちゃんも強かったけど季衣ちゃんと流琉ちゃんもスゴイぞ！……あれ？　お庭がメチャクチャだ……）

二人が戦う姿を見ながら気分を高揚させていたしんのすけ。しかし、ふとその意識が庭の惨状に向いた。シロは先程から季衣と流琉の戦いに怯え置物のように動かなくなっている。当然その理由が二人の戦いにあるのは言うまでもない。それでも今の彼らの居る位置は綺麗なままであった。

それは観客たるしんのすけとシロへ害を与えた場合、無条件で敗北という決まりを流琉が設けたからである。そうしないと自分達二人は戦いに夢中になり、しんのすけとシロを危険な目に合わせてしまうだろうと判断したのだ。

「やるね、流琉。でも！」

季衣の鉄球が唸りを上げる。それを流琉は受け止めるような素振りを見せるがヨーヨーを傾けて力を受け流す。それにしんのすけが感嘆の声を上げるも、それに気付かずに流琉は反撃を開始。

「つっ！　やっぱり重いね。だけど！」

流琉のヨーヨーが季衣へと迫る。それを何とかかわしつつ、再び戻ってきた鉄球で攻撃する季衣。一進一退の攻防。それはもう何度も続いていた。その度に庭が姿を変え酷い有様へと変化していく。そんな事はお構いなしとばかりに戦う二人。しんのすけも庭の現状から試合の方へと再び意識を移していく。手に汗握る攻防と激しい轟音。否応無く高まる緊張感。それを全身で感じる季衣と流琉。

「……今の一撃、春蘭様なら見切ってるよ」

「そっちこそ秋蘭様みたいな集中力がないね」

共に相手が敬愛している者の名を挙げ睨み合う二人。段々感情が高ぶってきたのか二人からは物凄い闘気が漂っている。シロはそれに当てられたのか全身を震わせながら体を丸めていた。

だが、しんのすけはそんな二人を見て拍手をした。それに二人が意識を向けた。視線を動かし、しんのすけを見る季衣と流琉。しんのすけはそんな二人の視線を受けながら、心から感動したように告

げた。

「季衣ちゃんも流琉ちゃんもスゴイぞ！　どっちが勝つのかなって思って……オラ、ワクワクしちゃってたもん」

「そ、そう？」

「えへへ、待っててねしんちゃん。もうすぐ終わるから」

しんのすけの言葉に少しだけ嬉しそうな流琉。季衣は満面の笑みを浮かべ、もう一度と鉄球を構え直す。流琉もそれを見て得物を構えるのだがそれを見てしんのすけが両手を横に振った。

「もう止めよーよ。オラ、季衣ちゃんも流琉ちゃんも強いって分かったから。それにお庭直さないと華琳ちゃんに怒られるぞ」

しんのすけの言葉に二人も周囲を見渡し呆然となった。既に見るに堪えないぐらいまで庭は荒れていたのだ。さすがにこれは不味いと二人も思うのだが、早々庭を戻すいい方法が浮かぶ訳でもない。

それでも三人で頭を抱え何かないかと考え込む事しばらく。するとシロが何かに気付いたのか走り出した。それに三人も視線を動かす。そこには真桜がいた。シロが真桜にじゃれ付いているのを見て、しんのすけは季衣と流琉へ告げた。真桜なら何かいい方法を思いついてくれるのではと。

それに二人も頷いた。真桜は発明家。ならば、何か凄い発明などでこの状況を好転させてくれるかもしれないと。なので、早速三人は真桜の傍へと近付いた。

「「「真桜ちゃん（さん）！」」」

「ん？　おー、何や三人揃ってどないした？」

真桜の問いかけに流琉が事情説明。すると、それを聞いた真桜は我が意を得たりとばかりに嬉しそうな表情を見せると……

――――そんな事もあろうかと！

突然大声で自慢げに告げた。それにしんのすけ達が不思議そうな視線を向ける。だが、それにも関らず真桜はもう一度同じ言葉を告げた。そして、満足したのか真桜は何やら小箱を取り出し、三人へ見せた。

それを開けると大きなボタンが一つだけあった。しかもそれは、しんのすけには完全にテレビなどで自爆する時などに押すものに見えた。なので、真桜へやや恐怖に染まった表情で問いかける。

「これ……押すとお城がばくはつするの？」

「「「えっ……？」」」

「オラ、こーゆーのテレビで見た事あるけど、押すとゼッタイどこかがバーン！　……ってばくはつするんだぞ」

「「「ええっ？！」」」

しんのすけの告げた内容に季衣と流琉が驚愕する。だが、真桜はそれに楽しそうに笑って首を横に振った。それは面白そうだがさすがにそんな事は出来ないと言って。それに三人が安堵の息を吐いた。

「にしてもやっぱしんのすけの話はおもろいな。またゆっくりから

くり関係の事を教えてほしいわ。な、ええやろ？」

それ自体は何度かしているのだが、未だに真桜としてはしんのすけから得られる断片的な未来の情報が非常に大きな創作意欲を生むキッカケになっている。そのため、いくら聞いても飽きがこないのだ。

「いいよ。で、これは押すとどーなるの？」

「そうだよ。真桜ちゃん、教えてよ」

興味津々のしんのすけと季衣。流琉もそんな二人程ではないが気にはなっているのだろう。真桜へ問いかけるような視線を送っていた。真桜はそんな雰囲気に嬉しそうに頷くと意気揚々と説明を始めた。まぁ、説明とは言ってもただ押せば分かるの一点張りだったのだが。

それならばとしんのすけが躊躇い無くボタンを押した。期待に溢れた表情で待つしんのすけと季衣。流琉はどこか不思議そうな表情で周囲を見つめていた。真桜だけが自信有り気に笑っている。しかし、一向に何か起きる気配がない。さすがにそれにはしんのすけが怒った。

「ちょっと！　何も起きないんだけどっ！」

「まぁまぁ……黙って見とき」

真桜がそう言った瞬間、どこからともなく複数の男の声が聞こえてきた。それに視線を動かすしんのすけ達。すると、その視線の先には筋肉隆々の兵士達がいた。しんのすけはそれに感嘆の声を上げる。

一方、季衣と流琉はそれで何かを理解したようで納得するように頷いていた。その間にも兵士達はしんのすけ達の近くへ向かってくる。シロはやや呆気に取られたのか、呆然とその兵士達を眺めていた。

「全体、止まれ～っ！」

季衣の号令でぴたりと見事な停止をする兵士達。それにしんのすけは感嘆の声と共に拍手を送る。そして、流琉はそんな兵士達へ軽く頭を下げながら告げた。

「園丁†無双の皆さん。よろしくお願いします」

「お願いしま～す」

流琉と季衣の声を受け、園丁†無双と呼ばれた兵士達は来た時と同じ野太い声を上げながら庭を片付けていく。穴を塞ぎ、植木を直し、荒れていた庭があれよあれよという間に元通りになっていく。

真桜がそれを眺め、ここまでここまでするのに苦労したとしみじみ呟く。しんのすけはさながら手品のような光景に大声ではしゃいでいた。季衣と流琉は既に見た事があるのか、ただ黙ってその仕事を見守っている。

やがて庭は普段通りの姿を取り戻し、流琉が解散を告げると素早く彼らは去って行った。それを見届けて満足したのか真桜は笑みを浮かべる。

「ほな、ウチはこれでな。まだまだ連中に詰めんとあかんとこもあるし」

「はい。よろしくお願いします、真桜さん」

「頼りにしてるね、真桜ちゃん」

流琉と季衣に笑顔で手を挙げ真桜は去って行った。しんのすけとシロはそれを見送り、いつも通りになった庭を眺めて感心したように頷いた。

「シロ。さっきの兵隊さん達、スゴイね」

「キャンキャン」

「オラ、少しあこがれるぞ」

「クゥ～ン……」

かつて大工に憧れたしんのすけ。故に園丁†無双の者達にも似たような気持ちを抱いたのだ。シロはそんな彼にやれやれまたかと思い力無く地面に伏せる。そんな彼らを見つめ、季衣と流琉は笑みを浮かべてどうするかと声を掛ける。

まだ昼には若干早い。なので、しんのすけは少し遊ぶ事を提案しようとする。だがそう告げようとした時、しんのすけは気付いた。季衣の頬に小さな傷が出来ていたのだ。流琉との試合で負ったものだろう。

「あれ？　季衣ちゃん、おケガしてる」

「え？　どこ？」

「ここ」

そう言ってしんのすけが軽く傷に触れる。それが微かな、だけど確かな痛みを季衣に与える。それに季衣が少しだけ表情を歪めたのを見て流琉が苦笑した。そして、手当てをしようと部屋に戻ろうとしてその足を何かが触る。

「シロ？　どうしたの？」

「キャンキャン」

流琉の言葉にシロは前足である場所を指し示す。そこには薬箱が置いてあり、その上には”こんな事もあろうかと”と書かれている。真桜の配慮に小さく苦笑しながら流琉はそれを手に取り季衣を手招きした。

地面に座り、手馴れた感じで薬箱から傷薬を取り出す流琉。季衣は大した傷じゃないと言うのだがしんのすけは絶対ちゃんと治す方がいいと告げる。その理由としてしんのすけが言ったのは……

――お顔は女の子の命ってネネちゃん言ってたぞ！

その言葉に季衣と流琉が返した反応は正反対だった。意味が分からないとばかりに小首を傾げる季衣。一方、その言わんとしている事を理解したのか少し微笑む流琉。だが、二人してしんのすけの告げたネネちゃんとの名前に反応した。

そこから始まるしんのすけの友人紹介。それを聞きながら流琉は季衣の傷へ薬を塗っていく。それを嫌がる季衣だったが、しんのすけの言った言葉を流琉が思い出してこう告げた。

「季衣だって好きな男の人が出来た時に綺麗な顔でいたいでしょ？」

「そんな相手今はいないもん。それに少し傷があるぐらいで気にする人なら僕から願い下げ」

「ほーほー、でも季衣ちゃんケガ治そ。オラのせいで季衣ちゃんのお顔に傷が残ったら悲しいもん」

「しんちゃんのせいじゃないんだけどなぁ。でも、しんちゃんが気にするなら治すね」

「キャンキャン」

しんのすけの発言に苦笑する季衣とその答えを喜ぶシロ。流琉もやれやれとばかりに小さく息を吐いた。薬を塗り終わったため流琉が離れると、季衣の目が何かを捉えて光った。その視線の先にあるのは当然ながら流琉の顔。

「な、何？」

「流琉も傷があるよ。薬、塗らないとね」

にたりと笑う季衣だったが流琉は今度こそ心から呆れたようにため息を吐いた。別に流琉は薬を塗る事に何ら不快感などはない。しかし、季衣は流琉も自分と同じだと思っているのだ。それを察したため流琉は呆れたのだから。

だが、しんのすけがそんな季衣の手を軽く掴んで首を横に振った。それがどういう意味か分からない季衣と流琉。しんのすけは不思議そうな眼差しを向ける季衣へこう言った。

「おケガした人を相手にするのに、そんなお顔しちゃダメだぞ」

「えっと……」

「今、季衣ちゃん悪いお顔してた」

「うっ……」

しんのすけの問いかけに何か言い訳をと考えた季衣だったが、ジト目でそう言い切られてしまえばもう何も言えなかった。なので、しんのすけは自分がやると言って季衣から傷薬を受け取り、その薬を自分の指へすくう。

そしてそれを流琉へ塗り始めた。自分でやる事になれている流琉は他者に薬を塗られる事に少し違和感を感じるも、しんのすけが「痛くない？」と尋ねてくれる事に嬉しさを感じ笑みを浮かべて大丈夫と返す。

そうやって薬を塗り終わったしんのすけだったが、ふと自分の指に残った薬を眺めた。それに季衣と流琉が疑問符を浮かべる。するとしんのすけはその指をくわえようとした。それを見た流琉が即座にその手を止めに入る。

「しんちゃん、駄目っ！」

「え～っ、やっぱりダメ？」

しんのすけの指が口に入る前でぴたりと動かなくなる。それに安堵の息を吐くシロと流琉。季衣は一人苦笑していた。

「それはさすがに僕でもやらないよ、しんちゃん」

「いやぁ～、何となく食べてみたくなりましてぇ」

「クゥ～ン」

しんのすけがにやにや笑いながら告げる言葉にシロが脱力するように項垂れた。流琉と季衣はそんなシロに小さく笑う。しんのすけは流琉に掴まれた手をじっと見つめ、少ししなを作ると猫なで声を出した。

――――それにしても、流琉ちゃん……だ・い・た・ん。

それに流琉が少し恥ずかしくなったのか手を離す。それを待っていたかのようにしんのすけが指を口に入れようとして、今度は季衣がその手を掴む。そんな見事な動きにしんのすけが驚いた声を出した。

「おおっ！　やるね、季衣ちゃん」

「へへ～、しんちゃんの考えなんてお見通しだよ」

そんな事を季衣が言っている間に流琉が汗拭き用の手拭いを手に取り、しんのすけの指を拭いた。このままにしておくと同じ事の繰り返しになると踏んだのだろう。

「はい、これでもう放しても大丈夫」

「ありがと、流琉」

親友同士の見事な連携にしんのすけは感心して頷いた。だが、視線の先で笑う二人を見て嬉しそうに笑った。そして、立ち上がると季衣と流琉へ先程考えていた遊びをしようと提案した。それは……

庭にある大きめの木。そこに顔を伏せるように立っているのは季衣だ。

「だぁるまさんが転んだ！」

勢い良く振り返る季衣。その瞬間、しんのすけと流琉にシロがそれぞれその場で動きを止めた。今、彼らがやっているのはご存知だるまさんが転んだである。関西圏では坊さんが屁をこいたと呼ばれる遊びだ。

手軽に出来て、瞬発力と持久力を問われるこれは地味に負担が大きい。そのため、早朝鍛錬にも組み込まれていたりする。春蘭はこれにやたら強い。動物的勘で鬼の意図を外すのだ。

季衣はしんのすけ達が動きそうにないと判断すると、再び顔を木へ伏せる。それを合図に季衣へ接近しようと動き出すしんのすけ達。一気に距離を詰めようとするしんのすけ。慎重且つ大胆に動く流琉。堅実に着実に進むシロ。

そんな風に個人の性格がよく出ている行動だったが、季衣も実に性格が分かる思考をしていた。十文字の決まり文句を言う速度がほぼ一定だったのだ。それに大きな変化をつけたりするのが常套手段にも関らず、彼女は早くも無く遅くもない速度で言い続けていたのだから。

「だるまさんが……転んだ！」

「っ?!　危なかった〜……」

そんな中、ついに季衣が速度を変えた。流琉がそれに引っ掛かりそうになるも、何とか静止する事に成功する。それに季衣が悔しそうになるものの、ふと何かに気付いて視線を下へ向けた。

そこにはうつ伏せで倒れるしんのすけの姿があった。死体のようなそれに季衣はむむむと唸る。自分との距離が近いのもあるが、その体勢ではどれだけ待とうと動くはずがなかったからだ。

（しんちゃん、やるなぁ。これじゃ負けちゃうかも）

しんのすけの隙の無い体勢に感心し、季衣は意気込んで木へ顔を伏せる。だが、それを見ていた流琉は小さく苦笑していた。

（しんちゃん、ただ転んだだけなんだよね）

そう、彼は季衣の速度変化に驚き慌てた事で地面に倒れただけだったのだ。だがきっと季衣は勘違いをしているだろうと、流琉はその反応と表情から悟った。その後、しんのすけは少しふざけた体勢をしたところを季衣の常人離れした勝負勘によって突かれ、持久戦の末に敗北。

だが、最終的には流琉とシロが粘り勝ち。その後、しんのすけが鬼となっての二回戦は、緩急をつけた掛け声に調子を崩された流琉と季衣が敗北するも、堅実且つしんのすけを熟知しているシロが競り勝った。

次は流琉を鬼としての三回戦となったのだが、そこで季衣が大きなため息を吐いて中断を提案した。その理由を彼女が言う前に流琉は全てを悟った。昼も近くなってきたので昼食を所望したいのだろうと。

「お昼にしたいんでしょ？」

「あ、やっぱり分かる？」

「おおっ、オラもお腹空いたぞ」

「キャンキャン」

「しんちゃんにシロもなのね。じゃ、お昼にしましょうか」

流琉が笑みを浮かべて告げた言葉にしんのすけ達から嬉しそうな声が上がる。それに流琉も笑みを深くして歩き出した。歩きながら楽しそうに話すしんのすけ達。話題は以前華琳が流琉と再現した天の料理”カレー”だ。

しんのすけが一番食べたかったカレーは、必要な香辛料などを彼が理解していなかったので作られる事は無かった。そのため、季衣はしんのすけ共々カレーに執心していたのだ。なので何とか流琉も再現をしたいと思っているのだが、しんのすけの曖昧な知識ではそれは中々難しい。華琳でさえも匙を投げたのだ。いかに困難な事かはそこからでも分かるだろう。

だが、華琳が諦めたにも関らず流琉が諦めていないのは何故か。それは他でもないしんのすけと季衣のため。親友である季衣と友人であるしんのすけ。そんな二人が渇望して止まないカレーを何とか作ってやりたい。その思いが流琉を支えているのだ。

「色が黄土色系なのは分かってるんだけど、その色をどうやって出してるのか知らないんだよね？」

「ほい。母ちゃんはカレールーでやってたから分かんないぞ」

「かれぇるぅ？」

「かれぇを作る時に入れる材料だって。それで味や色を着けてるみたいなんだけど、何で作ってるかが分からないの」

流琉の説明を聞いて納得したとばかりに頷く季衣。味に関してはしんのすけも覚えているため、近い物は作れそうではあるのだ。だが、やはり特徴である色をどうにかして出したいと流琉は考えているのだ。

そんな話をしながら食堂へ向かうしんのすけ達。この日は流琉が腕を振るい、美味しい昼食となった。凄まじい勢いで食べる季衣。マイペースで食べ進むしんのすけ。流琉はシロとそんな二人を見つめて小さく笑う。

やがて食べ終えたしんのすけ達は、まったりと食後のお茶を飲みながら寛いでいた。街へ行こうかとしんのすけが提案すれば、遊びの続きをやりたいと季衣が告げ、それなら他の遊びが知りたいと流琉が言う。シロはそんな三人の事を見つめ、静かに座って尻尾を振っている。

そのまま結論が出ず三人は考え込む。と、そこでしんのすけが思い出したとばかりに手を叩いた。それに季衣と流琉の視線が動く。シロも興味ありそうにしんのすけを見ていた。

「じゃ、季衣ちゃんと流琉ちゃんの事をお話して。前はオラだけだったし」

反董卓連合の頃、しんのすけは季衣と流琉と共に夜を過ごした事があった。その際、彼は自分の思い出話を二人へ語って聞かせたの

だ。

「そっか。なら教えてあげるよ。ね、流琉？」

「そうね。しんちゃんの話を聞いたお礼もしてなかったし、丁度いいわ」

季衣の確認に笑顔で応じる流琉。こうして二人はしんのすけへ思い出話を語り出す。季衣が取ってきた鮮やかな色のきのこの話では、流琉が寝込んだ事を告げるもそれを本人が頑なに否定し、逆に流琉が初めて作った料理は失敗だったと季衣が告げると、本人は美味しいと言ったと否定した。

そんな風に言い合いもする二人だったが共に笑顔になるような話もあり、しんのすけはそれら全てを聞いて相槌を返す。喧嘩になりそうな時はのほほんと仲裁に入り、二人が笑えば自分も笑う。そして、しんのすけは最後にこう尋ねた。

――どうして強くなろうと思ったの？

それに季衣はこう語った。自分が強くなろうとした訳は、家事などで忙しい流琉の代わりに村を守るためだったと。それに流琉は少し意外そうな表情を見せるも、嬉しそうに笑ってこう返す。自分が強くなろうとした訳は、村を守ろうとして傷が絶えない季衣を助けるためだったと。

それを聞いたしんのすけは細かく頷き、二人へこう言った。

「じゃ、季衣ちゃんと流琉ちゃんって同じ気持ちでいたんだね。さすが仲良しさんだぞ」

その言葉に季衣と流琉は互いを見つめ合い、小さく笑う。

――――えへへ、そっか。僕達、同じだったんだ。

――――ふふっ、そうみたい。これじゃ、どっちも同じぐらい強くなる訳だね。

自分と相手の強さの原点を確かめ合った事で季衣と流琉は心からの笑顔を浮かべた。まさか、親友と思い合っているお互いが強くなろうとした理由まで相手の事がキッカケだったのだから。

だが、そこで二人ははたと気付く。この事を自分達だけでは話す事が無かっただろうと。ここにしんのすけがいたからこそ、今の状況になっている。そう考えたのだ。

季衣と流琉が同時に視線を動かす。しんのすけは二対の視線を受けやや不思議そうに首を傾げた。そんな彼に二人は笑いかけると同時にしんのすけへ手を差し出してこう告げた。

「「しんちゃんも仲良しさんだよ」」

「おおっ！　オラも二人のしんゆーなの!?　いやぁ～、オラもリッパになったもんですなぁ」

差し出された手を掴みながらしんのすけは嬉しそうに笑ってみせる。そんな彼に季衣と流琉も笑い、シロはそんな三人を見て喜ぶような声を出すのだった……

この後、しんのすけ達は日が暮れるまで鬼ごっこをしてクタクタになり、汗だらけになった。そのため水浴びをしようとする季衣としんのすけだったが、流琉だけはそんな彼女を止めようとする。いくら子供とはいえしんのすけは男性。

流琉はそう意識してしまったのだろう。だが、季衣は関係無いと言い切りしんのすけと共に裸になった。しんのすけの裸にやや照れながら両手で顔を隠すも、ちゃんと隙間を開けて流琉は見ていたりするのが可愛らしい。

そんな彼女に気付かず、しんのすけは季衣と水浴びをして楽しそうに笑う。それを見た流琉は仕方ないと思い、体を拭くための物を用意した後は二人から顔を背けていた。

だが、そんな彼女へ二人は手招きまでしながら呼びかけた。それに流琉はちらりと視線を向けて、慌ててそれを前に戻した。

――流琉～、一緒に汗流そうよ！　気持ちいいよ？

――そーだぞ。オラのとっておきのぞーさんを見せてあげるよ？

――見せてくれなくていいからっ！　季衣もしんちゃんも早く体を拭いて服を着て！　後、しんちゃんは嬉しそうに腰を振らないのっ！

――クゥ～ン……

しんのすけのぞーさんを見て、流琉は顔を真っ赤にしながらそう告げる。季衣はしんのすけの動きに笑い面白いと言っていた。そんな対照的な二人を他所に一人楽しげに腰を振り始めたしんのすけへ、

シロは疲れたように地面へ伏すのだった……

――――――

幕間～稟・風編～

庭にある休憩所。そこにしんのすけはいた。いや彼だけではない。そこには華琳と三人の軍師もいる。時刻は昼時。既に昼食を終えた五人は休憩を兼ねた雑談をここで行うのが週に一度の定例となっている。

勿論話す事は天の事。話し手はしんのすけだ。それでは普段の彼の仕事の一部と大差ないのだが、ここでは軍事関係や治安維持などの制度や案では無く料理や家電製品などの文化面を聞き出すのが目的となっていた。

「ぱそこん、ね。そんな箱で遠く離れた場所の事をいつでも知る事が出来る、か」

「ほい。中には箱みたいなのじゃなくて……えっと、もっと薄いのもあるよ」

華琳の言葉にしんのすけはそう告げた。それを聞いて何故薄い物を作るのかと尋ねるのは稟。仕事ではなく休憩と思ってるためかその声は優しい。それにしんのすけは持ち運び出来るようにと返した。

「お仕事で遠くへ行く時に持ってくんだって。父ちゃんはそんな事言ってた」

「へぇ、そういえば天の世界では遠くへ行く時は……そうね。海を渡る時は船を使うのかしら？」

「そーだね。大きなお船も使ったりするけど、大抵はひこーきだぞ」

「「「「ひこうき？」」」」

華琳の問いかけにしんのすけが告げた言葉。その中の飛行機との単語に四人は揃って聞き返す。しんのすけを通じて自動車や電車などを既に説明されている稟。その彼女からそれを華琳と桂花も聞いている。だが、そんな稟も知らない乗り物の名が出て来たためだ。

四人に初めて言った言葉だと思い出したしんのすけは、簡単に空を飛ぶ乗り物だと答えた。それに四人の顔が驚愕に変わる。海を渡るのに空を飛んで行くとの発想にではない。空を飛ぶ事が出来る事実に驚いたのだ。

「……予想外だったわね。まさか天では空を飛ぶ物が普通に存在するなんて」

「はい。ですが、それが可能ならば理解は出来ます。空には障害物がありません。山などは確かに道を阻むでしょうが、それを超える高さに行けるのならば……」

華琳の意見に同意する稟。最後にはしんのすけへ自分の考えを確かめるように視線を向ける。それを受けてしんのすけは頷いた。かなりの高さ。雲の上まで行けるのだと返したのだ。更にしんのすけはそこから関連して華琳達の常識を更に超える話を告げた。

それは宇宙の事。この星を飛び出した先の事を子供なりに話したのだ。無論、それを聞いて華琳達が驚きを超えて呆気に取られたのは言うまでもないだろう。何せ大陸だけでも広いと思っていたのだ。それが更に天の上にも世界が広がっているとなればそうもなる。どこまでもこの生きている場所は広大なのだなと感じさせるには十分な話だった。

「……うちゅうですか。更にそこには私達が生きている場所とは違

う大地が広がっている。こうなると天下も急に小さく感じますね」

「でも、天の技術でもそこへは簡単に行けないんでしょ？」

「うん、だからいつも行く時はニュースになるよ。で、テレビでちゅーけーする」

「にゅうす？　……ああ、話題になるって事だったわね。で、ちゅうけぇとは？」

「えっと、外国とかの遠い場所をテレビで見せる事だぞ」

それに四人が納得したと頷き、やや放心する。特に華琳のそれは相当だ。大陸を統一するのにも苦労しそうと思っているところに宇宙の話まで持ち出されればそうもなる。いかに自分が小さい事で悩まされているかと実感してしまったのだ。

だが、その思考を別の事へ向けた。それは天の運送方法の多さだ。宇宙の話よりもまだ理解出来そうな話題をと考えた風がしんのすけへそれに関連する話を振ったのだ。大地を早く走る電車や自動車。海を渡るための大型客船。空を飛ぶ飛行機。それらを話すしんのすけは子供であったため多少誇張する部分もあった。だが、それを差し引いても華琳達にはどれも納得の内容だった。

桂花も稟も想像さえ出来ない宇宙よりもまだ現実味がある話題へと思考を切り替え、改めて現代の技術との差を感じていた。

「天の凄さは知っていたつもりですが、これ程とはー」

「そうよね。これだけ様々な運送手段があれば多くの物を大量に動かす事も可能だろうし、物によって安全な方法を選ぶ事も出来るわ」

「しんのすけ、それらは誰でも料金を払えば乗る事が出来るのですか？」

風と桂花がやはり自分達の常識が通用しないと実感しながらその技術力の差にいっそ清々しい気分になる中、稟はそれが特別な物ではないかを確かめた。

「うん。乗り物や行き先でおねだんは違うけど、子供でも乗れるぞ」

「そうですか。本当に天は身分も家柄も関係ない世の中なのですね」

しんのすけの答えは稟に現状との差を感じさせた。子供でも料金さえ払えれば空を飛ぶ物にも乗れる。それは相手の社会的地位などに関係なく、誰でも賃金さえ払えば平等に客として扱うという事を意味しているのだから。

自分があの日抱いた希望の未来。それがやはり中々遠いものだと思いながらも、いつか実現出来ればと考える稟。そんな彼女を見て華琳は小さく微笑む。だが、それは悪魔の笑みだ。

「稟、貴女は天の世界に強い憧れを持っているようね」

「はい。少なくても今の大陸よりは良い世界ですから。それに華琳様が天下を統一したとしても、天の世界に勝つのは難しいと言わざるを得ないでしょう」

「なっ！？」

華琳の言葉に稟は迷う事無く答える。その内容に桂花が驚愕の声を上げ表情を怒りにも近いものへ変える。だが、当の華琳自身はそ

んな稟の言葉に面白そうな笑みを浮かべていた。風などは特に何の反応も見せずに平然としているぐらいだ。

しんのすけはそんな四者を眺め、事態の凄さを理解していないためにのほほんとしていた。そう、稟は主君である華琳へ平然とこう告げたのだ。天の世界を華琳では超える事が出来ないと。

「稟っ！　あんた、言うに事欠いて華琳様を侮辱するなんてどういうつもりよっ？！」

「どういうつもりも何も……私は華琳様を侮辱などしていませんが？」

「そうよ桂花。稟は私を侮辱などしていないわ」

「華琳様？」

桂花は華琳の表情が少しも不機嫌ではない事に気付き、不思議そうな顔をする。そんな彼女へ風が説明を始めた。稟は、華琳であろうとこの大陸をすぐに天の世界と同じにする事は不可能だと言っただけだと。

「まず、天の世界には朝廷がないですからねー。にも関わらず国を治めている。それは民達が自分自身で国を治める者を選んでいるからですよ？　という事は、天と互角になるには最低でもそれを成せねばいけないのですよー」

「桂花、ここで既にかなりの難関だと思うのだけど？」

「それは……確かに」

「それに誰であろうと一定以上の教育を受けている。これだけでも厳しいと言わざるを得ませんからね」

　稟が締め括りに告げた事に桂花も黙った。しんのすけと接してそれが事実だと桂花も理解している。子供でありながらある程度の計算や文字を書く事が出来、社会の仕組みを大雑把にだが把握している事を。

　それが周囲の教育や状況、更にテレビなどの情報媒体から得ている知識であると桂花も聞かされているのだから。つまり、天では子供であろうとその気になれば教養を身に着ける事が可能な環境が整っているのだ。

　しかしそれはこの大陸では不可能だ。いや、やろうと思えば出来ない事はないのだろう。だが、出来ない訳がある。それは民達が知恵をつける事で統治がし難くなる事。つまり、下手に知恵を付けられると色々と政治に支障が出るのである。

　それだけ知識というものはこの時代では危険なものなのだ。故に限られた者しか学べない。いや、学ぶ事をさせない。特権階級という訳ではないが、支配階級というものが当然のように存在するこの時代ではそれが普通なのだ。

　桂花は稟がどこか諦めたように息を吐いているのを見て、大陸と天との差を嘆いているように見えた。実際、稟は天の世界を目指すべき目標と捉えていた。だが、あくまでもそれは大陸が目指す最終形とも考えている。

　統治者を民達が選ぶ社会。身分も家柄も関係なく、全ての者達が同等の機会を与えられる仕組み。それを急激に実行すると混乱しか生まないと理解しているからだ。

（華琳様の代で出来るのは精々下準備を進めるぐらい。実行に移し

ていくとすれば、最低でもそこから三代は見なくては……）

そう考え、稟は小さくため息。その三代全てが華琳と同等かそれ以上の人物でなければそれも厳しいと悟ったのだ。いくら華琳が傑物だとしても、その子もそうとは限らない。もし暗愚であればそれこそ後漢王朝の二の舞となるのだ。

それを思いやや暗くなる稟の表情に気付き、華琳が場をまとめるように周囲へこう告げた。

「でも、天の世界も最初から今のような形では無かったでしょうし、天には天の問題もあるはず。なら、私達は良き部分だけ活かし、悪い部分は教訓として学びましょう」

「それがよろしいかと。しんのすけの話では、天の世界でも政は中々上手くいっていなかったようですし」

「からくりなどについては真桜ちゃんへ色々とお話をしているみたいですので、現状維持で構わないでしょー」

「じゃあ、今日はこれぐらいね。華琳様、そろそろ執務に戻りましょう。しんのすけ、行くわよ」

「ほーい」

四人の会話を聞きながら、理解出来ないとばかりに両手の人差し指を頭に当てていたしんのすけ。それを見て小さく笑みを見せる華琳と稟。風は楽しそうに笑みを浮かべ、桂花は呆れながらもそう声を掛ける。

それに対するしんのすけの返事。それはいつも通りの間延びしたもの。なのでその声を聞いた瞬間、もう馴染みとなった言葉を四人

が揃えて告げた。

「「「「返事は短く（ですよー）」」」」

「ほい」

その返事を合図に立ち上がるしんのすけ。華琳達はその返事に頷きながら同じように立ち上がった。そして、華琳としんのすけが先頭を歩き、桂花達はその後ろを歩く。こうしてこの昼休憩は終わるのだった……

執務を終えた稟と風は華琳と話す事があると言う桂花と別れ、揃って廊下を歩いていた。その二人の間にはしんのすけがいる。華琳と桂花の話の邪魔にならないように外に出て来たのだ。とはいえ、本当はもう仕事がないので華琳が休んでいいと告げたからなのだが。

そんなしんのすけの手は稟と風と繋がれている。夕食を食べに行こうとしているのだ。星もと思った三人は当然彼女を誘いに行ったのだが、既に星は霞と共に酒盛りを始めていたので参加を断られた。しかも、シロは霞によってどうも少し酒を飲まされたのか顔を赤くしてうつ伏せになっていた。そのため、こうして三人での行動となったのだ。

「何を食べましょうねー？」

「オラ、チャーハンが食べたい！」

「では、屋台よりもちゃんとした店の方がいいですね」

「ですねー。季衣ちゃんにオススメのお店を聞いて選びましょー」

風の言葉に頷くしんのすけ。稟は、ならばいっそ季衣も一緒に連れて行こうと提案する。それにしんのすけが流琉や春蘭なども誘おうと告げるのだがそれに稟と風が揃って苦笑しながらこう返す。

流琉はともかく、春蘭はおそらく星と霞に誘われ酒盛りに参加させられているだろうから無理だと。秋蘭はその保護者的立場として参加する事になるから、そちらも厳しいだろうとも付け加えて。

それに納得するしんのすけ。ならば諦めると告げ、季衣と流琉だけでも誘おうと二人の手を引いて急ぎ出す。そんなしんのすけに小さく微笑みながら、稟と風は歩く速度を速める。その姿は弟を見つめる姉二人といったところだろうか。

「しんちゃんは季衣ちゃんや流琉ちゃんと仲良しですねー」

「うん。二人ともしんゆーになったんだぞ」

「ふふっ、親友ですか。関係を深めるのが得意なのは相変わらずのようです」

「あれ？　オラがカラメルが好きだってよく知ってるね？」

「しんちゃん、からめるではなく深めるですよー」

しんのすけの言い間違いを慣れた感じで訂正する風。稟はそのカラメルとの響きが何を意味するのかを問いかけ、しんのすけがそれに黒くて甘いタレだと答えると少し意外そうに頷いた。

風がそれを何に使うのかと尋ね、しんのすけがプリンの話をする。その不思議な食べ物に二人は華琳や流琉が興味を持ちそうだと感じながら黙って聞き入る。西洋の甘味がまったくない大陸には、当然ながらプリンなど理解出来るはずもない。それでも、しんのすけの告げる食感や味は想像出来る。

「甘みの強い杏仁豆腐のような物でしょうか？」

「聞く限りはそれに近いでしょうねー。今日、しんちゃんに食べてもらって確かめてもらいましょー」

「お？　こっちにもプリンがあるの？」

「それに近い物はありますよー」

「おおっ！　オラ、それ食べたい！」

予期せぬ答えにやや興奮気味に答えるしんのすけ。そんな子供らしい反応に微笑む二人。程なくして季衣と流琉を見つけ五人となったしんのすけ達。こうして、しんのすけの希望を叶えるための店を季衣が案内する事となり、五人は街へと向かうのだった……

「どうです？」

「味は似てないけど、食べた感じは似てた。プリンはもっとも～っと甘いんだよ」

食事を終えての帰り道。稟からの問いかけにしんのすけは両手を広げてそう返した。季衣は初耳の食べ物に大いに興味を示し、流琉は天の甘味ともあってか少し面白そうとばかりに聞いていた。あの一件以来しんのすけと更に仲良くなった二人。その彼からは色々な話を聞いているが、やはりまだまだ初耳なものも多い。

「ね、しんちゃん。そのぷりんって何を使って作るの？」

あまりにも季衣が食べてみたいとの視線を送ってくるため、流琉がやや苦笑気味にしんのすけへ材料を尋ねた。その問いかけにしんのすけはおそらくと前置いて卵と牛乳に砂糖ではないかと返す。だが、当然詳しい作り方などは知らないし、材料についてもただの予想と勘でしかないため確実ではないと締め括る。

その言葉に季衣ががっくりと肩を落としたのは言うまでもない。それを横目で見て苦笑いを浮かべつつ、流琉はしんのすけへ答えてくれた事への礼を述べた。

「そっか。教えてくれてありがとうしんちゃん。でも残念だなぁ。しんちゃんがもう少し詳しい事を覚えてたらね」

「ごめんね、オラもそんな事考えた事無かったから」

「う〜、しんちゃんも僕と同じで食べる専門だからねぇ」

少し悔しがるような流琉にしんのすけは若干申し訳なさそうに答えた。それに続けと季衣が気落ちしたままでそう告げた。流琉はそれに頷いてしんのすけへそこまで気まずく考える必要はないと返し、優しく笑う。

そんな三人を眺め稟と風は嬉しそうに笑っていた。初めて出会っ

た頃はシロだけがしんのすけの友人だった。だが、それが今は季衣と流琉のような近い関係の者がいる。それが二人には嬉しかったのだ。

（本当に親友となったのですね。季衣も流琉も戦場では一騎当千の武を持つ者だというのに、しんのすけといると本当に年相応の顔しかしないです）

（楽しそうでよかったですよ。風達はお仕事が忙しくて中々相手を出来ないですからねー。星ちゃんも今は季衣ちゃん達に委ねているようですし……やはり子供は子供らしくしている方がいいのですよ）

二人の目の前ではどっちが早く城へつけるか競争を始めようとするしんのすけと季衣の姿がある。流琉はそんな季衣を嗜めているがその表情はどこか諦めが見えた。案の定結局三人で競争をする事となり、稟の合図で走り出した。

「しんちゃん、お先にー」

「おおっ！　オラも負けないぞー！」

「結構速いんだね、しんちゃんも」

加減無しで走る季衣。その速度に驚くも負けないと頑張るしんのすけ。そんな彼と速度を合わせる流琉だったが予想以上に速い走力に笑みを浮かべていた。しかし余裕を感じさせる季衣や流琉とは違い、しんのすけは文字通り全力だ。いかに鍛錬などで体力をつけているとはいえ、元々から人並外れた武を持つ二人に及ぶはずもない。

必死になって走るしんのすけと並走する流琉。それに構わず季衣はどんどん先へ行く。そんな離れていく三つの背中を見つめ、稟と

風は心から思う。こんな時間だけが続いてくれればいいのに、と……

夜、しんのすけは普段とは違う部屋にいた。稟と風の部屋だ。本来ならば二人は別々の個室を与えられるはずだったのだがそれを辞退したのだ。それは、二人一緒にいれる方が都合がいい事が多かったから。

しんのすけの持っていた物を始めとする二人しか知らない事を話し合ったり、意見をまとめるには同部屋の方が下手な勘繰りをされずにすむと思ったのだ。まぁ、その配慮も今は無用なものへとなりつつあったが。

そこで三人は軽い思い出話をしていた。あの旅の日々。そして別れた後の話だ。特に別れた後の話は、あの反董卓連合の際に一度話しただけでは語り尽くせない程の思い出があったのだから。

そんな中、ふとある事を思い出したしんのすけが尋ねた。それは稟の持病とも言えるもの。生憎しんのすけがいた時は見た事の無かったそれ。星から二人と別れた後に聞いた事実。

「ね、稟お姉さんのはなぢぐせって治ったの？」

「なっ！？　……し、しんのすけ、それは誰から聞いたのですか？」

「稟ちゃん、誰も何も星ちゃんしかいないじゃないですかー。きっと面白半分で教えたのでしょー」

稟が驚きからずれた眼鏡を直しながらの問いかけに、風があっさ

りと告げた言葉にしんのすけが頷いた。それに稟が密かに星へ文句を言おうと思う中、風はしんのすけへ稟の持病について詳しく教えていた。

更に二人で南皮へ向かう途中で医者を名乗る男性に出会い、いい対処法を教えてもらったと締め括る。それを聞いたしんのすけは細かに頷き、是非一度見てみたいと言い出した。

それに困惑したのは稟である。何せ、いきなり興奮しろと言われても無理な話だ。なので当然しんのすけへ無理だと返すのだが、風はそれを聞いて何かを思いついたのか稟の方へ近寄り耳打ちをした。

――しんちゃんが大人になって迫ってきたらどうしますか？

その瞬間、稟の中でしんのすけが大人へ変わる。外見はそこまで美男子ではない。だが、人懐っこい笑みを浮かべる好青年ではある。すけべで女好きのどこか憎めない性格。そんな男性となって自分へ迫る。

その頃、自分はもうお世辞には若くない。それでも、しんのすけは自分を美人だと言ってくれるだろうか。そんな事を思い、表情が少し曇る稟。だが、それを見て風はしんのすけへこう問いかけた。

「しんちゃん」

「なぁに？」

「稟ちゃんが今より年を取っても、しんちゃんは稟ちゃんを綺麗だと言えますか？」

「年なんかかんけーないぞ。稟おねいさんはいつだってびじんさんだもん」

その言葉が稟の心へ響く。優しく自分を抱きしめながらそう囁かれたら。そう考えた瞬間、稟から鮮血のアーチが出現する。風は平然とし、しんのすけは驚きの表情でそれを見つめた。

「おおっ！　スゴイぞっ！」

「やはり稟ちゃんの想像力には脱帽なのですよー。さ、トントンしましょーね」

そのアーチが見事に床へと落ちる。それと同時に稟の体が寝台へ倒れた。それを見守ってから手馴れた感じで稟の傍へ近寄り、首筋辺りを叩き始める風。そんな光景を眺め、しんのすけは稟の傍へ近付いた。

寝台へよじ登り、倒れる稟の横へちょこんと座るしんのすけ。それに気付いて稟が視線を向ける。その視線の先でしんのすけはいつもの顔をしていた。

「ね、稟お姉さん」

「な、なんでふか？」

「どーやったらさっきみたいな事出来るの？　オラもやってみたい」

その言葉に声を失う稟。風は一瞬呆気に取られるもすぐに楽しそうに笑い出す。そしてしんのすけへあれは稟だけの特技だと告げる。それを聞いた稟がその説明に何か文句を言いたそうにするも、あるものを見てそんな気を無くした。

それは、風の説明を聞いて納得したように頷いて残念そうにするしんのすけだった。自分も出来るようになって周囲を驚かせてみた

かったのにと呟いていたのだ。その反応がどこか微笑ましく思えたために稟は反論する気を無くしたのだから。

それからは再び思い出話へ変わり、主体で話すのはしんのすけとなった。稟と風に時々質問を受けたり、出てこない言葉や言い間違いを訂正されたりしながら、しんのすけは楽しそうに話していく。

それを姉のような笑みを浮かべ聞いている稟と風。身振り手振りを交えて話すしんのすけに微笑みを見せて相槌を返す二人。やがてしんのすけが疲れから眠ってしまう。そんな彼を静かに寝台へ寝かせ、稟と風はその寝顔を見て小さく頷いた。

――これが私達の理想ですね。

――いつも子供が幸せな夢を見れる世の中。絶対実現してみせるのですよー。

二人の視線の先には、天使の寝顔を見せるしんのすけがいた。見る者の心を穏やかにしてくれる、そんな寝顔が……

――

幕間。稟&風編。やっとの鼻血病です。今回の稟の鼻血は興奮＋喜びからのものとお考えください。

次回はいよいよ本編。桃香達の益州脱出話となります。

第八話

慌しく動く兵士達。それへ的確な指示を出しながら冷静に状況を見定めていく少女がいた。彼女の名は諸葛亮。桃香が誇る名軍師である。今、桃香達は戦――――防衛戦の只中にいた。袁術が攻めてきたためだ。

そのため、現在愛紗と鈴々に白蓮が将として奮戦し何とか侵攻を食い止めていた。愛紗と鈴々の指揮を諸葛亮、一番の機動力を有している白蓮の傍に鳳統が執る事である種の二面作戦を取り、全体としての指揮は両者が互いの意図を読み合う事で成すという二人にしか出来ない離れ業を行っていたのだ。

「……これで何とかなったかな？」

報告に来た兵士達がいなくなったのを確認し、小さく息を吐く諸葛亮。弱気な訳ではないがそれでも兵力差を考えれば不安は尽きない。それでも懸念しなければならない挟み撃ち――――袁術と袁紹の挟撃は考えなくても良いだけマシだと、そう思って内心安堵する諸葛亮。

彼女は袁紹と袁術が連携を取るような間柄ではない事をあの反董卓連合の際に理解した。更にもし仮に連携するとすれば、それは袁紹が送った書状が無になる事を意味する。つまり騙し討ちをする事となる。名族としての誇りを持つ袁紹がそんな真似をするはずはないと確信していたのだ。

それを思い出しながら今後の事へ考えを巡らせようとしていた諸葛亮の労を労うように声を掛ける者が居た。それは君主である桃香だ。彼女は戦で何も出来ない事を悔やみながらも、精一杯君主として振舞っていた。兵士達を鼓舞し、時には負傷兵の世話などをする

事で役立とうとしていたのだ。

「朱里ちゃん、お疲れ様」

「桃香様……」

「一先ずこれで何とかなりそうだね」

「はい、袁術さんの第一波は凌げたはずです。ですが、この後には本隊と……」

「孫策さん、だね」

それまで笑顔だった諸葛亮の顔がそこで曇る。それを受けて桃香も表情を曇らせた。そう、袁術の本隊もさる事ながら本当に恐ろしいのはその中にいるある者達なのだ。それを桃香も理解しているからこそ表情を曇らせたのだ。

その者達は、孫呉。孫策軍である。勇猛果敢で知られ、兵・将共に自軍よりも数において優れている相手。それを相手に戦うとなると厳しいものがある。しかし、それでも打つ手はある。そう思い、諸葛亮が言葉を紡ごうとした時だった。

――報告します！　袁紹軍が攻めてきました！

その声は桃香達にとってはまさに青天の霹靂。書状で手を貸せと言っていた相手がまさか急に攻めて来るとは思わなかったからだ。特に諸葛亮と鳳統はしんのすけを手元に置きたいのだろう袁紹は、決して彼に嫌われるような事を平気でしないだろうと踏んでいたのだから。

だが、驚きつつも諸葛亮は冷静に自分の失態を認めながら今後の

展開を予想した。おそらく袁紹軍は本腰で動いた訳ではない。しかし、動いた以上簡単に引き上げたりはしないだろうと。そこである仮説を導き出した諸葛亮は一つの質問をぶつけた。

「旗印に顔や文はありますか？」

「いえ、それらの旗印は見られておりません！」

「そうですか……分かりました。報告ありがとうございます」

（袁紹さんは名家の出。ならば、弱小である私達を部下の独断とはいえ相手にした以上、決して退かないはず）

袁紹軍の中に袁紹や顔良に文醜の旗印がない事を聞いて諸葛亮はそう判断した。きっと情勢を見た袁紹軍の者が好機とばかりに動いたのだろうと。その諸葛亮の予想は的中していた。

袁紹は桃香達へ密かに書状を送った。つまり、全ての者が知っている事ではなかったのだ。弱小である桃香達。それへ協力を頼んだと言えなかったのだ。そこに名家という縛りから脱する事が出来ない袁紹の欠点があった。

「桃香様、このままでは」

「分かってるよ。袁術さんに袁紹さん。挟み撃ち、だもんね」

「はい……」

桃香は諸葛亮の深刻な声に頷いてすぐに決断を下した。それは城にいる賈駆へ伝令を走らせ、第一波を凌ぎ次第一度後退し民達を守るための最善の行動をする事。諸葛亮はそれを聞きすぐさま伝令を

白蓮達へも向かわせる。
機動力に優れる白蓮達ならば誰よりも早く城へ戻れるためだ。同時に城へも一応籠城戦の備えをしておくように指示を出し、伝令を走らせる。もう賈駆が指示を出しているだろうが念のためと思って。その様子を見つめ桃香は悔しげに拳を握る。

（やっぱり私は情けないや。せめて武か智のどちらかでも優れてたら……）

内心の悔しさを押し殺し桃香は自分に出来る事を探して動く。今はいつでも撤収出来るようにする事が優先だ。そう考え、諸葛亮へ戦の事を頼み兵士達へ即時撤収が出来るよう準備をさせる桃香。そして自分もそれを手伝うべく動く。
そんな彼女の姿を見て諸葛亮は嬉しそうに笑みを見せるも、すぐに軍師の顔へ戻して袁術達との戦へ意識を向ける。白蓮と共に鳳統が城へ向かっている今、袁紹への対処はそちらへ一任出来る。そう思い、自分の役目を果たすべく頭を巡らせていく。

（袁紹軍が本腰でないとしても、その数はかなりのものがあるはず。これは最終的に……）

頭に浮かぶ結末に悔しい気持ちを抱きながらも、それを否定出来る材料がないために諸葛亮はきつく唇を噛む。軍師として冷静な部分はそれを受け入れる。だが、人としての熱い部分がそれを受け入れない。
覆してやりたい、この劣勢を。そう思うもそれがどれだけ無理かを誰よりも知っているのは他ならぬ彼女自身。それでも、それでも少しでも最善の結果を得るために少女は指示を出す。諦めたらそこで終わりだと、そう自分へ言い聞かせるように……

華琳達へ袁紹軍が徐州へ侵攻したとの報告が入ったのは軍議が終わる直前だった。そこにはしんのすけもいる。彼自身が望んだのだ。自分も話し合いに参加したいと。そこには、自分が何か言えば華琳達と桃香達が戦う事を回避出来るかもしれないと考えたためだ。

だから、しんのすけはその報告を聞いてどういう事かを隣の稟から分かり易く教えてもらっていた。それを横目に華琳はどこかで呆れつつも納得はしたように頷いてため息を吐いた。

「……麗羽、やはり馬鹿ね」

「華琳様、これはやはり……」

星は袁紹がしんのすけの事を気に入っている事は知っている。そして、かつての行動などから考えて今回にはその意志が働いていないと感じていたのだ。華琳もそんな星の考えを察したのだろう。小さく頷き、かなり可能性の高い推測を述べたのだ。

「ええ。おそらく部下の独断でしょう。でも、それを止める事も察知する事も出来なかった。麗羽らしい無能っぷりね」

「袁術さん相手で手一杯の劉備さんを見て、好機だと思ったのでしょうねー」

「徐州は袁紹達からしても欲しい場所。そこを袁術に奪われてなるものかと考えたのでしょうね。袁紹の部下らしい発想だわ」

風と桂花の言葉に頷く一同。そこでしんのすけが視線を華琳へ向けた。それに気付き、視線を動かす華琳。

「何かしら？」

「華琳ちゃん、桃香ちゃん達って今ピンチなの？」

「ぴんち？」

「天の言葉で危機と言う意味です」

しんのすけの告げた言葉に不思議そうな表情を返す華琳。それにすかさず稟が説明をした。それで華琳もしんのすけが何を言いたいのかを察して、黙って視線で意見を言えと促した。それを悟ったのか、しんのすけは華琳へこう頼んだ。

桃香達を助けて欲しいと。それにその場の誰もが黙った。いや、星だけは心の中で願っていた。華琳へ頷いてくれと。それが絶対にない事だと知っている。それでも、そう願わずにはいられないのだ。

（大陸防衛隊の誓い。それを守れるのならばこの命惜しくはない！）

何よりも星の視線の先では覇王相手に一歩も退かずに言葉をぶつける少年がいる。自分の気持ちが届けとばかりに必死さを感じさせながら、華琳へ偽らざる思いを言葉に乗せているしんのすけの姿があったのだ。

「桃香ちゃん達はたいりく防衛隊のお仲間なんだよ」

「それは私には関係ないわ」

「星お姉さんも、稟お姉さんも、風ちゃんも、同じたいりく防衛隊だぞ！」

「らしいわね。でも、今は私の臣下よ」

「華琳ちゃんは正義の味方じゃないの！？」

「……しんのすけ、覚えておきなさい。正義というのはね、都合のいい言葉なのよ。いつだって勝った者がそれを名乗る事になるのだから」

しんのすけの言葉を華琳は冷酷な表情のままで突き放す。それに一瞬しんのすけが悲しそうな顔を見せるも、すぐに真剣な顔へ戻して叫んだ。

――違うぞっ！　正義はいつだって正義だぞ！　困ってる人をお助けして、悪い奴をやっつけるんだもん！

その言葉に星は息を呑んだ。洛陽での言葉を思い出したのだ。正義のヒーローは負けてはいけないとの言葉を。しんのすけは今戦っている。そう星は感じた。竦みそうな華琳の鋭い視線を受けながらも、必死に桃香達を助けたいと思って。

華琳はそんなしんのすけの言葉に少しも感じる事がないのか、平然とこう返した。それは、桃香を助けると自分が悪人になるというもの。それに理解出来ないという顔をするしんのすけへ、華琳は不敵な笑みを見せて告げた。

「劉備達を助けるとなると、私は麗羽だけでなく袁術とも戦う事になる。まぁ、劉備達と共に戦えばおそらく徐州は守れるでしょうね。でも、それだけ。まったく自分の利益にならない戦よ。自分達の国

を守るでもないそれで多くの兵士達を死なせる事になるのだけど、それをやろうとする私は果たして正義と言えるかしら？」

「……言えないかもしれないぞ。でもっ！」

「なら、もう結論は出たわね。私達は動かない。事が終わるまで待つ。異論はないわね？」

華琳がそう言った瞬間、しんのすけが項垂れる。そんな彼を稟がよくやったとばかりに優しく頭を撫でる。だが、風はそれを見て華琳へこう尋ねた。

「華琳様、一つよろしいでしょーか？」

「何かしら？」

「劉備さんから救援要請が来たのならいかがしますか？」

それに華琳が少し意外そうな表情をし、軽く呆れたような声で答えた。それならば助けないでもないと。その瞬間、稟がしんのすけへその意味を教える。すると、しんのすけが勢い良く顔を上げた。その表情は嬉しそうな笑顔。それに華琳が照れるように顔を背けて解散を告げて歩き出す。そんな華琳の背中へしんのすけが大声で感謝を述べた。それを聞きながら華琳は一人玉座の間を後にするのだった。その顔に微かな朱を浮かべて……

「どういう事ですのっ！！」

華琳達が徐州の一件についての話し合いをしている頃、南皮にある袁紹の城の玉座の間に一際大きな袁紹の怒鳴り声が響いていた。だが、言われた本人である軍師の沮授は平然としていた。そして怒り心頭の袁紹へこう告げた。徐州は天下統一のための要所。そこを袁術に奪われては今後の情勢に大きく関る。故に、天下を狙う以上全部を渡す訳にはいかないと。

それを聞いていた顔良と文醜は何も言い返す事が出来ないでいた。正論だったのだ。袁紹が天下を狙って動いているのはもう誰もが知っている。ならば、このような好機を逃す必要はない。だからこそ沮授は平然としていられるのだから。

「何が袁紹様をそこまで怒らせているか知りませんが、冷静にお考えください。天下取りへ名乗りを挙げられたのならば時には非情な決断を迫られる事もございます。劉備達と何か関係があったとしても、それを涙を呑んで斬る覚悟も必要でございましょう」

沮授はそう告げて頭を下げた。それに気付いた袁紹達は、沮授が袁紹が密かに桃香達へ書状を送った事を知っていると悟った。その上で今回の行動に出たのだと。だが、それを指摘したところで無意味だとも気付いていた。

もう軍は動いている。今更呼び戻してはただでさえ良くない風評が更に悪くなると。弱小勢力相手に不意打ちの戦を仕掛けたのだ。それにも関らず撤退させては世間が考える事は一つ。袁紹は弱小勢力へ不意打ちの戦を仕掛けたくせに、何もせずに引き上げた臆病者との考えだ。

（してやられましたわね。まさか劉備さんへの書状がこのような形で利用されてしまうなんて。もし生き残れたのならこのお詫びをし

て差し上げますわ、劉備さん）

そう思い、袁紹は一度息を吐くと顔良と文醜へ指示を出した。それは二人も徐州へ向かうようにとのもの。そして、沮授へは下がるように言いつけた。その姿が消えたのを確認し、袁紹は二人へもう一つ指示があると傍へ呼び寄せる。

「いいですこと？　劉備さん達と出会ったのなら、何とかして逃がしなさい」

「姫……はいっ！」

「りょーかいです！」

袁紹の指示に理解を示し二人は笑顔で頷き一礼して走り出す。それに袁紹は満足そうに頷き返し、高笑いをした。そして、それを聞きながら顔良と文醜は玉座の間を後にする。徐州へ急ぐべく、少数の軍勢を率いて。

（間に合って！　白蓮様にさえ会えれば……）

（きっとまだ何とかなるはずっ！）

しんのすけが親しい桃香達。その命だけでも助けたい。袁紹の指示の根底にある気持ち。それを察して二人は急ぐ。今回の事で憤慨しているだろう桃香達へ自分達の気持ちを察して伝えてくれるだろう白蓮。その彼女へ会える事を願いながら……

一方、南から桃香達を攻めていた袁術も袁紹軍侵攻との報を受け困惑していた。袁紹の性格を良く知る袁術と張勲は、今まで動かない事から徐州へ興味を持っていないと考えていたからだ。

「麗羽が……のぅ」

「はい。どうも国境辺りに展開しているみたいですよ」

どうします。そんな風に張勲は袁術へ視線を向けた。それに袁術は少し考え、旗印を尋ねた。袁の旗はあるかと。それに張勲は密偵からの報告を思い出し、それはないと返した。

それを聞いて袁術は小さく頷き、視線を張勲から別の人物へ動かした。それは孫策。彼女は袁術の傍でこの戦に参加していた。それは袁術なりの配慮だった。張勲を中々抑える事が出来ない自分を助けてくれる相手として、袁術は孫策へ傍に居てくれるよう頼んだのだ。

「孫策、どう思う？　妾は麗羽が出陣していない事が不思議でならぬ」

「そうね。きっと袁術ちゃんの考えてる通りよ。この動きに袁紹の意志はないと見るべきね」

「部下の独断かの？」

「でしょうよ。顔良や文醜もいないんでしょ？　なら、きっと功を焦った奴が勝手に動いたのね」

孫策の言葉に頷き袁術は考えた。この徐州侵攻は彼女の発案によるものだった。理由はしんのすけ。しんのすけが身を置く華琳はかなりの勢力。そこへ確実に勝利するためには自分も勢力を強める必要がある。

そのため、一番領地から近い桃香達を標的に定めたのだ。そう、袁術は知らなかった。しんのすけが桃香達と親しい関係だと。何故なら、しんのすけと袁術が出会った時話した事はあの洛陽の事に終始してしまったからだ。

（麗羽め！　ちゃんと部下ぐらい御しておかぬかっ！　と……妾が言えた事では無かったの）

張勲を自分だけで御せない事を思い出し、袁術は小さくため息を吐いた。だが、それもすぐに消して表情を凛々しくした。

「孫策、すまぬが急いで出陣してもらえるかの？　麗羽の部下達が本格的に動き出す前に終わらせたいのじゃ」

「仕方ないわね。じゃ、行ってくるわ」

「うむ、頼むぞ孫策！　それと、必ず生きて帰ってくるのじゃ！」

「はいはい……」

袁術の言葉に小さく苦笑しながら手を振って歩く孫策。だが、その心中は複雑だった。袁術がしんのすけを自分の傍へ置きたいと考えて動いた事を知っているからだ。そう、故に複雑なのだ。

桃香達がそのしんのすけと親しい事を教えるべきか否か。そして、このまま自分は桃香達を打ち破ってしまっていいのか否かだ。天の御遣いであるしんのすけ。それに恨まれる事になれば、もしかすれ

ば今後の孫呉の行く末に関るのではないか。そんな思いがあるのだ。

（いや、違うわね。私は何だかんだで嫌われたくないんだわ。あの不思議な子供を友人としたシャオに、ね）

自分の発想の根底にある気持ちに気付き、孫策は小さく苦笑する。気難しい末妹の尚香とすぐに打ち解け愛称で呼び合う関係になった相手であり、色々とややこしい事にしてくれたが孫呉独立の援護もしてくれた存在。その少年をただ困らせれば愛する妹の心に少なからず傷を作る。

ならば一応助けておくか。桃香達と出会った時はそれとなく見逃すように指示を出そう。そんな風に結論付け、どこか自嘲気味な笑みを浮かべると孫策は心の中で告げた。勿論相手はあの奇妙な少年だ。

――これで袁術ちゃんへの忠臣発言やら何やらの借りは返すわよ。もう次はないからね、しんのすけ。

何とか第一波を凌いだ桃香達。しかし、愛紗達だけでなく兵士達も激戦を終えたばかりで疲労の色が見える。それでも桃香は今後の事を考え、何か策はないかと少ない知恵を搾り出そうとする。諦める訳にはいかないとの強い意志がそこにはあった。

「……朱里ちゃん、何か策はないかな？」

だが、結局浮かんだのは頼れる軍師に策を授かるしかないとの結

論だった。内心申し訳なく思う桃香へ諸葛亮は言い難そうに口を開いた。

「あるには……あります」

「あるのか？」

その言葉に愛紗が意外そうな表情を見せた。この四面楚歌の状況で打つべき策など彼女には浮かばなかったからだ。さすがは伏龍と呼ばれただけはあると思いながら、愛紗はその策が告げられるのを期待しながら待った。

しかし、諸葛亮はそんな愛紗へ申し訳なさそうに告げた。この策は多くの犠牲を払う事になる。だから出来ないと。それが桃香の気持ちに配慮した言葉だと愛紗もすぐに理解した。

「でも、それしかないなら仕方ないのだ。ここで鈴々達が頑張っても限界があるのだ……」

「……悔しいが鈴々の言う通りだ。確かに犠牲を払いたくはない。だが、ここで桃香様に倒れられては意味がないのも事実……」

鈴々の言葉に愛紗は出掛かった言葉を飲み込み、拳を握って頷いた。そう、鈴々も悔しさで拳を握り締めていたのだ。その手に爪が食い込み血が出る程に。それに気付いて桃香が黙ってその手を優しく包む。

それもまた愛紗へ無力感を感じさせた。一騎当千の武を持つとはいえ、たった一人で大局を変えられる程の力はない。それをまざまざと突きつけられるのだ。せめて呂布程の力があれば。そんな考えを一瞬浮かべる愛紗だったが、それを振り払うように首を振った。

（私は何を弱気になっているのだ！　これでどうやってこの大陸を平和にするつもりだ！）

天の御遣いであるしんのすけを天に帰すためには大陸に平穏を取り戻すしかない。そう思って愛紗は今日まで戦ってきたのだから。そのためにもここで桃香に死なれてはいけない。そう思い、愛紗は諸葛亮へ視線を向ける。

「朱里、その策を私に教えてくれ。鈴々では少々不安が残るのでな」

「愛紗……」

「鈴々、お前は桃香様と朱里を守れ。いざとなれば今の桃香様はご自分の身ぐらいは守れるだろうが、それでも念には念を入れるべきだからな」

静かな口調で告げる愛紗。その声は戦場とは思えない程に優しい。どこかで死を覚悟しているようにも聞こえ、鈴々は悲しげな眼差しを見せる。だが、同時に武人として愛紗の気持ちを察しているのだろう。何かを言う事はなく黙って頷くだけだった。

それに諸葛亮も決意を決めたように小さく頷くと、愛紗へ自分が考えた策を告げようとした。だが、それを遮るように桃香が叫んだ。

――駄目っ！　犠牲を最初から肯定するような策は絶対駄目だから！　そんな事をしちゃったらしんちゃんへ会わせる顔がないよっ！

それにその場の三人は息を呑んだ。それが単なる拒否だけで終わらなかったからだ。何故ならば桃香はそのまま驚く三人へ意を決して告げたのだ。他の策を思いついたから、と。それに愛紗達が疑問符を浮かべる中、桃香は一度深呼吸をしてから告げた。

「あのね、凄く可能性の低い策だけど……」

桃香の口から告げられた内容に愛紗達は言葉を失いながらも、最後にはどこか諦めたように笑った。桃香らしい考えだったのだ。故に誰も反対はしない。もしそれが実現すれば一番の奇策となるのだから。こうして桃香達も動き出す。袁紹や孫策が自分達を助けようとしていると知らず。彼らは彼らなりの最善を尽くすために……

時刻は夜。既に多くの者が仕事を終えて寝るだけとなっていた時刻だ。そんな時刻に城の廊下を歩く者がいた。しんのすけと凪だ。その足元にはシロもいる。華琳によって主だった者全員へ召集がかけられたのだ。だがしんのすけは子供故に既に寝ていたため、シロと共に凪に起こされたのだ。今は眠い目を擦りながら玉座の間に移動中。

「も～、せっかく寝てたのにぃ……」

「クゥ～ン……」

「お前を絶対に呼ばねばならないと言われたのだ。すまない」

「凪ちゃんが悪いんじゃないぞ。悪いのは華琳ちゃんだぞ」

「キャンキャン」

やや申し訳なさそうな凪へしんのすけとシロはそう言ってフォローする。それに凪が少し苦笑いを浮かべる。華琳の事を悪いと平然と言える事にだ。しんのすけの素直さと豪胆さをそこに感じ、凪は小さく呟く。やはり天の御遣いなのだなと。

やがて玉座の間に到着し中に入ったしんのすけ達だったが、そんな彼らが見たのは予想外の相手だった。彼らはきっと見慣れた顔しかないと考えていた。しかし、そこにいたのは華琳達主だった者達だけではなかったのだ。

長い黒髪を一つに束ね、長物を得物としている凛々しい表情の女性が立っていたのだ。それは彼がもう会う事は難しいと思っていた相手。更にその隣には星がやや複雑な表情を浮かべている。

「愛紗お姉さんっ！？」

「キャン！」

「……久しぶりだな、しんのすけ、シロ」

愛紗はしんのすけとシロの声に微かに微笑む。きっと駆け寄り抱きしめたいのだろう。だが、それを両腕をきつく抱く事で抑えていた。ここは華琳の城。自分は桃香の使者としてここにいる。それを忘れてはいけないと、そう愛紗は自分を律していたのだ。

星もそれを察しているのだろう。何せしんのすけが来るまでの間、星は愛紗へ彼の近況を教えていたのだ。そこでは当然あの天の御遣いに関する噂話にも言及した。愛紗はそこで華琳が取った方法をしんのすけが認めた事を知り、ならばと見逃す事にしたのだから。

愛紗へ嬉しそうに語りかけるしんのすけ。そう、彼はこう思っていたのだ。愛紗は自分達を助けて欲しいと華琳へ頼みにきたのだと。

それならば華琳は助けると明言した。だから、彼は嬉しそうにしていたのだ。

だが、しんのすけ達が現れた事で全員揃ったのを確認した華琳が早速とばかりに告げたその内容に、彼とシロは疑問符を浮かべる事になる。

「関羽、貴女はここへ何をしに来たのか。それをしんのすけに教えてあげなさい」

「……私はな、しんのすけ。曹操殿の領地を通る許可をもらいに来たのだ」

「どーいう事？」

「つまりな、しんのすけ。劉備達は華琳の領地を通って違う場所へ逃げようとしとんのや」

霞の言葉にしんのすけは桃香達が取った手段を理解した。だが、そこで不思議そうに小首を傾げた。

――桃香ちゃん達、逃げるの？　悪くないのに？

その言葉に愛紗が悔しそうに唇を噛み締めた。逃げたくなどない。だが、それしか道が無いのだ。そう叫びたい衝動を抑え付け、愛紗は小さくそうだと返す事しか出来なかった。その声でしんのすけも何かを感じ取ったのだろう。

愛紗へもう何も言わずやや残念そうに項垂れたのだ。まるで自分が何の力にもなれない事が悲しいとでも言うように。そんなやり取りを眺め、華琳は面白くないとばかりに周囲へ告げた。

「国境近くまで劉備が来ているらしいから、直接会って答えを聞かせようと思うの。関羽でもいいのだけど、一応礼儀として会って告げるのが筋だろうしね」

「正直そこまでする必要はないと思います」

「私も桂花の意見に賛成です。華琳様、ここで関羽へ返答すればいいだけでは？」

桂花が明らかに不満そうな声で告げる言葉に秋蘭も応じた。周囲の雰囲気も二人に近いものがある。だが、勿論例外もいる。星と霞だ。愛紗達と関係の深い星は当然として、霞は愛紗本人が気に入っていた。

以前しんのすけや星から聞いた話に加え、あの虎牢関で見た呂布との戦いで同じ偃月刀使いとしての腕前を認めたのも大きい。なので、二人は揃ってこう言った。

「華琳様がそうしたいのなら、そうされるべきかと」

「何ならウチらが供したるで」

「……そう。なら星と霞はついてきなさい」

華琳が言外に、他の者はこなくていいとの気持ちを込めた言葉に春蘭達が困惑する。しかし、一人だけ手を挙げて自分も行くと言い出した者がいた。しんのすけである。それに華琳は分かっていたように笑い来たければ来いと頷いた。

それに倣い春蘭が自分もついて行きたいと手を挙げると、華琳は小さく呆れたように好きにしなさいと返した。こうして結局全員が同行する事になり愛紗を先頭に華琳達は桃香達へ会いに向かう。何

かを企むように華琳が笑っていると知らずに……

――――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0708v/

嵐を呼ぶ園児、外史へ立つ

2012年1月10日07時36分発行